BL
1411
T8J3
1929
v.15

Tripitaka. Japanese. 1929
Showa shinshu kokuyaku
Daizokyo

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

昭和新纂

國譯大藏經

LIBRARY
MAY 31 1971
UNIVERSITY OF TORONTO

BL
1411
T8J3
1929
V. 15

昭和新纂 國譯大藏經 論律部 第三卷

大智度論第一 目次

卷第一

初序品中緣起義……一

初品如是我聞一時……二〇

卷第二

初品總說如是我聞……三四

初品中婆伽婆……五〇

卷第三

初品中住王舍城……七二

共摩訶比丘僧……八六

初品中四衆義……一〇五

卷第四
初品中菩薩……一〇八
卷第五
初品中摩訶薩埵……一四七
初品中菩薩功德……一五二
卷第六
初品中十喩……一七九
初品中意無礙……二〇〇
卷第七
初品中佛土願……二〇九
初品中放光……二二一
卷第八
初品中放光之餘……二三八
卷第九
初品中放光之餘……二六九

初品中十方諸菩薩來……二八〇
卷第十
初品中十方菩薩來……二九六
卷第十一
初品中舍利弗因緣……三三四
初品中檀波羅蜜義……三四七
初品中讃檀波羅蜜義……三五二
初品中檀相義……三五四
初品中檀波羅蜜法施義……三六八
卷第十二
初品中檀波羅蜜法施之餘……三七四
卷第十三
初品中尸羅波羅蜜義……四〇九
初品中戒相義……四一五
初品中讃尸羅波羅蜜義……四四二

卷第十四
初品中尸羅波羅蜜義之餘……四四八
初品中羼提波羅蜜義……四五八
卷第十五
初品中羼提波羅蜜法忍義……四七七
初品中毘梨耶波羅蜜義……四九三
卷第十六
初品中毘梨耶波羅蜜義……五〇三
卷第十七
初品中禪波羅蜜……五二八

大智度論

第一

論律部
第三巻

大智度初序品中緣起義釋論第一　卷第一

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏法師鳩摩羅什詔を奉じて譯す

(一)智度の大道は佛のみ從つて來りたまひ、智度の大海は佛のみ窮盡したまふ
智度の相の義は佛のみ無礙なり、智度の無等佛に稽首す
有無の二見滅して餘すこと無く、諸法實相は佛の所說なり
常住不壞にして煩惱を淨む、佛の尊重したまふ所の法に稽首す
聖衆の大海は福田を行じ、學無學の人を以て莊嚴す
後有の愛種永く已に盡き、我所既に滅して根も亦除く
已に世間の諸の事業を捨てて、種種の功德の所住の處となり
一切衆中最も上と爲る、眞淨の大德僧に稽首す
一心に三寶を恭敬し已り、及び諸の救世の彌勒等
智慧第一の舍利弗、無諍空行の須菩提
我今力に如つて大智の彼岸、實相の義を演說せんと欲す
願くは諸の大德聖智の人、一心に善く順うて我說を聽きたまへ

【一】當書百卷羅什の譯なり、摩訶般若波羅蜜經九十品を解釋せるもの。初品を釋するに三十四卷あり、餘は其文意を釋す。

【一】歸敬序。

【智度】梵にいふプラジュニャー、パーラミター(Prajnaparamita)の譯にして、即ち般若波羅蜜、佛智もて彼岸に到るの義なり。

【無等佛】衆生に比して等しきこと無きの佛といふ意

【諸法實相】萬有諸法のありのままのすがたは絕對といひ相對といふも互に相即し圓融無礙なれば、一として虛妄なるものなしの意。

【學無學】學とは未だ學する餘地あ

問うて曰はく、『佛、何の因縁を以ての故に、『摩訶般若波羅蜜經』を說きたまへる。諸佛の法は、無事及び小因縁を以て自ら發言せず。譬へば、須彌山王の、無事及び小因縁を以て動かざるが如し。今何等の大因縁有るが故に、佛『摩訶般若波羅蜜經』を說きたまへる。』答へて曰はく、『佛、三藏の中に於て、廣く種種の諸の喩を引いて、聲聞の爲に說法したまへども、菩薩の道を說きたまはず。唯『中阿含本末經』の中に、『佛、彌勒菩薩に記し、汝當來世に當に佛と作ることを得て、號して彌勒と字くべし』とし、亦種種の菩薩行を說きたまはざりき。佛、今彌勒等の爲に、廣く諸の菩薩行を說かんと欲す、是故に、『摩訶般若波羅蜜經』を說きたまふ。

復次に、菩薩の念佛三昧を修する有り。佛、彼等の爲に、此三昧に於て、増益を得しめんと欲するが故に、『般若波羅蜜經』を說きたまふ。般若波羅蜜初品の中に說くが如し。佛は神足を現じて金色の光明を放ち、遍く恒河沙等の十方世界を照し、大身を示現し、清淨の光明、種種の妙色、虚空の中に滿てり、佛の衆中に在したまふとき、端正殊妙なること、能く及ぶ者無く、譬へば須彌山王の、大海に處するが如し。諸の菩薩は、佛の神變を見、念佛三昧に於て倍復増益す。是事を以ての故に、『摩訶般若波羅蜜經』を說きたまふ。

復次に、菩薩の初めて生れたまひし時、大光明を放ちて、普く十方に遍じ、行くこと七歩に至りて、四顧を觀察し、師子吼を作して、偈を說いて言はく、

我生胎の分は盡きたり、是れ最末後の身なり

る意味にて羅漢果未證の者にて名け、無學とは學すべきことの凡てを學し盡したる意味にて羅漢果を證したるものをいふ。

【後有】未來の果報愛種とは煩惱の種子なり。即ち未來に復生を受くべき煩惱の種子の義

【我所】我に屬し我によつて執着せらるるもの。

【根】不善の本といふ意。

【三寶】佛寶、法寶、僧寶。

【彌勒】梵にマイトレーヤ(Maitreya)慈氏と譯す。補處の菩薩として現に兜率天に在りて當來出世して成佛すと信ぜらるる菩薩。

【舍利弗】シャーリプトラ(Sariputra)鶖鷺子と譯す、佛十大弟子の一、智慧第一と稱せらる

【須菩提】スブー

我已に解脫を得たり、當に復衆生を度すべし

是誓を作し已りて、身漸く長大にして親屬を捨て、出家して無上道を修せんと欲す。中夜に起ち、諸の伎直、后妃、婇女を觀見したまふに、狀臭屍の若し。卽ち車匿に命じて、白馬に被せしめ、夜半に城を踰え、行くこと十二由旬にして、跋伽婆仙人所住の林中に到り、刀を以て髮を剃り、上妙の寶衣を以て、麁布の僧伽梨に貿へ、尼連禪河の側に於て六年苦行し、日に一麻を食し、或は一米等を食す。而も自ら念言すらく、「是處は道に非ず」と。爾時、菩薩は苦行の處を捨て、菩提樹下に到り、金剛處に坐したまへば、魔王十八萬億の衆を將ゐ來りて、菩薩を壞らんとす。菩薩は智慧功德の力を以ての故に、魔衆を降し已りて、卽ち阿耨多羅三藐三菩提を得たまふ。是時、三千大千世界の主、梵天王、名は式棄、及び色界の諸天等、釋提桓因、及び欲界の諸天等、並に四天王、皆佛所に詣りて世尊に初めて法輪を轉じたまはんことを勸請す。亦是れ菩薩の念じて本より願ふ所、及び大慈大悲の故に、請を受けて說法す。諸法の甚深なるは、般若波羅蜜是なり。是故に佛、『摩訶般若波羅蜜經』を說きたまふ。復次に、有人は、佛一切智を得ずと疑ふ。所以は何ん、諸法は無量無數なり。云何が一人にして能く一切の法を知らん。佛、般若波羅蜜の實相淸淨に住したまへること虛空の如し。無量無數の般若波羅蜜の法中に、自ら誠言を發し、我は是れ一切智人なり、「一切衆生の疑を斷せんと欲す」と。是故に『摩訶般若波羅蜜經』を說きたまふ。復次に衆生の得度すべき者あり。佛の大功德智慧は、無量にして知

テイ(Subhūti)善吉と譯す、佛十大弟子の一、解空第一と稱せらる。

【二】佛が摩訶般若波羅蜜經を說きたまふ因緣に就いて明す。

【三藏】經、律、論の三藏。

【念佛三昧】一心に佛の相好或は實相を觀じ、又は稱名すると、或は佛の相好を觀念し、其觀成熟して周遍法界の理法身を觀るに至るとの二あり。

【恆河沙】恆河の沙の無數なるを大數をあらはすに喩ふ。

【須彌山】スメール(Sumeru)妙高山と譯す、一小世界の中心にありと想像せらる山。

【車匿】チャンダカ(Chandaka)樂欲と譯す、悉達太子の御者、後出家せしも憍慢の故に

照日車園と稱せらる。

【由旬】ユージャナ(Yojana)印度の里數の名。

【婆伽婆】バガヷ(Bhagavat)釋尊出家の後、最初に師事せる仙人。

【僧伽梨】サムガーティ(Saṃghāṭi)大衣、重複衣と譯す、三衣の一にして、說法又は城に入りて托鉢する際に用ふ。

【尼連禪河】ナイランジャラ(Nairañjanā)有金河、不樂著河と譯す、王舍城の附近を流るる河の名。

【金剛座】佛成道の地をいふ。

【阿耨多羅三藐三菩提】アヌッタラ・サムヤクサムボーディ(Anuttara-samyaksambodhi)無上等正覺と譯す佛のさとり。

【式棄】シキー(Śikhin)

り難く、解し難きを以ての故に、惡師の爲に惑はされ、心邪法に沒して、正道に入らず、是般若の人の爲に大慈心を起し、大悲の手を以て之を接け、佛道に入らしむ。是故に自ら最妙の功德を現じ、大神力を出したまふ。般若波羅蜜初品の中に說くが如し。佛、三昧王三昧に入り、三昧より起ち、天眼を以て十方世界を觀たまふに、擧身の毛孔皆笑ひ、其足下の千輻輪の相よりは、六百千萬億の、種種の色の光明を放ち、足の指より、上は肉髻に至り、處處に各六百千萬億の、種種の色の光明を放ち、普く十方無量無數如恆河沙等の諸佛の世界を照して、皆大いに明かならしむ。佛、三昧より起ち、一切諸法の實相を宣示し、一切衆生の疑結を斷せんと欲するが故に、『般若波羅蜜經』を說きたまふ。復次に、惡邪の人あり。嫉妬の意を懷き、誹謗して言はく、「佛の智慧は人を出でず、但幻術を以て世を惑はす」と。彼貢高邪慢の意を斷ずるが故に、無量の神力、無量の智慧力を現じ、『般若波羅蜜』の中に於て自ら說くらく、「我は功德無量なり、三界の特尊として、一切に覆護せらる。若し一たび惡念を發さば、罪を獲ること無量なり。一たび淨信を發さば、人天の樂を受け、必ず涅槃の果を得ん」と。復次に、人をして法を信受せしめんと欲するが故に言はく、「我は是れ大師なり、十力四無所畏ありて、聖主の住處に安立し、心自在を得、能く師子吼して、妙法輪を轉じ、一切世界に於て最尊最上なり」と。復次に、佛世尊は、衆生をして歡喜せしめんと欲するが故に、是『般若波羅蜜經』を說いて言はく、「汝等應に大喜を生ずべし。何を以ての故に。一切衆生は邪見の網に入り、異學惡師の爲に惑はさるれども、

我は一切の惡師邪網の中に於て、出づることを得たる十力の大師にして、値ひ見るべきことは難ければなり。汝、今已に遇ふ。我時に隨うて、三十七品等の諸の深法藏を開發せん。汝、恣に採取せよ」と。復次に一切衆生は、結使の病の爲に煩惱せられ、無始の生死より已來、人の能く此病を治する者無く、常に外道惡師の爲に誤らる。我今出世して大醫王となり、諸の法藥を集む、汝等當に服すべし。是故に佛は『摩訶般若波羅蜜經』を說きたまへり。復次に、人有り念言すらく「佛、人と同じく亦生死あり。實に飢渴寒熱老病の苦を受く」と。佛、彼意を斷ぜんと欲するが故に、是『摩訶般若波羅蜜經』を說き、示して言はく、「我身は不可思議なり。梵天王等諸天の祖父、恆河沙等の劫中に於て、我身を思量し、我聲を尋究せんと欲すとも、測度する能はず、況んや我智慧三昧をや」と。偈に說くが如し。

　諸法實相の中、諸の梵天王等の
　一切の天地の主は、迷惑して了ずる能はず
　此法は甚だ深妙なり、能く測量する者無く
　佛出でて悉く開解したまふに、其明かなること日の照すが如し

又佛、初めて法輪を轉じたまふ時の如きは、時に應じて菩薩他方より來り、佛身を量らんと欲するに、上は虛空無量の佛刹を過ぎて、華上佛世界に至るも、佛身を見ること故の如くなり。菩薩說いて言はく、

【色界】三界の一。欲界穢惡の色を離るるも、尙淸淨の色質あるに名く。
【釋提桓因】シャクラ、デーヴァーナーム、インドラ、(Sakradevanam-Indra)三十三天の主なる帝釋天のこと。龍天主と譯す。
【欲界】三界の一。五道並に六欲天の總稱、此界の有情多く色欲の諸欲に耽るに名く。
【四天王】四王天にある佛法護持の神。東方持國、南方增長、西方廣目、北方多聞これなり。
【一切智】一切の法相を知了すること、佛の異名。
【三昧】サマーディ(Samadhi)等持と譯す、心を一境に安住せしめて動かざるをいふ。
【天眼】禪定によつて得る眼、能く三世十方を徹見す。
【千輪相】如來

の足の裏の下にある千の輻輪の文をいふ。三十二相の一。

【涅槃】ニルヴァーナ（Nirvana）迷妄を離して、無爲法性を究竟し、實相法身の眞諦に歸入するをいふ、佛のさとり

【十力】是處非處智力、過現未來業報智力、諸禪解脫三昧智力、諸根勝劣智力、種種解智力、種種界智力、一切至處道智力、天眼無礙智力、宿命無漏智力、永斷習氣智力

【四無所畏】正等覺無畏、漏永盡無畏、說障法無畏、說盡苦道無畏。

【三十七品】四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七菩提分、八聖道分

【結使】煩惱の異名。

【諸根】眼耳鼻舌

虚空は邊行ること無し、佛の功徳も亦爾なり
設ひ其身を量らんと欲するも、唐に勞して盡す能はず
上は虚空界、無量の諸佛の土を過ぐるに
猶師子の身を見ること、故の如くにして異ならず
佛身は金山の如く、大光明を演出し
相好もて莊嚴せること、猶し春華の敷けるが如し

佛身の無量なるが如く、光明・音響も亦復無量なり、戒定慧等の諸佛の功徳も皆悉く無量なり、『密迹經』の中の三密の如し。此中に應に廣く說くべし。復次に、佛、初めて生れたまひし時、地に墮ちて行くこと七步、口自ら言を發し、言ひ竟りて便ち默すること、諸の嬰孩の如くなりき。行かず、語らず、乳餔すること三歲、諸母養育し、漸次に長大したまふ。然るに、佛身は無數にして、諸の世間に過ぎたり。衆生の爲の故に現ずること、凡人の如し。凡人に生ずる時、身分、諸根及び其意識、未だ成就せざる故に、身の四威儀、坐臥行住、言談語默、種種の人の法、皆悉く未だ了せず。日月歲過ぎ、漸漸に習學して、能く人の法を具ふ。今佛は、云何が生れて便ち能く語り、能く行き、後更に能くせざるや。此を以て怪を致す。但此が爲の故に方便力を以て、人の法を現行すること、人の威儀の如くにして、諸の衆生をして深法を信ぜしむ。若し菩薩生るる時、便ち能く行じ能く語らば、世人は當に是念を作すべし。今此人を見るに世に未曾有なり。必ず是れ天

龍鬼神ならん。其所學の法も、必ず我等が及ぶ所に非ず。何を以ての故に。我等生死の肉身は、結使の業の爲に牽かれて、自在なることを得ざればなり。此の如きの深法は、誰か能く之に及ばん」と。此を以て自ら絶えて賢聖の法器と成ることを得ず。是人の爲の故に嵐毘尼園の中に於て生れ、即ち能く菩提樹下に至りて成佛すと雖も、方便力を以ての故に、孩童幼、小年少成人を現作し、諸時の中に於て、次第に嬉戲、術藝、服御、五欲を受け、人の法を具足し、後漸く老病死苦を見て厭患の心を生じ、夜中の半に於て、城を踰えて出家し、鬱特伽と阿羅洛仙人の所に到りて、現に弟子と作り、而も其法を行ぜず、常に神通を用ひ、自ら宿命を念ずるに、迦葉佛の時、戒を持し道を行ずと雖も、而も今現に苦行を修し、六年道を求む。菩薩は三千大千世界に主たりと雖も、而も現じて魔軍を破り、無上道を成じ、世法に隨順するが故に、是樂の變を現じたまふ。今般若波羅蜜の中に於て、大神通智慧力を現ずるが故に、諸人當に知るべし、佛身は無數にして諸の世間に過ぎたりと云ふことを。復次に、人有り、應に度すべきもの、或は二邊に墮し、或は無智なるを以ての故に、但身の樂、或は有爲の道を求む。故に苦行に修著す。是の如きの人等は、第一義の中に於て、涅槃の正道を失せり。佛、此二邊を拔き、中道に入らしめんと欲するが故に、『摩訶般若波羅蜜經』を說きたまへり

復次に、生身、法身、供養の果報を分別するが故に、『摩訶般若波羅蜜經』を說きたまふ。舍利塔品の中に說くが如し。復次に、阿鞞跋致と、阿鞞跋致の相とを說かんと欲するが故

身意等の根をいふ

【嵐毘尼園】ルムビニー、ヴナ（Lumbini-vana）迦毘羅城と拘利城との中間にありし花園。

【五欲】色聲香味觸の五境をいふ。

【鬱特伽】ウドラカ（Udraka）

【阿羅洛】アーラーダカーラーマ、（Aradakalama）

【迦葉佛】カーシャパ（Kasyapa）過去七佛の第六、賢劫千佛の第三。

【三千大千世界】四日月、須彌山、四天下、四王天、三十三天、夜摩天、兜率天、變化天、他化自在天、梵世天を一世界といひ、一世界を千合せるものを小千世界、小千世界を千合せる中千世界、中千世界を千合せる大千世界の總稱なり

【二邊】有無或は斷常の二見にして一方の邊端に走るをいふ。
【有爲】因緣によつて生ずる諸現象をいふ。
【第一義】最もすぐれたる眞理。
【中道】有無の二邊を離れし中正の道。
【阿鞞跋致】アヴイヴァルティカ(Avaivartika)不退轉と譯す、佛となるに定りて再び退轉の地位に退くことなき位をいふ。
【阿難】アーナンダ(Ānanda)佛十大弟子の一、多聞第一と稱せらる。
【三】第一義悉檀の相を明さん爲に此經を說く、中に四悉檀を說明す。
【悉檀】シッダーンタ(Siddhānta)吉法、成就などと譯す、宗要の意。
【四種の悉檀】悉檀とは次にいふ四悉檀。

に、說きたまふ。復次に、魔幻と、魔事との爲の故に說きたまふ。復次に、當來世の人、般若波羅蜜を供養する因緣の爲の故に、又三乘の記別を授けんと欲するが故に、是の般若波羅蜜經を說きたまふ。佛阿難に告げたまはく、「我涅槃の後、此般若波羅蜜は、當に南方に至り、南方より西方に至るべく、後の五百歳中に、當に北方に至るべし。是中に多く法を信ずる善男子、善女人有り。種種の華香、瓔珞、幢幡、伎樂、燈明、珍寶、財物を以て供養し、若は自らも書き、若は人をして書かしめ、若は讀誦、聽說、正憶念して修行し、法を以て供養せん。是人は是因緣を以ての故に、種種世間の樂を受け、末後の世の時には、三乘を得て、無餘涅槃に入らん」と。是の如き等の諸品の中、因緣の事を觀ずるが故に、「摩訶般若波羅蜜經」を說きたまふ。

復次に、佛、第一義悉檀の相を說かんと欲するが故に、是の「摩訶般若波羅蜜經」を說きたまふ。四種の悉檀あり、一には世界悉檀、二には各各爲人悉檀、三には對治悉檀、四には第一義悉檀なり。四悉檀の中に、一切の十二部經、八萬四千の法藏あり。皆是れ實にして相違背する無く、佛法の中に有なり。世界悉檀を以ての故に實有なり、各各爲人悉檀を以ての故に實有なり、對治悉檀を以ての故に實有なり、第一義悉檀を以ての故に實有なり。

世界とは、有法は、因緣和合に從ふが故に有にして、別の性無し。譬へば車の轅軸輻輞等の如し。和合の故に有りて、別に車無し。人も亦是の如し、五衆和合の故に有り、別に人無し。若し世界悉檀無くば、佛は是れ實語の人なり、云何が言ふや、「我清淨の天眼を

法もて衆生の佛道を成ずるに名く、以下一一に就て明すも、要約せば世界悉檀とは、佛先づ凡情に順じて人我等の假名を用ひ衆生の所樂に隨順して世界の法を說き、聞く者をして歡喜せしむるをいひ、各各爲人悉檀とは佛が說法するに衆生の機に鑑み機宜の大小、宿種の淺深に隨つて其の所應の法を說いて正信を發起し、善根を增長せしむるをいひ、對治悉檀とは貪欲多き者には慈心を敎へ、愚癡多き者には因緣觀を敎ふる等の種種の法樂を施して衆生の惡病を除遣するをいひ、第一義悉檀とは衆生の機の熟するを見て諸法實相を說いて眞證に入らしむるをいふ。

【四】初に世界悉

以て諸の衆生の善惡の業に隨ひて此に死し彼に生じて、果報を受くるを見る、善業の者は天人の中に生じ、惡業の者は三惡道に墮す」と。復次に、經に言はく、「一人出世すれば、多人慶を蒙る。福樂饒益せるは佛世尊なり」と。法句の中に說きたまはく、「神自ら能く神を救ふ。他人安ぞ能く神を救はん。自ら善を行ずる智は是れ最も能く自らを救ふ」と。「瓶沙王迎經」の中に、佛の說きたまふが如し、「凡人は法を聞かず、凡人は我に著す」と。又佛「二夜經」の中に說きたまはく、「佛、初得道の夜より、般涅槃の夜に至るまで、是二夜の中間に說く所の經敎は、一切皆實にして、顚倒ならず」と。若し實に人無くんば、佛、云何が我天眼もて衆生を見ると言ふ。是故に當に知るべし人有りとは、世間悉檀の故に。是れ第一義悉檀に非ず。問うて曰はく『第一義悉檀は是れ眞實なり。實の故に第一と名く。餘は實ならざるべし。』答へて曰はく『然らず、是四悉檀は各各實有り。如如、法性、實際は世界悉檀の故に無く、第一義悉檀の故に有り。人等も亦是の如く、世界悉檀の故に有り、第一義悉檀の故に無し。所以は何ん、人五衆の因緣有るが故に是人等有り。譬へば乳の如し、色香味觸の因緣有るが故に是乳有り。若し乳實に無くんば、乳の因緣も亦應に無かるべし。今乳の因緣は實に有るが故に、乳も亦應に有るべし。一人の第二頭、第三手の如きは、因緣無くして假名有るに非ず。是の如き等の相を名けて、世界悉檀と爲す。

(五)云何が各各爲人悉檀と名くる。人の心行を觀じて、爲に法を說くに、一事の中に於て、或は聽き、或は聽かず。經の中に說く所の如き、雜報業の故に、雜して世間を生じ、雜觸、

檀を明す。
【五衆】色受想行識の五蘊と同じ。
【世界悉檀の故に有】眞諦門よりせば空なるも、俗諦門よりすれば有なりとの義。
【五】次に各各爲人悉檀を明す。
【計常】神我は常恆に存すと執すること。
【六】次に對治悉檀を明す。

雜受を得。更に「破群那經」の中に說くこと有り、「人觸を得ること無く、人受を得ること無し」と。問うて曰はく、「此の經は云何が通ぜんや」。答へて曰はく、「人有り、後世を疑ひて罪福を信ぜず、不善の行を作し、斷滅の見に墮するを以て、彼の疑を斷じ、彼が惡行を捨てしめんと欲し、彼が斷見を拔かんと欲す。是の故に、世間に雜生して、雜觸、雜受を說く。是れ破群那の我有り、神有りと計し、計常の中に墮することを破するなり。破群那、佛に問うて言はく、『大德、誰か受くる』と。若し佛、某甲、某甲受くと說きたまはば、便ち計常の中に墮し、其人は、我見、倍復牢固にして、移轉すべからず。是を以ての故に、受者觸者ありと說かず。是の如き等の相、是を名けて、各各爲人悉檀と爲す。

(六)對治悉檀とは、法有り對治する時は則ち有り、實性は則ち無し。譬へば重熱の膩酢鹹の藥草、飲食等の如きは、風病の中に於ては名けて藥と爲せども、餘病に於ては藥に非ず。輕冷甘苦澁の藥草飲食等の若きは、熱病に於ては名けて藥と爲せども、餘病に於ては藥に非ず。輕辛苦澁熱の藥草飲食等の若きは、冷病中に於ては名けて藥と爲せども、餘病に於ては藥に非ず。佛法中の心病を治するも亦是の如し、不淨觀の思惟は、貪欲病の中に於ては、名けて善對治の法と爲せども、瞋恚病の中に於ては、名けて善と爲さず、對治の法に非ず。所以は何ん。身の過失を觀るを不淨觀と名く、若し瞋恚の人過失を觀れば、則ち瞋恚の火を增益するが故なり。慈心を思惟するは、瞋恚病の中に於ては、名けて善對治の法と爲せども、貪欲病の中に於ては名けて善と爲さず、對治の法に非ず。所以は何ん。慈心は衆生の

中に於て好事を求め功德を觀ず、若し貪欲の人、好事を求め功德を觀ぜば、則ち貪欲を增益するが故なり。因緣の觀法は、愚癡病の中に於て、名けて善對治の法と爲せども、貪欲瞋恚病の中に於ては、名けて善と爲さず、對治の法に非ず。所以は何ん。先づ邪觀の故に邪見を生ず、邪見は即ち是れ愚癡なればなり。問うて曰はく、『佛法中に說ける十二因緣の如きは甚深なり。說くが如くんば、佛、阿難に告げたまはく、「是因緣の法は、甚深にして見難く、解し難く、覺り難く、觀じ難し。細心巧慧の人のみ乃ち能く解す、愚癡の人は、淺近の法に於てすら猶尙解し難し、何に況んや、甚深の因緣をや」と。今云何が愚癡の人は因緣の法を觀ずべしと言ふ。』答へて曰はく、『愚癡の人とは、牛羊等の如き愚癡を謂ふに非ず。是人は、實道を求めんと欲すれども、邪心觀の故に、種種の邪見を生ず。是の如き愚癡の人は當に因緣を觀ずべし。是を名けて善對治の法と爲す。若し瞋恚婬欲を行ずる人は、樂を求めんと欲し、他を惱まさんと欲す。此人の中に於ては善に非ず、對治の法に非ず。不淨慈心の思惟は、是二人の中には、是れ善なり、是れ對治の法なり。何を以ての故に。是二觀は、能く瞋恚貪欲の毒刺を拔くが故なり。復次に、常に著する顚倒の衆生は、諸法の相似相續の有を知らず、是の如きの人は、無常を觀ず。是れ對治悉檀にして、第一義に非ず。何を以ての故に。一切諸法は、自性空の故に。偈を說いて言へるが如し。

無常を有常と見る、是を名けて顚倒と爲す
空の中には無常を無す、何の處にか有常を見ん

【苦、無我等も亦是の如し】有爲法は苦空無常無我なればなり。

【七】次に第一義悉檀に就いて明す

問うて曰はく、「一切有爲の法は、皆無常の相なり、應に是れ第一義なるべし、云何が無常は實に非ずと言ふ。所以は何ん、一切有爲の法は、生住滅の相にして、前は生、次は住、後は滅なるが故なり。云何が無常は實に非ずと言ふ。」答へて曰はく、「有爲の法は、三相あるべからず。何を以ての故に。三相は不實なるが故なり。若し諸法の生住滅、是れ有爲の相ならば、今の生の中にも、亦三相あるべし、生は是れ有爲の相なるが故なり。是の如く一一の處に亦應に三相あらば、是れ則ち無窮となるべし。住滅も亦是の如し。若し諸の生住滅、各更に生住滅有ること無くんば、有爲法と名くべからず。何を以ての故に、有爲法の相は無なるが故に、是を以ての故に諸法の無常は第一義に非ず。復次に、若し一切の實性無常ならば、則ち行業の報無けん。何を以ての故に。無常を生滅と名くるの失あるが故に。譬へば腐れたる種子の果を生ぜざるが如し。是の如きは則ち行業無し。行業無ければ、云何が果報あらん。今一切賢聖の法は、果報あり、善智の人の信受すべき所は無と云ふべからず。是を以ての故に、諸法は無常の性に非ず。是の如き等の無量の因緣あり、説いて諸法無常の性と言ふを得ず。一切有爲の法は無常なり、苦、無我等も亦是の如し。是の如き等の相を名けて、對治悉檀と爲す。

(七)第一義悉檀とは、一切の法性、一切の論議語言、一切の是法非法、一一分別破散すべし。諸佛、辟支佛、阿羅漢の行ずる所の眞實の法は、破すべからず散ずべからず。上の三悉檀の中に於て通ぜざる者は、此中に皆通ずるなり。問うて曰はく、「云何が通なる。」答へて曰

はく、謂ゆる通とは、一切の過失を離れ、變易すべからず、勝つべからず。何を以ての故に。第一義悉檀を除いては、諸餘の論議、諸餘の悉檀は皆破すべきが故に。『衆義經』の中に說く所の偈の如し。

　各各自らの見に依りて、戲論して諍競を起す
　若し能く彼の非を知らば、是れ正見を知ると爲す
　他法を肯受せざるを、是を愚癡の人と名く
　是論議を爲す者は、眞に是れ愚癡の人なり
　若し自ら是見に依らば、諸の戲論を生ず
　若し此は是れ淨智とせば、淨智に非ざる者無し

此三偈の中に於て、佛、第一義悉檀の相を說きたまふ。謂ゆる世間の衆生は、自らの見に依り、自らの法に依り、自らの論議に依りて諍競を生ず。戲論は卽ち諍競の本たり。戲論は諸見に依りて生ず。偈を說いて言ふが如し。

　受法有るが故に諸論有り、若し受有ること無くんば何の論ずる所かあらん
　有受無受の諸見等を、是人は此に於て悉く已に除けり

行者能く實の如く此を知る者は、一切の法、一切の戲論に於て、不受不著不見なり。是れ實に諍競に共ぜざれば、能く佛法の甘露味を知らん。若し爾らずんば、則ち謗法なり。若し他法を受けずんば、知らず取らずして、是れ無智の人なり。則ち是の如き諸有る戲論

【尼揵子】ニルグランタ（Nirgrantha）離繫子と譯す、裸形外道といふ。

【白衣】俗人の凡てをいふ。僧人の黑衣なるに對す。

【犢子】ヴァツシプトリヤス（Vatsiputriyas）小乘二十部の一派上座部の十一。

【四大】地水火風の四大、一切の色法を構成する成分。

【阿毘曇】アビダルマ（Abhidharma）對法と譯す、三藏中の論藏をいふ。

【十八界】六根と六境と六識となり。

【十二入】六根と六境、新譯には十二處といふ。

【方廣道人】大乘

は皆是れ無智なり。何を以ての故に。各各に法を相受けざる故に。謂ゆる、有人は自ら謂はん、「一法は第一義にして淨なり、餘人は妄語不淨なり」と。譬へば世間の治法の如きの故に、治法とは、刑罰殺戮種種不淨なれども、世間の人は信受して之を行じ、以て眞淨と爲し、餘の出家善聖人の中に於ては、是れ最も不淨と爲す。外道の出家人の法に、五熱中に一脚を以て立ち、髮を拔く等を、尼揵子の輩は以て妙蹟となし、餘人は此を說いて癡法となす。是の如き等の種種の外道の出家、白衣の婆羅門の法は、各各自ら以て好と爲し、餘は皆妄語とす。是の佛法中にも亦犢子比丘は、四大和合して、眼法あるが如く、是の如く五衆和合して人法ありと說く。犢子阿毘曇の中に說くらく「五衆は人を離れず、人は五衆を離れず、五衆は是れ人なり、五衆を離れて是れ人なりと說くべからず」と。人とは是れ第五の不可說法藏中に攝する所の者なり。一切有道の人の輩の言はく、「神人は、一切種、一切時、一切法門の中に求むるに得べからず。譬へば兎角龜毛の常に無なるが如し」と。復次に、十八界、十二入、五衆は實に有なり、而も此中に人無し、更に佛法中の方廣道人の言へるあり「一切法は、不生不滅、空にして所有無し。譬へば兎角龜毛の常に無なるが如し」と。是の如き等の一切の論議師輩は、自ら其法を守り、餘法を受けず、此は是れ實なり、餘は妄語なり。若し自ら其法を受くれば、自ら法を供養し、自ら法を修行して、他法を受けず、供養せず、爲に過失を作す。若し是を以て淸淨と爲し、第一義の利を得ば、則ち一切は、淸淨に非ざる無し。何を以ての故に。彼は一切自愛の法の故に。問う

中附佛法の外道なり、大乘方廣の空理を惡執して空見に墮するなり。

【八】次に長爪梵志等を佛教に歸入せしめん爲に此經を說く。

【長爪梵志】ディールガナカ、ブラフマチャーリン、(Dirghanakha-brahmacarin)

て曰はく、『若し諸見皆過失あらば、是第一義悉檀は、何んが是なる。』答へて曰はく、『一切語言の道を過ぎ、心行の處滅し、遍く所依無く、諸法を示さず、諸法實相にして、初無く中無く後無く盡きず壞れざる、是を第一義悉檀と名く。摩訶衍の義は、偈の中に說くが如し。

語言盡く竟り、心行亦訖む
不生不滅にして、法は涅槃の如し
諸の行處を說くを、世界法と名け
不行處を說くを、第一義と名く
一切は實一切は非實、及び一切は實にして亦非實
一切は非實にして非不實なり、是を諸法實相と名く

是の如き等は處處に經の中に說く。第一義悉檀は是義甚深にして、見難く解し難し』と。佛、是義を說かんと欲するが故に、『摩訶般若波羅蜜經』を說きたまふ。

（八）復次に、長爪梵志等の大論議師をして、佛法の中に於て、信を生ぜしめんと欲するが故に、『是摩訶般若波羅蜜經』を說きたまふ。梵志有り號して長爪と名く。更に先尼婆蹉衢多羅と名くる有り。更に薩遮迦摩揵提等と名くる有り。是等は閻浮提の大論議師の輩なり。言はく、『一切の論は破すべく、一切の語は壞すべし、一切の執は轉ずべきが故に、實法の信ずべく、恭敬すべきもの有ること無し』と。『舍利弗本末經』中に說くが如し。舍利弗の舅

【閻浮提】ジャムブドヰーパ（Jambudvīpa）贍部洲と譯す、吾人の住する世界。

【摩訶倶絺羅】マハーカウスティラ（Mahākauṣṭhila）長爪梵志のこと、歸佛の後問答第一と稱せらる。

【十八種の大經】四韋陀と六論と八論。[illegible]作る法を釋し、尼鹿多論は一切の物の名を立つる因緣を釋す、八論の中、肩亡婆論は諸法の

摩訶倶絺羅は、姉の舍利と論議して如かず。倶絺羅思惟し念言すらく、「姉の力に非ず、必ず智人を懐まん。言を母の口に寄せて、未だ生ぜざるに乃ち爾なり。生じて長大に及ばば、當に之を如何せん」と。思惟し已りて、憍慢の心を生じ、廣く論議せんが爲の故に、出家して梵志と作り、南天竺國に入り、始めて經書を讀む。諸人問うて言はく、「汝、何の求めんことを志し、何の經をか學習する」と。長爪答へて言はく、「十八種の大經、盡く之を讀まんと欲す」と。諸人語りて言はく、「汝、壽命を盡すとも、猶一をも知る能はず、何ぞ況んや能く盡さんや」と。長爪自ら念ずらく、「昔は憍慢を作して姉の爲に勝たれ、今復此の諸人に輕慢せらる」と。是の二事の爲の故に、自ら誓を作して言はく、「我、爪を剪らずして、要ず十八種の經を讀み盡さん」と。人、爪の長きを見る、因て號して長爪梵志と爲す。是の人は種種の經書智慧力を以て、種種に是は法、是は非法、是は應、是は不應、是は實、是は不實、是は有、是は無なりと譏刺して、他を破し論議すること、譬へば大力の狂象の搪揬蹋蹹して、能く制する者無きが如し。是の如く長爪梵志は論議の力を以て、諸論師を摧伏し已りて、還りて摩伽陀國の、王舍城の那羅聚落に至り、本生の處に至りて、人に問うて言はく、「我が姉の生める子は、今何の處に在るや」と。有人語りて言はく、「汝が姉の子は、適めて生るること八歳にして、一切の經書を讀み盡し、年十六に至り、論議一切の人に勝る。釋種の道人にして、姓は瞿曇なるものあり。與に弟子と作る」と。長爪之を聞き、即ち憍慢を起し、不信の心を生じて、是言を作さく、「我が姉の子の如きは、聰明なる

是非を簡釋し、那阿毘薩多論は諸法の道理を明し、伊底阿婆論は傳記衛世の事を明し、僧佉論は二十五諦の義を明し、課伽論は攝心の法を明し、前論と共に解脱の法を釋し、陀苑論は兵杖を用ふる法を明し、揵闥婆論は音樂の法を明し、阿輪論は醫方を明す。

【摩伽陀】マガダ(Magadha)中印度にあり、頻婆娑羅阿闍世等の所領。

【王舍城】ラージャグリハ(Rājagṛha)摩伽陀國の都城。

【那羅】ナラ(Nara)

【瞿曇】ガウタマ(Gautama)地最勝と譯す。

こと是の如し。彼何の術を以てか誘誑し、頭を剃りて弟子と作す」と。是語を説き已りて直に佛所に向ふ。爾時、舍利弗、初めて受戒して半月なりしが、佛邊に侍立して、扇を以て佛を扇げり。長爪梵志、佛に見え、問訊し訖りて、一面に坐し、是念を作さく、「一切の論は破すべく、一切の語は壞すべく、一切の執は轉ずべし。是中に何者か是れ諸法實相、何者か是れ第一義、何者か性、何者か相にして顛倒せざる」と。是の如く思惟すること、譬へば、大海の水の中に、其崖底を盡さんと欲するが如し。之を求むること既に久しけれども、一法の實に以て心に入るべき者を得ず。「彼何なる論議の道を以てか、而も我姉の子を得たる」と。是思惟を作し已りて、佛に語りて言はく、「瞿曇、我は一切の法を受けず」と。佛、長爪に問はく、「汝一切法を受けず、是見をば受くるや不や。佛に質す所の義は、汝已に邪見の毒を飲む。今是毒氣を出して、一切法は受けずと言ふ。是見を汝受くるや不や」と。爾時、長爪梵志は、好馬の鞭影を見て即ち覺り、便ち正道に著くが如く、長爪梵志も亦是の如く、佛語の鞭影心に入るを得て、即ち貢高を棄捐し、慚愧低頭して、是の如く思惟すらく、「佛、我を置いて二處負門の中に著く、若し我是見を我受くと説かば、是負處門は麤なるが故に多くの人知らん、云何が自ら一切法は、受けずと言ふ。今是見を受く、是れ現前の妄語なり。是麤負處門は多くの人の知る所なり、第二の負處門は細なり、我之を受けんと欲す。多くの人知らざるを以ての故なり」と。是念を作し已りて、佛に答へて言さく、「瞿曇、一切法を受けず、是見も亦受けず」と。佛、梵志に語げたまはく、「汝一切の

【九】次に諸佛實相を說き無諍處を明さん爲に此經を說く

法を受けず、是見も亦受けずんば、則ち受くる所無く、衆人と異ること無し。何んが自高を用ひて、憍慢を生ずることと、是の如くなる」と。長爪梵志、答ふるを得ること能はず、自ら負處に墮すと知りて、即ち佛の一切智の中に於て、恭敬を起し、信心を生じ、自ら思惟すらく、「我負處に墮す。世尊は我負を彰さず、是非を言はず、以て意と爲したまはず。佛は心柔濡なり。是れ第一清淨、一切語論の處滅して、大甚深の法を得。是れ恭敬すべき處、心淨第一なり」。佛は法を說き、其邪見を斷ずるが故に、即ち坐處に於て、塵垢を遠離するを得、諸法の中に於て、法眼淨を得。時に舍利弗は、是語を聞いて、阿羅漢を得、是に長爪梵志は、便ち出家して沙門と作り、大力の阿羅漢を得たり。若し長爪梵志、般若波羅蜜の氣分を聞いて四句を離れずんば、第一義相應の法の小信すら尚得ず、何に況んや出家して道果を得んや。佛は是の如き等の大論議師、利根の人を導引せんと欲するが故に、是『般若波羅蜜經』を說きたまへり。

(九)復次に、諸佛に二種の說法あり。一には人心に隨うて度すべき者を觀、二には諸法の相を觀る。今、佛、諸法實相を說かんと欲するが故に、『是摩訶般若波羅蜜經』を說きたまふ。相不相品の中に說くが如し。諸天子、佛に問はく、「是般若波羅蜜は甚深なり、云何の相をか作すや」と。佛、諸天子に告げたまはく、「空則ち是れ相なり。無相無作の相、無生滅の相、無行の相、常不生、如性の相、寂滅の相等なり」と。復次に、二種の說法あり。一には諍處、二には不諍處なり。諍處は、餘經の中に說くが如し。今無諍處を明さんと欲するが故

【一〇】次に諸の法相を明さん爲に此經を說く。

【四念處】身は不淨と觀じ（身念處）受は苦なりと觀じ（受念處）、心は無常なりと觀じ（心念處）、法は無我なり（法念處）を觀ずるこれなり。

に、是の『般若波羅蜜經』を說きたまふ。有相、無相、有物、無物、有依、無依、有對、無對、有上、無上、世界、非世界も亦是の如し。問うて曰はく、「佛は大慈悲心なり、但應に無諍の法のみを說くべし、何を以てか諍法を說きたまふ。」答へて曰はく、『無諍の法』は、皆是れ無相、常に寂滅にして說くべからず。今布施等及び無常、苦、空等の諸法を說いて、皆寂滅無戲論と爲すが故に說く。利根のものは佛意を知りて諍を起さず。鈍根の者は、佛意を知らず、相を取り、心に著するが故に、諍を起す。此般若波羅蜜は、諸法畢竟空なるが故に、諍處無し。若し畢竟空にして、得べく諍ふべくんば、畢竟空と名けず、是故に『般若波羅蜜經』を無諍處と名く。有無の二事皆寂滅の故に。

（一〇）復次に、餘經の中には多く三種の門を以て諸法を說けり。謂ゆる、善門、不善門、無記門なり。今、非善門、非不善門、非無記門の諸の法相を說かんと欲するが故に、『摩訶般若波羅蜜經』を說きたまふ。學法、無學法、非學、非無學法、見諦斷法、思惟斷法、無斷法、可見有對、不可見有對、不可見無對、上中下法、小大無量の法、是の如き等の三法門も亦是の如し。復次に、餘經の中には四念處を說いて聲聞の法に隨ふ。是に於て比丘內身の三十六物を觀じ、欲貪の病を除く。是の如く外身を觀じ、內外身を觀ず。今、四念處に於て異る法門を以て、『般若波羅蜜經』を說かんと欲す。所說の如くんば、菩薩は內身を觀ずるに、身に於て覺觀を生ぜざれば身を得ず、無所得なるを以ての故に。是の如く外身を觀じ、內外身を觀ずるに身に於て覺觀を生ぜざれば、身を得ず、無所得なるを以ての故に。身念

【四正勤】已生の惡に對しては除斷の爲に勤めて精進し、未生の惡に對して更に生ぜざらしめん爲に勤めて精進し、未生の善に對して生ぜんが爲に勤めて精進し、已生の善に對して增長せしめん爲に勤めて精進す。一心に精進して此四法を行ずる故に名く、

【四如意足】四念處中には實智慧を、四正勤中には正精進を修して精進智慧ともに增して定力少なければ、今四種の定を得て心を攝むる故定慧均等にして所願皆得る故如意足とも禪足ともいふ、欲、精進、心、思惟是なり。

【四禪】初禪、二禪、三禪、四禪、をいひ、尋伺喜樂の四を具するを初禪、前二を離るる

處の中に於て、身を觀じて身の覺觀を生ぜざる、是事甚だ難し。三念處も亦是の如し。四正勤、四如意足、四禪、四諦、是の如き等の種種の四法門も亦是の如し。復次に、餘經の中に、佛、五衆の無常、苦、空、無我の相を說きたまふ。今是五衆に於て異る法門を說かんと欲するが故に、『般若波羅蜜經』を說きたまふ。佛、須菩提に告げたまふが如きは、若し菩薩は色は是れ常行、不行の般若波羅蜜、受想行識も是れ常行、不行の般若波羅蜜、色は無常、行不行の般若波羅蜜、受想行識も無常行、不行の般若波羅蜜なりと觀ず。五受衆、五道、是の如き等の種種の五法門も亦是の如く、餘の六七八等、乃至無量の法門も亦是の如し。摩訶般若波羅蜜は無量無邊なるが如く、般若波羅蜜の因緣を說くことも、亦無量無邊なり。是事廣きが故に、今略して摩訶般若波羅蜜の因緣起法を說き竟んぬ。

摩訶般若波羅蜜初品如是我聞一時釋論第二

經 是の如く我聞けり、一時、

論（一二）問うて曰はく、「諸佛の經は何を以ての故に初に、是の如く、の語を稱ふる。」答へて曰はく、「佛法の大海は、信を能入と爲し、智を能度と爲す。是の如く、の義とは、即ち是れ信なり。若し人心中に信有りて淸淨なれば、是人は能く佛法に入る。若し信無ければ、是人は、佛法に入る能はず。不信の者は、是事、是の如くならずと言ふ。是れ不信の相な

を第二禪、更に後二を離るるを第三禪、前の一切を離るゝを第四禪とす。

【二】以下是の如く我聞けり一時の文に就いて初に如是を明す。

【佛法の大海は信を以て能入と爲す】佛教が信心を最も重しとするの例證として古來數數引用さるる文句。

【無漏】煩惱を滅盡して全く清淨なるに名く。

り。信者は是事是の如しと言ふ。譬へば牛皮の未だ柔らかならざれば、屈折すべからざるが如く、無信の人も亦是の如し。譬へば牛皮の已に柔らかなれば、用に隨つて作すべきが如く、有信の人も亦是の如し。復次に、經中に、信は手の如し、と說く。人は手有りて、寶山の中に入れば、自在に寶を取るが如し。有信も亦是の如し。佛法の無漏の根力、覺道、禪定、寶山の中に入りて、自在に取る所あり。無信は無手の如し。無手の人は寶山中に入るに、則ち所取あること能はず。無信も亦是の如し。佛法の寶山に入りて、都て所得無し。佛、言はく、「若し人信有れば、是人は能く我大法の海中に入り、能く沙門の果を得ること空しからず。頭を剃り、袈裟を染むといへども、若し信無くんば、是人は我法海の中に入る能はず。枯樹の華實を生ぜざるが如く、沙門の果を得ず。頭を剃り、衣を染め、種種の經を讀み、能く難じ、能く答ふと雖も、佛法の中に於て、空うして所得無けん」と。是を以ての故に、是の如く、の義は佛法の初に在り、善信の相なるが故なり。復次に、佛法は深遠なり。更に佛有りて乃ち能く知りたまふ。人に信有れば未だ作佛せずと雖も、信力を以ての故に能く佛法に入る。梵天王の佛に初轉法輪を請ふが如し。偈を以て佛に請はく、

閻浮提には先に多く、　諸の不淨の法を出せり
願くは甘露の門を開いて、　諸の清淨の道を說きたまへ

佛、偈を以て答へたまはく、

我法は甚だ得難し、　能く諸の結使を斷ずれども

【三有】欲、色、無色の三界に同じ

三有に愛著する心あれば、是人は解する能はず

梵天王、佛に白さく、「大徳、世界の中の智に上中下有り、善軟直心の者は得度すべきこと易し。是人若し法を聞かずんば、諸の惡道の中に退墮せん。譬へば水中の蓮華の、生有り、熟有り、水中より未だ出でざる者有るに、若し日光を得ざれば、則ち開かざるが如し。佛も亦是の如し。佛、大慈悲を以て、衆生を憐愍するが故に、爲に、法を説きたまふ。佛、過去未來現在を念ふに、三世諸佛の法は、皆衆生を度せんが爲に法を説きたまふ。我も亦宜に爾るべし」と。是の如く思惟し竟りて、梵天王等の諸天の請を受け、法を説きたまふ。

爾時、世尊、偈を以て答へて曰はく、

我今甘露味の門を開く、若し信ずる者有らば歡喜するを得ん

諸人の中に於て妙法を説く、他を惱すに非ざるが故に而も爲に説く

佛、此偈の中に、布施の人は歡喜することを得と説かず、亦多聞、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の人は歡喜することを得と説かず、獨り信ずる人はと説きたまふ。佛意是の如し、我は第一甚深微妙にして、無量、無數、不可思議、不動、不猗、不著、無所得の法なり。一切智人に非ずんば則ち解すること能はず。是故に佛法の中には信力を初と爲す。信力は能く入れども、布施、持戒、禪定、智慧等は能く初めて佛法に入るに非ず。偈を説いて言ふが如し。

世間の人は心動じて、福の果報を愛好す

【提婆達】デーヴダッタ(Devadatta)天授のこと。斛飯王の子、釋尊の從兄弟、佛成道後其弟子となりしも佛の威勢を嫉んで別立し、事毎に佛に對せしが、意の如くなるを得ずして沒せり。

【倶伽離】コーカリカ(Kokalika) 提婆と共に無信の故に惡道に墮せり

而も福因を好まず、有を求めて滅を求めず
先づ邪見の法を聞き、心著して深く入る
我此甚深の法は、信無くば云何が解せん

提婆達の大弟子、倶伽梨等の如きは、信法無きが故に惡道の中に墮す。是人は信無くして、佛法に於て、自ら智慧を以て求むれども得る能はず。何を以ての故に。佛法は甚深なるが故に。梵天王、倶伽梨を教へて偈に說くが如し。

無量の法を量らんと欲するも、智者の量らざる所なり
無量の法を量らんと欲せば、此人は自ら覆沒せん

復次に、是の如く、の義は、若し人心善直にして信あらば、是人は法を聽くべし、若し是相無くんば則ち解せず。說く所の偈の如し。

聽者は端視すること、渴するものの飲むが如く、一心の語義の中に入り
踊躍して法を聞き心悲喜す、是の如きの人には應に爲に說くべし

復次に、是の如く、の義は佛法の初に在り。現世の利と後世の利と、涅槃の利と、諸利の根本は、信を大力と爲す。復次に、一切の諸の外道の出家は心に念ずらく「我法は微妙第一清淨なり」と。是の如きの人は自ら所行の法を歎じ、他人の法を毀る。是故に現世には相打ちて鬪諍し、後世には地獄に墮して、種種無量の苦を受く。偈に說くが如し。

自法に愛染するが故に、他人の法を毀呰せば

有慧の行人と雖も、地獄の苦を脱せず

是佛法の中には、一切の語、一切の見、一切の吾我、憍慢を棄捨し、悉く斷じて著せず。栰喩經に言ふが如し、「汝曹若し我が栰喩の法を解せば、是時には善法をも應に棄捨すべし、何に況んや不善の法をや」と。佛、自ら般若波羅蜜に於て、不念不猗たり、何に況んや餘法に猗著有らんや。是を以ての故に佛法の初頭に、是の如く、と稱ふ。佛意是の如し。吾が弟子には愛法無く、染法無く、朋黨無く、但離苦解脱を求め、諸法の相を戲論せず。阿他婆耆經に説くが如し。摩揵提の難ずる偈に言はく、

決定の諸法の中に、横に種種の想を生じ
悉く内外を捨つるが故に、云何が當に道を得べき

佛、答へて言はく、

見聞知覺に非ず、亦持戒の得に非ず
見聞等にあらざるに非ず、不持戒の得に非ず
是の如きの論は悉く捨て、亦我我所を捨て
諸法の相を取らず、是の如くんば道を得べし

摩揵提、問うて曰はく、

若し見聞等にあらず、持戒の所得に非ず
見聞等にあらざるに非ず、不持戒の得に非ずんば

【我我所】我とは自身をいひ、我所とは身に隨屬するものに執して我が所有なりとするもの。

【四】以下我の義に就いて明す。

我心の如く觀察し、啞法を持ちて道を得ん
佛、答へて曰はく、
汝は邪見の門に依り、我は汝が穢道を知る
汝妄想を見ずんば、爾時自ら當に啞すべし

復次に、我法は眞實にして、餘法は妄語、我法は第一にして、餘法は不實たりといふ、是を鬪諍の本と爲す。今、是の如く、の義は、人に諍法無きを示す。他の所說を聞く、說く人に答無し、是を以ての故に、諸の佛經の初に、是の如く、と稱ふ。略して、是の如く、の義を說き竟んぬ。

(三)我、とは今當に說くべし。問うて曰はく、「若し佛法の中に「一切法は空なり、一切は吾我有ること無し」と言はば、云何が佛經の初頭に、是の如く我聞く、と言ふ。」答へて曰はく、『佛弟子の輩は、無我を知ると雖も、俗法に隨ひて我と說く、實我には非ざるなり。譬へば金錢を以て銅錢を買ふも、人の笑ふ者無きが如し、何を以ての故に、賣買の法は、應に爾るべければなり。我と言ふも亦是の如く、無我の法中に於て我を說くは、世俗の法に隨ふが故に、難ずべからず。『天問經』の中の偈に說くが如し。

羅漢比丘有り、諸漏已に永く盡く
最後邊の身に於て、能く吾我を言ふや不や
佛、答へて言はく、

【見道】倶舎宗よりいへば四善根の第四世第一法位の無間に眞無漏智を生じて四諦を觀じ見惑八十八使を斷ずる位、唯識宗よりいへば、世第一法位の無間に眞無漏無分別智を生じて親しく唯識の實性たる眞如の理を證し、分別起の二障を斷ずる位、十地の中、初歡喜地の位に當る。

羅漢比丘有り、諸漏已に永く盡く
最後邊の身に於て、能く吾我有りと言ふ

世界法の中に我を説く、第一實義の中の説に非ず、是を以ての故に、諸法は空にして無我なり。世界法の故に我と説くと雖も咎無し。復次に、世界の語言に三の根本あり。一には邪見、二には慢、三には名字なり。是中二種は不淨にして、一種は淨なり。一切の凡人には三種の語あり、邪と慢と名字となり。見道の學人には二種の語あり、慢と名字となり。諸の聖人は、一種の語、名字あり。内心實法に違はずと雖も、而も世界の人に隨ふが故に、共に是語を傳ふ。世界の邪見を除くが故に、俗に隨ひて諍無し。是を以ての故に二種不淨語の本を除く。世に隨ふが故に一種の語を用ふ。佛弟子は俗に隨ふが故に我を説くに咎有ること無し。復次に、若し人無吾我の相に著して「是は實にして、餘は妄語なり」と言はば、是人は難ずべし「汝が一切の法は、實相無我なり。云何が是の如く我聞けりと言ふや」と。今諸の佛弟子は、一切法空に於て所有無し、是中に心著せず、亦諸法實相に著すと言はず。何に況んや無我の法中に心著せんや。是を以ての故に、難じて「何を以てか我を説く」と言ふべからず。「中論」の中の偈に説くが如し。

若し空ならざる所有らば、應當に空なる所有るべし
不空すら尚得ず、何に況んや空を得んや
凡人は不空を見、亦復空を見

【一三】以下聞くの義に就いて明す。

【五識】眼、耳、鼻、舌、身の五識

【五塵】又五境ともいひ、前五識の對象、即ち、色、聲、香、味、觸をいふ。

見と無見とを見ず、是を實に涅槃
非二安隱の門と名く、能く諸の邪見を破り
諸佛所行の處、是を無我の法と名く

略して我の義を說き竟んぬ。

(一三)聞くとは今當に說くべし。問うて曰はく、『聞くとは云何、聞くは耳根を用ひて聞くや、耳識を用ひて聞くや、意識を用ひて聞くや。若し耳根もて聞かば、耳根は覺知無きが故に聞くべからず。若し耳識もて聞かば、耳識は一念の故に分別すること能はず、聞くべからず。若し意識もて聞かば、意識も亦聞くこと能はず。何を以ての故に。先づ五識の五塵を識り、然る後意識を識ればなり。意識は現在の五塵を識ること能はず、唯過去未來の五塵をのみ識る。若し意識能く現在の五塵を識らば、盲聾の人も亦聲色を識るべし。何を以ての故に、意識破れざるが故に。』答へて曰はく、『耳根能く聲を聞くに非ず、亦耳識に非ず、亦意識に非ず。能く聲を聞く事は、多くの因緣和合するに從るが故に、聲を聞くを得るなり。一法の能く聲を聞くと言ふことを得ず。何を以ての故に。耳根には覺無きが故に、聲を聞くべからざればなり。識は無色無對無處の故に亦聲を聞くべからず。聲は覺無く亦根無きが故に聲を知ること能はず。爾時、耳根破れず、聲は可聞の處に至りて、意に聞かんと欲する情あり、塵と意と和合するが故に耳識生ず。耳識に隨ひて即ち意識生じて能く分別し、種種の因緣ありて聲を聞くを得るなり。是を以ての故に、是難を作すべからず。聲

【一四】以下一の義を明す

を聞くと雖も、佛法の中には亦一法として、能作、能見、能知有ること無し。偈に說くが如し。

業有り亦果有り、無作の業果は
此れ第一甚深なり、是法は佛のみ能く見たまふ
空なりと雖も亦斷ぜず、相續すれども亦常ならず
罪福も亦失せず、是の如きの法は佛說なり

略して聞を說き竟んぬ。

〔一四〕一とは今當に說くべし。問うて曰はく、「佛法の中に、數時等の法は實に無し、陰、入、持に攝せざる所の故に。何を以てか一時と言ふや。」答へて曰はく、「世俗に隨ふが故に、一時有りといふも、咎有ること無し。畫、泥、木等を以て、天像を作り、天を念ずるが故に、禮拜するに咎無きが若く、一時と說くも、亦是の如し。實に一時無しと雖も、俗に隨ひて、一時と說くに咎無し。問うて曰はく、「一時無くんばあるべからず。佛、自ら說きて言はく、『一人世間に出づれば、多人樂を得』と。是者は何人ぞや。佛世尊なり。亦偈に說くが如し

我行は師保無く、志一にして等侶無く
一行を積みて佛を得、自然に聖道に通ず

是の如く佛は處處に一を說きたまふ。應當に一あるべし。復次に、一法和合の故に、物

【因提梨釋迦】インドラ、シャキャ（Indra-śakya）

の名を一と爲す。若し實には一法無くんば、何を以ての故に一物の中には、一心生じ、二に非ず三に非ず。二物の中には二心生じ、一に非ず三に非ず。三物の中には三心生じ、二に非ず一に非ず。若し實に、諸數無くんば、一物の中に二心生ずべく、二物の中に一心生ずべし。是の如く、三四五六も皆爾なり。是を以ての故に、定んで知んぬ、一物の中に一法有り、是法和合するが故に、一物の中より一心生ずといふことを。答へて曰はく、「若くは一と物と一なりといひ、若くは一と物と異なりといはば、二倶に過あり。問うて曰はく、「若し一ならば、何の過ありや。」答へて曰はく、「若し一瓶は、是れ一の義、因提梨釋迦の如きは亦是れ一の義なり。若し爾れば在在に一あらば、皆是れ瓶なるべし。譬へば在在に因提梨あれば、亦處處に釋迦有るべきが如し。今衣等の諸物は、皆是れ瓶と一なるべし。瓶と一なるが故に、是の如く處處の一は、皆是れ瓶なるべし。瓶衣等の如く、悉く是れ一物ならば、分別有ること無けん。復次に、一は是れ數法、瓶も亦應に是れ數法なるべし、瓶の體に五法あらば一も亦五法有るべし。瓶は有色有對なれば、一も亦有色有對なるべし。若し在在の一を名けて瓶と爲さずんば、今瓶と一なるべからず。一若し一と說かずば瓶を攝せず。若し瓶を說かば、亦一を攝せず。瓶と一と異らざるが故に。又復一を說かんと欲せば、瓶を說くべく、瓶を說かんと欲せば、一を說くべし。是の如くんば則ち錯亂せん、問うて曰はく、「一の中の過是の如しとせば、異の中に何の咎かある。」答へて曰はく、「若し一と瓶と異らば、瓶は則ち一に非ず。若し瓶と一と異らば、一は則ち瓶に非ず。若し瓶

【三五】以下時の義に就いて明す。【天竺】印度の訛音、身毒、天豆等皆同じ、【迦羅】カーラ、(Kāla) 實時と譯す、律中に說く時食時衣等の如きをいふ。【三摩耶】サマヤ (Samaya) 假時と譯す、經中にいふ一時、助時等の如し。

と一と合して瓶を一と名けば、今一と瓶と合す。何を以てか一と名けて瓶と爲さざるや。是故に瓶と一とは異りと言ふを得ず。」問うて曰はく、「一と數合するが故に、瓶を一と爲すと雖も、然も一は瓶を作らず。」答へて曰はく、「諸數の初は一たり。一と瓶とは異れり。是を以ての故に瓶は一を作らず。」「一は無なるが故に多も亦無なり。何を以ての故に。先は一にして後は多なるが故に。是の如く、異の中には一も亦不可得なり。是を以ての故に二門の中に、一法を求むるは不可得なり。不可得の故に、云何が陰持入に攝せん。但佛弟子は、俗語言に隨つて、名けて一心と爲せども、實は著せずして數法、名字有るを知る。是を以ての故に佛法の中に一人、一師、一時と言ふも、邪見の咎に墮せず。略して一を說き竟んぬ。

(三五)時とは今當に說くべし。問うて曰はく、「(三六)天竺に時を說くに名けて二種あり。一には迦羅と名け、二には三摩耶と名く。佛は何を以てか迦羅と言はずして、三摩耶と言ひしや。」答へて曰はく、「若し迦羅と言はば、倶に亦疑ひ有り。」

問うて曰はく、「輕易の說の故に應に迦羅と言ふべし。迦羅は二字、三摩耶は三字、重語は難なるが故なり。」答へて曰はく、「邪見を除くが故に、三摩耶と說いて迦羅と言はず。復次に有人の言はく、「一切天地の好醜、皆時を以て因と爲す」と。『時經』の中の偈に說くが如し、

時來れば衆生熟し、時至れば則ち催促す
時は能く人を覺悟せしむ、是故に時を因と爲す

世界は車輪の如く、時の變ずるは輪の轉ずるが如し
人も亦車輪の如く、或は上り而も或は下る

更に有人の言はく、「天地の好醜一切の物は、時の所作に非ずと雖も、然も時は是れ變せず。因は是れ實有なれども時法は細なるが故に見るべからず、知るべからず。華果等の果を見を以ての故に、時有るを知るべし。往年、今年、久、近、遲、疾、此相を見るに、時を見ずと雖も、時有ることを知るべし。何を以ての故に。果を見て因有りと知ればなり。是を以ての故に、時法有り、時法は不壞の故に常なり」と。答へて曰はく、『泥丸の如きは是れ現在の時、土塵は是れ過去の時、瓶は是れ未來の時なり。時相常なるが故に、過去の時は、未來の時と作らず。汝が經書法のごとし時は是れ一物なり。是を以ての故に過去世は未來世と作らず、亦現在世と作らず、過を雜ふるが故に、過去世の中に亦未來世無し。是を以ての故に未來世無し。現在世も亦是の如し。』問うて曰はく、『汝、過去の土塵を受くる時、若し過去の時有らば、必ず未來の時有るべし。是を以ての故に實に時法有り。』答へて曰はく、『汝は我先に說くを聞かず、未來世は瓶、過去世は土塵なり。未來世は過去世と作らず、未來世相の中に墮するは、是れ未來世相時なり、云何が過去時と名けん。是を以ての故に過去の時も亦無なり。』問うて曰はく、『何を以て時無きや、必ず時有るべし。現在には現在の相有り、過去には過去の相有り、未來には未來の相有り。』答へて曰はく、『若し爾れば一切三世の時は自ら相應あり。盡く是れ現在世にして、過去未來の時無し。若し今未來有り

【毘尼】(Vinaya) ビナヤ、三藏中の律藏。

とも未來と名けずんば應當に現在と名くべし。是を以ての故に是語は然らず。問うて曰はく、「過去の時、未來の時は現在相の中の行に非ず。過去の時は過去世の中の行、未來世は未來の時の中の行なり。是を以ての故に各各の法相は時有り。」答へて曰はく、「若し過去、復過去せば則ち過去の相を破す。若し過去、過去ならざれば、則ち過去の相無し。何を以ての故に。自相捨するが故に。未來世も亦是の如し。是を以ての故に時法は實ならず。云何が能く天地好醜、及び華果等の諸物を生ぜんや。是の如き等の種種の邪見を除くが故に、迦羅時を說かずして、三摩耶を說く。陰、界、入、生、滅を見るを、假に名けて、時と爲し、別の時無し。謂ゆる方、時、離、合、一、異、長、短等の名字を出すに、凡人は心に著して、是を實有の法と謂ふ、是を以ての故に、世界の名字、語言の法を除棄す。」問うて曰はく、「若し時無くんば、云何が時食を聽し、非時食を是れ戒なりと遮するや。」答へて曰はく、「我先に已に世界の名字の法に時有るも、實法に非ざるを說けり、汝難ずべからず。亦是毘尼の中の結戒の法は、是れ世界の中の實にして、第一實法の相に非ず。吾我の法相は實に不可得なるが故に、亦衆人の嗔呵を爲すが故に、亦佛法を護りて久しく住せしめんと欲して、弟子の禮法を定むるが故に、諸の三界の世尊は諸戒を結したまふ。是中に何の實か有り、何の名字等か有り、何者か相應し、何者か相應せず、何者か是法にして、如是の相なる、何者か是法にして、如是の相ならざるやを求むべからず。是を以ての故に、是事は應に難ずべからず。」問うて曰はく、「若し時食、時藥、時衣に非ずんば皆是れ迦羅なり。

何を以てか三摩耶と說かざるや。答へて曰はく、此は毘尼の中の說にして、白衣は聞くことを得ず。外道は何んが聞くを得るに由りて、而も邪見を生ぜんや。餘經は通じて皆聞くことを得、是故に三摩耶と說き、其をして邪見を生ぜざらしむ。三摩耶は詭名にして、時も亦是れ假名の稱なり。又佛法の中には、多く三摩耶を說き、少しく柯羅を說く、少きが故に難ずべからず。如是我聞一時の五語の各各の義を略して說き竟んぬ。

大智度論卷第一

大智度初品總說如是我聞釋論第三　卷第二

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏法師鳩摩羅什詔を奉じて譯す

（一）是の如く我聞けりを、今當に總說すべし。問うて曰はく、「若し諸佛は一切智人、自然にして師無く、他の教に隨はず、他の法を受けず、他の道を用ひず、他に從ひ聞いて法を說かずんば、何を以てか、是の如く我聞けり、と言ふや。」答へて曰はく、「汝が言ふ所の如く、佛は一切智人、自然にして師無し。他に從ひ法を聞いて說くべからず。佛法は但佛の口より說ける者のみには非ず。是一切世間の眞實の善語、微妙の好語は、皆佛法の中より出づ。佛、毘尼の中に說きたまふが如し。「何者か是れ佛法なる。佛法に、五種の人の說あり。一には、佛自らの口說、二には、佛弟子の說、三には、仙人の說、四には、諸天の說、五には、化人の說なり」と。復次に『釋提桓因得道經』に、佛、憍尸迦に、世間の眞實の善語、微妙の好語は、皆我法の中より出づと告げたまふが如し。讚佛の偈の中に說くが如し。

諸の世間の善語は、皆佛法より出づ
善說にして失無く、過無きは佛語なり

【一】以下如是我聞の義を總じて明す。中に三藏結集の因緣を明す。

【一切智人】梵にサルヴァジュニャー(Sarvajña)といひ果上の智慧を具へたる人の意味にして佛をいふ。

【憍尸迦】カウシカ(Kauśika)帝釋天の姓。

【伊蘭】エーラーヴナ(Erāvana)樹の名、臭氣强く、四十由旬の間を薫じ、花は紅色にして美なるも、これを食へば發狂して死すといふ。
【牛頭栴檀】牛頭山より出す栴檀、赤檀ともいふ、檀香、氣窮香に似たる香樹、與藥と義釋す、梵名はゴーシールシャチャンダナ(Gosirsa-candana)
【摩梨山】マーラヤ(Malaya)
【倶夷那竭】クシナガラ(Kusinagara) 香芳城と譯す、毘舍離の東北にあり

餘處に善にして、過無きの語有りと雖も
一切皆是れ、佛法の餘なり
諸の外道の中に、設ひ好語有るも
虫の木を食して、偶字を成すを得るが如く
初中下の法、自ら共に相破る
鑛より金を出すが如し、誰か當に信ずる者有るべけんや
伊蘭の中の、牛頭栴檀の如く
苦種の中の、甘善美果の如し
設ひ能く信ずるも、是人は則ち
外の經書の中より、自ら出づる好語なりと信ぜん
諸の好き實語は、皆佛より出づ
栴檀香の、摩梨山より出づるが如し
摩梨山を除きては、栴檀を出すこと無し
是の如く、佛を除きては實語を出すこと無し

復次に、是の如く我聞けり、とは、是れ阿難等の佛の大弟子の輩の說なり。佛の法相に入るが故に名けて佛法と爲す。佛、般涅槃の時の如きは倶夷那竭國、薩羅雙樹の間に於て北首して臥し、將に涅槃に入らんとす。爾時、阿難は、親屬の愛未だ除かず、未だ欲を離

【娑羅雙樹】サーラ（Sāla）樹、娑羅樹の雙木なるが、釋尊の入滅の地の四方に高く立ちしに名く。

【阿尼盧豆】アニルッダ（Aniruddha）無滅、如意等と譯す。釋尊十大弟子の一、天眼第一と稱せらる。

【般涅槃】パリニルヴァーナ（Parinirvāṇa）滅度、圓寂等と譯す、涅槃に同じ。

【惡口の車匿】車匿は本佛が悉達太子たりし時の馭者、後、佛に就て出家したるも、性自ら高慢をたのんで惡口止まず、六群比丘の一となり、惡口車匿とも惡性車匿ともいふ、佛涅槃に臨んで阿難に命じ默擯の法を以て之を治せしめ、後遂に果を得たりといふ。

【若は今現前等】下は佛涅槃に臨ん

れざるが故に、心憂海に沒して、自ら出づる能はず。爾時、長老、阿尼盧豆は阿難に語るらく「汝は佛の法藏を守る人なり。凡人の如く自ら憂海に沒すべからず。一切有爲の法は、是れ無常の相なり。汝、愁憂する莫れ。又、佛、手づから汝に法を付したまふ。汝今愁悶せば、受くる所の事を失はん。汝當に佛に問ふべし。佛の般涅槃の後、我曹は云何が道を行ぜん。誰をか當に師と作すべき。惡口の車匿と云何が共住せん。佛經の初首には何等の語をか作さん、是の如き種種の未來の事を、應に佛に問ふべし」と。阿難、是事を聞き、悶心小しく醒め、道力の助を念ずるを得て、佛の末後の臥床の邊に於て、此事を以て佛に問ふ。佛、阿難に告げたまはく「若は今現前、若は我過ぎ去りし後、自ら法の依止に依止して、餘に依止せざれ。云何が、比丘自ら法の依止に依止して、餘に依止せざる。是に於て、比丘は內に身を觀じ、常に當に一心に智慧を念じ、勤修精進して、世間の貪憂を除くべし、外身內外身の觀も、亦是の如く、受、心、法念處も亦復是の如し。是を比丘自ら、法の依止に依止して、餘に依止せずと名く。今日より「解脫戒經」は、卽ち是れ大師なり。「解脫戒經」に說くが如く、身業、口業は應に是の如く行ずべし。車匿比丘は我涅槃の後には、梵法の如く治せよ。若し心調伏せば、應に「那陀迦旃延經」を敎へよ。卽ち道を得べし。我三阿僧祇劫に集むる所の法寶藏は、是藏の初に應に是說を作すべし。是の如く我聞けり。一時、佛、某の方、某の國土、某の處、樹林中に在すと。何を以ての故に。過去の諸佛の經の初に、皆是語を稱したまひ、未來の諸佛の經の初にも亦是語を稱すべく、現在の諸佛の

で自歸依、法歸依を說きたまふを明す。

【阿僧祇劫】アサムケーヤ、カルパ(Asaṁkheya-kalpa)無數時と譯す。三阿僧祇劫とは菩薩が佛果を得るまで經る修行の年時。

【摩訶迦葉】マハーカーシャパ(Mahākāsyapa)大飮光と譯す。佛十大弟子の一、頭陀行第一と稱せらる。

【波羅奈】ヷーラーナシー(Vārāṇasī)今のベナレス地方。

【苦聖諦】惑業の因によりて得たる現在の苦果のこと

【陂池】衆流をいれて厭足なき池。

末後、般涅槃の時にも、亦是語を稱せよと敎ふればなり。今我般涅槃の後の經の初にも、亦應に、是の如く我聞けり、一時と稱すべし、と。是故に當に知るべし、是れ佛の敎ふる所にして、佛自ら、是の如く我聞けり、と言ふに非ず。佛、一切智人、自然にして師無きが故に、我聞けり、と言ふべからず。若し佛自ら、是の如く我聞けり、と說きて、知らざる所有らば此難あるべし。阿難、佛に問ふに、佛、是語を敎へたまふ。是れ弟子の言ふ所の是の如く我聞けり、なり。咎有ること無し。復次に、佛法をして久しく世間に住せしめんと欲するが故に、長老摩訶迦葉等の諸の阿羅漢、阿難に問はく、「佛は初めて何れの處にて說法し、何等の法をか說きたまひしや」と。阿難答ふ、「是の如く我聞けり。一時、佛、波羅奈國の仙人鹿林の中に在して、五比丘の爲に、是苦聖諦を說きたまふ。我は本より他に從うて法を聞かず、中正に憶念して、眼智明覺を得たり」と。是經は是中に應に廣く說くべし。『集法經』の中に廣く說くが如くんば、佛、涅槃に入りたまふ時、地は六種に動き、諸河反流し、疾風暴發し、黑雲四に起り、惡雷、掣電、雹雨驟りに墮ち、處處に星流れ、師子惡獸哮吼喚呼し、諸天世人皆大いに號咷し、諸天人等皆是言を發す、「佛、涅槃を取りたまふこと、何んが一に疾なる。世間の眼滅せり」と。是時に當りて、一切の草木、藥樹、華葉は、一時に剖裂し、諸の須彌山王は盡く皆傾搖し、海水に波揚り、地は大いに震動し、山崖は崩落し、諸の樹は摧け折れ、四面より烟起りて甚大だ畏るべく、陂池江河は盡く皆嬈れ濁り、彗星晝出で、諸人啼哭し、諸天憂愁し、諸の天女等は郁伊哽咽して涕淚交

流れ、諸の學人等は默然として樂まず、諸の無學の人は有爲の諸法は一切無常なりと念ず、是の如く天人、夜叉、羅刹、揵闥婆、甄陀羅、摩睺羅伽及び、諸龍等皆大いに憂愁せり。

諸の阿羅漢は、老病死海を度り、心に念じて言はく、

已に凡夫の恩愛の河を渡り、老病死の券は已に裂破せり
身を見るに篋中の四大蛇の如し、今無餘滅の涅槃に入らん

諸の大阿羅漢は各各意に隨うて、諸の山林流泉谿谷の處處に於て、身を捨てて般涅槃す。更に諸の阿羅漢ありて、虛空の中に於て飛騰し去ること、譬へば雁王の種種の神力を現じ、衆人をして心信清淨ならしむるが如くし、然る後般涅槃す。六欲天、乃至、遍淨天等は、諸の阿羅漢の皆滅度を取るを見て、各各心に念じて言はく、「佛日既に沒し、種種の禪定、解脫、智慧ある弟子の光も亦滅せり。是の諸の衆生には、種種の婬、怒、癡の病有り。是の法藥師の輩は今疾かに滅度せり、誰か當に治すべき者あらんや。無量の智慧の大海の中に生ずる弟子の蓮華は今已に乾き枯れ、法樹は摧け折れ、法雲は散滅し、大智の象王は既に逝き、象子も亦隨うて去り、法の商人は過ぎ去れり、誰に從うてか法寶を求めん」と偈に說くが如し

佛は已に永寂の涅槃に入りたまひ、諸の結を滅するの衆も亦過ぎ去れり
世界は是の如く空うして智無く、癡冥は遂に增し智燈は滅せり

(三)爾の時、諸天、摩訶迦葉の足を禮し、偈を說きて言はく、

【夜叉】ヤクシャ(Yaksa)勇健と譯す、八部衆の一。
【羅刹】ラークシャナ(Raksasa)可畏、食人鬼と譯す
【揵闥婆】ケンダルヴァ(Gandharva)尋香食香等と譯す、帝釋の俗樂神。
【甄陀羅】キムナラ(Kimnara)疑神、人非人等と譯し、八部衆の人、人とも神とも畜生とも定め得ざる怪物、歌舞をこととす。
【摩睺羅伽】マホーラガ(Mahoraga)大蟒神、大腹行と譯す、大蟒のことと。
【老病死海を度り】苦の世界を解脫せること。
【六欲天】四王天、忉利天、夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天。
【遍淨天】色界十八天の第九、三禪天の第三、此天は

樂受最も勝れ、清淨なることと遍きが故に名あり。

【二】三藏結集の因緣を明す。

【修妬路】スートラ(Sūtra)契經、法本等と譯す、三藏の一、佛の說ける教法、及び之を寫せる書物。

【阿毘曇】アビダルマ(Abhidharma)論藏と譯す、三藏の一、智慧を資くる諸の論をいふ。

【揵稚】チャンター(Chaṇṭa)梵鐘

　耆年は已に欲と恚と慢とを除き、其形は譬へば紫金の柱の如し
　上下端嚴、妙にして比無く、目は明にして淸淨なること蓮華の如し

是の如く讚じ已りて、大迦葉に白して言さく、「大德迦葉、仁者知るや不や、法船は破れんと欲し、法城は頹れんと欲し、法海は竭きんと欲し、法幢は倒れんと欲し、法燈は滅せんと欲し、法を說くの人は去らんと欲し、道を行ずるの人は漸く少く、惡人の力は轉盛なり、當に大慈を以て佛法を建立すべし」と。爾時、大迦葉の心は大海の澄靜にして動かざるが如く、良久うして答ふらく、「汝等善く說けり、實に言ふ所の如し。世間は久しからずして、無智盲冥ならん」と。是に於て大迦葉は默然として請を受く。爾時、諸天は大迦葉の足を禮し、忽然として現はれず、各自ら還り去れり。是時、大迦葉は思惟すらく、「我今云何が、是三阿僧祇劫に得難き佛法をして、久しく住するを得しめん」と。是の如く思惟し覺りて「我知んぬ、是法をして久しく住せしむべくんば、應當に修妬路、阿毘曇、毘尼を結集し三法藏を作るべし。是の如くせば佛法は久しく住するを得べく、未來世の人、受け行ふを得べし。所以は何ん。佛は世世に勤苦し、衆生を慈愍したまふが故に是法を學得し、人の爲に演說したまへばなり。我曹も亦應に佛教を承け用ひ、宣揚し、開化すべし」と。是時、大迦葉は是語を作し覺りて、須彌山の頂に住し、銅の揵稚を撾ち、此偈を說きて言はく、

　佛の諸の弟子、若し佛を念ぜば

のこと、法要など營む時に、衆人を集むる爲に打つもの。

【六神通】天眼通、天耳通、漏盡通、他心通、宿命通、神足通。

【三明】宿命明、天眼明、漏盡明。阿羅漢果の聖者の有する三種の智明。

【頻婆娑羅】ビムビサーラ(Bimbisara)瓶沙王ともいふ、影堅、模實と譯す、摩揭陀國の王。

【阿闍貰】アジヤ

當に佛恩を報じ、涅槃に入ること莫るべし

是揵稚の音と、大迦葉の語聲とは、遍く三千大千世界に至り、皆悉く聞き知り、諸の有ゆる弟子の神力を得たる者は、皆來りて大迦葉の所に集會せり。爾時、大迦葉、諸の會者に告ぐらく、「佛法滅せんと欲す、佛は三阿僧祇劫より、種種に勤苦し、衆生を慈愍し、是法を學得したまへり。佛、般涅槃したまへば、已に諸の弟子の法を知り、法を持し、法を誦する者も、皆亦佛に隨うて滅度せり。法は今や滅せんと欲す。未來の衆生は、甚だ憐愍すべし。智慧の眼を失ひ、愚癡盲冥ならん。佛は大慈悲もて、衆生を愍み傷みたまへり。我曹は應當に佛の教を承け用ひ、須らく經藏を結集し竟らんを待ちて、意に隨うて滅度すべし」と。諸來の衆會は、皆教を受けて住す。爾時、大迦葉は、千人を選び得て、阿難を除去せり。盡く皆阿羅漢にして、六神通を得、共解脫、無疑解脫を得、悉く三明を得、禪定は自在にして、能く逆順に諸の三昧を行じて皆悉く礙無く、三藏を誦讀し、內外の經書を知り、諸の外道家の十八種の大經は、盡く亦讀み知り、皆能く論議して異學を降伏せり。問うて曰はく、『是時、是の如き等の無數の阿羅漢有るに、何を以ての故に正に千人のみを選取して、多く取らざるや。』答へて曰はく、『頻婆娑羅王は道を得、八萬四千の官屬も亦各道を得たり。是時、王は宮中に教勅し、常に飲食を設けて千人を供食す。阿闍世王も是法を斷ぜず。爾時、大迦葉は思惟して言はく、「若し我等常に乞食せば、當に外道強來し、難問すること有りて、法事を廢闕すべし。今、王舍城は常に飲食を設けて千

ータシャトル(Ajātaśatru)瓶沙王の子、提婆に唆かされて父王を弑し、自ら覇を中印度に振ひ、後佛に歸依し、教團の大施主となる。

【耆闍崛山】グリッドラクータ(Gṛdhrakūṭa)鷲峰と譯す、中印度摩掲陀國王舍城の東北に聳ゆる山。

【夏安居】雨安居ともいふ、僧侶が四月十五日より七月十五日に至る九十日の間禁足して家に籠つて靜に修業すること。

【和合僧】梵にいふサムガ(Saṃgha)は一に和合といふ、和合僧は梵漢雙擧といふ、比丘が三人以上同處に集りて同じく戒を持し、同じく道を行ずるを和合僧といふ。

【漏】煩惱の異名、三界の有情には眼耳等より日夜に煩惱

人を供養す。是中に住して經藏を結集すべし」と。是を以ての故に千人を選み取り、多く取るを得ず。是時、大迦葉は千人と倶に、王舍城の耆闍崛山の中に到り、阿闍世王に告げて語るらく、「我等の食を給し、日日に送り來せ。今我曹經藏を結集して他行するを得ず」と。是中に夏安居すること三月、初の十五日に戒を說く時和合僧を集む。大迦葉禪定に入り、天眼を以て今是衆中、誰か未だ煩惱を盡さずして、應に逐ひ出さるべき者有るかを觀るに、唯阿難一人ありて盡さず。餘の九百九十九人は、諸の漏を已に盡して淸淨無垢なり。大迦葉は、禪定より起ちて衆の中に手づから阿難を牽出して言はく、「今、淸淨衆の中に經藏を結集す。汝は結未だ盡きず。此に住すべからず」と。是時、阿難は慚耻し、悲泣し、自ら念じて言はく、「我は二十五年、世尊に隨侍し、左右に供給せしも、未だ曾て是の如きの苦惱を得ず。佛は實に大德たり、慈悲を以て含忍したまへり」と。念じ已りて大迦葉に白して言さく、「我は能く力あり、久しく道を得べかりき。但、諸佛の法に、阿羅漢は左右に供給して使令するを得ず、是を以ての故に我は殘結を留めて盡し斷ぜざるのみ」と。大迦葉、言はく、「汝は更に罪あり。佛は意に、女人の出家を聽すを欲したまはざりき。汝殷勤に勸請す、佛、聽して道と爲せり。是故に佛の正法は五百歲にして衰微す、是れ汝が突吉羅罪なり」と。阿難言はく、「我は瞿曇彌を憐愍す。又三世の諸佛の法には、皆四部の衆あり。我釋迦文佛のみ、云何が獨り無からんや」と。大迦葉、復言はく、「佛、涅槃せんと欲する時、倶夷那竭城に近きて背痛み、四疊の漚多羅僧を敷いて臥したまひ、

自ら流注漏泄して止まざるに名く。【結】結縛の義で煩惱の異名。生死の因たるもの。【突吉羅】ヅシュクリタ(Duskrta)惡作と譯す。身口になすところの惡をいふ。【瞿曇彌】キウタミー(Gautami)瞿曇姓の女子を呼ぶ稱。【四部】比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷。【釋迦文佛】釋迦牟尼佛に同じ、シャーキャムニ(Śākyamuni)能仁寂默と譯す。【鬱多羅僧】ウッタラーサンガ(Uttarāsaṅga)七條の袈裟のこと。【四神足】四如意足のこと、前出。

汝に語りて言はく、我、水を須ひんと。汝は供給せず、是れ汝が突吉羅罪なり」と。阿難答へて言はく、「是時、五百乘の車、流を截りて渡り、水をして渾濁ならしむ、是を以ての故に取らざりき」と。大迦葉復言はく、「正に水をして濁らしむとも、佛には大神力有り、能く大海の濁水をして清淨ならしめたまふ。汝何を以て與へざりしか、是れ汝が罪なり。汝去りて突吉羅の懺悔を作せ」と。大迦葉、復言はく、「佛、汝に問ひたまはく、若し人有りて、四神足を好く修せば、壽住すること一劫なるべく、若は減ずること一劫なるべしと。佛は四神足を好修して、壽住すること一劫、若は減ずること一劫ならんと欲したまふに、汝は默然として答へず。汝に問ひたまふこと三びに至るも、汝は故に默然たりき。汝若し佛に答へば、佛は四神足を好修して、應に住すること一劫、若は減ずること一劫なるべし。汝に由るが故に佛世尊をして、早く涅槃に入らしむ。是れ汝が突吉羅罪なり」と。阿難言はく、「魔我心を蔽ふ、是故に無言なりき。我惡心にして、佛に答へざるに非ず」と。大迦葉、復言はく、「汝、佛の與に僧伽梨衣を疊むとき、足を以て上を蹈めり。是れ汝が突吉羅罪なり」と。阿難言はく、「爾時、大風起り、人の助無し、我衣を捉ふる時、風吹き來りて我脚下に墮つ、恭敬せざるが故に、佛衣を蹈むには非ず」と。大迦葉復言はく、「佛の陰藏の相を般涅槃の後、以て女人に示す、是れ何れも恥づべきなり。是れ汝が突吉羅罪なり」と。阿難言はく、「爾時、我思惟す。若し諸の女人、佛の陰藏の相を見ば、便ち自ら女人の形を羞恥して、男子の身を得、佛相を修行し、福德の根を種ゑんことを欲せんと。

【憍梵波提】ガヷーンパティ(Gavampati)牛司、牛主と譯す、解律第一と稱せらる。【尸利沙】シリーシャ(Sirīsa)合歡と譯す。

是を以ての故に我女人に示せり、無耻にして故に破戒を爲ししには非ず」と。大迦葉言はく、「汝に六種の突吉羅罪あり。盡く應に僧中にて過を悔ゆべし」と。阿難言はく、「諾、長老大迦葉、及び僧の教ふる所に隨はん」と。是時、阿難長跪して手を合せ、偏に右の肩を袒き革屣を脫し、六種の突吉羅罪を懺悔す。大迦葉は僧中に於て、手づから阿難を牽き出し、阿難に語りて言はく、「汝漏を斷じ盡し、然る後來入せよ、殘結未だ盡さずんは、汝來ること勿れ」と。是の如く語り竟りて、便ち自ら門を閉づ。爾時、諸の阿羅漢、議して言はく、「誰か能く毘尼法藏を結集する者ありや」と。長老阿泥盧豆言はく、「舍利弗は是れ第二の佛にして、好き弟子あり、憍梵波提秦に牛呞と言ふと字く。柔軟和雅にして常に閑居に處り、心は寂然に住し、能く毘尼法藏を知る。今天上の尸利沙樹園の中に在りて住す、使を遣して請じ來らん」と。大迦葉下坐の比丘に語るらく、「汝次で僧使たるべし」下坐の比丘言はく、「僧に何の使か有る」大迦葉言はく、「僧使として、汝天上の尸利沙樹園の中、憍梵鉢提阿羅漢の住處に至れ」と。是比丘は歡喜し踊躍して僧の勅命を受け、大德迦葉に白して言はく、「我、憍梵鉢提阿羅漢の所に到り何事をか陳說せん」と。大迦葉言はく、「到り已りて憍梵鉢提に語れ、大迦葉等の漏を盡せる阿羅漢、皆閻浮提に會し、僧の大法事有り、汝疾に來るべし」と。是に下座の比丘は頭面に僧を禮し、右に遶ること三匝し、金翅鳥の如く虛空に飛騰し、憍梵鉢提の所に往き到り、頭面に禮を作し、憍梵鉢提に語りて言はく、「軟善の大德、少欲知足にして常に禪定に在り、大迦葉問訊して語有り、今僧の

【摩訶目伽連】マハー、マウドガリヤーヤナ（Mahā-maudgalyayana）大胡豆と譯す、佛十大弟子の一、神通第一と稱せらる

【羅睺羅】ラーフラ（Rāhula）釋尊の子、佛弟子中密行第一と稱す。

大法事有り、疾に下り來りて衆寶の聚れるを觀るべし」と。是時、憍梵鉢提は心に覺りて疑を生じ、是比丘に語りて言はく、「僧將に鬪諍の事無きに我を喚び來らんとするか、破僧の者有ること無きや不や、佛日滅度するか」と。是比丘、言はく「實に言ふ所の如し、大師、佛は已に滅度したまへり」と。憍梵鉢提言はく、「佛の滅度太だ疾かなり。世間の眼は滅せり。能く佛の轉法輪を逐ふの將たる我和上舍利弗は今何所にか在る」と。答へて曰はく、「先に涅槃に入れり」と。憍梵鉢提言はく、「大師、法將各自ら別離せり、當に奈何がすべき。摩訶目伽連は今何所に在りや」と。是比丘言はく、「是も亦滅度せり」と。憍梵鉢提言はく、「佛法散ぜんと欲す、大人過ぎ去る、衆生愍むべし」と。問はく、「長老阿難は今何の作す所かある」と。是比丘、言はく、「長老阿難は、佛の滅度の後、憂愁啼哭迷悶して、自ら喩ふる能はず」と。憍梵鉢提言はく、「阿難の懊惱は愛結有るに由る、別離して苦を生ず、羅睺羅は復云何」と。答へて言はく、「羅睺羅は阿羅漢を得るが故に、憂無く愁無く、但諸法無常の相を觀ず」と。憍梵鉢提言はく、「斷じ難きの愛を已に斷ぜば、憂愁無し」と。憍梵鉢提言はく、「我、離欲の大師を失す。是尸利沙樹園の中に於て住することは亦何の爲す所ぞ。我和上大師は、皆已に滅度せり。我今復閻浮提に下る能はず、此に住して般涅槃せん」と。是語を説き已りて禪定の中に入り、踊りて虛空に在りて身より光明を放ち、又水火を出し、手を以て日月を摩で、種種の神變を現し、自心より火を出して身を燒き、身中より水を出して四道に流下せしめ、大迦葉の所に至る。水中に聲あり、此偈を説きて言はく、

憍梵鉢提稽首して、妙衆第一の大德僧を禮す
佛の滅度を聞いて我隨うて去る。大象去れば象の子も隨ふが如し

爾時、下坐の比丘は衣鉢を持して僧に還る。是時中間にして、阿難は諸法を思惟し、殘漏を盡さんことを求む。其夜、坐禪經行、慇懃にして道を求む。是れ阿難は智慧多くして定力少し、是故に卽ち道を得ず。定と智と等しき者は乃ち速かに得べし。後夜過ぎんと欲す、疲極まりて偃息し、却き臥して枕に就く。頭未だ枕に至らずして廓然として得悟す。電光出づれば、暗者の道を見るが如し。阿難は是の如く金剛定に入り、一切諸の煩惱の山を破り、三明、六神通、共解脫を得、大力の阿羅漢と作り、卽夜に僧堂の門に到り、門を敲いて喚ぶ。大迦葉、問うて言はく「門を敲く者は誰ぞ」答へて言はく、「我は是れ阿難」大迦葉言はく、「汝何を以てか來る」阿難、言はく、「我、今夜諸の漏を盡すことを得たり」大迦葉、言はく、「汝が與に門を開かず、汝門の鑰孔の中より來れ」阿難答へて言はく、「爾すべし」と。卽ち神力を以て門の鑰孔の中より入り、僧の足を禮拜して懺悔し、「大迦葉、復責めらるる莫れ」大迦葉、手を以て阿難の頭を摩でて言はく、「我故に汝が爲にし、汝をして道を得しむ。汝嫌ひ恨むる無れ。我も亦是の如し。汝が自證を以て譬ふるに、手づから虛空に畫いて染著する所無きが如し。阿羅漢の心も亦是の如く一切の法中に著する所無きを得、復汝座に本け」と。是時、僧復議して言はく、「憍梵鉢提は已に滅度を取れり、更に誰有りてか能く法藏を結集せん」と。長老阿泥盧豆言はく、「是長老阿難は佛弟子に於

【五比丘】阿若憍陳如、阿濕婆恃、跋提、摩訶男、婆沙波の五人をいふ

て、常に佛に近侍し、經を聞いて能く持ち、佛常に歎譽したまふ。是阿難は、能く經藏を結集せん」と。是時、長老大迦葉、阿難の頭を摩でて言はく、「佛、汝に囑累して法藏を持たしむ。汝佛恩を報ずべし。佛は何れの處に在して、最初に法を說きたまひしや。佛の諸の大弟子の能く法藏を守護せん者は皆以て滅度せり。唯、汝一人在り、汝今應に佛心に隨ひて、衆生を憐愍するが故に佛の法藏を集むべし」と。是時、阿難、僧を禮し已りて師子床に坐す。時に大迦葉は此偈を說きて言はく、

佛聖は師子王なり、阿難は是れ佛子なり
師子の座處に坐せり、衆を觀るに佛有ること無し
是の如きの大德衆も佛無ければ威神を失せり、空に月無き時は、宿有るも嚴かならざるが如し
汝、大智人の說を、汝佛子當に演ぶべし
何の處にてか佛初めて說きたまへる、今汝當に布現すべし

是時、長老阿難、一心に合掌し、佛の涅槃の方に向ひて、是の如く說きて言はく、

佛初めて法を說きたまひし時、爾時に我見ず
是の如く展轉して聞けり。佛、波羅奈に在して
佛、五比丘の爲に、初めて甘露門を開き
四眞諦の法なる、苦集滅道諦を說きたまへり

【阿若憍陳如】アージュニャータ、カウンディニャ(Ajñata-Kauṇḍinya)中印度迦毘羅城の人、婆羅門種。比丘の一。
【多羅樹】ターラ(Tāla)樹の名、高木なり。之を尺度に用ふ。

阿若憍陳如は、最初に道を見るを得
八萬の諸天衆は、皆亦道迹に入れり
是千の阿羅漢は是語を聞き已りて、上虚空に昇ること高さ七多羅樹、皆言はく、「咄、無常の力は大なり、我等が如きは、眼のあたり佛の說法を見たるも、今は乃ち我聞けりと言ふ」と。便ち偈を說きて言はく、

我は佛の身相を見たり、猶し紫金山の如くなりき
妙相衆德滅し、唯名のみ有りて獨り存す
是故に當に方便もて、求めて三界を出づべし

爾時、長老阿尼盧豆は此偈を說きて言はく、

諸の善根を勸集するに、涅槃は最も樂となす
咄、世間は無常なり、水月芭蕉の如し
功德は三界に滿つるも、無常の風に壞せらる

爾時、大迦葉は復此偈を說くらく、

無常の力は甚だ大なり。愚、智、貧、富、貴
道を得たるも及び未だ得ざるも、一切能く免るること無し
巧言、妙寶に非ず、欺誑力の諍に非ず
火の萬物を燒くが如し、無常の相は法爾たり

【優波利】ウパーリ（Upāli）近取と譯す、佛十大弟子の一、持戒第一と稱せらる。本悉達太子の執事たりし人。

【毘舍離】ヴイサーリー（Vaiśālī）摩伽陀國の北方恆河を隔てたる國の名。

【須提那迦蘭陀】シユリーナ、カランダ（Sudinna-Karanda）

【八十部の毘尼藏】八十誦律ともいひ、優波離が一夏九旬の間に於て八十番に之を誦出したるもの、四分律、五分律等は後に之より分立せるもの。其根本律なるもの現存せず。

【舍婆提城】シユラーヴステイ（Śrāvastī）舍衞城のこと。聞者城と譯す。拘薩羅國の都城。

大迦葉、阿難に語るらく、「轉法輪經より大般涅槃に至るまで、集めて四阿含と作し、增一阿含、中阿含、長阿含、相應阿含、之を修妬路法藏と名く」と。諸の阿羅漢、更に問はく、「誰か能く明了に毘尼法藏を集めん」と。皆言はく、「長老優波利は五百の阿羅漢の中に於て、律を持すること第一なり。我等今請ぜん」と。即ち請じて言はく、「起ちて師子座に就て處坐して說け、佛何の處に在して初めて毘尼結戒を說きたまひしや」と。優波利は僧の敎を受けて、師子座に處坐して說けり、「是の如く我聞けり。一時、佛、毘舍離に在したまふ。爾時、須提那迦蘭陀長者の子、初めて婬欲を作す。是因緣を以ての故に初めて大罪を二百五十戒の義に結び、三部と七法と八法と比丘尼の毘尼增一とを作りたまへり」と。優波利に雜部善部を問ひ、是の如き等の八十部の毘尼藏を作れり。諸の阿羅漢復思惟すらく、「誰か能く明了に阿毘曇藏を集めん」と。念じて言はく、「長老阿難は五百の阿羅漢の中に於て、修妬路の義を解するは第一なり。我等今請ぜん」と。即ち請じて言はく、「起ちて師子座に就て處坐せよ、佛何の處に在してか、初めて阿毘曇を說きたまへる」と。阿難は僧の敎を受け、師子座に處坐して說くらく、「是の如く我聞けり。一時、佛、舍婆提城に在したまふ。爾時、佛、諸の比丘に告げたまはく、諸の有の五怖、五罪、五怨を除かず滅せず。是因緣の故に此生の中に、身心は無量の苦を受け、復後世には惡道の中に墮す。諸の有は此五怖、五罪、五怨無し、是因緣の故に今生には種種身心に樂を受け、後世には天上の樂處に生ず。何等か五怖にして、應に遠ざかるべき。一には殺、二には盜、三には邪婬、

四には妄語、五には飲酒なり」と。是の如き等を阿毘曇藏と名く。三法藏集め竟れり。諸天、鬼人、諸龍、天女、種種に供養し、天の華香、幡蓋、天衣を雨らし、法に供養す。故に是に於て偈を說く、

世界を憐愍するが故に、三法藏を集結す
十方一切智、說智は無明の燈なり

(三)問うて曰はく「八乾度阿毘曇、六分阿毘曇等は、何の處より出づるや。」答へて曰はく、「佛、世に在す時は法に違錯無し。佛滅度の後、初めて法を集むる時も亦佛在すが如し。後百年、阿輸迦王は、般闍于瑟大會を作す、諸の大法師の議論異るが故に別部の名字あり。是より以來展轉して、迦旃延を姓とする婆羅門に至る、道人は智慧利根にして、盡く三藏內外の經書を讀み、佛語を解せんと欲するが故に發智經八犍度を作る、初品は是れ世間第一の法なり。後、諸の弟子等、後人の盡く八犍度を解する能はざるが爲の故に鞞婆沙を作る。有人の言はく、「六分阿毘曇の中、第三分八品の分別世處分と名くるは、(此は是れ樓炭經六分中第三分に是れ)目揵連の作、六分の中の初品の八品四品は、是れ婆須蜜菩薩の作、四品は、是れ罽賓阿羅漢の作、餘の五分は、是れ諸の論議師の作る所なり」と。有人、言はく、「佛の在す時は舍利弗、佛語を解するが故に、阿毘曇を作り、後に犢子道人等讀誦せり。乃ち今に至るまで、名けて舍利弗阿毘曇と爲す。摩訶迦旃延は、佛の在す時、佛語を解して蜫勒を作れり、(蜫勒は秦に篋藏と言ふ)乃ち今に至るまで、南天竺に行はる。諸の論議師は、皆是れ廣く佛語

【三】八犍度阿毘曇、六分阿毘曇等に就いて明す。

【八乾度阿毘曇】迦旃延子の作、阿毘達磨發智論の舊譯。中に雜、結使、智、行、大、根、定、見の八乾度と說く。乾度とは章篇の名。

【六分阿毘曇】六足論のこと。集異門足論、法蘊足論、施設足論、識身足論、界身足論、品類足論。皆一切有部宗の宗義を論ず。

【阿輸迦王】アショーカ(Aśoka)無憂と譯す、滅後百年頃の出世、孔雀王朝第三世、佛教の

外護者。
【般闍于瑟大會】パンチャヴァールシカ（Pancavarsika）無遮會ともいふ、五年毎に設くる大齋會のこと。
【迦旃延】カートヤーヤナ（Katyayana）薩婆多部の鼻祖。
【鞞婆沙】ヰバーシャー（Vibhasa）迦膩色迦王朝に五百羅漢が迦旃延子の八犍度論を廣說註解したもの。
【婆須蜜】ヷスミトラ（Vasumitra）世友と譯す。
【罽賓】カシュミーラ（Kasmira）のこと。
【犢子】ヷトシープトラ（Vatsi-putra）と共にいふ。
【摩訶迦旃延】マハーカトヤーヤナ（Mahakatyayana）佛十大弟子の一、論議第一と稱せらる。
【蜫勒】論藏の名

語を解するが故なり、五戒を說くが如し。五戒は幾か有色、幾か無色、幾か可見、幾か不可見、幾か有對、幾か無對、幾か有漏、幾か無漏、幾か有爲、幾か無爲、幾か有報、幾か無報、幾か有善、幾か不善、幾か有記、幾か無記なる」と。是の如き等は是れ阿毘曇なり。復次に七使は欲染使、瞋恚使、有愛使、憍慢使、無明使、見使、疑使なり。是七使は、幾か欲界繫、幾か色界繫、幾か無色界繫、幾か見諦斷、幾か思惟斷、幾か見苦斷、幾か見集斷、幾か見盡斷、幾か見道斷、幾か遍使、幾か不遍使なる。十智とは、法智、比智、世智、他心智、苦智、集智、滅智、道智、盡智、無生智なり。是十智は、幾か有漏、幾か無漏、幾か有爲、幾か無爲、幾か有漏緣、幾か無漏緣、幾か有爲緣、幾か無爲緣、幾か欲界緣、幾か色界緣、幾か無色界緣、幾か不繫緣、幾か無礙道の中に修し、幾か解脫道の中に修する、四果を得るの時は、幾か得、幾か失なる。是の如きの一切の法を分別するを、亦阿毘曇と名く。阿毘曇を三種と爲す。一に阿毘曇の身及び義は、略して三十二萬言を說く。二に六分は、略して三十六萬言を說く。三に蜫勒は、略して三十二萬言を說く。蜫勒は廣く諸事に比して、類を以て相從ふ。阿毘曇に非ず。略して、是の如く我聞けり、一時の總義を說き竟んぬ。

大智度初品中婆伽婆釋論第四

小乘四門の一、篋藏と譯す、亦有亦空の理を明すもの

【四】次に婆伽婆を釋す。

【婆伽婆】バガヴット（Bhagavat）

【五】羅漢、辟支佛と佛との相異に就いて。

經 婆伽婆、

論 (四)今當に說くべし。釋して曰はく、云何が婆伽婆と名くるや。婆伽婆とは、婆伽、を德と言ひ、婆、を有と言ふ、是を有德と名く。復次に、婆伽を分別と名け、婆を巧と名く。巧に諸法の總相別相を分別するが故に婆伽婆と名く。復次に、婆伽を名聲と名け、婆を有と名く、是を有名聲と名く。名聲を得ることは、佛に如く者有ること無し、轉輪聖王、釋梵護世者も佛に及ぶこと有ること無し、何に況んや諸餘の凡庶をや。所以は何。轉輪聖王は結と相應すれども、佛は已に結を離る。轉輪聖王は生老病死の泥中に沒在すれども、佛は已に渡るを得たり。轉輪聖王は、恩愛の奴僕なれども、佛は已に永く離る。轉輪聖王は、世間曠野の災患に處在すれども、佛は已に離るることを得たり。轉輪聖王は無明の闇中に處在すれども、佛は第一明中に處したまふ。轉輪聖王は若し極めて多くして四天下を領すれども、佛は無量の諸の世界を領したまふ。轉輪聖王は財自在なれども、佛は心自在なり。轉輪聖王は天の樂を貪り求むれども、佛は乃至有頂の樂も亦貪著したまはず。轉輪聖王は他に從うて樂を求むれども、佛は内心自ら樂しむ。是因緣を以て佛は轉輪聖王に勝れたり。諸餘の釋梵護世者も、亦復是の如し。但轉輪聖王より少しく勝れたるのみ。復次に婆伽を破と名け、婆を能と名く。是人は能く婬と怒と癡とを破るが故に稱して婆伽婆と爲す。

(五)問うて曰はく、「阿羅漢辟支佛の如きも、亦婬と怒と癡とを破る、佛と何んが異ならん」。答

【氣分】習氣のこと。煩惱の體すでに盡きたる後に其習性の殘りあるもの。

【經行】一定の地をめぐりあるくこと、坐禪して睡眠を催す時に之を防かんがためなどにす。

【波斯匿】プラセーナジット（Prasenajit）勝軍と譯す舍衞國の王。

【須達】スダッタ（Sudatta）仁にして貧を救ひ、搏食を孤獨の人に施すが故に時の人、給孤獨長者といふ。祇園精舍の建立主。

へて曰はく、「阿羅漢辟支佛は三毒を破ると雖も氣分を盡さず。譬へば香を器中に在くに、香は出づと雖も、餘氣は故らに在るが如し。又草木の薪は火もて燒くに烟を出すも、炭灰を盡さざるが如し。火の力薄きが故なり。佛は三毒永く盡して餘す無きこと、譬へば劫盡の火の、須彌山一切の地を燒くに、都て盡く烟無く、炭無きが如し。舍利弗の如きは、瞋恚の氣殘り、難陀は婬欲の氣殘り、必陵伽婆蹉は慢の氣殘れり。譬へば人の鎖を被り、初めて脱る時、行くに猶便ならざるが如し。時に佛、禪より起ちて經行したまふ、羅睺羅、佛に從うて經行するに、佛、羅睺羅に問ひたまはく、「何を以てか羸痩する」と。羅睺羅、偈を說きて佛に答ふらく、

若し人油を食すれば則ち力を得、若し酥を食する者は好色を得

麻と滓菜とを食すれば色力無し、大德世尊、自ら當に知りたまふべし

佛、羅睺羅に問ひたまはく、「是衆の中、誰をか上坐と爲す」と。羅睺羅答ふらく、「和上舍利弗なり」と。佛、言はく、「舍利弗は不淨食を食す」と。爾時、舍利弗は是語を轉聞し、即時に食を吐いて、自ら誓言を作さく、「今日より復人の請を受けず」と。是時、波斯匿王、長者須達多等、舍利弗の所に來詣し、舍利弗に語るらく、「佛は無事を以て人の請を受けたまはず、大德舍利弗も復請を受けざれば、我等白衣は、云何が當に大信淸淨なるを得べけんや」と。舍利弗言はく、「我大師佛の言はく、舍利弗は不淨食を食すと。今人の請を受くるを得ず」と。是に於て、波斯匿等は佛の所に至り、佛に白して言さく、「佛は常に

人の請を受けたまはず、舍利弗復請を受けずんば、我等は云何が心に大信を得ん。願くは佛、舍利弗に勅して、還人の請を受けしめたまへ」と。佛の言はく、「此人の心は堅くして移轉すべからず」と。佛、爾時、本生の因縁を引きたまふ。昔、一の國王あり、毒蛇の爲に嚙まる。王、時に死せんと欲し、諸の良醫を呼んで、蛇の毒を治せしむ。時に諸醫言はく、「還りて蛇をして毒氣を嗽はしめば、乃ち盡きん」と。是時、諸醫各咒術を說くれば、王を齧める所の蛇、即ち王の所に來る。諸醫薪を積んで火を然し、蛇に勅すらく、「還汝毒を嗽へ、若し爾らずんば常に此火に入るべし」と。毒蛇思惟すらく、「我既に毒を吐く、云何が還りて嗽はん、此事は死よりも劇し」と、思惟し心を定めて、即時に火に入る。爾時の毒蛇は、舍利弗是なり。世世心堅くして動ずべからず。復次に、長老必陵伽婆磋は常に眼病を患ふ。是人は乞食して常に恆水を渡るに、恆水の邊に到りて彈指して言はく、「小婢、住りて流るる莫れ」と。水即ち兩に斷れて過るを得て乞食せり。是恆神、佛の所に到り、佛に白さく、「佛弟子必陵伽婆磋は常に我を罵りて、小婢、住りて流水する莫れと言ふ」と。佛、必陵伽婆磋に告げたまはく、「恆神に懺謝せよ」と。必陵伽婆磋は即時に手を合せ、恆神に語りて言はく、「小婢、瞋る莫れ、今汝に懺謝す」と。是時、大衆之を笑ふ、「云何が懺謝して復罵る」と。佛、恆神に語げたまはく、「汝、必陵伽婆磋の、手を合せて懺謝するを見るや不や。懺謝して慢る無くして此言あり。當に知るべし惡きに非ず。此人は五百世來、常に婆羅門の家に生れ、常に自ら憍り貴ぶり、餘人を輕賤す。本來習ふ所の口言にし

【六】婆伽婆以外の佛の名號を明す。

【多陀阿伽陀】タターガタ(Tathāgata)如來と譯す。

て、己の心に憍る無きなり」と。是の如く、諸の阿羅漢は、結使を斷ずと雖も猶殘氣あり。諸の佛世尊の如きは、若し人刀を以て一臂を割り、若し人栴檀香を以て一臂に塗らんに、左右の眼の如くにして心に憎愛無し。是を以て永く殘氣無し。栴闍婆羅門女は、木杅もて佛を謗り、大衆の中に於て言はく、「汝、我をして娠ましむ。何を以てか憂ひて我に衣食を與へざる。爾は羞無くして餘人を誑惑することを爲すや」と。是時、五百の婆羅門の師等手を擧げて唱へて言はく、「是なり、是なり。我曹、此事を知れり」と。是時、佛、異色無く、亦慚色無し。此事即事に彰露し、地は爲に大に動き、諸天は供養して衆の名華を散じ、佛徳を讚歎すれども、佛は喜ぶ色無し。復次に、佛は馬麥を食すれども、亦憂慼すること無く、天王食を獻じて、百味を具足すれども、以て悅を爲したまはず、一心無二なり。是の如き等の種種の飲食、衣服、臥具、讚、呵、輕、敬等の種種の事あるも、中心異なる無きなり。譬へば眞金の燒き、鍛ひ、打ち、磨すれども、都て增し損ずる無きが如し。是を以ての故に、阿羅漢は結を斷じて道を得と雖も、猶殘氣あれば、婆伽婆と稱するを得ず。

問うて曰はく、婆伽婆は止此一名のみ有りや、更に餘名有りや。答へて曰はく、佛の功德無量なれば、名號も亦無量なり。此名は其大なる者を取る、人、多く識るを以ての故に。復異名有り、多陀阿伽陀等と名く。云何が、多陀阿伽陀と名くる。法相の如くに解し、法相の如くに說く。諸佛の如きは、安隱の道より來れり。佛も亦是の如く來り、更に去らず、

【阿羅呵】アルハット(Arhat)應供殺賊等と譯す。

【三藐三佛陀】サムミヤクサムブッダ(Samyaksambuddha)正徧知と譯す。

後行の中に至りたまふ。是故に多陀阿伽陀と名く。復、阿羅呵と名く。云何が阿羅呵と名くる。阿羅を賊と名け、呵を殺と名く。是には殺賊と名く。偈に說くが如し。

佛は忍を以て鎧と爲し、精進を剛甲と爲し
持戒を大馬と爲し、禪定を良弓と爲し
智慧を好箭と爲し、外魔王の軍を破り
内煩惱の賊を滅す、是を阿羅呵と名く

復次に、阿を不と名け、羅呵を生と名け、是に不生と名く。佛心の種子は後世の田中に、無明の糠を生せず、脫するが故なり。復次に、阿羅呵を「供養に應じ受くるもの」と名く。佛は諸の結使を除き盡して、一切智慧を得るが故に、一切の天地の衆生の供養に應受す、是を以ての故に、佛を阿羅呵と名く。復三藐三佛陀と名く。云何が三藐三佛陀と名くる。三藐を正と名け、三を遍と名け、佛陀を知と名け、是を「正遍知一切法」と名く。問うて曰はく、云何が正遍知なる。答へて曰はく、

苦をば苦相の如くに知り、集をば集相の如くに知り
滅をば滅相の如くに知り、道をば道相の如くに知る

是を三藐三佛陀と名く。復次に、一切の諸法は、實に不壞の相にして、不增不減なりと知る。云何が不壞の相と名くる。心行の處滅し、言語の道斷え、諸法を過して、涅槃の相の動ぜざるが如し。是を以ての故に、三藐三佛陀と名く。復次に、一切の十方の諸の世界

【鞞侈遮羅那三般那】ビドヤーチャラナサムパンナ(Vidyacaranasampanna)明行足と譯す。

【辟支佛】プラトエーカブッダ(Pratyekabuddha)緣覺のこと。

【道比忍】道類智忍のこと。道類智を得んとする前時に起る忍可決定をいふ。

【見諦道十五心】

の名字、六道に攝する所の衆生の名字、衆生先世の因緣、未來世の生處、一切の十方の衆生の心相、諸の結使、諸の善根、諸の出要、是の如き等の一切の諸法を悉く知る、是を三藐三佛陀と名く。復、鞞侈遮羅那三般那と名け、秦には明行具足と言ふ。云何が明行具足と名くる。宿命、天眼、漏盡を、名けて三明と爲す。問うて曰はく、神通と明と何等の異なり有りや。答へて曰はく、直に過去の宿命の事を知る、是を通と名け、過去の因緣と、行業とを知る、是を明と名く。直に此に死し、彼に生ずることを知る、是を通と名け、行の因緣の際會して失せざるを知る、是を明と名く。直に結使を盡して、更に生不生を知らざる、是を通と名け、若し漏盡きて更に復生ぜずと知る、是を明と名く。是三明は大阿羅漢、大辟支佛の得る所なり。問うて曰はく、若し爾らば佛と何等の異なること有りや。答へて曰はく、彼は三明を得と雖も、明を滿足せず、佛は悉く滿足す、是を異なりと爲す。問うて曰はく、云何が滿せず、云何が滿せざるや。答へて曰はく、諸の阿羅漢、辟支佛の宿命智は自身及び他人を知れども亦能く遍ねからず。阿羅漢は、一世、或は二世、三世、十百千萬劫乃至八萬劫を知ることと有れども、是を過ぎて以往は復知る能はず、是故に天眼明を滿せず、未來世も亦是の如し。佛は、一念の中に生じ住し滅する時、諸の結使の分生する時、是の如く住する時、是の如く滅する時に、是の如きの苦法忍、苦法智の中に斷ずる所の結使の悉く覺了し、是の如きの結使解脫の得、斷所の有爲法解脫の得、斷所の無爲法解脫、乃至道比忍を知れり。見諦道十五心の中の、諸の聲聞、辟支佛の

八忍八智の十六心中、前十五心を指す。これを預流向といふ。

【修伽陀】スガタ(Sugata)善逝と譯す。

【八正道】正見、正思惟、正語、正業、正精進、正定、正命、正念。中正にして理に契ひ、涅槃に至るの道なれば正道といふ。

【十二因緣】無明、行、識、名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、老死、三界迷妄の因果を十二に分ちて、衆生輪廻の狀を示したるもの。

【路迦憊】ローカギット(Lokavit)世間解と譯す。

覺知せざる所なり、時少しく疾きが故なり。是の如く、過去の衆生の因緣、漏の盡くるを知る。未來、現在も亦是の如し。是故に佛を明行具足と名く。行は身口業に名く。唯佛のみ身口業を具足せり。餘は皆失あり、是を明行具足と名く。復修伽陀と名く。修は秦に好と言ひ、伽陀は、或は去と言ひ、或は說と言ひ、是に好く去り好く說くと名く。好く去るとは、種種の諸の深き三摩提、無量の諸の大智慧の中に於て去るなり。偈に說くが如し。

佛は一切智を大車と爲し、八正道を行いて涅槃に入りたまふ

是を好く去ると名く。好く說くとは、諸法實相と說き、法愛に著せずと說くが如く、弟子の智慧力を觀て、是人は、正しく一切方便、神通、智力もて之を化せしむ。亦之を如何ともする無し。是人は度すべきこと、是れ疾し、是れ遲し。是人は應に是處に度すべし、是人には應に布施を說き、或は戒を說き、或は涅槃を說くべし。是人には五衆、十二因緣、四諦等の諸法を說かば、則ち能く道に入るべし。是の如き等種種に弟子の智力を知りて、而も爲に法を說く、是を好く說くと名く。復路迦憊と名く。路迦は秦には世と言ひ、憊を知と名く、是に世間を知ると名く。問うて曰はく、云何が世間を知るや。答へて曰はく、二種の世間を知る。一には衆生、二には非衆生なり。實相の如く、世間と世間の因を知り、世間の滅を知るは出世間の道なり。復次に世間を知るとは、世俗の如く知るには非ず。亦外道の知にも非ず。世間は無常なりと知るが故に苦、苦なるが故に無我なりと知る。復次

【阿耨多羅】アヌッタラ(Anuttara)無上と譯す。

【富樓沙曇藐婆羅提】プルシヤダミヤサーラテイ(Purusadamyasārathi)調御丈夫と譯す。

に、世間の相は、有常に非ず、無常に非ず、有邊に非ず、無邊に非ず、去に非ず、不去に非ず、是の如きの相にも亦著せず、清淨にして常に不壞の相なること虛空の如しと知る。是を世間を知ると名く。復阿耨多羅と名く。秦には無上と言ふ。云何が無上なる。涅槃の法は無上なり。佛、自ら是涅槃を知る、他に從りて聞かず、亦將に衆生を導いて、涅槃に至らしめんとす。諸法の中に涅槃の無上なるが如く、衆生の中に佛も亦無上なり。復次に、持戒、禪定、智慧の衆生を敎化するに、一切與び等しき者有ること無し、何に況んや能く過ぎんや。故に無上と言ふ。復次に、阿を無と名け、耨多羅を答と名く。一切の外道の法は答ふべく破るべし、實に非ず、淸淨に非ざるが故なり。佛法は答ふべからず、破すべからず、一切語言の道を出で、亦實に淸淨なるが故なり。是を以ての故に無答と名く。復富樓沙曇藐婆羅提と名く。富樓沙を秦には、丈夫、と言ひ、曇藐を秦には、化すべし、と言ひ、婆羅提を調御師と言ひ、是に、丈夫を化すべき調御の師、と名く。佛は大慈大悲大智を以ての故に、有時は軟美の語、有時は苦切の語、有時は雜語、此調御を以て道を失せざらしむ。偈に說くが如し。

佛法を車とせば弟子は馬、實に法寶の主は佛調御なり
若し馬道を出でて正轍を失せば、是の如きは當に治めて調伏せしむべし
若し小しく調ひ法治を輕くし、善を好んで成立せば上道と爲す
若し治むべからざれば便ち棄捨す、是を以て調御を無上と爲すなり

【閻羅】ヤマ(Yama)雙世王と譯す地獄の主。

【舍多提婆魔㝹舍喃】シヤースタデーヴマヌシヤーナーム(Śāstadevamanusyānām)天人師と譯す。

復次に、調御の師に五種有り。初は父母、兄姊、親里の中の官法は下師の法なり。今世には三種法の治、後世には閻羅王の治なり。佛は、今世の樂、後世の樂、及び涅槃の樂を以て利益するが故に師上と名く。四種法もて人を治むるは、久しからずして畢に壞れ、常に實に成就すること能はず。佛は人を成ずるに、三種の道を以てし、常に道に隨うて失せず。火の自相を捨てずして乃ち滅に至るが如く、佛の人をして善法を得しむるも、亦是の如し。死に至るまで捨てず、是を以ての故に佛を、丈夫を化すべき調御師と名く。問うて曰はく、「女人をも佛は亦化して道を得しむ。何を以て獨り丈夫と言ふや。」答へて曰はく、『男は尊く、女は卑しきが故に、女は男に從ふが故に、男を事業の主と爲すが故なり。』復次に、女人に、五つの礙あり、轉輪王と釋天王と魔天王と梵天王と佛とに作ることを得ず。是を以ての故に說かず。復次に、若し佛は女人の調御師なりと言はば、尊重せざるが爲なり。若し丈夫と說かば、一切都て攝す、譬へば王の來るに、應に獨り來るべからず、必ず侍從有るが如し。是の如く丈夫と說けば、二根無根及び女を盡く攝す、是を以ての故に丈夫と說く。是因緣を用ての故に、佛を、丈夫を化すべき調御師と名く。復舍多提婆魔㝹舍喃と名く。舍多を秦に教師と言ひ、提婆を天と言ひ、魔㝹舍喃を人と言ひ、是に天人の教師と名く。云何が、天人の教師と名くる。佛は、是れ應作、是れ不應作、是れ善、是れ不善なりと示導したまふ。是人は教に隨うて行じ、道法を捨てず、煩惱解脫の報を得、是れを天人の師と名く。問うて曰はく、「佛は能く龍鬼神等の餘道の中に墮して生るる者を度し

【摩醯首羅天】マヘーシュヴァラ（Maheśvara）大自在天のこと。
【韋紐天】ヰシヌ（Viṣṇu）太陽神なり。
【鳩摩羅】クマーラ（Kumāra）童子と譯す、初禪天の梵王。

たまふ。何を以ての故に、獨り天人の師と言ふ。答へて曰はく、「餘道の中に生ずる者を度すること少く、天人の中に生ずる者を度すること多し。白色の人の如きは、黑黶子ありと雖も黑人と名けず、黑少なきが故なり。復次に、人中は結使薄く、厭心得易く、天中は智慧利し。是を以ての故に、二處は道を得易し、餘道の中は爾らず。復次に、天と言へば則ち一切の天を攝し、人と言へば則ち一切地上の生者を攝す。何を以ての故に、天上は則ち天大に、地上は則ち人大なればなり。是故に天と說けば則ち天上を盡く攝し、人と說けば則ち地上を盡く攝す。復次に、人中にては戒律の儀を受け、見諦道、思惟道、及び諸の道果を得。或は有人言はく、「餘道の中には得ず」と。或は有人言はく、「多少は得、天人の中は得易ければ多く得」と。是を以ての故に、佛を天人の師と爲す。復次に、人中の行には、樂の因多く、天中には樂の報多し。善法は是れ樂の因、樂は是れ善法の報なり。餘道の中には善の因報少し、是故に佛を天人の師と爲す。復佛陀と名く。秦には知者と言ふ。何等の法を知るや、過去未來現在の衆生の數、非衆生の數、有常無常等の一切の諸法を知る。菩提樹下において、了了に覺知したまひしが故に、名けて佛陀と爲す。問うて曰はく、「餘人も亦一切諸法を知る。摩醯首羅天の如きは、秦には大自在と言ふ。八臂、三眼にして、白牛に騎す。韋紐天の如きは、秦には遍悶と言ふ。四臂にして貝を捉り、輪を持し、金翅鳥に騎る。鳩摩羅天の如きは、秦には童子と言ふ。是天は雞を擎げ、鈴を持し、赤幡を捉り、孔雀に騎る。皆是れ諸天の大將なり。是の如き等の諸天は、各大と言ひ、皆一切智と稱す。人有りて弟子と作り、其經書を學び、

亦其法を受く、是を一切智と言ふ。」答へて曰はく、「此は一切智なるべからず。何を以ての故に。瞋恚憍慢にして心著するが故に。偈に說くが如し。

若は彩畫の像及び泥像、聞經中の天及び讚天
是の如きの四種の諸天等は、各各手に諸の兵仗を執る
若は力如かずして他を怖畏し、若は心不善にして他を怖畏す
此天は定んで必ず若は他を怖れ、若は少力の故に他を怖畏す
是天は一切常に怖畏なり。諸の衰苦を除却すること能はず
人有りて恭事恭敬する者、現世に憂の海に沒するを免れず
人有り敬せず供養せざるも、現世に富樂を受くるを妨げず
當に虛誑にして實事無きを知るべし、是故に智人は天に屬せず
若し世間の中の諸の衆生は、業因緣の故に循環するが如し
福德の緣の故に天上に生じ、雜業の因緣の故に人中にあり
世間の行業は因緣に屬す、是故に智者は天に依らず

復次に、是三天は、之を愛すれば則ち一切の願を得しめんと欲し、之を惡めば則ち七世をして滅せしめんと欲す。佛は爾らず、菩薩たりし時、若し怨家の賊來りて殺さんと欲するも、尙自ら身肉、頭目、髓腦を以て之を供養す。何に況んや佛を得んをや。佛は身を惜む時あらず、是を以ての故に、獨り佛のみ應當に佛の名號を受くべく、應當に佛に歸命す

【阿婆磨】アサマ(Asama)
【阿婆摩婆摩】アサマサマ(Asamasama)
【路迦憊他】ローカージエースタ(Lokajyeṣṭa)
【波羅伽】パーラガ(Pāraga)
【婆檀陀】バダンタ(Bhadanta)
【尸梨伽那】シュリーグナ(Śrīguṇa)
【悉達多】シッダールタ(Siddhārtha)
【七】佛は一切智人といふを明す。
【刹利】クシャトリヤ(Kṣatriya)土田主と譯す、四姓の一、王及び武士の階級、

べし。佛を以て師と爲せ、應に天に事ふべからず。復次に、佛に二事あり、一には大功德神通力、二には第一淨心にして諸の結使を滅せり。諸天は福德神力ありと雖も、諸の結使滅せざるが故に心清淨ならず、心清淨ならざるが故に神力も亦少し。辟支佛は結使滅して心清淨なりと雖も、福德薄きが故に力勢少し。佛は二法を滿足するが故に、一切の人に勝ると爲す。餘人は一切の人に勝らず。婆伽婆を有德と名く、先に已に說けり。復阿婆磨と名く。（秦には無等と言ふ。）復阿婆摩婆摩と名く。（秦には無等等と言ふ。）復路迦憊他と名く、（秦には世尊と言ふ。）復波羅伽と名く。（秦には度彼岸と言ふ。）復婆檀陀と名く、（秦には大德と言ふ。）復尸梨伽那と名く。（秦には厚德と言ふ。）是の如き等の無量の名號有り。父母の名字は悉達多、（秦には成利と言ふ。）得道の時一切の諸法を知るが故に、是を名けて佛と爲す。應に諸天世人の供養を受くべし。是の如く名を得るの大德厚德あり、是の如き種種の德に隨うて名を立つるなり。

（七）問うて曰はく、「汝は刹利種を愛す。淨飯王の子は悉達陀と名く。是を以ての故に汝は而も大に稱讚して、一切智と言ふも、一切智は人には無きなり。」答へて曰はく、「汝惡邪の故に佛を妬み瞋りて妄語を作せども、實に一切智の人なり。何を以ての故に、佛は一切衆生の中にて、身色顏貌の端正なること比無く、相德明具、一切の人に勝れたり。小人も佛の身相を見ば、亦是れ一切智の人なりと知る、何に況んや大人をや。「放牛譬經」の中に說くが如し。摩伽陀國の王、頻婆娑羅、佛及び五百の弟子を請すること三月、王は新しき乳、酪、酥を須ゐて、佛及び比丘僧に供養せんとし、諸の放牛人に語ぐらく、一逕遠

【四韋陀】リグヱーダ(Ṛgveda)サーマヱーダ(Sāmaveda)アタルヴアヱーダ(Atharvaveda)、ヤジユルヱーダ(Yajurveda)のこと。婆羅門所傳の經典。

に來りて住せよ」と。日日新しき乳、酪、酥を送り竟ること三月。王は此放牛の人を憐愍し、語りて言はく、「汝往いて佛を見、還りて放牛に出でよ」と。諸の放牛の人は、佛所に往詣し、道中に於て、自ら共に論じて言はく、「我等人の說を聞くに、佛は是れ一切智人なり」と。我等は下劣の小人なり、何んが能く實に一切智人ありと別ち知らん。諸の婆羅門は酥酪を好み喜ぶが故に、常に諸の放牛の人の所に來往して親厚を作す。放牛の人は是に由りて、婆羅門の種種の經書、名字を聞く故に『四韋陀經』の中の治病の法、鬪戰の法、星宿の法、祠天の法、歌舞、論議、難問の法、是等の六十四種の世間の伎藝を言ふ。淨飯王の子は廣學多聞なり。若し是事を知らば難を爲すに足らず。其れ生れてより已來、放牛せず、我等は放牛の祕法を以て之に問はん。若し能く解せば實に是れ一切智人ならん」と。是論を作し已りて、前んで竹園に入り、佛の光明の林間を照すを見て、進前んで佛に見えんことを覓む。樹下に坐したまふ狀、金山に似たり。酥を火に投ずるに、其炎の大いに明かなるが如く、或は融かせる金を竹林の間の上に散せるに似たり。紫金の光色あり、之を視て厭ふ心無し。大いに歡喜して、自ら相謂ひて言はく、

今此釋師子は、一切智無きこと有らんや
之を見て喜ばざるもの無し、此事も亦已に足れり
光明は第一に照し、顏貌は甚だ貴重に
身相に威德備り、佛の名と相稱へり

相相皆分明に、威神も亦滿足し
福德自ら纏絡して、見る者愛せざる無く
圓光身處の中、觀る者厭足無し
若し一切智有るは、必ず是功德有らん
一切の諸の彩畫、寶飾、莊嚴の像も
此妙身に比せんと欲するに、以て喩と爲すべからず
能く諸の觀る者を滿ぜしめて、第一の樂を得しむ
之を見れば淨信を發す、必ず是れ一切智ならん

是の如く思惟し已りて佛を禮して坐す。佛に問うて言はく、「放牛の人は、幾の法ありて成就して能く牛群をして蕃息せしめ、幾の法ありて成就せず、牛群をして增さずして安隱なるを得ざらしむるや」と。佛、答へて言はく、「十一の法あり、放牛の人は、能く牛群をして蕃息せしむ。何等か十一なる。色を知り、相を知り、刮刷を知り、覆瘡を知り、作煙を知り、好道を知り、牛の所宜の處を知り、好く度濟することを知り、安隱の處を知り、乳を留むることを知り、養牛の主を知る。若し放牛の人、此十一の法を知らば、能く牛群をして蕃息せしめん。比丘も亦是の如く十一の法を知らば能く善法を增長せん。云何が色を知る。黑と白と雜色とを知る。比丘も亦是の如く、一切の色は皆是れ四大にして、四大造の造なりと知る。云何が相を知る。牛の吉、不吉の相を他の群と合せて、相に因りて則ち

【断常の悪道】有情の身心は一期を限つて断絶すと見るを断見、之に反して身心共に常住不滅と見るを常見といふ。これを邊見といふ。

識る。比丘も亦是の如し、善業の相を見ては、是を智人なりと知り、悪業の相を見ては、是を愚人なりと知る。云何が刮刷する。諸虫の爲に血を飲まるれば、則ち諸瘡を増長す、刮刷すれば、則ち害を除く。比丘も亦是の如し、悪邪覺觀の虫、善根の血を飲まば、心瘡を増長し、除けば則ち安隱なり。云何が覆瘡なる。若は衣、若は草葉、以て蚊虻の悪刺を防ぐ。比丘も亦是の如し、正觀の法を念じて、六情の瘡を覆ひ、煩惱、貪欲、瞋恚の悪虫の刺棘をして傷けられしめず。云何が烟を作りて、諸の蚊虻を除くことを知る。牛は遥に烟を見て則ち來りて屋舎に趣向す。比丘も亦是の如し、聞く所の如く説きて、諸の結使の蚊虻を除くに、説法の烟を以て衆生を引き、無我、實相、空の舎中に入る。云何が道を知る。牛は行き來り去る所の好悪の道を知る。比丘も亦是の如し、八聖道を知り、能く涅槃に至り、断常の悪道を離る。云何が牛の所宜の處を知る。能く牛をして蕃息し、少病ならしむ。比丘も亦是の如し、佛法を説く時、清淨の法喜を得れば、諸の善根増盛す。云何が濟することを知る。入り易く、渡り易く、波浪、悪虫無き處を知る。比丘も亦是の如し、能く多聞の比丘の所に至りて法を問ふ。法を説く者も前人の心の利鈍、煩惱の輕重を知り、人をして好く濟ひ、安隱に度を得しむ。云何が安隱の處を知る。所住の處に、虎、狼、師子、悪虫、毒獸無きを知る。比丘も亦是の如し、四念處は、安隱にして、煩惱の悪魔毒獸無しと知る。比丘、此に入れば則ち安隱にして患無し。云何が乳を留むる。犢母は犢子を愛念するが故に、乳を與へ、以て殘乳を留むるが故に、犢母歡喜すれば、則ち犢子の竭き

ざるあり。牛主及び放牛の人に、日日益有り。比丘も亦是の如し、居士、白衣の衣食を給施するに、當に節量を知り、罄竭せしめざれば、則ち檀越歡喜して、信心絶えず、受くる者も乏しきこと無かるべし。云何が養ふことを知る。牛主は諸の大特牛の能く牛群を守るが故に、應に養護して羸瘦せしめず、飲ましむるに麻油を以てし、飾るに瓔珞を以てし、標するに鐵角摩刷讚譽稱等を以てすべし。比丘も亦是の如し、衆僧の中に威德の大人あり、佛法を護益し、外道を摧伏し、能く八衆をして、諸の善根を種ゑ、其宜しき所に隨うて、恭敬供養等を得しむ。放牛の人は、此語を聞き已りて是の如く思惟すらく、「我等の知る所は、三四事に過ぎず。放牛師の輩も遠く五六事に過ぎず。今此說を聞いて、未曾有なりと嘆ず。若し此事を知らば、餘も亦皆爾らん。實に是れ一切智人なり。復疑ふこと無きなり」と。此經は、此中に應に廣く說くべし。是を以ての故に、一切智人有るを知る。問うて曰はく、「世間には、一切智人有るべからず。何を以ての故に。一切智人を見し者、無ければなり」。答へて曰はく、「爾らず、見ざるに二種有り、見ざるを以ての故に便ち無しと言ふべからず。一には事實に有れども、因緣覆ふを以ての故に見ず、譬へば人の姓族の初、及び雪山の斤兩、恆河の邊の沙の數は有れども知るべからざるが如し。二には實に無し。無きが故に見ず、譬へば第二頭第三手は因緣覆ふこと無くして而も見るべからざるが如し。是の如く一切智人も、因緣覆ふが故に汝、見ざるなり、一切智人無きには非ず。何等か是れ覆ふの因緣なる。未だ四信を得ずして、心惡邪に著す、汝は是因緣覆ふを以ての故に一切

【有爲法】造作を有するものに名く。即ち因緣所生の事物をいふ。
【無爲法】因緣によりて造作せられざるもの。即ち本來常住にして不生不滅なるもの。

切智人を見ざるなり。」問うて曰はく、『所知の處、無量なるが故に一切智人無し。諸法は無量無邊なり、多人和合するも尚知ること能はず、何に況んや一人をや。是を以ての故に一切智人無し。」答へて曰はく、『諸法無量なるが如し、智慧も亦無量、無數、無邊なり。函大なれば蓋も亦大に、函小なれば蓋も亦小なるが如し。」問うて曰はく、『佛は自ら佛法を說きたまふも、餘經の若くは藥方と、星宿と、算經と世典と、是の如き等の法を說きたまはず。若し是れ一切智人ならば、何を以てか說きたまはざる。是を以ての故に、一切智人に非ざることを知る。」答へて曰はく、『一切の法を知ると雖も、用あるが故に說き、不用なるが故に說かず、人有り問ふが故に說き、問はざるが故に說かず。』復次に、一切の法を略して說くに三種あり、一には有爲法、二には無爲法、三には不可說の法なり。此に已に一切の法を攝す。」問うて曰はく、『十四の難に答へず、故に知んぬ、一切智人に非ざることを。何等か十四の難なる。世界及び我は常なり。世界及び我は無常なり。世界及び我は亦有常にして亦無常なり。世界及び我は亦有常に非ず、亦無常に非ず。世界及び我は有邊なり。無邊なり。亦有邊にして亦無邊なり。亦有邊に非ず、亦無邊に非ず。死後、神去ることあり。後世神去ること無し。後世亦神去ること有り、亦神去ること無し。死後、亦神去ること有るに非ず、亦神の後世に去ること無きに非ず。是身は是れ神なり。身は異なり、神は異なり。若し佛一切智人ならば、何を以てか此十四の難に答へざる。』答へて曰はく、『此事は、實無きか故に答へず。諸法の有常は此理無し、諸法の斷も亦此理無し、是を以ての故に佛

は答へたまはず。譬へば人の牛の角を搆りて、幾升の乳をか得ると問はば、是を問に非ずと爲して、答ふべからざるが如し。復次に、世界の無窮なること、車輪の如く、初も無く、後も無しと答ふ。復次に、此に答ふれば利無くして失有り、惡邪の中に墮す。佛は十四の難は常に四諦、諸法實相を覆ふことを知りたまふ。度る處に惡虫水あれば、人を將ゐて度るべからず。安隱にして患處無くんば、人に示して度らしむべきが如し。復次に、有る人の言はく、「是事は一切智人に非ずんば解すること能はず。人知ること能はざるを以ての故に、佛は答へたまはず」と。

復次に、若し人、無を有、と言ひ、有を無、と言はば、是を一切智人に非ずと名く。一切智人は、有を有と言ひ、無を無と言ふ。佛は有を無と言ひたまはず、無を有と言ひたまはず、但諸法實相をのみ說きたまふ。云何が一切智人と名けざらん。譬へば、日の高下を作さず、平地を作さず、等一に照すが如し。佛も亦是の如し、有を無と作さしむるに非ず、無を有と作さしむるに非ず。常に實智慧の光もて、諸法を照すこと、一道の如くに說きたまふ。

人有り、佛に問うて言はく、「大德、十二因緣は佛の作なりや、他の作なりや」と。佛の言はく、「我は十二因緣を作らず、餘人も亦作らず。佛有るも佛無きも、因緣老死を生ず、是法は常に定んで住す。佛は能く是生の因緣、老死、乃至無明の因緣の諸行を說きたまふ」と。復次に、十四難の中に、若し答ふれば邪見あり。若し人、石女と黄門の兒の長短、好

【決了答】若し人一切有情は皆當に死すべきや否やと問はば、應に一向に記すべし、一切有情は皆當に死すべしと。

【解義答】若し人凡て死する者は皆當に生ずべきやと問はば、應に分別して記すべし、煩惱ある者は當に生ずべし、餘は然らずと。

【反問答】若し人は勝とせんか、劣とせんかと問はば、應に反詰して記すべし、何の所に比して然か云ふや、若し天に比せば應に人は劣れりと記すべし、若し三塗に比せば人は勝れたりと記すべしと。

【置答】若し人五蘊と有情と一とせんや、異とせんや

醜とは、何の類ぞと問はば、此は答ふべからず、見無きを以ての故に。復次に、此十四の難は、是れ邪見にして眞實に非ず、佛は常に眞實を以てす。是を以ての故に、置て答へたまはざるなり。復次に、置いて答へざる、是を答と爲す。四種の答あり、一には決了答、「佛は第一涅槃安隱なり」の如し。二には解義答、三には反問答、四には置答なり。此中佛は置答を以てしたまふ。汝は一切智人無しと言ふも、是れ言有りて義無し、是れ大妄語なり。實には一切智人有り、何を以ての故に。十力を得るが故に。處非處を知るが故に。因緣業報を知るが故に。諸の禪定解脫を知るが故に。衆生の根の善惡を知るが故に。種種の欲解を知るが故に。種種の世間の無量の性を知るが故に。一切の至る處の道を知るが故に。先世の行處を憶念して知るが故に。天眼を分明に得るが故に。一切の漏の盡きたるを知るが故に。淨不淨を分明に知るが故に。一切世界の中の上法を說くが故に。甘露味を、得るが故に。中道を得るが故に。一切の法、若は有爲、若は無爲實相を知るが故に。永く三界の欲を離るるが故に。是の如き種種の因緣の故に。佛を一切智人と爲す。問うて曰はく、『一切智人有らば、何等の人か是なる。』答へて曰はく、『是れ第一の大人にして、三界の尊なり、名けて佛と曰ふ。讃佛の偈に說くが如し。

頂生轉輪王は、日月の燈明の如く
釋迦貴族種の、淨飯王の太子は
生るる時、三千の須彌山の海水を動かす

と問はば、應に捨置記なるべし、有情は實在にあらざるが故に一異の性を論ずること能はざればなり

【處非處】ものゝ道理と道理にあらざること。

【無畏の力に四】一切智無所畏、如來が大衆の中に於て我は一切正智の人なりと師子吼して些の怖心なきをいひ、漏盡無所畏

老病死を破り、哀愍するが爲の故に世に生ず
生るゝ時行くこと七歩、光明は十方に滿ち
四方を觀て大音を發して、我は生胎の分盡きたりと
成佛して妙法を説き、大音は法鼓を振ふ
此を以て衆生世間の、無明の睡を覺る
是の如き等の種種の、希有の事已に現ず
諸天及び世人は、之を見て皆歡喜せり
佛相は莊嚴の身にして、大光滿月の面なり
一切の諸の男女は、之を視て厭足無し
生身の乳餔の力は、萬億の香象に勝れ
神足の力は無上に、智慧の力は無量なり
佛身の大光明は、佛身の表を照耀す
佛、光明の中に在すは、月の光の裏に在るが如し
種種の惡もて佛を毀れども、佛には亦惡の想無し
種種に佛を稱讃すれども、佛には亦憙の想無し
大慈の一切を視ること、怨親等くして異る無し
一切の識有るの類は、咸く皆此事を知る

とは同じく大衆中に我は一切の煩惱を斷盡せりといひて怖れなく、說障道無所畏とは同じく佛道を障害する法を說いて怖れず、說盡苦道無所畏とは、同じく盡苦の道を說いて怖れなきをいふ。

【不共に十八】十八種の佛にのみ限られたる功德法、一、身無失、二、口無失、三、念無失、四、無異想、五、無不定心、六、無不知已捨、七、欲無減、八、精進無減、九、念無減、十、慧無減、十一、解脫無減、十二、解脫知見無減、十三、一切身業隨智慧行、十四、一切口業隨智慧行、十五、一切意業隨智慧行、十六、智慧知過去世無礙、十七、智慧知未來世無礙、十八、智慧知現在世無礙、具には智度論第二十六卷に參照。

忍辱慈悲の力の故に、能く一切に勝る
衆生を度せんが爲の故に、世世勤苦を受くるも
其心は常に一定して、衆生の爲に利益を作す
智慧の力に十有り、無畏の力に四有り
不共に十八有り、無量の功德藏なり
是の如き等の無數の、希有の功德力あり
師子の如くにして畏るること無く、諸の外道の法を破り
無上の梵輪を轉じて、諸の三界を度脫したまふ

是を名けて婆伽婆と爲す。婆伽婆の義は無量なり。若し廣く說かば、則ち餘の事を廢せん。是を以ての故に略說せり。

大智度論卷第二

大智度初品中住王舍城釋論第五　巻第三

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏法師鳩摩羅什　詔を奉じて譯す

【經】王舍城に住したまふ。

【論】今當に說くべし。問うて曰はく、何を以てか直に般若波羅蜜の法を說かずして、佛、王舍城に住したまふと說く。答へて曰はく、方と時と人とを說き、人をして、心に信を生ぜしむるが故なり。云何が住と名くる。四種の身儀あり。坐と臥と行と住となり。是を住したまふと名く。又魔軍を恐るる衆を以て、自ら弟子をして、歡喜して、種種の諸の禪定に入らしむるが故に、是中に在りて住したまふ。復次に、三種の住あり。天住、梵住、聖住なり。六種の欲天の住法、是を天住と爲す。梵住等、乃至非有想、非無想天の住法、是を梵住と名く。諸佛辟支佛阿羅漢の住法、是を聖住と名く。是三住法の中、聖住法に住して、衆生を憐愍するが故に、王舍城に住したまふといふ。復次に、布施と持戒と善心と三事の故に天住と名く。慈と悲と喜と捨と四無量心の故に梵住と名く。空と無相と無作と、是三の三昧を聖住と名く。聖住の法は、佛、中に於て住したまふ。復次に、四種の住あり。天住と梵住と聖住と佛住となり。三住は前に說くが如し。佛住とは、首楞嚴等の諸佛

【一】以下王舍城に住したまふの文に就いて初に住の義を明す、

【空、無相、無作】之を三三昧といひ空三昧とは諸法は因緣生にして我我

無量の三昧、十力、四無所畏、十八不共法、一切智等の種種の諸慧、及び八萬四千の法藏にして、人を度するの門なり。是の如き等の種種の諸佛の功德、是れ諸佛の所住處なり。佛、中に於て住したまふ。略して住を說き竟んぬ。

(二二)王舍城とは、問うて曰はく『舍婆提、迦毘羅婆、波羅奈大城の如き、皆諸王の舍有り、何を以ての故に獨り此城を名けて王舍と爲す』。答へて曰はく『有人、言はく「是れ摩迦陀國王に子あり、一頭兩面四臂なり、時人以て不祥なりと爲す。王即ち其身首を裂いて之を曠野に棄つ。羅刹女鬼あり、闍梨と名く。還りて其身を合せ而も之を乳養す。後大いに成人して力能く諸國王を並兼し、天下を有ち、諸國の王、萬八千人を取りて此を五山の中に置き、大力勢を以て、閻浮提を治む。閻浮提の人因りて此山を名けて王舍城と爲す」と。復次に、有人言はく「摩迦陀王の先に住する所の城あり。城中火を失し、一たび燒くれば一たび作り、是の如く七たびに至り、國人疲役す。王大いに憂怖し、諸の智人を集め、其意の故を問ふ。有が言はく、宜しく應に處を易ふべしと。王即ち更に住處を求む。此五山を見るに、周匝して城の如し。即ち宮殿を作り中に止住す。是を以ての故に王舍城と名く」と。復次に、往古の世の時、此國に王あり、婆藪と名く。心、世法を厭ひ、出家して仙人と作る。是時、居家の婆羅門、諸の出家の仙人と共に論議す。居家の婆羅門の言はく「經書に云ふ『天祀の中に、應に生を殺し、肉を噉ふべし』と」。諸の出家の仙人の言はく「天祀の中に、生を殺し、肉を噉ふべからず」と。共に諍うて云云す。諸の出家の婆羅門の

所なしと觀ずるをいひ、無相三昧とは涅槃は色聲香味觸の五法、男女の二相及び三有爲相の十相を離るるを無相といひ、無相を緣とするに無相三昧と名け、無作三昧とは諸法に於て願樂するところなく、造作するところなきに名く。

【二二】次に王舍城に就いて。

【五山】王舍城の周圍にある山の名。一ヴイバーラ(Vaibhāra)二サプタパルナ(Saptaparṇa)三インドラサイラ(Indraśaila)四サルピシユクンデイカ(Sarpiṣkuṇḍika)五グリドラクータ(Gṛddhrakūṭa)

【居家の婆羅門】俗人なる婆羅門。

言はく「此に大王あり、出家して仙人と作る、汝等信ぜんや不や」と。諸の居家の婆羅門言はく「信せん」と。諸の出家の仙人言はく「我は此人を以て證と爲す、後日當に問ふべし」と。諸の居家の婆羅門、卽ち其夜を以て、先づ婆藪仙人の所に到り、種種に問ひ已りて婆藪仙人に語るらく、「明日論議す、汝當に我を助くべし」と。是の如く明旦に論ずる時、諸の出家の仙人、婆藪仙人に問はく「天祀の中に應に生を殺し、肉を噉ふべきや不や」と。婆藪仙人言はく「婆羅門の法、天祀の中に、生を殺し、肉を噉ふべし」と。諸の出家の仙人言はく「汝が實心に於て云何。生を殺し、肉を噉ふべきや不や」と。婆藪仙人言はく「天祀の爲の故に、應に生を殺し、肉を噉ふべし。此生は天祀の中に在りて死するが故に、天上に生ずることを得」と。諸の出家の仙人言はく「汝大いに不是なり。汝大いに妄語せり」と。卽ち之に唾して言はく「罪人滅し去れ」と。是時、婆藪仙人、尋いで地に陷入し、踝を沒す。是れ初めて大罪門を開くが故に。諸の出家の仙人、言はく「汝應に實語すべし。若し故らに妄語せば、汝が身當に地中に陷入すべし」と。婆藪仙人、言はく「我、天の爲を知るが故に、羊を殺し肉を噉うて罪無し」と。卽ち復地に陷ち入ること、膝に至る。是の如く漸漸に稍沒して、腰に至り頸に至る。諸の出家の仙人、言はく「汝今妄語して現世の報を得たり。更に實語を以てせば、地中に入ると雖も、我能く汝を出し、罪を免るることを得しめん」と。爾時、婆藪仙人自ら思惟して言はく、我は貴重の人なり、兩種に語るべからず。又婆羅門の四圍陀法中の種種の因緣、讃祀天の法は、我一人死せば、

何んが計るに足るべけん」と。心を一にして言はく、「應に天祀の中に生を殺し、肉を噉ふも罪無かるべし」と。諸の出家の仙人、言はく、「汝は重罪の人なり、去るを催す、汝を見ることを用ひず」と。是に於て擧身地中に沒す。是より以來、乃至今日まで、常に婆藪仙人の法を用ふ。天祀の中に於て、羊を殺すに、刀を下す時に當りて「婆藪汝を殺す」と言ふ。婆藪の子を名けて廣車と曰ふ。位を嗣いで王と爲り、後亦世法を厭ふ。而れども復出家すること能はず、是の如く思惟すらく、「我父、先王出家して、生きながら地中に入る。若し天下を治めば復大罪を作さん。我今當に何を以てか自ら處るべき」と、是の如く思惟す。時に空中に聲を聞く。言はく、「汝若し行いて、難値希有の處を見ば、汝は是中に舍を作りて住すべし」と。是語を作し已りて、便ち復聲を聞かず。未だ幾時を經ずして、王、田獵に出づ。一鹿の走るあり。疾きこと風の如くなるを見る。王便ち之を逐へども、而も及ぶべからず。遂に逐うて止まず。百官侍從能く及ぶ者無し。轉た前み見るに五山有り。周匝峻固にして其地平正なり。生草細軟にして、好華地に遍く、種種の林木華果茂盛し、溫泉浴池皆悉く清淨なり。其地を莊嚴し、處處に天華天香を散じ、天の伎樂を聞くこと有り。此時、乾闥婆伎、適ま王の來るを見て、各自ら還り去る。「是處は希有にして未だ曾て見る所にあらず。今我正に是中に在りて、舍を作りて住すべし」と、是の如く思惟し已りて、群臣百官跡を尋ねて到る。王諸臣に告ぐらく、「我前に聞く所の空中の聲言はく、汝行きて若し希有難値の處を見ば、汝應に是中に舍を作り住すべし」と。「我今此希有

の處を見る。我應に是中に舍を作り住すべし」卽ち本城を捨てて此山中に於て住す。是王初始て是中に在りて住す。是より已後、次第に止住せり。是王元起ちて宮舍を造立す。故に王舍城と名く。」略して王舍城の本起を説き竟んぬ。

【經】(三)耆闍崛山の中に。

【論】耆闍をば鷲と名け、崛をば頭と名く。問うて曰はく『何を以てか鷲頭山と名くる。』答へて曰はく、「是山の頂、鷲に似たり。王舍城の人、其頂に似たるを見るが故に、共に傳へて鷲頭山と言ふ。因りて之を名けて鷲頭山と爲す。復次に、王舍城の南屍陀林の中に、諸の死人多し。諸鷲常に來りて之を噉ひ、還りて山頭に在り、時人便ち鷲頭山と名く。是山は五山の中に於て、最も高大にして、多く林木を好める聖人の住處なり。」

(四)問うて曰はく、『已に耆闍崛山の義を知る。佛は何を以ての故に王舍城に住したまへる。諸佛の法は、普く一切を慈むこと、日の萬物を照し、明を蒙らざる無きが如し。漚祇尼大城、富樓那跋檀大城、阿藍車多羅大城、弗迦羅婆多大城の如き、是の如き等の大城、多人豐樂すれども、而も住せず。何が故に、多く王舍城、舍婆提大城に住し、少く波羅奈、迦毘羅婆、瞻婆、婆翅多、拘睒彌、鳩樓城等に於ても住する時有りと雖も、多くは王舍城と舍婆提とに住したまふや。云何が多く二處に住することを知れる。佛の諸經を見るに、多く二城に在りて説き、少く餘城に在り。』答へて曰はく、『佛の大慈、等しく以て漚祇尼等の諸の大城に及ぶと雖も、是は邊國の故に住せず。又彌梨車の地は弊惡の人多し、

【三】以下耆闍崛山の中にの文に就いて。

【屍陀林】シータヴァナ（Śīta-vana）寒林と譯す、屍を棄てし所。

【四】佛が多く王舍城に住せられしに就いて。

【彌梨車】ムレーッチャ（Mleccha）邊地の種。

【憍薩羅】コーサラ(Kosala)印度の國名、摩伽陀國の北、迦毘羅衛城の西に在りし大國、今のオードの地に當る。昔、波斯匿王の領せし地。

善根未熟なるが故なり。偈に說くが如し。

日光等しく照せども、華熟すれば卽ち時に開き
若し華未だ應に敷くべからずんば、卽ち亦强ひて開かざるが如し
佛も亦復是の如く、等心にして說法したまへども
善根熟すれば則ち敷き、未熟なれば則ち開かず
是を以ての故に世尊は、三種の人の中の
利智と善根熟と、結使煩惱の薄きに住したまふ

復次に、恩を知るが故に多く王舍城と舍婆提城とに住したまふ。問うて曰はく、「云何が恩を知るが故に多く二城に住せる。」答へて曰はく、「憍薩羅國は是れ佛所生の地なり。佛の頻婆娑羅王に答へたまへる偈に說くが如し。

妙好の國土有り、雪山の邊に在り
豐樂にして異寶多し、名けて憍薩羅と曰ふ
日種諸釋の子、我是中に在りて生る
心、老病死を厭ひ、出家して佛道を求む

又是憍薩羅國の主、波斯匿王は舍婆提大城の中に住す。佛、法王と爲りて、亦此城に住したまふ。二主應に一處に住すべきが故に多く舍婆提に住したまふ。復次に是憍薩羅國は、佛身を生ずるの地なり。恩を知るが故に多く舍婆提に住せり。問うて曰はく、「若し恩

【迦毘羅婆】カピラヴスツ(Kapilavastu)釋尊誕生の故城今のネポール國タライ地方。迦毘羅仙人の住せし處なるを以て此名あり。

を知るが故に、多く舍婆提に住さば、迦毘羅婆城は佛の生處に近し、何が多く住さざる。答へて日はく、「佛は諸結盡きて復餘習無し、諸の親屬に近けれども亦異想無し。然も釋種の弟子多く未だ欲を離れず、若し親里に近ければ則ち染著の心を生ず。」問うて日はく、「何を以てか舍婆提の弟子を離らずして、而も多く舍婆提に住せる。」答へて日はく、「迦毘羅婆は弟子多し。佛、初て國に還りたまふに、迦葉の兄弟千の比丘は、本婆羅門の法を修し、山間に苦行し、形容憔悴せり。父王之を見たまふに、此の千の比丘は、世尊を光飾するに足らざるを以て、即ち諸の貴人の子弟にして、兼て人の少壯なるを選んで、戸より一人を出し、强ひて出家せしむ。其中に善心にして、道を樂しむ有り、樂しまざる有り。此諸の比丘をば、本生の處に近からしむべからず。舍婆提の弟子の道は爾らず。是を以ての故に、佛、多く舍婆提に住し、多く迦毘羅婆に住したまはず。復次に、出家の法、應に親里に近づかざるべし。親屬は心に著すること、火の如く、蛇の如し。居家の婆羅門の子すら、學問の爲の故に、尚生處に在るべからず、何に況んや出家沙門をや。復次に舍婆提城の廣きは大なれ、迦毘羅婆は爾らず。舍婆提城には九億の家あり。是中に若し少時住したまはば多人を度することを得ず。是を以ての故に多く住したまへり。復次に、迦毘羅婆城の中は佛の生處なり。是中の人は、已に久しく習行して、善根熟し、利にして智慧あり。是中には佛少時住して說法し、久しく住することを須ひず。度し已りて去りたまひしなり。舍婆提の人は、或は初めて習行し、或は久しく習行し、或は善根熟し、或は善根未熟、或は

【漚樓頻螺】ウルギルヴー（Uruvilvā）釋尊苦行の靈地。

利根、或は不利根、多く種種の經書を學するが故に、研心にして利ならしめ、種種邪見の網の中に入り、種種の師に事へ、種種の天に屬し、雜行の人多し。是を以ての故に、佛は此に住したまふこと久し。癰を治するの師は、癰の已に熟するを知りて、破りて膿を出だし、藥を與へて去り、癰未だ熟せざれば、是れ則ち久しく住して塗慰するが若し。佛も亦是の如く、若し弟子善根熟すれば、敎化し已りて更に餘處に至り、若し度すべき弟子、善根未熟なれば、則ち久住すべし。佛の世間に出でたまふは、正しく衆生を度し、涅槃の境界、安隱の樂處に著けんと欲するが爲の故なり。是故に多く舍婆提に住し、多く迦毘羅婆に住さず。佛、摩伽陀國尼連禪河の側、漚樓頻螺聚落に於て、阿耨多羅三藐三菩提を得、法身を成就するが故に、多く王舍城に住したまふ。問うて曰はく『已に多く王舍城、舍婆提に住したまふ因緣を知る。此二城に於て、何を以てか、多く王舍城に住したまふ。』答へて曰はく『生地の恩を報ずるを以ての故に、多く舍婆提に住したまふ。一切衆生、皆生地を念ふ。偈に說くが如し。

一切の論議師、自ら所知の法を愛すること
人の生地を念ひ、出家すと雖も猶諍ふが如し

法身地の恩を報ずるを以ての故に、多く王舍城に住したまふ。諸佛は、皆法身を愛するが故に、偈に說くが如し。

過去未來、現在の諸佛は

【竹園】ヹーヌヴナ(Venuvana)
【鞞婆羅跋恕薩】ヴイバーラ、ヴナ(Vaibhāra-Vana)
【多般那求呵】サプタパルナグハー(Saptaparnaguhā)
【因陀世羅求呵】インドラシャイラグハー(Indraśailaguhā)
【薩簸恕魂直迦鉢婆羅】サルピスクンディカ、パルヴ(Sarpiskundika-parva)
【祇洹】ジェータヴナ(Jetavana)
【摩伽羅母堂】ムリガーラ(Mrgāra)鹿子母堂と稱す。
【梨師槃陀那】リシパタナ(Rsipatana)
【毘耶離】ヴイシャーリー(Vaiśālī)
【摩訶槃】マハーヴナ(Mahāvana)

法身を供養し、師を敬し尊重したまふ

法身は生心に勝るが故に、二城の中に、多く王舍城に住したまふ。復次に坐禪の精舍多きを以ての故に、餘處には有ること無し。竹園と、鞞婆羅跋恕薩と多般那求呵と、因陀世羅求呵と、薩簸恕魂直迦鉢婆羅と、耆闍崛と五山の中の如き五精舍あり。竹園は平地に在り、餘國には此多くの精舍無し。舍婆提には一處に祇洹精舍、更に一處有り。摩伽羅母堂、更に第三處無し。波羅奈斯國には一處、鹿林中の精舍を梨師槃陀那と名く。毘耶離には二處、一を摩訶槃と名け、二を獼猴池岸精舍と名く。鳩睒彌には一處、劬師羅園と名く。是の如く、諸國には或は一處の精舍あり、或は空しく樹林あり。王舍城には多くの精舍あり。坐禪の人の宜しき所なるを以て、其處安隱の故に、多く此に住したまふ。復次に、是中に富那羅等の六師あり。自ら言はく「我は是れ一切智人なり、佛と對せん」と。及び長爪梵志、婆蹉、姓は拘迦那大等、皆外道の大論議師、及び長者尸利毱多、提婆達多、阿闍世等、是れ佛の怨家にして、佛法を信ぜず、各嫉妬を懷く。是人輩有るが故に、佛多く此に住したまふ。譬へば、毒草生ずる處には、近邊に必ず良藥有るが如し。又偈に說くが如し、

譬へば師子は、百獸の王なり
小虫の爲に吼ゆれば、衆の爲に笑はる
若し虎、狼、猛獸の中に在りて

【獼猴】マルカタ（Markata）
【鳩睒彌】カウシヤームビー（Kausambi）
【拘翅羅】コーキラ（Kokila）
【富那羅】プールナ（Purna）六師とは釋尊當時婆羅門中に勢力ありたる六派の代表者を指し、富那羅の外に末伽黎瞿俱賖黎子、刪闍那毘羅胝子、阿耆多翅舍欽婆羅、迦羅鳩馱迦旃延、尼乾陀若提子の六人をいふ。
【須陀洹】スロータアパンナ（Srotapanna）三界の見惑を斷盡し、初めて聖者の流類に入りし位。
【波羅利弗多羅】パータリプットラ（Pataliputtra）華子城と譯す。

奮迅して大吼すれば、智人の可とする所となるが如し
諸の論議師は猛虎の如し。此衆中に在りて畏るる所無し
大智慧の人は多く見聞し、此衆中に在りて最も第一なり

是大智多聞の人、皆王舍城に在るを以ての故に、佛、多くは王舍城に住したまふ。復次に、頻婆娑羅王は伽耶祀舍の中に到り、佛及び餘の結髮を除ける千の阿羅漢を迎ふ。是時、佛、王の爲に說法したまふに須陀洹道を得たり。卽ち佛を請じて言はく、「願くば佛、及び僧、我王舍城に就きて、形壽を盡すまで、衣被、飯食、臥具、醫藥を受けたまはば、給所は當に得たまふべし」と。佛、卽ち請を受けたまふ。是故に多く王舍城に住せり。復次に、閻浮提四方の中、東方を數の始と爲す。日の初めて出づるが故なり。南方、西方、北方と次第す。東方の中には、摩伽陀國は最勝なり。摩伽陀國の中には、王舍城、最勝なり。是中に、十二億の家有り。佛涅槃の後、阿闍貰王、人民轉た少きを以ての故に、王舍大城を捨てて、其邊に更に一小城を作る、廣長一由旬波羅利弗多羅と名く。猶尙諸の城中に於て最大なり、何に況んや本の王舍城をや。復次に、是中の人は、多く聰明にして、皆廣學多識なり、餘國には此れ無し。復次に、人の應に得道すべきものあらば、時を待ち、處を待ち、人を待ちて、佛、豫め知りたまふ、釋提桓因及び八萬諸天の應に摩伽陀の石室の中に在りて道を得べきを。是故に佛、多く王舍城に住したまふ。復次に、摩伽陀國は豐樂にして食を乞うて得易し、餘國は如かず。又三の因緣を以ての故なり。一には頻婆娑羅

【樹提伽】ジョーティシュカ(Gotiṣka) 果報と譯す。【阿波羅邏】アパーラーラ(Apalala)

王宮中に常に千の比丘の食を作れと約勅せり。二には樹提伽は、人中に生ずと雖も、常に天の富樂を受く。又多く富貴なる諸の優婆塞あり。三には阿波羅邏龍王、善心にして化を受けて、佛弟子と作り、世の饑饉を除かんが爲に常に好雨を降す。是の故に國豐なり。佛涅槃の後の如きは、長老摩訶迦葉、法を集めんと欲すと思惟す「何の國か豐樂にして食を乞うて得易く、疾に法を集むるを得ん」と。是の如く思ひ已りて念へらく、王舍城中の頻婆娑羅王は、約勅して常に千の比丘の食を設く。頻婆娑羅王死すと雖も、此法は廢えず、是中は食得易く、法を集むべきこと易し。餘所には是の如き常供無し。若し乞食を行ずる時、諸の外道來りて共に論議せんに、若し共に論議せば集法の事廢れん。若し共に論ぜずんば便ち言はん「諸の沙門は我に如かず」と。是の如く思惟して、最上の千の阿羅漢を擇び取り、將に耆闍崛山に就きて、經藏を集結せんとす。是三の因縁を以ての故に、摩伽陀國は食を乞うて得易きを知る。阿含及び毘尼の中に說くが如き、毘耶離國、時に亦飢餓有りと言ふ。「降難陀婆難陀龍王兄弟經」の中に說くが如し。舍婆提國も飢饉し、餘の諸國も亦時時飢餓有り、摩伽陀國中には是事無し。是を以ての故に知んぬ、摩伽陀國は豐樂にして、食を乞うて得易し。復次に、王舍城は山中に在りて閑靜なり。餘國の精舍は平地なるが故に、多くの雜人入出來往し易し、故に閑靜ならず。又、此山中に精舍多し、諸の坐禪の人、諸の聖人は、皆閑靜を樂み、多く山中に住することを得。佛は是れ聖人、坐禪人の主なり。是の如き等種種の因縁の故に、多く王舍城に住せり。問うて曰はく「若し王舍城

【五】王舍城中殊に耆闍崛山中に住せられしを明す。

【無餘涅槃】煩惱障を斷じて灰身滅智したるところに顯はるる涅槃。

に住すこと閑なるべくんば、何を以てか多く竹園に住せずして、多く耆闍崛山に住せる。」答へて曰はく、『我已に聖人坐禪の人は、閑靜の處を樂むと答ふ。』

(五)と問うて曰はく、『更に餘の四山あり、鞞婆羅跋恕等、何を以てか多く住さずして、而も多く耆闍崛山に在せる。』答へて曰はく、『耆闍崛山は五山の中に於て最勝なるが故なり。』云何が勝れたる。耆闍崛山の精舍は、城に近くして山上り難し、是を以ての故に、雜人來らず。城に近きが故に乞食して疲れず、是を以ての故に佛は多く耆闍崛山中に在して餘處に在さず。復次に、長老摩訶迦葉は耆闍崛山に於て三法藏を集め、度すべき衆生を度し竟りて、佛に隨うて涅槃に入らんと欲し、清朝、衣を著け、鉢を持し、王舍城に入りて乞食し、已りて耆闍崛山に上り、諸の弟子に語るらく「我今日、無餘涅槃に入らんとす」と。是の如く語り已りて、房に入り、結加趺坐し、諸の無漏禪定、自ら身に熏ぜり。摩訶迦葉の諸の弟子、王舍城に入り、諸の貴人に語るらく「知るや不や、尊者摩訶迦葉は、今日無餘涅槃に入る」と。諸の貴人は是語を聞いて、皆大いに愁憂して言はく「佛、已に滅度したまひ、摩訶迦葉は佛法を持護せり、今日復無餘涅槃に入らんと欲す」と。諸の貴人、諸の比丘、晡時に皆共に耆闍崛山に集まり、長老摩訶迦葉は晡時に禪定より起ちて、衆中に入りて坐し、無常を讃說せり、「諸の一切の有爲の法は因緣より生ずと說くが故に無常なり。本無今有、已有還無の故に無常、因緣生の故に無常、無常の故に苦、苦の故に無我、無我の故に有智の者は我我所に著すべからず、若し我我所に著せば、無量の憂愁苦惱

を得ん、一切世間の中に心に厭うて涅槃を求むべし」と。是の如く種種に世界の中の苦を説きて、其心を開導し、涅槃に入らしむ。此語を説き竟りて、即ち佛より得る所の僧伽梨を著け、衣鉢を持し、杖を捉り、金翅鳥の如く、現に虚空に上昇し、四種の身儀、坐臥行住、一身に無量の身を現じて、東方世界に滿ち、無量身に於て、還りて一身と爲り、身上より火を出だし、身下より水を出だし、身の上より水を出だし、身の下より火を出だせり。南西北方も亦是の如し。衆心に世を厭ひ、皆歡喜し已りて、耆闍崛山の頂に於て、衣鉢と倶にし是願を作して言はく「我身をして壞せざらしめよ。彌勒成佛せば、我は是れ骨身還りて出で、此因緣を以て衆生を度せん」と。是の如く思惟し已りて、直に耆闍崛山の石頭の中に入ること、軟泥に入るが如し。入り已れば山還合す。後、人壽八萬四千歲、身の長八十尺の時に、彌勒佛出でたまふ。佛身の長百六十尺、佛面二十四尺、圓光十里、是時衆生、彌勒佛の世に出でたまふことを聞き、無量の人、佛に隨うて出家すれば、佛は大衆の中に在りて、初めて説法したまふ。時に九十九億の人阿羅漢道を得、六通具足し、第二の大會に九十六億の人阿羅漢道を得、第三の大會に九十三億の人阿羅漢道を得、是より已後、無數の人を度す。爾時、人民は久しうして後厭怠す。彌勒佛、衆人是の如くなるを見て、足指を以て、耆闍崛山を扣開す。是時、長老摩訶迦葉骨身に僧伽梨を著し、出でて彌勒の足を禮し、虛空に上昇し、現變前の如し。即ち空中に於て身を滅して般涅槃す爾時、彌勒佛の諸の弟子怪んで問うて言はく「此は是れ何人ぞ、人に似て小身なり。法

【阿蘭若】アーランニャ（Araṇya）遠離處閑靜處等と譯す。比丘の住處。

【頭陀】ヅータ、（Dhuta）斗藪、抖擻等と譯す、煩惱の塵垢を拂ひ去つて佛道を求むること。

【阿那含】アナーガーミン（Anāgāmin）欲界修惑の九品を斷ずる聖者。

【斯陀含】サクーダーガーミン（Sakṛdāgāmin）欲界修惑の九品の中、上六品を斷じたる聖者。

衣を著けて、能く變化を作す」と。彌勒佛言はく、「此人は、是れ過去釋迦文尼佛の弟子、摩訶迦葉と名く。阿蘭若に行き、少欲知足にして、頭陀を行じ、比丘中第一、六神通を得たる共解脫の大阿羅漢なり。彼時、人壽百年にして、少く出で多く滅じ、是小身を以て能く是の如き大事を辦ず。汝等は大身利根、云何が是の如きの功德を作さざる」と。是時、諸の弟子皆慚愧し、大厭心を發す。彌勒佛、衆の心に隨うて、爲に種種の法を說く。有人は阿羅漢、阿那含、斯陀含、須陀洹を得、有は辟支佛の善根を種ゑ、有は無生法忍、不退の菩薩を得、有は天人中に生るることを得て、種種の福樂を受く。是を以ての故に知んぬ、是耆闍崛山は福德の吉處にして、諸の聖人の、喜んで住する處なり。佛は、諸聖人の主たり、是故に佛は多く耆闍崛山に住したまふ。復次に、耆闍崛山は、是れ過去未來現在の諸佛の住處なり。「富樓那彌帝隸耶尼子經」の中に說くが如し、佛、富樓那に語げたまはく、「若し三千大千世界をして、劫燒し、若しは更に生ぜしむとも、我は常に此山中に在りて住す。一切衆生は結使纏縛を以て、見佛の功德を作さず、是故に我を見ず」と。復次に、耆闍崛山は淸淨鮮潔の處、三世の佛、及び諸の菩薩受けたまふ。更に是の如きの處無し。是故に多く耆闍崛山に住したまふ。復次に、諸の「摩訶衍經」は多く耆闍崛山中に在りて說けり、餘處の說は少し。何を以ての故に。是中は淨潔にして福德有り、閑靜なるの故に。一切三世諸佛の住處にして、十方諸菩薩も亦是處を讃歎恭敬したまふ。諸の天、龍、夜叉、阿修羅、伽留羅、乾闥婆、甄陀羅、摩睺羅伽等の大力の衆神も、是處を守護し、供養

【六】以下共摩訶比丘僧を釋す。中に比丘並に僧を明す。

【九十六種の外道】六師外道の弟子に各十五の弟子あり、合して九十、之に師の六師を合して

し、恭敬せり、偈に說くが如し。

是耆闍崛山は、諸佛所住の處

聖人の止息したまふ所、一切を蔭覆するが故に

衆苦解脫するを得、唯眞法のみ有りて在す

復次に、是中には十方無量智慧福德力の大菩薩、常に來りて釋迦牟尼佛を見、禮拜恭敬して法を聽くが故に、佛、諸の『摩訶衍經』を說きたまふに、多く耆闍崛山に在したまふ。諸の『摩訶衍經』は般若を大と爲す、云何が耆闍崛山に住さざらん。略して耆闍崛山に住したまふ因緣を說き竟んぬ。

大智度共摩訶比丘僧論第六

【經】摩訶比丘僧と共に

【論】共とは一處、一時、一心、一戒、一見、一道、一解脫に名く。是を名けて、共と爲す。摩訶とは秦に或は大、或は多、或は勝と言ふ。云何が大なる。一切衆中の最上なるが故に、一切の障礙を斷ずるが故に、天王等の大人恭敬するが故に是を名けて大と爲す。云何が多たる。數五千に至るが故に名けて多と爲す。云何が勝なる。一切の九十六種の外道の論議を能く破するが故に勝と名く。云何が比丘と名くる。比丘を乞士と名く、清淨に

九十六種とす。

して活命するが故に名けて乞士と爲す。經中に說くが如し。舍利弗城に入りて乞食し、得已りて壁に向ひ坐して食す。是時、梵志の女あり、淨目と名く。來りて舍利弗を見、舍利弗に問うて言はく「沙門、汝食するや」答へて言はく「食す」淨目言はく「汝、沙門は下口食なりや」答へて曰はく「不なり、姊よ」と。「仰口食なりや」「不なり」「方口食なりや」「不なり」と「四維口食なりや」「不なり」と。淨目言はく「食法に四種あり。我、汝に問ふに、汝不と言ふ。我解せず、汝當に說くべし」と。舍利弗言はく「出家の人にして藥を合せ、穀を種ゑ、樹を植うる等の不淨活命の者有り、是を下口食と名く。出家の人にして、星宿、日月、風雨、雷電、霹靂を觀視する不淨活命の者有り、是を仰口食と名く、出家の人にして、豪勢なるに曲媚して、四方に通使し、言を巧にし、多く求むる不淨活命の者有り、是を方口食と名く。出家の人にして、種種の呪術、卜筮、吉凶を學し、是の如き等の種種の不淨活命の者有り、是を四維口食と名く。姊よ我は是四不淨食の中に墮せず、我は淸淨の乞食の活命を用ふ」と。是時淨目、淸淨法食を說くを聞き、歡喜信解す。舍利弗、因りて爲に法を說き、須陀洹道を得しむ。是の如く淸淨にして乞食し、活命するが故に乞士と名く。復次に、比を破と名け、丘を煩惱と名け、能く煩惱を破るが故に比丘と名く。復次に、出家の人を比丘と名くるは、譬へば胡漢羌虜の各名字あるが如し。復次に、受戒の時、自ら我は某甲比丘、形壽を盡すまで、戒を受持せん」と言ふが故に、比丘と名く。復次に、比を怖と名け、丘を能と名く。能く魔王及び魔人民

を怖れ、當に出家して頭を剃り、染衣を著けて戒を受くべし、是時、魔怖る。何を以ての故に怖るゝ。魔王、言はく「是人は必ず涅槃に入ることを得ん」と。佛說の如くんば、人有り、能く頭を剃り、染衣を著け一心に受戒せば、是人は漸漸に結を斷し、苦を離れ、涅槃に入らん。云何が僧伽と名くる。僧伽は、秦に衆と言ふ。多くの比丘一處に和合する、是を僧伽と名く。譬へば大樹の叢聚する、是を名けて林と爲し、一一の樹を名けて林と爲さず、一一の樹を除いても亦林無きが如し。是の如く一一の比丘を名けて僧と爲さず、一一の比丘を除いても亦僧無し。諸の比丘、和合するが故に僧の名生ず。是僧に四種あり。有羞僧、無羞僧、啞羊僧、實僧なり。云何が有羞僧と名くる。戒を持して破らず、身口清淨にして、能く好醜を別つも、未だ道を得ざる、是を有羞僧と名く。云何が無羞僧と名くる。破戒にして身口不淨なり、惡として作さゞること無き、是を無羞僧と名く。云何が啞羊僧と名くる。戒を破らずと雖も鈍根にして慧無く、好醜を別たず、輕重を知らず、有罪無罪を知らず、若し僧事に有りては二人共に諍ふも斷決すること能はず、默然として無言なること、譬へば白羊の如し。乃ち人の殺すに聲を作す能はざるが如し、是を啞羊僧と名く。云何が實僧と名くる。若は學人、若は無學人にして、四果の中に住し、四向道を行ず、是を實僧と名く。是中の二種の僧は、百一羯磨、說戒、受歲、種種の得作を共にすべく、是中、實の聲聞僧は六千五百あり。菩薩僧に二種あり、有羞僧、實僧なり、是實相を以ての故に、餘を皆僧と名くるを得、是を以ての故に、比丘僧と名く。

【七】以下大數五千分を釋す。

【八】以下阿羅漢の字解。

【九】以下諸漏已盡の解釋。

【一〇】以下復無煩惱の解釋。

【一一】以下心好く解脫を得、慧好く解脫を得の文に就いて明す。

經 大數五千分。

論 (七)云何が大數と名くる。少しく過ぎ、少しく減ずる、是を名けて大數と爲す。云何が分と名くる。多衆邊の一分を取りて是を分と名く。是諸の比丘千萬衆の中、一分の五千人を取る、是を以ての故に五千分と名く。

經 皆是れ阿羅漢。

論 (八)問うて曰はく、『云何が阿羅漢と名くる。』『阿羅をば賊と名け、漢をば破と名け、一切煩惱の賊を破する是を阿羅漢と名く。復次に、阿羅漢は一切の漏盡くす故に、應に一切世間天人の供養を得べし。復次に、阿を不と名け、羅漢を生と名け、後世の中に更に生ぜず、是を阿羅漢と名く。

經 諸漏已に盡く。

論 (九)三界の中の三種の漏已に盡きて、餘す無し、故に漏盡くと言ふなり。

經 復煩惱無し。

論 (一〇)一切結使の流、受扼、縛蓋、見纏等を斷除するが故に、煩惱無し、と名くるなり。

經 心好く解脫を得、慧好く解脫を得。

論 (一一)問うて曰はく、『何を以てか心好く解脫を得、慧好く解脫を得と說く。』答へて曰はく、『外道の欲を離れたるの人は、一處一道に心解脫を得るも、一切障法に於て解脫を得るに非ず。是を以ての故に阿羅漢を、心好く解脫を得、慧好く解脫を得、と名く。復次に、諸

【須跋陀】スバドラ(Subhadra)善賢と譯す、八佛の因緣は下に明す如し

【阿那跋達多】アナヴァタプタ(Anavatapta)無熱、淸涼と譯す、阿耨達池のこと。

の阿羅漢は二道にて心の解脫を得、見諦道と思惟道となり。是を以ての故に、心好く解脫を得、と名く。學人の心も解脫を得と雖も、好く解脫するに非ず、何を以ての故に。殘れる結使あるが故に。復次に、諸の外道等は、助道の法をも滿せず、若は一功德を行じ、若は二功德を行じ、道を求むるも、得ること能はず。人の但布施して、淸淨ならんことを求むるが如く、人の天を祀りて、能く憂衰を脫し、能く常樂國の中に生ることを得ん、と言ふが如し。亦更に有が言はく、「八の淸淨道あり、一には自覺、二には聞、三には讀經、四には提內苦、五には提大衆生苦、六には提天苦、七には得好師、八には大布施なり。但し第八を說いて淸淨道と名くることあり」と。復次に、有外道は、但布施持戒のみ淸淨たりと說き、有は但布施禪定のみ淸淨たりと說き、或は但布施して智慧を求むるを淸淨たりと說く。是の如き等の種種の道は具足せず、若は無功德、若は少功德にして淸淨と說く。是人は、一處に心解脫を得と雖も、好く解脫せり、と名けず、涅槃の道を滿足せざるが故なり。偈に說くが如し。

無功德の人は、生老病死の大海を渡る能はず
少功德の人も亦渡らず、善く道法を行ずるは佛の所說なり

是中に『須跋陀梵志經』を說くべし。須跋陀梵志は、年百二十歲にして五神通を得、阿那跋達多池邊に住す。夜、夢に一切の人眼を失し、裸形にして冥中に立ち、日墮ち、地破れ、大海の水竭き、大風起りて須彌山を吹いて破散すと見、覺め已りて恐怖し、思惟して

言はく、「何を以ての故に爾る、我命盡きんと欲するや、若は、天地の主の、墮ちんと欲するや」と。猶豫して自ら了ずること能はず。此惡夢有るを以ての故に、先世、善知識の天あり、上より來下して、須跋陀に語りて言はく、「汝恐怖すること莫れ、一切智人有り、佛と名く。後、夜半に當に無餘涅槃に入るべし。是故に汝が夢は汝が身の爲にはあらず」と。是時、須跋陀、明日、拘夷那竭國の樹林の中に到り、阿難の經行するを見て、阿難に語りて言はく、「我聞く汝が師は新に涅槃の道を說き、今日夜半、當に滅度を取るべし。我心に疑ひ有り、請ふ佛に見えて、我疑ふ所を決せんと欲す」と。阿難答へて言はく、「世尊の身極れり、汝若し難問せば世尊を勞擾せしめん」と。須跋陀是の如く重ねて請することと三たびに至る。阿難答ふること初の如し。佛遙に之を聞き阿難に勅語したまはく、「須跋陀梵志に、前に來りて自在に難問することを聽せ、是れ吾末後の共談、最後の得道の弟子なり」と。是時、須跋陀は前んで佛に見ゆることを得、世尊を問訊し已りて、一面に於て坐し、是の如く念ずらく、「諸の外道の輩は、恩愛財寶を捨てて出家すれども、皆道を得ず、獨り瞿曇沙門のみ道を得」と。是の如く念じ竟りて、卽ち佛に問うて言はく、「是閻浮提の地の六師の輩は、各自ら稱して我は是れ一切智人なりと言ふ。是語は實なりや不や」と。爾時、世尊偈を以て答へて曰はく、

我年一十九にして、出家し佛道を學す
我出家してより已來、已に五十歲を過ぎ

淨戒禪智慧あり、外道は一分も無く、少分すら尙有ること無し、何に況んや一切智をや。

若し八正道無ければ、是中に第一果第二第三第四果無し。若し八正道有れば、是中に第一道果第二第三第四果有り、須跋陀、是我法の中に八正道有り、是中に第一第三第四の道果有り。餘の外道の法は、皆空しくして道無く、果無く、沙門無く、婆羅門無し。是の如く、我は大衆の中に實に師子吼を作す」と。須跋陀梵志は是法を聞き阿羅漢道を得、思惟して言はく、「我は佛の後に般涅槃すべからず」と。是の如く思惟し竟り、佛前に在りて結跏趺坐し、自ら神力を以て、身中より火を出し、身を燒いて滅度を取る。是を以ての故に、佛の言はく、「無功德、少功德は、是れ助道の法滿たず、皆得度せず。佛說は一切功德を具足するが故に、能く弟子を度す。譬へば少藥師は一種の藥、二種の藥を以て、具足せざるが故に重病を差すこと能はず、大藥師の若きは衆藥を具足し能く諸病を差すが如し」と。問うて曰はく、『若し一切三界の煩惱を離るるが故に、心に解脫を得ば、何を以ての故に佛は、「染愛の心を離れて解脫を得」と言ふ。』答へて曰はく、『愛は能く心を繫閉する大力有り、是を以ての故に愛を說いて餘の煩惱を說かず、愛を斷ずれば餘は則ち斷ず。復次に若し人、「王來る」と言はば必ず將有りて從ふことを知る、染愛も亦是の如し。又巾の一頭を捉ふれば餘は則ち盡く隨ふが如し。愛斷ずれば則ち餘の煩惱皆已に斷ずるを知る。復次に、諸の結使は、皆愛と見とに屬す。愛に屬する煩惱は心を覆

【退法の阿羅漢】逆緣に遇うて修惑を再起し、第四果より第一果まで退墮することのある羅漢をいふ。

【時解脫】必ず時を待ちて定に入り煩惱の繋縛を解脫する羅漢のこと。

【一三】以下心調柔を明す。

ひ見に屬する煩惱は慧を覆ふ、是の如き愛を離るるが故に、愛に屬する結使も亦離れて、心、解脫を得。是の如き無明を離るるが故に、見に屬する結使も亦離れて慧解脫を得るなり。復次に、是五千の阿羅漢は、不退法に應じて無生智を得たり。是を以ての故に心好く解脫を得、慧好く解脫を得と言ふ。不退の故に。退法の阿羅漢は、時解脫を得、劬提迦等の如きは解脫を得と雖も、好く解脫するに非ず、退法を以ての故なり。

經 心調ひ、柔軟なり。

論 〔一三〕若し恭敬、供養し、瞋恚し、罵詈し、撾打する者あるも、心等しうして、異ること無し。若し珍寶瓦石を得るも、之を視ること一等なり。若し刀を持して手足を斫截するあり、栴檀を持して身を塗る者有るも、亦等しうして、異ること無し。復次に、婬欲、瞋恚、憍慢、疑見の根本已に斷ずるが故に、是を、「心調ひ柔軟なり」と謂ふ。復次に、是諸の阿羅漢は、欲染に處して染まず、瞋處に應じて瞋らず、癡處に應じて癡ならず、六情を守護す。是を以ての故に、心調ひ柔軟なり、と名く。偈に說くが如し。

人の六情を守護すること、好馬の善く調ふが如し
是の如きの實智の人は、諸天に敬視せらる

諸の餘の凡人の輩は、六情を守護すること能はず。欲と瞋と慢と癡と疑見とを斷ぜざるが故に、調柔ならざること惡弊の馬の如し。是を以ての故に諸の阿羅漢を「心調ひ柔軟なり」と名く。

【一】摩訶那伽マハーナーガ(Mahanāga)大龍の解釋。

【二】以下所作已辦を明す。

經 摩訶那伽。

論 摩訶を大と言ひ、那を不と名け、伽を罪と名く。阿羅漢は、諸の煩惱を斷ず、是を以ての故に、大不罪と名く。復次に、那伽は或は龍と名け、或は象と名く、是五千の阿羅漢は諸の無數の阿羅漢中最大力なり。是を以ての故に、龍の如く象の如し、と云ふ。水行の中には龍の力大に、陸行の中にては象の力大なればなり。復次に、善く調へる象王の能く大軍を破り、直入して廻らず、刀杖を畏れず、水火を難からず、走らず、退かず、死至れども避けざるが如く、諸の阿羅漢も亦復是の如し。禪定智慧を修するが故に、能く魔軍、及び諸の結使の賊を破る。罵詈撾打すれども惱いず恚らず、老死の水火も畏れず、難からざるなり。復次に大龍王の大海より出でて、大雲を起し、遍く虚空を覆ひ、大電光明を放ちて天地を照し、大洪雨を澍いで萬物を潤澤するが如く、諸の阿羅漢も亦復是の如し。禪定智慧の大海水の中より出でて、慈悲の雲を起して、潤ほし度すべきに及んでは、大光明種種の變化を現し、實法相の雨を說き、弟子の心に善芽を生ぜしむ。

經 所作已に辦ず。

論 問うて曰はく、云何が、所作、と名け、云何が、已に辦ず、と名くるや。答へて曰はく、信、戒、定、捨等の諸の善法を得るが故に、名けて所作と爲す。智慧、精進、解脫等の諸の善法を得るが故に、是を、已に辦ず、と名く。二法具足し、滿するが故に、所作已に辦ず、と名く。復次に諸の煩惱に二種あり。一種は愛に屬し、一種は見に屬す。

【煖法】煖はあたたまり。煩惱の薪を焚く無漏聖道の智火の將に生ぜんとする前相のある位、此位に四諦の理を觀じて十六行相を修す。

【頂法】此位は進退兩位の中間にありて、進んで忍位に入りて退轉することなく、見道に入るべく、退いては煖位に入りて悪趣に墮する恐あり、斯く進退の中間に在る故に、山頂の登り降りの中間なるに喩へて頂位といふ。觀法は煖位と同じきも、此位に入れば斷善根の人となることなし。

愛に屬する煩惱を斷ずるが故に所作と名け、見に屬する煩惱を斷ずるが故に、已に辦ずと名く。復次に色法を善く見るが故に所作と名け、無色法を善く見るが故に已に辦ずと名く、可見、不可見、有對、無對等の二法も亦是の如し。復次に不善と無記法とを斷ずるが故に所作と名け、善法を思惟するが故に已に辦ずと名く。聞思の慧、成就するが故に所作と名け、修慧成就するが故に已に辦ずと名く。種種の三法も亦是の如し。復次に、煖法、頂法、忍法、世間第一法を得るが故に所作と名け、苦法忍等の諸の無漏の善根を得るが故に已に辦ずと名く。見諦道を得るが故に所作と名け、思惟道を得るが故に已に辦ずと名く。學道を成ずることを得るが故に所作と名け、無學道を得るが故に已に辦ずと名く、心の解脫を得るが故に所作と名け、慧の解脫を得るが故に已に辦ずと名く。漏盡くるが故に所作と名け、共解脫を得るが故に已に辦ずと名く。一切の結使除くが故に所作と名け、非時解脫を得るが故に已に辦ずと名く。自ら利益し竟るが故に所作と名け、他人を利益するが故に已に辦ずと名く。是の如く、所作已に辦ずるの義は、自在に說けり。

【經】擔を棄てて能く擔ふ。

【論】（一五）五衆の麁重、常に惱すが故に、名けて擔と爲す。佛の說きたまふ所の如し、何をか擔と謂ふ、五衆是れ擔なり。諸の阿羅漢は此擔已に除く、是を以ての故に、擔を棄つと言ふ。能く擔ふとは是れ佛法の中に二種あり、功德擔と應擔となり。一種は自ら利益し、二種は他を益利す。一切諸の漏盡き、不悔解脫等の諸の功德、是を自ら利益すと名け、

【忍法】此位に四諦の理を信認決定する故に名く。
【世間第一法】此位に起す善根は、有漏世間法の中にて最勝なる法なるが故に名く、
【慧の解脫】無漏の智慧力を以て、見思二惑を斷じ煩惱障を離れたる羅漢をいふ、ただ解脫障を殘し、定に於て自在ならざるもの、
【俱解脫】煩惱障と解脫障とを離れ、慧と定とに於て自在を得たる羅漢をいふ、
【不時解脫】不時解脫ともいひ、時を待たずして自在に入定し、煩惱の繫縛を解する故に名く、
【二九】捨擔、能擔を明す、
【三〇】以下逮得己利を明す、

信、戒、捨、定、慧等の諸の功德、能く他人に與ふ。是を他を利益すと名く。是の諸の阿羅漢は自擔、他擔、能く擔ふが故に能く擔ふと名く。復次に、譬へば大牛の壯力にして能く、重きを載するに服するが如く、此の諸の阿羅漢も亦復是の如し。無漏の根力、覺道を得て能く佛法の大事の擔を擔ふ。是を以ての故に、諸の阿羅漢を能く擔ふと名く

【經】己利を逮得す。

【論】云何が己利と名け、云何が己利に非ずと云ふ。諸の善法を行ずる、是を己利と名け、諸餘の非法、是を己利に非ずと名く。復次に、信、戒、捨、定、慧等の諸の功德は一切の財寶に勝るが故に。今世後世、常に樂を得るが故に。能く甘露に通ずるが故に。是三の因緣を以ての故に己利と名く。信品中の偈に說くが如し。

若し人、信慧を得ば、是寶は最も第一なり
諸餘の世の財利は、是法寶に及ばず

復次に、若し人今世に樂を得、後世に樂を得、及び涅槃を得て、常に樂たる、是を己利と名く。餘は己利に非ざるなり。偈に說くが如し、

世の知れる種種無道の法は、諸の禽獸と等うして異る無し
當に生智要道の法を求め、老死を脫するを得て涅槃に入るべし

復次に、八正道及び沙門果は是を諸の阿羅漢の己利と名く。是五千の阿羅漢は得道及び果、二事俱に得るが故に己利と名く、是を以ての故に己利を逮得すと言ふ。

【一七】以下盡諸有結を明す。

經 諸の有結を盡す。

論 三種の有あり、欲有と色有と無色有となり。云何が欲有なる。欲界繫の業は因緣を取り、後世能く亦是業報を生ず、是を欲有と名く。色有無色有も亦是の如し、是を名けて有と爲す。結を盡すとは、結に九の結あり。愛結、恚結、慢結、癡結、疑結、見結、取結、慳結、嫉結なり。是結使及び有を盡し、是有及び結使を盡す、是故に有、結を盡すと名く。問うて曰はく、『諸の阿羅漢は結使應に永く盡すべし、一切の煩惱を離るることを得たるが故なり、有は盡すべからず。何を以ての故に、阿羅漢の未だ滅度せざる時は、眼根等の五陰、十二入、十八界の諸有成就するが故なり。』答へて曰はく、『妨ぐる所無し。是れ果の中に因を說く、佛語の如し。檀越の食を施す時は五事を與ふ。命、色、力、樂、贍なり。食は必ずしも五事を與ふる能はず。人有り、大いに飮食を得て而も死し、人有り、少許の食を得て活すればなり。食は五事の因となる。是故に佛は食を施して、五事を得と言ふ。偈に說くが如し。

　食を斷てば死すること疑無し、食する者の死は未だ定まらず
　是を以ての故に佛は、食を施せば五事を得と說きたまふ

亦人の百斤の金を食するが如し、金は食すべからざるも、金は是れ食の因なるが故に金を食すと言ふ。佛の言はく『女人を戒垢と爲す』と。女人は戒垢に非ざるも、是れ戒垢の因なるが故に、女人を戒垢と爲すと言ふ。人の高處より墮つるが如し。未だ地に到らざる

【一八】以下正智已に解脫を得を明す

も、此人死すと言ふ。未だ死せずと雖も、必ず死せんことを知るが故に、此人は死すと言ふ。是の如く諸の阿羅漢は結使已に盡くれば、有必ず當に盡くべきことを知るが故に、「有結盡く」と言ふ。

經 正智もて已に解脫を得。

論 (一八)摩犍提梵志の如きは、弟子其尸を舉げて床上に著け、輿きて城市中の多人の處に行き、唱へて言はく、「若し眼に摩犍提の尸を見る者あらば、是人は皆清淨の道を得ん。何に況んや、禮拜供養する者をや」と。多くの人有りて其言を信ず。諸の比丘、是語を聞き佛に白して言さく、「世尊、是事云何」と。佛、偈を說きて言はく、

小人は眼に見て清淨を求む、是の如きの無智に實道無し
諸結、煩惱心中に滿つ、云何が眼に見て淨道を得ん
若し眼に見て清淨を得る有らば、何んが智慧功德の寶を用ひん
智慧功德を乃ち淨と爲す、眼見て淨を求むること是事無し

是を以ての故に正智もて解脫を得と言ふ。問うて曰はく、「諸の阿羅漢は所作已に辦ず、更に進むことを求めず、何を以ての故に、常に佛邊に在りて餘處に衆生を度せざる」。答へて曰はく、「一切十方の衆生、盡く應に佛を供養すべしと雖も、阿羅漢は恩を受くること重きが故に、應に倍供養したてまつるべし。所以は何。此阿羅漢は、佛に從うて無量の功德を成受することを得たればなり」。結使斷えて信心轉多きを知る。故に諸の大德阿羅

【三十三天】六欲天の第二、忉利天のこと、須彌山八頂、閻浮提の上、萬由旬の處にあり帝釋の住處たる喜見城を中心とし、三十二天之を圍繞す、此天を加へて三十三天と名く。

【毘沙門】ヴイシユラヴナ(Vaiśravaṇa)多門と譯す、四王天の一、北州の守護神。

漢は佛邊にして功德の樂味を受け、供養恭敬して佛恩を報ずるが故に、佛邊に在りて住す。諸の阿羅漢の佛を圍遶したてまつるが故に佛德益尊し。梵天の人の梵天王を遶るが如し、三十三天の釋提桓因を遶るが如し、諸の鬼人の毘沙門王を遶るが如し、諸の小王の轉輪聖王を遶るが如し、病人の病癒えて大醫の邊に住するが如し。是の如く諸の阿羅漢は、佛邊に在りて住す。諸の阿羅漢の圍遶供養するが故に佛德は益尊し。問うて曰はく、「若し諸の阿羅漢は所作已に辦じて已利を逮得せば、法を聽くを須ひず。何を以ての故に、般若波羅蜜を說く時、五千の阿羅漢と共なる」。答へて曰はく、『諸の阿羅漢は所作已に辦ずと雖も、佛は甚深の智慧の法を以て試みんと欲す。佛、舍利弗に問ひたまふが如し、「波羅延經」阿耆陀難の中の偈に說くが如し。

種種の諸の學人、及び諸の數法人

是人の所行の法を、願くば爲に實の如く說くべし

是中に云何が學人、云何が數法人なる。爾時、舍利弗默然たり。是の如く三たび問ひたまふに三たび默す。佛義端を示し、舍利弗に告げたまはく「生ありや不や」と。舍利弗答ふらく「世尊、生有り」と。生有る者は滅を爲さんと欲す。有爲は生法の故に學人と名け、智慧を以て無生法を得るが故に數法人と名く。是經は此中に應に廣く說くべし。復次に、若は有漏、若は無漏の、諸の禪定を、未だ得ざるが故に、得んと欲し、已に得たるを堅く深からしめんと欲するが故に、諸の阿羅漢は佛邊に在りて法を聽く。復次に、現前の

【二九】以下唯阿難の學地に在りて等の文に就いて明す

樂の故に、「難陀迦經」中に說くが如し。今世の樂を以ての故に法を聽く。復次に、諸の阿羅漢は佛邊に在りて法を聽き、心に厭足無し。「蜫盧提迦經」中に說くが如し。舍利弗、蜫盧提迦に語らく、「我、法の中に法を聽いて厭くこと無し」と。復次に、佛大師の、自ら一心に、弟子の邊に從うて法を聽くが如し。難じて「阿羅漢は所作已に辦ず、何を以てか法を聽く」と言ふべからず。譬へば飽滿せる人すら好食を得ば、猶ほ更に食するが如し。云何が飢渴せる人に而も食すべからずと言はん。是を以ての故に、諸の阿羅漢は所作已に辦ずと雖も、常に佛邊に在りて法を聽く。復次に、佛、解脫法の中に住し、諸の阿羅漢も亦解脫法の中に住す。住法相應の眷屬、莊嚴せること、「栴檀譬喩經」の中に言ふが如し。栴檀林有り、伊蘭之を圍み、伊蘭の林有り、栴檀之を圍む。栴檀有り、栴檀を以て叢林と爲し、伊蘭有り、伊蘭自ら相圍遶す。佛も諸の阿羅漢も亦復是の如し。佛は善法解脫の中に住し、諸の阿羅漢も亦善法解脫の中に住し、住法相應の眷屬莊嚴せり。佛、大衆を以て圍遶すること、須彌山王を十寶山の圍遶せるが如し、白香象王を白香象の圍遶せるが如し、師子王を師子衆の圍遶せるが如し、佛も亦是の如し。佛は世間無上の福田たり、諸の弟子の與に圍遶せられて共に住す。

【經】唯、阿難の學地に在りて、須陀洹を得たるを除く。

【論】問うて曰はく、「何を以てか、唯阿難を除くと言ふ」。答へて曰はく、「上に讃ずる所は、諸の阿羅漢なり、阿難は其數に在らず。何を以ての故に。學地に在りて、未だ欲を離れ

ざるを以ての故なり。」問うて曰はく、『大德阿難は第三の師、大衆の法將にして、涅槃の種を種うること、已に無量劫なり。常に佛に近づき、法藏を持し、大德にして利根なり。何を以てか今に至るまで、未だ欲を離れずして學人と作る。』答へて曰はく、『大德阿難の本願是の如し。「我、多聞なること衆中に於て最第一ならん」と。亦諸佛の法によらば阿羅漢は所作已に辦ずるを以て、供給供養の人と作すべからず、其佛法の中に於て能く大事を辦ずるを以て、煩惱の賊破れ、佛と共に解脫の床の上に在りて坐するが故なり。復次に、長老阿難、種種の諸經を聽き、持誦し、利觀するが故に、智慧多くして攝心少なし。二つの功德、等しき者は漏盡道を得べし。是を以ての故に長老阿難は、是れ學人にして須陀洹なり。復次に、世尊に供給せんことを貪ぼるが故に、是阿難は佛の爲に供給の人と作り、是の如く念ずらく、「若し我早く漏盡の道を取らば、便ち世尊に遠ざかり、供給の人と作ることを得ず」と。是を以ての故に阿難は能く阿羅漢道を得と雖も、自ら制して取らざるなり。復次に、處と時と人と未だ合せざるが故なり。何等の處にてか能く法を集めん、千の阿羅漢は未だ耆闍崛山に在らず、是を處と爲す。世尊の過ぎ去りたまふの時未だ到らず、長老婆耆子在らず、是を以ての故に、長老阿難は漏を盡さず、要ず世尊過ぎ去りたまふこと在らば、集法の衆、婆耆子をして說法勸諫せしめん。三事合するが故に漏盡道を得たり。復次に、大德阿難は、世法を厭ふこと少くして、餘人の如くならず。是阿難は、世世、王者の種にして、端正無比、福德無量なり。世尊の近親にして、常に侍して佛に從ひ、必ず此念

【三】阿難と名くる因縁に就いて。

【師子頬】シンハハヌ (Sinhahanu) 迦毘羅城の王、釋尊の祖父、四子あり、淨飯王、白飯王、斛飯王、甘露飯王、これなり。

を有す。「我、佛の近侍として法寶藏を知る、漏盡道法は我提らくは失せず」と。是事を以ての故に大いに慇懃ならず。問うて曰はく、「大徳阿難の名は何の因縁を以てする。是れ先世の因縁なりや。是れ父母の字を作るところなりや、是れ因縁に依りて名を立つるや。」答へて曰はく、「是れ先世の因縁と、亦父母の名を作ると、亦因縁に依りて字を立つと。」問うて曰はく、「云何が先世の因縁なる。」答へて曰はく、「釋迦文佛は先世に瓦師と作りたり。光明と名く。爾時、佛あり、釋迦文と名け、弟子を舍利弗、目乾連、阿難と名く。佛、弟子と倶に瓦師の舍に到りて一宿す。爾時、瓦師は草坐、燈明、石蜜漿の三事を布施し、佛及び比丘僧を供養し、便ち願を發して言はく、「我當來、老病死惱五惡の世に於て佛と作り、今佛の如く釋迦文と名け、我佛弟子の名字も亦今佛の弟子の如くせん」と。佛の願を以ての故に阿難と字くることを得たり。復次に、阿難は、世世に願を立て、「我、釋迦文佛の弟子の多聞の衆中に在りて、願くば最第一にして阿難と字けん」と。復次に、阿難は、世世に忍辱にして瞋を除く、是因縁を以ての故に生れて便ち端正なり。父母其端正を以て、見るもの皆歡喜するが故に阿難と字けたり（阿難とは秦に歡喜と言ふ）。是を先世の因縁の字と爲す。云何が父母字を作る。昔、日種王有り、師子頬と名く。其王に四子有り、其第一を淨飯と名け、二を白飯と名け、三を斛飯と名け、四を甘露飯と名く。一女有り、甘露味と名く。淨飯王に二子有り、佛と難陀となり。白飯王に二子有り、跋提と提沙となり。斛飯王に二子有り、提婆達多と、阿難となり。甘露飯王に二子有り、摩訶男と阿泥盧豆となり。甘露味

女に一子有り、施婆羅と名く。是中悉達陀菩薩は、漸漸に長大し、轉輪聖王の位を棄てて夜中に出家し、漚樓頻羅國の中、尼連禪河の邊に往き、六年苦行す。是時、淨飯王は子を愛念するが故に、常に使を遣して問訊し、消息を知らんと欲す「我子、道を得るや不や、若は病なるか、若は死せるか」と。使者來りて、王に白さく「菩薩は唯皮骨筋のみ有りて相連りて、持するのみ。命甚だ微弱なり、若は今日なるか、若は明日にして、復久しからざらん」と。王、其言を聞き、甚だ大に愁念し、憂惱の海に沒す「我子、既に轉輪王と作らず、又、佛と作ることを得ず、一に何んが甚苦し、所得無くして死する」と。是の如く憂惱、荒迷、憤懣せり。是時、菩薩は苦行の處を棄て、百味の乳糜を食して身體充滿し、尼連禪の水中に於て洗浴し已りて、菩提樹下に至り金剛座に坐し、自ら誓うて言はく「要ず此結加趺坐を破らずして、一切智を成せん。一切智を得ずんば終に起たず」と。是時、魔王、十八億の衆を將ゐて菩薩の所に到り、敢て菩薩と其得失を決す。菩薩、智慧力の故に大いに魔軍を破る。魔は如かずして退き、自ら念ずらく「菩薩には勝ち回し、當に其父を惱まさん」と。淨飯王の所に至り詭りて言はく「汝が子は今日の後夜、已に了れり」と。王は此語を聞き、驚き怖れて、床より墮ち、熱沙の中の魚の如し。王、時に悲しみ哭して偈を說いて言はく、

阿夷陀は虛言せり、瑞應も亦驗無し
利を得るの吉名も、一切獲る所無し

【曼陀羅華】マンダーラヴ(Mandārava)適意華、白華等と譯す、花の名

是時、菩提樹の神は大いに歡喜し、天の曼陀羅華を持ち、淨飯王の所に至り、偈を說いて言はく、

汝が子は已に道を得て、魔衆は已に破散し
光明は日の出づるが如く、普く十方の土を照せり

王言はく「前に天有り、來りて言はく、汝が子は已に了れりと。汝は今來りて、魔を壞りて、道を得たりと言ふ。二語相違せり、誰か信ずべき者ぞ」と。樹神又言はく「實に妄語にあらず、前の來れる天は謂りて、已に了れりと言ふ。是れ魔、嫉を懷くが故に、來りて相惱ます。今日、諸天龍神は華香もて供養し、空中に繒を懸け、汝が子は身より光明を出し、遍く天地を照す。」王、其言を聞いて、一切苦惱の心に於て解脫を得たり。王、言はく「我子は轉輪聖王を捨つと雖も、今法轉輪王を得たり。定んで大利を得て失ふ所無けん」と、王、心大いに歡喜す。是時、斛飯王の家より使來りて、淨飯王に白して言はく「貴弟は男を生めり」と。王心に歡喜して言はく「今日は大吉にして、是れ歡喜の日なり」と。來使に語りて言はく「是兒を當に字けて阿難と爲すべし」と。是爲に父母、字を作れり。如何が因緣に依りて名を立つる。阿難は端正、淸淨なること好く明かなる鏡の如し。老少、好醜、容貌、顏狀、皆身中より現じ、其身は明淨なり。女人之を見れば欲心即ち動く、是故に佛は、阿難の肩衣を著覆することを聽したまふ。是く阿難は、能く他人の見る者の心眼をして歡喜せしむるが故に阿難と名く。是に於て論を造る者讚じて言はく、

【一】以下復五百の比丘比丘尼等の文に就いて明す。

面は淨かなる滿月の如く、眼は青蓮の華の若し、佛法の大海水は、阿難の心に流れ入りて、能く人の心眼もて、見る者をして大いに歡喜せしむ。諸の來りて佛を見んことを求むれば、通現して宜しきを失はず。是の如く、阿難は能く阿羅漢道を得と雖も、佛を供養するを以ての故に、自ら漏を盡さず。此大功德を以ての故に、無學に非ずと雖も、無學の數の中に在り、未だ欲を離れずと雖も、欲を離れし數の中に在り。是を以ての故に、共數五千の中、實には未だ是れ阿羅漢に在らざるを以ての故に、唯阿難を除くと言ふ。

大智度初品中四衆の義釋論第七

【經】復、五百の比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷有り、皆聖諦を見たるものなり。

【論】問うて曰はく、「何を以てか、諸の比丘は五千にして、餘の三衆は各五百なる。」答へて曰はく、「女人の多くは智慧短しく、煩惱の垢重く、但喜樂愛行を求むること多きが故なり。少しく能く結使を斷じ、解脱して證することを得たり。佛の說きたまふが如くんば、是因緣起の法は、第一甚深にして得難く、一切の煩惱を盡して欲を離れ、涅槃を得ること倍す復見難し、是を以ての故に、女人は多く得ること能はず、比丘に如かざるなり。優

婆塞、優婆夷は居家に有るが故に、心不淨に、漏を盡して正しく四聖諦を得、學人と作るべきこと能はず。偈に說くが如し、

孔雀は色あり身を嚴ると雖も、鴻鶴の能く遠く飛ぶに如かず
白衣は富貴にして力ありと雖も、出家の功德の勝れたるに如かず

是を以ての故に、諸の比丘尼は、出家して世業を棄つと雖も智慧短し、是故に五百の阿羅漢の比丘尼あり。白衣の二衆は居家にして、事遽きが故に、道を得る者少し、亦各く五百あり。問うて曰はく、『五千の阿羅漢の如きは皆讃ず、三衆、何を以てか讃ぜざる。』答へて曰はく、『大衆已に讃ずれば、則ち餘も亦讃ずることを知る。復次に、若し別して讃ぜば、外道の輩は當に呵して、「何を以てか比丘尼を讃ずる」と言ひ、誹謗を生ずるが故なり。若し白衣を讃ぜば、當に「供養を爲すが故に」と言ふべし。是を以ての故に讃せず。』問うて曰はく、諸餘の『摩訶衍經』は佛と大比丘衆と倶なり。或は八千人、或は六萬十萬人と倶なり。是『摩訶般若波羅蜜經』は諸經の中の第一なり、大なること囑累品の中に說くが如し。餘經は悉く忘失するも其罪は少少なり、般若波羅蜜は一句を失するも其罪は大多なり。是を以ての故に般若波羅蜜經は第一に大なるを知る。是第一なる經の中には當に第一の大會あるべし。何を以ての故に、聲聞衆の數は少なく、止、比丘は五千、比丘尼、優婆塞、優婆夷は各く五百有る。答へて曰はく、『是大經は甚深にして解し難きを以てなり。聲聞衆少なきことは、譬へば王の寶貨を有し、凡人に示さずして、大人の信愛する者

にのみ示すが如く、王の議を謀る時、諸の大臣信受する智人と共に論じ、諸の餘の小臣は則ち入ることを得ざるが如し。復次に、是六千五百人は盡く道を得、盡く甚深の般若波羅蜜を解せずと雖も、皆能く信じて無漏の四信を得たるが故なり。餘經の聲聞衆は大に多しと雖も、雜にして盡く道を得ず。復次に、是中に先づ千萬の阿羅漢を撰じ、中に最も勝れたる五千人を擇び取れり、比丘尼、優婆塞、優婆夷も亦爾なり。勝れたる者は得難きが故に多からず。

大智度論卷第三

【一】以下復菩薩摩訶薩ありの文に就いて明す。

【無生法忍】不生不滅の眞如法性を忍知して決定安住する位。

大智度初品中菩薩釋論第八　卷第四

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏法師鳩摩羅什詔を奉じて譯す

経 復菩薩摩訶薩あり。

論 問うて曰はく、「若し上數に從はば、應に菩薩を先にして、次第に比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷となるべし。菩薩は佛に次ぐが故なり。若し下數に從はば、應に優婆夷を先にして、次第に優婆塞、比丘尼、比丘、菩薩とすべし。今何を以てか先づ比丘を說き、次に三衆、後に菩薩を說く。」答へて曰はく、「菩薩は應に佛に次ぐべしと雖も、諸の煩惱未だ盡きざるを以ての故に、先づ阿羅漢を說く。諸の阿羅漢は智慧少なしと雖も、而も已に成熟せり。諸の菩薩は智慧多しと雖も、煩惱未だ盡きず、是故に先づ阿羅漢を說く。佛法に二種有り、一には祕密、二には現示なり。現示の中の佛、辟支佛、阿羅漢は皆是れ福田なり。其煩惱を盡して、餘すこと無きを以ての故なり。祕密の中に說く、諸の菩薩は無生法忍を得、煩惱已に斷じ、六神通を具し、衆生を利益す。現示の法を以ての故に前に阿羅漢を說き、後に菩薩を說く。復次に、菩薩は方便力を以て現に五道に入り、五欲を受け、衆生を引導す。若し阿羅漢の上に在かば、諸天も世人も當に疑怪を生ずべし、是故に後に說けり。」

問うて曰はく、「阿羅漢の後に在くことは爾るべし。何を以てか乃ち優婆塞優婆夷の後に在くや。」答へて曰はく、「四衆は猶未だ盡きずと雖も、盡すこと久しからざるに在るが故に、通じて聲聞衆と名く。若し四衆の中間に於て菩薩を說かば、則ち便ならず、比丘尼の如きは無量の律儀を得るが故に、應に比丘の後に次ぎ、沙彌の前に在くべし。佛は儀法便ならざるを以ての故に沙彌の後に在けり。此の諸の菩薩も亦是の如し、學人三衆の上に在るべしと雖も、便ならざるを以ての故に後に在いて說くなり。復次に、有人の言はく、「菩薩の功德智慧は、阿羅漢辟支佛に超殊す。是故に別說す」と。問うて曰はく、「聲聞經の中には但四衆のみを說く。此中、何を以てか別に菩薩衆を說くや。」答へて曰はく、「二種の道有り、一には聲聞道、二には菩提薩埵道なり。比丘比丘尼、優婆塞優婆夷の四衆は、是れ聲聞道なり。菩薩摩訶薩は、菩提薩埵道なり。是を以ての故に聲聞法の中の經の初には、佛某處に在り、某處に住して、爾所の菩薩と倶なりとは無く、但佛某處某處に住し、爾所の比丘と倶なりと言ふ。佛、波羅奈に在して、五比丘と倶なりき。佛、伽耶國の中に在して、千の比丘と倶なりき、佛、舍婆提に在して五百の比丘と倶なりきと說くが如し。是の如く種種の經の初には、菩薩若干の人と倶なりと說かず。」問うて曰はく、「諸の菩薩に二種有り、若は出家、若は在家なり。在家の菩薩は、總じて說けば、優婆塞優婆夷の中に在り、出家の菩薩は、總じて比丘比丘尼の中に在り。今、何を以ての故に、別に說くや。」答へて曰はく、「總じて四衆の中に在りと雖も、應當に別に說くべし。何を以ての故に、是れ菩薩

にして必ず四衆の中に堕すと、四衆にして菩薩の中に堕せざると有ればなり。何者か是なる。聲聞の人と辟支佛の人と有り、求めて天に生ずる人有り、求めて自活を樂ふ人有り。此四種の人は菩薩の中に堕せず。何を以ての故に、是人は發心して、「我は當に佛と作るべし」と言はざるが故に。復次に、菩薩は無生法忍を得るが故に、一切の名字生死の相を斷じて三界を出で、衆生の數の中に堕せず。何を以ての故に、聲聞の人は阿羅漢道を得、滅度し已りて、尙衆生の數の中に堕せず、何に況んや菩薩をや。波羅延優波尸難の中の偈に說くが如し。

　已に滅せば處として更に出づる無きや不や、若し已に永く滅せば出でざるや不や
　旣に涅槃に入らば常住なりや不や。唯願くば大智其實を說きたまへ

佛、答へたまはく、

　滅者は即ち是れ量るべからず、因緣及び名相を破壞し
　一切言語の道已に過ぎ、一時に都て盡すこと火の滅するが如し

阿羅漢の如きは、一切の名字すら尙斷ぜり、何に況んや菩薩は能く一切諸法を破し、實相を知り、法身を得て、而も斷ぜざらんや。是を以ての故に摩訶衍には四衆の中、別に菩薩を說く。問うて曰はく、「何を以ての故に大乘經の初には、菩薩衆、聲聞衆兩ながら說き、聲聞經の初には、獨り比丘衆を說いて菩薩衆を說かざる。」答へて曰はく、「二乘の義を辯ぜんと欲するが故なり。佛乘と及び聲聞乘のうち、聲聞乘は狹小にして、佛乘は

【衆生の空】常一主宰なる我の空無なること。
【法の空】萬有諸法は其體空無なりといふこと。

廣大なり、聲聞乘は自らを利し、自らの爲にし、佛乘は一切を益す。復次に聲聞乘は多く衆生の空を說き、佛乘は衆生の空と法の空とを說く。是の如き等の種種の分別あり、是二道を說くが故に、摩訶衍經には、聲聞乘と菩薩乘と倂ながら說く、摩訶衍を讚ずる偈の中に說くが如し。

此大乘を得たる人は、能く一切の樂を與へ
利益するに實法を以てし、無上道を得しむ
此大乘を得たる人は、一切を慈悲するが故に
頭目を以て布施し、之を捨つること草木の如し
此大乘を得たる人は、淸淨の戒を護持し
犛牛の尾を愛して、身の壽命を惜まざるが如くす
此大乘を得たる人は、能く無上忍を得
若し身を割截すること有るも、之を視ること草を斷ずるが如し
此大乘を得たる人は、精進して厭き惓むこと無く
力め行じて休息せざること、大海を抒む者の如くす
此大乘を得たる人は、廣く無量の定を修し
神通聖道の力、淸淨にして自在を得
此大乘を得たる人は、諸の法相を分別し

實智慧を壞すること無く、是中に已に
不可思議の智と、無量の悲心の力とを具得し
二法の中に入らずして、等しく一切の法を觀ず
驢馬も駝象も乘すること、同じと雖も相匹ばず
菩薩と及び聲聞との、大小も亦是の如し
大慈悲を軸と爲し、智慧を兩輪と爲し
精進を駿馬と爲し、戒定を以て衢と爲し
忍辱心を鎧と爲し、總持を轡勒と爲し
摩訶衍の人は乘じて、能く一切を度す

問うて曰はく、「聲聞經の初に但比丘衆のみを說くが如く、摩訶衍經の初に、何を以てか但菩薩衆のみを說かざる」。答へて曰はく、「摩訶衍は廣大なり。諸乘、諸道、皆摩訶衍に入る。聲聞乘は陜小にして摩訶衍を受けず。譬へば恆河の大海を受けざるが如し、其小なるを以ての故なり。大海は能く衆流を受く、其廣大なるを以ての故なり。摩訶衍の法も亦是の如し。偈に說くが如し。

摩訶衍は海の如く、小乘は牛跡の水なり
小なるが故に大を受けず、其喩も亦是の如し

是を以ての故に小乘の衆は菩薩を受けず。

【二】菩提薩埵の意義に就いて。

（二）問うて曰はく、『何等をか菩提と名け、何等をか薩埵と名くる。』答へて曰はく、『菩提を諸佛の道と名け、薩埵を或は衆生、或は大心と名く。是人は其心に、諸の佛道の功德を盡く得んと欲す。斷ずべからず、破すべからざること、金剛山の如し。是を大心と名く。偈に說くが如し。

一切諸佛の法、智慧及び戒定は
能く一切を利益す、是を名けて菩提と爲す
其心は動かすべからず、能く成道の事を忍び
斷ぜず亦破らず、是心を薩埵と名く

復次に、好法を稱讚するを名けて薩と爲し、好法の體相を名けて埵と爲す。菩薩の心は自らを利し他を利するが故に、一切衆生を度するが故に、一切の法の實性を知るが故に、阿耨多羅三藐三菩提の道を行ずるが故に、一切賢聖の爲に稱讚せらるるが故に、是を菩提薩埵と名く。所以は何ん、一切諸法の中において佛法は第一なり。是人は是法を取らんと欲するが故に、賢聖の爲に讚歎せらる。復次に、是の如きの人は、一切衆生の爲に、生老死を脫するが故に佛道を索む、是を菩提薩埵と名く。復次に、三種の道は、皆是れ菩提なり。一には佛道、二には聲聞道、三には辟支佛道なり。辟支佛道、聲聞道も菩提を得と雖も、而も稱して菩提と爲さず。佛の功德の中の菩提を稱して菩提と爲す、是を菩提薩埵と名く。問うて曰はく、『何に稱りて菩提薩埵と名くる。』答へて曰はく、『大誓願あり、心動かすべ

【金剛三昧】金剛の能く一切に無礙なるが如く、能く一切諸法に通達する三昧をいふ。
【三】菩薩の鞞跋致と阿鞞跋致とに就いて明す。
【鞞跋致】ヴイヴァルティ(Vaivarti)退轉と譯す。
【阿鞞跋致】アヴァイヴァルティ(Avaivarti)不退轉と譯す

からず、精進して退かず、是の事を以て、名けて菩提薩埵と爲す。復次に、有人の言はく、「初發心に願を作さく、我當に佛と作りて一切衆生を度すべしと。是より已來、菩提薩埵と名く」と。偈に說くが如し。

若し初發心の時、佛と作るべしと誓願せば
已に諸の世間を過ぎ、應に世の供養を受くべし

初發心より第九無礙に到り、金剛三昧の中に入る。是中間を名けて、菩提薩埵と爲す。(三)是菩提薩埵に兩種あり。鞞跋致と阿鞞跋致となり、退法不退法の阿羅漢の如し。阿鞞跋致菩提薩埵は是を實の菩薩と名く。是實の菩薩を以ての故に、諸の餘の退轉の菩薩も皆菩薩と名く。譬へば四道を得る人は是を實の僧と名け、實僧を以ての故に、諸の未だ道を得ざる者も、皆僧と名くることを得るが如し。問うて曰はく、「云何が是菩薩の鞞跋致と阿鞞跋致とを知る。」答へて曰はく、『般若波羅蜜阿鞞跋致品の中に、佛自ら阿鞞跋致の相を說きたまはく、「是の如きの相は是れ退轉なり、是の如きの相は是れ不退轉なり」と。復次に、若し菩薩にして一法を好修し、好念することを得ば、是を阿鞞跋致菩薩と名く。何等か一法なる。常に一心に諸の善法を集む。諸佛は一心に諸の善法を集むるが故に、阿耨多羅三藐三菩提を得と說くが如し。復次に、菩薩有りて一法を得ば、是れ阿鞞跋致の相なり。何等か一法なる、正直に精進するなり、佛の阿難に問ひたまふが如し。「阿難、汝は精進を說くこと、是世尊の如くせよ。阿難、汝は精進を讚すること、是善逝の如くせよ。阿難、

【般舟三昧】プラティユトパンナ、サマーディ(Pratyutpanna-Samadhi) 般舟とは佛立と翻ず、此三昧を行ずれば諸佛現前するが故なり、又常行道と譯す、此三昧を行ずるには七日或は九十日を期して間斷なく修行すればなり。天台にはこれを常行三昧といふ。

【四】三十二相の業を種うる時、處等に就いて明す。中に阿僧祇を釋す

常に行じ、常に修し、常に念じ、精進し、乃至人をして阿耨多羅三藐三菩提を得しめよ」と、經に廣く說くが如し。復次に、若し二法を得ば、是時、是れ阿鞞跋致の相なり。何等か二法なる、一切の法は實に空なりと知り、亦一切の衆生を捨てざらんことを念ず。是の如きの人を名けて阿鞞跋致の菩薩と爲す。復次に、三法を得。一には若し一心に願を作して佛道を成ぜんと欲せば、金剛の動かすべからず、破すべからざるが如し。二には一切衆生に於て、悲心骨に徹し髓に入る。三には般舟三昧を得て、能く現在の諸佛を見たてまつる。是時を阿鞞跋致と名く。復次に、阿毘曇の中に、迦旃延尼子の弟子の輩は言はく、「何をか菩薩と名く。自ら覺り、復能く他を覺らしむ、是を菩薩と名け、必ず當に佛と作るべき、是を菩薩と名く。菩提とは、漏を盡せる人の智慧に名く。是人は智慧より生じて、智慧の人に護られ、智慧の人に養はるるが故に、是を菩薩と名く」と。又言はく、「阿鞞跋致の心を發す、是より已後を菩薩と名く」と。又言はく、「若し五法を離れ、五法を得ば是を菩薩と名く。何をか五法と謂ふ。三惡道を離れて、常に天上人間に生じ、貧窮下賤を離れて常に尊貴を得、非男の法を離れて、常に男子の身を得、諸の形殘缺陋を離れて、諸根具足し、憙と忘とを離捨し、常に宿命を憶うて、是宿命の智慧を得、常に一切の惡法を離れ、惡人を遠離し、常に道法を求め、弟子を攝取す。是の如きを名けて菩薩と爲す」と。又言はく、「三十二相の業を種ゑてより已來、是を菩薩と名く」と。

(四)問うて曰はく、何れの時か三十二相の業因緣を種ゑたる。答へて曰はく、三阿僧祇劫

【那由他】ナユタ(Nayuta)此方の億にあたる。

【刺那尸棄佛】ラトナシキン(Ratnasikhin)釋迦の修行中初阿僧祇の滿位に出づる佛の名。
【然燈佛】ディーパムカラ(Dipamkara)釋迦の修行中第二阿僧祇劫の

を過ぎて、然る後、三十二相の業因緣を種ゑたり」と。問うて曰はく、「幾時か阿僧祇と名くる」と。答へて曰はく、『天人の中には能く算數の法を知る者も、極數は復知ること能はず、是を一阿僧祇と名く。一と一とを二と名け、二と二とを四と名け、三三を九と名け、十十を百と名け、十百を千と名け、十千を萬と名け、千萬を億と名け、千萬億を那由他と名け、千萬那由他を頻婆と名け、千萬の頻婆を迦他と名け、迦他を過ぐるを阿僧祇と名く。是の如く數へて一阿僧祇なり。若し行ずること一阿僧祇に滿つれば、第二の阿僧祇を行じ、第二の阿僧祇に滿つれば、第三の阿僧祇を行ず。譬へば算數の法は、一を算へ乃至百を算へ、百を算へ竟れば、還りて一に至るが如し。是の如く菩薩は一阿僧祇を過ぎて、還りて一より起る。初の阿僧祇の中の心は自ら我當に佛と作るべきか、佛と作らざるかを知らず。二阿僧祇の中の心は能く我必ず佛と作ることを知ると雖も、口づから「我當に佛と作るべし」と稱せず。三阿僧祇の中の心は、了了に自ら佛と作ることを得と知り、口に自ら發言して畏れ難かる所無く、「我は來世に於て、當に佛と作るべし」と。釋迦文佛は、過去の釋迦文佛より、刺那尸棄佛に到るまでを、初の阿僧祇と爲す。是中に菩薩は、永く女人の身を離る。刺那尸棄佛より、然燈佛に至るまでを、二阿僧祇と爲す。是中に菩薩は七枚の青蓮華を然燈佛に供養し、鹿皮の衣を敷き、髮を布き、泥を掩ふ。是時、然燈佛は便ち其に記を授けたまはく、「汝は當に來世に佛と作りて、釋迦牟尼と名くべし」と。然燈佛より毘婆尸佛に至るまでを第三阿僧祇と爲す。若し三阿僧祇劫を過ぐれば、是時、菩薩は三十二相の業

滿時に出世する佛

【毘婆尸佛】ギパシー(Vipaśyī)勝觀と譯す、釋尊の修行中、第三阿僧祇劫の滿時に出世する佛。

因縁を種う。」問うて曰はく、「三十二相の業は何の處に種うべき。」答へて曰はく、『欲界の中にして、色無色界に非ず。欲界の五道に於ては人道の中に在りて種ゑ、四天下に於ては閻浮提の中に種ゑ、男子の身に於て種ゑ、女人に非ず。佛の出世の時に種ゑ、佛の出世したまはざれば種うる緣を得ず。佛身は種うる緣となるを得、餘は種うることを得ず。』問うて曰はく、『是三十二相の業は、身業、口業、意業に於ては、何の業種なる。』答へて曰はく、『意業の種にして、身口業に非ず。何を以ての故に。是意業は利なるが故に。』問うて曰はく、『意業に六識有り、是三十二相の業は、是れ意識の種と爲すや、是れ五識の種なるや。』答へて曰はく、『是は意識にして、五識に非ず。何を以ての故に。五識は分別すること能はず、是を以ての故に意識の種なり。』問うて曰はく、『何の相より初めて種うる。』答へて曰はく、『有人言はく、「足の安立の相より先づ種う。何を以ての故に。先づ安立して、然る後に能く餘の相を種うればなり」と。有人言はく、「紺青の眼の相より、初めて種う、此眼の相は大いに衆生を慈み觀るを得」と。此兩語に是語有りと雖も、必ずしも爾らざるなり。若し相の因緣和合する時、便ち是れ初めて種うるなり。』問うて曰はく、『一思の種と爲すや、多思の種と爲すや。』答へて曰はく、『三十二思の種なり。三十二相は一一の思に一一の相を種ゑ、一一の相に百の福德莊嚴せり。』問うて曰はく、『幾許を一の福德と名くる。』答へて曰はく、『有人言はく、「業報有り、轉輪聖王の四天下に於て、福樂を受け自在を得、是を一福德と名け、是の如きの百福を一相と成す」と。復有人言はく、「釋提桓因と作り

【弗沙】(Puṣya) プシヤ

て、二天の中に於て、自在を得、是を一福徳と名く」と。復有人言はく、「他化自在天王と作りて、欲界の中に於て、自在を得、是を一福と名く」と。復有人言はく、「補處の菩薩を除いて、餘の一切衆生の得る所の福報、是を一福と名く」と。復有人言はく、「天地劫盡の一切衆生の福徳を共にし、故らに、三千大千世界の報を立つ。是を一福と名く」と。復有人言はく、「是福は量るべからず、譬喩を以て知るべからず。三千大千世界の一切衆生の皆盲にして無目なる、一人有りて能く治して差えしむるが如し、是を一福と爲す。一切の人の皆毒藥を被るに、一人有り、能く治して差えしめ、一切の人の應に死すべきに、一人有り能く之を救うて脱せしめ、一切の人の戒を破り正見を破る、能く教へて淨戒、正見を得しむ、是の如き等を一福と爲す」と。復、有人言はく、「是福は量るべからず、譬喩すべからず。是菩薩は第三阿僧祇の中に入り、心思の大行もて是三十二相の因緣を種う、是を以ての故に是福は能く量ること無し。唯佛のみ能く知りたまふ」と。問うて曰はく、『菩薩は幾時にして能く三十二相を種うる。』答へて曰はく、「極て遲きは百劫、極て疾きは九十一劫なり。釋迦牟尼菩薩は九十一大劫、行じて三十二相を辦じたまふ。經の中に言ふが如し。過去久遠に佛有り、弗沙と名けたてまつる。時に二菩薩あり、一を釋迦牟尼と名け、一を彌勒と名く。弗沙佛は、釋迦牟尼菩薩の心、純淑せるか、未だしきかを觀んと欲して、即ち之を觀見したまふに、其心、未だ純淑せず。而も諸の弟子の心は皆純淑せるを知りたまふ。又彌勒菩薩は心已に純淑せるも、而も弟子は未だ純淑せず。是時

弗沙佛、是の如く思惟したまはく、「一人の心は速かに化すべきこと易く、衆人の心は疾に治すべきこと難し」と。是の如く思惟し竟りて、弗沙佛は釋迦牟尼菩薩をして、疾かに成佛することを得しめんと欲し、雪山の上に上り、寶窟の中に於て、火定に入りたまへり。是時、釋迦牟尼菩薩は外道の仙人と作りて山に上り、藥を採りたまふ。弗沙佛の寶窟の中に坐し、火定に入り、光明を放ちたまふを見、見已りて、心に歡喜信敬し、一脚を翹だてて立ち、叉手して佛に向ひたてまつりて、一心に觀じ、目未だ曾て眴かざること七日七夜にして、一偈を以て佛を讃ずらく、

天上にも天下にも佛に如くもの無し、十方世界にも亦比無し
我盡く世界の有ゆるものを見るに、一切佛に如く者有ること無し

七日七夜、諦に世尊を觀、目未だ曾て眴かず、九劫を超越して九十一劫の中に於て、阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。問うて曰はく、「若し釋迦牟尼菩薩、聰明多識にして、能く種種の好偈を作りたまはば、何を以ての故に、七日七夜一偈を以て佛を讃じたまひし」答へて曰はく、「釋迦牟尼菩薩、其心思を貴び、多く言ふことを貴びたまはず。若し更に餘の偈を以て佛を讃ぜば、心或は散亂せん。是故に七日七夜一偈を以て佛を讃じたまへり。」問うて曰はく、「釋迦牟尼菩薩、何を以てか心未だ純淑せざるに、而も弟子は純淑し、彌勒菩薩は自らの心純淑すれども、而も弟子は未だ純淑せざる」答へて曰はく、「釋迦牟尼菩薩は衆生を饒益する心多く、自ら身の爲にすること少きが故なり。彌勒菩薩は多

【迦葉佛】カーシヤパ(Kāsyapa)
【檀波羅蜜】ダーナパーラミター(Dānapāramitā)布施度と譯す。
【尸羅波羅蜜】シーラパーラミター(Śīlapāramitā)戒度と譯す。
【羼提波羅蜜】クシャーンティパーラミター(Kṣāntipāramitā)忍度と譯す。
【毘梨耶波羅蜜】ヸールヤパーラミター(Vīryapāramitā)精進度と譯す。
【禪波羅蜜】ドヤーナパーラミター(Dhyānapāramitā)定度と譯す。
【般若波羅蜜】プラジュニヤーパーラミター(Prajñāpāramitā)智度と譯す。
【五】檀波羅蜜を滿ずるに就いて。
【尸毘】シヸ(Śivi)
【毘首羯磨】ヸシ

く己が身の爲にし、少しく衆生の爲にするが故なり。鞞婆尸佛より迦葉佛に至る、其中間、九十一大劫に於て、三十二相の業因縁を集め竟りて、六波羅蜜を滿せり、何等か六なる。檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜なり。」

問うて曰はく、「云何が檀波羅蜜を滿ずる。」答へて曰はく、「一切を能く施して遮礙する所無く、乃至身を以て施す時も、心に惜む所無し。譬へば尸毘王の身を以て鴿に施すが如し。釋迦牟尼佛は、本身王と作り、尸毘と名く。是王は救護陀羅尼に歸命することを得たり。大いに精進にして慈悲心有り、一切衆生を視ること、母の子を愛するが如し。時に世に佛無し。釋提桓因の命盡きて墮ちんと欲す、自ら念じて言はく、『何の處にか佛一切智人有る』と。處處に問難すれども疑を斷ずること能はず、盡く佛に非ずと知りて天上に還り愁憂して坐す。巧なる變化師、毘首羯磨天問うて曰はく、『天主、何を以てか、愁憂有る』と。答へて曰はく、『我一切智人を求むるに得べからざるなり、是を以ての故に愁憂す』と。毘首羯磨言はく、『大菩薩有り、布施、持戒、禪定、智慧、具足せり。久しからずして當に佛と作るべし』と。帝釋、偈を以て答へて曰はく、

菩薩の大心を發すと、魚の子と菴樹の華と
三事の因の時は多けれども、果を成ずる時は甚だ少し

毘首羯磨答へて曰はく、『是優尸那種の尸毘王は持戒、精進、大慈、大悲、禪定、智慧有り、久しからずして佛と作りたまふべし』と。釋提桓因、毘首羯磨に語るらく、『當に往

ニヅカルマン(Visvakarman)帝釋の臣にして種々の工巧物を化作し又建築を司る天神。種々工業と譯す。

きて之を試み、菩薩の相有りや不やを知るべし。汝は鴿と作れ、我は鷹と作らん。汝は便ち佯り怖れて、王の腋の下に入れ、我は當に汝を逐ふべし」と。毘首羯磨言はく、「此大菩薩は云何が此事を以て惱まん」と。釋提桓因、偈を說いて言はく、

我も亦惡心に非ず、眞金の應に試むべきが如く
此を以て菩薩を試み、其心の定まれるや不やを知るのみ

此偈を說き竟りて、毘首羯磨、即ち自ら身を變じて、一の赤眼赤足の鴿と作り、釋提桓因、自ら身を變じて一の鷹と作り、急に飛んで鴿を逐ふ。鴿は直に來りて王の腋の底に入り、身を擧げて戰き怖れ、眼を動し、聲を促す。

是時に衆多の人、相與に語りて曰はく、

是王は大慈仁有りて、一切宜しく保護すべし
是の如きの鴿の小鳥、之に歸すること舍に入るが如し
菩薩の相是の如くんば、佛と作ること必ず久しからずと

是時、鷹は近き樹の上に在りて尸毘王に語るらく、「我に鴿を還し與へ、此は我受くる所なり」と。王、時に鷹に語るらく、「我前に此を受く、是れ汝に受くるに非ず。我初めて意を發す時此を受く、一切衆生は、皆之を度せんと欲す」と。鷹言はく、「王は一切衆生を度せんと欲す、我は一切に非ざるや、何を以てか、獨り愍まずして、而も我今日の食を奪ひたまふ」と。王答へて言はく、「汝、何の食をか須ふる。我は誓願を作す、其れ衆生有り、來

りて我に歸する者は必ず之を救護せん」と。汝、何の食をか須ふる、亦當に相給すべし」と。鷹言はく、「我は新に殺せる熱肉を須ふ」と。王念言すらく、「此の如きは得難し、自ら生を殺すに非ずんば、得るに由無し、我當に云何が一を殺して、一に與ふべけんや」と思惟し、心を定めて、即ち自ら偈を說く、

　是れ我此身肉は、恒に老病死に屬す
　久しからずして當に臭爛すべし、彼我を須ふ當に與ふべし

是の如く思惟し已りて、人を呼んで刀を持ち、自ら股の肉を割いて鷹に與ふ。鷹、王に語りて言はく、「王は熱肉を以て、我に與ふと雖も、當に道理を用て、肉の輕重をして、鴿と等しくして、欺かるること勿らんことを得しむべし」と。王言はく、「稱を持ち來れ」と。肉を以て鴿に對するに、鴿の身は轉た重く、王の肉は轉た輕し。王は人をして二の股を割かしむるに、亦輕くして足らず。次に兩の蹲と、兩の腕と、兩の乳と項と脊とを割き、身を擧げて肉を盡せども、鴿の身は猶重く、王の肉は故らに輕し。是時、近臣、內戚は、帳幔を安施して、諸の看人を却く、王は今、此の如く觀るべき無きなり。尸毘王言はく、「諸人を遮ること勿れ」と。聽して入りて看しめ、偈を說いて言はく、

　天人阿修羅、一切來りて我
　大心、無上の志を觀、以て佛道を成ぜんことを求めよ
　若し佛道を求むる有らば、當に此大苦を忍ぶべし

心を堅固にすること能はずんば、則ち當に其意を息むべし

此時、菩薩は血を以て手に塗り、稱を攀ぢて上らんと欲す。心定まり、身を以て盡して、以て鴿に對せんとす。鷹言はく、「大王、此事辦じ難し、何を用てか此の如くする。鴿を以て我に還せ」と。王言はく、「鴿來りて、我に歸す、終に汝に與へず、我、身を喪ふこと無量なりとも、物に於て益無し。今、身を以て易へて、佛道を求めんと欲す」と。手を以て稱を攀づ。爾時、菩薩は肉盡き、筋斷えて自ら制すること能はず、上らんと欲して墮つ。自ら心を責めて言はく、「汝當に自ら堅くすべし、迷悶することを得ること勿れ、一切衆生は憂苦の大海に墮す。汝一人誓を立てて、一切を渡さんと欲す、何を以てか怠り悶ゆる。此苦は甚だ少なく、地獄の苦は多し。此を以て十六分に相比するに猶一にだも及ばず。我今、智慧、精進、持戒、禪定有りて、猶此苦を患ふ。何に況んや地獄の中の人の智慧無き者をや」と。是時、菩薩は一心に上らんと欲して、復更に稱を攀ぢて、人に我を扶けよと語る。是時、菩薩、心定まりて悔無し。諸天、龍王、阿修羅、鬼神、人民は、皆大いに讃じて言はく、「一小鳥の爲に乃ち爾り、是事希有なり」と。即時に大地は爲に六種に振動し、大海の波は揚り、枯樹に華を生じ、天は香雨を降らし、及び名華を散じ、天女は歌ひ、「必ず佛と成ることを得ん」と讃ず。是時、四方の神仙、皆來りて讃じて言はく、「是れ眞の菩薩なり。必ず早く成佛せん」と。鷹は鴿に語りて言はく、「終に試むること此の如し、身命を惜まず、是れ眞の菩薩なり」と。即ち偈を說いて言はく、

【六八】尸羅波羅蜜を滿ずるに就いて

衆生の地中より、一切智樹の牙を生ず
我曹當に供養すべし、當に憂惱を施すべからず

毘首羯磨、釋提桓因に語げて言はく、「天主、汝は神力有り、此王の身をして平復することを得しむべし」と。釋提桓因言はく、「我を須たざるなり、此王は、自ら誓願を作し、大心歡喜して、身命を惜まず、一切を感發して、佛道を求めしむ」と。帝釋、人王に語げて言はく、「汝、肉を割きて辛苦す、心惱み沒せざるや」と。王言はく、「我は、心に歡喜して惱まず沒せず」と。帝釋言はく、「誰か當に、汝が心の沒せざるを信ずべき者有りや」と。是時、菩薩は實に誓願を作さく、「我、肉を割き、血を流すも、瞋らず惱まず、一心に悶えず、以て佛道を求めば、我身當に平復すべきこと故の如くならん」と。即ち語を出すの時、身復して本の如し。人天之を見て、皆大いに悲喜し、「未曾有なり。此大菩薩は必ず當に佛と作るべし、我曹は應當に盡く心に供養すべし、願くば早く佛道を成ぜしめん、當に我等を念ずべし」と歎せり。是時、釋提桓因、毘首羯磨は各〻天上に還れり。是の如き等の種種の相は、是れ檀波羅蜜を滿ずるなり。

問うて曰はく、「尸羅波羅蜜は云何が滿ずる。」答へて曰はく、「身命を惜まず、淨戒を護持すること、須陀須摩王の劫を以て沙波陀大王を劫するが故に、乃ち命を捨つるに至るも禁戒を犯さざるが如し。昔、須陀須摩王あり、是王は精進し持戒して常に實語に依れり。晨朝に車に乘り、諸の婇女を將ゐて、園に入りて遊戲す。城門を出づる時、一婆羅門有りて

來り乞ふ。王に告げて言はく、「王は是れ大福德の人なり。我身は貧窮なり、當に愍念せられ、少多を賜ふべし」と。王言はく、「諾し、如來を敬ひ、告げて當に相布施すべし、我出で還らんを須て」と。此語を作し已りて、園に入りて澡浴し嬉戲せり。時に兩翅王有り、名を鹿足と曰ふ。空中より飛び來りて婇女の中に於て、王を捉へて將ち去ること、譬へば金翅鳥の海中の龍を取るが如し。諸の女は啼哭號慟し、一園驚き、城の内外は搔擾悲惶す。鹿足は王を負うて、虚空に騰躍し、住止する所に至り、九十九の諸の王の中に置く。須陀須摩王は涕零ること雨の如し。鹿足王語りて言はく、「大刹利王、汝何を以てか啼くこと小兒の如くなる。人生るれば死有り、合會すれば離るること有り」と。須陀須摩王答へて言はく、「我は死を畏れず、甚だ信を失せんことを畏る。我は生れてより已來、初より妄語せざりき。今日晨朝、門を出づる時、一婆羅門有り、來りて我に從うて乞ふ。我時に許して言はく、「還りて當に布施すべし」と。無常を慮らず、彼が心に辜負して、自ら欺くの罪を招く。是故に啼くのみ」と。鹿足王言はく、「汝意に、爾く此妄語を畏るることを欲せば、汝が還り去ることを聽さん。七日、婆羅門に布施し訖らば、便ち來り還れ。若し七日を過ぎて還らずんば、我に、兩つの翅力有り、汝を取らんこと難からず」と。須陀須摩王は本國に還ることを得て、恣ままに意のごとく布施し、太子を立てて王と爲し、大會せる人民に之を懺謝して言はく、「我智周からず、物を治むるに多く法の如くならざりしことは應に忠恕せらるべし、我今日の身の如きは已が有に非ず、正に爾く還り去らん」と。

【七】羼提波羅蜜を滿ずるに就いて

舉國の人民及び諸の親戚、叩頭して之を留むらく、「願くば王、意を留めて此國を慈愍したまへ。以て鹿足鬼王の虜と爲りたまふこと勿れ、當に鐵舍奇兵を設くべし。鹿足は神なりたと雖も、之を提れざるなり」と。王言はく、「爾ることを得ざるなり」と。而も偈を説いて言はく、

實語は第一の戒なり、實語は天に昇るの梯なり
實語は小なるも而も大なり、妄語は地獄に入る
我今實語を守らば、寧ろ身の壽命を棄つるも
心に悔恨有ること無し

是の如く思惟し已りて、王は即ち發し去り、鹿足王の所に到る。鹿足遙に見て、歡喜して言はく、「汝は是れ實語の人なり、信要を失はず。一切の人皆身命を惜む、汝は死より脫することを得て、還り來りて信に赴く、汝は是れ大人なり」と。爾時、須陀須摩王は實語を讃ずらく、「實語、これを人と爲す、非實語は人に非ず」と。是の如く種種に實語を讃じて妄語を呵す。鹿足は是を聞き、信心清淨なる須陀須摩王に語げて言はく、「汝、好く此を説く、今相放捨す、汝は脫するを得ん、九十九王も亦汝に布施せん。意に隨うて各本國に還れ」と。是の如く語り已れば、百王各還り去ることを得たり。是の如き等の種種の相、是を尸羅波羅蜜を滿ずと爲す。

（七）問うて曰はく、「羼提波羅蜜は云何が滿ずる。」答へて曰はく、「若し人來りて罵り、撾捶し、

割剝し、支解し、命を奪ふとも、心に瞋を起さざるなり。羼提比丘の迦梨王の爲に、其手足耳鼻を截られても、心堅くして動ぜざりしが如し。

（八）問うて曰はく、『毘梨耶波羅蜜は云何が滿ずる。』答へて曰はく、『若し大心勤力有ること、大施菩薩の一切の爲の故に、此一身を以て誓うて大海を抒み、其をして乾き盡さしめ、心を定めて懈らざりしが如し。亦弗沙佛を讃ずること七日七夜、一脚を翹て目を眴かさざりしが如し。

（九）問うて曰はく、『禪波羅蜜は云何が滿ずる。』答へて曰はく、『一切の外道の如きも禪定の中に自在を得。又尙、闍梨仙人は坐禪の時出入の息無く、鳥、螺髻の中に於て子を生めども動かず搖れず、乃至鳥の子飛び去るが如し。

（一〇）問うて曰はく、『般若波羅蜜は云何か滿ずる。』答へて曰はく、『菩薩は大心にして思惟し分別す。劬嬪陀婆羅門大臣の、閻浮提の大地を分ちて七分を作し、若干の大城、小城、聚落、村民も盡く七分と作ししが如く、般若波羅蜜も是の如し。是菩薩は六波羅蜜を滿じ、迦葉佛の所に在りて弟子と作り、淨戒を持し、功德を行じ、兜率天上に生ぜり。

（一一）問うて曰はく、『菩薩は何を以てか兜率天上に生じて、上生に在らず、下生に在らざるや。是れ大に福德有りて、應に自在に生ずべし。』答へて曰はく、『行人言はく、「因緣業熟す、應に是中に在りて生ずべし」と。復次に下地の中の結使は厚濁なり、上地の中の結使は利なり、兜率天上の結使は厚からず利ならず、智慧安隱なるが故なり。復次に、佛、出

【八】毘梨耶波羅蜜を滿ずるに就いて。

【九】禪波羅蜜を滿ずるに就いて。

【一〇】般若波羅蜜を滿ずるに就いて。

【劬嬪陀】カッピナ(Kappina)釋尊因位の時、劬嬪陀大臣となりて閻浮提を七等分して諍なからしめ、以て智度を成滿せりといふ因緣。

【一一】菩薩の上生並に降神母體に就いて。

【那羅延】ナーラーヤナ(Nārāyaṇa) 天上の力士の名、又は梵天の異名。

世の時を過ぎんことを欲せざるが故なり。若し下地に於て生ぜば、命短かく、壽終らん時にも、佛、未だ世に出でたまはず。若し下地に於て生ぜば、命短かく、壽終らん時にも、佛、未だ世に出でたまはず。若し上地に於て生ぜば、命長く、壽未だ盡きざるに、復佛、出でたまふ時を過ぎん。兜率天の壽と、佛の出でたまふ時と合ふが故なり。復次に、佛、常に中道に居たまふが故なり。兜率天は六欲及び梵の中に於て、上に三、下に三有り。彼天より下りて必ず中國に生じ、中夜に神を降し、中夜に迦毘羅婆國を出でて、中道を行じ、阿耨多羅三藐三菩提を得、中道もて人の爲に說法し、中夜に無餘涅槃に入り、中法を好むが故に中天に上生す。是の如く菩薩は兜率天上に生れ竟り、四種を以て人間を觀ず。一には時を觀じ、二には土地を觀じ、三には種姓を觀じ、四には生處を觀ず。云何が時を觀ずる。時に六種有り、佛、其中に出でたまふ。第一には人の長壽なること、八萬四千歲の時なり。第二には人壽七萬歲、第三は人壽六萬歲、第四は人壽五萬歲、第五は人壽四萬歲、第六は人壽三萬歲、第七は人壽二萬歲、第八は人壽一百餘歲なり。菩薩は是の如く念ず、「人壽百歲にして、佛、出でたまふの時到れり」と。是を時を觀ずと名く。云何が土地を觀ずる。諸佛は、常に中國に在りて生ず。金銀寶物多く、飮食豐美に、其土清淨なり。云何が種姓を觀ずる。佛、二種姓の中に生ず、若は刹利、若は婆羅門なり。刹利種は、勢力大なるが故に、婆羅門種は、智慧大なるが故に、時に貴き所の者に隨うて、佛は中に於て生じたまふ。云何が生處を觀ずる。「何等の母人か能く那羅延の力の菩薩を懷き、亦能く

【歌羅羅】カララ(Kalala)凝滑と譯す。
【頞浮陀】アルブダ(Arbuda)皰と譯す。
【伽那】ガナ(Ghana)肉團と譯す。
【五皰】プラシャーカー(Prasakha)五支、支節のつくらるる時期。

自ら淨戒を護らん」と。是の如く觀じ覺りて、「唯、中國の迦毘羅婆の淨飯王の后のみ、能く菩薩を懷まん」と。是の如く思惟し已りて、兜率天より下り、正慧を失はずして母胎に入る。問うて曰はく、『何を以ての故に一切の菩薩の末後の身は天上より來り、人中より來らざる。』答へて曰はく、『上道に乘ずるが故なり、六道の中に、天道は最上なればなり。復次に、天上より下る時は、種種の瑞應は未だ曾て所有せず。若し人道に從はば、人道は此を有する能はず。復次に、人の天を敬重するが故なり。』問うて曰はく、『一切の人は垢心を以て相續し、母胎に入る有りて一切の邪慧と相應す。云何が菩薩は正慧にして母胎に入ると名くる。』答へて曰はく、『有人言はく、「相續の時、一切衆生は、邪慧の心有りて、母胎に入り、菩薩は憶念して失せざるが故に正慧もて母胎に入ると名く。中陰の中に住すれば則ち中陰に住するを知り、入胎の時は入胎を知り、歌羅羅の時は歌羅羅（受胎七日、赤白の精和合の時なり）に住することを知り、頞浮陀（二七日の時皰の如き胞狀なり）の時は頞浮陀に住することを知り、五皰の時は、五皰に住することを知り、伽那の時は伽那（三七日の時の凝酪の如きなり）に住することを知り、出生の時は出生を知り、是中憶念して失せず、是を正慧もて母胎に入ると名く。復次に、餘人は中陰に在りて住する時、若し男なれば、母に於て、此女人は我と事に從ふと、欲染の心を生じ、父に於て瞋恚を生ず。若し女なれば、父に於て、此男子は我と事に從ふと、欲染の心を生じ、母に於て瞋恚を生ず。是の如き瞋恚の心、染欲の心は菩薩には此無し。菩薩は先より已に了知す、「是は父、是は母、是父是母、能く我身を長養す、我は父母の

【四二】以下三十二相の名を擧げて一一を釋す。

生身に依りて、阿耨多羅三藐三菩提を得ん」と。是の淨心もて父母を念じ、相續して胎に入れり。是を「正慧もて母胎に入る」と名く。是の菩薩は滿十月にして、正慧を失念せずして出胎し、行くこと七歩し、口に言を發すらく、「是れ我が末後の身なり」と。乃至將に相師に示さんとす、「汝、我が子を觀よ、實に三十二の大人の相有りや不や。若し三十二相有りて具足する者は、是れ應に二法有るべし。若し在家ならば、當に轉輪聖王と爲るべし、若し出家ならば、當に成佛すべし」と。諸の相師の言はく、「地天太子は實に三十二の大人の相有り、若し在家ならば、當に轉輪王と作るべし、若し出家せば、當に成佛すべし」と。

（二二）王言はく、「何等か三十二相なる」と。相師答へて言はく、「一には足下安平にして立つの相なり、足の下の一切を地に著くるに、間に受くる所無く一針を容れず。二には足下二輪の相、千輻と輞轂となり。三事具足し自然に成就して人工を待たず、諸天の工師、毘首羯磨も是の如きの妙相を化作すること能はず」と。問うて曰はく、「何を以ての故に能はざる」。答へて曰はく、「是毘首羯磨、諸天の工師は隱沒せざるの智慧なるに、是輪相は善業の報なり。是天工師は生報得の智慧なるに、是輪相は行善根の智慧の得たり。是毘首羯磨は一世に是智慧を得るも、是輪相は無量劫の智慧より生ず。是を以ての故に毘首羯磨も化作すること能はず、何に況んや餘の工師をや。三には長指の相なり。指纎くして長く端直にして、次第に傭好に指節參差す。四には足の跟廣く平かなるの相なり、左には手足の指縵

網の相なり。鴈王の如く指を張れば則ち現はれ、張らざれば即ち現はれず。六には、手足柔軟の相なり。細なること劫波毳の如し、餘の身分に勝る。七には、足趺高滿の相、足を以て地を蹈むに廣からず狹からず、足の下の色は赤蓮華の如し、足の指の間の網及び足の邊の色は、眞の珊瑚の如し、指の爪は淨きこと赤銅の如し、足趺の上は眞金の色にして、足趺の上の毛の青きこと、毘琉璃の色の如し、其足の嚴好なること、譬へば、雜寶の種々に莊飾せるが如し。八には、伊泥延膊の相なり。伊泥延鹿王の膊の隨次に臑纖なるが如し。九には、正しく立てば、手膝を摩するの相にして、俯せず仰がずして、掌を以て膝を摩するなり。十には陰藏の相なり。譬へば調善なる象寶、馬寶の如し。問うて曰はく、若し菩薩の阿耨多羅三藐三菩提を得る時、諸の弟子は何の因緣もてか陰藏の相を見し。答へて曰はく、「衆人を度し、衆の疑を決せんが爲の故に陰藏の相を示すなり。復有人の言はく、「佛は馬寶、象寶を化作して、諸の弟子に示して言はく、我陰藏の相も亦是の如しと」て十一には身の廣長等しき相なり。尼拘盧陀樹の如し、菩薩の身量は中と四邊との量等しと爲す。十二には毛上に向ふの相なり。身に諸の毛有りて生え、皆上に向うて靡く。十三には一一の孔に一毛生ずるの相なり。毛は亂れずして青きこと琉璃色の如し、毛は右に靡いて上に向ふ。十四には金色の相なり。問うて曰はく、「何等か金色なる。」答へて曰はく、「若し鐵を金の邊に在けば則ち現れず、今の現在の金を佛の在す時の金に比すれば、則ち現れず。佛、在す時の金を閻浮那の金に比すれば則ち現れず。閻浮那の金を大海の中の

轉輪聖王道の中の金沙に比すれば則ち現れず。金沙を金山に比すれば則ち現れず。金山を須彌山に比すれば則ち現れず。須彌山の金を三十三の諸天の瓔珞の金に比すれば則ち現れず。三十三の諸天の瓔珞の金を焔摩天の金に比すれば則ち現れず。焔摩天の金を兜率陀天の金に比すれば、則ち現れず。兜率陀天の金を化自在天の金に比すれば、則ち現れず。化自在天の金を、他化自在天の金に比すれば則ち現れず。他化自在天の金を菩薩の身の色に比すれば則ち現れず。是の如きの色、是を金色の相と名く。十五には丈光の相なり。四邊に皆一丈の光有り、佛、是光の中に在して、端嚴第一なること、諸天諸王の寶光の明淨なるが如し。十六には細薄皮の相、塵土の身に著かざること、蓮華の葉の水を受けざるが如し。若し菩薩乾土の山の中に在して經行すれども、土足に著かず、嵐風來るに隨つて、土山を吹き破り、散じて塵と爲らしむるに、乃至一塵も佛身に著かず。十七には七處隆滿の相、兩手、兩足、兩肩、頂中の七處、皆隆滿端正にして、色の淨きこと餘の身體に勝る。十八には兩腋の下隆滿なるの相なり。高からず、深からず。十九には上身師子の如きの相なり。二十には大直身の相なり。一切の人の中に於て、身、最大にして直し。二十一には肩の圓好なるの相なり。一切の治肩是の如き者無し。二十二には四十の齒の相なり。多からず少からず、餘人は三十二の齒にして、身には三百餘の骨あり、頭の骨は九有り。菩薩は四十の齒にして、頭に一骨有り、菩薩は齒骨多く、頭の骨は少し。餘人は齒骨は少く、頭の骨は多し、是を以ての故に餘の人身に異なれり。二十三には齒の

齊しき相なり。諸の齒は等しうして、麤なる無く、細なる無く、出でず入らず、齒密なる相なれば、人の知らざる者は、謂いて一齒と爲す、齒の間には一毫を容れず。二十四には牙の白き相なり。乃至雪山王の光に勝れたり。二十五には師子の頰の相なり。師子は獸中の王として、平なる廣き頰なるが如し。二十六には味の中上味を得るの相なり。有人、言はく、「佛、食を以て口の中に著けたまへば、是一切の食は皆最上の味を作る。何を以ての故に。是れ一切の食の中には、最上の味の因有るが故なり。是相無き人は、其因を發すこと能はざるが故に、最上味を得ず」と。復有人言はく、「若し菩薩、食を擧げ口中に著くれば、是時、咽喉の邊の兩處より甘露を流し注ぎ、諸味を和合す。是味は清淨なるが故に、味中の上味を得と名く。二十七には大舌の相なり。是れ菩薩の大舌は、口中より出でて一切の面の分を覆ひ、乃ち髮の際に至る。若し還りて口に入れば口も亦滿さず。二十八には梵聲の相なり。梵天王の如く、五種の聲口より出づ。一には甚深なること雷の如し。二には清く徹して遠く聞え、聞く者をして悅樂せしむ。三には心に入りて敬愛す。四には諦了にして解し易し。五には聽くもの厭ふこと無し。菩薩の音聲も亦是の如し、五種の聲は口より迦陵毘伽の聲相を出し、迦陵毘伽鳥の聲の愛すべきが如く、鼓聲の相大鼓の音の深遠なるが如し。二十九には眞の青眼の相なり。好き青蓮の華の如し。三十には牛の眼睫の相なり。牛王の眼睫の長く好くして亂れざるが如し。三十一には頂髻の相なり。菩薩には骨髻有りて、拳の如く等しく頂上に在り。三十二には白毛の相なり。白毛眉間より生じ、高

からず下からず、白くして淨く、行に從りて舒び、長さ五尺たり。相師言はく、『地天太子の三十二の大人の相は是の如し』と。菩薩は具に此相あり」と。問うて曰はく、「轉輪聖王には三十二相有り、菩薩にも亦三十二相有り、何の差別か有る。」答へて曰はく、「菩薩の相とは七事有りて、轉輪聖王の相に勝れたり。菩薩の相とは、一には淨くして好し。二には分明なり。三には處を失せず。四には具足す。五には深く入る。六には智慧に隨うて行じ、世間に隨はず。七には遠離に隨ふ。轉輪聖王の相は爾らず。」問うて曰はく、「云何が相と名くる。」答へて曰はく、「知り易きが故に相と名く、水の火に異るが如きは、相を以ての故に知るなり。」問うて曰はく、「菩薩は何を以ての故に、三十二相にして多からず少からざる。」答へて曰はく、「有人、言はく、『佛の三十二相を以て、身を莊嚴したまふは、端正にして亂れざるが故なり。若し少ければ身端正ならず、若し多ければ佛身の相亂れん。是三十二相は端正にして亂れず、益すべからず、減すべからず、猶佛法の益すべからず、減すべからざるが如く、身相も亦是の如し』と。」問うて曰はく、「菩薩は何を以ての故に相を以て身を嚴る。」答へて曰はく、「人有り、佛の身相を見たてまつれば、心に信淨を得ん。是を以ての故に相を以て身を嚴りたまふ。復次に、諸佛は一切の事勝れたるを以ての故に、身色、威力、種姓、家族、智慧、禪定、解脫の衆の事、皆勝れたり。若し佛、身相を莊嚴したまはずんば、是事便ち少からず。復次に、有人言はく、『阿耨多羅三藐三菩提は是身の中に住す。若し身相嚴ならざれば、阿耨多羅三藐三菩提は此身中に住せず』と。」答へ

【三】佛と菩薩の區別を明す。【盡智】無學果に至りて起る無漏智にして、有頂の第九品の修惑を斷じ、一切の煩惱を斷盡し我已に苦を知り、集を斷じ、滅を證し、道を修せりと知る智慧。

ば人の豪貴の家の女を娶らんと欲するが如し。其女使を遣はして、彼人に語げて言はく、「若し我を娶らんと欲せば、當に先づ房室を莊嚴し、汗穢を除却し、香薫を塗治し、床榻を安施し、被褥、綩綖、幃帳、幔幄、幡蓋は、華と香とを以て必ず嚴飾ならしむべし。然る後我當に汝が舍に到るべし」と。阿耨多羅三藐三菩提も亦復是の如し、智慧の使を遣はして、未來世の中の菩薩の所に到りて言はく、「若し我を得んと欲せば、先づ相好を修し、以て自ら莊嚴せよ。然る後我當に汝が身中に住すべし。若し身を莊嚴せずんば我は住せず」と。是を以ての故に菩薩は三十二相を修して、自ら身を莊嚴す。阿耨多羅三藐三菩提を得んが爲の故なり。是時、菩薩は漸漸に長大し、老病死の苦を見て、厭患の心生じ、夜半に家を出でて、六年苦行し、難陀婆羅門の女に養なはれ、身に十六の功德を益し、石蜜の乳糜を食し竟りて、菩提樹下に、萬八千億の鬼兵と魔衆とを破り已りて、阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。

問うて曰はく、「何の功德を得るが故に、名けて佛と爲す」。答へて曰はく、「盡智無生智を得るが故に名けて佛と爲す」。復次に、有人言はく、「佛は十力と四無所畏と十八不共法と三達無礙と三意志とを得たまふ。一には教を受けて敬重すれども、佛は喜びたまふこと無し。二には教を受けず敬重せざれども、佛は憂ひたまふこと無し。三には敬ひ重んずるも、敬ひ重んせざるも、心に異なること無く、大慈大悲にして三十七の道品、一切諸法の總相別相を悉く知りたまふが故に、故らに名けて佛と爲す」と。問うて曰はく、「何を以ての

【無生智】無學果に至りて盡智の後に起す無漏智、我已に苦を知る、更に復知るべからず、已に集を斷じて更に斷ずべからず、滅を證して更に證すべからず、道を修して復修すべからずと知る智慧。

【三道】羅漢にいふ三明を佛についてかく名く。

故に未だ佛道を得ざるを名けて菩薩と爲し、佛道を得たるを名けて菩薩と爲さざる。答へて曰はく、「未だ佛道を得ざれば心愛著し、求めて阿耨多羅三藐三菩提を取らんと欲す、是を以ての故に名けて菩薩と爲す。已に佛道を成ずれば、更に佛の種種の異なれる大なる功德を得るが故に、更に異名有り、名けて佛と爲す。譬へば王子の未だ王と作らざれば、名けて王子と爲し、已に王と作れば復王子と名けず。旣に王たれば、是れ王子なりと雖も王子と名けざるが如し。菩薩も亦是の如し、未だ佛道を得ざれば名けて菩薩と爲し、已に佛道を得れば名けて佛と爲す。聲聞法の中の摩訶迦旃延尼子の弟子の輩は菩薩の相を說くの義是の如し」。摩訶衍の人言はく、「是迦旃延尼子の弟子の輩は、是れ生死の人なり、摩訶衍經を誦せず讀まざれば大菩薩に非ず、諸法の實相を知らず、自ら利根の智を以て、佛法の中に於て論議を作し、諸の結使と智と定と根等の中に於て、義を作すすら尚處處に失有り、何に況んや菩薩の論議を作さんと欲するをや。譬へば少力の人の如きは小渠を跳るすら尚過ぐる能はず、何に況んや大河をや。大河の中に於ては、卽ち沒失するを知る」と。問うて曰はく、「云何が失有る」。答へて曰はく、「上に三阿僧祇劫を過ぐるを名けて菩薩と爲すと言へるが如く、三阿僧祇の中に、頭目、髓腦を布施すれども、心に悔ゆること有ること無し。是れ阿羅漢、辟支佛の及ぶこと能はざる所なり。昔の菩薩の如きは大薩陀婆と爲り、大海水を渡るに、惡風船を壞す。衆の賈人に語げて言はく、『我頭髮、手足を捉へよ、當に汝等を渡すべし』と。衆人捉へ已れば刀を以て自殺す。大海の水は法として死尸

を停めず、即時に疾風吹いて岸の邊に至る、大慈是の如し。而も非なりと言ふ者誰か是ならんや。菩薩は第二阿僧祇劫の行滿じて、未だ第三阿僧祇に入らず、時に然燈佛の所に於て記を受く、「佛と爲らん」と。即時に虚空に上昇し、十方の佛を見、虚空の中に立ちて然燈佛を讃す。然燈佛の言はく、「汝は一阿僧祇劫を過ぎて、當に佛と作ることを得て、釋迦牟尼と名くべし」と。記を得ること是の如し。而るに言はく、「爾時、未だ是れ菩薩にあらず」と。豈大なる失に非ずや。迦旃延尼子の弟子の輩が言はく、「三阿僧祇劫の中には、未だ佛の相有らず、亦佛相の因緣を種うること無し。云何が當に知るべき。是れ菩薩は一切の法は先づ有相にして、然る後に其實を知るべし。若し無相ならば、則ち知らず」と。摩訶衍の人言はく、「記を受けて、佛と爲り、虚空に上昇して、十方の佛を見る、此れ大相に非ずや。佛、爲に記せられ、當に佛と作ることを得べし。佛と作るを得ば、此は此れ大相なり。此大相を捨てて三十二相を取る。三十二相は轉輪聖王にも亦有り、諸天、魔王も亦能く此相を化作す。難陀、提婆達等は皆三十相有り、婆跋梨婆羅門は三相有り、摩訶迦葉の婦は金色の相有り。乃至今世の人も亦各一相二相有り。若し青眼、長臂、上身の師子の如き、是の如き等の種種は、或は多く或は少し。汝は何を以てか此相を重んずる。何の經に、「三阿僧祇劫の中に菩薩は相の因緣を種ゑず」と言ふや。難陀の毘婆尸佛を澡浴するが如きは、清淨端正なるを得んと願ふ。一の辟支佛塔に於て、青黛を壁に塗り、辟支佛の像を作り、因りて願を作し、「願くは我恒に金色の身相を得ん」と。又迦葉佛塔

の中の紋を作る。此三福の因緣を以て世世に樂を受け、生處に生ずる所恒に端嚴なることを得。是福の餘り、迦毘羅婆の釋種の中に生れて佛弟子と爲り、三十の大人の相を得、清淨端正にして、出家して阿羅漢道を得たり。佛、說きたまはく、「五百の弟子の中に於て、難陀比丘は端正なること第一なり」と。此相は得易し。云何が九十一大劫の中に於て種ゑ、餘の一生の中に得ると言ふ。是を大失と爲す。汝言はく、「初阿僧祇劫の中には、當に佛と作るべきか、佛と作らざるかを知らず、二阿僧祇劫の中に當に佛と作るべしと知れども、自ら稱說せず、三阿僧祇劫の中に、佛と作り得と知り、能く人の爲に說く」と。佛、何の處に是語を說きたまひ、何の經の中に、是語ある。若は聲聞法の、三藏の中に說く、若は摩訶衍の中に說く。迦旃延尼子の弟子の輩言はく、「佛、口づから三藏の中に說きたまはずと雖も、義理當に爾るべし。阿毘曇鞞婆婆の菩薩品の中に是の如く說けり」と。答へて曰はく、「摩訶衍の中に初發心を說く。是時、我當に佛と作るべしと知る。阿遮羅菩薩の如きは、長手佛の邊に於て初めて發心せし時、乃ち金剛座處に至りて佛道を成じ、其中間に於て顚倒の不淨心生ぜざりき。首楞嚴三昧の中、四種の菩薩の如きは四種の記を受く。未だ發心せざるに授記すること有り。適に發心して授記すること有り。前の授記に於て他人悉く知り、己身は知らざること有り。前の授記に於て、他人己身悉く知ること有り。汝何が二阿僧祇劫に於て、授記を知れども、而も自ら稱說せずと言ふ。復次に、佛言はく、三無量阿僧祇劫に功德を作し、衆生を度せんと欲す」と。何を以ての故に三阿僧祇劫と言ふ。

【首楞嚴三昧】シューランガマ、サマーディ(Śūraṃgama-samādhi) 健相定と譯す、分別して諸三昧の行相の多少深淺を知ること、大將が諸の兵力の多少を知るが如し、菩薩此三昧を得れば諸の煩惱魔及び魔人もよく破壊することを得ずといふ。

【鬱怛羅】ウッタラ(Uttara or Uttarakuru)北倶盧洲のこと。
【劬陀尼】ゴーダーニーヤ(Godaniya)西牛貨洲のこと。
【弗婆提】プールヴァヴィデーハ(Purvavideha)東勝身洲のこと。

「阿僧祇劫は量有り限有り。」問うて曰はく、「摩訶衍の中に此語有りと雖も、我も亦都て信ぜず。」答へて曰はく、「是を大なる失と爲す。是は佛の眞法にして、佛、口づから說きたまふ所なり、汝反すること無れ。」復汝は摩訶衍の中より出生す。云何が我都て信ぜずと言ふ。復次に、摩訶衍の論議は、此中に應に廣く說くべし。復次に、是三十二相の業因緣は、欲界の中に種ゑ、色、無色界の中に種うるに非ずと說く。無色界の中には身無く、色無きを以て、是三十二相は是れ身の莊嚴なるが故に、中に於て、種うるを得ざるは爾るべし。色界の中に何を以てか種うることを得ざる。色界の中には大いに諸の梵王有りて、常に佛の初轉法輪を請す。是は智慧淸淨にして能く佛道を求む。何を以てか三十二相の因緣を種うることを得ずと言ふ。又言はく、「人中には、種うることを得、餘道には非ず」と。婆伽度龍王の如きは、十住の菩薩なり。阿那婆達多龍王は七住の菩薩なり。羅睺阿脩羅王も亦是れ大菩薩なるが如し。復何を以てか餘道に、三十二相の因緣を種うるを得ずと言ふ。汝は人中の、閻浮提に種うと言うて、鬱怛羅には種うべからずと曰ふ。有義には、彼中の人は吾我無く、樂に著し、利根ならざるが故ならんも、劬陀尼、弗婆提の二處は、福德も智慧も壽命も、閻浮提に勝れり。何を以てか種うるを得ざる。復次に、汝は一思に一相を種うと言へり。是心には、彈指の頃、六十の生滅有り、一心の中に住せず、分別すること能はず。云何が能く大人の相を種うる。此大人の相は、了に心に種うることを得ずんば有るべからず。是を以ての故に多くの思、和合して能く一相を種う。重き物は一人

にして辦ふこと能はず、必ず多人の力を須ふるが如し。是の如く相を種うることも、要ず大心、多思の和合を得て、爾して乃ち種うることを得。是を以ての故に百福相と名くることは、百の大心の思の福徳を種うる、是を百福相と名く。一思に一相を種うべからず餘事するも尚一思に一事を種うるを得ず、何に況んや百福相をや。何を以ての故に、釋迦文尼菩薩の心は未だ純淑せざるに、弟子の心は純淑し、彌勒菩薩の心は純淑するに、弟子の心は未だ純淑せずと言ふや。是語は何處の說ぞや。三藏の中にも摩訶衍の中にも是事無し、但だ汝が心より出づ。汝は但釋迦文尼菩薩、寶窟の中に於て、弗沙佛を見たてまつり、七日七夜、一偈を以て讚じたまふを見る。彌勒菩薩も亦種種に弗沙佛を讚す。但し阿波陀那經の中には說かず、汝が知らざる所は因緣無きが故なり。汝は便ち彌勒の弟子の心は、未だ純淑せずと謂ふ。是の如きは皆違失爲り。汝菩薩は一切の物を能く施して愛惜する所無し、尸毘王の如きは鴿の爲の故に、肉を割いて鷹に與へ、心に悔恨せずと言ふ。財寶を以て布施するが如きは、是を下の布施と名け、身を以て布施する是を中の布施と名け、種種の施の中にて、心に惜まざる、是を上の布施と爲す。汝は何を以てか中の布施を讚して、檀波羅蜜の滿たりと爲す。此處は心大いに難事多しと雖も、智慧を知る有り、智慧を知らざる有り。人の父母親屬の爲に身を惜まず、或は主の爲に身を惜まざるが如し。是を以ての故に、鴿の爲に身を惜まざるは、是れ中の布施なることを知る。

問うて曰はく、菩薩、一切衆生の爲に、父母と爲り主と爲るとは、一切の人の爲の故な

り。是を以ての故に直に身を惜まざるを檀波羅蜜の滿なりと爲すに非ず。答へて曰はく、一切衆生の爲なりと雖も、是心は清淨ならずして、己の身に吾我無しと知らず、取る者も人無く主無しと知らず。施す所の物の實相は、一なりと異なりとも說くべからざることを知らず。是三事に於て心著する、是を清淨ならずと爲す。世界の中に於て福德の報を得るも、直に佛道に至ること能はず。般若波羅蜜の中に說くが如し。三事は不可得なり、亦不著なり、是を檀波羅蜜の滿を具足すと爲す。是の如く、乃至般若波羅蜜は、能く大地、城、郭、聚落を分ちて七分と爲す、是を般若波羅蜜の滿と爲す。是般若波羅蜜は無量無邊にして大海の水の如く、諸天、聖人、阿羅漢、辟支佛、乃至初行の菩薩も尙其邊涯を知ること能はず、十地に住する菩薩のみ、乃ち能く知れり。云何が汝は「能く大地、城、郭、聚落を分ちて、七分と爲す、是を般若波羅蜜の滿と名く」と言ふ。是事は是れ算數の法を以て能く地を分つ、是れ世俗の般若波羅蜜の中の少許の分なり。譬へば大海水の中の一渧兩渧の如し。實の般若波羅蜜は、三世諸佛の母と名け、能く一切の法の實相を示す。是般若波羅蜜は來處も無く、去處も無く、一切處に求むるに得べからず。幻の如く、響の如く、水中の月の見れば便ち失するが如し。諸の聖人は憐愍したまふが故に一相なりと雖も、種種の名字を以て是般若波羅蜜は、諸佛の智慧の寶藏なりと說きたまふ。又汝が言は大なる失なり。汝は四種の觀を言へり。時を觀、土地を觀、種族を觀、生處を觀る。人壽八萬歲にして、佛、世に出でたまひ、七、六、五、四、三、二萬歲の中に、佛、出世し

【一四】佛出世に就いて。

【一五】大乘經中に十方佛無しといへるに就いて。

たまへり、「人壽百歳も是れ、佛、出でたまふ時なり」と。若し諸の佛、常に衆生を憐愍したまはば、何を以てか正に八種の時の中にのみ出世したまへる、餘時には出でたまはざる。佛法は時を待たず、好き藥を服する時、便ち病を除ゆるが如し。佛法も亦是の如く時を待たず。

（一四）問うて曰はく、「菩薩は衆生を憐愍し、諸佛は時を待たずと雖も、八萬歳を過ぎては、人長壽にして樂多く、貪愛等の結使厚く、根は鈍にして化すべき時に非ず。若し百歳の後は、人短壽にして苦多く、瞋恚等の諸の結使更に厚し」。此樂時と苦時とは、道を得るの時に非ず。是を以ての故に佛、出世したまはざるなり。答へて曰はく、「諸天の壽は千萬歳に出でたり。先世の因縁有れば樂多く、貪愛厚しと雖も能く道を得、何に況んや人中は少樂にあらず、三十六種の不淨有り、易く教化すべし。是を以ての故に人壽八萬歳を過ぎても佛は出でたまふべし。是中の人は病無く、心樂しきが故に、人皆利根にして福德なり。福德利根の故に、直に易く道を得べし。復次に、師子鼓音王佛の時は人壽十萬歳、明王佛の時は人壽七百阿僧祇劫、阿彌陀佛の時は人壽無量阿僧祇劫たり。汝は云何が、「八萬歳を過ぐれば、佛、出世したまはず」と言ふ。（一五）問うて曰はく、摩訶衍經に是の事有り、「現在の中には十方の佛無し、唯過去には釋迦文尼拘陣若等の一百の佛、未來には彌勒等の五百の佛のみなり」と。答へて曰はく、「摩訶衍論の中の種種の因縁は、三世十方の佛を說く、何を以ての故に。十方世界には老病死婬欲瞋恚等の諸の苦惱有り、是を以ての故に佛は當に其國に出でたまふべし」經の中に說くが如し、「老病死煩惱無ければ諸佛は則ち出世したまは

ず。復次に、病人多ければ應に多くの藥師有るべし。汝等の聲聞法なる長阿含の中に、毘沙門王偈を以て佛に白さく、「去來現在の諸佛に稽首したてまつり、亦復釋迦文佛に歸命したてまつる」と。汝が經に說いて、過去、未來、現在の諸佛を稽首すと言ひ、釋迦文尼佛に歸命すと言ふ。此を以ての故に現在餘の佛有ることを知る。若し餘國の佛無くんば、何を以ての故に前には三世の佛を稽首し、後には別して釋迦文尼佛に歸命せんや。此王は未だ欲を離れず、釋迦文尼佛の所に在りて、道を得て敬愛の心重きが故に歸命し、餘佛の所に於て直に稽首す。問うて曰はく、『佛、口づから說きたまはく、「一世間に一時に二佛出づること無く、亦一時に二の轉輪王出づることを得ず」と。是を以ての故に現在に餘佛有るべからず』。答へて曰はく、『此言有りと雖も汝は其義を解せず。佛の說は一の三千大千世界の中に一時に二佛出でたまふこと無しとなり。十方世界に現在の佛無しと謂ふには非ず。四天下の世界の中の如きは、一時に二の轉輪聖王出づること無し。此れ大福德の人にして、怨敵の世を共にすること無きが故なり。是を以ての故に四天下に一の轉輪聖王有り。佛も亦是の如し、三千大千世界の中に於て、亦二佛出でたまふこと無し。佛及び轉輪聖王は、經說一種なり。汝何を以てか、餘の四天下に、更に轉輪聖王有りと信じ、而も餘の三千大千世界の中に、更に佛有ることを信ぜざる。復次に、一佛は一切衆生を度することを得ること能はず。若し一佛の能く一切衆生を度せば、餘佛は須ひざるべく、唯一佛のみ出でん。諸佛の法の如きは、度すべき衆生を度し已りて而して滅す。燭盡きて火滅するが如し。

【優曇婆羅樹】ウツムバラ（Udumbara）靈瑞と譯す、花無くして果を結ぶ、三千年に一度開花すといふ。

有爲の法は無常にして性空なるが故なり。是を以ての故に現在に應に更に餘佛有るべし。復次に、衆生無量なれば、苦も亦無量なり。是故に應に大心の菩薩有りて出づべし。亦無量の佛世に出で、諸の衆生を度したまふこと有るべし。問うて曰はく、經の中に說くが如し、無量歲の中に佛の時時に出でたまふこと、譬へば優曇婆羅樹の華の時時に一たび出づるが如し。若し十方に佛、充滿せば、佛、便ち出で易く得易し、名けて値ひ難しと爲さず。答へて曰はく、一國ならず、一の大千世界の中に、佛、無量歲に時時に出でたまふと爲す。一切の十方世界の中に難しとは言はず。亦罪人は知らざるが爲に、恭敬し勤めて精進して道を求めず。是を以ての故に告げて佛は無量歲に、時時に一たび出でたまふと言ふ。又此衆生は、衆の罪業の故に惡道の中に墮ち、無量劫に尚佛の名を聞かず、何に況んや佛を見たてまつらん。是を以ての故に、佛、世に出でたまふこと難しと言ふ。問うて曰はく、若し現在十方に多くの諸佛菩薩有らば、今一切衆生は罪惡にして苦惱す、何を以てか來りて之を度せざる。答へて曰はく、衆生は無量阿僧祇劫の罪垢深厚なり、種種の餘福有りと雖も、佛を見たてまつるの功德無きが故に、佛を見たてまつらざるなり。偈に說くが如し。

好福の根未だ近からず、衰罪未だ除却せざれば
現前に大德有力の人を見る能はず
大德の諸の聖人は、心亦分別無く

【十善】不殺生、不偸盜、不邪婬、不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語、不貪欲、不瞋恚、不邪見。

慈悲もて一切の人を、一時に度らしめんと欲す
衆生福德熟し、智慧有りて根亦利なれば
若し爲に度の緣を現ぜば、即時に解脱するを得ん
譬へば大龍王の、願に隨うて衆雨を雨らすが如し
罪福は本行に隨ふ、各各受くる所の如し

問うて曰はく、『若し自ら福德有り、自から智慧有らば、是の如きの人は佛能く度したまふ、若し福德智慧無ければ佛は度したまはず。爾らば自ら福德智慧有らば、佛の度したまふを待たざらん』。答へて曰はく、『此福德智慧は、佛の因緣より出づ、若し佛世に出でたまはずんば、諸の菩薩は、十善の因緣、四無量意、後世の罪福の報、種種の因緣を以て敎道す。若し菩薩無くとも種種の經中に說くこと有り、人此法を得ば福德の因緣を行ぜん。復次に、人に福德智慧有りと雖も、若し佛世に出でたまはずんば、是世界の中に報を受け、道を得ること能はず。若し佛世に出でたまはば、乃ち能く道を得、是を大益と爲す。譬へば人の目有りと雖も、日の出ざる時は、見る所有ること能はず、要ず日の明を須ちて見る所有ることを得。「我は眼有り、何んが日を用ふるを爲さん」と言ふことを得ざるが如し。佛の說きたまふが如くんば、二の因二の緣能く正見を生ず。一には他に從つて法を聞く。二には内に自ら法の如く福德の事を思惟するが故に能く善心を生じ、利根智慧の故に能く法の如く思惟す。是を以ての故に佛に從うて度を得ることを知る。是の如き等の

種種の多くの違錯有り、般若波羅蜜の論議を作さんと欲するが故に、復廣く佛事を讃する
こと能はず。

大智度論　卷第四

〔一〕以下摩訶薩埵の意義を明す。

大智度初品中摩訶薩埵釋論第九　巻第五

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏法師鳩摩羅什詔を奉じて譯す

【経】摩訶薩埵。

【論】〔一〕問うて曰はく、云何が摩訶薩埵と名くる。答へて曰はく、摩訶を大と名け、薩埵を衆生と名け、或は勇心と名く。此人は心に能く大事を爲し、退かず還らず、大勇心なるが故に名けて摩訶薩埵と爲す。復次に、摩訶薩埵とは、多くの衆生の中に於て、最も上首たるが故に、名けて摩訶薩埵と爲す。復次に、多くの衆生の中に大慈大悲を起し、大乘を成立し、能く大道を行じ、最大の處を得るが故に摩訶薩埵と名く。復次に大人の相を成就するが故に、摩訶薩埵と名く。摩訶薩埵の相は讃佛の偈の中に説くが如し。

唯佛一人のみ獨り第一なり、三界の父母にして一切智たり
一切の等に於て與等無く、稽首したてまつる世尊は比するに希有なり
凡人は恵を行じて己利の爲にし、報を求むるに財を以て給施す
佛は大慈仁にして此事無く、怨親憎愛以て等しく利す

復次に、必ず能く法を説いて、一切衆生及び、己身の大邪見、大愛慢、大我心等の諸

【阿由他等】大數の名。以下

の煩惱を破するが故に、名けて摩訶薩埵と爲す。復次に、衆生は大海の初無く中無く後無きが如し、明知の算師有りて、無量歲に於て計算すとも、盡し覺ること能はず。佛、無盡意菩薩に語りたまふが如きは、「譬へば十方一切世界乃至虛空邊際を合して一水と爲し、無數無量の衆生をして共に一髮を持して、一渧を取りて去らしめ、更に無央數の衆生有りて前の如く、共に一髮を持して一渧を取りて去り、是の如く彼大水をして悉く盡して餘あることと無からしむるが如し、衆生は故らに盡きず。是を以て衆生等は無邊無量にして數ふべからず、思議すべからず、盡く能く救濟して苦惱を離れ、無爲安隱の樂の中に著かしむ」と。此大心有りて多くの衆生を度せんと欲するが故に摩訶薩埵と名く。『不可思議經』の中に、漚舍那優婆夷、須達那菩薩に語りて言ふが如し。「諸の菩薩摩訶薩の輩は、一人を度せんが爲の故に、阿耨多羅三藐三菩提心を發すにあらず。亦二三、乃至十人の爲の故に非ず、百に非ず千に非ず、萬に非ず十萬に非ず、百萬に非ず一億十百千萬乃至億億に非ず。阿由他億の衆生の爲の故に發心するに非ず。那由他億に非ず、阿耶陀の衆生の故に非ず、頻婆羅に非ず、歌歌羅に非ず、阿歌羅に非ず、簸婆羅に非ず、摩婆羅に非ず、波陀に非ず、多婆に非ず、鞞婆呵に非ず、怖摩に非ず、念摩に非ず、阿婆迦に非ず、摩伽婆に非ず、毘羅伽に非ず、僧伽摩に非ず、毘薩羅に非ず、謂闍婆に非ず、鞞闍迦に非ず、鞞盧呵に非ず、鞞跋帝に非ず、鞞迦多に非ず、兜羅に非ず、阿婆羅那に非ず、他婆羅に非ず、鞞婆耶婆に非ず、藐寫に非ず、鈍那耶寫に非ず、醯婆羅に非ず、鞞婆羅に非ず、菩遮多に非ず、阿跋伽

陀に非ず、鞞施陀に非ず、泥婆羅に非ず、醯梨浮陀に非ず、婆摩陀夜に非ず、比初婆に非ず、阿梨浮陀に非ず、阿梨薩寫に非ず、醯云迦に非ず、度于多に非ず、呵樓那に非ず、摩樓陀に非ず、叉夜に非ず、烏羅多に非ず、末殊夜摩に非ず、三摩陀に非ず、毘摩陀に非ず、波摩陀に非ず、阿滿陀羅に非ず、婆滿多羅に非ず、摩多羅に非ず、醯兜末多羅に非ず、鞞摩多羅に非ず、波羅多羅に非ず、尸婆多羅に非ず、醯羅に非ず、爲羅に非ず、提羅に非ず、枝羅に非ず、翅羅に非ず、尼羅に非ず、斯羅に非ず、波羅に非ず、彌羅に非ず、婆羅羅に非ず、迷樓に非ず、企盧に非ず、摩屠羅に非ず、三牟羅に非ず、阿夜婆に非ず、劍摩羅に非ず、摩摩羅に非ず、阿達多に非ず、醯樓に非ず、鞞樓婆に非ず、迦羅跋に非ず、呵婆跋に非ず、鞞婆跋に非ず、婆婆に非ず、阿羅婆に非ず、娑羅婆羅に非ず、迷羅浮羅に非ず、摩遮羅に非ず、陀摩羅に非ず、婆摩陀に非ず、尼伽摩に非ず、阿跋多に非ず、泥提舍に非ず、阿叉夜に非ず、三浮陀に非ず、婆摩摩に非ず、阿婆陀に非ず、漚波羅に非ず、波頭摩に非ず、僧佉に非ず、伽提に非ず、漚波伽摩に非ず、阿僧祇に非ず、阿僧祇阿僧祇に非ず、無量に非ず、無量無量に非ず、無邊に非ず、無邊無邊に非ず、無等に非ず、無等無等に非ず、無數に非ず、無數無數に非ず、不可計に非ず、不可計不可計に非ず、不可思議に非ず、不可思議不可思議に非ず、不可說に非ず、不可說不可說に非ず、一國土の微塵等の衆生の爲の故に發心するに非ず。二三より十百千萬億千萬億阿由陀那由他に至る、乃至、不可說不可說の國土の微塵等の衆生の爲の故に發心するにも非ず。一閻浮提の微塵等の衆生の爲

の故に、發心するにも非ず。拘陀尼、鬱怛羅、閻浮提、微塵等の、衆生の爲の故に發心するにも非ず。小千世界、中千世界、大千世界の微塵等の衆生の爲の故に發心するにも非ず。二三より上百千萬億阿由他那由陀に至り、乃至不可說不可說の三千大千世界の微塵等の衆生の爲の故に發心するにも非ず。一佛に供養し供給する爲の故に發心するにも非ず。乃至不可說不可說の諸佛に供養し供給せんが故に發心するにも非ず。一國土の微塵等の諸佛に供養し供給せんが爲の故に發心するにも非ず。乃至不可說不可說の三千大千世界の微塵等の諸佛を供養し供給せんが爲の故に發心するにも非ず。一佛土を淨めんが爲の故に發心するにも非ず。乃至不可說不可說の三千大千世界の微塵等の佛土を淨めんが爲の故に發心するにも非ず。一佛の法を受持するが爲の故に發心するにも非ず。乃至不可說不可說の三千大千世界の微塵等の佛法を受持せんが爲の故に發心するにも非ず。一の三千大千世界の中の佛種を斷ぜざらしめんが爲の故に發心するにも非ず。乃至不可說不可說の三千大千世界、微塵等の三千大千世界の中の佛種を斷ぜざらしめんが爲の故に發心するにも非ず。分別して一佛の願を知るが爲の故に發心するにも非ず。乃至分別して不可說不可說の三千大千世界の微塵等の佛の願を知るが爲の故に發心するにも非ず。一佛土を莊嚴せんが爲の故に發心するにも非ず。乃至不可說不可說の三千大千世界の微塵等の佛土を莊嚴せんが爲の故に發心するにも非ず。分別して一佛會の弟子衆を知るが爲の故に發心するにも非ず。乃至分別して不可說不可說の三千大千世界の微塵等の佛會の弟子衆を知るが爲の故に發心

するにも非ず。一佛の法輪を持せんが爲の故に發心するにも非ず。乃至不可說不可說の三千大千世界の微塵等の佛の法輪を持せんが爲の故に發心するにも非ず。一人の諸心を知らんが爲の故にも非ず。一人の諸根を知るが爲の故にも非ず。一の三千大千世界の中の諸の劫の次第に相續するを知るが爲の故にも非ず。分別して一人の諸の煩惱を斷ぜんが爲の故に發心するにも非ず。乃至分別して不可說不可說の三千大千世界の微塵等の人の諸の煩惱を斷ぜんが爲の故に發心するにも非ず。是の諸の菩薩摩訶薩は願うて言はく「盡く一切十方の衆生を教化し、盡く一切十方の諸佛に供養し供給せん。願くば一切十方の諸佛の土をして淸淨ならしめ、心に堅く一切十方諸佛の法を受持せん」と。分別して一切の諸佛の土を知るが故に、盡く一切諸佛の弟子衆を知るが故に、分別して一切衆生の諸の心を知るが故に、一切衆生の諸の煩惱を斷ずることを知るが故に、盡く一切衆生の諸の根を知るが故に、諸の菩薩は發心し、阿耨多羅三藐三菩提を作す。是の如き等の十門を首と爲し、乃至百千萬億阿僧祇の門、是を道法の門と爲す。菩薩の應に知るべく、應に入るべきを略說すること是の如し。諸の菩薩の實道は、一切の諸法皆入り皆知り、智慧知るが故に、一切の佛土は、菩薩道の中に莊嚴するが故に。漚舍那言はく「善男子、我願くば、是の如く世界を有してより已來、一切の衆生を盡く淸淨にし、一切の煩惱を悉く斷ぜん」と。須達那の言はく、「是れ何の解脫ぞ」と。漚舍那答へて言はく、「是れを無憂安隱幢と名く。我は此一解脫門を知る。諸の菩薩の大心は、大海の水の如く、一

【二】以下菩薩の功德を明す中、初に何故に空等の三事にもて菩薩を讚ずるやに就いて。

切諸佛の法を能く持し、能く受くることを知らず。諸の菩薩の心は、動かざること須彌山の如し。諸の菩薩は、藥王の如く、能く一切の諸の煩惱を除く。諸の菩薩は日の如く、能く一切の暗を照除す。諸の菩薩は地の如く、能く一切の衆生を含受す。諸の菩薩は風の如く、能く一切の衆生を益す。諸の菩薩は火の如く、能く一切の外道諸の煩惱を燒く。諸の菩薩は雲の如く、能く法水を雨らす。諸の菩薩は月の如く、福德の光明、能く一切を照す。諸の菩薩は釋提桓因の如く、一切の衆生を守護す。是菩薩の道法は甚だ深し、我云何が能く盡く知らん」と。是を以て諸の菩薩は大願を生じ、大事を得んと欲し、大處に至らんと欲するが故に摩訶薩埵と名く。

復次に、是『般若波羅蜜經』の中に、摩訶薩埵の相は、佛自ら說きたまふこと是の如し。是の如きの相は、是れ摩訶薩埵の相なり。舍利弗、須菩提、富樓那等の諸の大弟子、各各彼品を說けり。此中に應に廣く說くべし。

大智度初品中菩薩功德釋論第十

【經】皆陀羅尼及び諸の三昧を得、空、無相、無作を行じて、已に等と忍とを得たり。

【論】問うて曰はく、「何を以ての故に此三事を以て、次第に菩薩摩訶薩を讚ずる。」答へて曰はく、「諸の菩薩の實の功德を出さんと欲するが故に讚ずべきを則ち讚じ、信ずべきを

【三】陀羅尼の意義並に功德を明す

【陀羅尼】ダーラニー（Dhāraṇī）能持と譯す。

則ち信ず、一切衆生の信ずる能はざる所の、甚深なる清淨の法を以て菩薩を讃ず。復次に、先づ菩薩摩訶薩の名字を說き、未だ菩薩摩訶薩たる所以を說かず。諸の陀羅尼、三昧、及び忍等の諸の功德を得るを以ての故に、名けて菩薩摩訶薩と爲す。

〔三〕問うて曰はく、已に次第の義を知れり。何を以ての故に陀羅尼と名け、云何が陀羅尼なる。答へて曰はく、陀羅尼は、秦に能持と言ひ、或は能遮と言ふ。能持とは種種の善法を集めて能く持ち、散ぜず失せざらしむるなり。譬へば完き器に水を盛るに、水漏れ散せざるが如し。能遮とは惡しき不善根の心生ずるを能く遮りて生ぜざらしむ。若し惡罪を作さんと欲すれば持して作さざらしむ。是を陀羅尼と名く。是陀羅尼は、或は心相應し、或は心相應せず。或は有漏、或は無漏、無色不可見、無對、一持、一入、一陰攝、法持、法入、行陰、九智知、（丹注盡智を除くと云ふ）一識識、（丹注に一意識と云ふ）阿毘曇法なり。陀羅尼の義は是の如し。復次に、陀羅尼を得るの菩薩は一切聞く所の法を念力を以ての故に能く持して失せず。復次に、是陀羅尼の法は常に菩薩を逐ふこと、譬へば間日の瘧病の如し。是陀羅尼の菩薩を離れざること、譬へば鬼の著くが如し。是陀羅尼の常に菩薩に隨ふことは、善、不善の律儀の如し。復次に、是陀羅尼の菩薩を持して、二地の坑に墮さしめざること、譬へば慈父の子を愛して子の坑に墮ちんと欲するに、持して墮ちざらしむるが如し。復次に、菩薩は陀羅尼を得るの力有るが故に、一切の魔王、魔民、魔人も動かすこと能はず、能く破ること無く、能く勝つこと無し。譬へば須彌山を凡人の口もて吹けども、動かさしむること

【四】陀羅尼の種類を明す

能はざるが如し。

問うて曰はく、「是陀羅尼は幾種有りや」と。答へて曰はく、「是陀羅尼は多種有り。一を聞持陀羅尼と名く。是陀羅尼を得る者は、一切の語言の諸法、耳に聞く所のもの皆忘失せず。是を聞持陀羅尼と名く。復分別知陀羅尼有り。是陀羅尼を得る者は、諸の衆生、諸法の大小、好醜の分別を悉く知る。偈に說くが如し。

諸の象、馬、金、木、石、諸の衣
男女、及び水、種種にして同じからず
諸物の名は一にして、貴賤の理は殊なるも
此總持を得れば、悉く能く分別す

復、入音聲陀羅尼有り。菩薩の此陀羅尼を得る者は、一切語言の音を聞いて喜ばず瞋らず、一切衆生、恆河沙等の如き劫に、惡言を以て罵詈すとも、心に憎み恨まざるなり」。問うて曰はく、「菩薩は諸漏未だ盡さず。云何が能く、恆河沙等の如き劫に、此諸の惡を忍ぶ」。答へて曰はく、「我先に言はく、『此陀羅尼を得る力の故に能く爾なり』と。復次に、是菩薩は未だ漏を盡さずと雖も、大智利根にして能く思惟し、瞋心を除遣し、是念を作さく、『若し耳根、聲邊に到らざれば惡聲誰にか著かん。又罵る聲を聞くに便ち直に過ぐるが如し。若し分別せずんば、誰か當に瞋るべき者有らん』と。凡人は心、吾我に著し、是非を分別して恚恨を生ず。復次に、若し人能く諸言を知るも、隨つて生じ隨つて滅し、前後俱

ならざれば則ち瞋恚無し。亦諸法は内に主有ること無しと知れば、誰か罵り誰か瞋らん、若し人有り、殊方の異語を聞き、此言を好しと爲し、彼を以て惡と爲して、好惡を定むること無くんば罵ると雖も瞋らざらん。若し人有り、語聲を知るも、定むること無ければ、則ち瞋り喜ぶこと無けん。親愛の之を罵るが如きは、罵ると雖も恨みず、親からざるものの惡言は聞いて則ち恚を生ず。風雨に遭へば、則ち舍に入り、蓋を持するが如く、地に刺有れば則ち鞾鞋を著くるが如く、大寒には火を然し、熱時には水を求む。是の如く、諸の患は、但遮るの法を求めて之を瞋らず。罵詈、諸惡も、亦復是の如し、但慈悲を以て、是諸の惡を息むれば瞋の心生ぜざるなり。復次に、菩薩は諸法の不生不滅にして、其性皆空なることを知る。若し人、瞋恚し、罵詈し、若は打ち、若は殺すも、夢の如く、化の如く、誰か瞋り、誰か罵らん。復次に、若し人有り。恒河沙等の如き劫に、衆生讃歎し、衣食、臥具、醫藥、華香、瓔珞を供養すとも、忍を得るの菩薩は其心動かず、喜ばず、著せざるなり。問うて曰はく「已に菩薩の種種の瞋らざるの因緣を知るも、未だ實に功德を讃ずるに、而も亦喜ばざることを知らず。」答へて曰はく、「種種の供養恭敬は、是れ皆無常なることを知る。今因緣有るが故に來りて讃歎供養すとも、後更に異なる因緣有れば、則ち瞋恚し、若くは打ち、若くは殺さん。是故に喜ばざるなり。」復次に、菩薩、是念を作さく、我に功德、智慧有るを以ての故に、來りて讃歎し供養す。是れ功德を讃歎するが爲にして、我を讃ずるには非ざるなり。我何を以てか喜ばん。復次に、是人は自ら果報を

【五】諸の三昧に就いて、初に三三昧を明す。

求むるが故に、我所作の因緣に於て、我所作の功德を供養す。譬へば人の穀を種うるに、溉灌修理すれども、地も亦喜ばざるが如し。復次に、若し人我を供養せんに、我若し喜んで受けば、我福德則ち薄く、他人の福を得ることも亦少し、是を以ての故に喜ばず。復次に、菩薩は一切の法を觀るに夢の如く響の如し。誰か讚じ誰か喜ばん。我は三界の中に於て、未だ脫することを得ず、諸漏未だ盡さず、未だ佛道を得ず。云何が讚を得て而も喜ばん」と。若し應に喜ぶべき者は唯佛一人のみなり。何を以ての故に。一切の功德都て已に滿すが故なり。是故に菩薩は種種の讚歎供養供給を得れども心に喜を生ぜず、是の如き等の相を名けて、入音聲陀羅尼と爲す。復、寂滅陀羅尼、無邊旋陀羅尼、隨地觀陀羅尼、威德陀羅尼、華嚴陀羅尼、音淨陀羅尼、虛空藏陀羅尼、海藏陀羅尼、分別諸法地陀羅尼、明諸法義陀羅尼と名くる有り。是の如き等は略して五百の陀羅尼門を說く、若し廣く說かば則ち無量なり。是を以ての故に、諸の菩薩は皆陀羅尼を得と言ふ。

(五)諸の三昧とは、三の三昧なる、空と無作と無相となり。有人言はく、「五陰我無く、我所無きを觀ず、是を名けて空と爲す。是空三昧に住して、後世の爲の故に、三毒を起さざる、是を無作の緣と名く。十相を離るるを緣ずるが故に。五塵と男と女と生と住と滅するが故に是を無相と名く。有人言はく、是三三昧の中に住すれば、一切諸法の實相を知る。謂ゆる、畢竟空は、是を空三昧と名く。是空を知れば、已に無作なり。云何が無作なる。諸法の、若は空、若は不空、若は有、若は無なる等を觀ぜざるなり。佛、法句の中の偈に

【二八】以下各種三昧を明す。

說きたまふが如し。

有を見ては則ち恐怖し、無を見ては亦恐怖す
是故に有に著せず、亦復無に著せず

是を無作三昧と名く。云何が無相三昧なる。一切の法は相有ること無し、一切の法を受けず、著せず、是を無相三昧と名く。偈に說くが如し。

語言已に息み、心行も亦滅す
不生不滅なること、涅槃の相の如し

復次に、十八の空、是を空三昧と名く、種種の有（丹註に五道の生有本有死有中有の業と云ふ）の中に心に求めざる、是を無作三昧と名く、一切の諸相を破壞して、憶念せざる、是を無相三昧と名く。

問うて曰はく、「種種の禪定の法有り、何を以ての故に獨り此三の三昧を稱する。」答へて曰はく、「三の三昧の中の思惟は涅槃に近きが故に、人心をして高からず下からず、平等にして動ぜざらしむ、餘處は爾らず。是を以ての故に、獨り是三の三昧を稱す。餘の定の中には或は愛多く、或は慢多く、或は見多し。是三の三昧の中の第一實義は、實に利にして能く涅槃門を得。是を以ての故に、諸の禪定法の中にて、是三の定法を以て三の解脫門と爲し、亦名けて三の三昧と爲す。是三の三昧は實の三昧なるが故に、餘の定も亦定と名くることを得るなり。

復次に、四の根本禪を除き、未到地より乃至有頂地を名けて定と爲し、亦三昧と名く。

【未到地】八種の根本定と近分定とある中、初禪の近分定のみ他のそれに異れるを名けて未至定、又は未到地といふ、未だ根本定に到らずの義なり。【四門】[illegible]【八背捨】八解脫ともいふ、一に內有色想觀外色解脫、二に內無色想觀外色解脫、三に淨解脫身作證具足住、四に空無邊處解脫、五に識無邊處解脫、六に無所有處解脫、七に非想非非想處解脫、八に滅受想定身作證具足住。【八勝處】[illegible]一に內有色想觀外色少、二に內有色想觀外色多、[illegible]

非想の四禪も亦定と名け、亦禪と名け、亦三昧と名く。諸餘の定も亦定と名け、亦三昧と名く。四無量、四空、六通、八背捨、八勝處、九次第定、十一切處等の如きも諸定の法なり。復有人言はく、一切の三昧の法に二十三種有りと。有は言はく、六十五種有りと。有は言はく、五百種有りと。摩訶衍は最大なるが故に、無量の三昧有り。謂ゆる遍法性莊嚴三昧、能照一切三世法三昧、不分別知觀法性底三昧、入無底佛法三昧、如虛空無底無邊照三昧、如來力行觀三昧、佛無畏莊嚴力嚬呻三昧、法性門旋藏三昧、一切世界無礙莊嚴遍用三昧、遍莊嚴法雲光三昧なり。菩薩は是の如き等の無量の諸の三昧を得。

復次に、般若波羅蜜摩訶衍義品の中に略して說くに、則ち一百八の三昧有り。初め首楞嚴三昧と名け、乃至虛空不著不染三昧なり。廣く說かば則ち無量の三昧有り。是を以ての故に、諸の菩薩は諸の三昧を得と說く。

空、無相、無作を行ずとは、問うて曰はく、前に菩薩に諸の三昧を得と言へり、何を以ての故に、復空、無相、無作を行ずと言ふ。答へて曰はく、前には三昧の名を說きて、未だ相を說かず、今相を說かんと欲す、是の故に、空、無相、無作を行ずと言ふ。若し人有りて、空、無相、無作を行ぜば、是を實相の三昧を得と名く。偈に說くが如し。

若し戒を持して清淨なる、是を實の比丘と名け
若し能く空を觀すること有る、是を三昧を得と名く
若し能く精進すること有る、是を道を行ずる人と名け

觀外色少勝處、四
に內無色想觀外色
多勝處、五に靑勝
處、六に黃勝處、
七に赤勝處、八に
白勝處これなり。

【九次第定】四禪
四無色及び滅受想
定の九禪定は他心
を雜へず、次第に
一定より一定に入
るの法なり。

【十一切處】十遍
處ともいふ、靑黃
赤白地水火風、空識
の十法を觀じ、其
一一に於て一切處
に周遍せしむるな
り。

【七】空等を行ず
といふを明す。

【八】次に等と忍
に就いて各二種を
明す。

若し涅槃を得ること有る、是を名けて實樂と爲す

（八）已に等と忍とを得とは、問うて曰はく、『云何が等にして、云何が忍なる。』答へて曰はく、『二種の等有り、衆生等と法等となり。忍に亦二種有り、衆生忍と法忍となり。云何が衆生等なる。一切衆生の中の等心、等念、等愛、等利、是を衆生等と名く。』問うて曰はく、『慈悲の力の故に、一切衆生の中に於て、應に等念なるべきも、應に等觀なるべからず。何を以ての故に。菩薩は實道を行じて顚倒せず、法相の如くなればなり。云何が善人、不善人、大人、小人、人及び畜生に於て、一等に觀ずる。不善人の中には、實に不善の相有り、善人の中には實に善相有り、大人、小人、人及び畜生も亦爾なり。牛相は牛の中に住し、馬相は馬の中に住し、牛相は馬の中に非ず、馬相は牛の中に非ず、馬は牛と作らざるが如し。故に衆生は各各の相有り、云何が一等に觀じて、而も顚倒に墮せざるや。』答へて曰はく、『若し善相、不善相、是れ實ならば、菩薩は應に顚倒に墮すべし。何を以ての故に。諸法の相を破るが故なり。諸法は實に非ざるを以て、善相は實に非ず、不善相は多相に非ず、少相に非ず、人に非ず、畜生に非ず、一に非ず、異に非ず。是を以ての故に、汝が難は非なり、諸の法相の偈に說くが如し。

生せず滅せず、斷ならず常ならず
一ならず異ならず、去ならず來ならず
因緣生の法は、諸の戲論を滅す

佛能く是を說きたまふ、我今當に說くべし

復次に、一切衆生の中、種種の相、衆生の相、空相に著せず、一に等しく異なる無し。是の如く觀ずる、是を衆生等と名く。若し人是中に心等しくして無礙ならば直に不退に入る、是を等と忍とを得と名く。等と忍とを得るの菩薩は一切衆生に於て、瞋らず惱まず、慈母の子を愛するが如くす、偈に說くが如し

聲を觀ずるに呼響の如く、身行は鏡像の如し

此の如く觀ずるを得る人は、云何が忍ならざらん

是を衆生の等忍と名く。云何が法の等忍と名くる。善法、不善法、有漏、無漏、有爲、無爲等の法、是の如きの諸法の不二入法門に入り、實の法相の門に入る。是の如きの人は、竟に是中に深く諸法の實相に入る時、心忍にして直に無諍無礙に入る。是を法の等忍と名く。偈に說くが如し。

諸法は生せず滅せず、生せざるに非ず滅せざるに非ず

亦生滅せず生滅せざるに非ず、亦生滅せざるに非ず

生滅せざるに非ざるに非ず

已に解脫（丹注に邪見に於て離るるを得るが故に解脫と云ふなりと云ふ）を得て空と非空（丹注に共に於て取らざるが故に非と言ふなりと云ふ）、是等は悉く諸の戲論を捨滅し、言語の道斷え、深く佛法に入り、心通じて礙無く、動かず退かざるを、無生忍と名く。是れ佛道を助くるの初門なり。是を以ての故に、已に等忍を得たり

【九】以下無礙陀羅尼を得たりに就いて明す、玆に更にいふは陀羅尼中の最大なるが故なり。

【一〇】以下五通を釋す。

と說く。

【經】無礙陀羅尼を得たり。

【論】(九)問うて曰はく、「前に已に、諸の菩薩は陀羅尼を得と說けり。今何を以てか復無礙陀羅尼を得と說く」。答へて曰はく、「無礙陀羅尼は最も大なるが故なり。一切の三昧の中に、三昧、王三昧の最も大なるが如く、人中の王の如く、諸の解脫の中の無礙解脫の如く、大（丹注に佛を得、道を得る時の所得なりと云ふ）なること是の如し、一切の諸の陀羅尼の中に無礙陀羅尼は大なり。是を以ての故に重ねて說けり。復次に、先に諸の菩薩は、陀羅尼を得と說けり、是れ何等の陀羅尼なるかを知らず。小陀羅尼有り、轉輪聖王仙人等の得る所の如し。聞持陀羅尼、分別衆生陀羅尼、歸命救護不捨陀羅尼、是の如き等の小なる陀羅尼は餘人にも亦有り。是無礙陀羅尼は、外道、聲聞、辟支佛、新學の菩薩、皆悉く得ず。唯無量の福德、智慧、大力の諸の菩薩のみ獨り是陀羅尼有り、是を以ての故に別して說く。

復次に、是菩薩の輩は、自らを利すること已に具足し、但彼を益せんと欲す。說法教化の無盡なること無礙陀羅尼を以て根本と爲す。是を以ての故に、諸の菩薩は常に無礙陀羅尼を行ず。

【經】悉く是れ五通。

【論】(一〇)如意と天眼と天耳と他心智と自ら宿命を識るとなり。云何が如意なる。如意に三種有り、能到と轉變と聖如意となり。能到に四種有り。一には身能く飛行し鳥の如くにして

礙無し。二には遠きを移して近からしめ往かずして到る。三には此に沒して彼に出づ。四には一念能く到る。轉變とは大を能く小と作し、小を能く大と作し、一を能く多と作し、多を能く一と作し、種種の諸物を能く轉變す。外道の輩の轉變は極めて久しきも七日に過ぎず、諸佛及び弟子は轉變自在にして久近有ること無し。聖如意とは、外の六塵の中の愛すべからざるの不淨物を能く觀じて淨ならしめ、愛すべきの淨物を能く觀じて不淨ならしむ、是れ聖如意法なり。唯佛のみ獨り是如意通有り。四如意足を修するより、是如意足通を生ず。等しく色を緣ずるが故に次第に生ず、一時には得べからず。天眼通とは、眼に於て色界の四大造の淸淨色を得る、是を天眼と名く。天眼の見る所は、自地及び下地、六道の中の衆生の諸物、若は近き、若は遠き、若は覆なる、若は細なる、諸色を照す能はざること無し。是天眼に二種有り。一には報に從りて得、二には修に從りて得。是五通の中の天眼は、修より得、報より得るに非ず。何を以ての故に。常に種種の光明を憶念して得るが故なり。復次に、有人言はく、是諸の菩薩の輩は、無生法忍の力を得るが故に、六道の中に攝せず、但衆生を敎化するが爲の故に、法身を以て十力に現ず。三界の中に未だ法身を得ざる菩薩は、或は修得、或は報得なり。

問うて曰はく、是諸の菩薩の功德は阿羅漢辟支佛に勝れたり。何を以ての故に凡夫も共にする所の小功德たる天眼を讃じて、諸の菩薩の慧眼、法眼、佛眼を讃せざる。答へて曰はく、三種の天有り。一には假號天、二には生天、三には淸淨天なり。轉輪聖王諸

【一二】以下言必ず信受すに就いて。

餘の大王等は是を假號天と名け、四大王天より、乃至有頂の生處は、是を生天と名け、諸佛、法身の菩薩、辟支佛、阿羅漢は是を清淨天と名く。是清淨天の修得の天眼は是を天眼通と謂ひ、佛と法身の菩薩の清淨の天眼は、一切の欲を離れたる、五通の凡夫も得ること能はざる所、聲聞、辟支佛も亦得ざる所なり。所以は何。小阿羅漢の小用の心は一千世界を見、大用の心は二千世界を見、大阿羅漢の小用の心は二千世界を見、大用の心は三千大千世界を見ればなり。辟支佛も亦爾なり。是を天眼通と名く。云何が天耳通と名くる。耳に於て、色界の四大造の清淨色を得、能く一切の聲と、天の聲と、人の聲と、三惡道の聲とを聞く。云何が天耳通を得る。修得して、常に種種の聲を憶念す。是を天耳通と名く。云何が識宿命通なる。本事を常に憶念し、日月年歲より胎中に至り、乃至過去世の中の一世、十世、百世、千萬億世、乃至大阿羅漢、辟支佛は八萬大劫を知り、諸の大菩薩及び佛は無量劫を知る。是を識宿命通と名く。云何が知他心通と名くる。他心を知るに、若は垢有り、若は垢無し。自ら心の生住滅を觀ずる時、常に憶念するが故に得るなり。

復次に、他人の喜相、瞋相、怖相、畏相を觀じ、此相を見已りて、然る後心を知る。是を他心智の初門と爲す。是れ五通の略說を竟る。

【經】言必ず信受す。

【註】天、人、龍、阿修羅等及び一切の大人は、皆共語を信受す。是れ不綺語の報の故なり。

【一二】以下懈怠すること無しに就いて明す。

【一三】已に利養名聞を捨つに就いて

諸の綺語の報は實語有りと雖も、一切の人は皆信受せず。偈に說くが如し。

餓鬼の中に墮する有りて、火炎口より出で
四に向うて大聲を發す、是を口過の報と爲す
復多く聞見し、大衆に在りて法を說くと雖も
誠信ならざるの業を以て、人皆信受せず
若し廣く多聞にして、人の爲に信受せられんと欲せば
是の故に當に至誠にして、綺語を作すべからざるべし

【經】復懈怠すること無し。

【論】【一二】懈怠の法は在家の人の財利と福利とを破り、出家の人の天樂と涅槃の樂とを生ずるを破り、在家出家の名聲俱に滅す。大失と大賊とは、懈怠に過ぎたるは無し。偈に說くが如し。

懈怠は善心を沒し、癡闇は智明を破り
妙願皆滅せられ、大業も亦已に失す

是を以ての故に「復懈怠すること無し」と說くなり。

【經】已に利養、名聞を捨つ。

【論】【一三】是利養の法は賊の如く功德の本を壞る。譬へば天雹の五穀を傷害するが如し。利養名聞も亦復是の如し、功德の苗を壞りて增長せざらしむ。佛の譬喩を說きたまふが如し。毛

【一四】以下說法に悕望あるべからざるを明す。

縄の人を縛して、膚を斷り骨を截るが如し、利養を貪るの人の功德の本を斷ずることも、亦復是の如し」と。偈に說くが如し

栴檀林に入るを得て、但其葉を取り
既に七寶の山に入りて、而も更に水精を取る
人有り佛法に入りて、涅槃の樂を求めず
反りて利供養を求む、是輩は自ら欺くを爲す
是故に佛弟子、甘露味を得んと欲せば
當に雜毒を棄捨し、涅槃の樂を勤求すべし
譬へば惡雹の雨れば、五穀を傷害するが如く
若し利供養に著せば、慚愧頭陀を破り
今世には善根を燒き、後世には地獄に墮せん
提婆達多が利養の爲に、自ら沒せしが如し

是を以ての故に、已に利養名聞を捨つと云ふ。

【經】法を說いて悕望する所無し。

【論】(一四)大慈憐愍して、樂の爲に法を說くは、衣食と名聲と勢力との爲の故に說くにあらず、大慈悲の故に、心清淨なるが故に、無生法忍を得るが故に、偈に說くが如し。

多聞辯慧にして巧に言語し、美しく諸法を說いて人心を轉ずるも

【五】以下甚深の法忍を度るに就いて先づ甚深の法忍を明す。

自ら如法ならず行ひ正しからざれば、譬へば雲雷して雨ふらざるが如し
博學多聞にして智慧有るも、訥口拙言にして巧便無ければ
法寶藏を顯發する能はず、譬へば雷無くして小雨たるが如し
廣く學問せず智慧無く、說法する能はず行ひを好くすること無き
是れ弊れたる法師には慚愧無し。譬へば小雲にして雷雨無きが如し
多聞廣智にして美しく言語し、巧に諸法を說いて人心を轉じ
法を行じて心正しければ畏るる所無きこと、大雲雷の洪雨を澍ぐが如し
法の大將の法鏡を持して、佛法の智慧の藏を照明し
持し誦し廣く宣べて法鈴を振ふこと、海中の船の一切を渡すが如く
亦蜂王の諸味を集むるが如し。說くこと佛言の如く佛意に隨ひ
佛を助け法を明にして衆生を度す、是の如きの法師は甚だ値ひ難し

【經】甚深の法忍を度る。

【論】云何が甚深の法なる。十二因緣、是を甚深の法と名く。佛の阿難に告げたまへるが如く、是十二因緣の法は甚深にして、解し難く、知り難し。復次に、過去未來世に依りて六十二の邪見の網を生ずることを永く離る、是を甚深の法と名く。佛、比丘に告げたまへるが如し、「凡夫は聞くこと無く、若し佛を讃せんと欲するも、讃する所甚だ小し。謂ゆる若は戒の清淨を讃じ、若は諸欲を離るることを讃じ、若は能く是甚深にして、解し難く

【一六】次に深法の忍を度るに就いて

【一七】無畏の力を得るに就いて、今いふ無畏力とは菩薩の無所畏なり。

知り難きの法を讃ず、是を實の讃佛と爲す。是中『梵網經』に應に廣く說くべし」と。復次に、三解脫門、是を甚深の法と名く。佛の般若波羅蜜を說きたまふ中に、諸天の讃じて言ふが如し「世尊、是法は甚深なり」と。佛の言はく「甚深の法とは、空則ち是れ義なり。無作無相則ち是れ義なり」と。復次に、一切諸法の相を解すれば、實に破すべからず、動ずべからず、是を甚深の法と名く。

〔一六〕復次に、內の心想智力を除いて、但心を諸法の清淨の實相の中に住せんと定む。譬へば熱氣盛なれば、黃に非ざるを黃と見るが如し。心想智力の故に諸法に於て轉觀す、是を淺法と名く。譬へば人の眼の清淨にして熱氣無ければ、實の如く黃を見て是れ黃とするが如し。是の如く內の心想智力を除いて、慧眼清淨なれば諸法の實相を見る。譬へば眞の水精を黃物の中に著くれば、則ち隨うて黃色を作り、青赤白色皆隨うて色變ずるが如し。心も亦是の如し、凡夫人の內の心想智力の故に諸法の異相を見る。諸法の實相を見るに、空に非ず不空に非ず、有に非ず有ならざるに非ず、是法の中に深く入りて、轉ぜず罣礙する所無き、是を「深法の忍を度る」と名く、「度る」とは甚深の法を得るに名く、具足し滿じて、礙ふる所無く、彼岸に度ることを得る、是を名けて「度る」と爲す。

〔經〕無畏の力を得。

〔論〕〔一七〕諸の菩薩は四無所畏の力を成就す。問うて曰はく『菩薩の如きは所作未だ辦ぜず、未だ一切智を得ざるに、何を以ての故に四無所畏を得と說く。』答へて曰はく「無所畏に二

【一八八】次に菩薩の四無畏を明す。

【一八九】諸の魔事等を明す中、初に四魔を明す。

種有り、菩薩の無所畏と、佛の無所畏となり。是の諸の菩薩は、未だ佛の無所畏を得ずと雖も、菩薩の無所畏を得、是の故に名けて「無畏の力を得」と爲す。

(一八八)問うて曰はく、「何等をか菩薩の四無所畏と爲す。」答へて曰はく、「一には一切を聞いて能く持するが故に、諸の陀羅尼を得るが故に、常に憶念して忘れざるが故に、衆中に法を說いて畏るる所無きが故に。二には一切衆生の解脫を欲するの因緣と、諸根の利鈍とを知り、其應ずる所に隨うて爲に法を說くが故に、菩薩は大衆の中に在りて法を說くに畏るる所無し。三には若し東方南西北方、四維上下より來りて難問すること有るも、我をして如法に答ふること能はざらしむる者有るを見ず。是の如きの少許の相をも見ざるが故に、衆中に於て法を說くに畏るる所無し。四には一切衆生の聽受して問難するも、意に隨うて如法に答へ、能く巧に一切衆生の疑ひを斷ずるが故に、菩薩は大衆の中に在りて、法を說いて畏るる所無きなり。」

【經】諸の魔事を過す。

【論】魔に四種有り、一には煩惱魔、二には陰魔、三には死魔、四には他化自在天子魔なり。是の諸の菩薩は菩薩の道を得るが故に煩惱の魔を破し、法身を得るが故に陰魔を破し、道を得て法性身を得るが故に死魔を破し、常に一心なるが故に、一切處に心著せざるが故に、不動三昧に入るが故に、他化自在天子魔を破す。是を以ての故に「諸の魔事を過ぐ」と說く。復次に、是般若波羅蜜覺魔品の中に、佛、自ら魔の業と魔の事とを說きたまふ。

【一〇】結使を魔と名くるに就いて。

是魔業魔事盡く已に過すが故に、是を「已に魔事を過ぐ」と名く。復次に、諸法の實相を除いて、餘殘の一切の法を盡く名けて魔と爲す。諸の煩惱、結使、欲縛、取纏、陰、界、入、魔王、魔民、魔人の如し。是の如き等を盡く名けて魔と爲す。

(一一)問うて曰はく、何の處にか欲縛等の諸の結使を說いて名けて魔と爲す。答へて曰はく、「雜法藏經の中に佛、偈を說いて魔王に語りたまはく、

欲は是れ汝が初軍、憂愁の軍は第二
飢渴軍は第三にして、愛軍は第四爲り
第五は眠睡軍、怖畏軍は第六
疑を第七軍と爲す、含毒軍は第八なり
第九軍は利養にして、虛妄の名聞に著す
第十軍は自ら高うして、他人を輕慢す
汝が軍等は是の如し、一切世間の人
及び諸の一切の天、能く之を破る者無し
我智慧の箭、修定、智慧の力を以て
汝が魔軍を摧破すること、坏瓶の水に沒するが如し
一心に智慧を修し、以て一切を度せよ
我弟子精進して、常に念じて智慧を修せよ

隨順して如法に行ぜば、必ず涅槃に至るを得ん
汝は放つを欲せずと雖も、汝が不到の處に到らん
是時魔王聞き、愁憂して即ち滅し去り
是魔惡の部黨も、亦復沒して現れず

是を諸の結使の魔と名く。

問うて曰はく、「五衆、十八界、十二入は、何の處に是れ魔なりと說く」。答へて曰はく、「莫拘羅山の中に、佛、弟子の羅陀に敎へたまはく、『色衆は是れ魔なり、受、想、行、識も亦是の如し』」と。復次に、若し未來世の色身を作らんと欲する、是を動處と爲す。若し無色身を作らんと欲する、是も亦動處と爲す。若し有想、無想、非有想、非無想身を作らんと欲する、是を一切動處と爲す。動は是れ魔の縛、不動は則ち不縛にして惡より脫することを得。此中に衆、界、入は是れ魔なりと說く。自在天子魔、魔民、魔人の則ち是れ魔たることは說くことを須ひず。問うて曰はく、『何を以てか魔と名くる。』答へて曰はく、『慧命を奪ひ、道法、功德の善本を壞す。是故に名けて魔と爲す。諸の外道人の輩の言はく、「是を欲主と名け、亦華箭と名け、亦五箭（丹本に注して五欲箭なりと云ふ）と名く」と。種種の善事を破るが故なり』と。佛法の中には名けて魔羅と爲し、是業と是事を名けて、魔事と爲す。是れ何等の魔事なる、覺魔品の中に說くが如し。復次に、人の世間に愛著して苦樂を受くるは、結使の因緣、亦魔王の力の因緣なり。是魔を諸佛の怨讎、一切聖人の賊と名く。一切の逆流

【一】三處界を魔と名くるは如何

【五欲】財、色、食、名、睡の五欲に著ふ

【魔羅】（Māra）マーラ、殺者、惡者などと譯す

【三】以下一切の業障等を明す中、但業障を説いて煩惱、報の二障を擧げざるを明す。

の人の事を破り、涅槃を喜ばざる、是を魔と名く。是魔に二事有り。戲笑の語言、歌舞の邪視、是の如き等は愛より生ず。縛打、鞭拷、刺割、斫截、是の如き等は瞋より生ず。身に灸し、自ら凍え、髮を拔き、自ら餓ゑ、火に入り、淵に赴き、巖に投ず、是の如き等は愚癡より生ず。又大過失有り、不淨にして世間に染著する、皆是れ魔事なり。惡を憎んで利益無く、涅槃及び涅槃の道を用ひざる亦是れ魔事なり。大苦の海に沒して自ら覺知せず、是の如き等の無量は皆是れ魔事なり。已に來て、已に捨つ、是を諸の魔事を過ぐと爲す。

【經】一切の業障悉く解脫するを得。

【論】一切の惡業、解脫するを得る、是を、業障解脫するを得と名く。問うて曰はく、「若し三種の障、煩惱障、業障、報障なり。何を以てか二障を捨てて、但業障を説く。」答へて曰はく、「三障の中、業力は最も大なるが故に、諸の業を積集して、乃至百千萬劫の中にも失せず、燒せず、壞せず、果報ともなる時、亡せざればなり。是諸の業は能く久しく住して和合する時、果報を與ふ。穀草子の地中に在りて時節を得て、而も生じ、失せず壞せざるが如し。是れ諸佛の一切智の第一尊重なる須彌山王の如きすら、尙是諸の業を轉ずる能はず、何に況んや凡人をや。偈に説くが如し。

　生死の輪は人を載せ、諸の煩惱、結使は
　大力にして自在に轉じ、人能く禁止する無し

先世の業自ら作り、轉じて種種の形と爲る
業力を最も大と爲す、世間の中に比無し
先世の業は自在に、人をして果報を受けしむ
業力の故に輪轉して、生死海中を廻る
大海の水は乾き竭き、須彌山の地は盡くるとも
先世の因緣業は、燒けず亦盡きず
諸業久しく和集すれば、造者自ら逐ひ去る
譬へば利物の主の、人を追逐して置かざるが如し
是諸業の果報は、能く轉ずる者有ること無く
亦逃避する處無く、哀を求むるも免るべきに非ず
三界の中の衆生は、之を追うて暫くも離れざること
珂梨羅剌の如し、是業は佛の所說なり
風は實に入らず、水は流れて仰いで行かず
虛空は害を受けざるが如く、業無きも亦是の如し
諸業の無量の力は、造らざる者を逐はざれども
果報の時節來るまでは、亡びず亦失せざるなり
地より飛んで天に上り、天より雪山に入り

【三】巧に因緣の法を說くに就いて十二因緣を明す。

雪山より海に入るも、一切處に離れず
常恆に隨うて我を逐ひ、一時も相捨つる無く
直に至りて失ふ時無きこと、星流れて月に趣くが如し
是を以ての故に、一切の諸の業障悉く解脫するを得と說く。

【經】巧に因緣の法を說く。

【註】十二因緣生の法は、種種の法門能く巧に說けり。煩惱と業と事と次第に展轉し相續して生ず。是を十二因緣と名く。是中の無明、愛、取の三事を煩惱と名け、行と有との二事を業と名け、餘の七分を名けて體事と爲す。是十二因緣の初の二は過去世に攝し、後の二は未來世に攝し、中の八は現在世に攝す。是れ略して三事を說く。煩惱、業、苦、是三事は展轉して、更に互に因緣と爲る。是煩惱は業の因緣、業は苦の因緣、苦は苦の因緣、苦は煩惱の因緣、煩惱は業の因緣、業は苦の因緣、苦は苦の因緣なり。是を展轉して更に互に因緣と爲ると名く。過去世の一切の煩惱は是を無明と名く。無明より業を生ず、能く世界の果を作るが故に名けて行と爲す。行より垢心を生ず、初め身の因は犢子の母を識るが如く、自ら相識るが故に名けて識と爲す。是識は共に生じて色無し、四陰及び是所住の色、是を名色と名く。是名色の中に眼等の六情を生ず、是を六入と名く、情と塵と識と合する、是を名けて觸と爲す。觸より受を生ず。受の中に心著する、是を渴愛と名く、渴愛の因緣、是を求むるを取と名く、取よりは後世の因業なり、是を有と名く、有より還後世の五

【薩婆若】サルヴジュニャー(Sarvajña)一切智と譯す。諸佛果上の智慧なり。
【二四】以下阿僧祇劫等を釋す。

衆を受く、是を生と名く。生より五衆熟し壞る、是を老死と名く。老死は憂悲哭泣種種の愁惱を生じ、衆苦和合して集まる。若し一心に諸法の實相を觀じて清淨なれば、則ち無明盡く、無明盡くるが故に行も盡き、乃至衆苦の和合の集皆盡く。是十二因緣の相は是の如し。能く方便して邪見に著せず、人の爲に演說する、是を名けて「巧に」と爲す

復次に、是十二因緣觀の中に法愛を斷じて心に著せず實相を知る、是を名けて「巧に」と爲す。彼般若波羅蜜不可盡品の中に說くが如くんば、佛、須菩提に告げたまはく、「癡は虛空の如く盡すべからず、行は虛空の如く盡すべからず、乃至衆苦の和合集は、虛空の如く盡すべからず、菩薩は當に是を知ることを作すべし。是を知ることを作す者は、癡際を捨てて應に入る所無かるべしと爲す」と。是十二因緣觀を觀ずることを作す者は、則ち道場に坐して薩婆若を得と爲す。

【經】阿僧祇劫より已來大誓願を發す。

【論】阿僧祇の義は菩薩義品の中に已に說けり。劫の義は、佛、譬喩して說きたまはく、「四千里の石山有り。長壽の人有り、百歲を過ぐることに細軟の衣を持して一たび來りて拂拭し、是大石山をして盡さしむるも、劫は故らに未だ盡きず。四千里の大城の中に芥子を滿たし概して平かならしめ、長壽の人有り、百歲を過ぐることに一たび來りて一の芥子を取り去らんに、芥子は盡くとも、劫は故らに盡きず」。菩薩は是の如き無數劫に大誓願を發し、衆生を度脫せんと願ふを、大心要誓と名く。必ず一切衆生を度し、諸の結使を斷じ、

【二九】顏色和悅等を釋す。

【三〇】以下大衆の中等の文を釋す。

阿耨多羅三藐三菩提を成ぜん、是を名けて「一瞬」と稱す。

【經】顏色和悅して、常に先づ問訊し語る所麁ならず。

【論】瞋恚の本を拔くが故に、嫉妬を除くが故に、常に大慈、大悲、大喜を修するが故に、四種の邪語を斷ずるが故に、顏色和悅なるを得。偈に說くが如し。

若し乞道の人を見ては、能く四種を以て待て
初めて見て好く眼視し、迎逆には敬ひて問訊し
床座を好くして供養し、充滿して欲する所を施せ
布施の心是の如くなれば、佛道は掌に在るが如し
若し能く、四種の口の過 妄語の毒
兩舌惡綺語を除かば、大美の果報を得ん
善歎の人道を求め、諸の衆生を度せんと欲して
四の邪なる口業を除くは、譬へば馬に轡有るが如し

【經】大衆の中に於て、畏るる所無きを得。

【論】大德なるが故に、堅實なる功德、智慧有るが故に、最上の辯、陀羅尼を得るが故に、大衆の中に於て畏るる所無きを得。偈に說くが如し。

內心に智德薄く、外善く美言を以てするは
譬へば竹の內無く、但其外有るを示すが如し

　內心に智德厚く、外善く法言を以てするは
　譬へば妙なる金剛の中外の、力具足するが如し

復次に、畏るる無きの法を成就するが故に、端正なる貴族にして大力なり。持戒、禪定、智慧、語議等皆成就す。是故に畏るる所無し。是を以ての故に、大衆の中に於て畏るる所無し。偈に說くが如し。

　少德にして智慧無ければ、應に高座に處るべからず
　豺の師子を見、竄伏して敢て出でざるが如し
　大智なれば畏るる所無く、應に師子の座に處るべし
　譬へば師子の吼ゆるに、衆獸皆怖畏するが如し

無量無邊の智慧福德の力集まるが故に畏るる所無し。偈に說くが如し。

　若し人衆の惡を滅し、乃至小罪も無ければ
　是の如き大德の人は、願として滿たざる無し
　是人は大智慧にして、世界の中に惱無し
　是故に此の如きの人には、生死も涅槃も一なり

復次に、獨り菩薩のみ無所畏を得るが故に、毘那婆那王經の中に說くが如きは、菩薩のみ獨り四無所畏を得と。先に說くが如し。

經 無數億劫、說法巧に出す。

【一七】以下無數億劫等の文を釋す。

【一七】不放逸等の諸の善根、自身に好く修す。是の諸の菩薩は一世二世乃至無量阿僧祇劫に、功德智慧を集む、偈に說くが如し、

衆生の爲の故に大心を發す。若し不敬にして慢を生ずる者有らば
其罪の甚だ大なるを說くべからず、何に況んや復惡心を加ふるをや

復次に、是菩薩は無數無量劫の中に、身を修め戒を修め、心を修め慧を修め、生滅の縛を解き、逆順の中にて自ら了了たり。諸法の實相を知るに、種種の解有り、聞解と義解と得解となり。種種に法門を說く中に罣礙せらるる無く、皆說法方便智慧波羅蜜を得。是諸の菩薩の說は、聖人の說の如く、皆應に信受すべし。偈に說くが如し、

慧有るも多聞無ければ、是れ實相を知らず
譬へば大闇の中に目有るも、見る所無きが如し
多聞にして智慧無ければ、亦實義を知らず
譬へば大明の中に燈有るも、而も目無きが如し
多聞にして利き智慧あるもの、是所說は應に受くべし
慧無く亦明無ければ、是を人身にして牛と名く

問うて曰はく、「應に「無數億劫、巧に法を說く」と言ふべし、復何を以てか「出す」と言ふ。答へて曰はく、「無智の人の中、及び弟子の中に於ては、法を說くこと易し、若し多聞利智にして、論議を善くする人の中に於ては法を說くこと難し、若し小智の法師たり

せば是中に退縮す。若し大學多聞なりせば、問難の中に大膽にして欣豫し、一切衆の中に於て大威德有り。『天會經』の中の偈に說くが如し。

面目齒の光明は、普く大會を照し
諸天の光を映じ奪ひて、種種皆現ぜず

是を以ての故に名けて、無數億劫、巧に法を說く中に、能く出すを得と爲す。

大智度論卷第五

【一】以下諸法は幻の如く等の十喩を明す。初に如幻を釋す。

大智度論初品中十喩釋論第十一　卷第六

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏法師鳩摩羅什詔を奉じて譯す

【經】諸法は幻の如く、焔の如く、水中の月の如く、虛空の如く、響の如く、揵闥婆城の如く、夢の如く、影の如く、鏡中の像の如く、化の如しと解了す。

【論】(一)是十喩は、空法を解せんが爲の故なり。問うて曰はく、若し一切の諸法は空にして幻の如くならば、何を以ての故に諸法に見るべく、聞くべく、嗅ぐべく、嘗むべく、觸るべく、識るべき者有る。若し實に所有無くんば、應に見るべく、乃至識るべきこと有るべからず。復次に、若し無なるを而も妄に見る者ならば、何を以てか聲を見、色を聞かざる。若し皆一等に空にして所有無くんば、何を以てか見るべきと、見るべからざる者と有る。諸法は空なるを以ての故に、一指の第一の甲無ければ、第二の甲も亦無きが如し。何を以てか第二の甲を見ずして、獨り第一の甲を見る。是を以ての故に、第一の甲は實有なるが故に見るべく、第二の甲は實無なるが故に、見るべからざるを知る。答へて曰はく、諸法の相は空なりと雖も、亦見るべきと、見るべからざるとを分別すること有り、譬へば幻化せる象、馬、及び種種の諸の物の如し。實なること無しと知ると雖も、然も色は見るべく、

聲は聞くべく、六情と相對せば相錯亂せず。諸法も亦是の如し、空なりと雖も、而も見るべく、聞くべく、相錯亂せず。『德女經』に說くが如し。德女、佛に白して言さく、「世尊、無明の如きは內に有りや不や」佛、言はく、「不なり」「外に有りや不や」佛の言はく、「不なり」「內外に有りや不や」佛、言はく、「不なり」「世尊、是無明は、先世より來るや不や」佛、言はく、「不なり」「此世より後世に至るや不や」佛、言はく、「不なり」「是無明に生者、滅者有りや不や」佛、言はく、「不なり」「一法の定まれる實性ある、是を無明と名くるや不や」佛、言はく、「不なり」と。爾時、德女、復佛に白して言さく、「若し無明は內に無く、外に無く、亦內外に無く、先世より今世に至り、今世より後世に至らず、亦眞實の性無くんば、云何が無明は行に緣たるより、乃ち衆苦集るに至るや、世尊、譬へば、樹有るが如し。若し根無くんば、云何が莖節、枝葉、華果を生ずることを得ん」と。佛、言はく、「諸法の相は空なりと雖も、凡夫は無聞無智の故に、而も中に於て種種の煩惱を生じ、煩惱の因緣は身口意業を作り、業の因緣は後身を作り、身の因緣は苦を受け樂を受く。是中に實に煩惱を作ることと有ること無く、亦身口意の業無く、亦苦樂を受くる者有ること無し。譬へば幻師の種種の事を幻作するが如し。汝が意に於て云何、是幻の所作は內に有りや不や」答へて言はく、「不なり」「外に有りや不や」答へて言はく、「不なり」「內外に有りや不や」答へて言はく、「不なり」「先世より今世に至り、今世より後世に至るや不や」答へて言はく、「不なり」「幻の所作に生者滅者有りや不や」答へて言は

【二】次に炎の如しを釋す。

く、「不なり」「實に一法の是幻の所作なる有りや不や」答へて言はく、「不なり」と。佛、言はく「汝、頗る見、頗る聞くに幻の所作の妓樂有りや不や」と。答へて言はく「我も亦聞き亦見る」と。佛、德女に問ひたまはく「若し幻は空にして欺誑無實ならば、云何が幻より能く伎樂を作すや」と。德女、佛に白さく「世尊、是幻相は爾く根本無しと雖も而も聞見すべし」と。佛、言はく「無明も亦是の如し。內に有らず、外に有らず、內外に有らず、先世より今世に至り、今世より後世に至らず、亦實性無く、生者、滅者有ること無しと雖も、而も無明の因緣は諸行を生じ、乃至衆苦の陰集れり。幻息めば幻の所作も亦息むが如く、亦無明の息むも亦爾なり。無明盡くれば行も亦盡き、乃至衆苦の集皆盡く」と。

復次に、是幻の譬喩は、衆生に示すに、一切有爲法は空にして堅固ならざることを以てす。一切の諸行は幻の小兒を欺誑するが如く、因緣に屬すれば自から在らず、久しく住せずと說くが如し。是故に諸の菩薩は諸法は幻の如くなるを知ると說く。

(二)炎の如しとは、炎は日光に風の塵を動かすを以ての故に、曠野の中に野馬を見るが如く、無智の人は初めて見て之を謂ひて水と爲す。男相女相も亦是の如し、結使、煩惱の日光に諸行の塵を熱し、邪憶念の風によりて生死曠野の中に轉ず。智慧無き者は謂ひて一相と爲し、男と爲し女と爲す。是を炎の如しと名く。復次に、若し遠く炎を見ては想うて水と爲せども、近づけば則ち水想無し。無智の人も亦是の如し、若し聖法に遠ざかれば無我を知らず、諸法の空を知らず、陰、界、入の性空の法の中に於て、人相、男相、女相を生ずれ

【三】次に水中の月の如しを釋す。

【四】次に虚空の如しを釋す。

ども、聖法に近づけば、則ち諸法の實相を知る。是の時、虚誑の種種の妄想を盡く除く。是を以ての故に諸の菩薩は、諸法は炎の如しと知ると說く。

(三)水中の月の如しとは、月は實に虚空の中に在り、影は水に於て現ず。月は法性の如く、實際の虚空の中に在れども、而も凡人の心は水の中に我我所の相有りて現ず是を以ての故に「水中の月の如し」と名く。復次に、小兒は水中の月を見て、歡喜して取らんと欲し、大人は之を見て則ち笑ふが如く、無智の人も亦是の如し。身見の故に吾我有りと見、實智無きが故に種種の法を見、見已りて歡喜して、諸相、男相、女相等を取らんと欲す。諸の道を得たる聖人は之を笑ふ。偈に說くが如し。

水中の月炎中の水、夢中に財を得死して生を求むるが如く
人有り此に於て實に得んと欲せば、是人は癡にして惑へり聖の笑ふ所なり

復次に、譬へば靜水の中には月の影を見れども、水を攪だせば則ち見えざるが如く、無明の心の靜水の中には吾我、憍慢、諸の結使の影を見れども、實智慧の杖もて心水を攪だせば、則ち吾我等の諸の結使の影を見ず。是を以ての故に、諸の菩薩は諸法は水中の月の如しと知ると說く。

(四)虚空の如しとは、但名のみ有りて實法無し、虚空は見るべきの法に非ざるも、遠く視るが故に、眼光轉じて、縹色を見る。諸法も亦是の如し、空にして所有無きも、人は無漏の實智慧に遠ざかるが故に實相を棄てて、彼我、男女、屋舍、城郭等の種種の雜物を見て心

著すること、小兒の靑天を仰ぎ視て實色有りと謂ひ、人有りて飛び上らんには、極めて遠くして見る所無し。遠く視るを以ての故に靑色を爲すと謂ふが如し。諸法も亦是の如し。是を以ての故に「虛空の如し」と說く。復次に、虛空の性は常に淸淨なるも、人は謂ひて陰曀にして、不淨なりと爲すが如く、諸法も亦是の如し。性は常に淸淨なれども、淫欲、瞋恚等の曀の故に、人謂ひて不淨なりと爲す。偈に說くが如し。

夏月の天は雷電して雨り、陰雲覆曀して淸淨ならざるが如し
凡夫の無智も亦是の如く、種種の煩惱常に心を覆ふ
冬天の日の時に一たび出づるも、常に昏氣にして半陰曀を爲すが如し
初果と第二道とを得と雖も、猶欲染の爲に蔽はる
若は春天の日の出でんと欲する時、陰雲の爲に覆曀せらるるが如し
欲染を離ると雖も第三果は、餘殘の癡慢の猶心を覆ふことあり
若し秋日の雲曀無きが如く、亦大海水の淸淨なるが如し
所作已に辦ぜる無漏心の羅漢は、是の如く淸淨なるを得

復次に、虛空は初無く、中無く、後無し。諸法も亦是の如し。復次に、摩訶衍の中に、佛、須菩提に語りたまふが如くんば、「虛空は前世無く、亦中世無く、亦後世無し。諸法も亦是の如し」と。彼經を此中に應に廣く說くべし。是故に「諸法は虛空の如し」と說く。

問うて曰はく、「虛空は實有の法なり。何を以ての故に、若し虛空に實法無ければ、若くは

事、若くは下、若くは來、若くは往、若くは屈、若くは申、若くは出、若くは入等の所作有り。應に有ること無くんば、動ずる處無かるべきが故なり。」答へて曰はく、「若し虛空の法にして實有ならば、虛空は應に住する處有るべし。何を以ての故に、住處無ければ則ち無法なればなり。若し虛空は孔穴中に在りて住し、是を虛空と爲さば虛空の中に在りて住す、是を以ての故に孔中に住すべからず。若し實中に在りて住せば是れ實にして、空にあらず。則ち住することを得ず。受くる所無きが故なり。復次に、汝は住處は是れ虛空なりと言ふも、石壁の實中には住處有ること無きが如く、若し住處無ければ則ち虛空無し。虛空の住處無きを以ての故に虛空無し。復次に、無相の故に虛空無し。諸法は各各相有り、相有るが故に法有ることを知る。地の堅相、水の濕相、火の熱相、風の動相、識の識相、慧の解相、世間の生滅の相、涅槃の永滅の相の如し。是虛空は相無きが故に無なり。」問うて曰はく、「虛空には相有り、汝知らざるが故に無しと言ふ。無色の處は是れ虛空の相なり。」答へて曰はく、「爾らず、無色は是を破色と名く、更に異なれる法無し。燈の滅すれば更に法無きが如し。是を以ての故に虛空の相は有ること無し。復次に是虛空の法は無なり、何を以ての故に、汝は色に因りての故に、無色の處を以て是れ虛空の相なりといふ。若し爾らば色の未だ生ぜざる時は、則ち虛空の相無ければなり。復次に汝は一色は是れ無常の法、虛空は是れ有常の法なりと謂へり。色の未だ有らざる時、應に先づ虛空の法有るべし、有常なるを以ての故に。若し色未だ有らずんば即ち無色の處無し。若し無色の處無け

【五】次に響の如しを釋す。

れば、即ち虚空の相無し。若し相無ければ即ち法無し。是を以ての故に、虚空は但名のみ有りて實無し。虚空の如く諸法も亦是の如し、但假名のみ有りて實無し。是を以ての故に、諸の菩薩は諸法は虚空の如しと知る。

(五)響の如しとは、若は深山狹谷の中、若は深き絶澗の中、若は空なる大舍の中に於て、若は語聲、若は打聲の、聲に從うて聲有りと名けて響と爲す。無智の人は一人有り、語聲を爲す、と謂ふ。智者は心に念ずらく「是聲は人の作すこと無し、但聲の觸るるを以ての故に、更に聲有り、名けて響を爲すのみ」と。響事は空にして能く耳根を誑かす。人の語らんと欲する時の如きは、口中の風を憂陀那と名く。還りて入りて、臍に至り、臍に觸れて響を出す。響出る時、七處に觸れて退く、是を語言と名く。偈に說くが如し、

風を憂陀那と名く、臍に觸れて上り去る
是風七處に觸る、項と及び齗と齒と脣と
舌と咽と及以胸とたり、是中より語言生ず
愚人は此を解せず、惑著して瞋癡を起し
中人は智慧有りて、瞋らず亦著せず
亦復愚癡ならず、但諸法の相の
曲直及び屈申、去來に隨うて語言を現す
都て作者有ること無し、是事は是れ幻なりとせんや

【六】次に揵闥婆城の如しを釋す

機關木人とせんや、是れ夢中の事と爲んや
我熱氣に悶ゆと爲んや、是れ有りとせんや是れ無しと爲んや
是の事誰か能く知る、是れ皆人、筋纏して
能く言語の聲を作す、融せる金を水に投ずるが如し

是を以ての故に、諸の菩薩は、諸法は響の如しと知ると言ふ。

揵闥婆城の如しとは、日の初めて出る時、城門、樓櫓、宮殿に行人の出入するを見る、日轉た高ければ轉た滅す。此城は但眼に見るべく、而も實有ること無し、是を揵闥婆城と名く。人有り、初より揵闥婆城を見ず。晨朝に東に向って之を見、意に實と謂ひ、樂んで疾く行き、之に趣くに轉た近ければ轉た失し、日高ければ轉た滅す。飢渴して悶極りて熱氣を見れば、野馬の如し、之を謂うて水と爲し、疾く走り之に趣くに、轉た近けば轉た滅し、疲極り困厄す。窮山狹谷の中に至り、大いに喚き啼哭す。響有りて應ずるを聞き、居民有りと謂ひ、之を求むるに疲極して見る所無し。思惟して自ら悟り、渴を願ふの心息む。無智の人も亦是の如し、空なる陰、界、入の中に、吾我及び諸法を見、婬瞋の心に著して、四方に狂走し、樂を求めて自ら滿さんとし、顚倒し欺誑して、窮極憂惱す。若し智慧を以て我無く實法無しと知らば、此時、顚倒の願息む。復次に、揵闥婆城は、城に非ず、人の心に想うて城と爲すのみ。凡夫も亦是の如し、身に非ざるを想うて身と爲し、心に非ざるを想うて心と爲す。問うて曰はく、一事もて知るべし、何んが多くの喩を以てする。答へ

【四七】次に夢の如しを釋す。

て曰はく、「我先に已に答ふ、是摩訶衍は大海の水の如く、一切の法は盡く摩訶衍に攝す、因緣多きが故に譬喩多きも咎無し。復次に、是菩薩は甚深なる利智の故に、種種の法門、種種の因緣、種種の喩もて諸法を壞す。人をして解せしめんが爲の故に、爲に多くの喩を引くべし。復次に、一切の聲聞法の中には揵闥婆城の喩無く、種種の無常の喩有り。色は聚沫の如く、受は泡の如く、想は野馬の如く、行は芭蕉の如く、識は幻及び幻網の如しといふ、經の中の空の譬喩に、是揵闥婆城を以てするも、喩異るが故に此中に說けり。」問うて曰はく、「聲聞法の中には城を以て身に喩ふ。此中に何を以てか揵闥婆城の喩を說く。」答へて曰はく、「聲聞法の中には、城を衆緣の實有なるに喩ふ。但城は是れ假名のみ、揵闥婆城は衆緣も亦無にして、旋火輪の如く、但人の目を惑はす。聲聞法の中には、吾我を破せんが爲の故に城を以て喩と爲す。此中の菩薩は利根にして、深く諸法の空の中に入るが故に、揵闥婆城を以て喩と爲す。是を以ての故に揵闥婆城の如しと說く。」

【四七】夢の如しとは、夢中には實事無きに、之を實有りと謂ひ、覺め已りて無なるを知り、還りて自ら笑ふが如し。人も亦是の如く、諸の結使の眠の中には、實は無なれども而も著す、道を得て覺むる時は、乃ち實無しと知りて、亦復自ら笑ふ。是を以ての故に、夢の如しと言ふ。復次に、夢は眠力の故に法無きを而も見る。人も亦是の如し、無明の眠力の故に、種種無なれども而も有りと見る、謂ゆる我我所、男女等なり。復次に、夢中には、喜ぶ事無きに而も喜び、瞋る事無きに而も瞋り、怖る事無きに而も怖る。三界の衆生も亦是の

【身見】五蘊假和合の身を常住眞實の我なりと執すること

如し、無明の眠の故に瞋るべからざるに而も瞋り、喜ぶべからざるに而も喜び、怖るべからざるに而も怖るるなり。復次に、夢に五種あり、若は身中調はず、若は熱氣多ければ、則ち多く夢に火を見、黄なるを見、赤きを見る。若し冷氣多ければ、則ち多く水を見、白きを見る。若し風氣多ければ、則ち多く飛ぶことを見、黑きを見る。又復聞見する所の事を多く思惟し念ふが故に則ち夢を見る。或は天の夢を與へて未來の事を知らしめんと欲するが故に。是五種の夢は、皆實事無くして而も妄に見るなり。人も亦是の如し、五道の中の衆生は、身見の力の因緣の故に四種の我を見る。色陰は是れ我、色は是れ我所、我中の色、色中の我なり、色の如く受想行識も亦是の如し。四五の二十あり。得道の實智慧もて覺め已れば實無きことを知る。問うて曰はく、「夢は實無しと言ふべからず、何を以ての故に。識心の因緣を得て便ち夢中の識を生じ、種種の緣あればなり。若し是緣無くんば云何が識を生ぜん。」答へて曰はく、「無にして也見るべからざるを而も見る、夢中に人の頭に角あるを見、或は夢に身の虛空に飛ぶを見るも、人は實に角無く、身も亦飛ばざるなり。是故に實無し。」問うて曰はく、「實に人に頭有り、餘處に亦實に角有り、心惑ふを以ての故に、人の頭に角有るを見る。實に虛空有り、亦實に飛ぶ者有り、心惑ふを以ての故に自ら身飛ぶと見るも、實無きには非ざるなり。」答へて曰はく、「實に人に頭有り、實に角有りと雖も、但人の頭に角を生ずるは、是れ妄見なり。」問うて曰はく、「世界は廣大なり、先世の因緣も種種同じからず。或は餘國には人頭に角を生じ、或は一手一足なるもの有らん、

【八】次に影の如しを釋す。

一尺の人あらん、九尺の人あらん。人に角有る、何の怪しむ所ぞ。答へて曰はく、「若し餘國の人に角有るは爾るべし、但夢に此國の識る所の人に、角有りと見るは則ち得べからざるなり。復次に、若し人夢に虛空の邊と方の邊と時の邊とを見ば、是事云何が實有らん。何の處にか虛空無く方無く時無けん。是を以ての故に、夢中には無なるを而も有と見る、汝は先に緣無ければ、云何が識を生ぜんと言へり。五塵の緣無しと雖も、自ら思惟する念力轉ずるが故に法緣生ず。若し「人、二頭有り」と言はば、語に因りて想を生ず。夢中に無なるを而も有と見るも、亦復是の如し、諸法も亦爾なり。諸法は無なりと雖も而も見るべく、聞くべく、知るべきなり。偈に說くが如し。

夢の如く幻の如く、揵闥婆の如く
一切の諸法も、亦復是の如し

是を以ての故に、諸の菩薩は、諸法を夢の如しと知ると說く。

(八)影の如しとは、影は但見るべくして捉ふべからず。諸法も亦是の如し、眼情等の見聞覺知は實に不可得なり。偈に說くが如し。

是實智慧は、四邊捉へ叵し
大火聚の如く、亦觸るべからず
法は受くべからず、亦受くるに應ぜず

復次に、影の如きは、光映ずるときは則ち現じ、映せざるときは則ち無し。諸の結、

煩惱、正見の光を遮れば、則ち我相、法相の影有り。復次に、影の如きは、人去れば則ち去り、人動けば則ち動き、人住すれば則ち住す。善惡業の影も亦是の如し、後世に去る時は亦去り、今世に住する時は亦住し、報斷ぜざるが故に、罪福熟する時は則ち出づ。偈に說くが如し

　空中にも亦逐ひ去り、山石の中にも亦逐ひ
　地底にも亦隨ひ去り、海水の中にも亦入る
　處處に常に隨ひ逐うて、業の影は相離れざるなり

是を以ての故に、諸法は影の如しと說く。復次に、影の空無にして、實を求むるに得べからざるが如く、一切の法も、亦是の如し、空にして實有ること無し。問うて曰はく、影は空にして、實有ること無しと云ふも、是事は然らず。何を以ての故に、阿毘曇に、云何が色入と名くる、青、黃、赤、白、黑、縹、紫、光明、影等及び身業の三種の作色、是を可見の入色と名くと說けばなり。汝、云何が無なりと言ふ。復次に、實に影有り、因緣有るが故に。因を樹と爲し、緣を明と爲し、是二事合して影生ずる有り。云何が無しと言ふ。若し影無くんば、餘法の因緣有る者も亦皆應に無かるべし。復次に、是影の色は見るべし。長短、大小、麤細、曲直の形動けば影も亦動く。是事は皆見るべし。是を以ての故に應に有なるべし。答へて曰はく、影は實に空無なり。汝が言ふ阿毘曇の中の說は、是れ阿毘曇の義を釋する人の作す所の說なり。一種の法門の人、其意を體せずして執して

【鞞婆沙の中等】此處に說けるは有部宗のいふ三世實有法體恒有の說なり。

【九】次に鏡中の像の如しを釋す。

以て實と爲す。鞞婆沙の中に說くが如きは、微塵の至りて細なるは破すべからず、燒くべからず、是れ則ち常有なり。復、三世の中に有る法は、未來の中より出でて、現在に至り、現在より過去に入りて失ふ所無し。是を則ち常と爲す」と。又言はく、「諸の有爲の法は、新新に生滅して住せず」と。若し爾れば是れ則ち斷滅の相を爲す。何を以ての故に。先には有にして今は無なるが故なり。是の如き等の種種の異說は佛語に違背す、此を以て證と爲すべからず。影は今色法に異なる、色法の生ずるには、必ず香、味、觸等有り。影は則ち爾らず、是れ有に非ざるが爲なり。瓶の如きは二根知る、眼根と身根となり。影若し有ならば亦應に二根知るべし。而も是事無し。是を以ての故に、影は實物有るに非ず。但是れ眼を誑かすの法のみ。火燭を提ふるが如し。疾く轉ずれば輪を成すも實に非ず。若し影是れ有の物ならば、應に破すべく滅すべし。若し形滅せざれば、影は終に壞せず、是を以ての故に空なり。復次に、影は形に屬し、自ら在るにあらざるが故に空なり、空なりと雖も、而も心に眼見を生ず。是を以ての故に、諸法は影の如しと說く。

鏡中の像の如しとは、鏡中の像の如きは鏡の作にも非ず、面の作にも非ず、鏡を執する者の作にも非ず、亦自然の作にも非ず、亦因緣無きにも非ず。何を以てか鏡の作に非ざる。若し面未だ鏡に到らざれば則ち像無し、是を以ての故に鏡の作に非ず。何を以てか面の作に非ざる。鏡無ければ則ち像無し。何を以てか鏡を執する者の作に非ざる。鏡無く、面無ければ則ち像無し。何を以てか自然の作に非ざる。若し未だ鏡有らず、未だ面有らざれば則

ち像無し。像は鏡を待ち面を待ちて然る後に有るなり、是を以ての故に自然の作に非ず。何を以てか因縁無きに非ざる、若し因縁無ければ、應に常有なるべし。若し常有ならば、若し鏡を除き面を除くも、亦應に自ら出づべし、是を以ての故に因縁無きに非ず。諸法も亦是の如し、自作に非ず、彼作に非ず、共作にも非ず、因縁無きにも非ざるなり。云何が自作に非ざる。我は得べからざるが故に、一切の因より生ずるの法は自ら作らざるが故に、諸法は因縁に屬するが故に、是を以て、自作に非ず、亦他作に非ずとは、自ら無なるが故に、他も亦無なり。若し他作ならば、則ち罪福の力を失せん。他作に二種あり、若は善、若は不善。若し善ならば、應に一切の樂を與ふべく、若し不善ならば應に一切の苦を與ふべし。若し苦樂雜らば、何の因縁を以ての故に樂を與へ、何の因縁を以ての故に苦を與ふる。若し共ならば、二の過有るが故に、自過と他過となり。若し因縁無くして苦樂を生ぜば、人は應に常に樂にして、一切の苦を離るべし。若し因縁無ければ人は樂の因を作り、苦の因を除くべからず。一切の諸法は必ず因縁有り、愚癡の故に知らざるなり。譬へば人の木より火を求め、地より水を求め、扇より風を求むるが如し。是の如き等の種種、各因縁有り。是苦樂和合の因縁は、先世の業因より生ず。今世の若は好行、若は邪行の縁は、是より苦樂を得、是苦樂種種の因縁は、實を以て之を求むるに、人の作ることも無く、人の受くることも無し。五衆の作を空じ、五衆の受を空ず。無智の人は樂を得れば嬉心に愛著し、苦を得れば瞋恚を生ず。是樂滅する時は、更に求めて得んと欲す。小兒の鏡

中の像を見て、心に樂しみ愛著して己を失ひ、鏡を破りて求索するが如し。智人は之を笑ふ。樂を失うて更に求むるも、亦復是の如し、亦道を得たる聖人の爲に笑はる。是を以ての故に、「諸法は鏡中の像の如し」と說く。復次に、鏡中の像の如きは實に空にして、不生不滅なれども、凡人の眼を誑惑す。一切諸法も亦復是の如し、空にして實無し、生ぜず滅せざれども、凡夫人の眼を誑惑す。問うて曰はく、「鏡中の像は因緣より生ず。面有り、鏡有り、鏡を持つの人有り、明有り、是事和合するが故に像生ず。是像に因りて憂喜を生じ亦因と作り、亦果と作る。云何が實に空にして、生ぜず、滅せずと言ふ。」答へて曰はく、「因緣より生じて、自ら在らざるが故に空なり。若し法、實有ならば、是れ亦因緣より生ずべからず。何を以ての故に。若し因緣の中に、先より有ならば、因緣は則ち用ふる所無く、若し因緣の中に先に無ければ、因緣も亦用ふる所無きを以てなり。譬へば乳の中に若し先より酪有らば、是乳は酪の因に非ざるが如し、酪は先より有るが故なり。若し先に酪無ければ水中に酪無きが如く、是乳も亦因に非ず。若し因無くして酪有らば、水中に何を以てか酪を生ぜざる。若し乳は是れ酪の因緣なりとせば、乳も亦自ら在らず、乳も亦因緣より生ず。乳は牛に從りて有り、牛は水草に從りて有り。是の如く、無邊に皆因緣有り、是を以ての故に、因緣の中に果して有りと言ふことを得ず、無しと言ふことを得ず、有無と言ふことを得ず、有に非ず、無に非ずと言ふことを得ず。諸法は因緣より生じて自性無き、鏡中の像の如し。偈に說くが如し。

【一〇】以下化の如しを釋す。

若し法因縁生ならば、是法性は實に空なり
若し此法空ならずんば、因縁に從りて有なるにあらず
譬へば鏡中の像の如く、鏡に非ず亦面に非ず
亦鏡を持つ人に非ず、自に非ず無因に非ず
有に非ず亦無に非ず、亦復有無に非ず
此語も亦受けず、是の如きを中道と名く

是を以ての故に、諸法は鏡中の像の如しと說く。

【一〇】化の如しとは、十四の變化心有り。初禪に二つ、欲界と初禪となり。二禪に三つ、欲界と初禪と二禪となり。三禪に四つ、欲界と初禪と二禪と三禪となり。四禪に五つ、欲界と初禪と二禪と三禪と四禪となり。是十四の變化心は八種の變化を作す。一には能く小と作りて、乃ち微塵に至る。二には能く大と作りて、乃ち虛空に滿するに至る。三には能く輕と作りて、乃ち鴻毛の如きに至る。四には能く自在と作りて、能く大を以て小と爲し、長を以て短と爲す。是の如く種種有り。五には能く主力有り。大力有る人は下る所無きが故に、主力有りと言ふ。六には能く遠きに到る。七には能く地を動かす。八には意の欲する所に隨うて盡く能く得。一身を能く多身と作し、多身を能く一と作し、石壁皆過ぎ、水を履み、虛を踏み、手に日月を捫り、能く四大を轉じ、地を水と作し、水を地と作し、火を風と作し、風を火と作し、石を金と作し、金を石と作す。是變化に復四種有り。欲界の藥物、寶物、幻術は能く諸物

を變化す。諸の神通ある人は、神力の故に能く諸物を變化す。天、龍、鬼神の輩は生報の力を得るが故に、能く諸物を變化す。色界の生報は、定を修する力の故に、能く諸物を變化す。化人の生老病死無く、苦無く樂無く、亦人に異りて生ずるが如し。是を以ての故に、空にして實無し。一切諸法も亦是の如し、皆生住滅無し。是を以ての故に、諸法は化の如しと說く。

復次に、化生は先づ定まれる物無く、但心生ずるを以て便ち所作有り、皆實有ること無し。人身も亦是の如し、本所因無し。但先世の心に從ひて今世の身を生ず、皆實有ること無し。是を以ての故に、諸法は化の如しと說く。變化の如きは、心滅すれば則ち化滅す。諸法も亦是の如し、因緣滅すれば、果も亦滅して自ら在らず。化事の如きは、實に空なりと雖も、能く衆生をして、憂、苦、瞋恚、喜樂、癡惑を生ぜしむ。諸法も亦是の如し、空にして實無しと雖も、能く衆生をして歡喜、瞋恚、憂怖等を起さしむ。是を以ての故に、諸法は化の如しと說く。復次に、變化生法の初無く、中無く、後無きが如く、諸法も亦是の如し。變化生ずる時、從來する所無く、滅するも亦所去無きが如く、諸法も亦是の如し。復次に、變化の想の淸淨なるが如く、虛空の染著する所無く、罪福の爲に汚されざるが如く、諸法も亦是の如し。法性の如如なるが如く、眞際の自然に常に淨なるが如し。譬へば閻浮提の四大河の一河に五百の小河有りて歸し、是水は種種に不淨なれども、大海水の中に入れば、皆淸淨なるが如し。問うて曰はく、變化の事は空なりと言ふべか

【六因四緣】六因とは有爲法の生ずる因體に六種あるをいふ。一能作因、二俱有因、三同類因、四相應因、五遍行因、六異熟因これなり。四緣とは因緣、等無間緣、所緣緣、增上緣をいふ。

【二】諸法の空を明すに十事もて譬とせしに就いて。

らず。何を以ての故に、變化の心も亦定を修するより得、此心より種種の變化を作せばなり。若は人、若は法は、是化に因有り果有り、云何が空ならん。答へて曰はく、「影の如し」の中に已に答へたるも、今當に更に答ふべし。此因緣は有なりと雖も、變化の果は空なり。口言の所有無きが如し。心は口言を生ずと雖も、心口を以て有とすべからざるが故に、言ふ所は所有無けれども、便ち是れ有なり。若し第二頭、第三手有りと言はば、心口より生ずと雖も、頭有り手有りとは言ふべからず。佛の說きたまふが如きは、「無生を觀るに、有生に從ひて脫するを得、無爲に依るは、有爲に從ひて脫するを得。無生の法を觀ずるに無なりと雖も、而も因緣と作るべし。無爲も亦爾り」と。變化は空なりと雖も、亦能く心の因緣より生ず。譬へば幻、焰等の九の譬喩の如く、無なりと雖も、能く種種の心を生ず。

復次に、化事は六因四緣の中に於て、求むるに得べからず、是中に六因四緣相應せざるが故に空なり。復次に、空は見えざるを以て空と爲さず、其實用無きを以ての故に空と言ふ。是を以ての故に、諸法は化の如しと言ふ。

問うて曰はく、「若し諸法の十の譬喩は、皆空にして異なる無しとせば、何を以てか但十事を以て喩と爲し、山河石壁等を以て喩と爲さざる。」答へて曰はく、「諸法は空なりと雖も、而も分別有り。解し難きの空有り、解し易きの空有り。今は解し易きの空を以て、解し難きの空に喩ふるなり。復次に、諸法に二種有り。心の著する處有り。心の著せざる處

【一三】以下無礙無所畏を明す。

有り。心の著せざる處を以て、心の著する處を破す。『問うて曰はく、『此十の譬喩は何を以てか是れ心の著せざる處なる。』答へて曰はく、『是十事は久しく住せず、生じ易く滅し易し、是を以ての故に、是れ心の著せざる處なり。復次に、人有りて十の喩は耳目を誑惑する法なりと知るも、諸法の空なるを知らざるが故に、此を以て諸法に喩ふ。若し人有り、十の譬喩の中に於て心著して解せず、種種に難論し、此を以て有と爲さば、是十の譬喩は其用を爲さず、應に更に爲に餘の法門を說くべし。』問うて曰はく、『若し諸法は都て空にして生ぜず滅せずんば、是十の譬喩等の種種の譬喩、種種の因緣の論議は、我已に悉く知りて空と爲す。若し諸法は都て空ならば是喩を說くべからず。若し是喩を說かば不空と爲す。』答へて曰はく、『我は空を說いて、諸法の有を破す。今說く所は、若し有と說かば、先に已に破す、若し無と說くも應に難ずべからず。譬へば執事の比丘の高聲に、手を擧げて唱へて『衆、皆寂靜なれ』と言ふが如し。是れ聲を以て聲を遮らんが爲にして、聲を求むるには非ざるなり。是を以ての故に諸法を說くと雖も、空にして不生不滅なり。衆生を愍念するが故に說くと雖も、有には非ざるなり。是を以ての故に、諸法は化の如しと說く。

【經】礙ふること無く、畏るる所無きを得。

【論】種種の衆の界入の因緣の中に心礙ふること無く、盡くること無く、滅すること無し、是を「礙ふること無く、畏るる所無し」と爲す。問うて曰はく、『先に說くが如きは、諸の菩薩は、無量の衆の中に於て畏るる所無し」と。今何を以てか更に「礙ふること無く、畏る

【三】以下悉く衆生の心行の趣く等

る所無し」と說く。』答へて曰はく、「先には畏るる所無きの因を說けり、今は畏るる所無きの果を說く。諸の大菩薩乃至菩薩衆の中に於て、法を說けども盡ること無く、論議すれども滅すること無く、心に疑難無し。已に礙ふること無く、畏るる所無きを得るが故なり。復次に、先に無量の衆の中に於て、畏るる所無きを說くが如き、何等の力を以ての故に、畏るる無きかを知らず。是を以ての故に更に、畏るる所無きは、礙ふること無きの力を得るを以ての故なることを說く。」問うて曰はく、「若し諸の菩薩に亦礙ふること無く畏るる所無きこと有らば、佛と菩薩と何等の異なること有る。」答へて曰はく、「我先に說くが如く、諸の菩薩は自ら無所畏の力有るが故に、諸法の中に於て畏るる所無し。佛の無所畏には非ず。復次に無礙の法に二種有り、一には一切處、二には非一切處なり。非一切處とは、人、一の經書、乃至百千の經書の中に、無礙なれば、若は一衆に入り、若は百千衆の中に入るも、畏るる所無きが如く、諸の菩薩も亦是の如し。自らの智慧の中に無礙なり、佛の智慧には非ず。佛の如きは鉢を放ちたまふ時、五百の阿羅漢及び彌勒等の諸の菩薩も皆取ること能はず。諸の菩薩も亦是の如し、自力の中には無礙なるも、佛の智慧力の中には礙有り。是を以ての故に「諸の菩薩は礙ふること無く、畏るる所無きことを得」と說く

經　悉く衆生の心行の趣く所を知り、微妙の慧を以て之を度脫す。

論　問うて曰はく、「云何が悉く衆生の心行を知る。」答へて曰はく、「衆生の心の種種な

の文を釋する中、初に菩薩は如何にして衆生の心行を知るやを問ふ。

【一四】次に微妙の慧を以て度脫すとは何に名くるやを明す。

る法の中の處處の行を知ること、日光の遍ねく照すが如し。菩薩は悉く衆生の心行の趣向する所有るを知りて、之に敎へて言はく『一切衆生の趣くに二種あり、一には心常に樂を求め、二には智慧分別して能く好惡を知る。汝、著心に隨ふこと莫く、當に智慧に隨ふべく、當に自ら心を責むべし。汝、無數劫來、諸の雜業を集めて厭足すること無く、而も但世樂を馳せ逐うて、苦の爲なることを覺らず。汝、世間を見ずや、樂を貪れば、患を致す。五道に生を受くるは、皆心の爲す所なり、誰か爾らしむる者ならん。汝、狂像の蹈籍殘害して拘制する所無きが如くんば、誰か汝を調ふる者ならん。若し善く調ふることを得ば、則ち世の患を離れん。當に知るべし、胎に處りては不淨にして、苦厄なること猶地獄の如し、既に生れて世に在らば老病、憂悲、萬端なり。若し天上に生ぜば當に復墮落すべし。三界は安きこと無し、汝、何を以てか樂に著すると。是の如く種種に其心は折いて汝に隨はずと呵責す。是を菩薩の衆生の心行を知ると爲す。

(一四) 問うて曰はく『云何が微妙の慧を以て、之を度脫すと名くる。是中に云何が微妙の慧と名け、云何が麁なる智慧と名くる。』答へて曰はく、『世界の巧なる慧は、是を麁なる智慧と名け、施と戒と定とを行ずるは、是を微妙の慧と名く。復次に、布施の智は是を麁なる慧と爲し、戒定の智は是を微妙の慧と名く。復次に、戒定の智は是を麁慧と爲し、禪定の智は是を微妙の慧と名く。復次に、禪定の智は是を麁慧と爲し、無猗の禪定は是を微妙の慧と名く。復次に、諸法の相を取るは是を麁慧と爲し、諸法の相に於て取らず捨てざるは、

【一五】以下意に罣礙無しを釋す。

是を微妙の慧と名く。復次に、無明等の諸の煩惱を破りて、諸法の相を得るは是を覺慧と名け、如法の相に入る者は、譬へば眞金の損せず失せざるが如く、亦金剛の破れず壊せざるが如し、又虚空の染むこと無く、著すること無きが如き、是を微妙の慧と名く。是の如き等の無量の微妙の慧は、菩薩の自ら得て、復衆生に敎ふるところなり。是を以ての故に、一讃の菩薩は、悉く衆生の心行の趣く所を知り、微妙の慧を以て之を度脱す」と説く。

大智度初品中意無礙釋論第十二

【經】意に罣礙無し。

【論】云何が意に罣礙無しと名くる。菩薩は一切の怨親、非怨、非親の人の中に於て、等うして心に礙ふること有ること無し。復次に、一切世界の衆生の中より、若は來りて侵害すれども心に恚り恨みず、若は種種恭敬すれども亦喜悦せず、偈に説くが如し。

　諸佛菩薩をも、心に愛著せず
　外道惡人をも、心に憎恚せず

是の如きの淸淨を名けて「意に罣礙無し」と爲す。復次に、諸法の中に於て、心、無礙なり。問うて曰はく「是菩薩は未だ佛道を得ず、未だ一切智を得ず、云何が諸法の中に

於て、心無礙なる。」答へて曰はく、「是菩薩は無量の清淨の智慧を得るが故に、諸法の中に於て、心無礙なり。」問うて曰はく、「諸の菩薩は、未だ佛道を得ざるが故に無量の智有るべからず。殘結有るが故に清淨の智有るべからず。」答へて曰はく、「是諸の菩薩は、衆生を憐愍するが故に、三界の中の結業の肉身には非ず、皆法身の自在を得、老病死を過ぐれども、衆生を憐愍するが故に、世界の中に在りて行じて佛土を莊嚴し、衆生を教化することを爲す。已に自在を得、佛と成らんと欲すれば能く成る。」問うて曰はく、「法身の菩薩の如きは、則ち佛と異なること無し。何を以てか名けて菩薩と爲し、何を以てか佛を禮し法を聽く。若し佛と異ならば云何が無量の清淨の智有らん。」答へて曰はく、「是菩薩は法身と爲りて、老病死無しと雖も、佛と小しく異なることを、譬へば月の十四日の如し。衆人は「若は滿か、若は不滿か」との疑ひを生ず。菩薩も是の如く、能く佛と作りて、能く法を說くと雖も、然も未だ實に佛と作らず。佛は月の十五日の滿足して疑ひ無きが如し。復次に、無量の清淨に二種有り。一には實に量有るも、量る能はざる者に於て之を無量と謂ふ。譬へば海水の如く、恆河沙等の如き、人の量ること能はざるを、名けて無量と爲す。諸佛菩薩に於て、無量と爲すに非ず。菩薩の無量の清淨智も、亦復是の如し、諸の天、人、及び聲聞、辟支佛に於ては、量ること能はざる所なれば、名けて無量の智と爲す。菩薩は無生道を得る時、諸の結使を斷ずるが故に清淨の智を得るなり。」問うて曰はく、「若し爾時、已に諸の結を斷せば、佛と成る時、復何をか斷ずる所とする。」答へて曰はく、「是清淨に二種

【一六】以下大忍を成就すを釋す

有り。一には佛を得るの時、除結して都て盡して實の淸淨を得、二には菩薩の肉身を捨てて法身を得る時、諸の結を斷じて淸淨なり。譬へば一燈の能く諸の暗を除きて、所作有ることを得れども、更に大燈有れば倍復明了なるが如く、佛、及び菩薩の、諸の結使を斷ずるも亦復是の如し。菩薩の斷ずべき所、已に斷ずと曰ふと雖も、佛の斷ずべき所に於て、猶未だ盡さずと爲す。是を、無量の淸淨智を得るが故に、諸法の中に於て、意に罣礙無しと名く。

經 大忍を成就す。

論 問うて曰はく、『先に已に等忍と法忍とを說けり、今何を以ての故に、復大忍を成就すと說く。』答へて曰はく、『此二忍の增長するを名けて大忍と爲す。復次に等忍は衆生の中に在りて、一切能く忍じて柔順なり。法忍は深法の中に於て忍ず。此二忍增長して證を作し、無生忍を得、最後の肉身に悉く十方の諸佛を見るに、化現して前に在り、空中に於て坐す。是を大忍を成就すと名く。譬へば聲聞法の中に、煖法の增長せるを名けて頂法と爲し、頂法の增長せるを名けて忍法と爲すが如し。更に異法の增長して異と爲ること無し。等忍と大忍とも亦復是の如し。復次に二種の忍有り、生忍と法忍となり。生忍を衆生の中の忍と名く。恒河沙劫等の如き衆生、種種に惡心を加ふるも瞋恚せず、種種に恭敬供養するも心に歡喜せざるなり。復次に、衆生の初無きを觀ず。若し初有れば則ち因緣無し。若し因緣有れば則ち初無し。若し初無ければ亦應に後無かるべし。何を以ての故に、

初と後とは相待の故なり。若し初後無ければ中も亦無かるべし。是の如く觀ずる時常斷の二邊に墮せず、安隱の道を用て衆生を觀じ、邪見を生せず、是を生忍と名け、甚深の法の中に心に罣礙無き、是を法忍と名く。問うて曰はく、何等か甚深の法なる。答へて曰はく、先に甚深法忍の中に說くが如し。復次に、甚深の法とは、十二因緣の中に於て展轉して果を生ずれども、因の中に果有るに非ず、亦果無きに非ず、是中より出づる、是を甚深の法と名く。復次に、三解脫門なる空と無相と無作とに入りて、則ち涅槃の常樂を得るが故に是を甚深の法と名く。復次に、一切の法は空に非ず、不空に非ず、有相に非ず、無相に非ず、有作に非ず、無作に非ずと觀じ、是の如く觀ずる中に心亦著せず、是を甚深の法と名く。偈に說くが如し、

因緣生の法、是を空相と名け
亦假名と名け、亦中道と說く
若し法實有ならば、應に還りて無なるべし
今無にして先有なる、是を名けて斷と爲す
常ならず斷ならず、亦有無ならず
心識の處滅すれば、言說も亦盡く

此深法に於て信心無礙にして、悔いず沒せざる、是を、大忍を成就すと名く。

【經】實の如く巧に度す。

【二七】以下實の如く巧に度すを釋す

【論】外道の法有り、衆生を度すと雖も實の如く度するにあらず。何を以ての故に。種種の邪見の結使殘るが故なり。二乘は度する所有りと雖も、所應の如くに度せず。何を以ての故に、一切智無く、方便心薄きが故なり。唯菩薩のみ有りて、實の如く巧に度す。譬へば渡師の、一人は浮囊草筏を以て之を渡し、一人は方舟を以て渡し、二渡の中、相降ること懸に殊なるが如く、菩薩の巧に衆生を度することも亦是の如し。復次に、譬へば病を治するが如し。苦藥と針灸とは痛みて差すことを得。妙藥有り、蘇陀扇陀と名くるが如きは、病人眼に見れば衆の疾皆愈ゆ。病を除くことは同じと雖も、優劣の法異なれり。聲聞と菩薩との教化して人を度するも、亦復是の如し。苦行頭陀の初中後夜、勤心に坐禪し、苦を觀じて道を得るは聲聞の教なり。諸法の相の縛する無く、解くる無きを觀じて、心に清淨を得るは菩薩の教なり。文殊師利の本縁の如し。文殊師利、佛に白さく、「大德、昔、我先世に無量阿僧祇劫を過ぐ。爾時、佛有り、師子音王と名く。佛、及び衆生の壽は十萬億那由他歳なり。佛は三乘を以て衆生を度したまふ。國を光明と名け、其國中の諸樹は皆七寶を以て成る。樹は無量の清淨の法音、空、無相、無作、不生、不滅、無所有の音を出す。衆生之を聞き心に解して道を得たり。時に師子音王佛の初會の說法に、九十九億の人阿羅漢道を得たり、菩薩衆も亦復是の如し。是諸の菩薩は、一切皆無生法忍を得て種種の法門に入り、無量の諸佛を見たてまつりて恭敬供養し、能く無量無數の衆生を度し、無量の陀羅尼門を得、能く無量の種種の三昧を得、初發心に、新に道門に入るの菩薩は稱數すべか

らず。是佛土の無量の莊嚴は說き盡すべからず。時に佛は教化已に訖り、無餘涅槃に入りたまひ、法に住したまふこと六萬歲なり。諸樹の法音も亦復出です。爾時、二の菩薩の比丘有り。一を喜根と名け、二を勝意と名く。是喜根法師は容儀質直にして、世法を捨てず亦善惡を分別せず。喜根の弟子は聰明にして、法を樂しみ深義を聞く。其師は少欲知足を讃せず、戒行頭陀を讃ぜず、但諸法の實相の清淨のみを說いて、諸〻の弟子に語らく、「一切の諸法は婬欲の相、瞋恚の相、愚癡の相、此諸〻の法相は、卽ち是れ諸法の實相にして、罣礙する所無し」と。是方便を以て、諸〻の弟子に教へ、一相智に入らしむ。時に諸の弟子は、諸人の中に於て、瞋ること無く、悔ゆること無し。心に悔いざるが故に生忍を得、生忍を得るが故に、則ち法忍を得、實法の中に於て、動ぜざること山の如し。勝意法師は戒を持すること清淨に、十二頭陀を行じ、四禪と四無色定とを得。勝意の諸〻の弟子は、鈍根にして求むること多く、分別して是は淨、是は不淨と爲し、心卽ち動轉す。勝意は異時に聚落の中に入り、喜根の弟子の家に至り、坐處に於て坐し、持戒、少欲、知足行、頭陀行、閑處、禪寂を讃說し、喜根を訾毀して言はく「是人は法を說き、人をして邪見の中に入らしむ。是れ婬欲、瞋恚、愚癡の罣礙する所無きの相を說く。是雜行にして、純淸淨に非ず」と。是弟子は利根にして法忍を得、勝意に問うて言はく「大德、是婬欲の法は何等の相とか名くる」と。答へて言はく、「婬欲は是れ煩惱の相なり」と。問うて言はく「是婬欲の煩惱は內に在りや、外に在りや」と。答へて言はく「是婬欲の煩惱は內

に在らず、外に在らず、若し内に在らば、應に外の因縁を待ちて生ずべし。若し外に在らば我に於て事無く、我を惱すべからず」と。居士言はく、「若し婬欲、内に非ず外に非ず、東西南北四維上下より來るに非ずんば、遍く實相を求むるに得べからず。是法は即ち不生不滅ならん。若し生滅の相無くんば、空にして所有無けん。云何が能く煩惱を作さん」と。勝意は是語を聞き已りて、其心悦ばず、答を加ふること能はず、座より起ちて是の如く說いて言はく、「喜根は多く衆人を誑はし、邪道の中に著く」と。是勝意菩薩は未だ音聲陀羅尼を學ばず、佛の所說を聞いて便ち歡喜し、外道の語を聞いて便ち瞋恚す。三不善を聞けば則ち歡喜せず、三善を聞けば大いに歡喜す。生死を說くことを聞けば則ち憂ひ、涅槃を聞けば則ち喜ぶ。居士の家より林樹の間に至り、精舍の中に入り、諸の比丘に語らく、「當に知るべし、喜根菩薩は是人虛誑にして、多く人をして惡邪の中に入らしむ。何を以ての故に、其れ婬、恚、癡の相、及び一切の諸法は、皆無礙の相なりと言へばなり」と。是時喜根は是念を作さく、「此人は大いに瞋りて惡業の爲に覆はる、當に大罪に墮べし。我今當に爲に甚深の法を說くべし。今所得無しと雖も、當に後世佛道の因縁と作さん」と。是時に喜根は僧を集めて一心に偈を說く、

婬欲は即ち是れ道なり、恚と癡とも亦是の如し
此の如き三事の中に、無量の諸佛の道あり
若し人有り婬、怒、癡、及び道を分別せば、

是人は佛を去ること遠し、譬へば天と地との如し
道と及び婬と怒と癡とは、是れ一法にして平等なり
若し人聞いて怖畏せば、佛道を去ること甚だ遠し
婬法は生滅せず、能く心をして惱ましめず
若し人吾我を計して、婬せば將に惡道に入るべし
有無の法の異なるを見ば、是れ有無を離れず
若し有無等しきを知らば、超勝して佛道を成ぜん

是の如き等の七十餘の偈を說く時、三萬の諸天子は無生法忍を得、萬八千の聲聞の人は、一切の法に著せざるが故に皆解脫を得たり。是時、勝意菩薩の身は卽ち地獄に陷入して、無量千萬歲の苦を受け、出でて人中に生れ、七十四萬世常に誹謗せられ、無量劫の中に佛の名を聞かず。是罪漸く薄くなりて、佛法を聞くことを得、出家して道の爲にし、而も復戒を捨つ。是の如く六萬三千世、常に戒を捨て、無量世の中に沙門と作り、戒を捨てずと雖も、諸根闇鈍なり。是喜根菩薩は、今東方に於て、十萬億の佛土を過ぎて佛と作る、其土を寶嚴と號し、佛を光踰日明王と號す」と、文殊師利の言はく「爾時、勝意比丘は我身是なり。我爾時を觀るに是無量の苦を受く」と。文殊師利、復佛に白さく「若し人有り、三乘の道を求め、諸苦を受くることを欲せざる者は、應に諸法の相を破り、瞋恚を懷くべからず」と。佛、文殊師利に問ひたまはく、「汝、諸の偈を聞いて、何等の利を得

ること。答へて曰はく、「我、此偈を聞くことを得て、樂苦を畢り、世世に利根の智慧を得、能く深法を解し、巧に深義を說くこと、諸の菩薩の中に於て最も第一と稱すること、是の如き等を、巧に諸法の相を說くと名け、是を、實の如く巧に度すと名く」

大智度論卷第六

大智度初品中佛土願釋論第十三　卷第七

龍樹菩薩造
後秦龜茲國三藏法師鳩摩羅什 詔を奉じて譯す

【一】無量の諸佛の世界等の文を釋す。

經 無量の諸佛の世界を受けんと願ふ。

論 〔一〕諸の菩薩は、諸佛の世界の無量嚴淨なるを見て、種種の願を發せり。佛世界有り、都て衆苦無く、乃至三惡の名あること無し。菩薩は見已りて自ら願を發して言はく、「我、佛と作る時、世界に衆の苦無く、乃至三惡の名無きこと、亦當に是の如くなるべし」と。佛世界有り、七寶もて莊嚴し、晝夜に、常に清淨の光明有りて、日月有ること無し。便ち願を發して言はく、「我、佛と作るの時、世界に常に嚴淨の光明有ること、亦當に是の如くなるべし」と。佛世界有り、一切衆生、皆十善を行じ、大智慧有りて、衣被飮食は念に應じて至る。便ち願を發して言はく、「我、佛と作るの時、世界の中の衆生の衣被飮食、亦當に是の如くなるべし」と。佛世界有り、純ら諸の菩薩にして、佛の色身の如く、三十二相ありて、光明徹照し、乃至聲聞辟支佛の名有ること無し。亦女人無く、一切皆深妙の佛道を行じ、十方に遊至し、一切を教化す。便ち願を發して言はく、「我、佛と作る時、世界の中の衆生、亦當に是の如くなるべし」と。是の如き等の無量の佛世界の種種の嚴淨、

【二】以下行業清淨の菩薩が發願する所の願に就いて明す。

皆之を得んと願ふ。是を以ての故に、無量の諸佛の世界を受けんと願ふ、と名く。

問うて曰はく、『諸の菩薩は行業清淨にして、自ら淨報を得。何を以てか、要ず願を立てて、然る後に之を得ることを須ひん。譬へば、田家の穀を得るが如き、豈復願を待たん。』答へて曰はく、『福を作ることは、願無ければ、標とする所無し。立願を導御と爲して、能く成す所有り。譬へば金を銷するに、師に隨うて作る所の金は定まること無きが如し。佛の所說の如きは、人有りて少施の福を修し、少戒の福を修し、禪法を知らず、人中に富樂の人有るを聞いて、心に常に念着し、願樂して捨てざれば、命終の後富樂の人の中に生ず。復人有り、少施の福を修し、少戒の福を修し、禪法を知らず、四天王天處、三十三天、夜摩天、兜率陀天、化樂天（專ら色欲を念じ化して來りて己に從ふ。）、他化自在天（此天は他を色欲と化し、之と與に欲を行じ、展轉して是の如きが故に他化自在と名く。）有るを聞いて、心に常に願樂して、命終の後、各其中に生ず。此れ皆願力の所得なり。菩薩も亦是の如く、世界を淨むるの願を修し、然る後、之を得。是を以ての故に願に因りて勝果を受くることを知る。復次に、世界を莊嚴する事は大にして、獨り行いて功德を成ずること能はざるが故に、要ず願力を須ふ。譬へば、牛力は能く車を挽くと雖も、要ず御者を須ちて、能く至る所有るが如し。世界を淨むるの願も、亦復是の如し。福德は牛の如く、願は御者の如し。』問うて曰はく、『若し願を作さざれば福を得ざるや。』答へて曰はく、『得と雖も願有るには如かず。願は能く福を助け、常に行ふ所を念ずれば福德增長す。』問うて曰はく、『若し願を作して報を得ば、人の十惡を作して、地獄を願はざるが

【三】以下無量の佛土等の文を釋し念佛三昧を明す。

如きも、亦地獄の報を得べからざるか。答へて曰はく、『罪福には定報有り、但願を作す者は少福を修すと雖も、願力有るが故に、大なる果報を得。先に罪中の報苦を說くが如し。一切衆生、皆樂を得んと願ふとも、苦を願ふ者無し、是故に、地獄を願はず。是を以ての故に、福には無量の報有れども、罪報には量有り。有人言はく、「最大の罪は阿鼻地獄に在りて、一劫に報を受く。最大の福は非有想非無想處に在りて、八萬大劫の報を受く。諸の菩薩の世界を淨むるの願も、亦無量劫にして道に入り、涅槃を得、是を常樂と爲す」と。問うて曰はく、『泥黎品の中の如きは、般若波羅蜜を謗る罪は、此間の劫盡くれば、復他方の泥黎の中に至る。何を以てか最大の罪は、地獄の中に一劫の報を受くと言ふ。答へて曰はく、『佛法には衆生の爲の故に二道の教化有り。一には佛道、二には聲聞道なり。聲聞道の中には、五逆罪を作る人は、佛、地獄の一劫を受く、と說き、菩薩道の中には、佛法を破する人は、此間の劫盡き、復他方に至りて、無量の罪を受く、と說きたまふ。聲聞法には、最も第一の福は、八萬劫に受け、菩薩道の中には、大福は無量阿僧祇劫に受く。是を以ての故に、福德は要ず願に順ず。是を、無量の諸佛の世界を受けんと願ふ、と名く。

經 無量の佛土、諸佛の三昧を念ずれば、常に現じて前に在り。

論 (三)無量の佛土を十方諸佛の土と名く。念佛三昧を十方三世の諸佛、常に心眼を以て見るに、前に在りて現ずるが如しと名く。問うて曰はく、『云何が念佛三昧と爲す。答へて曰は

【摩伽羅】(Makara) マカラ 大魚と譯す

く、念佛三昧に二種有り。一には聲聞法の中に、一佛身の心眼に於て、滿十方を見る。二には菩薩道にして、無量の佛土の中に於て、三世十方の諸佛を念ず。是を以ての故に、無量の佛土、諸佛の三昧を念ずれば、常に現じて前に在り、と言へり。問うて曰はく、「菩薩の三昧の如きは種種無量なり。何を以ての故に、但是菩薩、念佛三昧すれば、常に現じて前に在り、と讃ずるや」と。答へて曰はく、「是菩薩は佛を念ずるが故に、佛道の中に入ることを得。是を以ての故に念佛三昧すれば常に現じて前に在るなり。復次に念佛三昧は、能く種種の煩惱及び先世の罪を除く。餘の諸の三昧は、能く婬を除くこと有れども、瞋を除くこと能はず。能く瞋を除くこと有れども、婬を除くこと能はず。能く癡を除くこと有れども、婬と恚とを除くこと能はず。能く三毒を除くこと有れども、先世の業を除くこと能はず。是念佛三昧は、能く種種の煩惱と種種の罪とを除く。復次に、念佛三昧は大福徳有りて、能く衆生を度す。是の諸の菩薩は衆生を度せんと欲す、諸餘の三昧は、此念佛三昧の福徳の能く速に諸罪を滅するが如き者無し。說くが如くんば昔五百の估客有り、海に入りて寶を採り、摩伽羅魚王に値ふ。口を開くに海水中に入り、船去ること駛疾なり。船師、樓上の人に問はく、「汝、何等をか見る」と。答へて言はく、「三の日出で、白山羅列し、水流れて奔り趣き、大なる坑に入るが如くなるを見る」と。船師、言はく、「是れ摩伽羅魚王の口を開くなり。一は是れ實の日、兩日は是れ魚の眼、白山は是れ魚の齒、水の流れて奔り趣くは、是れ其口に入るなり。我曹了りなん。各各諸の天神の以て自らを救濟せんこ

【四】能く無量の諸佛を請ずに就て明す。

とを求めよ」と、是時、諸人は各各其事ふる所を求むれども、都て徐する所無し。中に五戒の優婆塞有り。衆人に語つて言はく、「吾等當に共に南無佛と稱すべし。佛は無上爲り、能く苦厄を救ひたまふ」と。衆人一心に同聲に、南無佛と稱す。是魚は、先世是れ佛の破戒の弟子なり。宿命智を得、佛を稱ふるの聲を聞いて、心自ら悔悟し、即便口を合し、船人脱することを得たり。佛を念ずるを以ての故に、能く重罪を除き、諸の苦厄を濟ふ、何に況んや念佛三昧をや。

復次に、佛は法王爲り、菩薩は法將爲り。尊ばれ、重んぜらるる所は、唯佛世尊のみなり。是故に應に常に佛を念ずべし。復次に、常に佛を念ずれば、種種の功德の利を得。譬へば大臣の特に恩寵を蒙りて、常に其主を念ずるが如し。菩薩も亦是の如く、種種の功德無量の智慧は、皆佛より得ることを知りて、恩の重きことを知るが故に、常に佛を念ず。汝云何が常に佛を念じ、餘の三昧を行ぜざる者と言ふ。今常に念ずと言ふも、亦餘の三昧を行ぜずとは言はず。念佛三昧を行ずること多きが故に、常に念ずと言ふ。復次に、先に空と無相と無作の三昧を說くと雖も、未だ念佛三昧を說かず、是故に、今說くなり。

經 能く無量の諸佛を請ず。

論 (四)請ずるに二種あり。佛初めて道を成じたまふとき、菩薩は夜三たび晝三たび、六時に禮請し、偏に右の肩を袒ぎ、合掌して、言さく、「十方佛土の無量の諸佛、初めて道を成じたまふ時、未だ法輪を轉じたまはず、我某甲一切諸佛の衆生の爲に、法輪を轉じて一切を

【五】説法度生は諸佛の法なるに、人の請を須つは何ぞや。

【須扇多佛】スシヤーンタ(Susānta) 甚浄と譯す。

度脱したまはんことを請ふ」と。一には諸佛の無量の壽命を捨てて、涅槃に入らんと欲したまふ時、菩薩も亦夜三時、晝三時に偏に右の肩を袒ぎ、合掌して言さく、「十方佛土の無量の諸佛、我某甲、久しく世間に住せしめて、無央數劫一切を度脱し、衆生を利益したまはんことを請ふ」と。是を能く、無量の諸佛を請す、と名く。

問うて曰はく、「諸佛の法は法として應に説法して、廣く衆生を度すべし。請と不請と法自ら應に爾るべし。何を以てか請を須たん。若し目前に於て、面り諸佛を請ずるは則ち可なり。今十方無量の佛土の諸佛も亦自ら見えず、云何が請ずへけん。」答へて曰はく、「諸佛は必ず應に説法すべく、人の請ふことを待たずと雖も、請ずる者も亦當に福を得べし。大國王の如きは、美膳多しと雖も、人有りて請ずれば、必ず恩福を得、其心を歡ばするが故なり。又慈心の如きは、諸の衆生をして、快樂を得しめんと念ず。衆生は得る所無しと雖も、念ずる者は大いに其福を得。佛の説法を請ずるも、亦復是の如し。復次に、諸佛有りとも、人の請ずる無ければ、便ち涅槃に入りて法を説かず。法華經の中の多寶世尊の如きは、人の請ずること無きが故に、便ち涅槃に入り、後、佛身及び七寶の塔を化して、法華經を説くことを證するが故に、一時に出現したまふ。亦須扇多佛の如きは弟子の本行未だ熟せざれば、便ち捨てて涅槃に入り、化佛に留まること一劫、以て衆生を度したまふ。今是釋迦文尼佛は、道を得るの後、五十七日、寂として法を説かず、自ら言はく、『我法は甚深にして、解し難く知り難し。一切衆生は世法に縛著して、能く解する者無し。』默然として涅

槃の樂に入らんには如かず」と。是時に、諸の菩薩と及び釋提桓因と梵天王と諸天とは、合掌敬禮して、佛を請ずらく、「諸の衆生の爲に初めて法輪を轉じたまへ」と。佛、時に默然として請を受け、後、波羅奈の鹿林の中に到り、法輪を轉じたまへり。是の如くんば云何が請じて益する所無しと言はん。復次に、佛法は等しく衆生を視て、貴ぶこと無く、賤むこと無く、輕んずること無く、重んずること無く、人の請ずる者有れば、其請の爲の故に、法を說くと爲す。衆生は而り佛を請ぜずと雖も、佛は常に其心を見て、亦彼の請を聞きたまふ。假令諸佛は聞かず見ずとも、佛を請ぜば亦福德有り。何に況んや、佛悉く聞見して而も益する所無からんや。問うて曰はく、『既に佛を請じて益有ることを知る。何を以てか、正しく二事を以て請ずる』答へて曰はく、「餘は請ずべからず、此二事を以て要必ず請ずべし。若し請ぜずして說かば外道の輩有りて言はん、「體道常に定れり、何を以てか法に著して多言多事なる」と。是を以ての故に須らく請じて而して說くべし。有人の言ふが若し、若し諸法の相を知らば、壽を貪り久しく世間に住すべからず、而るを早く涅槃に入らず、是を以ての故に須らく請ずべし。若し請ぜずして說かば、人當に謂ふべし、佛は法に愛著し人をして知らしめんと欲すと。是を以ての故に要ず人の請ずるを待ちて法輪を轉ず。諸の外道の輩は自ら法に著し、若は請じ、若は請ぜざれども、而も自ら人の爲に說く。佛は諸法に於て著せず、愛せず、衆生を憐愍したまふが爲の故に、佛說を請ふ者有れば、佛便ち爲に說きたまふ。諸佛は請ずること無きを以て、初めて法輪を轉じたま

はす。偈に說くが如し。

諸佛の說は何れか實、何者か是れ不實なる
實と不實と、二事不可得なり
是の如きは眞實の相にして、諸法に戲れず
衆生を憐愍するが故に、方便もて法輪を轉す

復次に、佛、若し請せらるること無くして、自ら法を說きたまはば、是れ自ら顯し、自ら執するの法と爲す。應に必ず十四の難を答ふべし。今諸天佛の說法を請ずるは、但老病死を斷ずるが爲にして戲論する處無し。是故に十四の難を答へざれども咎無し。是因緣を以ての故に、請を須ちて法輪を轉じたまふ。復次に、佛は人中に在りて生れ、大人の法を用ふるが故に、大慈有りと雖も、請せざれば說きたまはず。若し請ぜずして說かば、外道に譏られん。是を以ての故に佛は要ず請を須つ。又復外道は梵天に宗事す、梵天自ら請ずるときは、即ち外道の心伏す。復次に菩薩の法は、晝三時、夜三時、常に三事を行ず。一には、清旦に偏に右の肩を袒ぎ、合掌して、十方の佛を禮して言さく、「我某甲、若は今世、若は過世、無量劫の身口意に惡業の罪を、十方現在の佛前に於て懺悔したてまつる。「願くは滅除して、復更に作らざらしめんことを」と。中、暮、夜の三も亦是の如し。二には十方三世の諸佛の行じたまふ所の功德、及び弟子衆の有する所の功德を念じ、隨喜し勸助す。三には現在の十方の諸佛の初めて法輪を轉せられんことを勸請し、及び諸佛、久

【六】以下能く種種の見纏等の文を釋するに斷常の二見等各種の見竝に纏煩惱を說く。【身見】身に於て實我を執する邪見【邊見】或は斷見或は常見の一邊に偏する惡見をいふ【邪見】因果の道理を撥無するもの【見取】見取る見のこと、劣りたる知見を始めとし、其他種種の劣事を取りて此最勝妙なりと思ふもの。【戒取】戒禁取見のこと。非理非過の戒或は禁術等を以て解脫に至るの道なりと執する惡見。【纏】煩惱のよく身心を縛して自在ならしめざるをいふ。

く、世間に住して、無量劫に一切を度脫したまはんことを請ふ。菩薩は此三事を行ずる功德無量にして、將に佛を得るに近し。是を以ての故に請を須つ。

【經】能く種種の見纏、及び諸の煩惱を斷ず。

【論】見に二種あり、一には常、二には斷なり。常見とは五衆の常を見て常に心に忍樂す。斷見とは五衆の滅を見て心に忍樂す。一切の衆生は多く此二見の中に墮す。菩薩は自ら此二を斷じ、亦能く一切衆生の二見を除いて、中道に處らしむ。復二種の見有り、有見と、無見となり。復三種の見有り、一切法忍と、一切法不忍と、一切法亦忍亦不忍となり。復四種の見有り、世間常と、世間無常と、世間亦常亦無常と、世間亦非常亦非無常となり。我及び世間の有邊無邊も亦是の如し。死後如去有り、死後不如去有り、死後如去不如去有り、死後亦不如去亦不不如去有り。復五種の見有り。身見と邊見と邪見と見取と戒取となり。是の如き等の種種の諸見、乃至六十二見を斷ず。是の如き諸見は種種の因緣より生じ、種種の智門の觀は種種の邊に聞けり。是の如きの種種の相は能く種種の結使と爲り、因と作りて、能く衆生に種種の苦を與ふ。是を種種の見と名く。見の義は後に當に廣く說くべし。纏とは十纏にして、瞋纏、覆罪纏、睡纏、眠纏、戲纏、掉纏、無慚纏、無愧纏、慳纏、嫉纏なり。復次に、一切の煩惱は結んで心を繞るが故に、盡く名けて纏と爲す。煩惱とは能く心をして煩ひ、能く惱を作さしむるが故に名けて煩惱と爲す。煩惱に二種有り、內著と外著となり。內著とは五見と疑と慢と等なり。外著とは婬瞋等の無明なり。內外共

【跋陀婆羅】バドラパーラ(Bhadrapāla)善守と譯す。

に復三種の結有り、一は愛に屬し、二は見に屬す。復三種有り、婬に屬し、瞋に屬し、癡に屬す。是を煩惱と名く。纒とは、有人言はく、十纒なりと。有人言はく、五百の纒有りと。煩惱を一切結使と名く、結に九有り、使に七有り、合して、九十八結と爲す。迦旃延子の阿毘曇の義の中に說くが如し、十纒と九十八結とを百八の煩惱と爲す。犢子兒の阿毘曇の中には、結使も亦同じく纒に五百有りと。是の如きの諸の煩惱を、菩薩は能く種種の方便もて自ら斷じ、亦能く巧に方便もて他人の諸の煩惱を斷ぜしむ。佛在す時の三人の如きは、伯、仲、季たり。聞くならく、毘耶離國に婬女人有り、菴羅婆利と名く、舍婆提に婬女人有り、須曼那と名く。王舍城に婬女人有り、優鉢羅槃那と名くと。三人有り、各各人の、三女人は端正無比なり、と讃ずるを聞き、晝夜に專念し、心著して捨てず、便ち夢中に於て夢に與に事に從ふ。覺め已りて心に念ずらく、「彼女も來らず、我も亦往かず、而も婬事を辨ずることを得たり、是に因りて一切諸法も皆是の如くなりや」と悟れり」と。是に於て跋陀婆羅菩薩の所に往き到り、是事を問ふ。跋陀婆羅答へて言はく、「諸法は實に爾なり、皆念に從ひて生ず」と。是の如く、種種に此三人の爲に方便して、巧に諸法の空を說けり。是時三人は即ち阿鞞跋致を得たり。是諸の菩薩も亦復是の如く、諸の衆生の爲に種種に巧に法を說き、諸の見と纒と煩惱とを斷ず。是を、能く種種の見纒、及び諸の煩惱を斷ず、と名く。

經 百千三昧に遊戲し出生す。

【七】百千三昧に等の文を釋し、初に三昧を明す。

【八】諸菩薩が百千三昧に遊戲し出生する所以を明す

【九】三昧に遊戲する所以を明す。

【註】諸の菩薩は禪定心もて、清淨の智慧、方便力を調ふるが故に能く種種の諸の三昧を生ず。何等をか三昧と爲す。善心一處に住して動ぜざる、是を三昧と名く。復三種の三昧有り、有覺有觀と無覺有觀と無覺無觀三昧となり。復四種の三昧有り、欲界繫三昧、色界繫三昧、無色界繫三昧、不繫三昧なり。是中、用ふる所の菩薩の三昧は先に說くが如し。佛の三昧の中に於て、未だ勤行勤修を滿ぜざるが故に、能く出生す、と言ふ。

問うて曰はく、『諸の菩薩は何を以ての故に、是百千種の三昧を出生し遊戲する。』答へて曰はく、『衆生無量なれば、心行同じからず。利有り鈍有り、諸の結使に於て、厚き有り薄き有り。是故に菩薩は百千種の三昧を行じ、其塵勞を斷ず。譬へば諸の貧人の爲に大富ならしめんと欲せば、當に種種の財物を備へ、一切を備具して、然る後乃ち能く諸の貧者を濟ふが如し。又復人の廣く諸病を治せんと欲せば、當に種種の藥草を備へて、然る後に能く治するが如し。菩薩も亦是の如く、廣く衆生を度せんと欲するが故に、種種百千の三昧を行ず。』

問うて曰はく、『但當に此三昧を出生すべし、何を以ての故に、復其中に遊戲する。』答へて曰はく、『菩薩の心、諸の三昧を生じ、欣樂して出入自在なる、之を名けて遊戲と爲す、結愛の戲には非ざるなり。戲を自在と名く、師子は鹿の中に在りて、自在に畏無きが如くなるが故に名けて戲と爲す。是諸の菩薩の、諸の三昧に於て、自在の力有りて、能く出で能く入ることも、亦復是の如し。餘人は三昧の中に於て、能く自在に入れども、自在

に住し、自在に出づること能はず、自在に住するもの有れども、自在に入り自在に出づること能はず。自在に出づること有れども、自在に住し自在に入ること能はず、自在に入り自在に住すること有るも、自在に出づること能はず、自在に住し自在に出づること有るも、自在に入ること能はず。是の諸の菩薩は能く三種自在なるが故に。百千の三昧に遊戯し出生すと言ふ。

【經】諸の菩薩は是の如き等の種種無量の功徳を成就す。

【論】〔一〇〕是の諸の菩薩は佛と共に住し、其功徳を讃ぜんと欲すること無量億劫たるも盡すことを得べからず、是を以ての故に、無量の功徳を成就す、と言ふなり。

【經】其名を颰陀婆羅菩薩と秦に善守と言ふ、刺那伽羅菩薩と秦に寶積と言ふ、導師菩薩、那羅達菩薩、星得菩薩、水天菩薩、主天菩薩、大意菩薩、益意菩薩、增意菩薩、不虛見菩薩、善進菩薩、勢勝菩薩、常勤菩薩、不捨精進菩薩、日藏菩薩、不缺意菩薩、觀世音菩薩、文殊尸利菩薩と秦に妙徳と言ふ、執寶印菩薩、常擧手菩薩、彌勒菩薩と曰ふ。是の如き等の、無量千萬億那由他の諸の菩薩摩訶薩は、皆是れ補處にして尊位を紹ぐ者なり。

【論】是の如き等の諸の菩薩は、佛と共に王舍城の耆闍崛山の中に住す。問うて曰はく、〔一一〕是の如きの菩薩は衆多なり、何を以てか、獨り二十二菩薩の名を說く。答へて曰はく、諸の菩薩は無量百千萬億にして、說を盡すべからず。若し都て說くも、文字の載すること能はざる所なり。復次に、是中に、二種の菩薩有り、居家と出家となり、善守等の十六の菩薩

【一〇】諸の菩薩等の文を釋す。

【一一】其名を颰陀婆羅菩薩等の文を釋し、今二十二菩薩のみを說き、及び其次第を明す。

は、是れ居家の菩薩なり、颰陀婆羅居士菩薩は、是れ王舍城の舊人、寶積王子菩薩は、是れ毘耶離國の人、星得長者子菩薩は、是れ瞻波國の人、導師居士菩薩は、是れ舍婆提國の人、那羅達婆羅門菩薩は是れ彌梯羅國の人、水天は、優婆塞の菩薩なり。慈氏、妙德菩薩等は、是れ出家の菩薩なり。觀世音菩薩等は、他方の佛土より來れり。若し居家を先とせば一切の居家の菩薩を攝す。出家多方も亦是の如し。問うて曰はく、「善守菩薩は何の殊勝なること有りてか最も前に在りて說くや。若し最大なるものを前に在かば、應に遍吉、觀世音、得大勢菩薩等を說くべし。若し最小なるものを前に在かば、應に肉身初發意の菩薩等を說くべし。」答へて曰はく、「大を以てせず小を以てせず。善守菩薩は是れ王舍城の舊人、白衣の菩薩の中にて最大なるを以て、佛、王舍城に住して、般若波羅蜜を說きたまはんと欲す。是を以ての故に最も前に在りて說くなり。復次に、是善守菩薩は無量の種種の功德有り、般舟三昧の中の如き、佛、自ら現前に其功德を讚じたまふ。」問うて曰はく、「若し彌勒菩薩は應に補處と稱すべし。諸餘の菩薩は、何を以てか復尊位を紹ぐ者と言ふや。」答へて曰はく、「是の諸の菩薩は、十方の佛土に於て皆佛處を補へばなり。」

大智度初品中放光釋論第十四

【經】爾時、世尊は自ら師子座を敷き、結加趺坐して身を直くし、繫念前に在りて、三昧王

三昧に入りたまへば、一切の三昧は悉く其中に入る。

【一二】問うて曰はく、「佛には侍者、及び諸の菩薩有り、何を以ての故に自ら師子座を敷きたまふ。」答へて曰はく、「此は是れ佛の化成したまふ所なり、以て大衆に適することを欲す。是を以ての故に、阿難は、敷くことを得る能はず。復次に、佛心の化作の故に、自ら敷くと言ふ。」

【一三】問うて曰はく、「何を以て師子座と名け、佛の化作の師子と爲すや。實の師子來ると爲し、金銀木石を以て師子を作ると爲すや。又、師子は畜獸に非ざるが故に佛の道ひたまはざる所なり。亦因縁無きが故に來るべからず。」答へて曰はく、「是を號して師子と名くれども、實の師子には非ざるなり。佛は人中の師子たり。佛の坐したまふ處は、若は床、若は地、皆師子座と名く。譬へば、今は國王の坐處を、亦師子座と名くるが如し。復次に、王は健かなる人を呼んで、亦人師子と名け、人は國王を稱して、亦人師子と名く。又師子の如きは四足獸の中に、獨歩無畏にして、能く一切を伏す。佛も亦是の如し、九十六種の道の中に於て、一切を降伏して、畏るる無きが故に人師と名く。」

【一四】問うて曰はく、「多くの坐法有り、佛は何を以ての故に、唯結加趺坐を用ひたまふ。」答へて曰はく、「諸の坐法の中、結加趺坐は最も安隱にして疲極せず。此は是れ坐禪の人の坐法なり。手足を攝持し心も亦散せず。又一切四種の身儀の中に於て、最も安隱なり。此は是れ禪坐にして、道法を取るの坐なり。魔王は之を見て其心憂怖す。此の如きの坐は出家人

【一二】以下、爾時世尊は自ら等の文を釋し、初に自ら師子座を敷けるを明す。

【一三】佛の座を師子座と名くるに就いて。

【一四】多くの坐法の中に結加趺坐を用ふるに就いて。

【一五】三昧王三昧を明す。

の法なり。林樹の下に在りて結加趺坐す、衆人は之を見て皆大いに歡喜し、此道人は必ず當に道を取るべし、と知る。偈に說くが如し。

若し結加趺坐すれば、身安く三昧に入り
威德の人敬仰す、日の天下を照すに
睡嬾の覆心を除くが如く、身輕くして疲れ懈らず
覺悟も亦輕便なり、安坐すること龍の蟠るが如し
畫ける加趺坐を見るも、魔王亦愁ひ怖る
何に況んや入道の人の安坐して、傾き動ぜざるをや

是を以ての故に結加趺坐す。

復次に、佛は弟子に是の如く坐すべきを敎へたまふ。外道の輩有りて、或は常に翹足して道を求め、或は常に立ち、或は荷足す、是の如き狂狷は心邪海に沒し、形安隱ならず、是を以ての故に、佛は弟子をして結加趺し、身を直くして坐せしむ。何を以ての故に、身を直くすれば心を正し易きが故なり。其身直く坐すれば則ち心懶からず、端心正意なれば、繫念前に在り。若し心馳せ散ずれば、之を攝めて還りて三昧に入らんと欲せしむ。故に種種に馳念すれども、皆亦之を攝す。此の如く繫念すれば三昧王三昧に入る。

(一五)云何が三昧王三昧と名くる。是三昧は、諸の三昧の中に於て、最も第一自在にして、能く無量の諸法を緣ず。諸人の中、王は第一にして、王の中にては轉輪聖王を第一とし、

【阿那含】アナーガーミン(Anāgāmin)不還と譯す、聲聞四果の一。

一切の天上天下には佛第一なるが如し。此三昧も亦是の如く、諸の三昧の中に於て最も第一なり。問うて曰はく、「若し佛力を以ての故に、一切の三昧は皆第一なるべくんば、何を以ての故に、獨り三昧を王と稱して第一と爲す。」答へて曰はく、「實に佛の力を以ての故に、佛の行じたまふ所の諸の三昧は、皆第一なるべしと雖も、然も諸法の中に、自に差降あるべし。轉輪聖王の衆寶の如きは一切諸王の寶に勝ると雖も、然も此珍寶の中にも自ら差別有りて、貴賤懸に殊なれり。是三昧王三昧は、何の定にか攝し、何等の相にか攝せん。有人言はく、三昧王三昧を名けて自在の相と爲し、善の五衆に攝し、第四禪の中に在り。何を以ての故に。一切の諸佛は第四禪の中に於て、見諦道を行じ阿那含を得、即時に十八心の中に佛道を得、第四禪の中に在りて壽を捨て、第四禪の中に於て無餘涅槃に入ればなり。第四禪の中に八生住處あり。背捨、勝處、一切入は、多く第四禪の中に在り。第四禪を不動と名け、禪定の法を遮ること無し。欲界の中の五の欲は禪定心を遮る、初禪の中には覺觀の心動き、二禪の中には大喜動き、三禪の中には大樂動く、四禪の中には動くこと無し。復次に、初禪は火に燒かれ、二禪は水の及ぶ所、三禪は風の至る所なるも、四禪には此三の患無く、出入の息無く、念を捨てて清淨なり。是を以ての故に王三昧は、應に第四禪の中に在るべし。好き寶物は、之を好き處に置くが如し。更に有人言はく、佛の三昧は誰か能く其相を知らんや。一切の諸佛の法は一相として相無く、無量無數にして不可思議なり。諸餘の三昧すら尚量るべからず、數ふべからず、思議すべからず、

何に況んや三昧王三昧をや。此の如きの三昧は唯佛のみ能く知りたまへり。佛の神足持戒の如きは、尚知るべからず、何に況んや三昧王三昧をや。復次に、三昧王三昧とは、一切の諸の三昧皆其中に入るが故に、三昧王三昧と名く。譬へば閻浮提の衆川萬流、皆大海に入るが如く、亦一切の人民、皆國王に屬するが如し。問うて曰はく、「佛は一切智にして、知らざる所無し。何を以ての故に此三昧王三昧に入りて、然る後に能く知りたまふや。」答へて曰はく、『智慧は因緣より生ずることを明にせんと欲するが故に、外道の六師の輩の「我等が智慧は一切時に常に有り常に知る」と言ふを止めんが故なり。是を以ての故に、佛は王三昧に入りて知りたまひ、入らざれば則ち知りたまはずと言ふなり。』問うて曰はく、「若し是の如くんば、佛の力は減劣なりや。」答へて曰はく、「是三昧王三昧に入るは、時に以て難しと爲さず、念に應じて即ち得、聲聞、辟支佛、諸の小菩薩の、方便もて求めて入るが如きには非ず。復次に、是三昧王三昧の中に入れば、六神通をして十方に通徹せしめて限無く量無し。復次に、佛、三昧王三昧に入りて種種に變化し、大神力を現はしたまふ。若し三昧王三昧に入らずして神力を現はさば、人有り心に念じて、「佛は幻力呪術の力を用ひたまふ。或は是れ大力の龍の力、或は是れ天にして、是れ人に非ず。何を以ての故に。一身より無量の身を出し、種種の光明變化有るが故なり」と謂ひ、人に非ずと爲さん。此疑を斷ずるが故に、佛、三昧王三昧に入りたまふ。復次に、佛、若し餘の三昧の中に入りたまはば、諸天、聲聞、辟支佛、或は能く測り知らん。佛の神力は大なりと言ふと雖も、

【十住】既に信を得たれば進んで佛地に住する位。

猶知るべくんば、敬するの心重からず、是を以ての故に三昧王三昧の中に入りたまふ。一切の諸の衆聖乃至十住の菩薩も測り知ること能はず、佛心は何の依る所、何の緣ずる所といふことを知らず。是を以ての故に佛は三昧王三昧に入りたまふ。復次に、佛、有時、大光明を放ち、大神力を現じたまふ。生れたまふ時、道を得たまふ時、初めて法輪を轉じたまふ時の如く、諸天、聖人の大いに集會する時も、若は外道を破する時も、皆大光明を放ちたまふ。今其殊特を現さんと欲するが故に、大光明を放ち、十方の一切の天人、衆生及び諸の阿羅漢、辟支佛、菩薩をして、皆見知することを得しむ。是を以ての故に三昧王三昧に入りたまふ。復次に、光明神力に、上中下有り。呪術、幻術の能く光明變化を作すは下なり。諸天龍神の報を得る光明神力は中なり。諸の三昧に入り、今世の功德心力を以て大光明を放ち大神力を現ずるは上なり、是を以ての故に佛は三昧王三昧に入りたまふ。問うて曰はく、諸の三昧の如きは各各相有り、云何が一切の三昧悉く其中に入る。答へて曰はく、是三昧王三昧を得る時は、一切の三昧悉く得るが故に、悉く其中に入ると云ふ。是三昧力の故に、一切の諸の三昧、皆得ること無量無數にして思議すべからず。是を以ての故に名けて入ると爲す。復次に、是三昧王三昧の中に入れば、一切の三昧に入らんと欲して即ち入る。復次に、是三昧王三昧に入れば、能く一切の三昧の相を觀ること山上より下を觀るが如し。復次に、佛、是三昧王三昧の中に入りて、能く一切十方の世界を觀じ、亦能く一切の衆生を觀ず。是を以ての故に、三昧王三昧に入りた

【一六】爾時、世尊三昧より等の文を釋す、初に世尊が三昧より起ちて世界を觀視するに就いて。

【一七】佛が天眼もて世界を觀視せる所以を明す。

まふ。」

經 爾時、世尊、三昧より、安庠として起ち、天眼を以て世界を觀視し、身を擧げて微笑したまふ。

論 (一六)問うて曰はく、『云何が世尊は三昧王三昧に入り施作する所無くして、定より起ちて世界を觀視したまふ。』答へて曰はく、『佛は是三昧王三昧に入り、一切の佛法の寶藏を悉く看たまふ。是三昧王三昧の中に觀已りて自ら念じたまはく、「我此法藏は無量無數にして思議すべからず」と。然る後、三昧より安庠として起ち、天眼を以て衆生を觀、衆生の貧苦を知りたまふ。此寶藏は因緣に從ひて得、一切衆生も皆亦得べし。但癡冥に坐して、求めず索めず。是を以ての故に、身を擧げて微笑したまへり。』

(一七)問うて曰はく、『佛には佛眼、慧眼、法眼有りて天眼よりも勝れたり、何を以てか天眼を用て世界を觀視したまふ。』答へて曰はく、『肉眼の見る所は、遍からざるが故なり。慧眼は諸法の實相を知り、法眼は、「是人は何の方便を以て何の法を行じて、道を得るや」を見る。佛眼は、一切の法を現前に了了に知るを名く。今天眼は、世界及び衆生を緣じて、障無く礙無し、餘眼は爾らず。慧眼、法眼、佛眼は勝れたりと雖も、衆生を見るの法には非ず。衆生を見んと欲せば、唯二眼を以てす。肉眼と天眼となり。肉眼は遍からず。障ふる所有るを以ての故に、天眼を用て觀ずるなり。』問うて曰はく、『今、是眼は佛に在り、何を以てか、名けて天眼と爲す。』答へて曰はく、『此眼は多く天中に在り、天眼の見る所

【四八】擧身微笑の因緣に就いて明す

は山壁樹木を礙へず。若し人精進、持戒、禪定、行力の得は、是生の分に非ず、是を以ての故に名けて天眼と爲す。復次に、人は多く天を貴び、天を以て王と爲す、佛、人心に隨ひたまふ。是を以ての故に名けて天眼と爲す。復次に、天に三種有り、名天と生天と淨天となり。名天とは天王天子是なり。生天とは釋梵の諸天是なり。淨天とは佛、辟支佛、阿羅漢是なり。淨天の中の尊者は是れ佛なり。今天眼と言ふも亦咎無し。天眼を以て世界を觀視せば、世界の衆生は常に安樂を求むるを以て、更に苦心を得て吾我に著す。是中實に吾我無し、衆生は常に苦を畏れて而も苦を行ふ。盲人の好き道を求むれども、反りて深坑に墮するが如し。是の如き等をば、種種に觀已りて、身を擧げて微笑したまふ。

問うて曰はく、笑は口より生ずるも、或時は眼笑ふ、今云何が一切の身笑ふと言ふや。答へて曰はく、佛は世界の中の尊にして自在を得、能く一切の身をして、口の如く、眼の如くならしむるが故に皆能く笑ふ。復次に、一切の毛孔皆開くが故に名けて笑ふと爲す。口笑ひ、歡喜するに由るが故に一切の毛孔皆開く。問うて曰はく、佛は至つて尊重なり、何を以ての故に笑ひたまふ。答へて曰はく、大地の如きは無事及び小因緣を以て動かず。佛も亦是の如し、若し無事及び小因緣なれば、則ち笑ひたまはず。今は大因緣の故に一切の身笑ひたまふ。云何が大と爲す、佛、摩訶般若波羅蜜を説いて、無央數の衆生の當に佛種を續くべきを欲したまふ、是を大因緣と爲す。復次に、佛、言はく、我は世世曾て小虫、惡人と作り、漸漸に諸の善本を集め大智慧を得て、今自ら佛と作ることを致す。神力無

莊にして最上最大たり。一切衆生も亦爾ることを得べし。云何が空しく勤苦を受け小處に噉せん」と。是を以ての故に笑ひたまふ。復次に、小因大果、小緣大報有り。佛道を求むるが如きは、一偈を讃じ、一たび南無佛と稱し、一捻の香を燒くも、必ず佛と作ることを得。何に況んや、諸法は實に生せず滅せず、生せざるにあらず、滅せざるにあらざることを聞き知りて、因緣の業を行じて亦失せざるをや。是事を以ての故に笑ひたまふ。復次に、般若波羅蜜の相は清淨にして、虛空の與ふべからず、取るべからざるが如し。佛、種種の方便、光明、神德もて、一切衆生を教化し、心を調柔にし、然る後、能く般若波羅蜜を信受せしめんことを欲したまふ。是を以ての故に、笑に因りて光を放ちたまふ。笑ふに種種の因緣有り。有人は歡喜して笑ひ、有人は瞋恚して笑ひ、有人は人を輕んじて笑ひ、有は異事を見て笑ひ、有は羞恥すべき事を見て笑ひ、有は殊方の異俗を見て笑ひ、有は希有の難事を見て笑ふ。今は是れ第一希有の難事なり。諸法の相は生せず滅せず、眞空にして字無く名無く、言無く、說無けれども、而も名を作し字を立て、衆生の爲に說いて、解脫を得しめんと欲す、是れ第一の難事なり。譬へば百由旬の大火聚の如き、人有りて乾草を負うて過ぐるも、一葉をも燒かざる、是を甚だ難しと爲す。佛も亦是の如し、八萬の法の衆の名字の草を持して、諸法實相の中に入り、染著の火の爲に燒かれずして、直に過ぐるに無礙なる、是を甚だ難しと爲す。是難事を以ての故に笑ふ。是の如き種種の稀有の難事の故に、身を擧げて微笑したまふ。

【一九】以下足下の千輻相輪等の文を釋す中、初に佛の身光を放つに就いて。

【二〇】佛身光の頭上よりせずして、足下より放光するに就いて。

經　足下の千輻相輪の中より六百萬億の光明を放つ。

論(一九)問うて曰はく、『佛、何を以ての故に、先づ身光を放ちたまふ。』答へて曰はく、『上の笑の因緣の中に已に答へたり。今當に更に說くべし。人有り、佛、無量の身より大光明を放ちたまふを見て、心信に清淨にして恭敬するが故に非常の人なりと知る。復次に、佛、智慧を現さんと欲したまふ。光明は神相なるが故に、先づ身光を出したまふ。衆生は佛の身光既に現るれば、智慧の光明も亦應に出づべきことを知る。復次に、一切衆生は常に欲樂に著す、五欲の中に第一なる者は色なり。此妙光を見れば、心必ず愛著して、本樂ふ所を捨つ。其心をして漸く欲を離れしめ、然る後爲に智慧を說く。』問うて曰はく、『其餘の天人も亦能く光を放つ、佛の光明を放ちたまふと、何等の異なること有りや。』答へて曰はく、『諸の天人は能く光を放つと雖も、限有り量有り。日月の照す所は唯四天下のみ。佛の放ちたまふ光明は三千大千世界に滿ち、三千大千世界の中より出でて、遍く下方に至る。餘人の光明は、唯能く人をして歡喜せしむるのみ。佛の放ちたまふ光明は能く一切をして、法を聞き度を得しむ。是を以て異れりと爲す。』

(二〇)問うて曰はく、『一身の中の如きは頭を最上と爲す。何を以ての故に、先づ足下より光を放つ。』答へて曰はく、『身の住處を得るは皆足に由ればなり。復次に、一身の中頭は貴く足は賤しと雖も、佛は自ら光を貴びたまはず、利養の爲にせず、是を以ての故に賤しき處より光を放ちたまふ。復次に、諸の龍、大蛇、鬼神は口中より光を出し、虐して前の物を

【二】以下足の十指等の文を釋す。

【三】放光のよりておこる三昧及び神通に就いて。

害す。若し佛の口より光明を放ちたまはば、衆生は「是れ、何の光明ぞ」と怖畏せん。復恐らくは害を被らん、是故に足下より光を放ちたまふ。問うて曰はく、『足下の六百萬億の光明乃至肉髻は、是れ指數ふべし、三千大千世界に偏滿すべからず、何に況んや十方をや。』答へて曰はく、『此身光は是れ諸光の本なり、本より枝流は無量無數なり。譬へば迦羅求羅虫は其身微細なれども、風を得れば轉た大にして、乃至能く一切を呑食するが如し。光明も亦是の如く、度すべきの衆生は轉た增して限無きを得るなり。』

【經】足の十指、兩の趺、兩の蹲、兩の膝、兩の髀、腰、脊、腹、脇、心、胸、德、字、肩、臂、手の十指、項、口、四十の齒、鼻、兩の乳、兩眼、兩耳、白毫の相、肉髻、各各六百萬億の光明を放つ。

【論】問うて曰はく、『足下の光明は、能く三千大千及び十方の世界を照す、何んが身分各六百萬億の光明を放つことを用ふる。』答へて曰はく、『我先に言へり。足下の光明は下方を照せども餘方に滿たず、是故に更に身分の光明を放つ。有人言はく、一切の身分は、足を立處と爲すが故に最大なり、餘は爾らず。是故に佛、初めて足下より、六百萬億の光明を放ち、以て衆生に示したまふ。三十二相の中の、初種の足下安住相の如く、一切の身分は皆神力有り。』

問うて曰はく、『何の三昧に依り、何の神通に依り、何の禪定の中に依りて、此光明を放ちたまふ。』答へて曰はく、『三昧王三昧の中より此光明を放ちたまふ。六通の中の如意

【三】以下是諸の光より等の文を缺す

通、四禪の中の第四禪は此光明を放つ。第四禪の中の火、勝處の火は、一切此中に入りて光明を放つ。復次に、佛の初めて生れたまふ時、初めて佛と成りたまふ時、初めて法輪を轉じたまふ時、皆無量の光明を放ちて十方に滿じたまふ。何に況んや、摩訶般若波羅蜜を說きたまふの時、光を放ちたまはざらん。譬へば、轉輪聖王の珠寶の如きは常に光明有りて、王の軍衆を照すこと、四邊各一由旬なり。佛も亦是の如し、衆生緣の故に、若し三昧に入らず、恆に常光を放ちたまふ。何を以ての故に。佛は衆の法寶を成じたまふが故なり。

經 是諸の光より、大光明を出し、遍く三千大千世界を照し、三千大千世界より、遍く東方如恆河沙等の諸の世界を照す。南西北方四維上下も亦復是の如し。若し衆生有りて此光に遇ふ者は、必ず阿耨多羅三藐三菩提を得ん。

論 問うて曰はく、『火の相は上を燒し、水の相は下を潤し、風の相は傍に行くが如く、是光明の火氣も應當に上に去るべし。云何が遍く三千大千世界及び十方世界に滿ず。』答へて曰はく、『光明に二種有り。一には火氣、二には水氣なり。日珠は火氣にして、月珠は水氣なり。火の相は焰上すと雖も、而も人の身中の火は、上下に遍く到る。日火も亦爾なり。是故に、夏月には地水盡く熱す。是を以ての故に、火は皆上らざるを知る。復次に、是光明は、佛の力の故に、遍く十方に至る。譬へば強弓の箭を遣れば、隨所に向ひ至るが如し。』

【二四】佛光先づ東方を照し、次第に南西等に及ぶに就いて。

【二五】光明出でて東方等の文を釋し、三千大千世界の意義を明す。

（二四上）問うて曰はく、「何を以てか先づ東方を照し、南、西、北を後にする。」答へて曰はく、「日の出づるは東方を上と爲すを以ての故に、佛、衆生の意に隨ひて、先づ東方を照したまふ。」復次に、俱に一難有り。若し先づ南方を照さば、當に「何を以てか先づ東、西、北方を照さざる」と言ふべし。若し先づ西方、北方を照すも亦爾なり。問うて曰はく、「光明は幾時か當に滅すべき。」答へて曰はく、「佛は神力を用ひたまふ。住せんと欲せば便ち住し、神力を捨つれば便ち滅す。佛の光は燈の如く、神力は脂の如し。若し佛、神力を捨てたまはずんば光滅せざるなり。」

【經】光明出でて東方、如恆河沙等の世界を過ぐ、乃至十方も亦復是の如し。

【論】（二五上）問うて曰はく、「云何が三千大千世界と爲す。」答へて曰はく、「佛、「雜阿含」の中に分別して說きたまへり。千の日、千の月、千の閻浮提、千の衢陀尼、千の鬱怛羅越、千の弗婆提、千の須彌山、千の四天王天處、千の三十三天、千の夜摩天、千の兜率陀天、千の化自在天、千の他化自在天、千の梵世天、千の大梵天、是を小千世界と名け、周利と名く。周利千世界を以て一と爲し、一より數へて千に至るを、二千中世界と名く。二千中世界を以て一と爲し、一より數へて千に至るを、三千大千世界と名く。初の千は小、二の千は中、第三を大千と名く。千千と數を重ぬるが故に大千と名く。二に過ぎ千に復するが故に三千と言ふ。是を合し集めて、百億の日月、乃至百億の大梵天と名け、是を三千大千世界、一時に生じ、一時に滅すと名く。有人言はく、「住する時一劫、滅する時一劫、還生する時一

【三六】恆河沙を譬に引くこと、及びその數に就いて明す。

【阿那婆達多】アナヷタプタ(Anavatapta) 無熱惱池と譯す。

劫、是れ三千大千世界なり」と。大劫に亦三種有り、水火風に破らる。小劫に亦三種有り、刀病飢に破らる。此三千大千世界は虚空の中に在り。風は水を上にし、水は地を上にし、地は人を上にす。須彌山に二天處有り、四天處と三十三天處となり。餘殘は夜摩天等、福德の因緣、七寶の地なり。風は空中に舉り、乃至大梵天は皆七寶の地にして、皆風の上に在り、此三千大千世界は光明遍く照し、照し竟りて餘光過出し、東方の恆河沙等の如き諸の世界を照す。南西北方四維上下も亦復是の如し。問うて曰はく、是光は遠く照して云何が滅せざる。答へて曰はく、「光明は、佛の神力を以て本と爲す、本在るが故に、滅せず。譬へば龍泉は龍の力の故に水竭きざるが如く、是諸の光明は佛の心力を以ての故に、遍く十方を照し、中間にして滅せざるなり。」

〔三六〕問うて曰はく、閻浮提の中の種種の大河の如きは、亦恆河に過ぐる者有り。何を以てか常に恆河沙等と言ふ。答へて曰はく、恆河は沙多し、餘の河は爾らず。

復次に、是恆河は是れ佛の生れたまふ處、遊行したまふ處にして、弟子の眼に見るが故に、以て喩と爲したまふ。復次に、佛、閻浮提に出でたまふ。閻浮提に四大河有り、北邊より出でて、四方の大海の中に入る。北邊の雪山の中に阿那婆達多池有り。是池の中に金色の七寶の蓮華有り、大いさ車蓋の如し。阿那婆達多龍王は、是れ七住の大菩薩なり。是池の四邊に四の水流有り。東方は象頭、南方は牛頭、西方は馬頭、北方は獅子頭なり。東方の象頭より恆河を出す、底に金沙有り。南方の牛頭は、辛頭河を出す、亦底に金沙有り。

西方の馬頭は、婆叉河を出す、底に亦金沙有り。北方の獅子頭は、私陀河を出す、底に亦金沙有り。是四河は、皆北山より出づ。恆河は北山より出でて、東海に入り、辛頭河は北山より出でて南海に入り、婆叉河は北山より出でて西海に入り、私陀河は北山より出でて北海に入る、是四河の中にて、恆河は最大なり。四遠の諸人の經書に、皆恆河を以て福德の吉河と爲す。若し中に入りて洗ふ者は、諸の罪垢惡、皆悉く除き盡す。人、此河を敬事するを以て共に識知す、故に恆河沙を以て喩と爲す。

復次に、餘の河は名字屢轉ずれども、此恆河は世世に轉ぜず。是を以ての故に、恆河沙を以て喩と爲し、餘の河を取らず。問うて曰はく、「恆河の中の沙は幾許有りとか爲す。」答へて曰はく、「一切の算數も知る能はざる所なり、唯、佛及び法身の菩薩のみ有りて能く其數を知る。佛及び法身の菩薩は、一切の閻浮提の中の微塵の生滅の多少を皆數へ知れり。何に況んや恆河沙をや。」佛、祇桓の外の林中の樹下に在して、坐したまひしが如し。一婆羅門有り、來りて佛の所に到り、佛に問ひたてまつらく、「此樹林に、幾の葉有る」と。佛、卽時に便ち答へたまはく、「若干の數有り」と。婆羅門、心に疑はく、「誰か證知する者ならん」と。婆羅門、去りて一樹の邊に至り、一樹の上の少しばかりの葉を取りて藏し、還佛に問ひたてまつらく、「此樹林には、定んで幾の葉有る」と。卽ち「今や若干の葉を少く」と答へて、其取る所の如く之を語りたまふ。婆羅門知り已りて、心に大いに敬ひ信じ、佛に求めて出家し、後、阿羅漢道を得たり。是を以ての故に佛、能く恆河沙の數を知

【一七】佛光によりて得道する者、久しく放光によりて一切の得道せざるに就いて。

【一八】以下爾時世尊の擧身の毛孔等の文を釋す。

りたまふを知る。

〔一七〕問うて曰はく、幾許の人有りてか、佛の光明に値うて、必ず阿耨多羅三藐三菩提を得る。若し光明に値うて便ち道を得る者ならば、佛は大慈有り、何を以てか常に光明を放ちて、一切をして道を得しめざる。何んが持戒、禪定、智慧を須ちて、然る後に道を得ん。答へて曰はく、衆生は種種の因緣有れば、度を得ること同じからず。禪定にして度を得る者有り、持戒、說法にして度を得る者有り、光明身に觸れて度を得る者有り。譬へば城に多くの門有りて、入る處は各各なれども、至る處は異ならざるが如し。人は光明の身に觸れて度を得る者有り、若しは光明を見、若しは身に觸るるも度を得ざる者有り。

經 爾時、世尊の擧身の毛孔は、皆亦微笑して、諸の光を放ち、遍く三千大千世界を照し、復十方の恒河沙の如き等の世界に至る。若し衆生有りて、斯光に遇ふ者は、必ず阿耨多羅三藐三菩提を得ん。

論 〔一八〕問うて曰はく、上に已に身を擧げて微笑すと云ふ。今何を以ての故に、復一切の毛孔、皆笑ふと云ふ。答へて曰はく、身を擧げて微笑するは、是れ總分なり。今一切の毛孔、皆笑ふは、是れ細分なり。復次に、先の身を擧げて、微笑するの光明は有數なり。今一切の毛孔皆笑ふは、光明有りて而も無數なり。復次に、先の擧身の光明に、未だ度せざる所の者は、今毛孔の光明に値うて、即便

度するを得。譬へば樹を搖がして果を取るに、熟する者前に墮ち、若し未だ熟せざる者は、更に復後に搖すを須ふ。又魚を捕ふるに、前の網に盡さざれば、後の網に乃ち得るが如し。笑ふの因緣は上に說くが如し。

大智度論卷第七

大智度初品中放光釋論第十四之餘　巻第八

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏法師鳩摩羅什詔を奉じて譯す

【經】爾時、世尊は常光明を以て、遍く三千大千世界を照し、亦東方の恒河沙の如き等の諸佛の世界に至る。乃至十方も亦復是の如し。若し衆生有りて斯光に遇ふ者は、必ず阿耨多羅三藐三菩提を得ん。

【論】（一）問うて曰はく、上に已に擧身微笑し、毛孔より光明を放つといへり。今何を以てか復常光を放ちて、十方を照すといふ。答へて曰はく、人有り、異れる光明を見ては佛の光に非ずと謂ひ、佛の常光の轉大なるを見ては心則ち歡喜し、此れ實の佛の光なりとし、便ち畢に必ず阿耨多羅三藐三菩提に至ればなり。

（二）問うて曰はく、云何が常光と稱す。答へて曰はく、佛身の四邊に各一丈の光明有り。菩薩生ずれば便ち此有り。是れ三十二相の一なり。名けて丈光の相と稱す。問うて曰はく、佛、何を以ての故に、光常に一丈より多からざる。答へて曰はく、一切の諸佛の常光は無量にして、常に十方世界を照す。釋迦牟尼佛の神通身光も無量なり。或は一丈、百丈、千丈、萬億乃至三千大千世界乃至十方に滿ずること、諸佛の常法の如し。但

【一】以下爾時世尊は常光明を以て等の文に就いて明す。

【二】常光の義を明す。

【三】以下爾時世尊廣長の舌相を出し等の文に就いて論じ、初に廣長舌相の義を明す。

五濁世に於ては、衆生の少德、少智の爲の故に、一丈の光明を受く。若し多くの光を受けば、今の衆生は福薄く根鈍にして、且其明に堪へず。人、天の身を見るが如きは、眼則ち明を失す。光は盛にして、眼は微なるを以ての故なり。若し衆生利根にして福重ければ、佛、則ち之が爲に無量の光明を現じたまふ。復次に人有り、佛の常光を見て、歡喜して得度す。譬へば、國王の常食の餘を以て、諸の群下に賜ふに、得るもの大いに喜ぶが如し。佛も亦是の如く、人有り、佛の種種の餘光を見ては、心に歡喜せざれども、佛の常光を見れば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に至る。

經 爾時、世尊は廣長舌相を出し、遍く三千大千世界を覆ひ、熙怡して笑ひ、其舌根より、無量千萬億の光を出したまふ。是一一の光は、化して千葉の金色の寶華と成り、是諸の華上に皆化佛有りて、結加趺坐し、六波羅蜜を說きたまふに、衆生の聞く者、必ず阿耨多羅三藐三菩提を得。復十方の恆河沙の如き等の諸佛の世界に至ることも、皆亦是の如し。

論 (三)問うて曰はく、(三)佛世尊の如きは、大德にして尊重なり、何を以ての故に廣長舌を出して、輕相の如くに似たる。答へて曰はく、上の三種の放光は、十方の衆生を照して、度脫することを得しむ。今摩訶般若波羅蜜を說したまはんと欲す。摩訶般若波羅蜜は、甚深にして、解し難く、知り難く、信受すべきこと難し。是故に、廣長舌を出して證と爲す。舌相是の如くなれば、語は必ず眞實なり。如昔一時、佛、舍婆提國に於て、受歲し

覺りたまふ。阿難は佛に從ひて諸國に遊行し、婆羅門城に到らんと欲す。婆羅門城の王、佛の功徳有りて、能く衆人を化し、衆心を感動したまふを知る「今此に來り到らば、誰か復我を樂はん」と、便ち制限を作さく「若し佛に食を與へ、佛語を聽く者有らば、五百の金錢を輸さしめん」と。制限を作し已りて後、佛、其國に到り、阿難を將ゐて鉢を持し、城に入りて乞食したまふに、城中の衆人、皆門を閉ぢて應ぜず、佛、空鉢にして出でたまふ。是時、一家に一の老いたる使人有り。破れたる瓦器を持し、臭き潘淀を盛り、門を出でて之を棄つ。佛世尊の空鉢にして來たまふを見て、老いたる使人は、佛の相好の金色の白毛、肉髻、丈光有りて、鉢空しく食無きを見、見已りて思惟すらく「此の如きの神人は、應に天厨を食すべし。今自ら身を降し、鉢を持して乞を行じたまふは、必ず是れ大いに一切を慈愍したまふが故ならん」と。信ずるの心清淨にして、好き供養を欲すれども、願の如くするに由無し。慚愧して佛に白さく「供を設けんと思欲すれども、更に得ること能はず。今此弊食を、佛、須ひたまはゞ取りたまふべし」と。佛、其心の信徹にして清淨なるを知り、手を申べ鉢を以て其施食を受けたまふ。佛、時に即ち笑ひたまひ、五色の光を出して、普く天地を照し、還りて眉間の相より入る。阿難、合掌して、長跪し、佛に白さく、「唯然り、世尊、願くば今笑ひたまふ因緣の意を聞かん」と。

佛、阿難に告げたまはく「汝、是老女人の信心にして、佛に食を施すを見るや不や」と。阿難言さく「見たり」と。佛の言はく「是老女人は、佛に食を施すが故に、十五劫の中に

天上人間にして、福を受け快樂にして惡道に墮せず、後、男子の身を得て、出家學道して辟支佛と成り、無餘涅槃に入らん」と。爾時、佛の邊に一の婆羅門有り、立どころに偈を說いて言はく、

汝は是れ日種刹利の姓にして、淨飯國王の太子なり
而るに食を以ての故に大妄語せり、此の如きの臭食の報何んが重からん

是時、佛は面上を覆ふこと、髮の際に至れる廣長舌を出し、婆羅門に語りて言はく、「汝、經書を見るに、頗し此の如きの舌有る人にして、而も妄語を作すや不や」と。婆羅門の言はく「若し人は舌能く鼻を覆へば虛妄無し、何に況んや乃ち髮の際に至るをや。我は心に佛の必ず妄語したまはざるを信ずれども、小施の報の多きこと、是の如くなるを解せず」と。佛、婆羅門に告げたまはく「汝、頗し曾て世に希有にして、見難き所の事を見しや不や」と。婆羅門の言はく「見たり。我曾て婆羅門と共に道中を行くに一の尼拘盧陀樹の蔭、賈客の五百乘の車を覆へども、蔭は猶盡きざるを見る。是れ謂ゆる、希有にして見難きの事なり」と。佛言はく「此樹の種子の、其形の大小いかん」と。答へて言はく、「大さ芥子の三分の一の如し」と。佛言はく「誰か當に、汝が言を信ずべき者あらんや。樹は大にして、爾して種子は甚だ小なり」と。婆羅門言はく「實に爾なり。世尊、我は眼もて之を見る、虛妄に非ざるなり」と。佛言はく「我も亦是の如し、我老女人の淨き信心の佛に施すことの、大果報を得るを見るも、亦此の如し。樹の因少にして、報の多きも又是

【初道の果】聲聞四果中の第一預流果のこと。

【阿閦佛】アクショービヤ(Akṣobhya)の譯、不動、無動と譯す。

れ、如來の輪門の良美の致す所なり」と。婆羅門は心開け意解し、五體を地に投じ過を悔いて佛に向ひ、「我心、無狀に愚にして、佛を信じたてまつらず」と。佛、爲に種種に說法したまへば初道の果を得、卽時に手を擧げて、大いに聲を發して言はく、「一切の衆人、甘露の門は開けたり、如何が出でざる」と。一切の諸の婆羅門は、皆左右の金錢を送りて王に與へ、佛を迎へて供養し、皆言はく、「甘露味を得るに、誰か當に此左右の金錢を惜むべき」と。衆人皆去りて、制限の法は破れたり、其婆羅門の王も亦臣民と共に佛法に歸命し、城人は一切皆淨き信を得たり。是の如く佛の廣長舌相を出したまふは、不信者の爲の故なり。問うて曰はく、「婆羅門の爲の如きは、舌相を出して面を覆ふ。今舌相の光明は、何を以てか、乃ち三千大千世界に至る。」答へて曰はく、「覆面髮際は小信の爲の故なり。今は般若波羅蜜の大事を興すが爲の故に、廣長舌相の、三千大千世界を覆ふなり。」問うて曰はく、「是一城の人、盡く此面を覆ふの舌相を見るを得るすら、猶尚難しと爲す。何に況んや、今摩訶般若波羅蜜を說くに、一切の大會、及び他方の無量の衆の集りて、而も盡く見ることを得るをや。又人の目に觀る所は數里に過ぎざれば、今三千大千世界に遍すと言ふは、無乃大にして信じ難し。」答へて曰はく、「佛は方便を以て其神力を借り、能く一切をして、皆舌相の此三千大千世界を覆ふことを見しめたまふ。若し神力を加へずんば、復十住と雖も亦佛心を知らず。若し神力を加ふれば、乃ち畜生に至るも、能く佛心を知る。般若波羅蜜の後品の中に說くが如し。一切の衆人皆阿閦佛會を見ることと、眼と對す

【四】舌相の外に舌根より光明を出すに就いて。

【五】佛の蓮華座に坐して得道するに就いて。

【漫陀耆尼】マンダーキニー(Mandākinī)忉利天上にある池の名。

ることを作す。亦佛、阿彌陀佛の世界の、種種の嚴淨を說きたまふとき、阿難言さく、「唯願くば、見たてまつらんと欲す」と。佛、時に即ち一切の衆會をして、皆無量壽佛世界の、嚴淨なることを見しめたまふ。佛の舌相を見ることも、亦復是の如し。佛、廣長の舌相を以て、遍く三千大千世界を覆ひ已りて、然る後に便ち笑ひたまふ。笑ふの因緣は、上に說くが如し。

(四)問うて曰はく、「前に已に舌相より光明を出す。今何を以ての故に、舌根より復光明を放つ」。答へて曰はく、「一切をして、重信を得しめんと欲するが故に、又舌相の色は、珊瑚の如く、金光明淨にして、共に相發起するを以ての故に、復、光を放ちたまふ。復次に、是諸の光明は、變じて千葉の金色の寶華と成り、舌相より此千葉の金色の寶華を出し、光明徹照して、日の初めて出づるが如し。』問うて曰はく、「何を以ての故に光明の中より、變化して此寶華を作す」。答へて曰はく、「佛の坐せんと欲したまふが故なり。』

(五)問うて曰はく、「諸の床に坐すべし、何んが必ずしも蓮華なる。』答へて曰はく、「床を世界と爲すは、白衣の坐法なり。又蓮華は軟かく淨きを以て、神力を現さんと欲して、能く其上に坐すれば、花壞れざらしむるが故なり。又妙法を莊嚴するの座なるを以てなり。又諸の華は、皆小にして、此華の香淨くして、大なるに、如くもの無きを以てなり。人中の蓮華は、大なること尺に過ぎず。漫陀耆尼池、及び、阿那婆達多池の中の蓮華は、大さ車蓋の如し。天上の寶蓮華は、復此より大なり。是れ則ち、結加趺坐に容るべし。佛の坐し

【二八】釋迦文尼佛の化作したまふ化佛の一時に六度を說けるに就いて。

たまふ所の華は、復此に勝れたること百千萬倍せり。又此蓮華の臺の如きは、嚴淨香妙にして坐すべし。復次に、劫盡き燒くる時は、一切皆空なり。衆生の福德の因緣力の故に、十方より風至り、相對し、相觸れて能く大水を持す。水上に一千頭の人、二千の手足なる有り。名けて韋紐と爲す。是人の臍の中より、千葉の金色の妙寶なる蓮華を出すに、其光の大いに明かなること、萬日の俱に照すが如し。華の中に人ありて結加趺坐す、此人復無量の光明有り、名けて梵天王と曰ふ。此梵天王の心より八子を生じ、八子は天地、人民を生ず。是梵天王は、諸の婬と瞋とに於て、已に盡して餘すこと無し。是を以ての故に言はく、「若し人有りて、禪の淨行を修し、婬欲を斷除せば、名けて梵道を行ずと爲し、佛の轉法輪、或は法輪と名け、或は梵輪と名く」と。是梵天王は蓮華の上に坐す。是故に諸佛は世俗に隨ふが故に、寶華の上に於て結加趺坐して、六波羅蜜を說きたまふ。此法を聞く者は、畢に阿耨多羅三藐三菩提に至る。

問うて曰はく、「釋迦文尼佛は無量千萬億の諸佛を化作したまふ。云何が一時に能く法を說きたまふ。阿毘曇に說くが如きは、一時に二心無し。若し化佛の語りたまふ時は、化主は默すべし、化主の語りたまふ時は、化も亦默すべし。云何が一時に皆六波羅蜜を說きたまふ」。答へて曰はく、「此の如きの說は、外道及び聲聞變化の法なるのみ。佛の變化無量の三昧力の如きは不可思議なり。是故に、佛自ら語りたまふ時は、無量千萬億の化佛も、亦一時に皆語りたまふ。又諸の外道及び聲聞の化は、化を作すこと能はず。佛世尊の如

【七】佛の大神力を以てするも、聞法得道者の全からざるに就いて。

きは、化も復化を作す。諸の外道及び聲聞は滅して後、化を留むること能はず、佛世尊の如きは、自ら滅度して後、復能く化を留め、佛の如くして、異ること無し。復次に、阿毘曇の中には、「一時に二心無し」と。今佛も亦是の如く、當に化語すべき時、亦心は有らざれども、佛心は、化を念じて、化語せしめんと欲すれば、即便ち語る。問うて曰はく、「佛は今般若波羅蜜を說かんと欲したまふ。何を以てか、化佛をして六波羅蜜を說かしむる。」答へて曰はく、「是六波羅蜜及び般若波羅蜜は、一法にして異ること無し。是五波羅蜜は、般若波羅蜜を得ざれば、波羅蜜と名けず、檀波羅蜜の如きは、般若波羅蜜を得ざれば世界に沒在して盡法の中に有り。或は阿羅漢、辟支佛道の般涅槃を得るもの、若し般若波羅蜜を得れば、共に合して是を波羅蜜と名け、能く佛道に至る。是を以ての故に般若波羅蜜は、六波羅蜜と一法にして異ること無し。般若波羅蜜に、二種あり。一には莊嚴、二には未莊嚴なり。人の好き瓔珞を著けて、其身を莊嚴するが如し。人有り、著けざるは未莊嚴と名く。亦、國王の諸の官從を將ゐれども、是を、王來る、と名け、若し官從無ければ、是を獨身と名くるが如し。是の如く、東方の恆河沙の如き等の世界、乃至十方も亦爾なり。」

問うて曰はく、「若し佛に是の如きの大神力あり、無數千萬億の化佛、乃至十方に六波羅蜜を說いて一切を度脫せば、應に盡く度することを得べく、應に殘有るべからざるや。」答へて曰はく、「三障有り、三惡道の中の衆生は、解し知ること能はず。人中、天上の、若

は大小、若は大老、若は大病、及び上の無色の、無想天は、皆聞くこと能はず、知ること能はざるなり。問うて曰はく、「諸の能く聞き、能く知る者は、何を以てか、皆道を得ざる。」答へて曰はく、「是れ亦、盡く道を得べからず、何を以ての故に。結使の業障の故なり。人有り結使の重きによりて、常に結使の爲に心を覆はる。是を以ての故に、盡く道を得ず。」問うて曰はく「當今十方の諸佛も、亦應に化を遣して、六波羅蜜を說くべし。我等も亦三障無し、何を以てか聞かざる。」答へて曰はく、「當今の衆生は、生れて惡世に在り、則ち三障の中に入る。生れて佛の後に在るは不善業の報なり。或は世界に惡罪業障のみ有り、或は厚く重き結使の障有りて、佛の後に墮在す。人多く厚重の結使の爲に障へらる。或は婬欲薄うして瞋恚厚く、瞋恚薄うして婬欲厚く、婬欲薄うして愚癡厚く、愚癡薄うして瞋恚厚く、是の如き等、展轉して互に厚薄あり。是結使の障の故に、化佛の說法を聞かず知らず、諸佛の光明を見ず。何に況んや道を得るをや。譬へば日出づれども、盲人には見えず。便ち、世間に日月有ること無し、と謂ふが如く、日に何の咎か有らん。又雷電の地を震へども、聾人は聲を聞かざるが如し。聲に何の過か有らん。今十方の諸佛は、常に經法を說き、常に化佛を遣して、十方世界に至り、六波羅蜜を說きたまへども、罪業の盲聾の故に、法の聲を聞かず。是を以ての故に盡く聞見せず、復聖人は大慈心有りと雖も、皆聞き皆見しむること能はず。若し罪滅びんと欲し、福將に生ぜんとすれば、是時に乃ち佛を見、法を聞くを得ん。

【八】爾時、世尊故らに師子座に在り等の文を論じて今師子遊戯三昧を明す。

【師子遊戯三昧】シンハギクリディトー、ナーマ、サマーディ(Siṃhavikriḍitonama-samadhi)

經 爾時、世尊は故らに師子座に在りて、師子遊戯三昧に入り、神通力を以て、三千大千世界を感動し、六種に震動す。

論 (八)問うて曰はく、「此三昧は何を以てか、師子遊戯と名くる。」答へて曰はく、「譬へば師子の鹿を搏ちて、自在に戯れ遊ぶが如し。佛も亦是の如く、此三昧に入りて、能く種種に此地を回轉し、六反震動せしめたまふ。復次に、師子遊び戯るとは、譬へば師子戯るる日は、諸獸安隱たるが如し。佛も亦是の如く、是三昧に入る時は、三千大千世界を震動し、能く三惡の衆生をして、一時に息ふことを得て、皆安隱を得しめたまふ。

復次に、佛を人師子と名く。師子遊戯三昧は、是れ佛戯三昧なり。此三昧に入る時は、此大地は六種に震動し、一切の地獄惡道の衆生は皆解脱を蒙り、天上に生ずることを得しむ、是を名けて戯と為す。」問うて曰はく、「佛は何を以ての故に、此三昧に入りたまふ。」答へて曰はく、「三千大千世界を動かし、三惡道の衆生を出し、三道の中に著けんと欲するが故なり。」

復次に、上の三種の變化は佛身より出づ。人或は信心深からず。今大地を動かして、衆生をして、佛の神力の無量なるを知らしめんと欲して、能く外物をして、皆動ぜしめば、信淨の心を以て、喜んで皆苦を離るるを得ん。」問うて曰はく、「諸の阿羅漢、及び諸天有り、亦能く地を動かす、何を以てか、獨り是を佛の神力なりと言ふ。」答へて曰はく、「諸の阿羅漢及び諸天は具足して動かすこと能はず。唯佛世尊のみ能く大地をして、六種に震

【九】佛の三千大千世界を震動する所以を明す。

【一〇】東に涌き西に沒し等の文を辨じ六種震動の因緣を明す。

動せしめたまふ。

問うて曰はく、「佛は何を以ての故に、三千大千世界を震動せしめたまふ。」答へて曰はく、衆生をして一切は皆空無常なることを知らしめんと欲するが故なり。諸人有り、言はく、「大地及び日月、須彌、大海は、是れ皆有常なり」と。是を以て世尊は、六種に地を動かして、此因緣を示し、無常なることを知らしめたまふ。復次に、人の衣を染むるに、先づ塵土を去らんと欲するが如し。佛も亦是の如し、先づ三千世界の衆生をして、佛の神力を見しめ、敬心柔軟ならしめ、然る後に法を說きたまふ。是故に六種に、地を動かしたまふ。云何が六種に動かす。（一〇）

【經】東に涌き西に沒し、西に涌き東に沒し、南に涌き北に沒し、北に涌き南に沒し、邊に涌き中に沒し、中に涌き邊に沒す。

【論】問うて曰はく、「何を以ての故に、正しく六種の動有る。」答へて曰はく、「地の動くに、上中下有り、下には二種の動あり。或は東に涌き西に沒し、或は南に涌き北に沒し、或は邊中なり。中には四有り。或は東西、南北、或は東西邊中、或は南北邊中なり。上には六種の動あり、種種の因緣有りて地をして大いに動かしむ。佛、阿難に告げたまふが如し、八因八緣ありて、地をして震動せしむと。別に說くが如し。復次に、有人言はく、四種の地動あり。火動、龍動、金翅鳥動、天王動なり。二十八宿に日月は一たび周遶す。若し月、昴宿、張宿、氐宿、婁宿、室宿、胃宿、是六種の宿の中に至れば、爾時、地動じ若しは崩る

るが若し。是動は火神に屬す。是時は雨無うして江河枯竭し、年は麥に宜しからず、天子に凶あり、大臣は殃を受く。若し柳宿、尾宿、箕宿、壁宿、奎宿、危宿、是六種の宿の中なれば、爾時は地動じて崩るるが若し。是動は龍神に屬す。是時は雨無うして江河枯竭し、年は麥に宜しからず、天子に凶有り、大臣は殃を受く。若し參宿、鬼宿、星宿、軫宿、亢宿、翼宿、是六種の宿の中なれば、爾時は、若は地動き、若は崩る。是動は、金翅鳥に屬す。是時は、雨無うして、江河枯竭し、年は麥に宜しからず、天子に凶あり、大臣は殃を受く。若し心宿、角宿、房宿、女宿、虛宿、井宿、畢宿、觜宿、斗宿、是九種の宿の中なれば、爾時は地動じて崩るるが如し、是動は天帝に屬す。是時は安隱にして、豐雨五穀に宜しく、天子は吉に、大臣は福を受け、萬民は安隱なり。復次に地の動く因緣に小有り大有り。一閻浮提を動かすこと有り、四天下を動かし、一千、二千、三千大千世界、小しく動ずること有り。小因緣を以ての故に、若は福德の人、若は生れ、若は死して、一國の地動く、是を小動と爲す。大動は大因緣の故なり。佛初めて生れたまふ時、初めて佛と成りたまふ時、將に滅度せんとしたまふ時の如きは、三千大千世界皆震動爲り、是を大動と爲す。今、佛、大いに衆生を集めんと欲したまふが故に、此地をして、六種に震動せしめたまふ。

復次に、般若波羅蜜の中に、諸の菩薩に記を授けて、「當に佛と作ることを得べし」と。佛は、天地の大主たり。是時に地神大いに、我今主を得たり、と喜ぶ。是故に地動く。譬

【二】地皆柔軟等の文を論ず。

へば國主初めて立てば、臣民喜慶し、皆萬歳と稱して、踊躍し歡舞するが如し。復次に、三千大千世界の衆生の、福德の因緣の故に、此大地山河樹木一切の果物有り。而も衆生は無常を知らず、是故に佛は福德智慧大力を以て、此世界を動かし、衆生の福德の微薄にして、一切磨滅し、皆無常に歸するを知らしめたまふ。

【經】地は皆柔軟にして、衆生をして和悅せしむ。

【論】問うて曰はく、「地動いて、云何が能く衆生の心をして、和悅することを得しむる」答へて曰はく、「心は身に隨ふが故に、身樂しむ事を得れば、心則ち欣悅す。悅ぶとは其他の人、及び便身の具、能く心をして悅ばしむるなり。今、是三千大千世界の雜惡の衆生は其生處麁獷にして、善事有ること無し。是故に、世尊は此大地を動かし、皆柔軟にして心に利益を得しめたまふ。譬へば、三十三天王の歡樂園の中に、諸天の入る者は、心皆柔軟にして歡樂し和悅して麁心生ぜざるが如し。若し阿修羅の兵を起して來る時も都て鬪心無し。是時、釋提婆那民、諸の天衆を將ゐて、麁澁園の中に入れば、此園中の樹木華實は、氣、和悅せず、麁澁惡なるを以ての故に、諸の天人衆の鬪心即ち生ず。佛も亦是の如く、此大地は麁澁、弊惡なるを以ての故に、變じて柔軟ならしめ、一切衆生の心をして喜悅せしめたまふ。又呪術の藥草を人の鼻に熏ずる時は、恚心便ち生じ、即時に鬪諍するが如し。復呪術藥草は能く人の心をして和悅し歡喜し、敬心に相向はしむることあり。呪術草藥すら尙能く此の如し、何に況んや三千大千世界の地、皆柔軟たるをや。」

【二二】是三千大千世界の中等の文を論じ、初に佛の三塗八難をして解脫を得しむるあらば修福の要ありや無しやに就て明す。

【二三】次に四王天王處より等の文に就いて、但欲界のみに修福者の生ずるを論ず。

經 是三千大千世界の中の、地獄、餓鬼、畜生及び八難處は、即時に解脫して天上に生ずるを得、四天王天處より乃ち他化自在天處に至る。

論 〔二二〕問うて曰はく、『若し佛師子遊戲三昧に入りて、能く地獄、餓鬼、畜生及び餘の八難をして、皆解脫することを得て、四天處乃至他化自在天に生れしめたまはば、復何んが福を修し、善を行じて乃ち果報を得ることを用ひん。』答へて曰はく、『此は上に說くが如し。福德多き者は光を見て得度し、罪垢深き者は地動じて乃ち悟る。譬へば日出でて蓮華の池を照すに、熟する者先づ開き、生の者は未だ敷かざるが如し。佛も亦是の如く、先づ光明を放ちたまふに、福熟し智利なるは、先づ解脫することを得、其福未だ熟せざれば、智心利ならず、是故に未だ得ず。佛の大慈悲は等しく一切を度して憎愛無し。亦樹果の、人其樹を動かせば、熟する者先づ墮つるが如く、佛も亦是の如し。是三千大千世界は樹の如く、之を動かすものは佛なり。先づ度する者は、果の熟せるにて、未だ度せざる者は果の生なるなり。』

〔二三〕問うて曰はく、『何を以ての故に、善心の因緣は欲界の天に生じ、色界及び無色界に生ぜざる。』答へて曰はく、『佛は此衆生を度し、道證を得しめんと欲したまふ。無色界の中は身無きを以ての故に說法を爲すべからず、色界の中は則ち厭心無く道を得べきこと難く、禪樂多きが故に、慧心則ち鈍し。復次に、佛は神通を以て感動し、此三千大千世界の地をして、皆柔軟ならしめたまふ。衆生は心信にして歡喜を得るが故に、欲界の天に生じ四禪及

【四空定】空無邊處、識無邊處、無所有處、非想非非想處の四。無色定のこと。

【二四】次に至るに就いて、五陰無常なれば生死するは誰なるやを論ず。

し四空定を得ざるが故に、色、無色界に生ずるを得ず。』

問うて曰はく、「五陰は無常、苦、空、無我たり。云何が天人の中に生れ、誰か死し、誰か生ずる者ぞ。」答へて曰はく、『是の難は讚嘆品の中に已に廣く説けり。今當に略して答ふべし。汝は、五衆は無常、空、無我なり、と言ふも、是般若波羅蜜の中には、五衆に常、無常、有空、無空、有我、無我有ること無し。若し外道の實我を求索するが如きは、是れ得べからず、但假名のみ有り。種種の因縁和合の有にして、是れ名字のみ有るなり。譬へば幻人の人を殺さば、其の死を見、幻術の人をして起たしむれば、其の生を見るが如し。生死は名字のみ有りて實無し。世界の法の中には實に生死有れども、實相の法の中には生死有ること無し。復次に、生死の人には生死有り、不生死の人には生死無し。何を以ての故に。不生死の人は、大智慧を以て生の相を破ればなり。偈に説くが如し。

佛法の相は空なりと雖も、亦復斷滅ならず
生ずと雖も亦常に非ず、諸の行業を失はず
諸法は芭蕉の如し、一切は心より生ず
若し法の實無きを知らば、是の心も亦復空なり
若し人有り空を念ぜば、是れ即ち道行に非ず
諸法は生滅せず、念有るが故に相を失す
有念は魔網に墮し、無念は則ち出づるを得

心動ずるが故に道に非ず、動ぜざるは是れ法印なり

【經】是諸の天人は、自ら宿命を識りて皆大いに歡喜し、佛の所に來詣し、頭面に佛が足を禮し、却いて一面に住す。

【論】問うて曰はく、「諸天生ずる時は三事自ら知ること有り。從來する所の處を知り、所修の福田の處を知り、本作る所の福德を知る。是に人の生ずる時は、此三事無し、云何が宿命を識る。」答へて曰はく、「人道は不定なり、或は識る者あり、或は識らざる者あり。復次に、佛の神力を假れば、則ち宿命を識る。」問うて曰はく、「諸天の報は五神通有りて自ら宿命を識り、能く佛の所に到る。人は佛の神力を蒙り、宿命を知るを得と雖も、所住の處遠きときは、云何が能く佛の所に至らん。」答へて曰はく、「或は人有りて、生報に天通を得、轉輪王、聖人等の如し。或は人有りて、佛の神力を假る。」問うて曰はく、「人は十月にして生れ、三年乳餔し、十歲の後能く自ら出づ。今佛の威神を蒙れば三惡八難皆解脫することを得、天人の中に生じて即ち佛の所に至る。天は則ち爾るべし、人の法は、未だ成ぜず、云何が來ることを得ん。」答へて曰はく、「五道の生法は、各各同じからず、諸天と地獄とは、皆化生、餓鬼には、二種の生あり、若は胎、若は化生、人道と畜生には四種の生あり、卵生と濕生と化生と胎生となり。卵生とは毘舍佉彌伽羅母の三十二子（毘舍佉母は三十二卵を生ず。卵剖けて三十二男を生ず、皆力士爲り、彌伽羅大兒の字なり。此母人三道の果を得たり。）の如し、是の如き等を卵生の人と名く、濕生とは揜羅婆利婬女、頂生、轉輪聖王の如し、是の如き等を濕生と名く。化生とは

【一〇】是の如く十方恆河沙等の支に就いて。

と遊行したまふに、比丘尼衆の中に比丘尼有りて阿羅漢と名け、地中より化生す。及び劫の初に生るる時の人の如きは皆化生なり。是の如き等を名けて化生と爲す。胎生とは常人の生るるが如し。化生の人は即時に長大し、能く佛の所に到る。人は報得の神通有るが故に能く佛の所に到る。復次に、佛の神通力を借るが故に、能く佛の所に到る。

【經】是の如く、十方の恆河沙等の如き世界の地は皆六種に震動し、一切の地獄餓鬼畜生及び餘の八難處は即ち解脫を得、天上に生ずるを得て、第六天に齊る。

【論】問うて曰はく、三千大千世界には無量無數の衆生甚だ多し、何を以てか、復十方の恆河沙等の如き、世界の衆生に及ぼす。答へて曰はく、佛力は無量にして、三千大千世界の衆生を度すと雖も、猶以て少しと爲す。是を以ての故に復十方に及ぼすなり。問うて曰はく、「若し釋迦文尼佛、大神力を以て廣く十方を度したまはば、復何んが餘の佛を須たん。」答へて曰はく、「衆生は無量にして一時に熟せざるが故に、又衆生の因緣は各各同じからざればなり。聲聞法の中に說くが如し、「舍利弗に因緣ある弟子は、舍利弗を除いては諸佛すら尙度すること能はず、何に況んや餘人をや」と。復次に、今は但東方の一恆河沙等のみを說き、二三四乃至千萬億恆河沙等の諸の世界の若きを說かず。又世界は無量無邊なるを以て、有邊有量の衆生の若きは盡すべし。是を以ての故に、十方の無量の世界の諸佛も應に度すべきなり。

【經】爾の時、三千大千世界の衆の生盲の者は視ることを得、聾者は聽くを得、瘂者は能く言ひ、

【一七】爾時、三千大千世界等の文に就いて明す。

【一八】生盲に就いて明す。

【一九】次に聾者に就いて。

狂者は正しきを得、亂者は定まるを得、裸者は衣を得、飢渴者は飽滿するを得、病者は愈ゆるを得、形殘る者は具足することを得たり。

【一七】問うて曰はく、「衆生の苦患は百千種有り。若し佛に神力あらば、何を以てか遍く解脫するを得しめざる。」答へて曰はく、「一切皆救ふ。今は但略して、麁なる者を說く、種種の結使を說略して三毒と爲すが如し。」

【一八】問うて曰はく、「但盲者は視ることを得と言へば則ち足れり、何を以ての故に、生盲と言ふ。」答へて曰はく、「生盲の者は先世の重罪の故なり。重罪の者すら、猶尚能く視ることを得しむ、何に況んや輕き者をや。」問うて曰はく、「如何が先世の重罪にして、生盲ならしむる。」答へて曰はく、「若は衆生の眼を破り、若は衆生の眼を出し、若は正見の眼を破りて罪福無きを言ふ。是人は死して地獄に墮ち、罪畢りて人と爲り、生るるより盲なり。若は復佛塔の中の火珠、及び諸の燈明を盜み、若は阿羅漢辟支佛塔の珠及び燈明、若は餘の福田の中の光明を奪取す。是の如き等の、種種の先世の業因緣の故に、明を失し、今世には若は病、若は打たるるが故に明を失す、是れ今世の因緣なり。復次に、九十六種の眼病あり。閻耶迦藥王も治すること能はざる所の者をば、唯佛世尊のみ能く視ることを得しめたまふ。復次に、先づ視ることを得しめて後、智慧の眼を得しむ。聾者の聽くことを得るも亦是の如し。」

【一九】問うて曰はく、「若し生盲有らば、何を以てか、生聾を說かざる。」答へて曰はく、「生盲の

【一一】次に唖者に就いて。

【一二】次に狂者に就いて。

者は多く有れども、生聾の者は少し、是故に説かず。『問うて曰はく、何の因縁を以ての故に聾なる。』答へて曰はく、『聾は是れ先世の因縁にして、師父の教訓を受けず、行ぜずして、反りて瞋恚す、是罪を以ての故に聾なり。復次に、衆生の耳を截り、若は衆生の耳を破り、若は佛塔僧塔諸の善人の福田の中の、揵稚鈴貝及び鼓を盗むが故に此罪を得。是の如き等の種種は、先世の業因縁なり。今世の因縁は、若は病、若は打、是の如き等は、是れ今世の因縁にして聾を得るなり。』

(一一)問うて曰はく、『唖は、言ふこと能はず、何等の罪を作すが故に唖なる。』答へて曰はく、『先世に他の舌を截り、或は其口を塞ぎ、或は悪薬を與へて語ることを得ざらしめ、或は師の教、父母の教勅を聞いて其語を斷じ、其教を非とし、或は悪邪の人と作りて罪福を信ぜず、正語を破りて地獄の罪を受け、世に出生して人と爲りては、唖にして言ふこと能はず、是の如き種種の因縁の故に、唖となるなり。』

(一二)問うて曰はく、『狂者は正なるを得と、云何が狂と爲す。』答へて曰はく、『先世に罪を作り、他の坐禪を破り、坐禪の舍を破り、諸の呪術を以て、人を呪ひ、瞋り、闘諍して婬欲ならしめ、今世には、諸の結使厚重なり、婆羅門の其稻田を失ひ、其婦、復死すれば、即時に發狂し、裸形にして走るが如し。又翅舍伽憍曇比丘尼の本白衣たりし時、七子皆死し、大いに憂愁するが故に、心を失ひて發狂せるが如し。有人は大いに瞋れども、自ら制すること能はず、大癡狂と成り、有愚癡の人は、悪邪の故に、灰を以て身に塗り、髪を抜

【二二】次に亂は定まることを得に就いて。

【二三】次に裸者は衣を得るに就いて。

き、裸形狂癡にして糞を食す。有人、若は風病、若は熱病の、病重くして、狂と成る。有る人は悪鬼に著かれ、或は、有人は癡にして雨水を飲みて狂す。是の如くして心を失ふ。是の如きの種種を、名けて狂と爲す。佛を見たてまつるを得るが故に、狂は即ち正となることを得るなり。

（二二）問うて曰はく、『亂は定まることを得と、狂は即ち是れ亂なり、何を以てか事を別つ。』答へて曰はく、『有人は狂せざれども、而も心多く散亂し、志は彌猴の如くにして、專ら住することを能はず、是を亂心と名く。復、有は劇務怱怱として、心樂事に著して則ち心力を失し、道を受くるに堪へざるなり。』問うて曰はく、『亂心は何の因緣有る。』答へて曰はく、『善心轉た薄くして、不善に隨逐す、是を心亂ると名く。復次に、是人は無常を觀せず、死相を觀ぜず、世の空を觀ぜず、壽命に愛著し、事務を計念し、種種に馳散す、是故に心亂るるなり。復次に、佛法の中の内樂を得ず、外に樂事を求めて、樂因を隨逐す、是の故に心亂る。是の如きの亂人にして、佛を見たてまつるを得るが故に、其心定まることを得るなり。』

（二三）問うて曰はく、『先に、狂者に正しきことを得、と言ひ、今、裸者は衣を得、と言ふ。狂を除いて云何が更に裸有る。』答へて曰はく、『狂に二種有り。一は人皆狂と知り、二は悪邪の故に自ら裸なるも、人狂なることを知らず、説くが如くんば、南天竺國の中に法師有り、高座にて五戒の義を説く。是衆中に多くの外道有りて來聽せり。是時、國王難じて曰はく、

「若し爾諸の如くんば、有人は酒を施し、及び自ら酒を飲み、狂愚の報を得、當今の世人は、應に狂者多く、正しき者は少かるべし」而るに、今狂者は更に少く、狂せざる者は多し。何を以ての故に爾る」と。是時、諸の外道の輩言はく「善い哉、斯難甚だ深し、是禿高座は、必ず答ふること能はざらん、王は利智なるを以ての故に」と。是時、法師、指を以て諸の外道を指し、而して更に餘事を説く。王は時に即ち解す、諸の外道、王に語りて言はく「王の難は甚だ深し。是れ答ふることを知らず、知らざる所を恥ぢて、但指を擧げて、更に餘事を説く」と。王、外道に語るらく「高座の法師は指答已に訖れり、汝を護らんとするが故に、言を以て説かず、向ふ者、汝を指して言はく「汝等は是れ狂なり、狂は少からざるなり」と。汝等は灰を以て身に塗り、裸形にして恥無く、人の髑髏を以て糞を盛りて食し、頭髪を拔き、刺上に臥し、倒に懸り、鼻を熏じ、冬は則ち水に入り、夏は則ち火に炙る、是の如きの種種の所行は、道に非ず、皆是れ狂相なり」と。復次に、汝等が法は肉を賣り、鹽を賣るを以て、即時に婆羅門の法を失す。天祠の中に於て牛を布施することを得れば、即時に之を賣りて、自ら法を得と言ふ。牛は則ち是れ肉なり、是れ人を狂惑す、豈失に非ずや。又言はく、吉河の水中に入れば、罪垢皆除くと、是は罪福の爲に因となること無く、緣となること無し。肉を賣り、鹽を賣りて、此れ何の罪か有らん。吉河の水中に入れば、能く罪を除くと言ふ。若し能く罪を除かば、亦能く福を除かん。誰か吉なる者か有る。是の如きの此諸事は、因無く緣無し、强ひて因緣と爲す、是を則ち狂と

【二四】次に飢ゑたる者は飽く等に就いて。

爲す。是の如きの種種の狂相は、皆是れ汝等に在り。法師は汝を護らんとするが故に、指して說かずと。是を名けて、裸形の狂と爲す。復次に、有人は貧窮にして衣無く、或は弊衣、藍縷なるも、佛力を以ての故に、其をして衣を得しむ。

（二四）問うて曰はく、『飢ゑたる者は、飽くを得、渴せる者は、飲むを得と、云何が飢渴する。』答へて曰はく、『福德、薄きが故に、先世に因無く、今世に緣無し、是故に飢渴す。復次に、是人は先世に佛、阿羅漢、辟支佛の食、及び父母所親の食を奪ひ、佛世に値ふと雖も、猶故に飢渴す、罪重きを以ての故なり。』問うて曰はく、『惡世に生じたる人有り、若し好き飲食を得、佛世に生れ値うて更に飢渴す。若し罪人は佛世に生れ値ふべからず、若し福人は惡世に生るべからず、何を以ての故に爾る。』答へて曰はく、『業報の因緣、各各不同なり、或は有人は佛を見たてまつるの因緣有るも、飲食の因緣無く、或は飲食の因緣有るも、佛を見たてまつるの因緣無し。譬へば黑蛇にして而も摩尼珠を抱へて臥し、阿羅漢の人有り、食を乞うて得ざるが如し。又迦葉佛の時の如きは、兄弟二人有り。出家し道を求む、一人は戒を持し、經を誦し坐禪し、一人は廣く檀越を求め、諸の福業を修す。釋迦文佛、世に出でたまふに至りて、一人は長者の家に生れ、一人は大白象と作りて、力能く賊を破す。長者の子は出家し道を學んで、六神通の阿羅漢を得たり。而も薄福なるを以て、食を乞へども、得ること難し。他日、鉢を持し、城に入りて食を乞ふ。遍く得ること能はず、白象の廐の中に到りて見るに、王は象に供し、種種豐足す。此象に語りて言はく、『我

【三五】次に病は愈ゆに就いて。

と汝と倶に罪過行り」と。象は即ち感結して、三日食はず。象を守る人は惱れて、道人を求覓し見えて、問うて言はく、「汝は何の呪を作して王の白象をして、病んで食すること能はざらしむる」と。答へて言はく、「此象は、是れ我が先身の時の弟なり、共に迦葉佛の時に於て、出家し道を學べり。我は但戒を持し、經を誦し、坐禪のみして、布施を行ぜず。弟は廣く檀越を求め、諸の布施を作すも、戒を持せず、學問せざりき。其の戒を持し、經を誦し、坐禪せざるを以ての故に此象と作り、大いに布施を修するが故に飲食備具し、種種豐足せり。我は但道を行じて布施を修せざるが故に、今道を得と雖も、食を乞うて得る能はず」と。是事を以ての故に、因緣同じからず、佛世に値ふと雖も、猶故らに飢渴す。問うて曰はく、「此諸の衆生は、云何が飽滿する」。答へて曰はく、「有人言はく、佛は神力を以て食を變作し、飽滿することを得しむと。復有人言はく、佛の光身に觸れて、飢ゑ渴せざらしむ。譬へば如意摩尼珠の如し。人有り、念ずれば則ち飢ゑ渴せず、何に況んや佛に値はんをや」。

【三五】病は愈ゆるを得とは、病に二種有り。先世の行業報ゆるが故に、種種の病を得、今世に冷熱の風發るが故に、亦種種の病を得。今世の病に二種有り、一には內病、五藏調はず、結堅せる宿疹なり。二には外病、奔車逸馬より墮墜落し、兵刃刀杖の種種の諸病なり。問うて曰はく、「何の因緣を以てか病を得る」。答へて曰はく、「先世に好んで鞭杖、栲掠、閉繫を行ひ、種種に惱すが故に、今世に病を得。現世の病は身を將ふることを知ら

ずして飲食を節せず、臥起常なること無し、是事を以ての故に種種の諸の病を得るなり。是の如く四百四病有り。佛の神力を以ての故に、病者をして愈ゆることを得しめたまふ。說くが如きは、佛、舍婆提國に在すとき、一の居士有り、佛、及び僧を請じて、舍に於て飯食せしむ。佛、精舍に住して食を迎へたまふに五の因緣有り。一には定に入らんと欲す。二には諸天の爲に法を說かんと欲す。三には遊行して諸の比丘の房を觀んと欲す。四には諸の病める比丘を看る。五には若し未だ結戒せざれば諸の比丘の爲に結戒せんと欲す。是時、佛、手づから戶を持して排き、諸の比丘の房に入りて見るに、一の比丘病み苦めども、人の瞻視する無く、臥して大小便し、起居すること能はず。佛、比丘に問ひたまはく、「汝何んか苦しむ所有るに、獨として人の有ること無き」と。比丘答へて言はく、「大德、我性、懶にして、他人の病有るも初より看視せず、是故に我病むも他亦看ざるなり」と。佛の言はく、「善男子、我當に汝を看るべし」と。時に釋提婆那民は水を盥にし、佛、手を以て其身を摩でたまふ。其身を摩づる時、一切の苦痛は卽ち皆除き愈え、身心安隱なり。是時、世尊、安徐として、此病比丘を扶け起し、將ゐて房を出し、澡洗し、著衣せしめ、安徐として將け入れ、更に蓐を與へ敷いて坐せしめ、佛、病比丘に語りたまはく、「汝、久しきより來、勤求せず、未だ得ざる事を得しめ、未だ到らざる時に到らしめ、未だ識らざる事を識らしめ、諸の苦患を受くること是の如し。方當に更に大苦有るべし」と。比丘聞き已りて、心に自ら思念すらく、「佛恩は無量にして、神力無數なり、手を以て

【三六】次に形殘者は具足することを得に就いて。

【犍抵】ケンテイ（Khandin）譯して續といふ。續生の義

摩でたまへば、我が苦痛は即ち除き、身心快樂なり」と。是を以ての故に、佛、神力を以て、病者をして愈ゆるを得しめたまふ。

（三六）形殘者は具足することを得とは、云何が形殘と名くる。若し人有り、先世に他身を破り、其頭を截り、其手足を斬り、種種の身分を破り、或は佛像を破壞し、佛像の鼻、及び諸の賢聖の形像を毀ち、或は父母の形像を破る。是罪を以ての故に、形を受くること多く具足せず。復次に、不善法の報は身を受くること醜陋なり、若し今世には賊を被り、或は刑戮を被り、種種の因緣以て殘毀を致す、或は風、寒、熱病の身に惡瘡を生じて、體分爛壞す、是を形殘と名く。佛の大恩を蒙りて、皆具足することを得。譬へば、祇洹の中の奴にして、字は犍抵（犍抵は秦に續と言ふなり）といへるものの如し、是れ波斯匿王の兄の子なり。端正勇健にして、心性和善なり。王の大夫人之を見て、心著し、即ち微に之を呼んで已に從はしめんと欲す。犍抵從はず、夫人大いに怒り王に向ひて之を讒し、反りて其罪を被むらす。王聞いて即ち節節に之を解き、塚の間に棄つ。命未だ絕えざる頃、其夜、虎狼羅刹來りて之を食せんと欲す。時に佛、其邊に到り、光明之を照せば、身即ち平復し、其心大いに喜ぶ。佛、爲に法を說きたまへば三道を得。佛、其手を牽いて、將に祇洹に至らんとす。是人言はく、「我身は已に破られ已に棄てらる。佛、我身を續ぎたまふ。今當に此形壽を盡すまで、身を以て佛及び比丘僧に布施すべし」と。明日、波斯匿王、是の如きの事を聞き、祇洹に來至して、犍抵に語りて言はく、「汝に向ひて過を悔ゆ。汝は實に罪無し、枉

【三七】一切の衆生皆等心を得等の文に就いて、初に等心を明す。

げて相刑害せり。今當に、汝が與に國の半を分ちて治せしむべし」と。揵抵言はく、「我已に厭へり、王も亦罪無し。我宿世の殃咎、罪報、應に爾るべし。我は今身を以て、佛及び僧に施したてまつる、復還らざるなり」と。是の如く、若し衆生の形殘れ、具足せざる者有らば、佛の光明を蒙りて、即時に平復す。是故に、乃至形殘ふも、皆具足するを得と言ふ。佛の光明を蒙りて、即時に平復するなり。

【經】一切の衆生、皆等心を得て相觀ること父の如く、母の如く、兄の如く、弟の如く、姉の如く、妹の如く、亦親親及び善知識の如し。是時衆生は、等しく十善業道を行じ、梵行を淨修し、諸の瑕穢無く、惔然として快樂す。譬へば、比丘の第三禪に入りて、皆好慧を得、戒を持し、自ら守り、衆生を嬈らざるが如し。

【論】問うて曰はく、『是諸の衆生は、未だ欲を離れず、禪定無く四無量心を得ず、云何が等心を得ん。』答へて曰はく、『是等は禪中の等に非ず、是れ一切衆生の中に於て、怨無く恚無きなり。此等を以ての故に、善心もて相視るなり。復次に、等心とは、經の中に言へる有り「云何が等心なる。相視ること、父母の如き、是を等心と名く」と。問うて曰はく、『一切衆生は便ち是父母、兄弟、姉妹なりと視るや不や。』答へて曰はく、「不なり、老者を見ては父母の如くし、長者は兄の如くし、少者は弟の如くす。姉妹も亦爾なり。等心の力の故に、皆親親の如し。問うて曰はく、「云何が父母に非ざるを父母と言ひ、乃至親親に非ざるを親親と言はん、妄語に墮せずや。」答へて曰はく、「一切の衆生は、無量世の中に、

【一八】次に十善業道に就いて、

【一九】次に梵行を淨修し、諸の瑕穢無しに就いて

父母、兄弟、姉妹、親親に非ざる者無し、

復次に、實相の法中には父母兄弟の人無し。吾我の顚倒の計に著するが故に名けて父母兄弟と爲す。今、善心の力を以ての故に、相視ること父の如くし母の如くするも、妄語に非ざるなり。復次に、人は義を以て相親しむ。父に非ざれども、之に事へて父と爲し、母に非ざれども、之に事へて母と爲すが如し。兄弟兒子も亦復是の如し、人は子有れども、惡を行ずれば、黜けて之を棄て、他姓の善く行ふものは、養ひて以て子と爲すが如し。是の如く相視るを、則ち等心と爲す。偈に說くが如し。

他の婦を視ること母の如く、他の財を見ること火の如く
一切は親親の如し、是の如きを等見と名く、

（一八）是時、衆生等しく、十善業道を行ずとは、身業道に三種有り。不殺と不盜と不邪婬となり。口業道に四種有り。不妄語と不兩舌と不惡口と不綺語となり。意業道に三種有り。不貪と不惱害と不邪見となり。自ら生を殺さず、他をして殺さしめず、殺さざる者を讚じ、人の殺さざるを見て其に代りて歡喜す。乃至邪見にも亦四種有り。問うて曰はく、『後の三業道は業に非ず、前の七業道は亦業なり、云何が十善業道と言ふ。』答へて曰はく、『少きを沒して多きに從ふが故に、通じて業道と名く。後の三は業に非ずと雖も、能く業を起す、又復業の爲の故に生ず、是故に總じて業道と名く。

（一九）梵行を淨修し、諸の瑕穢無しとは、問うて曰はく、『上に十善業道を行ずることを

【三〇】次に恢然として快樂すに就いて

【三一】次に第三禪の樂に就いて明す

說き、此理已に足れり。今、何を以てか復梵行を淨修すと言ふ」答へて曰はく、「行人は十善業道を行ずれども、婬を斷ぜず、今、更に此に梵天の行を行じ、婬欲を斷除するを讃ずるが故に、梵行を淨修すと言ふ。諸の瑕穢無しとは、婬を行ずるの人は、身惡にして名臭る、是を以ての故に、婬を斷ずるの人を讃じて、諸の瑕穢無しと言ふ。

〔三〇〕恢然として快樂すとは、問うて曰はく、「此は何等の樂なる」答へて曰はく、「是樂に二種有り、內樂と涅槃の樂となり。是樂は五塵より生ぜず。譬へば、石泉の水は中より出で外より來らざるが如し。心の樂も亦是の如し、等心を行じ、梵行を修し、十善業道を得て、清淨にして穢無き、是を內樂と名く。問うて曰はく、「此樂は何の界繫なりや、欲界繫なりや、色界、無色界繫なりや。」答へて曰はく、「是樂は欲界には繫にして亦不繫なり、色、無色界には繫に非ず。今言はく、「譬へば比丘の第三禪に入るが如し」と。若し是れ色界の繫ならば言ふべからず、譬への如し。是事を以ての故に、色界の繫に非ざるを知る。此は欲界の心に喜樂を生じ、一切身に滿ずること、譬へば煖蘇を身に漬くれば、柔軟にして和樂なるが如し。不繫とは、般若波羅蜜の相を觀ずることを得れば、諸法は不生不滅にして、實智慧を得、心に著する所無く、無相の樂なり。是を不繫と爲す。

〔三一〕問うて曰はく、「佛、言はく、「涅槃は第一の樂なり」と。何を以てか第三禪の樂と言ふ」答へて曰はく、「二種の樂有り、有受樂と有受盡樂となり。受盡樂とは一切の五陰盡きて更に生ぜず、是れ無餘涅槃の樂なり。能く憂愁の煩惱を除き、心中歡喜す、是を樂受と名

【三】次に皆好慧を得等に就いて明す。

く、是の如きの樂受は、滿足して第三禪の中に在り。是を以ての故に、聖人は、第三禪の樂の如しと言ふ。問うて曰はく、初禪・二禪にも亦樂受有り、何を以ての故に但第三禪と言ふ。答へて曰はく、樂に上中下有り。下は初禪、中は二禪、上は三禪なり。初禪に二種有り、樂根と喜根となり。五識相應は樂根、意識相應は喜根なり。二禪の中の意識相應は喜根にして、三禪の意識相應は樂根なり。一切の三界の中、三禪を除いては、更に意識相應の樂根無し。是れ五識は分別する能はず、名字の相を知らず、眼識の生ずるは彈指の頃の如く、意識は已生なり。是を以ての故に、五識相應の樂根は、樂を滿足する能はず、意識相應の樂根は、能く樂を滿足す。是を以ての故に、三禪の中には、諸の功德少く、樂多きが故に、背捨、勝處、一切入無し。是の三禪を過ぎて更に樂無きなり。是を以ての故に、譬へば比丘の第三禪に入り、一切衆生、皆好慧を得、戒を持して自ら守り、衆生を嬈さざる者の如し、と言ふ。

（三二）問うて曰はく、『何を以ての故に樂に次いで、後、皆好慧を得、と言ふや』。答へて曰はく、人は未だ樂を得ざれば能く功德を作し、既に樂を得已れば、心樂に著すること多きが故に功德を作さず、是故に樂の後に次第に心に好慧を得。好慧とは、戒を持して自ら守り、衆生を嬈さざるなり。問うて曰はく、『持戒は、是れ自ら守ると名け、亦衆生を嬈さずと名く』。何を以ての故に、復、自ら守り、衆生を嬈さず、と言ふ。答へて曰はく、『身口の善は是を、持戒、と名け、心を檢して善に就くは、是を、自ら守る、と名け、亦衆生を嬈さ

ず、と名く。一切の諸の功徳は、皆戒身、定身、慧身の攝する所なり。言はく、好んで戒を保つは、是れ戒身に攝し、好んで自ら守るは、是れ定身に攝し、衆生を嬈さず、禪中の慈等の諸の功徳は、是れ慧身に攝す。問うて曰はく、『亦人有り、戒を持つことを好まず、と言ふ者無し、今何を以てか、好んで戒を持つ、と言ふ。』答へて曰はく、『婆羅門の如きは、世界の法に著する者有り。言はく、一家を捨て、好んで戒を持するは、是を種を斷ずるの人と爲す。又自力を以て財を得、廣く功徳を作す。是の如きは福有り。出家は、食を乞ひ自身に給せず、何んが能く諸の功徳を作さん」と、是の如く、好んで戒を持するを呵するを爲す。亦世界の治法道に著するの人、好んで自ら守るを呵する者有りて、言はく、「人は當に法を以て世を治め、善を賞し、惡を罰すべし。法を犯すべからず、親親を捨つべからず、法を立て世を濟はば、益する所の者大なり。何んが獨り其身を善くして、自ら守り無事にして、世の亂るるをも理めず、人急なれども、救はざるを用ひん」と。是の如きを名けて、好んで自ら守るを呵すと爲す。亦人の好んで衆生を嬈さざるを呵する者有り。言はく、「怨有れども報ずる能はず、賊有れども、擊つ能はず、惡人を治むる能はず、罪有れども、以て誚むること無く、忠を抑け、難を救ふこと能はざるは、默然として益無し。何んが此を用ひるを爲さん」と。是の如きを、好んで衆生を嬈さざるを呵すと爲す、と說くが如し。

人として勇健なる無くんば、何んが世間に生るるを用ひん

難を親て救はざれば、木人の地に在るが如し

是の如き等の種種の不善語を名けて、衆生を嬈さざるを可すと爲す　是諸の天人は皆好慧を得、戒を持して自ら守り、衆生を嬈さざるなり、是善法を行ずれば、身心安隱にして畏れ難る所無く、熱無く惱無く、好名善譽有りて、人に愛敬せらる、是を涅槃門に向ふと爲す。命終せんと欲する時、福を見、心喜んで、憂無く悔無し　若し未だ涅槃を得ざれば、諸佛の世界に乘じ、若は天上に生ず。是を以ての故に、好慧を得、戒を持して自ら守り、衆生を嬈さず、と言ふ。

大智度論卷第八

【一】以下爾時世尊師子座の上に在して等の文に就いて、佛の光明威德の巍巍たるを明すの中に二種佛身を述ぶ。

大智度初品中放光釋論之餘　卷第九

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏法師鳩摩羅什詔を奉じて譯す

經 爾時、世尊、師子座の上に在して坐したまふに、三千大千世界の中に於て、其德は特に尊く、光明、色像、威德は巍巍として、遍く十方の恆河沙等の如き、諸佛の世界に至る、譬へば須彌山王の光色の殊特にして、衆山の能く及ぶ者無きが如し。

論 問うて曰はく、一佛、何の力を以ての故に、一切衆生の中に於て、其德、特に尊く、光明、威德巍巍たること、乃ち是の如くなる。轉輪聖王、諸天、聖人の如きも亦大力、光明、威德有り。何を以てか、獨り佛の德のみ特に尊しと言ふ。〔一〕答へて曰はく、「此諸の賢聖は、光明威德有りと雖も、量有り限有り。譬へば衆星は日光既に出づれば則ち沒して現ぜざるが如し。佛、無量阿僧祇劫より、大功德を集め、一切を具足したまふ。因緣大なるが故に果報も亦大なり。餘人には此無し。復次に、佛は世世に諸の苦行を修すること無量無數なり。頭目髓腦、常に衆生に施したまふ。豈唯國、財、妻子のみならんや。一切の種種の戒、種種の忍、種種の精進、種種の禪定、及び無比清淨にして、壞すべからず、盡すべからざるの智慧を世世に修行して、已に具足し滿じたまふ。此果力の故に稱量すべ

からざるの殊特の威神を得、是を以ての故に、因縁大なるが故に、果報も亦大なりと言ふ。

問うて曰はく、若し佛、神力無量にして、威徳の巍巍たること稱說すべからずんば、何を以ての故に九の罪報を受くる。一には梵志女、孫陀利に謗られ、五百の阿羅漢にも亦謗らる。二には旃遮婆羅門の女、木盂を繋けて腹を作り佛を謗る。三には提婆達多、山を推して佛を壓し、足の大指を傷く。四には迸木脚を刺す。五には毘樓璃王、兵を興し、諸の釋子を殺す、佛、時に頭痛したまふ。六には阿耆達多婆羅門の請を受けて馬麥を食したまふ。七には冷風動ずるが故に脊痛みたまふ。八には六年苦行したまふ。九には婆羅門の聚落に入り、食を乞うて得ず、空鉢にして還りたまふ。復冬至の前後、八夜寒風に竹を破り三衣を索めて寒を禦ぎたまひしこと有り。又復熱を患ひ、阿難は後に在りて佛を扇ぎたてまつれり。是の如き等の世界の小事、佛、皆之を受けたまへり。佛の若きは神力無量にして、三千大千世界、乃至東方の恒河沙等の如き、諸の世界の南西北方四維上下に、光明色像威徳巍巍たり。何を以ての故に、諸の罪報を受くる。答へて曰はく、佛、人中に在りて人と生れ、父母有り、人身の力を受け、一指節の力は、千萬億那由他の白象の力に勝る。神通力は無量無數にして不可思議なり。是淨飯王の子、老病死の苦を厭ひ、出家して佛道を得。是人、豈罪報を受け、寒熱等の爲に困められんや。佛の如きは神力不可思議なり。不可思議の法の中に、何ぞ寒熱の諸の患ひ有らん。

復次に、佛に二種の身有り。一には法性身と、二には父母性身となり。是法性身は十方虚空に

滿ち、無量無邊の色像、端正の相好、莊嚴無量の光明、無量の音聲有り。法を聽くの衆も亦虚空に滿ず。（此衆亦是れ法性身にして生死人の見るを得る所に非ざるなり）常に種種の身、種種の名號、種種の生處、種種の方便を出して、衆生を度し、常に一切を度して、須臾も息む時無し。是の如きは法性身の佛なり。能く十方の衆生の諸の罪報を受くる者を度するは生身佛なり。生身佛は次第に說法して、人の法の如くす。二種の佛有るを以ての故に、諸の罪を受くるに咎無し。復次に、佛、卽ち道を得たまふ時、一切の不善法を盡く斷じ、一切の善法は、皆成就したまふ。云何が今實に不善法の報の受くべき有らん。但未來世の衆生を憐愍したまふが故に方便を現じて此諸の罪を受けたまふのみ。復次に、阿泥盧豆の如きは、一の辟支佛に食を與へしが故に、無量の世樂を受け、心に飲食を念ずれば意に應じて卽ち得。何に況んや佛は世世に肉を割き髓を出して、以て衆生に施したまふに、而も食を乞うて得ず、空鉢にして還りたまはんや。是事を以ての故に佛は方便して、衆生を度せんが爲の故に、此諸の罪を受けたまふことを知る。云何が方便なる。未來世の五衆の佛弟子の福を施すこと薄きを憐愍したまふが故に、種種の自活の具を乞うて、得ること能はず。諸の白衣言はく、「汝衣食を得ること能はず、病有れども除くこと能はず、何んが能く道を得、以て人を益せん」と。是五衆は當に答ふべし、「我等は活身の小事無しと雖も、道を行じて福德有り、我等の今日の衆苦は是れ先身の罪報なり、今の功德の利は將來に在り、我等が大師なる佛すら、婆羅門の聚落に入りて食を乞うて尙又得ず、空鉢にして還りたまへり。佛も亦諸の病

【毘摩羅詰經】普通にいふ維摩經のこと。

有り、釋子畢罪の時、佛も亦頭痛したまふ。何に況んや我等薄福の下人をや」と。諸の白衣は、聞き已りて瞋心則ち息み、便ち四種の供養を以て、佛の如くに比丘に供給するに身安隱なることを得、坐禪して道を得たり。是を方便と爲す。故に實に罪を受くるに非ず。「毘摩羅詰經」の中に說くが如き、佛、毘耶離國に在せり。是時佛、阿難に語りたまはく、「我、身中に熱風の氣發れり、當に牛乳を用ふべし。汝、我が鉢を持して牛乳を乞ひ來れ」と。阿難は佛鉢を持し、晨朝に毘耶離に入り、一の居士の門に至りて立てり。是時、毘摩羅詰は是中に在りて行き、阿難の鉢を持して立つを見て、阿難に問はく、「汝何を以てか晨朝に鉢を持して立つ」と。阿難答へて曰はく、「佛の身に小疾有り、當に牛乳を用ふべきが故に我此に到る」と。毘摩羅詰の言はく、「止みね、止みね、阿難、如來を謗ること勿れ。佛は世尊なり、已に一切諸の不善法を過ぐ、當に何の病か有るべき。外道をして此麁語を聞かしむること勿れ。彼當に佛を輕んじて、便ち佛は自ら疾んで救ふこと能はず、安んぞ能く人を救はんと言はん」と。阿難言はく、「此は我意に非ず、面り佛勅を受けたり、當に牛乳を須ふべし」と。毘摩羅詰言はく、「此は佛勅なりと雖も、此れ方便の爲にして、今五惡の世なるを以ての故に是像を以て一切を度脫したまふ。若し未來世に諸の病比丘有らば、當に白衣より諸の湯藥を求むべし。白衣言はく、「汝自ら疾有りて救ふこと能はず、安んぞ能く餘人を救はん」と。諸の比丘言はく、「我等が大師すら、猶尚病有り、況んや我等が身は草芥の如し、能く病ざらんや」と。是事を以ての故に、諸の白衣等は諸の

【二】以下爾時、世尊は常身を以て經の文に就て、初に佛、常身もて三千大千世界の衆生に示したまふを明す。

湯藥を以て比丘に供給し、安隱に坐禪し、道を行ずることを得しむ。外道の仙人すら能く藥草呪術を以て他人の病を除くこと有り、何に況んや如來は一切の智徳有り、自身の病るを而も除くこと能はざらんや。汝、且く默然として鉢を持して乳を取り、餘人の異學をして聞き知ることを得しむること勿れと。是を以ての故に、佛は方便の爲にして實の病に非ざることを知る。諸罪の因緣も皆亦是の如し。是を以ての故に、佛は其德特に尊くして、光明色像威德巍巍たりと言ふ。【二】

經 爾時、世尊は常身を以て、此三千大千世界の一切の衆生に示したまふ。是時、首陀會天、梵衆天、他化自在天、化自樂天、兜率陀天、夜摩天、三十三天、四天王天、及び三千大千世界の人は、非人と與に、諸の天華、天の瓔珞、天の澤香、天の末香、天の青蓮華、赤蓮華、白蓮華、紅蓮華、天の樹葉香を以て持して佛の所に詣れり。

論 問うて曰はく、佛は何を以ての故に、常身を以て此三千大千世界の中の、一切の衆生に示したまふ。答へて曰はく、佛、摩訶般若波羅蜜を說かんと欲し、三昧王三昧に入り、足下の相輪の光明より、上肉髻の光炎に至るまで、大いに明かなること、譬へば劫盡きて燒くる時、諸の須彌山王の隨うて次いで燃え盡くるが如し。是光明は遍く三千大千世界に滿ち、乃至十方の恒河沙等の如き、諸佛の世界も皆悉く大いに明かなり。衆生の見る者は、畢に阿耨多羅三藐三菩提に至る。是時、佛、般若波羅蜜を說きたまはんと欲し、初には神力、第二には一切の毛孔、皆悉く微笑し、第三には常光明を放ち、面各一丈

【三】次に淨居天梵世天を釋す。

丈なり。第四には舌相遍く三千大千世界を覆うて笑ひ、第五には師子遊戲三昧に入り、三千大千世界は、六反震動す。第六には佛師子座に坐したまひ、最勝の身光明の色像を現じ、威德巍巍たり。此神力を以て衆生を感動す。其信有る者は皆阿耨多羅三藐三菩提に至る。其中の疑ふ者には常の身を示したまふに、便ち信じ解することを得て、各各說いて言はく、「今見る所の者は、是れ佛の眞身にして、佛力を以ての故に、此三千大千世界の中の人は佛の常身を見て、遠きも近きも疑ふること無し」と。是時、三千大千世界の衆生は、皆大いに歡喜して言はく、「此は眞に是れ佛身なり、佛初めて生れたまふの時、初めて佛と成りたまふの時、初めて法輪を轉じたまふの時は、皆此身を以て是の如く思惟したまふ。此は眞に是れ佛身なり」と。

(三)問うて曰はく、「何を以ての故に名けて、淨居天、梵世天と爲す」答へて曰はく、「第四禪に八種有り、五種は、是れ阿那含の住處、是を淨居と名く。三種は凡人聖人共に住す。是八處を過ぐれば十住の菩薩の住處有り。亦淨居と名け、大自在天王と號す。梵世天とは生處に三種有り、一は梵衆天にして諸の小梵の生ずる處、二は梵輔天にして貴梵の生ずる處、三は大梵天にして之を中間禪定の處と名く。問うて曰はく、「欲を離ることは是れ同じ、何を以ての故に、貴賤の異處有る。答へて曰はく、「初禪に三種有り、下中上なり。若し下禪を修せば梵衆に生じ、若し中禪を修せば梵輔に生じ、若し上禪を修せば大梵に生ず。慈行も亦是の如し。妙眼師の如きは念言すらく、「我衆人の爲に法を說いて、皆梵天の

【四】次に他化自在天化自樂天等を明す。

中に生ず、我今弟子と同處なるべからず、當に上業を修すべし」と。上慈を修するが故に大梵天の中に生ず。復次に第一清淨人の故に、大梵天の中に生ず。問うて曰はく、「何を以ての故に、四禪の中に於て、但初と後とを說いて中間を說かざる。」答へて曰はく、「初門は欲を離るること難きが故に、最後は微妙にして得難きが故に、中間は入り易きが故に說かざるなり。」復次に、梵世を言へば已に色界に攝す。第四禪は第一に妙なるを以ての故に別に說くなり。復次に、人は多く梵天を識りて餘天を識らず、是故に但梵天のみを說く。淨居天は常に衆生を憐愍して、常に佛を勸請するを以ての故なり。復次に、佛の法を說きたまふ聲は梵天に至り、佛の道を得たまふ時は、諸天は展轉して唱へ告げて、乃ち淨居天に至る。是を以ての故に初と後とを說いて中間を說かざるなり。復次に、梵天は欲界に近きが故に聞くべく、淨居天は是れ色界の主なり、是故に應に聞くべし。譬へば門を守るの人は客を識り、客其主に至れば主は則ち之を識るが如く、中間は無事なるが故に說かざるなり。復次に、二禪は大喜、三禪は大樂にして喜樂放逸なり、是故に說かず。

(四)問うて曰はく、『何を以てか他化自在と名くる。』答へて曰はく、『此天は他の化する所を奪うて自ら娛樂するが故に他化自在と言ふ。化自樂とは、自ら五塵を化して、自ら娛樂するが故に化自樂と言ふ。兜率を知足天と名け、夜摩を善分天と名け、第二を三十三天と名く。最下の天は是れ四天王の諸天なり。須彌山の高さは八萬四千由旬にして、上に三十三天の城有り。須彌山の邊に山有り、由揵陀羅と名く。高さ四萬二千由旬なり。此山に四頭

有り。須弥山頭に各城有り。四天王各一城に居す。夜摩等の諸天は七宝の地にして虚空の中に在り。風有り之を持して住せしむ。乃至浄居も亦復是の如し。是の如きの諸天は、仏身の清浄なる大光明を見て、諸の供具、水陸の諸の華を浄持す。陸地に生ずる華は須曼提を第一と為し、水中に生ずる華は、青蓮華を第一と為す。若しは樹生の華、若しは蔓生の華、是の諸の名華は、種種の異色種種の香熏有り、各天華を持して仏の所に来詣す。云何が天華と為す。此の諸の華は色好く、香多く、柔軟細滑なり。是故に此を以て供養の具と為す。天華は芬熏香気有り、風に逆ひ、諸天の瓔珞垂りて仏の上に在り、天の澤香以て仏地を塗り、天の末香以て仏の上に散ず。天の蓮華は青・赤・紅・白なり。何を以て黄無きや。黄は火に属す。火は水華の宜しき所に非ざるが故なり。天の黄蓮華は瑠璃を華と為し、金剛を台と為し、閻浮那陀金(四)を鬚と為し、柔軟にして甘香し。意に天の樹華の香を持して仏の所に詣る。

(五)問うて曰はく、「若し諸天の供養は、天華を持つべくんば、人及び非人は云何が天華を得る」。答へて曰はく、「仏は神足を以て大光明を放ちたまひ、地は六種に震動し、諸天は種種の妙華を雨して三千大千世界に満ち、以て仏に供養したてまつる。是の人、非人は、若しは此の華を取りて以て供養す。復次に、天竺国の法に、出る好き物を名けて天物と名く。是の人華、非人華は天上の華に非ずと雖も、其の妙好なるを以ての故に、名けて天華と為す。是の故に、人も非人も諸の天華を持す、と言ふ。是れ則ち咎無し。

【四】閻浮那陀金】ジャムブナダスヴルナ(Jambunadasvarna) 色赤黄にして紫焔気を帯びたる金の名。

【五】次に人も非人も天華を持すに就いて

【六】以下是諸の天華等の文を明す。

【七】以下散ずる所の寶華等の文に就いて、其寶華の化して臺となり空中に住るを明す。

【八】以下是華臺の邊等の文を明す。

【經】是諸の天華、乃至天樹の葉香を以て佛の上に散ず。

【論】(六)問うて曰はく、「何を以てか、華を以て佛の身の上に散ずる。」答へて曰はく、「恭敬し供養するが故なり。又佛の光、照したまへば、皆遙に佛を見たてまつり、心大いに歡喜し、佛を供養したてまつるが故に、皆諸の華を以て佛の上に散ず。復次に、佛は三界に於て第一の福田なり。是を以ての故に、華を佛の上に散ず。」

【經】散ずる所の寶華は、此三千大千世界の上に於て、虛空の中に住りて、化して大なる臺と成る。

(七)問うて曰はく、「何を以てか、化して此臺と作りて、虛空の中に在る。」答へて曰はく、『散ずる所の華は少なけれども、而も化して大なる臺と爲り、以て衆生に因は少くして果は多きことを示す。』問うて曰はく、『何を以ての故に臺は虛空の中に住り、住して而も墮落せざる。』答へて曰はく、『佛は神力を以て衆生に示し、佛は福田と爲りたまひ、報を得て失はず、乃し成佛するに至るまで其福の滅せざるを知らしめんと欲したまへばなり。』

【經】是華臺の邊には、諸の瓔珞、雜色の華蓋を垂れ、五色に繽紛たり。是諸の華蓋瓔珞は、遍く三千大千世界に滿つ。

【論】(八)問うて曰はく、『若し佛自ら神力有らば、何を以てか、散ずる所の華に因りて變じて臺と爲す。』答へて曰はく、『人をして心信に清淨ならしめんと欲するが故なり。是人は供養する所の、變じて此臺と成るを見て、心大いに歡喜す。歡喜に因りての故に、大いに

【九】以下是華蓋瓔珞を以て等の文に就いて明す。

【一〇】以下爾時三千大千世界及び等の文に就て明す。

福德を得るなり。」

經 是華蓋瓔珞を以て嚴飾するが故に、此の三千大千世界は皆金色と作り、及び十方の恒河沙等の如き諸佛の世界も、皆亦是の如し

論〔九〕有人言はく、「轉輪聖王は四世界の主、梵天王は千世界の主、佛は三千大千世界の主たり」と。是の語は實に非ず。是を以ての故に、佛の變化したまふ所は、乃ち十方の恒河沙等の諸佛の世界に至る。

經 爾時、三千大千世界及び十方の衆生は、各自ら念ずらく、『佛は獨り我が爲に法を説きたまふ、餘人の爲にはあらず』と。

論〔一〇〕問うて曰はく、「佛は一身を以て、三千大千世界及び十方に示したまふ。今諸の衆生は何を以てか、各各佛の前に在して法を説きたまふと見る。」答へて曰はく、「佛に二種の神力有り。一には一處に坐して法を説きたまへども、諸の衆生をして遠きに處して皆見、遠きに處して皆聞かしめたまふ。二には佛は一處に在りて法を説きたまふも、能く一一の衆生をして、各自に佛の前に在して法を説きたまふと見しめたまふ。譬へば日出でて、影衆水に現ずるが如し。復次に、衆生は同じからず。有人は佛身の三千大千世界に遍ずるを見て淨き信を得、有人は各各佛の前に在して法を説きたまふを見て、心清淨なることを得て信樂し歡喜す。是を以ての故に、佛は今各各の前に在して爲に法を説きたまふ。」

經 爾時、世尊は師子座に在して、熙怡して笑ひたまふに、光口より出で遍く三千大千世

【二】以下爾時、世尊は師子座に在して等の文に就いて。佛の放光の衆生に徹する所以を明す。

界を照す。此光を以ての故に、此間の三千大千世界中の衆生は、皆、東方の恆河沙等の如き、諸佛及び僧を見たてまつるなり。彼間の恆河沙の如き等の世界中の衆生も、亦此間の三千大千世界中の釋迦牟尼佛、及び諸大衆を見たてまつるなり。南西北方、四維上下も亦復是の如し。

【論】問うて曰はく、『佛は上に已に多く光明を放ちたまへり。今何を以ての故に、復斯光を放ちたまふ。』答へて曰はく、『先に光明を放つは各各事有り。先に說くが如し。今は彼此の衆會、兩ながら未だ相見ざるを以ての故に、光明神力を以て、彼此の世界の一切の大會をして、兩ながら相見ることを得しめたまふなり。』問うて曰はく、『弟子の中の、天眼第一の大阿羅漢なる、長老阿泥盧豆の如きは、暫く小千世界を觀見し、諦かに二千世界を觀見す。大辟支佛は、暫く二千世界を觀見し、諦かに三千大千世界を觀見す。今一切の人は、云何が能く東方の恆河沙等の諸佛の世界を見る。』答へて曰はく、『是れ佛の神力の彼をして見ることを得しむ、衆生の力には非ざるなり。設ひ阿羅漢及び辟支佛等も、亦佛の力を以ての故に、見る所限無きこと、譬へば、轉輪聖王の飛行するに、一切の營從及び諸の象馬衆畜の皆隨ひ去るが如し。今佛の神力の故に、衆生は遠處に在りと雖も、亦相見ることを得。又般舟三昧の力に如ふが故に、天眼を得ずと雖も、而も十方を見るなり。佛の眼耳は無礙なり。亦劫盡き燒くる時、一切衆生は自然に皆禪定を得、天眼天耳を得るが如し。佛の神力を以ての故に、一切衆生をして、皆遠く見ることを得しめたまふも、亦

復是の如し。爾時、世尊師子座に在して笑ひたまふ。笑ふことは先に說くが如し、餘の說かざる者を今當に說くべし。問うて曰はく、『此間の衆生の遠く彼方を見るは、是れ佛の神力なりとせば、彼間の衆生も亦此方を見る、是れ誰の力なりや。』答へて曰はく、『是れ釋迦牟尼佛の力なり。彼をして此間の三千大千世界を見、及び釋迦牟尼佛並に一切の衆會を見しめたまふ。南西北方四維上下も亦復是の如し。』

【二三】是時東方恒河沙の如き等の諸佛の世界を過ぎ、等の文に就いて、初に世界の最も邊に在りといふを釋す

大智度初品中十方諸菩薩來釋論第十五

經 是時、東方の恒河沙の如き等の諸佛の世界を過ぎ、其世界の最も邊に在る世界を多寶と名け、佛を寶積と號けたてまつる。今現に在して諸の菩薩摩訶薩の爲に、般若波羅蜜を說きたまふ。

論 問うて曰はく、『佛の說きたまふが如くんば、一切の世界は無量無邊なり。云何が其世界の最も邊に在りと言ふ。最も邊に在りとは、是れ有邊の相に墮す。若し世界有邊ならば、衆生は應に盡くべし。何を以ての故に、無量の諸佛の一一の佛、無量阿僧祇の衆生を度し、無餘涅槃に入らしむ、更に新しき衆生無く、故き者應に盡くべし。』答へて曰はく、『佛經に世界は無量なりと言ふと雖も、其れ方便の說にして、是れ實の教に非ず。如實には神無けれども、方便の故に說いて神有りと言ふ。是れ十四の難たり。世界の有邊無邊は俱に邪見

【三】次に多寶に就いて

【四】次に寶積に就いて

と爲す。若し無邊ならば、佛は應に一切智有るべからず。何を以ての故に。智慧普く知りて、物として盡さざる無き、是を一切智と名く。若し世界無邊ならば、是れ盡さざる所有らん。若し有邊ならば先に說く答の如し。此には倶に邪見なり。何を以ての故に。無邊に依りて、以て有邊を破るに依るが故なり。是多寶世界は、一切世界の邊に非ず。是れ釋迦牟尼佛の因緣有りて、衆生の應に度すべき者の最も邊に在り。譬へば一國の中に最も邊に在るが如きは、一閻浮提の最も邊に在りとは言はず、若し無邊ならば、佛は一切智者なるべからず。上の佛の義の中に答ふるが如し。佛の智は無量なるが故に應に知るべし。譬へば函大なるが故に、蓋亦大なるが如し。

〔一三〕問うて曰はく、「世界を多寶と名く。寶に二種有り、財寶と法寶となり。何等の寶多ければ、名けて多寶世界と爲す」。答へて曰はく、二種皆有り。又多くの菩薩、法性等の諸寶（言はく、此寶は大菩薩の所有なり、以て寶冠と爲す。寶冠の中に皆諸佛を見、又一切諸法の性に了達す。）を照すこと多きが故に名けて多寶と爲す。是中に佛有り、寶積と名く、無漏の根、力、覺道等の法寶を集むるを以ての故に名けて寶積と爲す。

〔一四〕問うて曰はく、「若し爾れば一切の佛は皆應に寶積と號すべし。何を以てか、獨り彼佛を稱して寶積と爲す」。答へて曰はく、一切の佛は皆此寶を有すと雖も、但彼佛は即ち此寶を以て名と爲す。彌勒を名けて慈氏と爲すが如し。諸佛は皆慈有りと雖も、但彌勒のみ、即ち慈を以て名と爲すなり。復次に寶華佛の如きは、生じたまふ時、一切の身邊に、種種

【一五】次に十方佛の有無に就いて、種種の例證もて餘佛の在すことを論ず。

の華色の光明有りしが故に、寶華太子と名く。然燈佛の如きは、生れたまふ時、一切の身邊、燈の如くなりしが故に、然燈太子と名け、佛と作りても亦然燈（丹注に云はく舊に定光佛と名くるなり。）と名けたてまつる。寶積佛も亦是の如く、應に初生の時に當りて、亦多く諸の寶物生じ、或は地より生じ、或は天より種種の寶を雨ふらして集むるが故に、名けて寶積と爲す。

問うて曰はく、「唯釋迦牟尼一佛のみ有り、十方の佛無し。何を以ての故に、是の釋迦牟尼佛、無量の威力無量の神通有りて、能く一切衆生を度したまふ。更に餘佛無し。說くが如くんば、阿難、一心に思惟すらく、過去の諸佛の寶華、然燈等は、皆好世に生れたまひ、壽命は極めて長く、能く一切衆生を度したまふ。今、釋迦牟尼佛は惡世に生れたまひ、壽命は短し、將に一切の弟子を度する能はざる無からんとするや」と。是の如く心に疑へり。佛、時に阿難の念ずる所を知りたまひ、卽ち日の出づる時を以て、日出三昧に入りたまふ。爾時、佛身の一切の毛孔より諸の光明を出すこと、亦日の邊より諸の光明を出すが如く、其光は遍く閻浮提の內を照し、其明滿ち已りて四天下を照し、四天下を照し滿ち已りて、三千大千世界を照し、三千大千世界に滿ち已りて十方無量の世界を照す。爾時、世尊は臍の邊より諸の寶蓮華を出したまふ。偈に說くが如し

青光の琉璃の莖有り、千葉の黃金色にして
金剛を華臺と爲し、琥珀を華飾と爲す
莖は軟かにして麁曲ならず、其高さ十餘丈なり

眞青の琉璃の色は、佛の臍の中に在りて立てり
其莖は廣長にして、白光の間に妙色有り
無量の寶もて莊嚴せり、其華に千葉有り
妙華の色は是の如く、佛の臍の中より出づ
是四の華臺の上の、寶座は天日に曜き
座に各坐したまふ佛有り、金山の四首の如く
光曜は等しくして一なるが如し、四佛の臍の中より
各妙寶の華を出し、華の上に寶座有り
其座に各佛有り、是佛の臍の中より
展轉して寶華を出し、華華に皆座有り
座座に各佛有り、是の如く展轉し
化して乃ち淨居天に至る、若し近遠を知らんと欲せば
當に譬喩を以て說くべし、一の大方石有り
縱の廣さは太山の如く、上より放ちて下らしむれば
直に過ぎて礙ふる所無く、萬八千三百
八十有三歲、是の如きの年歲を數へて
爾して即ち地に到るを得、是兩の中間に於ては

化佛其中に滿ち、其光の大にして盛明なるは火と日月とに踰えたり、有は佛身より水を出し亦有は身より火を出し、或は復現に經行し有時は靜かに默坐す、有は佛乞食を行じて此を以て衆生を福とし、或は復經行を說き有時は光明を放ち、或は三惡趣氷、闇、火の地獄に到り、和氣を以て寒氷を濟ひ光明は闇獄を照す、熱處には涼風を施し事に隨うて其苦を救ひ、之を安んじて以て患無からしめ之を度するに法樂を以てす

是の如く、種種の方便もて、一時に頓に能く十方無量の衆生を度し、衆生を度し已りて、還りて本座に入り、佛の臍中に住したまふ。爾時、世尊は、日出三昧より起ちて、阿難に問ひて言はく、「汝此三昧の神通力を見るや不や」と。阿難、佛に白さく、「唯然り、已に見る」と。重ねて佛に白して言さく、「若し佛、世に住さば、一日の中に度したまふ所の弟子は、虛空に滿つべし、何に況んや在世八十年をや」と。是を以ての故に、一佛の功德神力は、無量に現じて十方を化し、佛と異る無しと言ふ。

復次に、佛の言ふ所の如くんば一女人は、轉輪聖王と作るを得ず、天帝釋、魔天王、梵天

【鞞婆尸】ヸパシー(Vipaśyī)種種見と譯す。
【尸棄】シキー(Sikhi)火と譯す。
【鞞怒婆附】ヸスヴァブク(Viśvabhū)一切勝と譯す
【迦羅鳩飡陀】クラッチャンダ(Krakucchanda)所應斷已斷と譯す。
【迦那伽牟尼】カナカムニ(Kanakamuni)金仙人と譯す。
【迦葉】カーシャパ(Kāśyapa)飲光と譯す。
【釋迦牟尼】シャーキャムニ(Śākyamuni)能忍寂默と譯す。

王と作るを得ず、佛と作るを得ず、轉輪聖王は、一處にありて並に十方を治むるを得ず。世尊も亦一世に二佛無し」と。又佛說いて言はく、「一佛の言は虛しからず、世に二佛無きの法なれば、値ひ難きは、是れ佛世尊なり。無量億劫に、時時に一たび有す。是九十一劫の中、三劫に佛有り、賢劫の前の九十一劫の初に、佛有り、鞞婆戶〔秦に種種見と言ふ〕と名く。第三十一劫の中に二佛有り、一を尸棄〔秦に火と言ふ〕と名け、二を鞞怒婆附〔秦に一切勝と言ふ〕と名く。是賢劫の中に四佛有り。一を迦羅鳩飡陀と名け、二を迦那伽牟尼と名け、三を迦葉と名け、四を釋迦牟尼と名く。此を除いて、餘の劫は、皆空にして佛無し、甚だ憐愍すべし」と。若し十方の佛有らば、何を以ての故に、餘劫には佛無し、甚だ憐むべしと言ふや。答へて曰はく、「釋迦文尼佛は、無量の神力有りて、能く變化して佛と作り、十方に住して法を說き、光明を放ちて、衆生を度したまふと雖も、亦盡く一切衆生を、度すること能はず、有邊に墮するが故に、則ち未來世には、佛無きが故に、然も衆生は盡きず、是を以ての故に、應に更に餘佛有るべし。復次に、汝は言はく、「一佛自ら說きたまはく、女人は五事を作すことを得ず、二の轉輪聖王は、同時に世に出づるを得ず、佛も亦是の如く、同時に一世に亦二佛無し」と。汝、此義を解せず、佛經に二義有り、易了の義有り、深遠にして難解の義有り。佛、涅槃に入りたまはんと欲する時、諸の比丘に語りたまはく、「今日より應に法に依るべく人に依らざるべし、應に義に依るべく語に依らざるべし、應に智に依るべく、識に依らざるべし。應に了義經に依るべく未了義に依らざるべし」と。法に依るとは法に

十二部有り。隨に此法に隨ふべく人に隨ふべからず。義に依るとは、義の中には好醜、罪福、虚實を諍ふこと無し、故に語は以て義を得、義は語に非ざるなり。人の指を以て月を指し、以て惑へる者に示すに、惑へる者は指を視て月を視ざるが如し。人之に語りて言はく、「我指を以て月を指すは、汝をして之を知らしむるなり。汝何んが指を看て月を視ざる」と。此も亦是の如し、語は義を指さんが爲にして、語は義には非ざるなり。是を以ての故に、語に依るべからず。智に依るとは、智は能く籌量して善惡を分別し、識は常に樂を求めて、正要に入らず、是故に「識に依るべからず」と言ふ。了義經に依るとは、一切智を有する人のうち、佛は第一なり。一切の諸の經書の中にては、佛法第一なり。一切衆生の中にては、比丘僧第一なり。布施は大富を得、持戒は、天に生ずることを得。是の如き等は、是れ了義經なり。說法の師の如きは說法に五種の利有り、一には、大富、二には人に愛せられ、三には、端正なり、四には、名聲有り、五には、後に涅槃を得。是れ未了義と爲す。云何が未了なる。施は大富を得、是を了了にして解くべしと爲す。說法は、財施無けれども、富を得と言ふ。富を得とは、說法の人、種種に施を讚して人の慳心を破り、亦自ら慳を除く。是因緣を以て富を得、是故に未了と言ふ。是れ多持經の方便の說にして、實義に非ざるなり。是經の中に佛は、世に二佛俱に出づること無し、と言ふと雖も、一切十方の世界と言はず。世に二の轉輪聖王無しと言ふと雖も、亦一切の三千大千世界に無しとは言はず、但四天下の世界の中に、二の轉輪聖王無しと言ふ。諸を作すことと、

淸淨なるが故に、獨り一世に王として諸の怨敵無し。若し二王有らば淸淨と名けず。佛に嫉妬心無しと雖も、然も行業世世淸淨なるを以ての故に、亦一世界に二佛出づること有らず。百億の須彌山、百億の日月を名けて、三千大千世界と爲す。是の如きの、十方恆河沙等の三千大千世界、是を名けて、一佛世界と爲す。是中に更に餘佛無し。實に一の釋迦牟尼佛のみなり。是一佛世界の中に、常に諸佛の種種の法門、種種の身、種種の因緣、種種の方便を化作し、以て衆生を度したまふ。是を以ての故に、多持經の中に「一時に一世界に二佛無し、十方に佛無し」と言はず。復次に、汝が言ふが如きは、佛の言はく、一事に是佛世尊に値ふこと難しと、又言はく、九十一劫の三劫のみ佛有り、餘劫は皆空にして佛無く、甚だ憐愍すべし。此重罪にして、佛を見たてまつるの善根を植ゑざる人の爲に說いて言はく、「佛世に値ひ難きことは、優曇波羅樹の華の、時時に一たび有るが如し」と。是の如きの罪人は、三惡道に輪轉し、或は人天の中に在りて、佛世に出でたまふ時も、其人は見ず。說くが如くんば、舍衞城の中に九億の家有り、三億の家は眼に佛を見、三億の家は、耳に佛有りと聞くも眼に見ず。三億の家は聞かず見ずと。佛、舍衞に在すこと二十五年、而も此衆生は、聞かず見ず、何に況んや遠きものをや。

復次に、佛、阿難と共に舍衞城に入りて乞食したまひき。是時、一の貧しき老母有り、立ちて道の頭に在り。阿難、佛に白さく、「此人は愍むべし、佛、應に度したまふべし」と。佛、阿難に語りたまはく、「是人は、因緣無し」と。阿難言さく、「佛往いて之に近づ

きたまはば、此人は佛の相好光明を見て、歡喜の心を發し、爲に因緣を作さん」と。佛、往いて之に近づきたまふに、身を廻して佛を背にす。佛、四邊より往けば、便ち四に向ひて佛に背き、面を仰げば上に向ひ、佛上より來りたまへば、頭を低くして下に向ひ、佛地より出でたまへば兩手を以て眼を覆ひ、背て佛を視ず。佛、阿難に語りたまはく「復何の因緣をか作さんと欲する」と。是の如きの人有り、度するの因緣無く、佛を見ることを得ず。是を以ての故に、佛、言はく、「佛には値ふを得ること難きこと、優曇波羅樹の華の如し。譬へば水雨は多くして、處處に得易しと雖も、餓鬼は常に渴して飮むことを得ること能はざるが如し。汝が言へる、九十一劫の三劫にのみ佛有りて、一佛世界の爲の故にして、一切の餘の諸の世界の爲にあらず。是處の劫は空にして、佛の出でたまふこと有る無く、甚だ憐愍すべしとは、亦是れ世間の一佛世界にして、一切の餘の諸の世界の爲には非ず。是を以ての故に十方に佛有ることを知る。復次に、聲聞法の中に十方の佛有り。汝自ら解せず。雜阿含經の中に說くが如きは「譬へば大雨連り注ぎ、渧渧無間にして數を知るべからざるが如く、諸の世界も亦是の如し。我東方の無量の世界を見るに、成有り、住有り、壞有り、其數甚だ多くして分別すべからず。是の如くして乃ち十方に至る。是十方世界の中の無量の衆生に三種の身苦、老、病、死、三種の心苦、婬、瞋、癡、三種の後世の苦、地獄、餓鬼、畜生有り。一切世界に皆三種の人有り、下と中と上となり。下人は現世の樂に著し、中人は後世の樂を求め、上人は道を求め、慈悲心有りて衆生を憐愍す。因緣有り、云何ぞ果報

無からん」と。佛言はく、「若し老病死無くんば、佛は世に出でたまはず、是人は老病死の苦惱の衆生を見て、心中に願を作さく、我當に佛と作り、以て之を度脱し、其心病を抜き、後世の苦を濟ふべしと」と。是の如く、十方の世界に、皆佛の出でたまふ因縁有り、何を以ての故に獨り此間に佛有りて、餘所には無しと言ふや。譬へば人有り、木有りて火無し、濕地有りて水無し」と言ふが如し。是れ信ずべからず、佛も亦是の如し。衆生は身に老病死の苦有り、心に婬、瞋、癡の病有り。此三苦を斷じて、三乘を得しめんが爲の故に出世したまふ。一切世界の中に、皆此苦有り、云何が佛無からん。復次に、盲人は無量なり、唯一醫のみを須つと言ふも、此れ亦然らず。是を以ての故に、應に更に十方の佛有るべし。復次に、長阿含の中の有經に言はく、「鬼神の王有り、北方を守る。衆多の百千萬の鬼神と、後夜に佛所に到り、頭面に佛の足を禮し、一面に住し、清淨の光を放ちて、普く祇桓を照し、皆大いに明かならしめ、合掌して佛を讃じ、此二偈を說けり。

大精進の人、我歸命したてまつる。佛は二足の中にて尊きこと最上なり
智慧の眼の人にして能く知見したまふ、諸天も此慧事を解せず
過去、未來、今の諸佛、一切我皆稽首し禮したてまつる
是の如く我今佛に歸命するは、亦三世の尊を恭敬するが如し

と。是の如く、偈の中に十方の佛有り、鬼神王は三世の佛に稽首し、然る後に別して釋迦牟尼佛に歸命す。若し十方に現在したまふ佛無くんば、當に但釋迦文尼佛のみに歸命すべ

く、過去、未來、現在の諸佛と言ふべからず。是故に十方に佛有ることを知る。復次に、過去世に無量の佛有り、未來世にも亦無量の佛有り、是故に現在にも亦應に無量の佛有るべし。復次に、若し佛、聲聞法の中に於て、十方に無數無量の佛有りと言はば、衆生は當に佛には遇ふべきこと易し、と言ひて、勤めて脫するを求めざるべく、若し此佛に値はずんば彼佛に遇ふべしと、是の如く懈怠して、勤めて度を求めざらん。譬へば鹿の未だ箭を被らざる時は畏怖するを知らず、既に箭を被り已れば、閣を踔えて出づるが如し。人も亦是の如く老病死の苦有り、唯一佛のみ有りて甚だ遇ふべきこと難きを聞き、心便ち怖畏し勤行し精進して、疾かに苦を度するを得ん。是を以ての故に、佛は聲聞法の中に於ては、十方に佛有りと言はず、亦無しと言はず。若し十方に佛有るを、汝、無しと言はば、無限の罪を得ん。若し十方に佛無きを、我、有りと言はば、無量の佛想を生じ、恭敬の福を得ん。所以は何ん。善心の因緣には、福德の力大なるが故なり。譬へば慈心三昧力の如きは、一切衆生を觀じて、皆樂を受くるを見る。實益無しと雖も、慈觀を以ての故に、是人は無量の福を得。十方佛の想も、亦復是の如し。若し實に十方に佛有るを、無しと言はば、十方の佛を破り、無量の重罪を得ん。何を以ての故に。實事を破るが故なり。肉眼の人は俱に知らずと雖も、但心に信じて、有りと言はば、其福は無量なり。若し實に有るを、而も意に、無しと謂はば、其罪甚だ重し。人は自ら用心して、尚有ることを信ずべし、何に況んや、佛自ら摩訶衍の中に說いて、實に十方の佛有り、信ぜざらんやと言ふ

【一六】次に十方佛ありて說法したまふも罪惡の凡人には見えざるを明す

をや。

(一六)問うて曰はく、「若し十方無量の諸佛及び諸の菩薩有らば、今此衆生は多く三惡道の中に墮す、何を以てか來りたまはざるや。」答へて曰はく、「衆生は罪重きが故に、諸佛菩薩來りたまふと雖も見ず。又法身の佛は、常に光明を放ち、常に法を說きたまふも、而も罪を以ての故に見ず聞かず。譬へば日出づれども盲者は見ず、雷霆地に振へども聾者は聞かざるが如し。是の如く、法身は常に光明を放ち、常に法を說きたまへども、衆生は無量劫の罪垢、厚く重きもの有れば、見ず聞かざるなり。明鏡淨水に面を照して則ち見るに、垢翳不淨なれば則ち見る所無きが如し。是の如く、衆生の心淸淨なれば則ち佛を見、若し心不淨なれば則ち佛を見ず。今實に十方の佛及び諸の菩薩有り、來りて衆生を度したまふと雖も、而も見ることを得ざるなり。復次に、釋迦牟尼佛の如きは、閻浮提の中に在りて生れたまひ、迦毘羅國に在し、多く東天竺の六大城に遊行し、有時は飛んで南天竺の億耳居士の舍に到りて供養を受け、有時は暫く北天竺の月氏國に來りて阿波羅龍王を降し、又月氏國の西に至りて、女羅刹を降したまへり。佛、彼石窟の中に在し、一宿したまふに今に佛影猶在り。人有り中に就いて之を看れば則ち見えず、孔を出づれば、遙に光明の相を觀る、佛、有す時の如きは暫く飛んで罽賓の隸跋陀仙人の山上に至り、虛空の中に住して、此仙人を降したまふ。仙人言はく、「我は此中に住することを樂しむ、願くば佛、我に佛の髮と佛の爪とを與へたまへ。塔を起して供養せん」と。塔は今に現存せり。此山下に離越

寺有り、鬱越は應に人の佛と國を同うして生ずるすら、猶遍く見ず、何に況んや異處をや。
隷跋陀と云ふべし。是を以ての故に、十方の佛を見ざるを以て無しと言ふべからず。復次に、彌勒菩薩は、大慈悲有るも、天宮に在りて此間に來らず、來らざるを以ての故に、便ち彌勒無しと謂ふべけんや。彌勒の近くして來らざるすら以て怪しと爲さず、十方の佛は遠し、何んが怪しむに足らん。復次に、十方の佛來りたまはざるは、衆生は罪垢深重にして、佛を見るの功德を種ゑず、是故に來りたまはざるなり。復次に、佛は一切衆生の善根熟し、結使薄きを知りて、然る後に來りて度したまふ。說くところの如し。

諸佛は先づ人有り、一切の方便もて度すべからず
或は度し難き有り、或は化し易く、或は復遲き有り、或は疾き有るを觀知したまふ
或は光明を以てし、或は神足、種種の因緣もて衆生を度したまふ
逆を作さんことを欲する有れば、佛は愍んで除きたまふ、或は逆を作さんと欲するも、
佛は遮りたまはず
剛強にして化し難きには、麁言を用ひ、心柔かくして度し易きには、軟言を用ひたまふ
慈悲平等の心有りと雖も、時に智慧もて方便を用ふるを知りたまふ

是を以ての故に、十方の佛は來りたまはずと雖も、無しとは言ふべからず。復次に、佛の智慧力方便神通は舍利弗等の大阿羅漢、大菩薩の彌勒等すら尚知ること能はず、何に況

【摩訶羅】マハッラカ(Mahallaka)大愚鈍者或は老と譯す。

んや凡人をや。復次に、諸佛、大菩薩は時有りてか衆生の急難を恐懼して一心に念ずれば、或時は來りて之を度したまふ。大月氏の西、佛の肉髻の住する處の國の一佛圖の如きは、中に、人の癩風を病める有り、遍吉菩薩の像の邊に來至して、一心に自ら歸し、遍吉菩薩の功德を念じ、「願くば此病を除きたまへ」と。是時、遍吉菩薩の像、即ち右手の寶渠の光明を以て、其身を摩すれば、病即ち除愈す。復一國の中に一の阿蘭若有り、比丘大いに摩訶衍を讀む。其國王は常に髮を布き上を踏んで過さしむ。一比丘有り王に語りて言はく、「此人は摩訶羅にして多く經を讀まず、何を以てか大いに供養すること、是の如くなる」と。王言はく、「我、一日夜半に此比丘を見んと欲し、即ち往いて其住處に到り此比丘を見るに、窟中に在りて法華經を讀む。一の金色の光明の人白象に騎りて、合手し供養するを見る。我轉近づけば便ち滅す。我即ち問ふ、大德、我來るを以ての故に、金色の光明の人滅すと。比丘言はく、此は即ち遍吉菩薩なり」遍吉菩薩自ら言はく、「若し人有り、法華經を讀誦せば、我當に白象に乘り來りて之を教導すべしと。我法華經を誦するが故に遍吉自ら來れり」と。(遍吉は法華經に名けて普賢と爲す。)復一國有り、一の比丘有り。阿彌陀佛經及び、摩訶般若波羅蜜を誦す。是人死なんと欲する時、弟子に語りて言はく、「阿彌陀佛は彼大衆と俱に來れり」と。即時に身を動かして自ら歸し、須臾にして命終る。命終の後弟子薪を積んで之を燒き、明日灰の中を見るに、舌燒けず、阿彌陀佛經を誦するが故に、佛自ら來りたまふことを見、般若波羅蜜を誦するが故に、舌燒くべからず、此は皆今世の現事なり。經中に

【一七】以下爾時、彼世界に菩薩有り等の文に就て、普明の義を明す。

【一八】以下この大光を見等の文に就て、普明の寶積佛に放光の因緣を問ふことを明す。

説くが如くんば、諸佛菩薩の來りたまふ者甚だ多し。是の如く處處に人有り、罪垢の結薄くして一心に佛を念じ、信淨くして疑はざれば、必ず佛を見るを得て、終に虚しからず。是の諸の因緣を以ての故に、實に十方に佛有ることを知る。

經 爾時、彼世界に菩薩有り、名けて普明と曰ふ。

論 【一七】菩薩の義は、讃菩薩品の中に、已に説くが如し。問うて曰はく、「云何が普明と名くる。」答へて曰はく、「其明常に一切世界を照す。是故に普明と名く。」

經 此大光を見、地大いに動くを見、又佛身を見て、寶積佛の所に到り、佛に白して言さく、「世尊、今何の因緣有りてか、此光明有り、世間を照し、地大いに震動し、又佛身を見るや。」

論 【一八】地の動くと、佛身の光明は先に説くが如し。問うて曰はく、「是普明菩薩は諸の菩薩の中に於て、最も尊くして第一なり、應に自ら因緣を知るべし。何を以てか、佛に問ひたてまつる。」答へて曰はく、「是普明菩薩は大なりと雖も、諸佛の智慧神力を知る能はず、譬へば月の光は大なりと雖も、日出づれば、則ち滅するが如し。是を以ての故に佛に問ひたてまつるなり。復次に、菩薩は常に佛を見んと欲し、心に厭足すること無し、因緣無きすら、尚佛を見んと欲す、何に況んや大因緣有るをや。復次に、是事は疑ふべからず。譬へば犢子の母に隨ふに未だ怪しむに足らざるが如し。又小王の大王に朝宗するは、法の應に爾るべきが如し。故に諸の大菩薩も亦是の如く、利を得ること大なるが故に、常に佛に

に隨はんと欲す。是菩薩は是事を見て、心即ち是れ大事なりと覺知し、無數無量の世界を見て、皆相見ることを得。是を以ての故に問ふなり。復次に、有人言はく、是菩薩は、自ら神力有りて能く知り、亦是釋迦牟尼佛の力を以て知らしめたまふ。但諸の小菩薩の知らざるが爲の故に、佛に問ひたてまつるなり。諸の小菩薩は怖れ難ずること未だ除かず、佛に問ひたてまつること能はず、是故に之が爲に問を發す。是普明菩薩の發するは、其世界の諸の小男弟子小女人と倶なり。是を以ての故に佛に問ひたてまつること能はざるを知る。譬へば大象の、能く大樹を勞めて、諸の小象をして、枝葉を食するを得しむるが如し。是故に佛に、大德、何の因、何の緣有りてか、此大光明有り、地大いに震動し、又佛身を見る、と問ひたてまつるなり。」

大智度論卷第九

大智度初品中十方菩薩來釋論第十五之餘　卷第十

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏法師鳩摩羅什 詔を奉じて譯す

【經】寶積佛は普明に報へて言はく、「善男子、西方の恆河沙の如き等の世界を度りて、世界有り、娑婆と名く。是中に佛有り、釋迦牟尼と號す。今現に在して諸の菩薩摩訶薩の爲に般若波羅蜜を說かんと欲す、是れ其神力なり。」

【論】問うて曰はく、「佛は譬へば須彌山の、大海水の波の爲に、動ぜられざるが如し。今何を以てか普明に答へたまふ。是れ則ち動相なり。攝心なれば則ち語無し、散心なれば則ち說有り、說法は覺觀より生ず、覺觀は麁事なり。佛は此麁事有るべからず。」

答へて曰はく、「佛は深く禪定に入りて、世事の爲に動ぜられずと雖も、今大慈悲心を以て、衆生を憐愍し、之が爲に法を說いて疑を斷じたまふ。須彌山王は小風の則ち動ずること能はず、若し隨藍の風至るときは則ち大いに動散するが如し。佛も亦是の如く、大慈悲の風來れば、憐愍の心動き、散身無數にして、五道に入り、衆生を教化し、或は天身乃至畜生と作りたまふ。復次に、佛は實に動ぜず、常に禪定に入りたまふ。先世の福德の因緣の故に、身の邊より聲を出し、物に應ずること響の如く、天の伎樂の自然に聲を發する

【一】以下寶積佛は普明に報へて等の文に就いて。初に佛不動なるも、大慈悲を以ての故、又衆疑を斷ぜん爲に說法したまふを明し、中に佛の三密を說く。

【覺觀】麁思を覺細思を觀といふ、新譯には覺を尋、觀を伺といふ。

【目度伽略子】マウドガリヤーヤナプトラ(Maudgalyayanaputra) 目犍連のこと。

が如く、又摩尼珠の人の欲する所に隨ひて、種種之に與ふ。若し衣被、飮食、音樂を欲すれば、自ら須ふる所を恣にし、自然に皆得るが如し。佛も亦是の如く、其身邊の諸の毛孔の中より、自然に聲有り、心に隨ひて說法す。是中、佛は憶想無く、亦分別無し、密迹「金剛經」の中に說くが如くんば、佛に三密有り、身密と語密と意密となり。一切の諸の天人は、皆解せず、知らず。一會の衆生有り、或は佛身を、黃金色、白銀色、諸の雜寶色と見る。人有り、佛身を一丈六尺と見、或は一里、十里、百千萬億、乃至無邊無量にして、虛空の中に遍しと見る。是の如き等を身密と名く。語密とは、有人は佛の聲を一里と聞き、有は十里、百千萬億、無數無量にして、虛空の中に遍しと聞く。一會の中に有りて、或は布施を說きたまふと聞き、或は持戒を說きたまふと聞き、或は忍辱、精進、禪定、智慧を說きたまふと聞く。是の如く乃至十二部經、八萬の法聚は各各心の聞く所に隨ふ。是を語密と名く。是時、目連は心に念ずらく、「佛の聲の近遠を知らんと欲す」と、即時に己が神足の力を以て、無量千萬億佛の世界に至りて息み、佛の音聲を聞くに、近きが如くして異らず。息む所の世界の其佛は、大衆と方に食したまふ。彼土の人は大にして、目連は其鉢の緣に立てり。彼佛の弟子、其佛に問うて曰はく、「此人の頭の蟲は何の所より來り、沙門の被服に著して而も行くや」と。其佛、報へて言はく、「此人を輕んずること勿れ。此は是れ東方の無量の佛界土を過ぎて佛有り、釋迦牟尼と名く。此は是れ彼佛の神足の弟子なり」と。彼佛、目度伽略子に問ひたまはく、「汝何を以て、此に來るや」と。目連

【一】次に彼佛の神力なりといふに就いて。

【二】以下是時普明菩薩は等の文に就いて。初に菩薩は心に厭足なければ佛法を旨とするを明す。

答へて曰はく、「我は佛の音聲を尋ぬるが故に來りて此に至る」と。彼佛、目連に告げたまはく、「汝、佛の聲を尋ねて、無量億劫を過ぐとも、其邊際を得ること能はず」と。復次に、佛は世に出でて、衆生の疑を斷せんが爲の故に、說法を爲したまふ。此れ難ずべからず。日は何を以てか闇を除くやと問ふべからざるが如し。佛も亦是の如く、佛は何を以ての故に答へたまふやと問ふべからず。

問うて曰はく、「諸佛は等しきが故に、等覺と爲す。今何を以てか、稱して、是れ彼佛の力なりと言ふ。」答へて曰はく、「汝、我、彼、此無く、憍慢を滅するを示すが故なり。復次に、世界に天有り、常に貪[illegible]憍慢の法を求むるが故に、「自ら天地人物は、是れ我化作なり」と言ふ。梵天王の如きは諸の梵に謂ひて言はく、「我汝等を作る」と。毘紐天の言はく、「世間に、富貴、名聞の人有り。皆是れ我身の威德力の分なり。我は能く世間を成就し、亦能く世間を破壞す。世間の成壞は皆是れ我作なり」と。是の如く、天は因緣の法相を破すること有り、諸佛の實語は、因緣の法相を破せざるが故に、是れ彼佛の神力なり、と言ふ。

【經】是時、普明菩薩は寶積佛に白して言さく、「世尊、我今當に往いて、釋迦牟尼佛を見て、禮拜し供養し、及び彼の諸の菩薩摩訶薩の尊位を紹ぐ者、皆陀羅尼及び諸の三昧を得て、諸の三昧の中に於て自在を得るを見るべし」と。

【論】問うて曰はく、「若し諸佛は持戒、禪定、智慧、度人皆等しくんは、是普明菩薩は何を以てか

【四】次に諸の三昧に於て自在を得といふに就いて。

來りて釋迦牟尼佛を見んと欲する。』答へて曰はく、『諸の菩薩は、常に佛を見て、厭足無く、法を聽いて厭足無く、諸の菩薩僧を見て厭足無からんことを欲す。諸の菩薩は世間の法に於て、皆以て厭患し、上の三事に於て、心に厭足無し。手居士の如きは淨居天より來りて、佛を見んと欲し、其身微細にして沒失すること、譬へば消蘇の地に立つことを得ざるが如くす。佛、手居士に語りたまはく、「汝麁身を化作して、此地相を觀よ」と。居士は即ち佛の言ふが如く、麁身を化作して、此地相を觀念し、頭面に佛の足を禮して一面に立つ。佛、居士に問ひたまはく、「汝は幾事をか、厭ふこと無くして、淨居天に生ぜし」と。答へて言はく、「我は三事を厭ふこと無くして淨居天に生ぜり。一には佛を見たてまつり供養して厭ふこと無く、二には法を聽いて厭ふこと無く、三には僧に供給して厭ふこと無し。佛、閻浮提に在すとき、四部の衆常に佛に隨ひ逐うて法を聽き、法を問ふが如く、是我淨居の諸天も亦常に我に從ひて法を聽き法を問ふ」と。聲聞すら猶尙法を聽いて厭足無し。何に況んや法性身の菩薩をや。是を以ての故に、普明菩薩は來りて釋迦牟尼佛を見、及び此間の諸の菩薩摩訶薩の尊位を紹ぐ者、皆陀羅尼及び諸の三昧を見る。先の讚菩薩品の中に說くが如し。

(四)諸の三昧に於て自在を得とは、問うて曰はく、『佛、一人の如きは、一切の三昧の中に自在を得たまふ。何を以てか、菩薩も亦一切の三昧の中に自在を得、と言ふ。』答へて曰はく、三種の三昧有り、一には佛三昧、二には菩薩三昧なり、是諸の菩薩は、菩薩三昧の

中に於て自在を得るも、佛三昧の中には非ず。「諸佛要集經」の中に說くが如きは、文殊尸利、佛の集りたまへるを見んと欲して、到ることを得る能はず、諸佛は各各本處に還りたまひ、文殊尸利は諸佛の集まりたまひし處に到るに、一の女人有り、彼佛座に近いて、三昧に入れり。文殊尸利、入りて佛の足を禮し已りて、佛に白して言さく、「云何が此女人は佛座に近くことを得て、而も我は得ざる」と。佛、文殊尸利に告げたまはく、「汝、此女人を覺して三昧より起たしめ、汝自ら之に問へ」と。文殊尸利、即ち彈指して、之を覺せども而も覺すべからず、大聲を以て喚べども、亦覺すべからず。手を捉りて牽けども亦覺すべからず。又神足を以て三千大千世界を動かせども猶亦覺めず、文殊尸利、佛に白して言さく、「世尊、我は覺めしむる能はず」と。是時、佛、大光明を放ちて、下方の世界を照したまふ。是中に、一菩薩有り、棄諸蓋と名く。即時に下方より出で來りて、佛の所に到り、頭面に佛の足を禮して一面に立つ。佛、棄諸蓋菩薩に告げたまはく、「汝、此女人を覺ませ」と。即時に彈指するに、此女は三昧より起てり。文殊尸利、佛に白して言さく、「何の因緣を以てか、我、三千大千世界を動かせども、此女をして起たしむること能はざるに、棄諸蓋菩薩の一彈指にして、便ち三昧より起つ」と。佛、文殊尸利に告げたまはく、「汝は此女人に因りて、初めて阿耨多羅三藐三菩提の意を發し、是女人は棄諸蓋菩薩に因りて、初めて阿耨多羅三藐三菩提の意を發せり。是を以ての故に汝は覺めしむること能はず。汝は諸佛の三昧の中に於て、功德未だ滿たず。是棄諸蓋菩薩は三昧の中に自在を得、佛の三

【五】以下佛普明に告げたまはくの文中、初に往かんと欲せば意に隨うて等の文に就いて明す。

昧の中の少多に入るも、而も未だ自在を得ざるが故のみ。

【經】佛、普明に告げたまはく、『往かんと欲せば、意に隨うて宜しく、是時を知るべし。』爾時、寶積佛、千葉の金色の蓮華を以て、普明菩薩に與へて之に告げて曰はく、『善男子、汝此華を以て釋迦牟尼佛の上に散ぜよ。彼娑婆世界に生ぜる諸の菩薩は勝り難く及び難し。汝當に一心に彼世界に遊ぶべし。』

【論】(五)問うて曰はく、『佛は何を以てか、往かんと欲せば、意に隨うて宜しく、是時を知るべし、と言ふ。』答へて曰はく、『佛は、弟子に於ける愛を斷じ、弟子の中に於て、心著せざるが故なり。復次に、是菩薩は未だ一切智を得ず。未だ佛眼を得ざるが故に、心中少多の疑ひ有りて謂へらく、「釋迦牟尼佛は功德大にして、益する所或は勝らん」と。是故に語げて、往かんと欲せば意に隨へ、と言へり。復次に、是菩薩は遙に釋迦牟尼佛の身の小なるを見て、心に小しく慢を生じて言はん、「彼佛は是に如かず」と。故に佛語りたまはく、「汝往いて佛身を觀る莫れ、世界を念ずる勿れ、但佛の說法を聽け」と。復次に、是世界は娑婆世界を離るること極めて遠く、最も東邊に在り、是菩薩は釋迦牟尼佛の說きたまふ所の諸法の相と、寶積佛の說きたまふ諸法の相と、正に同じきことを聞いて、便ち、世界は遠しと雖も、法相は異らず、と言ひて、大信を增益し、心轉堅固なり。復次に、先世の因緣の故に遠き處に生ると雖も、應に來りて法を聽くべし。譬へば、繩を雀の脚に繫けて、復遠く飛ぶと雖も、之を掣すれば、則ち還るが如し。復次に、是娑婆世界の中の菩薩は、

【十八】次に寶積佛は千葉の金色の蓮華を以て等の文中華を普賢に與へて釋迦牟尼佛を供養するに就いて。

普明の遠く來りて法を聽くを見て、便ち是念を作さく、「彼は遠くより來れり、況んや我は此世界の中に生じて、而も法を聽かざらんや」と。是の如きの種種の因緣有り、是故に佛は、往かんと欲せば、意に隨ひて宜しく、是時を知るべし、と言へり。」

問うて曰はく、「諸佛の力は等しく、更に福を求めず、何が故に華を以て信と爲す」答へて曰はく、「世間の法に隨ひて行ふが故なり。一國の王の力勢同じと雖も、亦相贈遺するが如し。復次に、善歡の心を示すが故に華を以て信と爲す。世間の法の中に、使の遠くより來るに、必ず應に信有るべし。佛は世法に隨ひたまふ。是故に信を致す。復次に、諸佛は法を恭敬するが故に、法を供養し、法を以て師と爲したまふ。何を以ての故に。三世の諸佛は、皆諸法の實相を以て師と爲したまへばなり。」問うて曰はく、「何を以てか、自ら身中の法を供養せずして、他法を供養する」答へて曰はく、「世間の法に隨へばなり。比丘の法寶を供養せんと欲して、自ら身中の法を供養せずして、餘の法を持ち、法を知り、法を解する者を供養するが如し、佛も亦是の如く、身中に法ありと雖も、餘佛の法を供養したまふ。」問うて曰はく、「佛の如きは福德を求めず、何を以ての故に供養したまふ。」答へて曰はく、「佛は無量阿僧祇劫の中より諸の功德を修し、常に諸善を行じたまふ。但報を求めず、功德を敬ふが故に供養を作す。佛在す時の如き、一の盲比丘有り、眼に見る所無し。而して手を以て衣を縫ふ時、針、絍脫せり。便ち言はく、「誰か福德を愛し、我爲に針に絍せん」と。是時、佛、其所に到り、比丘に語りたまはく、「我は是れ福德を愛するの人なり、

汝が爲に針を來さん」と。是比丘は佛の聲を識り、疾に起ちて衣を著け、佛の足を禮して、佛に白して言さく、「佛は、功德已に滿ちたまふ、云何ぞ福德を愛すと言ふ」佛、報へて言はく、「我は功德已に滿つと雖も、我は深く功德の恩、功德の果報、功德の力を知る。今、我、一切衆生の中に於て、最も第一なることを得しむるは、此功德に由る。是故に我は愛す」と。佛は、此比丘の爲に功德を讃じ已りて、次に爲に意に隨ひて法を說きたまふに、是比丘は法眼の淨きことを得て、肉眼は更に明なりき。復次に、佛は功德已に滿ち、更に須ふる所無しと雖も、弟子を教化する爲の故に之に語げて、「我尙功德を作す、汝云何が作さざる」と言ふ。技家の百歲の老翁にして舞ふが如きは、伶人之を呵して言はく、「老翁年已に百歲なり、何んが是舞を用ふる」と。翁答ふらく、「我は舞を須ひず、但子孫に教へんと欲するが故のみ」と。佛も亦是の如し、功德滿つと雖も、弟子に功德を作すことを教へんが爲の故に供養を爲したまふなり。「問うて曰はく、「若し爾れば佛は何を以てか、自ら遙に釋迦牟尼佛の上に散ぜずして、人を遣して供養したまふ」。答へて曰はく、「此間の諸の菩薩は、普明を信ずるが爲の故なり。復次に、佛の遣したまふ所の使は、水火兵毒百千種の害も終に傷ふこと能はず。道里懸に遠し、安隱ならしめんと欲するが故なり」。問うて曰はく、「何が故に『好寶深經』、若は佛菩薩の寶言はく、此寶は諸天の見ざる所、能く種種の妙物を出すこと摩尼珠寶の如し、故に佛寶と名く。を以て信と爲さずして、蓮華を以てする。蓮華は小物なり、何んが信と爲すに足らん。」答へて曰はく、「佛は物を須ひたまはず。佛寶天寶すら尙亦須ひず、何に況んや人寶をや、

須ひざるを以ての故に遣さず、亦佛は自ら等しく、行したまふを以ての故に遣さず、深經も亦爾なり。復次に、諸經は佛に於て、則ち甚深なること無し。甚深の稱は凡人より出づ。凡人の疑ふ所は佛に於て礙ふる無く、凡人の難しとする所、佛は皆之を易しとしたまふなり。復次に、華香の清妙なるを宜しく爲に供養すべし。人の獻贈には、必ず異る物を以てするが如し。問うて曰はく、『何が故に正しく蓮華を以てして、餘物を以てせざる。』答へて曰はく、『供養するに、唯華香幡蓋を以てす。華に二事有り、色と香となり。』問うて曰はく、『餘の華も亦香有り色有り、何を以てか唯蓮華を以て供養する。』答へて曰はく、『華手經』の中に說くが如きは、『十方の佛は皆華を以て、釋迦文佛を供養したまふ』と。復次に、蓮華に三種有り、一には人華、二には天華、三には菩薩華なり。人華は、大蓮華にして、十餘葉なり。天華は百葉、菩薩華は、千葉なり。彼世界の中に、多く金色の光明の千葉の蓮華有り。娑婆世界の中にも、化華は千葉有りと雖も、水に生ずる者無し。是を以ての故に、是蓮華の千葉にして、金色なるを遣すこと、上の光相の中に說くが如し。問うて曰はく、『佛は何を以てか、光明をして、華を以て佛の上に散ぜしめたまふ。』答へて曰はく、『法として、華香幡蓋を供養するに、幡蓋は上ぐべく、乾香は焼くべく、濕香は地に塗るべく、末香及び華は散ずべし。』問うて曰はく、『何を以てか、供へ奉つるのみならずして、而も自ら上に散ずる。』答へて曰はく、『手づから自ら供養するは是れ身業なり。歎言問訊は是れ口業なり。能く身口の業を起すは是れ意業なり。是三業は功德を得

【七】次に汝當に一心に敬愼すべし等の次に就いて明す。

ること牢固なり。佛道の與に因緣と作る。」

（七）問うて曰はく、「何を以てか、汝當に一心に敬愼すべし、娑婆世界の中の諸の菩薩は及び難く勝り難し、と言ふ。」答へて曰はく、「佛、辟支佛、阿羅漢、一切の諸の賢聖は、皆一心に敬愼すべし。魔若は魔民、及び內身の結使、種種の先世の罪報は皆是れ賊なり。此の諸の賊に近づくが故に、應に一心に敬愼すべし。譬へば賊の中に入り行くに、自ら愼み護らざれば、賊の爲に得らるるが如し。是を以ての故に、一心に敬愼し、以て彼界に遊べ、と言ふ。復次に、人心は多く散ずるを以て、狂へるが如く、醉へるが如し。一心に敬愼するは、則ち是れ諸の功德の初門なり。心を攝すれば禪を得て便ち實智慧を得。實智慧を得れば便ち解脫を得、解脫を得れば便ち苦を盡すことを得。是の如き事は皆一心より得、佛、般涅槃の後一百歲にして一比丘有り、憂波毱と名く。六神通を得たる阿羅漢にして、爾時世に當りて、閻浮提の大導師と爲るが如し。彼時、一比丘尼有り、年百二十歲なり。此比丘尼は年小の時、佛を見たり。憂波毱來りて其舍に入り、佛の容儀を問はんと欲し、先づ弟子を遣す。弟子、比丘尼に語らく、「我大師、憂波毱來りて汝に見え、佛の容儀を問はんと欲す」と。是時、比丘尼は鉢を以て麻油を盛滿し、戶扇の下に著けて之を試み、其威儀の詳審なるや不やを知らんとす。憂波毱入りて徐ろに戶扇を排するに、麻油少しく棄る。坐し已りて比丘尼に問はく、「汝は佛を見るや不や。容儀は何に似たまひしや。我爲に之を說け」と。比丘尼答ふらく、「我爾時、年小にして、佛來りて聚落に入りたまふを見る。

【六群比丘】ナンダ(Nanda)、ウパナンダ(Upananda)、プナルヴス(Punarvasu)、チヤンダ(Chanda)、アシュヴカ(Asvaka)、ウダーイー(Udāyi)の六比丘。佛陀在世に、黨を結びて多く非威儀を作せるもの。

衆人言はく、「佛、来たまふ」と。我も復衆人に隨うて、出でて光明を見、便ち禮するとき、頭上の金釵地に堕ちて、大闇林の下に在り、佛の光明之を照して、幽隱皆見え、即時に釵を得、我是より後、乃ち比丘尼と作れり」と。優波毱は更に、「佛、世に在したまふ時の比丘の威儀禮法は如何」と問ふ。答へて曰はく、「佛の在しし時、六群比丘は、無羞無耻にして最も弊悪なれども、威儀法則は汝に勝れたり。今日何を以てか之を知る。六群比丘は、戸に入るに油をして棄てしめず、此れ弊悪なりと雖も、比丘の儀法を知り、行住坐臥法則を失はず。汝は是れ六神通の阿羅漢なりと雖も、彼に如かず」と。優波毱は是語を聞きて、大いに自ら慚愧す。是を以ての故に、一心に敬愼せよと言ふ。一心に敬愼するは善人の相なり。復次に、何を以ての故に「一心に敬愼せよ、是菩薩は、勝ち難く、及び難く、破り難く、近づき難し」と言ふ。譬へば、大師子王の勝ち難く、破り難きが如し、亦白象王、及び龍王の如く、大火焔の如し、皆近づくべきこと難し。是菩薩は大福徳智慧力の故に、若し人勝たんと欲し、破らんと欲するも、是れ正しく自ら破るべきことを得べからず。是故に、近づき難しと言ふなり」。問うて曰はく、「一切の大菩薩は皆大功徳智慧利根にして、一切近づき難し、何を以てか獨り、娑婆世界の中の菩薩は近づき難し、と言ふ」。答へて曰はく、「一實に言ふ所の如し。但多寶世界の中の菩薩の遠く来りて、此世界を見るに、石沙の穢悪に如かず、菩薩の身は小に、一切の衆事皆亦如かざるを以て、必ず輕慢を生ぜん。是故に、佛、一心に敬愼せよ、彼諸の菩薩は近づき難し、と言ふ。復次に、樂處

に生ずる人は、多く勇猛ならず、聰明ならず、智慧少し。鬱單羅衍の人は、大樂なるを以ての故に、出家する無く戒を受くる無きが如し。諸の天中も亦爾り。是娑婆世界の中には、是れ樂の因緣少く、三惡道老病死有り、土地は自活の法難し。是を以ての故に厭心を得ること易く、老病死を見ては至心に大いに厭患し、貧窮の人を見ては先世の因緣の致す所を知り、心に大厭を生ず。是を以ての故に智慧很利なり。彼間の菩薩の七寶の世界には種種の寶樹有り。心に飲食を念ずれば、意に應じて卽ち得。是の如きは厭心を生ずること難し。是故に智慧は大利なること能はず。譬へば利刀を好き飲食の中に著けんに、刀は便ち垢を生ず。飲食は好しと雖も、而も刀の與に相宜しからず。若し石を以て之を磨き、脂灰もて瑩治すれば、垢は除いて、刀は利となるが如し。是菩薩も亦是の如し、雜世界の中に生ずれば、利智にして近づき難し。人は少小にして勤苦すれば、多く能くする所有り、亦多く堪ふる所有るが如く、又馬を養ひて乘らざれば、則ち任ふる所無きが如し。復次に、是娑婆世界の中の菩薩は、方便多きが故に近づき難し、餘處は爾らず。佛說きたまはく、「我自ら宿世を憶念するに、一日に人に千の命を施し、衆生を度するが故に、諸の功德、六波羅蜜、一切の佛事、具足すと雖も、而も佛と作らず、恆に方便を以て衆生を度脫す」と。是事を以ての故に、是娑婆世界の中の菩薩には近づき難し。

【經】爾時、普明菩薩、寶積佛より、千葉の金色の蓮華を受け、無數の出家、在家の菩薩及び諸の童男童女と俱共に發引す。

【八】以下、爾時普明菩薩等の文に就いて、菩薩が無數の出家在家の菩薩及び童男童女等と共に發するを明す。

論（八）問うて曰はく、「是普明菩薩は大力神通の故に、應に能く來るべし。是出家、在家の菩薩、及び諸の童男童女は云何が自ら致す。多寶世界は最も東邊に在りて、道里は悠遠なり。是れ自ら力を用ひて行くや。寶積佛の力となすや、是れ普明菩薩の力なりや、釋迦牟尼佛の力なりや。」答へて曰はく、「盡く是れ四種の人の力なり。是出家居家の菩薩は、或は是れ不退にして、五通を成就せる菩薩なり、四如意足有りて、好く先世に釋迦牟尼佛の に因縁を修め、亦自ら己が力を用ふ。亦是れ普明菩薩の力なり。何を以ての故に、是中の力勢薄き者は、是普明菩薩の力の故に、來るを得ればなり。轉輪聖王の飛んで上天する時、四種の兵及び諸の宮觀畜獸一切皆飛ぶが如し。轉輪聖王の功德大たるが故に、能く一切をして隨ひて飛び從はしむ。此も亦是の如し、力勢薄き者は普明菩薩の力を以ての故に、皆亦來ることを得、亦是れ寶積佛の力、及び釋迦牟尼の光明、之を照せばなり。若し自ら力無きも、但釋迦牟尼佛の光明、之を照せば亦皆能く來るべし。何に況んや力有るをや。」問うて曰はく、『是普明菩薩は何ぞ獨り來らずして、多く衆人を將ゐる。』答へて曰はく、「翼從するところ宜しきが故なり。譬へば國王の出づる時は、必ず營從有るが如し。復次に、是普明菩薩及び釋迦牟尼佛は、因縁有る人なるが故なり。所以は何、彼大衆の中の、二衆共に來ればなり。是故に因縁有る者は來り、因縁無き者は住ることを知る。」問うて曰はく、「是菩薩は何を以ての故に、諸の在家、出家、童男、童女と俱に來る。」答へて曰はく、「佛弟子の七衆は、比丘と比丘尼と學戒尼と沙彌と沙彌尼と優婆塞と優婆夷となり。」

【九】次に菩薩が東方無數の諸佛を供養するに就いて。

優婆塞と優婆夷とは是れ居家、餘の五衆は是れ出家なり。出家在家の中に、更に二種有り。若は大、若は小なり。小は童男童女にして、餘は大と爲す。『問うて曰はく、大は應に行くべし、小は何を以てか能く來る。』答へて曰はく、『功德に在りて大小に在らず。若し功德の利を失して、不善の法を行はば、老いたりと雖も而も小なり。若し功德の利有りて、善法を行はば小なりと雖も而も大なり。復次に、此小なる者遠く來れば、人見て則ち歎ずらく、小にして能く爾も法の爲に遠く來ると。亦佛法は大小皆、奉行するを得ることを顯す。外道の法の中には、婆羅門は其法を行ずるを得るも、婆羅門に非ざれば行ずることを得ず。佛法には大無く小無く、內無く外無く、一切皆修行するを得。譬へば藥を服するは、病を除くを以て主と爲し、貴賤大小を擇ばざるが如し。』

【經】皆東方の諸佛を供養し、恭敬し、尊重し、讚歎す。

【論】（九）問うて曰はく、『若し皆東方の諸佛を供養せば、諸佛は甚だ多し。何の時か當に訖りて、此間に來るを得べき。』答へて曰はく、『是諸の菩薩は、人天の法の供養を作すに非ず、自ら菩薩の供養の法を行ず。菩薩の供養の法は、身禪定に入りて、其身を直進にし、其身邊より無量の身を出し、種種の供養の物を化作して、諸佛の世界に滿たす。譬へば龍王の行く時は、身より水を出し、普く天下に雨らすが如し。』問うて曰はく、『此諸の菩薩は釋迦牟尼佛に詣らんと欲す、何を以てか中道にして諸佛を供養する。』答へて曰はく、『諸佛は第一の福田なり。若し供養すれば大なる果報を得。譬へば人の廣く田業を修すれば、爲

に多く穀を得るが如し。故に、諸の菩薩は、諸佛を見て供養すれば、佛の果報を得、是の故に供養す。復次に、菩薩は常に佛を敬ひ重んずること、人の父母を敬ひ重ずるが如し。諸の菩薩は佛の說法を蒙り、種種の三昧、種種の陀羅尼、種種の神力を得、恩を知るが故に廣く供養す。法華經の中の藥王菩薩の如きは、佛に從うて一切の變現色身三昧を得て、是の思惟を作さく、「我、當に云何が佛及び法華三昧を供養すべき」と。即時に飛んで天上に到り、三昧の力を以て、七寶の華香幡蓋を雨らし、佛を供養したてまつる。三昧より出で已りて、意に猶足らず、千二百歲に於て衆香を服食し、諸の香油を飲み、然る後に天の白氎を以て、身に纏ひ而して燒き、自ら誓を作して言はく、「我身の光明をして、八十恒河沙等の佛の世界の中を照さしめよ」と。是八十恒河沙等の世界の中の諸佛讃して言はく、「善い哉善い哉、善男子。身を以て供養す。是を第一の勝と爲す。國城妻子を以て、供養するに百千萬倍すること、譬喩を以て比と爲すべからず」。千二百歲に於て身を然すとも盡せず」と。復次に、是佛を供養したてまつれば、無量の名聞、福德、利德を得、諸の不善の事は、皆悉く滅除し、諸の善根は增長するを得、今世、後世、常に供養の報を得、久しくして後佛と作ることを得。是の如く佛を供養すれば、種種の無量の利を得、是を以ての故に諸の菩薩は佛を供養す。

經　諸の華香、瓔珞、末香、澤香、燒香、塗香、衣服、幢蓋を持して、釋迦牟尼佛の所に向ひ、到り已りて、頭面に佛の足を禮し、一面に立てり。

【一〇】以下諸の華香瓔珞等の文に就いて、今頭面に足を禮するを明す。

【一一】次に一面に立つに就いて明す。

【五衆】比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、式叉摩那をいふ。

【結賊】煩惱の異名。

經 問うて曰はく、『應に禮すと言ふべし。何を以てか、頭面に足を禮す、と名くる。』答へて曰はく、『人身の中、第一に貴き者は頭なり。五情の著く所にして最も上に在るが故なり。足は第一に賤しくして不淨の處を履み、最も下に在るが故なり。是故に貴き所を以て、賤しき所を禮するは、貴び重んじ供養するが故なり。復次に、上中下の禮有り。下は揖し、中は跪き、上は稽首す。頭面に足を禮するは、是れ上の供養なり。是を以ての故に佛は毘尼の中に、下座の比丘は、兩手もて、上坐の兩足を捉へ、頭面に禮せよと(一一)問うて曰はく、『四種の身儀は若は坐し、若は立ち、若は行き、若は臥す。何を以ての故に一面に立つ。』答へて曰はく、『來る爲の故に行くべからず、恭敬供養の爲の故に臥すべからず、此事は明め易し、何が問ふに足らん。一應問のときは或は坐し、或は立つ、坐することは供養に於ては重んぜず、立つは恭敬供養の法なり。復次に、佛法の中には諸の外道の出家、及び一切の白衣も來りて佛の所に到るときは皆坐す。外道は他法、佛を軽んずるが故に坐す。白衣は客の如し、是故に坐す。一切の五衆の身心は佛に屬す、是故に立つ。若し道を得たる諸の阿羅漢、舍利弗、目連、須菩提等の如きは所作已に辦せり、是故に坐することを聽す。餘は、三道を得と雖も、亦坐することを聽さず。大事未だ辦せず、結賊未だ破せざるが故なり。譬へば王臣の大いに功勳有るが故に、坐するを得るが如し。是諸の菩薩の中に白衣有りと雖も、遠くより來りて、佛を供養するを以ての故に立つ。

經 佛に白して言さく、『寶積如來、問を致す、世尊、少惱少患興居輕利にして氣力有り、

【二】以下佛に白して言さく等の文に就いて、初に少惱少患等と問訊するを明す。

【三】次に少惱少患なりやと問ふに就いて明す。

安樂なりや不や。又、此千葉の金色の蓮華を以て、世尊に供養したまへり」と。

【二】問うて曰はく、寶積佛は一切智なり、何を以てか方に釋迦牟尼佛に、少惱少患興居輕利に氣力有り、安樂なるや不や」と問訊する。答へて曰はく、諸佛の法は爾なり、知りて故に問ひたまふ。毘尼の中に達膩迦比丘、赤色の瓦窟を作る。佛、見已りて、知りて故に阿難に問ひたまはく、「此作れるは何物ぞや」と。阿難佛に白さく、「是は陶家の子なり、出家して達膩迦と字く、小なる草舍を作りて、常に放牛の人の爲に壞らる。三たび作りて三たび壞る。是故に此瓦舍を作る」と。佛、阿難に語げたまはく、「此瓦窟を破れ。何を以ての故に、外道の輩、常に佛大師在す時、漏處の法を出すと言ふべければなり」とあるが如し。是等の如く、處處に知りて故に問ひたまへり。復次に、佛、一切智なりと雖も世界の法に隨ひ、世人問訊すれば佛も亦問訊したまふ。佛は人中に生れて、人の法を受け、寒熱生死は人と等し、問訊の法も亦應に等しかるべし。復次に、世界の中の大貴と、大賤は應に相問訊すべからず、佛力は等しきが故に、應に相問訊すべし。復次に、此多寶世界の清淨莊嚴せる、佛身の色像光明も亦大なり。若し問訊せずんば、人は輕慢なりと謂はん。又復佛の世界の身色光明は種種勝れたりと雖も、智慧神力に俱に等しくして異る無きを示さんと欲す、是故に問訊したまふ。

【三】問うて曰はく、何を以てか、少惱少患なりや不や、と問ひたまふ。答へて曰はく、二種の病有り、一には外の因緣の病、二には內の因緣の病なり。外とは、寒熱、飢渇、兵

【一四】次に興居輕利なりやと問ふに就いて明す。中に二種佛身を說く。

刀、刀杖、墜落、墜墮なり。是の如き等の種種の外患を名けて惱と爲す、內とは飮食を節せず、臥し、起くること常無きの四百四病なり。是の如き等の種種を名けて內病と爲す。此の如きの二病は、身に有りて皆苦なり。是故に、少惱少患なりや、不や、と問ひたまふ。

問うて曰はく、「何を以てか、惱無く、病無き、と問はずして、惱少く、患少き、と問ふ。」答へて曰はく、「聖人は實に、身は苦の本にして、病まざる時無きを知りたまふ。何を以ての故に、是は四大合して身と爲る、地水火風の性は相宜しからず、各各相害すること、譬へば癰瘡の痛まざる時無く、若し藥を以て塗れば、少しく差やすことを得べきも、而も愈やすべからず。人身も亦是の如し、常に病み、常に治す。治するが故に活くるを得、治せざれば則ち死す。是を以ての故に「惱無く、病無き、と問ふことを得ず、外患には常に風雨、寒熱有りて惱を爲すが故なり。復身の四儀なる、坐、臥、行、住有り。久しく坐すれば極めて惱む、久しく臥し、久しく住し、久しく行くも皆惱なり。是を以ての故に「惱少く、患少き」と問ふなり。」

〔一四〕問うて曰はく、「「少惱少患なりや」を問へば則ち足れり、何を以てか復、興居輕利なりや、と言ふ。」答へて曰はく、「病は差ゆと雖も、未だ平復するを得ず。是を以ての故に、興居輕利なりや、と問ふ。」問うて曰はく、「何を以ての故に、氣力有り安樂なりや不やと言ふ。」答へて曰はく、「人の病差ゆる有りて、能く行步し、坐し、起つと雖も、氣力未だ足らざれば、造事し、施爲し、輕きを擕へ、重きを擧ぐる能はざるが故に、氣力を問ふなり。

人有り、病差ゆるを得て、能く重きを擧げ輕きを擔ふと雖も、而も未だ安樂を受けず。是の故に、安樂なりや不や、を問ふなり。」問うて曰はく、「病無く力有り、何を以てか未だ安樂を受けざるや。」答へて曰はく、「人有り、貧窮にして恐怖し、憂愁して安樂を得ず。是を以ての故に。安樂なりや不や」を問ふ。復次に、二種の問訊の法有り。身を問訊すると、心を問訊するとなり。若し、少惱、少病、興居輕利にして氣力有りや、と言はば、是れ身を問訊し、若し、安樂なりや不や、と言へば、是れ心を問訊するなり。種種の內外の諸病を名けて、身病と爲し、婬欲、瞋恚、嫉妬、慳貪、憂愁、怖畏等の種種の煩惱、九十八結、五百纏、種種の欲願等を名けて、心病と爲す。是の一一の病を問訊するが故に、少惱、少病、興居輕利にして氣力有り、安樂なりや不や、と言ふなり。」問うて曰はく、「人の問訊するは則ち爾るべし、諸天すら、尙應に此の如く問訊すべからず、何に況んや佛に於てをや。」答へて曰はく、「佛身に二種有り。一には神通變化身、二には父母生身なり。父母生身は、人の法を受くるが故に天に如かず、是の故に、應に人の法の如く問訊すべし。」問うて曰はく、「一切の賢聖は心に著する所無く、身を貪らず、壽を惜まず、死を畏れず、生を悅ばず。若し是の如くならば、何を用てか問訊せん。」答へて曰はく、「世界の法に隨ふが故に、人の法の問訊を受く、通して問訊するにも、亦人の法を以てす。千葉の金色の蓮華は、上に說くが如し。

【經】爾時、釋迦牟尼佛、是千葉の金色の蓮華を受け已りて、東方の恒河沙の如き等の諸の

【一五】以下爾時釋迦牟尼佛等の文中釋尊が自ら東方の諸佛に散華して供養するに就いて三種供養、四種布施を明す。

世界の中の佛に散じたまふ。

論（一五丁上）問うて曰はく、「佛には勝り如くもの無し。今何を以ての故に、東方の諸佛に向うて、華を散じて供養する」。佛、初めて道を得たまふ時の如きは、自ら念じたまはく、「人、尊ぶ所無ければ則ち事業ならず。今十方の天地に、誰か尊び事ふべき者ぞ。我、師として之に事へんと欲す」と。是時、梵天王等の諸天、佛に白さく、「佛は無上爲り、佛に過ぐる者無し」と。佛も亦自ら天眼を以て、三世十方の天地の中を觀じたまふに、佛に勝つ者無し。心に自ら念じて言はく、「我は摩訶般若波羅蜜を行じ、今自ら作佛を致す。是れ我尊ぶ所にして、卽ち是れ我師なり。我當に是法を恭敬し供養し尊び事ふべし」と。譬へば樹有り、名けて好堅と爲すが如し。是樹は地中に在ること百歳にして、枝葉具足し、一日に出生し、高さ百丈なり。是樹出で已りて、大樹を求めて、以て其身を蔭さんと欲す。是時林中に神有り、好堅樹に語りて言はく、「世の中に汝より大なる者無し。諸樹は皆當に汝が蔭の中に在るべし」と。佛も亦是の如し、無量阿僧祇劫、菩薩地の中に在り、生ずること一日、菩提樹の下の金剛坐處に於て坐し、實に一切諸法の相を知り、佛道を成ずるを得たまふ。是時、自ら念じたまはく、「誰か尊び事へ、以て師と爲すべき者ぞ。我當に承事し恭敬し供養すべし」と。時に梵天王等の諸天は、佛に白して言さく、「佛は無上爲り、佛に過ぐる者無し」と。今何を以ての故に、復東方の諸佛を供養したまふ。「答へて曰はく、「佛は無上にして、三世十方天地の中に、佛に過ぐる者無しと雖も、而も供養を行ひたまふ。供

【大愛道】マハープラヂャパティー（Mahaprajapati）釋尊の姨母、釋尊を乳養せし人、釋尊出家して教團最初の比丘尼となる

養に上中下有り。己より下の者にして、而も之に供養するは、是れ下の供養なり。己に勝れたるを供養するは、是れ上の供養なり。己と等しき者を供養するは、是れ中の供養なり。諸佛の供養は是れ中の供養なり。大愛道比丘尼の如きは、五百の阿羅漢の比丘尼等と與に、一日の中に、一時に涅槃に入れり。是時、諸の三道を得たる優婆塞は五百の牀を擧げ、四天王は佛の乳母大愛道の牀を擧げ、佛、自ら前に在りて香鑪を擎げ、香を燒いて供養したまへり。佛、比丘に語りたまはく、「汝等は我を助けて乳母の身を供養せよ」と。爾時、諸の阿羅漢の比丘は各各神足力を以て、摩梨山の上に到り、牛頭栴檀香の薪を取り、佛を助けて薪と作す、是を下の供養と稱す。是を以ての故に、果を求めずと雖も、而も等しき供養を行ひたまふ。復次に、唯佛のみ實に佛を供養すべし、餘人は佛の德を知らず、偈に說くが如し。

智人は能く智を敬す、智論すれば則ち智喜ぶ
智人は能く智を知る、蛇の蛇足を知るが如し

是を以ての故に諸佛一切智は、能く一切智を供養したまふ。復次に、是十方の佛は、世世に、釋迦牟尼佛を勸助したまへり。已に作の菩薩の如きは、諸法は空にして、所有無く、不生不滅なりと觀ず。是の如く觀じ已りて、一切世界の中に於て、心著せず、六波羅蜜を放捨して、涅槃に入らんと欲す。譬へば人の夢中に筏を作りて、大河の水を渡り、手足疲勞して患厭の想を生じ、中流の中に在りて夢覺め、自ら念じて言はく、「何許の河有りて

か渡るべき者有る」と。是時に勸心都て放つが如し、菩薩も亦是の如し、七住の中に立ちて、無生法忍を得、心行皆止みて、涅槃に入らんと欲す。爾時、十方の諸佛は皆光明を放ちて菩薩の身を照し、右手を以て其頭を摩で語りて言はく、「善男子、此心を生ずる勿れ。汝、當に汝が本願を念じ、衆生を度せんと欲すべし。汝は空を知ると雖も、衆生は解せず。汝當に諸の功徳を集めて衆生を教化し、共に涅槃に入ること莫るべし。汝、未だ金色の身、三十二相、八十種の隨形好、無量の光明、三十二業を得ず。汝今始めて一無生の法門を得て、便ち大いに喜ぶ莫れ」と。是時、菩薩、諸佛の教誨を聞いて、還りて本心を生じ、六波羅蜜を行じ、以て衆生を度す。是の如き等は初めて佛道を得る時、是佐助に得。又佛初めて道を得たまふ時、心に自ら思惟したまはく、「是法は甚深なり、衆生は愚蒙にして福薄し、我も亦五惡世に生ず、今當に云何がすべき」と。念じ已りて、「我當に一法の中に於て、三分と作し、分ちて三乘と作し、以て衆生を度せん」と、是思惟を作す。時に十方の諸佛は皆光明を現して、讚じて言はく、「善い哉、善い哉、我等も亦五惡世の中に在りて、一法を分ちて三分と作し、以て衆生を度せり」と。是時、佛、十方の諸佛の語聲を聞き、即ち大いに歡喜し稱へて、南無佛と言へり。是の如く、十方の佛は處處に勸助し、爲に大利を作したまふ。恩の重きことを知りたまふが故に、華を以て十方の佛を供養したまへり。最上の福徳は、此徳に過ぎたるは無し。何を以ての故に、是華は、寶積佛の功徳力の生ずる所にして、是れ水に生ずる華に非ず、普明は是れ十住法身の菩薩にして、

此華を送り來りて、釋迦牟尼佛に上る。釋迦牟尼佛は、十方の佛は是れ第一の福田なることを知りたまふが故に、以て供養したまふ、是の福は倍倍多し。何を以ての故に、佛、自ら佛に供養したまふが故なり。佛法の中に、四種の布施有り。一には施す者は清淨にして、受くる者は不淨なるもの、二には施す者は不淨にして、受くる者は清淨なるもの、三には施す者も清淨、受くる者も亦淨なるもの、四には施す者も不淨、受くる者も不淨なるものなり。今東方の諸佛に施したまふは、是れ二つ倶に清淨たり。是の福は最も大なり、是を以ての故に佛、自ら十方の佛を供養したまふ。問うて曰はく、「三乘の聖人は、報果を受けたまはず、後更に生ぜず。云何が是の施は福最も大なりと言ふ。」答へて曰はく、「是の福は人の受くる無しと雖も、其の相は自ら大なり。若し人の受くる者有らば、其報は無量たらん。諸の聖人は、有爲の法は皆無常にして空なることを知りたまふが故に、捨てて涅槃に入り、是の福も亦捨てたまふ。譬へば金丸を燒くが如し。眼に其好きを見ると雖も、手を以て觸るべからず、人の手を燒く故なり。復次に、人の瘡有れば則ち藥を須ひて塗り、若し瘡無ければ藥は施す所無きが如く、人に身有るも亦是の如し。常に飢渴寒熱の病に逼らるること、亦瘡の發するが如く、衣被、飲食、湯藥を以て護はしむるは、藥を瘡に塗るが如し。愚癡の人の如きは、藥を貪るが爲の故に、瘡を除くを用ひず。若し其瘡無ければ藥は亦用無し。諸佛は身を以て瘡と爲し、身瘡を放捨したまふが故に、亦報業を受けたまはず、是を以ての故に大福有りと雖も、亦報を受けざるなり。」

〔一六〕以下散ずる所の蓮華は等の文の中、少許の華もて多數の世界に滿ぜしむるに就いて。

〔一七〕以下一一の華の上に皆菩薩有りて等の文中、一一の華上に化菩薩の坐したまふに就いて明す。

【經】散ずる所の蓮華は、東方の恆河沙等の諸の佛の世界に滿てり。

【論】〔一六〕問うて曰はく、「華は少くして、世界は多し、云何が滿つる。」答へて曰はく、「佛、神通力の故に、上の八種の如きは、自ら恣さまに變化したまふ。法の大なるを能く小ならしめ、小なるを能く大ならしめ、輕きを能く重からしめ、重きを能く輕からしめ、自在にして礙無く、意の到る所に隨うて、能く大地を動かし、願ふ所能く辦ず、諸の大聖人は、皆是八種の自在を得たまふ。是故に佛は能く小なる華を以て、東方の恆河沙等の如きの世界に滿て、又復以て衆生に未來の福報を示し、此の如きの少華もて、東方世界に滿てたまふ。又東方の菩薩に勸めて言はく、「福を佛田の中に殖ゑて、得る所の果報も亦此の如し。華は無量の土に彌滿す、汝遠く來ると雖も、應當に歡喜すべし。此大福田に遇うて果報無量なり」と。」

【經】一一の華の上に、皆菩薩有りて結加趺坐し、六波羅蜜を說きたまふ。此法を聞く者は、畢に阿耨多羅三藐三菩提に至る。

【論】〔一七〕問うて曰はく、『上に佛、舌相の光明を以て、千葉の寶華を化作し、一一の華の上に皆佛の坐したまふ有り、今何を以ての故に、一一の華の上に皆坐せる菩薩有る。』答へて曰はく、『上は是れ佛の化したまふ所の華なるが故に、佛の坐したまふ有り、此は是れ普明菩薩の供養する所の華なり、是故に菩薩の坐する有り。復次に、上の諸の衆生は、應に坐佛を見て度を得べく、今此衆生は應に坐菩薩を見て度を得べし。結加趺坐して六波羅蜜

【一八】以下諸の出家在家の菩薩等の文の中、多陀阿伽度等を偈もて釋明す。

を說き、此法を聞く者は、畢に阿耨多羅三藐三菩提に至ること、是に說くが如し。

【經】諸の出家在家の菩薩及び諸の童男童女は、頭面に釋迦牟尼佛の足を禮し、各供養の具を以て、釋迦牟尼佛を供養し、恭敬し尊重し讚歎したてまつる。是諸の出家在家の菩薩及び諸の童男童女は、各各善根福德力を以ての故に、釋迦牟尼佛、多陀阿伽度、阿羅訶、三藐三佛陀を供養したてまつることを得たり。

【論】（一八）偈に說くが如し。

諸聖の來りたまふ所の道をば、佛も亦是の如く來りたまふ
實相及び去る所は、佛も亦爾り異ること無し
諸聖は實の如くに語り、佛も亦實の如くに說きたまふ
是を以ての故に、佛を多陀阿伽度と名けたてまつる
忍の鎧の心堅固に、精進の弓の力強く
智慧利勁の箭は、憍慢と諸の賊とを破し
應に天、世人、一切諸の供養を受くべし
是故に佛と名け、以て阿羅訶と爲す
正に苦の實相を知り、亦實に苦の集を知り
苦滅の實相を知り、亦苦滅の道を知り
眞正に四諦を解し、定實にして變ずべからず

【鞞闍遮羅那】ギドヤーチャラナ(Vidyācaraṇa)明行と譯す。
【修伽陀】スガタ(Sugata)善逝と譯す。
【路迦鞞陀】ローカギタ(Lokavita)世間解と譯す。
【阿耨多羅】アヌツタラ(Anuttara)無上師と譯す。
【富樓沙曇藐】プルシヤダムヤサーラテイ(Purusadamyasārathi)調御丈夫と譯す。
【提婆摩菟舍】デーヴマヌシヤ(Devamanuṣya)天人師と譯す
【道場】菩提樹のこと

是故に十方の中に、三藐三佛と號したまふ
微妙の三明を得、清淨の行も亦具れり
是故に世尊、鞞闍遮羅那と號けたてまつる
一切の法を解知し、自ら妙道を得去り
或時は方便もて說いて、一切を愍念したまふが故に
老病死を滅除し、安隱の處に到らしめたまふ
是を以ての故に佛と名けたてまつり、以て修伽陀と爲す
世の從來する所を知り、亦世の滅する道を知りたまふ
是を以ての故に佛と名けたてまつりて、路迦鞞陀と爲す
禪、戒、智等の眼、及ぶもの無し、況んや上に出でんをや
是を以ての故に佛と名けたてまつりて、阿耨多羅と爲す
大悲にして衆生を度し、軟善にして教へ調御したまふ
是を以ての故に佛を、富樓沙曇藐と名けたてまつる
智慧行りて煩惱無く、最上の解脫を說きたまふ
是を以ての故に佛を、提婆摩菟舍と名けたてまつる
三世の動、不動、盡及び不盡の法は
道樹の下にて悉く知りたまふ、是故に名けて佛と爲す

【二九】以下南方の恆河沙等の如き等の文の中、方に就いて論釋す。

【陀羅驃】ドラヴヤ（Dravya）實と譯す。

【經】南方の恆河沙等の如き諸佛の世界を度りて、其土の最も邊に在るの世界を離一切憂と名け、佛を無憂德と號し、菩薩を離憂と名く、西方の恆河沙等の如き諸佛の世界を度り、其世界の最も邊に在る世界を滅惡と名け、佛を寶山と號し、菩薩を儀意と名く。北方の恆河沙等の如き諸佛の世界を度り、其世界の最も邊に在る世界を勝と名け、佛を勝王と號し、菩薩を得勝と名く、下方の恆河沙等の如き諸佛の世界を度り、其世界の最も邊に在る世界を善と名け、佛を善德と號し、菩薩を華上と名く、上方の恆河沙等の如き諸佛の世界を度り、其世界の最も邊に在る世界を喜と名け、佛を喜德と號し、菩薩を德喜と名く、是の如く一切は皆東方の如し。

【論】（二九）問うて曰はく、佛法の中の如きは、實に諸方の名無し、何を以ての故に、諸の五衆、十二入、十八界の中に攝せざる所、四法藏の中に亦方を說くこと無し。是實法の因緣は求むるに亦得べからず、今何を以ての故に此中に、十方の諸佛、十方の菩薩來りたまふ、と說く。答へて曰はく、世俗の法の傳ふる所に隨ふが故に方を說く、方を求むるに實に得べからず。問うて曰はく、何を以てか方無しと言ふ。汝は四法藏の中に說かず、我は六法藏の中に說く。汝は衆、入、界の中に攝せず、我は陀羅驃の中に攝す。是方の法は常の相なるが故に、有の相なるが故に、亦有亦常なり。經の中に說くが如くんば、日の出づる處は是れ東方、日の沒する處は是れ西方、日の行く處は是れ南方、日の行かざる處は是れ北方なり。日に三分の合有り。法は前合、若は今合、若は後合なり。方に隨うて日を分て

【三〇】以下爾時是三千大千世界は等の文の中、種種の寶、香樹、華樹を明す。

り、初合は是れ東方なり、南方、西方も亦是の如し、日の行かざる處は是を分つこと無し。彼は此を間て、此は彼を間つ、是れ方の相なり。若し方無くんば、彼此無し、彼此は是れ方相にして方に非ず。答へて曰はく、然らず。須彌山は四域の中に在り、日は須彌を繞りて四天下を照す。鬱怛羅越の日中は是れ弗婆提の日出にして、弗婆提の人に於ては是れ東方なり。弗婆提の日中は是れ閻浮提の日出にして、閻浮提の人に於ては是れ東方なり。是れ實には初無し。何を以ての故に、一切の方は皆東方、皆南方、皆西方、皆北方なればなり。汝は、日の出づる處は是れ東方、日の行く處は是れ南方、日の沒する處は是れ西方、日の行かざる處は是れ北方なり、と言ふも、是事は然らず。復次に、處有りて日の合せざる、是を方に非ずと爲す、方の相無きが故なり。問うて曰はく、我は一國の中の方相を說けるに、汝は四國を以て難を爲す。是を以ての故に東方は初無きに非ず。答へて曰はく、『若し一國の中の日東方と合せば是を有邊と爲す、有邊の故に無常なり、無常の故に是れ遍からず。是を以ての故に、方は但名のみ有りて實無し。

經 爾時、是三千大千世界は、皆變成して寶華と爲り、遍く地を覆ひ、繒幡蓋を懸け香樹、華樹、皆悉く莊嚴す。

論 問うて曰はく、『此れ誰が神力にして、地をして寶と爲らしむるや。』答へて曰はく、『是れ佛の無量の神力變化の所爲なり。有人の咒術、幻法、及び諸の鬼神、龍王、諸天等は能く少物を變化すれども、三千大千世界をして皆珍寶と爲らしむるは、餘人及び梵天王の

【十四變化心】一、初禪天に二種、一初禪初禪化(能く自他を變化す)、二初禪欲界化(能く下の欲界を變化す)。二、二禪天に三種、一二禪二禪化(能く自他を變化す)、二二禪初禪化(能く下の初禪地を變化す)、三二禪欲界化(能く下の欲界を變化す)。三、三禪天に四種、三禪三禪化、三禪二禪化、三禪初禪化、三禪欲界化。四、四禪天に五種、四禪四禪化、四禪三禪化、四禪二禪化、四禪初禪化、四禪欲界化これなり。

【毘琉璃】ヴイヅールヤ(Vaidūrya)青玉と譯す。

【頗梨】スハテイカ(Sphaṭika)水精のこと。

【車渠】ムサーラガルバ(Musāragalva)。

皆能はざる所なり。佛、四禪中の十四變化心に入り、能く三千大千世界の草、樹木をして、一切の土地を皆悉く莊嚴ならしめたまひ、一切衆生は、皆悉く和同して、心轉じて善を爲す。何を以ての故に、此世界を莊嚴する。般若波羅蜜を說かんが爲の故に、亦十方の諸の菩薩の客來り、及び諸天、世人の爲の故に莊嚴す。人の貴客を請ずるに、若し一家を請ずるには則ち一家を莊嚴し、一國の主には則ち一國を莊嚴するが如く、轉輪聖王は則ち四天下を莊嚴し、梵天王は三千大千世界を莊嚴し、佛は十方無量恒河沙等の諸の世界中の主、是の諸の他方の菩薩及び諸天、世人の客來るが爲の故に、亦此寶の衆人に此變化の莊嚴を見るが爲に、則ち大心を生じ、清淨なる善心を生じ、大心より大業を發し、大業より大報を得。大報を受くる時、更に大心を生じ、是の如く展轉增長して、阿耨多羅三藐三菩提を生ずることを得。是を以ての故に此世界を莊嚴して皆悉く寶と爲す。云何が寶と名くる。寶に四種有り。金と銀と毘琉璃と頗梨となり。更に七種の寶有り。金、銀、毘琉璃、頗梨、車渠、馬瑙、赤眞珠(此珠は極めて貴し、珊瑚に非ず。)なり。更に復寶有り、摩羅伽陀(此珠金翅鳥の口邊に出づ緑色にして能く一切の毒を碎く。)因陀尼羅(天青珠)、摩訶尼羅(大青珠)、鉢摩羅伽(赤光珠)、越闍(金剛)、如意珠、玉貝、珊瑚、琥珀等の種種を名けて寶と爲す。是寶に三種有り、人寶と天寶と菩薩寶となり。人寶は力少く、唯清淨の光色有りて、毒を除き鬼を除き闇を除き、亦飢渴、寒熱、種種の苦事を除く。天寶は亦大亦勝にして、常に天身に隨逐し、使令すべく、共に語るべく、輕くして重からず。菩薩寶は天人寶よりも勝れ、能く人寶天寶の事を兼有す。又能く一

【摩羅伽陀】マラカタ(Marakata)。
【因陀尼羅】インドラニーラ(Indranila)。
【摩訶尼羅】マハーニーラ(Mahanila)。
【鉢摩羅伽】パドマラーガ(Padmaraga)。
【越闍】ヴジュラ(Vajra)。
【阿伽樓】アガルー(Agaru)。
【多伽樓】タガラ(Tagara)。
【古佣】チャムパカ(Champaka)黄白の華の咲く樹。
【阿輸迦】アショーカ(Asoka)。

一切衆生をして、此に死し彼に生ずるの因縁本末を知る。譬へば明鏡に、其面像を見るが如し。復次に、菩薩寶の勝れたるは能く種種の法音を出す。若し首飾寶鈿と爲れば、則ち十方の無量の世界の諸佛の上に、幢幡、華蓋、種種の供養の具を雨らして、以て佛に供養し、亦衣被、臥具、生活の物を雨らし、種種の事衆生の須ふる所に隨うて、皆悉く之を雨らして衆生に給施す。是の如き等の種種の衆寶は以て衆生の貧窮苦厄を除く。問うて曰はく、「是の諸の珍寶は何處より出るや。」答へて曰はく、「金は山の石沙、赤銅の中より出で、眞珠は魚の腹中、竹の中、蛇の腦の中より出で、龍珠は龍の腦中より出で、珊瑚は海中の石樹より出で、貝は虫甲の中より出で、銀は燒石より出で、餘の琉璃、頗梨等は皆山窟の中より出で、如意珠は佛の舍利より出づ。若し法沒し盡くるの時は、諸の舍利は皆變じて如意珠と爲る。譬へば千歳を過ぐれば、氷は化して、頗梨珠と爲るが如し。是の如き等の諸の寶は、是れ人中の常の寶なり。佛の莊嚴したまふ所の一切の世界は、是れ最も殊勝にして、諸天の得る能はざる所なり。何を以ての故に、是は大功德より生ずる所なればなり。種種の華幡は先に說くが如し。香樹とは阿伽樓樹蜜香多伽樓樹木香旃檀と名く。是の如き等の種種の香樹有り。華樹は古佣樹黄華阿輸迦樹無憂華樹婆呵迦利樹赤華と名く。是の如き等の種種の華樹有り。

【經】譬へば華積世界普華世界の如し、妙德菩薩、善住意菩薩及び餘の大威神の諸の菩薩、皆彼に在りて住す。

論（二二）問うて曰はく、『何を以てか、譬へば華積世界の如しと言ふ。』答へて曰はく、『彼世界には常に淨き華有り。此世界は一時に變化するが故に、以て喩ふるなり。譬喩の法は小を以て大に喩ふ。人の面の好きを、譬へば滿月の如しとするが如し。』問うて曰はく、『更に十方の諸の清淨世界有り、阿彌陀佛の安樂世界等の如し。何を以ての故に但普華世界を以て喩と爲す。』答へて曰はく、『阿彌陀佛の世界は華積世界に如かず。何を以ての故に、法積比丘、佛は將に十方に至りて清淨の世界を觀んとすと雖も、功德力薄くして、上妙の清淨世界を見ることを得る能はず、是を以ての故に世界は如かず。復次に、當佛の此世界を變化したまふ時、正しく華積世界と相似たり。是を以ての故に、譬へば華積世界の如しと言ふ。』

（二三）問うて曰はく、『更に餘の大菩薩有り。毘摩羅詰、觀世音、遍吉菩薩等の如し。何を以てか、此諸の菩薩の彼に在りて住するを言はずして、但文殊尸利、善住意菩薩を言ふ。』答へて曰はく、『是遍吉菩薩は、一一の毛孔より、常に諸佛の世界、及び諸佛菩薩を出して、遍く十方に滿て、以て衆生を化し、適き住する處無し。文殊尸利の分身は、變化して五道の中に入り、或は聲聞と作り、或は緣覺と作り、或は佛身と作る。首楞嚴三昧經の中に說くが如きは、文殊尸利菩薩は、過去世に龍種尊佛と作り、七十二億世に辟支迦佛と作る。是れ言ふべく說くべし。遍吉菩薩は量るべからず、說くべからず、住處を知るべからず。若し住せば、應に一切世界の中に在りて住すべし。是故に說かず。復次に、及び諸

【二二】譬へば華積世界等の文の中、初に華積世界普華世界を明す。

【二三】次に妙德菩薩等に就いて明す。

【毘摩羅詰】ギマーラキールテイ（Vimalakīrti）維摩のこと。

【遍吉】普賢のこと、梵にサマンタバドラ（Samantabhadra）といふ。

【文殊師利】マンジュシュリー（Mañjuśrī）妙德のこと

【三】以下爾時一切世界の等の文中、皆集まれりといふに就いて明す。

の大威神の菩薩とは、亦應に總じて遍吉等の諸の大菩薩を說くべし。

【四】爾時、佛、一切の世界の、若は天の世界、若は魔の世界、若は梵の世界、若は沙門、婆羅門、若は天、若は揵闥婆、人、阿修羅等、及び諸の菩薩摩訶薩、尊位を紹ぐ者、一切皆集まれるを知りたまふ。

【五】問うて曰はく、「佛の神力は無量なり、一切の十方の衆生、若し盡く來りて會に在らば、一切の世界は應に容るべし。若し來らずんば、佛の無量の神力には能はざる所あらん。」答へて曰はく、「盡く來るべからず。何を以ての故に、諸佛の世界は無邊無量なり。若し盡く來らば、便ち有邊と爲らん。又復十方に各各佛有りて、亦般若波羅蜜を說きたまふ。彼般若波羅蜜四十三品の中の如きは、十の方面に各千佛現じて、皆般若波羅蜜を說きたまふ」と。是を以ての故に、盡く來るべからず。問うて曰はく、「若し十方の諸佛皆般若波羅蜜を說きたまふあらば、十方の諸の菩薩は何を以ての故に來る。」答へて曰はく、「普明菩薩來章の中に、已に說くが如し、釋迦牟尼佛と因緣有るが故に來るなり。復次に、是諸の菩薩の本願の故に、若し般若波羅蜜を說く處有らば、我當に聽受し、供養すべしと。是を以て遠く來る。身力を以て、功德を積まんと欲するが故なり。亦以て諸の衆生に示すらく、「我、遠くより來りて法を供養するが故なり、云何が汝は此世界に在りて供養せざる」と。」問うて曰はく、「佛、法に於て著したまはず、何を以ての故に七たび神力を現じて、衆生をして大いに集まらしめしや。」答へて曰はく、「是般若波羅蜜は、甚深

【三四】次に若は天、魔、梵の世界の文に就いて明す。

にして知り難く、解し難く、不可思議なり。是故に、諸の大菩薩を集め、甚深の法をして、心に信樂を得しむ。譬へば、小人の語る所は人の信に爲らず、貴重の大人は、人必ず信愛するが如し。」

〔三四〕問うて曰はく、「何を以ての故に、若は天の世界、若は魔の世界、若は梵の世界と言ふや。但應に天の世界、人の世界と言はば、則ち足るべし。何を以ての故に、十號の中に天人師と言ふ、是を以ての故に、應に天人と言ふべきのみ。」答へて曰はく、「諸天には天眼天耳有り、利根にして智慧有り、多く自ら知りて來る。是を以ての故に天の世界と言ふ。問うて曰はく、『若し天の世界は已に魔と梵とを攝す。何を以ての故に別して、若は魔、若は梵と說く。』答へて曰はく、『天の中に三大主有り、釋提婆那民は二處の天主、魔王は六欲天の主、梵世界の中には大梵天王を主と爲す。』問うて曰はく、『夜摩天、兜率陀天、化樂天の如きは、皆主有り、何を以てか但三主有るや。』答へて曰はく、『釋提婆那民は地に依りて住す、佛も亦地に在りて住したまふ。常に佛の所に來り、大いに名稱有りて、人多く識るが故なり。魔王は常に來りて佛を嬈す、又是れ一切欲界の主なり。夜摩天、兜率陀天、化樂天は皆魔王に屬す。』復次に、天の世界には、則ち三界の天、皆是天の中に攝し、一切の欲界は魔を主と爲す。是故に別に說く。復次に、魔は常に佛を嬈す、今來りて般若波羅蜜を聽き、衆人の信を增益するが故なり。問うて曰はく、『色界の中に大いに天有り、何を以てか、但梵の世界に集まると言ふ。』答へて曰はく、『上の諸天は覺觀無く、

【二五】次に諸の沙門婆羅門といへるに就いて。

【二六】次に若は天と帝說するに就いて。

散心を喜ばず、久聞くこと難きが故なり。梵の世界には四識有りて聞き易きが故に、又梵の世界は近きが故なり。復次に、梵を離欲清淨と名く、今梵の世界を言へば、已に總じて色界の諸天を說くなり。復次に、餘の天には未だ人民有らず、劫初に生ずる時、梵天王、獨り梵宮に在り、寂漠として人無く其心悅ばず。而も自ら念を生ずらく、此間に何を以てか人民を生ぜざると。是時、光音天の命盡くる者、念に應じて來り生ず。梵王便ち自ら念を生ずらく、此諸天は先に無し、我念に隨ふが故に生ず。我は能く此諸天を生ぜりと。諸天は此時、亦各自に念ずらく、我は梵王に從うて生ず。梵王は是れ我父なりと。是を以ての故に但梵の世界のみを說く。復次に、二禪、三禪、四禪の天は、欲界に於て佛を見、法を聽き、若は菩薩を勸助し、眼識、耳識、身識を皆梵の世界の中に在りて取る。是を以ての故に別して梵の世界を說く。』

【二五】問うて曰はく、『何を以ての故に、獨り諸の沙門、婆羅門を說いて、國王、及び長者、諸餘の人衆を說かざる。』答へて曰はく、『智慧の人に二分有り、沙門と婆羅門となり。出家を沙門と名け、在家を婆羅門と名く。餘人は心に世樂を存す、是故に說かず。婆羅門は多學にして智慧有り、福を求め、出家人は一切道を求む。是故に但沙門婆羅門を說く。在家の中、七世清淨にして、生れて六歲に滿ち、皆戒を受くるを婆羅門と名く。是沙門と婆羅門の中には道德智慧有り、是を以ての故に說く。』

【二六】問うて曰はく、『先に已に天の世界を說く、今何を以てか復天を說く。』答へて曰はく、

天の世界は是れ四天王、忉利天、魔は是れ他化自在天、梵は是れ色界なり。今說く天は是れ欲界の中の、夜摩と兜率陀と化樂と愛身天等なり。愛身は六天の上に在りて、形色絕妙なるが故に愛身と言ふ。』

（二七）問うて曰はく、『何を以てか但、揵闥婆を說いて、諸餘の鬼神及び龍王を說かざる。』答へて曰はく、『是揵闥婆は是れ諸天の伎人なり。諸天に隨逐して、其心は柔軟に、福德力は小にして、諸天諸鬼神に減れり。鬼神道の中に龍王を攝し、畜生道の中に甄陀羅を攝す。亦是れ天の伎にして、皆天に屬し、天と同じく住し、共に坐して飲食し、伎樂は皆天と同じ。是揵闥婆王を童籠磨と名く。是揵闥婆、甄陀羅は恆に二處に在りて住す。常に居止する所は十寶山の間に在り。有時、天上の諸天の爲に樂を作す。此二種は、常に動して上下に休し、人は四天下に在りて生ず。生に四種有り。極めて長壽なるは乃ち無量歲に至り、極めて短壽なるは乃ち十歲に至る。阿修羅は惡心にして鬪諍すれども、而も戒を破らず。大いに施福を修し、生じて大海の邊に在りて住し、亦城郭、宮殿に有り。是阿修羅王を毘摩質多婆梨羅睺羅と名け、是の如き等を阿修羅王と名く。說くが如くんば、一時、羅睺羅阿修羅王は、月を噉はんと欲す、月の天子は怖れて、疾に佛の所に到りて、偈を說けり。

大智精進の佛世尊、我今歸命し稽首し禮す

是羅睺羅は我を惱亂す、願くば佛憐愍し救護したまへ

佛、羅睺羅の與に偈を說いて言はく、

【一七】次に揵闥婆といふ、阿修羅といふ、餘の鬼神、地獄等を說かざるに就いて。

【緊那羅】キンナラ（Kinnara）八部衆の一、音樂の神。

【童籠磨】ドルマ（Druma）樹と譯す。

月は闇を照して清涼なり、是れ虚空の中の大燈明なり
其色は白淨にして千光有り。汝、月を呑むこと莫くして疾に放ち去れ

是時、羅睺羅は怖懅し、汗を流して、即ち疾に月を放てり、婆梨阿修羅王は、羅睺羅が惶怖して月を放つを見て、偈を說いて問うて曰はく、

羅睺羅、汝何を以ての故に惶怖戰慄して、疾に月を放ち
汝が身より汗を流すこと病人の如く、心怖れて安んぜざること乃ち是の如くなる

羅睺羅、爾時、偈を說いて答へて曰はく、

世尊は偈を以て我に勅したまへり、我月を放たずんば頭七分ならん
設ひ生活するを得とも安穩ならずと。故を以て我は今此月を放てり

婆梨阿修羅王、偈を說くらく、

諸佛は甚だ値ひ難し、久遠にして乃ち出世し
此清淨の偈を說きたまふに、羅睺即ち月を放てり

問うて曰はく、『何を以てか地獄、畜生、餓鬼を說かざる。』答へて曰はく、『地獄は大苦にして心亂れ、法を受くる能はず。畜生は愚癡心を覆ひ、化を受くる能はず。餓鬼は飢渴の火の爲に身を燒くが故に、法を受くることを得ず。復次に、畜生餓鬼の中より少多來りて法を聽く者有れども、福德の心を生ずるのみにして、道を受くるに堪へず、是故に說かず。』問うて曰はく、『若し爾らば揵闥婆阿修羅も亦說くべからず。何を以ての故に、鬼神

【密迹金剛力士】手に金剛の武器を持し、佛を警護する夜叉神の總稱。

道の中に已に攝するが故なり。答へて曰はく、何ぞ攝すと說きたまはず、今何を以てか攝すと言ふ。此れ迦旃延子等の語なり。阿修羅の如きは力天と等しく、或時は戰鬪して天に勝つ。揵闥婆は是れ諸天の伎にして、天と同じく福樂を受け、智慧有りて能く好醜を別つ。何を以てか道法を受くるを得ざらん。「雜阿含」天品の中に說くが如くんば、富那婆藪は鬼神の母なり。佛、遊行して、其の處に宿す、爾時、世尊、上妙の法甘露を說きたまひ、男女二人啼泣す。母、爲に偈を說いて之を止めぬ。

汝、鬱怛羅、聲を作す勿れ、富那婆藪も亦啼くこと莫らん
我は今法を聞いて道諦を得たり、汝も亦當に得て必ず我が如くなるべし

是事を以ての故に鬼神の中に、道を得る者有ることを知る。復次に、摩訶衍の中の、密迹金剛力士は、諸の菩薩の中に於て勝れたり、何に況んや餘人をや。屯崙摩甄陀羅王、揵闥婆王の如きは、佛の所に至り、琴を彈じて佛を讃じ、三千世界皆震動を爲し、乃至摩訶迦葉は其の座に安んぜざりき。此の如きの人等は、云何が道を得る能はざる。諸の阿修羅王と龍王の如きは、皆佛の所に到り、佛の深法を問ひたてまつるに、佛、其の問に隨ひて深義を答へたまへり。何を以てか道を得る能はずと言ふ。問うて曰はく、「五道の中の衆生の中に於て、佛は是れ人天の師なり、三惡道を說きたまはざりき。其の福無く、道を受くる分無きを以ての故に、是れ龍鬼は皆惡道の中に墮せり。答へて曰はく、佛も亦分明に五道を說きたまはず、五道を說くは是れ一切有部の僧の所說なり。婆蹉弗妬路部僧の說に六道有

り。復次に、應に六道有るべし。何を以ての故に、三惡道は一向に是れ罪處にして、若し福多く罪少なきは、是れ阿修羅揵闥婆等と名く、生處別なるべければなり。是を以ての故に、應に六道と言ふべし。復次に、三惡道も亦道を受くるあれども、福少なきが故に無しと言ふ。諸の菩薩、尊位を紹ぐ者に及んでは先に說くが如し。

大智度論卷第十

大智度初品中舍利弗因緣第十六　卷第十一

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什詔を奉じて譯す

【經】佛、舍利弗に告げたまふ。

【論】問うて曰はく、『般若波羅蜜は、是れ菩薩摩訶薩の法なり。佛、何を以ての故に、舍利弗に告げて、而も菩薩に告げたまはざる。』答へて曰はく『舍利弗は一切の弟子の中に於て、智慧最も第一なり。佛の偈に說きたまへるが如し。

一切衆生の智は、唯佛世尊を除いて
舍利弗の智慧、及び多聞に比せんと欲するに
十六分の中に於て、猶尚一にも及ばず

復次に、舍利弗は智慧有り、多聞にして大功德有り。年始めて八歲にして、十八部の經を誦し、一切の經書の義理を通解す。是時、摩伽陀國に龍王兄弟有り、一を姞利と名け、二を阿伽羅と名く。雨を降らすに時を以てし、國に荒年無し。人民之を感じ、常に仲春の月を以て、一切大いに集り、龍の住處に至りて、爲に大會を設け、樂を作し義を談じて、此一日を終ふ。古より今に及んで、斯集未だ替らず、遂に龍の名を以て、以て此會に名く。

【一】以下佛、舍利弗に告げたまふの文中、舍利弗が學道の因緣を明す。

【舍利弗】シャーリプトラ（Śāriputra）舊には身子、新には鶖鷺子と譯す。

此日常法として四の高座を敷く。一は國王の爲、二は太子の爲、三は大臣の爲、四は論士の爲なり。」爾時、舍利弗は八歲の身を以て、衆人に問うて言はく、「此四の高座は誰が爲に之を敷く」と。衆人答へて言はく、「國王太子大臣論士の爲なり」と。是時、舍利弗は時人、婆羅門等を觀察し、神情を瞻向するに、已に勝る者無し。便ち論床に昇りて結跏趺坐す。衆人疑ひ怪んで或は謂く、愚小にして無知なりと。或は謂く、知量人に過ぐと。復其神異を嘉すと雖も、而も猶各自矜を懷き、其年小を恥ぢて、自ら與に語らず。皆年少の弟子を遣し、傳言して、之に問ふに、其答酬の旨趣、辭理超絕せり。時の諸論師、未曾有なりと歎ず、愚、智、大、小、一切皆伏す。王大いに歡喜し、即ち有司に命じて一聚落を封じ、常に以て之に給す。王は象輿に乘せ鈴を振り、吉を告げ、一切の十六大國六大城の中に宣示するに慶悅せざる無し。是時、吉占師子を拘律陀と名く、姓は大目揵連、舍利弗は友として之に親しむ。舍利弗は才明かにして、見るに重く、目揵連は豪爽にして最も貴し。此二人の者は才智相比び、德行互に同じく、行けば即ち俱に遊び、住すれば即ち同じく止まる。少長繾綣として、結要終始なり。後俱に世を厭ひ出家して道を學び、梵志の弟子と作り、情もて道門を求むること久うして徵無し。以て師に問ふ。師を刪闍耶と名く。而して之に答へて言はく、「我道を求めて自り彌年歲を歷たり、知らず道果有りと爲んや無しとせんや。我は其人に非ずや、而も亦得ず」と。他日、其師疾く寢ねたり。舍利弗は頭の邊に在りて立ち、大目揵連は足の邊に在りて立てり。喘喘然として、其命將に終

【阿說示】アシュヷヂット(Asvajit)馬師或は馬勝と譯す。五比丘の一、威儀端正を以て名有り。

らんとす。乃ち憐れんで而して笑ふ。二人心を同うして倶に笑意を問ふ。師之に答へて曰はく、「世俗は眼無くして恩愛の爲に侵さる。我は金地國王の死して、其大夫人の、自ら火積に投じて、同一の處を求むるを見る。而も此二人の行報は各各異なり、生るる處は殊絶せり」と。是時、二人は師の意を筆受し、以て其虚實を驗さんと欲す。後、金地の商人有り、遠く摩伽陀國に來る。二人は蹟を以て之を驗するに、果して師の語の如し。乃ち憮然として歎じて曰はく、「我等其人に非ざるか、是れ師の我に隱せりと爲すか」と。二人は相與に誓うて曰はく、「若し先づ甘露を得ば、要畢ず味を同うせん」と。是時、佛、迦葉の兄弟千人を度し、次いで諸國に遊び、王舍城に到り、頓に竹園に止りたまふ。二梵志師は佛の出世を聞いて倶に王舍城に入り、消息を知らんと欲す。爾時、一比丘有り、阿說示(五人の一)と名く。衣を著け、鉢を持し、城に入りて乞食す。舍利弗、其儀服の異容にして、諸根の靜默なるを見て、就いて問うて言はく、「汝は誰の弟子にして師は是れ何人ぞや」と。答へて言はく、「釋種の太子は老、病、死の苦を厭ひ、出家して道を學び、阿耨多羅三藐三菩提を得たり、是れ我師なり」と。舍利弗言はく、「汝が師の教授を我爲に之を說け」と、即ち答の偈に曰はく、

　我年既に幼稚にして、學ぶの日久しく初めて淺し
　豈能く至眞を演べ、廣く如來の義を說かんや

舍利弗言はく、略して其要を說けと。爾時、阿說示比丘、此の偈を說いて言はく、

諸法は因緣より生ず、是法の因緣と
是法の因緣盡くるとを說く、大師は是の如く說きたまへり

舍利弗、此偈を聞き已りて、即ち初めて道を得、還りて目連に報ず。目連、其顏色の和悅せるを見て、迎へて之に謂ひて言はく、「汝甘露味を得たるや、我爲に之を說け」と。舍利弗、即ち其爲に向に聞く所の偈を說けり。目連言はく、「更に爲に重ねて說け」と、即ち復爲に說くに、亦初道を得たり。二師は二百五十の弟子と俱に佛の所に到る。佛、遙に二人の弟子と俱に來るを見たまひ、諸の比丘に告げたまはく、「汝等は此二人、諸の梵志の前に在る者を見るや不や」と。諸の比丘、言はく、「已に見る」と。佛言はく、「是二人は是れ我弟子の中にて、智慧第一、神足第一の弟子なり」と。大衆と俱に來り、以て漸く佛に近づき、既に到りて稽首して、一面に在りて立ち、俱に佛に白して言さく、「世尊、我等は、佛法の中に於て出家し、受戒せんと欲す」と。佛言はく、「善くぞ來りし、比丘」と、即時に鬚髮自ら落ち、法服身に著き、衣鉢具足して、成就戒を受く、半月を過ぎて後、佛、長爪梵志の爲に法を說きたまふ時、舍利弗は阿羅漢道を得たり。半月の後、道を得る所以のものは、是人は當に佛を逐うて、轉法輪の師と作るべく、應に學地に在りて、現前に自ら諸法に入り、種種に具に知るべければなり。是故に半月の後に阿羅漢道を得たり。是の如き等の種種の功德甚だ多し。是故に舍利弗は、是れ阿羅漢なりと雖も、佛は是般若波羅蜜の甚深の法を以て、舍利弗の爲に說きたまへり。問うて曰はく、「若し爾らば、何を

【須菩提】スブーテイ(Subhūti)善吉と譯す、佛弟子中解空第一と稱せらる。

【無諍三昧】空理に安住して他と諍はざる三昧。

【華色比丘尼】蓮華色比丘尼のこと

以てか、初め少しく舍利弗の爲に說き、後多く須菩提の爲に說く。若し智慧第一を以ての故たらば、應に爲に多く說くべし。復何を以てか、須菩提の爲に說く。答へて曰はく、舍利弗は佛弟子の中にて、智慧第一にして、須菩提は弟子の中に於て、無諍三昧を得ること最も第一なり。無諍三昧の相は、常に衆生を觀じて心を惱さしめず、多く憐愍を行ず。諸の菩薩者は弘大誓願、以て衆生を度す。憐愍の相同じ、是故に說かんことを命ず。復次に是須菩提は、好んで空三昧を行ず。佛、忉利天に在して夏安居し、受歲し已りて、還りて閻浮提に下りたまふが如きは、爾時、須菩提、石窟の中に於て住し、自ら思惟すらく、「佛、忉利天より來り下りたまふ。我當に佛の所に到るべきや、佛の所に到らざらんや」と。又念じて言はく、「佛常に、若し人智慧の眼を以て、佛の法身を觀ぜば、卽ち佛を見たてまつる中の最たるものなりと說きたまふ」と。是時、佛、忉利天より下りたまふを以ての故に、閻浮提の中の四部の衆集り、諸天は人を見、人は亦天を見る。坐中に佛及び轉輪聖王と諸天と大衆とあり、衆會は、莊嚴にして、先に未だ曾て有らず。須菩提、心に念ずらく、「今此大衆は復殊特なりと雖も、勢久しく停らず、磨滅の法にして皆無常に歸す」と、此無常觀の初門に因りて、悉く諸法の空にして、實有ること無きことを知る。是觀を作す時、卽ち道證を得たり。爾時、一切の衆人は、皆先づ佛を見んことを求めて禮敬し、供養せんと欲す。華色比丘尼有り、女名の惡しきを除かんと欲して、便ち化して轉輪聖王及び七寶の千子と爲る。衆人之を見て皆坐を避けて起ち去る。化王は佛の所に到り已りて、還りて

【拘絺羅】マハーカウスティラ（Mahakausthila）

本身に復して比丘尼と爲り、最初に佛を禮す。是時、佛、比丘尼に告げたまはく、「汝初めて禮するに非ず、須菩提は最初に我を禮せり、所以は何ん。須菩提は諸法の空を觀せり、是れ佛の法身を見たてまつるが爲にして、眞の供養を得、供養の中の最なるものなり。生身を敬することを致すを以て供養と爲すに非ざるなり」是を以ての故に、須菩提は常に空三昧を行ずと言ふ。般若波羅蜜の空の相と相應す。是を以ての故に、佛は命じて般若波羅蜜を說かしめたまふ。

復次に、佛、衆生は阿羅漢の諸漏已に盡きたるを信じ敬ふを以て、之に命じて爲に說かしめたまふ。衆、淨信を得るが故なり。諸の菩薩は漏未だ盡きず、若し以て爲に說するも、諸人信ぜず、是を以ての故に舍利弗と須菩提と共に、般若波羅蜜を說きたまふ。問うて曰はく、「何を以てか舍利弗と名くる。是れ父母の字を作る所とせんや、是れ功德を行ふに依りて、名を立つるとせんや。」答へて曰はく、「是れ父母の作る所の名字なり。閻浮提の中に於て、第一安樂なる摩伽陀國あり。是中に大城有り、王舍と名け、王を頻婆娑羅と名く。婆羅門の論議師有り、摩陀羅と名く。王は其人の善く論を能くするを以ての故に、封じて一邑を賜ふ。城を去ること遠からず。是摩陀羅、遂に居家の婦を有ちて一女を生めり。眼、舍利鳥の眼に似たり。即ち此女を名けて舍利と爲す。次に一男を生む、膝の骨麁大なり、拘絺羅（秦に大膝と言ふなり）と名く。是婆羅門は、既に居家に有りて男女を畜養す。學ぶ所の經書は、皆日に廢忘して、復業新たならず。是時、南天竺に、一の婆羅門の大論議師有り、提

舍と字す。十八種の大經に於て、皆悉く通利せり。是人、王舍城に入り、頭上に火を戴き、銅を以て腹に鍱す、人、其故を問へば、便ち言はく、「我學ぶ所の經書甚だ多く、腹の破裂せんことを恐る、是故に之に鍱す」と。又問はく、「何を以てか、頭上に火を戴く」と。答へて言はく、「大闇を以ての故に」と。衆人言はく、「日出でて照明なり、何を以てか闇しと言ふ」と。答へて言はく、「闇に二種あり、一には日光照さず、二には愚癡の闇蔽ふ。今、日に明有りと雖も而も愚癡にして猶黑し」と。衆人言はく、「汝は但未だ婆羅門摩陀羅を見ず、汝若し見ば腹當に縮まるべく、明當に闇なるべし」と。是婆羅門は逕に鼓の邊に至りて、論議の鼓を打てり。國王之を聞いて問はく、「是れ何人ぞ」と。衆臣答へて言はく、「南天竺に一婆羅門有り、提舍と名くる大論師なり。論處を求めんと欲するが故に、論鼓を打つ」と。王大いに歡喜し、即ち衆人を集めて之に告げて曰はく、「能く難ずる者有らば之と論議せよ」と。摩陀羅之を聞いて自ら疑ふらく、「我は廢忘するを以て、又業新たならず、知らず、我今能く與に論せんや不や」と、俛俛として來る。道中に於て、二の特牛の方に相觝觸するを見、心中に想を作さく、「此牛は是れ我、彼牛は是れ彼なり、此を以て占を爲さば、誰か勝つことを得るかを知らん」と。此牛如かず。便ち大いに愁憂し、自ら念じて言はく、「此相の如くんば、我將に如かず」と。衆に入らんと欲する時、見るに母人有りて、一瓶水を挾んで正しく其前に在り、地に躓いて瓶を破る。復是念を作さく、「是れ亦不吉なり」と。甚だ大いに樂しまず。既に衆中に入りて彼論師を見るに、顏貌、意色、勝相具

足せり。自ら如かざることを知れども、事已むを獲ず、與共に論議す。論議既に交り便ち負處に墮せり。王大いに歡喜すらく、「大智明の人、遠く我國に入りて、復た爲に一聚落を封せんと欲す」と。諸臣議して言はく、「一聰明の人來れば便ち一邑を封じ、功臣を賞せず、但論議のみを寵す。恐らくは國を安んじ、家を全うするの道に非ず。今摩陀羅は論議如かず、應に其封を奪ひて、以て勝者に與ふべし。若し更に勝つ人あらば、復以て之に與へたまへ」と。王、其言を用ひ、即ち奪ひて後の人に與ふ。是時、摩陀羅、提舍に語りて言はく、「汝は是れ聰明の人なり、我女を以て汝が妻とせん。男兒を相累ひ、今遠く他國に出で、以て本志を求めんと欲す」と。提舍、其女を納れて婦と爲す。其婦懷妊し、夢に、一人の身に甲冑を被、手に金剛を執りて、諸山を摧破し、大山の邊に在りて立つを見る。覺め已りて其夫に白して言はく、「我夢ること是の如し」と。提舍言はく、「汝當に男を生むべし、一切諸の論師を摧伏し、唯一人に勝たず。當に與に弟子と作るべし」と。舍利は懷妊して、其子を以ての故に、母も亦聰明にして、大いに能く論議す。其弟の拘絺羅は、姉と談論する毎に屈して如かず、姉の懷む所の子は必ず大智慧ならんことを知る。未だ生せずして是の如し、何に況んや出生せんをやと。即ち家を捨てて學問して、南天竺に至り、指爪を剪らず、十八種の經書を讀みて皆通利ならしむ。是故に時人號して長爪梵志と爲す。姉の子既に生れて七日の後、裹むに白疊を以てし、以て其父に示す。其父思惟すらく、「我を提舍と名く、我名字を逐ひ字けて優波提舍（優波は秦に逐と言ひ提舍は星の名なり）と爲ん」と。是れ父母

【二】以下菩薩摩訶薩一切種を以て等の文中、一切種一切法に就いて明す。

【十六行】四諦の境を觀ずるに十六種の行相あるをいふなり。名稱は下に明すが如し、譯

の爲に字を作るなり。衆人は、其舍利の生む所なるを以て、皆其に名けて舍利弗、弗は秦には子と言ふと爲す。復次に、舍利弗の世世の本願は、釋迦牟尼佛の所に於て、智慧第一の弟子と作り、舍利弗と字く、是を本願の因縁の名字と爲す。是を以ての故に、舍利弗と名く。問うて曰はく、若し爾らば、何を以てか、優波提舍と言はずして、但舍利弗と言ふ。答へて曰はく、時人其母を貴重す、衆の女人の中に於て、聰明なること第一なり、是の因緣を以ての故に、舍利弗と稱す。

經 菩薩摩訶薩、一切種智を以て、一切法を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし。

論 〔二〕菩薩摩訶薩の義は、先の讃菩薩品の中に說くが如し。問うて曰はく、云何が一切種と名け、云何が一切法と名くる。答へて曰はく、智慧門を名けて種と爲す。有人は、一智慧門を以て觀じ、有は、二三十百千萬、乃至恒河沙等の阿僧祇の智慧門を以て諸法を觀ず。今一切智慧門を以て、一切種に入り、一切法を觀ず、是を一切種と名く。凡夫人の如きは、三種の觀にして、欲を離れ、色を離れんと欲求するが故に、欲色界の麁、澁惑、濁重を觀ず。佛弟子には八種の觀あり。無常、苦、空、無我、病の如く、癰の如く、箭の體に入るが如く惱患す。是八種の觀は、四聖諦の中に入りて、十六行の四と爲る。十六とは苦を觀じて四種とす。無常と苦と空と無我となり。苦の因を觀ずること四種、集、因、緣、生。苦の盡くるを觀ずること四種。盡、滅、妙、出。道を觀ずること四種。道、正、行、跡なり。

聞位中の四善根位に修習するところにして、今その一一に就いて釋せば苦諦に於ける四行相は、一切の諸の苦法は逼迫の性の故に苦、我の爲に所須ならざれば空、因縁所生にして念念に生滅するが故に無常、常一主宰に非ざるが故に無我と觀じ次に集諦に於ける四行相は一切の惑業は苦果を生ずるの門、苦果を招集して現ぜしむるが故に集、苦果を相積して絶えざらしむる故に生、苦果を集成して成辨せしむる故に縁なりと觀じ、次に滅諦に於ける四行相は、滅諦は五蘊繋縛の盡きたる眞理なれば滅、煩惱の擾亂なき故に静、三界を過出して一切の過患なき故に妙、諸の災厄を脱離する故に

出入の息の中に、復十六行有り。一には入息を觀じ、二には出息を觀じ、三には息の長きと、息の短きとを觀じ、四には息の身に遍きを觀じ、五には諸の身行を除き、六には喜を受け、七には樂を受け、八には諸の心行を受け、九には喜を作し、十には心攝を作し、十一には心解脱を作し、十二には無常を觀じ、十三には散壞を觀じ、十四には離欲を觀じ、十五には滅を觀じ、十六には棄捨を觀ず。復六種の念有り。念佛とは、佛は是れ多陀阿伽度、阿羅訶、三藐三佛陀、是の如き等の十號なり。五の念は、後に說くが如し。世智、出世智、阿羅漢、辟支佛、菩薩、佛智、是の如き等の智慧もて、諸法を知るを名けて、一切種と爲す。一切法とは、識の縁ずる所の法は是れ一切法なり。謂ゆる眼識は色を縁じ、耳識は聲を縁じ、鼻識は香を縁じ、舌識は味を縁じ、身識は觸を縁じ、意識は法を縁じ、眼を縁じ、色を縁じ、眼識を縁じ、耳聲鼻香舌味身觸も亦是の如く、乃至意を縁じ、法を縁じ、意識を縁じ、是を一切法と名け、是を識の縁ずる所の法と爲す。

復次に、智の縁ずる所の法は是れ一切法なり。謂ゆる苦智は苦を知り、集智は集を知り、盡智は盡を知り、道智は道を知り、世智は苦、集、盡、道、及び非數縁の滅を知る。是を智の縁ずる所の法と爲す。

復次に、二法に一切法を攝す。色法と無色法、可見法と不可見法、有對法と無對法、有漏と無漏、有爲と無爲、心相應と心不相應、業相應と業不相應（丹注に云はく、心法中思を除き餘は盡く相應なり、業は即ち是れ思の故に除く）近法と遠法等、是の如き種種の二法に一切法を攝す。（丹注に云はく現在及び無爲是を近法と名け、未來と過去と是を遠法と名く）

[illegible]【非數滅】[illegible]【色法】變壞、質礙の二義を有するものの總稱、即ち物質のこと。【無色法】物質にあらざるもの。

復次に、三種の法に一切法を攝す。善と不善と無記、學と無學と非學非無學、見諦斷と思惟斷と不斷となり。復三種の法有り。五衆、十二入、十八界なり。是の如き等の種種の三法を以て盡く一切の法を攝す。復四種の法有り、過去、未來、現在の法と、過去未來現在に非ざるの法と、欲界繫法と、色界繫法と、無色界繫法と、不繫法。善に因る法と、不善に因る法と、無記に因る法と、非善非不善の無記に因る法。緣緣法と、緣不緣法と、緣緣不緣法と、亦非緣緣非緣不緣法。是の如き等の四種の法に、一切の法を攝す。五種の法あり。色、心、心相應、心不相應、無爲法なり。是の如き等の種種の五法に、一切法を攝す。六種の法あり、見苦斷法、見集盡道斷法、思惟斷法、不斷法なり。是の如き等の種種の六法、乃至無量の法に、一切の法を攝す。是を一切法と爲す。問うて曰はく、諸法は、甚深微妙不可思議なり、若し一切衆生すら、尙知ることを得ること能はず、何に況んや一人にして盡く一切法を知らんと欲するをや。譬へば、人有り、大地を量り、及び大海の水滴を數へんと欲し、須彌山を稱らんと欲し、虛空の邊際を知らんと欲するが如し。是の如き等の事は、皆知るべからず、云何が一切種を以て、一切法を知らんと欲する。答へて曰はく、愚癡闇蔽にして、甚だ大いに苦なり、智慧の光明を最も樂と爲す。一切衆生は皆苦を厭ひ、但樂を求めんと欲す。是故に、菩薩は、一切第一の大智慧を求め、一切種の觀もて、一切法を知らんと欲す。是菩薩は、大心を發して、普く一切衆生の爲に、大智慧を求む。是故に、一切種一切法を以ひんと欲す。醫の一人二人の爲には、一種二種の藥

【可見法】眼に見ゆるものの義、有形のもの。不可見法は之に反す。
【有對法】障礙を有するものの義、無對法は之に反す。
【心相應】心王と相應して倶起する心所法、心不相應は之に反す。
【業相應法】善惡の業因に相應して生ずる結果の義、業因に相應せず無記の果を生ずるを業不相應といふ。
【見諦斷】見所斷ともいひ、見道に於て斷ずべき八十八使の見惑をいふ。
【思惟斷】修所斷ともいひ、修道に於て斷ずる八十一品の修惑及び色等の有漏法なり。
【不斷】非所斷ともいひ、一切の無漏法をいふ。
【欲界繫法】欲界に繫屬するものをいふ。準じて色界無色界に繫屬する

を用ふれば、則ち足れども、若し一切衆生の病を治せんと欲せば、當に一切種の藥を須ふべきが如し。菩薩も、亦是の如し、一切衆生を度せんと欲するが故に、一切種もて、一切法を知らんと欲す。諸法の如きは、甚深微妙無量なれば、菩薩の智慧も、亦甚深微妙無量なり。先の答に、一切智人を破する中に、已に廣く說けり。函大なれば、蓋も亦大なるが如し。復次に、若し理を以て、一切法を求めずんば、則ち得べからず、若し理を以て之を求むれば、則ち得ざること無し、譬へば、火を鑽るに木を以てすれば、則ち火を得べく、薪を析いて、火を求むるも、火は得べからざるが如く、大地は、邊際有れども、一切智人に非ざるよりは、大神力あること無し。則ち知ること能はざるが如し。若し神通力大なれば、則ち此三千大千世界の地の邊際を知る。今此大地は、金剛の上に在り、三千大千世界の四邊は、則ち虛空なり。是を地の邊際を知ると爲す。須彌山を稱らんと欲するも亦是の如し。虛空を量らんと欲するも、虛空を量ること能はざるに非ず、無法の故に量るべからざるなり。

【經】舍利弗、佛に白して言さく、『世尊、菩薩摩訶薩は、云何が一切種智を以て、一切法を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべき。』

【論】(三)問うて曰はく、「佛、般若波羅蜜を說かんと欲するが故に、種種に神變を現じ、現じ已りて即ち應に即ち說くべし。何を以ての故に、舍利弗をして問はしめて、而して後に說きたまふ。」答へて曰はく、『問うて而して後に說くことは、佛の法として應に爾るべし。復次

ものを色界繫法、無色界繫法といふ

【見苦斷法】四諦の中の苦諦の理を見て斷ずるもの。

【見集盡道斷法】四諦の中の集諦、滅諦、道諦の理を見て斷ずるものの義。

【三】以下舍利弗佛に白して言さく等の文を明す。

に、舍利弗は般若波羅蜜の甚深微妙無相の法にして、解し難く、知り難きことを知り、自ら智力を以て種種に思惟すらく、「若し諸法の無常を觀ずるは、是れ般若波羅蜜なりや、是ならざるや」と。自ら了することを能はず、是を以ての故に問へり。復次に、舍利弗は一切智に非ず、佛の智慧の中に於ては、譬へば小兒の如し。「阿婆檀那經」の中に說くが如きは、佛、祇洹に在りて住し、晡時に經行したまひしに、舍利弗も佛に從ひて經行せり。是時に鷹有り、鴿を逐ふ。鴿は飛び來りて佛の邊に住す、佛、經行したまうて之を過ぎ、影鴿の上を覆ふに、鴿の身は安隱にして、怖畏即ち除き、復聲を作さず。後舍利弗の影、鴿に到れば便ち聲を作し戰き怖るること初の如し。舍利弗、佛に白して言さく、「佛及び我身は三毒無し、何の因緣を以て、佛の影鴿を覆へば、鴿便ち聲無く、復恐怖せず、我影上を覆へば、鴿便ち聲を作し、戰慄すること故の如くなるや」と。佛言はく、「汝は三毒の習氣未だ盡きず、是を以ての故に汝が影覆ふ時は恐怖除かず。汝は此鴿の宿世の因緣を觀るや、幾世、鴿と作るや」と。舍利弗、即時に宿命智三昧に入りて、此鴿は、鴿の中より來り、是の如く、一二三世、八萬大劫、常に鴿の身と作ることを觀見し、是を過ぎて已往は復見ること能はず。舍利弗、三昧より起ちて佛に白して言さく、「是鴿は八萬大劫の中に、常に鴿の身と作る。是を過ぎて已前は、復知ること能はず」と。佛言はく、「汝若し盡く過去世を知ること能はずんば、試に未來世を觀ぜよ。此鴿は何の時か當に脫すべき」と。舍利弗、即ち願智三昧に入りて、此鴿を觀見するに、一二三世、乃至八萬大劫、未だ鴿の

身を脱せず、是を過ぎて已往は、亦知ること能はず。三昧より起ちて佛に白して言さく、「我、此鴿を見るに、一世二世より、乃至八萬大劫、未だ鴿の身を脱せず、此を過ぎて已往は復知ること能はず。我は過去未來の齊限を知らず。不審、此鴿は、何の時か當に脱すべき」と。佛、舍利弗に告げたまはく「此鴿は、諸の聲聞、辟支佛の知る所の齊限を除いて、復恒河沙等の大劫の中に於て、常に鴿の身と作り、罪訖り出づることを得て、五道の中に輪轉し、後、人と爲ることを得、五百世の中を經て、乃ち利根を得。是時、佛有り、無量阿僧祇の衆生を度し、然る後に無餘涅槃に入りたまふ。遺法世に在り。是人は五戒の優婆塞と作り、比丘に從ひて佛を讃ずるの功徳を聞き、是に於て初めて發心し、願ひて佛と作らんと欲し、然る後、三阿僧祇劫に於て、六波羅蜜を行じ、十地を具足して佛と作ることを得、無量の衆生を度し已りて、無餘涅槃に入らん」と。是時、舍利弗、佛に向ひて懺悔し、佛に白して言さく「我は一鳥に於て、尚其本末を知ること能はず、何に況んや諸法をや。我若し佛の智慧の是の如きを知らば、佛の智慧の爲の故に、寧ろ阿鼻地獄に入りて、無量劫の苦を受くるとも、以て難しと爲さず」と。是の如き等を、諸法の中に於て了せざるが故に、問ひたてまつるなり。

大智度論釋初品中檀波羅蜜義第十七

【四】以下佛舍利弗に告げたまはく等の文中、初に般若波羅蜜の種種相を明す。

【經】佛、舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩、不住法を以て、般若波羅蜜の中に住し、捨つる所無きの法を以て、檀波羅蜜を具足す、施者、受者、及び財物は得べからざるが故なり」と。

【論】問うて曰はく、「般若波羅蜜は是れ何等の法たりや」と。答へて曰はく、「有人言はく、『無漏の慧根は、是れ般若波羅蜜の相なり。何を以ての故に、一切の慧の中、第一の慧は是を般若波羅蜜と名く、無漏の慧根は是れ第一なり、是を以ての故に、無漏の慧根を般若波羅蜜と名く』」と。

問うて曰はく、「若し菩薩は未だ結を斷ぜずんば、云何が無漏の慧を行ずることを得ん」と。答へて曰はく、「菩薩は未だ結を斷ぜずと雖も、行相は無漏の般若波羅蜜に似たり、是の故に無漏の般若波羅蜜を行ず、と名くることを得。譬へば、聲聞の人の煖法、頂法、忍法、世間第一法を行ずるに、先づ相似の無漏法を行ずれば、後に苦法智忍を生ずること得易きが如し。有人言はく、『菩薩に二種有り。結使を斷じて、清淨なる有り、未だ結使を斷ぜずして、清淨ならざる有り。結を斷じて、清淨なる菩薩は、能く無漏の般若波羅蜜を行ず』」と。問うて曰はく、「若し菩薩は、結を斷じて清淨ならば、復何を以てか般若波羅蜜を行ずる」。答へて曰はく、「結使を斷ずと雖も、十地未だ滿たず、未だ佛土を莊嚴せず、未だ衆生を教化せず、是の故に般若波羅蜜を行ず。復次に、結を斷ずるに二種有り、一には三毒を斷じて、心人天の中の五欲に著せず、二には人天の中の五欲に著せずと雖も、菩薩の

【毘藍】ヴイラムバカ(Vairambhaka)迅猛風暴風の名

功徳果報の五欲に於ては、未だ捨離すること能はず、是の如きの菩薩は、當に般若波羅蜜を行ずべし。譬へば長老阿泥盧豆の如きは、林中に在りて坐禪する時、淨愛天女等、淨妙の身を以て、來りて阿泥盧豆を試む。阿泥盧豆の言はく、「諸姉、青色を作し來れ、雜色を用ひず」と。不淨を觀んと欲して、觀ることを得ること能はず、黄赤白色も亦復是の如し。時に阿泥盧豆は目を閉ぢて視ず、語りて言はく、「諸姉、遠く去れ」と。是時、天女は即ち滅して現ぜず、天の福報の形すら猶尚是の如し、何に況んや、菩薩の無量の功徳果報の五欲をや。又甄陀羅王の如きは、八萬四千の甄陀羅と與に來りて佛の所に到り、琴を彈じ、頌を歌ひ、以て佛を供養したてまつれり。爾時、須彌山王及び諸山、樹木、人民、禽獸、一切皆舞ひ、佛邊の大衆、乃至大迦葉も、皆座上に於て自ら安んずること能はざりき。是時、天須菩薩は、長老大迦葉に問はく、「耆年舊宿は十二頭陀法の第一を行せり、何を以てか座に在りて、自ら安んずること能はざりし」と。大迦葉言はく、「三界の五欲は、我を動ずること能はず、是れ菩薩の神通の功徳、果報の力の故に我をして是の如くならしむ。我、心有りて自ら安んずること能はざりしには非ざるなり。譬へば須彌山の四邊より風起れども、動ぜしむること能はず。大劫盡る時に至りて、毘藍風起れば、乾草を吹くが如し」と。是事を以ての故に、二種の結の中、一種を未だ斷ぜざるも、是の如きの菩薩等は應に般若波羅蜜を行ずべきことを知る。是れ阿毘曇の中に、是の如く說くなり。復有人言はく、「般若波羅蜜は是れ有漏の慧なり、何を以ての故に、菩薩は道樹の下に至りて、乃ち結

【薩婆若】サルヷジニャー（Sarvajña）一切智と譯す。

を斷ず。先に大智慧有り無量の功德有りと雖も、而も諸の煩惱は未だ斷ぜざればなり」と。是故に言はく、「菩薩の般若波羅蜜は是れ有漏の智慧なり」と。復有人言はく、「初發意より乃ち道樹の下に至る其中間に於て、所有する智慧は是を般若波羅蜜と名く。成佛の時は是般若波羅蜜を轉じて薩婆若と名く」と。復有人言はく、「菩薩の有漏、無漏の智慧は、總じて般若波羅蜜と名く。何を以ての故に、菩薩は涅槃を觀じ、佛道を行ずればなり」と。是事を以ての故に菩薩の智慧は、應に是無漏なるべし。未だ結使を斷ぜず、事未だ成辦せざるを以ての故に應に有漏と名くべし」と。復有人言はく、「菩薩の般若波羅蜜は、無漏、無爲、不可見、無對なり」と。復有人言はく、「是般若波羅蜜は、不可得の相なり。若は有、若は無、若は常、若は無常、若は空、若は實、是れ般若波羅蜜にして、陰、界、入の攝する所に非ず、有爲に非ず、無爲に非ず、法に非ず、非法に非ず、取ること無く、捨つることと無く、生せず、滅せず、有無の四句を出でて適に著する所無し。譬へば火焰の四邊に、手を觸るべからざるが如し。手を燒くを以ての故なり。般若波羅蜜の相も亦是の如く、觸るべからず、邪見の火、燒くを以ての故なり」と。問うて曰はく、「上に種種の人、般若波羅蜜を說く、何をか實と爲すや」。答へて曰はく、『有人言はく、「各各理有り、皆是れ實なり」と。經に說くが如し、「五百の比丘、各各二邊、及び中道の義を說くに、佛言はく、「皆、道理有り」と。有人言はく、「末後に答ふる者を實と爲す。所以は何ん、破すべからず、壞すべからざるが故なり」と。若し法有り、毫釐許りの如き有ならば、皆過失有り破すべし、若し

【五】次に法に住せずして般若波羅蜜に住するに就いて。

無と言ふも破すべし。此般若の中には有も亦無く、無も亦無く、非有非無も亦無く、是の如きの言說も亦無し、是を寂滅無量無戲論の法と名く。是故に破すべからず、壞すべからず。是を眞實の般若波羅蜜と名く、最勝にして過る者無し。轉輪聖王の諸の敵を降伏して、而も自ら高からざるが如し。般若波羅蜜も亦是の如し、能く一切の語言戲論を破し、皆亦所破有らず。復次に、此より已後の品品の中に、種種の義門もて般若波羅蜜を說く、是れ實相なり。不住の法を以て、般若波羅蜜の中に住すれば、能く六波羅蜜を具足す。

(五)問うて曰はく、『云何が不住の法もて、般若波羅蜜の中に住すれば、能く六波羅蜜を具足すと名くる。』答へて曰はく、『是の如きの菩薩は、一切の法は、常に非ず無常に非ず、苦に非ず樂に非ず、空に非ず實に非ず、我に非ず無我に非ず、生滅に非ず不生滅に非ずと觀ず。是の如く甚深なる般若波羅蜜の中に住し、般若波羅蜜の相に於ても亦取らざる、是を不住法にして住すと名く。若し般若波羅蜜の相を取らば、是を住法にして住すと爲す。』問うて曰はく、『若し般若波羅蜜の相を取らず、心に著する所無く、佛の言ふ所の如くんば、一切の諸法は欲を其本と爲す。若し取らずんば、云何が六波羅蜜を具足することを得ん。』答へて曰はく、『菩薩は衆生を憐愍するが故に先づ誓願を立つ、「我、必ず當に一切衆生を度脫すべし」と。精進波羅蜜の力を以ての故に、諸法は生ぜず滅せず、涅槃の相の如しと知ると雖も、復諸の功德を行じて六波羅蜜を具足す。所以は何ん、法に住せずして、般若波羅蜜の中に住するを以ての故なり。是を法に住せずして、般若波羅蜜に住すと名く、

【一八】次に般若波羅蜜の中に住して檀波羅蜜を具足するに就いて。
【檀】ダーナ(Dāna)布施と譯す。

大智度論釋初品中讃檀波羅蜜義第十八

問うて曰はく、「檀に何等の利益有るが故に、菩薩は般若波羅蜜の中に住して、檀波羅蜜を具足し滿つるや。」答へて曰はく、「檀に種種の利益有り。檀を寶藏と爲す、常に人に隨逐す。檀を苦を破ると爲す、能く人に樂を與ふ。檀を善御と爲す、天道を開示す。檀を善府と爲す、諸の善人を攝す。（施は善人を攝して與に因縁と爲る故に攝すと言ふ）檀を安隱と爲す、命終の時に臨んで心に怖畏せず。檀を慈相と爲す、能く一切を濟ふ。檀を樂を集むと爲す、能く苦の賊を破る。檀を大將と爲す、能く慳の敵を伏す。檀を妙果と爲す、天人の愛する所なり。檀を淨道と爲す、賢聖の遊ぶ所なり。檀を積善と爲す、福德の門なり。檀を立事と爲す、衆を聚む。檀を善行と爲す、受果の因なり。檀を福業と爲す、善人の相なり。檀は貧窮を破し、三惡道を斷ず。檀は能く全く福樂の果を護る。檀は涅槃の初縁と爲り、善人の聚中に入るの要法、稱譽讃歎の淵府、衆に入りて難無きの功德、心に悔恨せざるの窟宅、善法道行の根本、種種の歡樂の林藪、富貴安隱の福田、得道涅槃の津梁、聖人大士智者の行ずる所、餘人儉德寡識の效ふ所なり。

復次に、譬へば失火の家の如し。黠慧の人は明かに形勢を識り、火未だ至らざるに及んで急に財物を出し、舍は燒け盡すと雖も、財物は悉く在りて更に舍宅を修す。好く施す人

も亦復是の如し、身の危く脆く、財物の無常なることを知りて福を修す。時に及んで大車より物を出せば、後世に樂を受くるが如く、亦後人更に宅業を修し、福慶にして自ら慰むるが如し。愚にして惑へる人は、但屋を惜むことを知りて、忽忽として救はんことを營み、狂愚にして智を失ひ、火勢を量らざれば、猛風絶熾にして、土石も爲に焦かれ、須臾の間に蕩然として夷き滅し、屋舍に救はず、財物も亦盡き、飢寒凍餓し、憂ひ苦んで世を畢ふ。慳惜の人も亦復是の如し、身命の無常にして、須臾も保ち回きことを知らず、更に堅慳して、守護し愛惜し、死の至るに期無く、忽焉として逝沒し、形は土木と同じく流れ、財は委物と俱に棄つるも、亦、愚人の憂ひ苦んで計を失するが如し。復次に、大慧の人、心有るの士は、乃ち能く覺悟して、身は幻の如く、財は保つべからず、萬物は無常にして、唯福のみ恃むべく、人を將ゐて苦津より出し、大道に通ずることを知る。復次に、大人大心は能く大いに布施し、能く自ら己を利す。小人小心は他を益すること能はず、亦自ら厚くせず。

復次に、譬へば勇士の敵を見て、必ず吞滅せんことを期するが如く、智人の慧心は深く理を悟ることを得て、慳の賊は强なりと雖も、亦能く之を挫き、必ず意の如くならしめ、良き福田に遇ひ、好き時節に値へば（時とは施に應ずる時なり遇うて而も施さざれば是を時を失ふと名く）事を覺り、心に開いて能く大いに布施す。復次に、好く施す人は、人の爲に敬せらるること、月の初めて出づるが如き、愛せざる者無きが如し。好名、善聲は周く聞え、天下の人に歸仰せられ、一切皆信ず。

【七】次に布施の意義に就いて、三種布施、二種布施等を明す。

好く施す人は、貴人に念ぜられ、賤人に敬せられ、命終らんとする時、其心は怖れず。是の如きの果報は今世に得る所たり。譬へば樹の華の大果無量なるは、後世の福なるが如し。生死に輪轉し、五道を往來するに、親として恃むべき無く、唯布施のみ有り。若し天上、人中に生じ、清淨の果を得るは皆布施に由る。象、馬、畜生の好き瓔珞を得るも亦是れ布施の所得たり。布施の德は富貴歡樂なり。持戒の人は、天上に生ずることを得、禪智は心淨うして染著する所無く、涅槃の道を得、布施の縁は是れ涅槃の道の資糧なり。施を念ずる故に歡喜す。歡喜するが故に一心にして一心に生滅無常を觀ず。生滅無常を觀ずるが故に道を得。人の蔭を求むるが故に樹を種ゑ、或は華を求め、或は果を求むるが故に樹を種うるが如く、布施の報を求むるも亦復是の如し。今世後世の樂は、蔭を求むるが如く、聲聞辟支佛の道は、華の如く、佛と成るは果の如し、是を檀の種種の功德と名す。

大智度論釋初品中檀相義第十九

(七)問うて曰はく、「云何が檀と名くる。」答へて曰はく、「檀を布施と名く、心相應の善思なり、是を名けて檀と爲す。有人言はく、「善思より起る身口の業を、亦名けて檀と爲す」と。有人言はく、「信有り、福田有り、財物有り、三事和合する時、心に捨法を生じ、能く慳貪を破す、是を名けて檀と爲す。譬へば慈法の如し、衆生を念じ、樂んで、心に慈を生ず。

布施の心數法も亦復是の如し、三事和合して、心に捨法を生じ、能く慳貪を破す」と。問に三種有り、或は欲界繫、或は色界繫、或は不繫なり。有本の注に云ふ聖人は心を行ずる故に不繫と名く心相應法は心行に隨うて心と共に生ず、色法の能く縁と作るに非ず、業に非ず、業相應は業行に隨うて業と共に生ず、先世の業報の生に非ず。二種の修なる行修、得修、二種の證なる功證、慧證、若しは思惟斷、若しは不斷の二見斷、欲界、色界盡の見斷、有覺、有觀法は凡夫聖人共に行ず、是の如き等は阿毘曇の中に廣く分別して說けり。

復次に、施に二種有り、淨有り不淨有り。不淨の施は、直施にして爲す所無し。或は有爲の財を求むるが故に施し、或は人に愧づるが故に施し、或は嫌責の爲の故に施し、或は畏懼するが故に施し、或は他意を取らんと欲するが故に施し、或は死を畏るるが故に施し、或は人を狂はして喜ばしめんが故に施し、或は自ら富貴を以ての故に施に應じ、或は諍うて勝つが故に施し、或は妬瞋の故に施し、或は憍慢にして、自ら高うするが故に施し、或は名譽の爲の故に施し、或は咒願の爲の故に施し、或は衰を解除し、吉を求むるが故に施し、或は衆を聚めんが爲の故に施し、或は賤しきを輕んじ、敬せずして施す。是の如き等の種種を名けて、不淨施と爲す。淨施とは、上と相違せるを名けて淨施と爲す。復次に、道の爲の故に施し、清淨の心生じ、諸の結使無く、今世後世の報を求めず、恭敬し、憐愍するが故に是を淨施と爲す。淨施は是れ涅槃の道に趣くの資糧なり。是故に、道の爲の故に施す、と言ふ。若し未だ涅槃を得ざる時の施は、是れ人天の報樂の因なり。淨施と

【八】次に布施の功德に就いて。

は、華の瓔珞の初て成り、未だ萎せざれば、香潔く、鮮明なるが如し、涅槃の爲に淨施し、果報の香を得るも亦復是の如し。佛の說きたまふが如くんば、世に二人有り、得難しと爲す。一は出家の中の非時解脫の比丘、二は在家の白衣の能く淸淨に布施するものなり。是淨施の相は、乃ち無量世に至るも世世に失せず。譬へば劵の如く、要ず終に失ふ時無し、是布施の果は、因緣和合する時は便ち有り。譬へば樹の時節に會ふことを得れば、便ち華、葉、果實有り、若し時節未だ至らざれば、因有るも果無きが如し。

(八)是布施の法も、若し以て道を求むれば、能く人に道を與ふ。何を以ての故に。結使滅するを涅槃と名くればなり。當に布施すべき時には、諸の煩惱は薄きが故に能く涅槃を助く。施す所の物の中に於て、惜まざるが故に慳を除き、受くる者を敬念するが故に嫉妬を除き、直心に布施するが故に諂曲を除き、一心に布施するが故に調を除き、深く思惟して施すが故に悔を除き、受くる者の功德を觀ずるが故に不恭敬を除き、自ら心を攝するが故に不慚を除き、人の好き功德を知るが故に不愧を除き、財物に著せざるが故に愛を除き、受くる者を慈愍するが故に瞋を除き、受くる者を恭敬するが故に憍慢を除き、善法を行ずることを知るが故に無明を除き、果報有ることを信ずるが故に邪見を除き、決定して業有ることを知るが故に疑を除く。是の如き等の種種の不善、諸の煩惱は、布施する時、悉く皆薄く、種種の善法は悉く皆得。布施する時、六根は淸淨に、善欲の心生ず。善欲の心生ずるが故に內心は淸淨なり。果報の功德を觀ずるが故に信心生じ、身心柔軟

【伊泥延】アイネーヤ(Aineya)其膝の鹿王の膝に似たるをいふ

の故に喜樂生じ、喜樂生ずるが故に心を一にすることを得。心を一にすることを得るが故に實智慧生ず。是の如き等の諸の善法を悉く皆得るなり。復次に、布施する時は心に相似の八正道を生ず。布施の果を信ずるが故に正見を得、正見の中に思惟して亂れざるが故に正思惟を得、清淨に說くが故に正語を得、淨身に行ずるが故に正業を得、報を求めざるが故に正命を得、勤心にして施すが故に正方便を得、施を念じて廢せざるが故に正念を得、心住して散ぜざるが故に正定を得。是の如き等の相似の三十七品の善法心中に生ず。復次に、有人言はく、布施は是れ三十二相を得るの因緣なり。所以は何、施す時心堅固なるが與に、足下安立の相を得。布施する時は、五事受くる者を圍遶す、是眷屬の業因緣の故に足下輪相を得。大勇猛力にして施すが故に足跟廣平の相を得。施は人を攝するが故に手足縵網の相を得。美味の飲食を施すが故に手足柔軟七處滿の相を得。施は命を益するを以ての故に長指身不曲大直の相を得。施す時我當に相與ふべしと言ひて、施心轉た增すが故に足趺高毛上向の相を得。施す時は受くる者之を求め、一心に好く聽き、慇懃に約勅して、必ず疾く得しむるが故に、伊泥延膊の相を得。求むる者を瞋らず、輕んぜざるが故に臂長過膝の相を得。求むる者の意の如く施し、言を待たざるが故に陰藏の相を得。好き衣服、臥具、金銀、珍寶を施すが故に金色身の相と薄皮の相とを得。布施は受くる者をして、獨り自在の用を得しむるが故に、一一孔一毛生と眉間白毫の相とを得。求むる者之を求むれば卽ち言はく、當に與ふべしと。是業を以ての故に上身如師子肩圓の相を得。

病者に藥を施し、飢渇の者に飲食を與ふるが故に、兩腋下滿と最上味の相とを得。施す時は人に勸めて施を行じ、之を安慰し、布施の道を開くが故に、肉髻の相と身圓如尼拘盧の相とを得。乞ひ求むる者有れば、意に與へんと欲する時柔軟實語にして、必ず與へて虛しからざるが故に、廣長舌の相と梵音聲の相と如迦陵毘伽鳥聲の相とを得。施す時は如實の語、利益の語なるが故に師子頰の相を得。施す時愛くる者を恭敬し、心清淨なるが故に牙白齊等の相を得。施す時、實語和合語なるが故に齒密の相と四十齒の相とを得。施す時瞋らず、貪せず、等心に彼を視るが故に青眼の相と眼睫如牛王の相とを得。是を三十二相の因緣を種うと爲す。復次に、七寶、人民、車乘、金銀、燈燭、房舍、香華を布施するを以ての故に、轉輪聖王と作りて七寶具足することを得。

復次に、施すに時を得るが故に、報も亦增多し。佛の說きたまふが如きは、遠く行くの人、遠くより來る人、病人、看病人、風寒、衆難の時に施す施は是を時施と爲す。復次に、布施の時、土地の須ふる所に隨つて施すが故に、報を得ること增多し。復次に、曠路の中にして施すが故に、福を得ること增多し。常に施して廢せざるが故に、報を得ること增多し。物の重きを施すが故に、福を得ること增多し。精舍、園林、浴池等を以て、若は善人に施すが如きは、故らに報を得ること增多し。若は僧に施すが故に、報を得ること增多し。若は施す者、受くる者、俱に德有るが故に、持戒にして、智慧及び禪の惡心も亦有ること無きが如きは是を施者と爲し、若し佛及び菩薩、阿羅漢、辟支佛に施す是を受者と爲す。故に報を得ること增多し。種種に將迎して、受くる者を

【維那】カルマダーナ(Karmadāna)授事と譯す、僧衆の雜事を司どり、またこれを指授すること、

恭敬するが故に、福を得ること增多し。得難き物を施すが故に、福を得ること增多し。所有する物に隨うて、盡く能く布施するが故に、福を得ること增多し。譬へば大月氏の弗迦羅城中に、一畫師有るが如きは、千那と名け、東方の多刹陀羅國に到り、客として畫くこと十二年にして、三十兩の金を得、持ちて本國に還る。弗迦羅城の中に於て、鼓を打ちて大會を作す聲を聞き、往いて衆僧を見、信心清淨にして即ち維那に問はく、「此衆中、幾許の物を一日の食と作すことを得る」と。維那は答へて曰はく、「三十兩金にして、一日の食を得るに足れり」と。即ち有する所の三十兩金を以て維那に付し、我爲に、一日の食を作れ、我は明日當に來るべしと、空手にして歸る。其婦問うて曰はく、「十二年の作は何等の物を得る」と。答へて言はく、「我、三十兩金を得たり」と。即ち問はく、「三十兩金は、今何の所にか在る」と。答へて言はく、「已に福田の中に在りて種ゑたり」と。婦の言はく、「何等の福田ぞ」と。答へて言はく、「衆僧に施し與ふ」と。婦は便ち其夫を縛して官に送る。罪を治め、事を斷ずるの大官問はく、「何事を以ての故ぞ」と。婦の言はく、「我夫、狂癡し、十二年にして作り得たる三十兩金を、婦兒を憐愍せずして、盡く以て他人に與へたり。依りて官制の如く、輒ち縛して送り來る」と。大官其夫に問はく、「汝は何を以てか婦兒に供給せずして、乃ち物を他に與ふる」と。答へて言はく、「我、先世に功德を行ぜずして、今世、貧窮にして、諸の辛苦を受く、今世福田に遭遇す。若し福を種ゑずんば、後世復貧ならん。貧貧相續して、脫することを得る時無し、我今頓に貧窮を捨てんと

【九】次に世間、出世間の檀、聖人の稱譽する檀と、聖人の稱譽せざる檀と、佛菩薩の檀と聲聞の檀とを明す。

欲す、是を以ての故に、盡く金を以て衆僧に施せり」と。大官は、是優婆塞の佛を信ずること清淨にして、是語有るを聞き已りて、讃じて言はく「是は甚だ難しと爲す、勤苦して此少物を得、盡く以て僧に施す、汝は是れ善人なり」と。即ち身の瓔珞を脱し、及び乘る所の馬、並に一聚落を以て、貧人に施し、之に語りて言はく、「汝始めて衆僧に施す、衆僧未だ食せず、是を、穀子未だ種ゑずと爲す、牙已に生ずることを得て、大果方に後身に在るのみ」と。是故に「得難き物を、盡く用て布施すれば、其福最も多し」と言ふ。

(九)復次に、世間の檀有り、出世間の檀有り、聖人の稱譽する所の檀有り、聖人の稱譽せざる檀有り。佛菩薩の檀有り、聲聞の檀有り。何等か世間の檀なる、凡夫人の布施、亦聖人の有漏心もて作せる布施、是を世間の檀と名く。復次に、有人言はく「凡夫人の布施は、是を世間の檀と爲す、聖人は有漏心もて布施すと雖も、結使斷ずるを以ての故に、出世間の檀と名く。何を以ての故に、是聖人は無作三昧を得るが故なり」と。復次に、世間の檀は不淨にして、出世間の檀は清淨なり。二種の結使は、一種は愛に屬し、一種は見に屬す。二種の結使の爲に使はる、是を世間の檀と爲し、此二種の結使無き、是を出世間の檀と爲す。若し三礙繫の心は、是を世間の檀と爲す。何を以ての故に、因緣の諸法は實に吾我無し、而も、我與へ、彼取る、と言ふ、是故に世間の檀と名く。復次に、我には定まる處無し、我は以て彼の爲とせば、彼は以て非と爲し、彼は以て我の爲とせば、我は以て非

と爲す。是く不定たるを以ての故に、實我無し。施す所の財は因緣の和合に從りて有なり、一法として獨り得べき者有ること無し。絹の如く布の如し、衆緣合するが故に成す。縷を除き、縷を除けば則ち絹布無し。諸法も亦是の如し、一相として相無く、相は常に自ら空なり。人は想念を作し、計して以て有と爲し、顚倒にして實ならず、是を世間の檀と爲す。心に三礙無く、實に法相を知り、心顚倒せざる、是を出世間の檀と爲す。出世間の檀は聖人の爲に稱擧せられ、世間の檀は聖人の稱擧せざる所なり。復次に、淸淨の檀は結垢を雜へず、諸法の實相の如きは、是聖人に稱擧せらる。不淸淨は結使、顚倒、心の著を雜ふ、是聖人の稱擧せざる所なり。復次に、實相の智慧和合して布施す、是れ聖人の稱擧する所、若し爾らざれば聖人は稱擧せざる所なり。復次に、衆生の爲にせず、亦諸法の實相を知らんが爲の故に施すにあらず、但生老病死を脫せんことを求むる、是を聲聞の檀と爲し、一切衆生の爲の故に施し、亦諸法の實相を知らんが爲の故に施す、是を諸佛菩薩の檀と爲す。諸の功德に於て具足すること能はず、但少許の分を得んと欲す、是を聲聞の檀と爲し、一切の諸の功德を具足し滿さんと欲す、是を諸佛菩薩の檀と爲す。老病死を畏るるが故に施す、是を聲聞の檀と爲し、佛道を助けんが爲に、衆生を化せんが爲に、老病死を畏れず、是を諸佛菩薩の檀と爲す。是中に應に菩薩本生經を說くべし。阿婆陀那經の中に說くが如くんば、昔閻浮提の中に王有り、婆藪婆と名く。爾時、婆羅門の菩薩有り、韋羅摩と名く。是は國王の師として、王に轉輪聖王の法を作さんことを敎ふ。韋

羅門は財富みて、無量の珍寶具足し、是思惟を作さく、人は我を謂いて貴人と爲し、財富無量にして、衆生を饒益すとなす。今正に是れ時なり、應當に大いに施すべし。富貴は常と雖も一切無常なり。五家の共にする所は、人をして心散じ、輕泆にして不定ならしむ。譬へば獼猴の暫くも住まらざるが如し。人命の逝くことは、電の滅するよりも疾速なり。人身は無常にして、衆苦の藪なり、是を以ての故に應に布施を行ずべし」と。是の如く思惟し已りて自ら手疏を作し、普く閻浮提の諸の婆羅門、及び一切の出家人に告ぐ、「願はくは各、德を屈して、來りて我舍に集りたまへ、大施を設けて十二歲に滿たさんと欲す」と。羹汁に船を行り、酪を以て池と爲し、米麪を山と爲し、酥油を渠と爲し、衣服、飲食、臥具、湯藥は皆極めて妙ならしめ、十二歲を過ぎて以て布施せんと欲す。八萬四千の白象には犀甲、金飾の絡、名寶を以てし大金幢を建つるには四寶を以てし、八萬四千の馬を莊嚴するにも、亦犀甲、金飾、四寶を以てし、八萬四千の車を交絡するに、皆、金、銀、瑠璃、頗梨の寶を以てし、飾を覆ふに師子虎豹の皮を以てし、若は白氈、雜色の寶帳を以て莊嚴を爲す。八萬四千の四寶の床は、雜色にして綩綖あり、種種の茵蓐は柔軟細滑にして以て校飾を爲し、丹枕錦被を床の兩頭に置き、妙衣盛服は皆亦備ふ有り、八萬四千の金鉢には、銀の粟を盛滿し、銀鉢には金の粟を盛り、瑠璃の鉢には頗梨の粟を盛り、頗梨の鉢には瑠璃の粟を盛り、八萬四千の乳牛の牛は、乳一斛を出し、金を以て、其の角を飾り、衣するに白㲲を以てす。八萬四千の美女は、端正福德にして、皆白珠の名寶を以て其の身の

瓔珞とす。略して其要を擧ぐること是の如し、種種勝げて記すべからず。爾時、婆羅婆王、及び八萬四千の諸の小國の王、並に諸の臣民豪傑、長者は、各十萬の舊金錢を以て贈遺して勸助す、此法祠を設けて具足して施し已れり。釋提婆那民は來りて革羅摩菩薩に語り、此偈を說いて言はく、

天地に得難き物は、能く一切を喜悅す
汝今皆已に得て、佛道の爲に布施せり

爾時、淨居の諸天は身を現じて、讚じて此偈を說いて言はく、

門を開きて大いに布施す、汝が爲す所の者は
是衆生を憐愍するが故なり、之を佛道を求むと爲す

是時、諸天は、是思惟を作さく、「我當に其金瓶を閉ぢて、水をして下らざらしむべし。所以は何、施す者有りて、福田無きが故なり」と。是時、魔王は、淨居天に語らく、「此諸の婆羅門は、皆出家し、戒を持し、淸淨にして道に入る。何を以ての故に、乃ち福田有ること無しと言ふ」と。淨居天言はく、「是菩薩は、佛道の爲の故に布施す。今、此諸人は皆是れ邪見なり。是故に我には福田有ること無しと言ふ」と。魔王、天に語りて言はく、「云何が是人は、佛道の爲の故に布施するを知る」と。是時、淨居天は、化して婆羅門の身と作り、金瓶を持し、金杖を執りて、革羅摩菩薩の所に至り語りて言はく、「汝は大いに布施し、捨て難きを能く捨つ、何等をか求めんと欲する。轉輪聖王、七寶の千子と作り、

四天下に王たらんと欲するや」と。菩薩、答へて言はく、「此事を求めず」と。「汝は釋提婆那民を求め、八千那由他の天女の主と爲るや」答へて言はく、「不なり」と。「汝は六欲天主を求むるや」答へて言はく、「不なり」と、「汝は梵天王の三千大千世界に主として、衆生の祖父たることを求むるや」答へて言はく、「不なり」と。「汝は何の求むる所をか欲するや」是時、菩薩、此偈を説いて言はく、

我は無欲の處を求め、生老病死を離れ
一切の衆生を度せんと欲し、是の如くにして佛道を求む

化の婆羅門、問うて言はく、「布施主、佛道は得難し、當に大いに辛苦すべし、汝は心軟にして串樂たり、必ず此道を成辦することを求むる能はず、我、先に語るが如し、轉輪聖王、釋提婆那民、六欲天王、梵天王には是れ得べきこと易し、是を求むるに如かず」と。菩薩、答へて言はく、「汝、我が一心の誓を聽け」と、

假令熱鐵輪、我頭上に在りて轉ずとも
一心に佛道を求めて、終に悔恨を懐かず
若し使ひ三惡道、人中の無量の苦有りとも
一心に佛道を求めて、終に此が爲に轉ぜざらん

化の婆羅門、言はく、「布施主、善い哉、善い哉、佛を求むること是の如し」と。便ち偈もて讃じて言はく、

汝は精進の力大にして、一切を慈愍し
智慧罣礙無く、佛と成ること久しからざるに在り

是時、天は衆華を雨らして、菩薩を供養す、諸の淨居天の瓶水を閉づる者は、即ち隱れて現れず。菩薩は是時、婆羅門上座の前に至り、金瓶を以て、水を行れども、水は閉ぢて下らず、衆人疑ひ怪むらく、「此種種の大施は一切具足せり、布施主の人の功德亦大なり。今何を以ての故に瓶水下らざる」と。菩薩自ら念ずらく、「此れ他事に非ず、將に我が心、清淨なること無からんとするや、施物具足せざること無きことを得るや、何を以てか此を致す」と。自ら祠經十六種の書を觀ずるに、清淨にして瑕無し、是時、諸天は、菩薩に語げて言はく、「汝、疑ひ悔ゆること莫れ、汝は辦ぜざること無し。是諸の婆羅門は、惡邪にして不淨なるが故なり」と。即ち偈を說いて言はく、

是人の邪見の網、煩惱は正智を破し
諸の清淨戒を離れて、唐しく苦んで異道に墮す

是を以ての故に水閉ぢて下らずと。是の如く語り已りて、忽然として現せず。爾時、六欲天は、種種の光明を放ちて諸の衆會を照し、菩薩に語り、偈を說いて言はく、

邪惡海中の行は、汝が正道に順ぜず
諸の施を受くる人の中に、汝が如き者有ること無し

是語を說き已りて、忽然として現せず。是時、菩薩は、此偈を說くを聞いて、自ら念ず

らん。會中實に自ら我と等しき者有ること無し、水閉ぢて下らざるは、其れ將に亦爾なら
らん」と。即ち偈を説いて言はく、

若し十方天地の中に、諸の好人、清淨なる者有らば
我今歸命し、稽首し禮したてまつる
右の手に瓶を執り左手を灌いで
自ら願を立つ、我一人應に是の如きの大布施を受くべし

是時、瓶の水は、踊りて虚空に在り、上より來下して、其左の手に灌ぐ。是時、婆羅門主は、是感應を見て、心に恭敬を生じ、偈を説いて言はく、

大婆羅門主、清き琉璃色の水
上より流注し下り、來りて汝が手中に墮つ

是時、大婆羅門衆は、恭敬の心を生じ、手を合せ禮を作し、菩薩に歸命す。菩薩は是時、此偈を説いて言はく、

今我布施する所は、三界の福を求めず
諸の衆生の爲の故に、以用て佛道を求む

此偈を説き已れば、一切の大地山川樹木は、皆六返震動せり。韋羅摩は本謂く、「此衆は應に供養を受くべし、故に與ふ」と。既に此衆に受くるに堪ふる者無きことを知り、今は憐愍を以ての故に、所受の物を以て之に施す。是の如く、種種の檀は、本、因緣より生ず。

是中に、應に廣く說くべし。是を外の布施と爲す。云何が內の布施と名くる。身命を惜まず、諸の衆生に施す。本生因緣の說の如し。釋迦文佛、本、菩薩と爲り、大國の王と爲りたまひし時、世に佛無く、法無く、比丘僧無かりき、是王は四もに出でて、佛法を求索し、了に得ること能はず。時に一の婆羅門有り、言はく、「我は佛の偈を知れり、我を供養せば、當に以て汝に與ふべし」と、王即ち問うて曰はく、「何等の供養をか求むる」と。答へて言はく、「汝、能く汝が身上に就いて、肉を破りて燈炷と爲し、我を供養せば、當に以て汝に與ふべし」と。王心に念じて言はく、「今我が此身は、危く、脆く、不淨なり。世世苦を受くること復數ふべからず、未だ曾て法の爲にせず、今始めて用ふることを得、心大に惜まざるなり」と。是の如く念じ已りて、旃陀羅を喚び、遍く身上を剜きて以て燈炷を作り、白氎を以て肉に纏ひ、酥油を之に灌いで、一時に遍く燒き、擧身の火燃ゆ、乃ち一偈を與ふ。又復、釋迦文佛は、本、一の鴿と作りて雪山の中に在したまへり。時に大雨雪有り、一の人有りて道を失ひ、窮厄し辛苦し、飢寒丼に至り、命須臾に在り。鴿は此人を見て、即ち飛んで火を求め、其が爲に薪を聚めて之を燃やし、又復身を以て火に投じて、此飢人に施す。是の如き等、頭目髓腦を衆生に給施すること種種有り。本生因緣[illegible]此中に應に廣く說くべし。是の如き等の種種、是を內の布施と名く。是の如く、內外の布施は無量なり。是を檀相と名く。

【三】次に法施を明す。

大智度論釋初品中檀波羅蜜法施義第二十

（一〇上）問うて曰はく、「云何が法の布施と名くる。」答へて曰はく、「有人言はく、『常に好語を以て、利益する所有り、是を法施と爲す』と。復次に、有人言はく、『諸の佛語、妙善の法を以て、人の爲に演說する、是を法施と爲す』と。復次に、有人言はく、『三種の法を以て人に教ふ。一には修妬路、二には毘尼、三には阿毘曇、是を法施と爲す』と。復次に、有人言はく、『四種の法藏を以て人に教ふ。一には修妬路藏、二には毘尼藏、三には阿毘曇藏、四には雜藏、是を法施と爲す』と。復次に、有人言はく、『略して說くに二種の法を以て人に教ふ。一には聲聞法、二には摩訶衍法、是を法施と爲す』と。」問うて曰はく、「提婆達、呵多等の如きも、亦三藏、四藏、聲聞法、摩訶衍法を以て人に教ふ、而も身は地獄に入れり、是事云何。」答へて曰はく、「提婆達は邪見の罪多く、呵多は妄語の罪多し。是れ道の爲に清淨の法施に非ず、但名利と恭敬と供養とを求む。惡心の罪の故に、提婆達は生きながら地獄に入り、呵多は死して惡道に墮ちたり。復次に、但言說のみを名けて、法施と爲すに非ず、常に淨心、善心を以て一切に教ふ、是を法施と名く。譬へば財施の如きは、善心を以てせざれば、福德と名けず、法施も亦爾り。淨心善思を以てせざれば、則ち法施に非ず。復次に、說法者は、能く淨心善思を以て三寶を讚歎し、罪福の門を開き、四眞諦

を示し、衆生を敎化して佛道に入らしむ、是を眞淨の法施と爲す。復次に、略して法を說くに二種有り。一には衆生を惱まさず、善心にして慈愍す、是を佛道の因緣と爲す。二には諸法の眞空を觀知す、是を涅槃道の因緣と爲す。大衆の中に在りて慈哀の心を興し、此二法を說き、名聞利養の恭敬の爲にせず、是を淸淨の佛道の法施と爲す。說くが如くんば阿輸伽王は一日に八萬の佛圖を作り、未だ道を見ずと雖も、佛法の中に於て少しく信樂有り。日日に諸の比丘を請じ、宮に入れて供養し、日日次第に法師を留めて法を說かしむ。一の三藏有り、年少の法師にして聰明端正なり。次に應に說法すべく、王の邊の坐に在り。口に異香有り、王甚だ疑怪み謂へらく、爲れ端しからず、香氣を以て王宮の人を動かさんと欲すと。比丘に語りて言はく、口中に何等のものかある、口を開き、之を看せしめよ」と。即ち爲に口を開くに、了に所有無し。水を與へて漱がしむるに、香氣故の如し。王問はく、「大德、新に此香有るや、舊より之有るや」と、比丘答へて言はく、「此の如きは久しく有り、適今あるに非ず」と。又問はく、「此有ること久しきや」と。比丘、偈を以て答へて言はく、

　迦葉佛の時に、此香法を集む
　此の如きは久しくして久しく、常に新に出すが如し

王の言はく、「大德、略說にては未だ解せず、我爲に廣く演べたまへ」と。答へて曰はく、「王、當に一心に、善く我說を聽くべし。我昔、迦葉佛の法中に於て、說法の比丘と作り、

常に大衆の中に在りて、歡喜して演說し、迦葉世尊の無量の功德、諸法の實相、無量の法門を慇懃に讚歎して、一切を教誨せり。是より以來、常に妙香有りて口中より出で、世世に絶えず、恆に今日の如し」と。此偈を說く、

　草木の諸の華香に、此香氣は超絶して
　能く一切の心を悦ばしめ、世世に常に滅せず

時に國王は、愧喜交集り、比丘に向して言はく「未曾有なり、說法の功德、大果乃ち爾なり」と。比丘言はく「此を名けて華と爲す、未だ是れ果にあらず」と。王言はく「其果は云何、願くば爲に演說したまへ」と。答へて言はく「果は略して說くに十有り、王、諦に之を聽きたまへ」と。即ち爲に偈を說く、

　大名聞と端政と、得樂と及び恭敬と
　威光は日月の如くなると、一切の爲に愛せらるると
　辯才有ると大智有ると、能く一切の結を盡すと
　苦滅して涅槃を得ると、是の如きを名けて十と爲す

王言はく「大德、佛の功德を讚じて、云何が是の如きの果報を得る」と。爾時、比丘、偈を以て答へて曰はく、

　佛の諸の功德を讚じて、一切をして普く聞かしむ
　此果報を以ての故に、而も大名聞を得るなり。

佛の實の功德を讚じて、一切をして歡喜せしむ
此功德を以ての故に、世世常に端正なり
人の爲に罪福を說いて、安樂の所を得しむ
此功德を以て、樂を受け常に歡豫す
佛の功德力を讚じて、一切の心をして伏せしむ
此功德を以ての故に、常に恭敬の報を獲るなり
說法の燈を顯現して、諸の衆生を照悟す
此功德を以ての故に、威光は日の曜くが如し
種種に佛の德を讚じて、能く一切を悅ばしむ
此功德を以ての故に、常に人の爲に愛せらる
巧言もて佛德の無量にして、窮已無きを讚ず
此功德を以ての故に、辯才は盡くべからず
佛の諸の妙法には、一切過ぐる者無しと讚ず
此功德を以ての故に、大智慧にして清淨なり
佛の功德を讚ずる時、人の煩惱をして薄からしむ
此功德を以ての故に、結盡きて諸の垢滅す
二種の結の盡くるが故に、涅槃の身を已に證すること

【二】財施と法施との優劣を明す。

【根、力、覺、道】五根、五力、七覺支、八聖道のこと

譬へば大雨を澍げば、火盡きて餘熱無きが如し

重ねて王に告げて言はく「若し未だ悟らざる有らば、今は是れ問ふべき時なり。當に智箭を以て、汝が疑軍を破るべし」と。王白さく、「法師、我は心に悦び、悟りて疑ふ所無し。大德福の人は、善能く佛を讃ず」と、是の如き等の種種の因緣もて、法を說いて人を度す、名けて法施と爲す。

問うて曰はく「財施と法施とは、何をか勝たりと爲す」。答へて曰はく、「佛の言ふ所の如くんば、二施の中、法施を勝れたりと爲す。所以は何、財施の果報は欲界の中に在れども、法施の果報は或は三界に在り、或は三界を出づればなり。

復次に、財施は量有れども、法施は量無く、財施は盡くること有れども、法施は盡くること無し。譬へば、薪を以て火に益せば、其明轉た多きが如し。復次に、財施の報は、淨少くして垢多く、法施の報は、垢少くして淨多し。復次に、若し大施を作すには、必ず衆力を待つ、法施は心より出でて、他心を待たず。復次に、財施は能く四大、諸根をして増長せしめ、法施は能く無漏の根、力、覺、道をして具足せしむ。復次に、財施の法は佛有るも、佛無きも、世間に常に有り。法施の如きは、唯佛有るの世にのみ、乃ち當に有るべし。是故に、當に知るべし、法施は甚だ難きことを。云何が難しと爲す。乃ち有相の辟支佛に至るも、說法すること能はず、直行、乞食、飛騰、變化して、以て人を度す。復次に、法施の中より能く財施を出生し、諸の聲聞、辟支佛、菩薩に及び、佛に及ぶ。復次に、法施

は能く諸法の有漏なるか、無漏法なるか、色法なるか、無色法なるか、有爲なるか、無爲法なるか、善なるか、不善なるか、無記法なるか、常法なるか、無常法なるか、有法なるか、無法なるか、一切諸法の實相は清淨にして、破すべからざるか、壞すべからざるかを分別す。是の如き等の法は略說すれば則ち八萬四千の法藏にして、廣說すれば則ち無量なり、是の如き等の種種は、皆法施に從うて分別し了知す。是を以ての故に法施を勝れたりと爲す。是二施の和合を名けて檀と爲す。是二施を行じて、佛と作らんことを願求すれば、則ち能く人をして佛道に至らしむ。何に況んや其餘をや。問うて曰はく、四種の捨を名けて檀となす。謂ゆる、財捨と、法捨と、無畏捨と、煩惱捨となり。此中、何を以てか二種の捨を說かざる。』答へて曰はく、『無畏捨は尸羅と別無きが故に說かず、般若有るが故に煩惱捨を說かず、若し六波羅蜜を說かざれば、則ち應に具に四捨を說くべし。』

大智度論卷第十一

大智度論釋初品中檀波羅蜜法施之餘　卷第十二

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什詔を奉じて譯す

（一）問うて曰はく、「云何が檀波羅蜜の滿と名くる。」答へて曰はく、「檀の義は上に說くが如し。波羅蜜は、是は、布施の河を渡りて、彼岸に到るを得、と名く。」

（二）問うて曰はく、「云何が、彼岸に到らず、と名くる。」答へて曰はく、『譬へば河を渡るに、未だ到らずして還るを名けて、彼岸に到らず、と爲すが如し。舍利弗の如きは、六十劫の中に於て菩薩の道を行じ、布施の河を渡らんと欲す、時に乞人有り、來りて其眼を乞ふ。舍利弗言はく「眼は任ずる所無し、何を以てか之を索むる。若し我身、及び財物を須ひなば、當に以て相與ふべし」と。答へて曰はく「汝が身及以び財物を須ひず、唯眼を得んと欲す。若し汝實に檀を行ぜば、眼を以て與へられよ」と。爾時、舍利弗は、一眼を出して之を與ふ。乞者は眼を得て、舍利弗の前に於て之を嗅ぎ、臭を嫌りて唾して地に棄て、又脚を以て蹋む。舍利弗思惟して言はく「此の如きの弊人等は、度すべきこと難し、眼は實に用無きに、强ひて之を索め、既に得れば而も棄て、又脚を以て蹋む、何んが弊なるの甚しき、此の如きの人輩は度すべからず、自ら調へて、早く生死を脫せんには如かず」と。

【一】初に檀那波羅蜜の滿に就いて

【二】次に到彼岸の義に就いて明す。

思惟是に已りて、菩薩の道に於て退き、小乘に廻向す。是を、彼岸に到らず、と名く。若し能く直に進んで退かず、佛道を成辦せば、彼岸に到る、と名く。復次に、事に於て成辦するを亦、彼岸に到る、と名く。天竺の俗法は凡て事を造りて成辦せば皆彼岸に到ると言ふ 復次に、此岸を慳貪と名け、檀を河中と名け、彼岸を佛道と名く。復次に、有無の見を此岸と名け、有無の見を破する智慧を彼岸と名け、勤めて布施を修する、是を河中と名く。復次に、檀に二種有り、一には魔の檀、二には佛の檀なり。若し結使の賊の爲に奪はれ、憂惱し怖畏するは、是を魔の檀と爲し、名けて此岸と曰ふ。若し清淨の布施有りて、結使の賊無く、怖畏する所無く、佛道に至ることを得る、是を佛の檀と爲し、名けて彼岸に到ると曰ふ。是を波羅蜜と爲す。佛、『毒蛇喩經』の中に說きたまふが如く、「人有り、罪を王に得、王は一の篋を掌護せしむ。篋の中に四の毒蛇有り、王は罪人に勅して看視し養育せしむ。此人思惟すらく、「四の蛇は近き難し、近けば則ち人を害す、一すら猶養ひ叵し、況んや四をや」と。便ち篋を棄てて走れば、王五人をして、刀を拔いて之を追はしむ。復一人有り、口には附順すと言ひつつ、心には中傷を欲せり。而も之に語りて言はく、「之を養ふに理を以てせば、此亦苦無し」と、其人は之を覺り、馳走して命を逃れ、一空聚に至る。一の善人有り、方便して之に語る、「此聚は空なりと雖も、是れ賊の所止する處なり。汝今此に住せば、必ず賊の爲に害せられん、愼んで住すること勿れ」と。是に於て復去りて一大河に至る。河の彼岸は即ち是れ異國なり。其國は安樂坦然清淨にして、諸の患

難無し。是に於て衆の草木を集め、縛して以て栰と爲して進み、手足を以て力を竭し、渡らんことを求む。既に彼岸に到れば安樂にして患無し。王とは魔王、篋とは人身、四の毒蛇とは四大、五の拔刀の賊とは五陰、一人の口善にして、心惡なるは是れ染著、空聚は是れ六情なり。賊は是れ六塵、一人愍んで之に語るは是を善師と爲し、大河は是れ愛、栰は是れ八正道、手足もて勤めて渡るは是れ精進、此岸は是れ世間、彼岸は是れ涅槃、度るは漏の盡きたる阿羅漢なり。菩薩の法の中も亦是の如し。若し施に三の礙有り、我と彼の施す所を受くる者と財となり。是を魔の境界に墮し、未だ衆難を離れずと爲す。菩薩の如きは、布施するに三種、清淨にして此三礙無く、諸佛の爲に讃せらる。是を檀波羅蜜と名け、是を以ての故に、彼岸に到る、と名く。此六波羅蜜は、能く人をして慳貪等の煩惱、染著の大海を度り、彼岸に到らしむ。是を以ての故に波羅蜜と名く。問うて曰はく、「阿羅漢、辟支佛も亦能く彼岸に到る、何を以てか波羅蜜と名けざる。」答へて曰はく、「阿羅漢、辟支佛の彼岸に度ると、佛の彼岸に度るとは、名は同じくして實は異れり。彼は生死を以て此岸と爲し、涅槃を彼岸と爲す。而も檀の彼岸に度ること能はず。所以は何、一切の物、一切の時、一切の種を以て布施すること能はず。設ひ能く布施するも亦大心無く、或は無記心を以てし、或は有漏の善心、或は無漏心の施なるも大悲心無く能く一切衆生の爲に施すこと能はざるなり。菩薩の施は、布施の不生、不滅、無漏、無爲を知ること、涅槃の相の如く、一切衆生の爲の故に施す、是を檀波羅蜜と名く。」復次に、有人言はく、「一

【三】次に具足し滿つの義に就いて明す。

切の物、一切の種、內外の物、盡く以て布施して果報を求めず、是の如きの布施を檀波羅蜜と名く」と。復次に、盡すべからざるが故に、檀波羅蜜と名く。所以は何に、施す所の物は、畢竟空にして涅槃の相の如しと知り、是心を以て衆生に施せばなり。是故に施の報盡すべからざるを檀波羅蜜と名く。五通仙人の如きは、好き寳物を以て藏して石中に著け、此寳を護らんと欲して、金剛を磨きて之に塗り、破るべからざらしむ。菩薩の布施も亦復是の如し、涅槃實相の智慧を以て布施を磨き塗り、盡すべからざらしむ。復次に、菩薩は一切衆生の爲の故に布施す、衆生の數は盡すべからざるが故に、布施も亦盡すべからず。復次に、菩薩は佛法の爲の故に布施す、佛法は無量無邊なれば、布施も亦無量無邊なり。是を以ての故に阿羅漢、辟支佛は、倶に彼岸に到ると雖も、波羅蜜と名けず。

（三）問うて曰はく、「云何が、具足し滿つ、と名くる。」答へて曰はく、「先に說くが如し、菩薩は能く一切に布施し、內外、大小、多少、麁細、著不著、用不用、是の如き等の種種の物を、一切能く捨て、心に惜む所無く、等しく一切衆生に與へて、是觀を作さず、大人には與ふべく、小人には與ふべからず、出家人には與ふべく、出家せざる人には與ふべからず、人には與ふべく、禽獸には與ふべからずと。一切衆生に於て、平等の心もて施し、施して報を求めず、又實相を施すことを得。是を、具足して滿つ、と名く。亦時を觀せず、晝と無く、夜と無く、冬と無く、夏と無く、吉と無く、衰と無く、一切時に常に等しく施して、心に悔い惜むこと無く、乃至頭目髓腦を施して惜むこと無し。是を具足して滿つ、

と爲す。復次に、有人言はく、「菩薩は初發心より、乃ち菩提樹下の三十四心に至るまで、是中間に於て名けて布施を具足して滿つと爲す」と。復次に、七住の菩薩は、一切諸法の實相の智慧を得、是時、佛土を莊嚴し、衆生を教化し、諸佛を供養し、大神通を得、能く一身を分ちて無數の身と作し、一一の身より皆七寶の華香幡蓋を雨らし、大燈を化作すること須彌山の如く、十方の佛及び菩薩僧を供養す。復妙音を以て佛德を讚頌し、禮拜し、供養し、恭敬して將に迎へんとす。復次に、是菩薩は、一切十方無量の餓鬼國の中に於て、種種の飮食、衣被を雨らし、其をして充滿せしめ、滿足を得已りて、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。復畜生道の中に至り、其をして自ら善く相害するの意無からしめ、其畏怖を除き、其須ふる所に隨ひて各充足せしめ、滿足を得已りて、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。地獄の無量の苦の中に於ては、能く地獄の火を滅し、湯を冷かならしめ、罪息み、心善にして、其飢渴を除き、天上人中に生ずることを得しむ。此因緣を以ての故に、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。若し十方の人の貧窮の者には、之に給するに財を以てし、富貴の者には、施すに異味異色を以てし、其をして歡喜せしむ。此因緣を以ての故に、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。若し欲天の中に至りては、其をして天上の欲樂を除却せしめ、施すに妙寶法樂を以てし、其をして歡喜せしむ。此因緣を以ての故に、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。若し色天の中に至りては、其樂に著するを除き、菩薩の禪法を以て之を娛樂せしむ、此因緣を以ての故に、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。是の

【四】次に菩薩の二種身に檀波羅蜜を具足するに就いて、中に三種の施を説く。

【須提拏】スダーナ（Sudana）好愛太子と譯す。

【薩婆達】サルヴダー（Sarvada）一切施と譯す。

如くして、乃ち十住に至る。是を、檀波羅蜜を具足し滿つ、と名く。

復次に、菩薩に二種の身有り。一には結業生身、二には法身なり。是の二種の身中に檀波羅蜜を滿す。是を、檀波羅蜜を具足すと名く。問うて曰はく、「云何が、結業生身もて檀波羅蜜を滿す、と名くる。」答へて曰はく、『未だ法身を得ず、結使未だ盡きず、能く一切の寶物、頭目、髓腦、國財、妻子、内外の所有を以て、盡く以て布施し、心に動轉せず。須提拏太子【秦に好愛と言ふ】の如きは、其の二子を以て婆羅門に布施し、次に妻を以て施して、其の心轉ぜざりき。又薩婆達王【秦に一切施と言ふ】の如きは、敵國の爲に滅され、身を窮林に竄す、遠國の婆羅門有り、來りて、已に從うて乞はんと欲す。自ら國破れ、家亡び、一身藏竄し、其辛苦を愍むを以ての故に、遠くより來れども、而も所得無きを見て、婆羅門に語げて言はく、「我は是れ薩婆達王なり、新王、人を募りて我を求むること甚だ重し」と。即時に自ら縛して、身を以て之に施し、新王に送り與へて、大いに財物を得、亦月光太子の如きは、出で行きて遊觀す。癩人之を見て、車を要して白して言さく、「我身は重く病んで辛苦し懊惱す、太子は嬉遊して獨り自ら歡ぶや。大慈愍念して、願くば救い療せられよ」と。太子は之を聞き、以て諸醫に問ふ。醫の言はく、「當に須く生れてより長大にして、瞋ること無きの人の血髓を須ひて塗り、而して之を飲ましむべし、是の如くせば愈ゆべし」と。太子念じて言はく、「設ひ此人有りとも、生を貪り壽を惜まん、何んが得べけん。我身を除くより得べき處無し」と、即ち旃陀羅に命じて、身の肉を除き、骨を

【迦頻闍羅】カピンヂャラ(Kapiñjala)雉のこと。
【必鉢羅】ピッパラ(Pippala)菩提樹のこと。

破りて髓を出し、以て旃陀羅人に塗り、血を以て之に飲ましむ。是の如き等の種種に、身及び妻子を施して、而も惜むこと無く、草木を棄つるが如し。施す所の物を觀て、緣に從うて有ることを知る。其實を推求するに、都て得る所無く、一切清淨にして涅槃の相の如くし、乃ち無生法忍を得るに至る。是を結使生身に檀波羅蜜を行ずと爲す。云何が法身の菩薩は檀波羅蜜を行ずる。菩薩は末後の肉身に無生法忍を得、肉身を捨てて法身を得。十方の六道の中に於て身を變じ、應適して以て衆生を化し、種種の珍寶、衣服、飲食を一切に給施し、又頭目、髓腦、國財、妻子、內外の所有を以て盡く以て布施す。譬へば釋迦文佛の如きは、曾て六牙の白象と爲る。獵者便を伺ひ、袈裟を以て之を射る。諸象競ひ至り、來りて獵者を蹈み殺さんと欲す。白象は身を以て之を捍り、其人を擁護し、之を愍むこと子の如し。諭して群象を遣り、徐に獵人に問はく、「何故に我を射る」と。答へて曰はく、「我汝が牙を須む」と。即時に六牙を以て、石孔の中に內るるに、血肉俱に出づ。鼻を以て牙を舉げ、獵者に授與す。白象の身なりと雖も、心を用ふること是の如し。當に此象は、畜生の行報に非ざるを知るべし。阿羅漢の法の中には、都て此心無し。當に此を法身の菩薩と爲すことを知るべし。有時、閻浮提の人は、耆舊有德を恭敬するを知らず、言を以て之を化するに未だ得度すべからず。是時、菩薩は自ら其身を變じて、迦頻闍羅鳥と作る。此鳥に二の親友有り。一は大象、二は獮猴にして、共に必鉢羅樹の下に住せり。自ら相問うて言はく、「我等は知らず、誰をか長と爲すべきぞ」と。象の言はく、「我昔、此

樹の我腹の下に在るを見る、今大なること是の如し。此を以て之を推すに、我應に長たるべし」と。獼猴言はく「我曾て地に蹲まり手もて樹頭を挽く、是を以て之を推すに、我應に長たるべし」と。鳥言はく「我必鉢羅樹の中に於て、此樹の果を食するに、子は糞に隨うて出で、此樹生ずることを得。是を以て之を推すに、我應に最も長たるべし」と。象復說いて言はく「先生、宿舊を禮して、應に供養すべし」と。卽時に、大象は背に獼猴を負ひ、鳥は猴の上に在りて周遊して行く、一切の禽獸は見て之に問はく「何を以て此の如くなる」と。答へて曰はく「此を以て長老を恭敬し、供養す」と。禽獸は化を受け、皆、禮敬を行じて民田を侵さず、物の命を害せず。衆人は疑怪らく、一切の禽獸復害を爲さずと。獵師林に入りて見るに、象は獼猴を負ひ、獼猴は鳥を戴き敬を行じ、物を化し、物は皆善を修す。傳へて國人に告ぐ、人各慶して曰はく「時將に太平ならんとす」と。鳥獸にして而も仁有り。人も亦之に效うて、皆禮敬を行ぜん。古より今に及で化を萬世に流す。當に知るべし、是を法身の菩薩と爲す。復次に、法身の菩薩は一時の頃に、化して無數の身と作り、十方の諸佛を供養し、一時に能く無量の財寶を化して衆生に給足し、能く一切の上中下の聲に隨うて、一時の頃に普く爲に法を說き、乃至佛、樹下に坐す。是の如き等の種種を名けて、法身の菩薩の、檀波羅蜜の滿を行ずと爲す。復次に、檀に三種有り、一には物施、二には供養恭敬の施、三には法施なり。云何が物施なる、珍寶、衣食、頭目、髓腦、是の如き等の一切內外の所有、盡く以て布施する、是を物施と名く。恭敬施とは、

【四等心】慈、悲、喜、捨の四無量心のこと。

【念佛三昧】佛の相好莊嚴を觀念し、その觀成熟して周遍法界の理法身を觀るに至る、事理の定善觀をいふ。

【五】次に捨つる所無きの法を具足すといふに就いて。

信心清淨にして恭敬、禮拜、將送、迎逆、讃遶、供養する、是の如き等の種種を名けて恭敬施と爲す。法施とは、道德の爲の故に語言論議し、誦讀講說して疑を除き、問答し、人に五戒を授く。是の如き等の種種を佛道の爲の故に施す、是を法施と名く。是三種の施滿つ、是を檀波羅蜜の滿と名く。復次に、三事の因緣は檀を生ず。一には信心清淨、二には財物、三には福田なり。心に三種有り、若は憐愍、若は恭敬、若は憐愍恭敬なり。貧窮下賤及び諸の畜生に施す、是を憐愍施と爲し、佛、及び諸の法身の菩薩等に施す、是を恭敬施と爲し、諸の老病貧乏なる阿羅漢と辟支佛とに施す、是を恭敬憐愍施と爲す。施物淸淨にして、盜に非ず劫に非ず、時を以て施して、名譽を求めず、利養を求めず、或時は心に從うて大いに福德を得、或は福田に從うて大いに功德を得、或は妙物に從うて大いに功德を得。第一は心に從ふ、四等心、念佛三昧の如く、身を以て虎に施す。是の如きを名けて、心に從うて大いに功德を得と爲す。福田に二種有り。一には憐愍福田、二には恭敬福田なり。憐愍福田は能く憐愍の心を生じ、恭敬福田は能く恭敬の心を生ず。阿輸伽王（秦に無憂と言ふ）の土を以て佛に上るが如し。復次に、物施の中に一の女人の如きは、酒に醉ひ沒心して、誤りて七寶の瓔珞を以て、迦葉佛の塔に布施し、福德を以ての故に三十三天に生る。是の如きの種種を名けて物施と爲す。

問うて曰はく、檀を捨財と名く。何を以てか捨つる所無きの法を具足すと言ふ。答へて曰はく、檀に二種有り、一には出世間、二には不出世間なり。今出世間の檀の無相なるを

【六八】次に財と施と受者との三事得べからずといふに就いて、種種因縁和合の故に有なるも本來空にして不可得、亦麁細といふも相待に過ぎず、美醜といふも畢竟心の所作にすぎざるを明す。

說く、無相の故に捨つる所無し、是故に捨つる所無きの法を具足すと言ふ。復次に、財物は得べからざるが故に、名けて捨つる所無しと爲す。是物の未來と過去とは空なり、現在の分別には一定の法無し。是を以ての故に捨つる所無しと言ふ。復次に、行者財を捨つる時を以て、心に念ずらく、此施は大いに功德有りと。是に倚りて、憍慢、愛結等を生ず。是を以ての故に捨つる所無しと言ふ。捨つる所無きを以ての故に憍慢無し、憍慢無きが故に愛結等生ぜず。復次に、施者に二種有り一には世間の人、二には出世間の人なり。世間の人は能く財を捨て、能く施を捨てず。出世間の人は能く財を捨て、能く施を捨つ。何を以ての故に、財物施心倶に得べからざるが故なり。是を以ての故に捨つる所無きの法を具足すと言ふ。」

(六)復次に、檀波羅蜜の中に、財と施と受者との三事、得べからずと言ふ。問うて曰はく、『三事和合するが故に名けて檀と爲す。今三事得べからずと言ふ、云何が檀波羅蜜を具足し滿つと名くる。今は財有り、施有り、受者有り、云何が三事得べからざる。施す所の疊の實有なるが如し。何を以ての故に、疊に名有れば則ち疊の法有り、疊の法無くんば亦疊の名無し。名有るを以ての故に、應に實に疊有るべし。復次に、疊に長有り、短有り、麁細、白、黑、黃、赤有り、因有り、緣有り、作有り、破有り、果報有り、法に隨うて心を生ず。十尺を長と爲し、五尺を短と爲し、縷の大なるを麁と爲し、縷の小なるを細と爲す。染むるに隨うて色有り、縷有るを因と爲し、織る具を緣と爲す。是因緣、和合の故に疊と爲る。人功を作と爲し、人の毀つを破と爲し、寒暑を御ぎ、身體を蔽ふを果報と

【朱利】(Cauri)チヤウリ 賊と譯す。

名く。人之を得れば大いに喜び、之を失へば大いに憂ふ。之を以て施す、故に福を得て道を助く。若くは盜し、若くは劫し、之を都市に戮せば、死して地獄に入る。是の如き等の種種の因縁有るが故に、此疊有ることを知る、是を疊法と名く。云何が、施物は得べからず、と言ふ。答へて曰はく、汝は、名有るが故に是事有り、と言ふも、然らず。何を以てか之を知る。名に二種有り。不實の名は、一草有り、朱利（朱利は秦に賊と言ふなり）と名くるが如し。草は亦盜せず、劫せず、實に賊に非ず、而も名けて賊と爲す。又、兎角、龜毛の如きも、亦但名のみ有りて實無し。疊は兎角龜毛の如く無ならずと雖も、然も因縁の會するが故に有り、因縁散ずるが故に無し。林の如き、軍の如きは是れ皆名有りて實無し。譬へば木人は人の名有りと雖も、其人法は求むべからざるが如し。疊の中に名有りと雖も、亦疊の眞實を求むべからず。疊は能く人の心念の因縁を生じ、之を得れば心に喜び、之を失へば便ち憂ふ。是を念の因縁と爲す。心の生ずるには二の因縁有り、實より生ずる有り、不實より生ずる有り。夢中に見る所の如き、水中の月の如き、夜に杌樹を見て、謂ひて人と爲すが如き、是の如きは、不實の中より能く心をして生ぜしむ、と名く。此緣は不定なり、心生じて有るが故に、便ち是有りと言ふべからず。若し心の生ずるは因縁の故に有り、更に實有を求むべからず。眼に水中の月を見て、心生じて是を月と謂ふが如し。若し心に從ひて便ち是月を生ぜば、則ち復眞の月無し。復次に有に三種有り、一には相待有、二には假名有、三には法有なり。相待とは、長短、彼此等の如し。實には長短無く、亦彼此

【極微】色法を最微の點まで分割したるもの。

無し。相待を以ての故に名のみ有り。長は短に因りて有り、短は亦長に因る。彼は亦此に因り、此は亦彼に因る、若し物東に在れば、則ち以て西と爲し、西に在れば則ち以て東と爲す。一物未だ異らず、而も東西の別有り。此れ皆名有りて實無きなり。是の如き等を名けて相待有と爲す。是中に實法無く、色、香、味、觸等の如くならず。假名有とは、酪の如きは色、香、味、觸の因事有り、因縁合するが故に、假に名けて酪と爲す。有なりと雖も同じからず。因縁の法は、有にして無なりと雖も、亦兎角龜毛の無なるが如くならず。但因縁合するを以ての故に假に有と名く、酪疊も亦是の如し。復次に、極微の色、香、味、觸有り、故に毛分有り、毛分の因縁の故に毛有り、毛の因縁の故に毳有り、毳の因縁の故に縷有り、縷の因縁の故に疊有り、疊の因縁の故に衣有り、若し極微の色、香、味、觸の因縁無くんば亦毛分無し、毛分無きが故に亦毛無く、毛無きが故に亦毳無く、毳無きが故に亦縷無く、縷無きが故に亦疊無く、疊無きが故に亦衣無きなり。問うて曰はく、亦必ずしも一切の物は、皆因縁の和合によるが故に有なるにあらず。微塵の如きは至りて細なるが故に分無し、分無きが故に和合無し。疊は麁なるが故に破すべきも、微塵の中には分無し、云何が破すべけん。』答へて曰はく、『至りて微なるも實無く、彊ひて之が名と爲す。何を以ての故に。麁細は相對たり、麁に因るが故に細有り、是細にも亦應に細有るべければなり。復次に、若し極微の色有れば則ち十方の分有り。若し十方の分有れば、是を名けて極微と爲さず。若し十方の分無ければ、則ち名けて色と爲さず。復次に、若し極微有れば、

【尼師檀】ニシーダナ Nisīdana、坐具と譯す。

則ち應に虛空の分齊有るべく、若し分有れば則ち極微と名けず。復次に、若し極微有れば是中に色香味觸有りて分を作す。色香味觸の分を作さば、是を極微と名けず。是を以て微塵を推求するに則ち得べからず。經に言へるが如し、色の若くは麁、若くは細、若しは內、若くは外を、總じて之を觀ずるに、無常、無我なり。微塵有りと言はずと。是を分破の空と名く。復空を觀ずること有り、是色は心に隨うて有り、坐禪人の如きは、色を觀ずるに或は地と作し、或は水と作し、或は火と作し、或は風と作し、或は青とし、或は黃とし、或は白とし、或は赤とし、或は都て空とす。十一切入の觀の如し。佛、耆闍崛山の中に在ししが如し、比丘僧と倶に王舍城に入り、道中に大水を見る。佛、水上に於て尼師壇を敷いて坐し、諸の比丘に告げたまはく、「若し比丘、禪に入れば心自在を得て、能く大水をして地と作らしめ、卽ち實の地と成す。何を以ての故に。是水の中には、地の分有るが故なり。是の如く、水、火、風、金、銀、種種の寶物も卽ち皆實と成す。何を以ての故に。是水中に皆其分有ればなり」と。復次に、一の美色の如き、婬人は之を見て以て淨妙と爲し、心に染著を生ず。不淨觀の人之を觀れば、種種の惡露れ、一の淨處無し。等しく婦なるも、之を見て妬み、瞋りて憎惡し、目に見んと欲せず、以て不淨と爲す。婬人は之を觀て樂と爲し、妬人は之を觀て苦と爲し、淨行の人は之を觀て得道し、無豫の人は之を觀て適莫する所無く、土木を見るが如くす。若し此美色實に淨ならば、四種の人の觀は皆應に淨を見るべく、若し實に不淨ならば、四種の人の觀は皆應に不淨なるべし。是を以ての故

【衆、入、界】五蘊、十二處、十八界のこと。

【七】次に我は不可得にして畢竟無我なるを明す。

に好醜は心に在りて、外に定まれること無きを知る。空を觀ずるも亦是の如し。復次に、是疊の中に十八空の相有り、故に之を觀ずれば便ち空なり。空なるが故に不可得なり。是くの如く、種種の因縁により、財物は空にして決定して不可得なり。云何が施人は不可得なる。疊の如きは、因縁和合の故に有り、分分に之を推すに疊は不可得なり。施者も亦是の如し、四大、虚空を圍むを名けて身と爲し、是身識の動作し、來往し、坐起するを、假に名けて人と爲す、分分に之を求むるに亦不可得なり。復次に、一切の衆、界、入の中に、我は不可得なり。我、不可得なるが故に、施人も不可得なり。何を以ての故に、我に種種の名字有り、人天、男女、施人、受人、苦を受くる人、樂を受くる人、畜生等なり。是は但名のみ有りて實法は不可得なり。問うて曰はく、『若し施者不可得ならば、云何が菩薩行りて、檀波羅蜜を行ずる。』答へて曰はく、『因縁和合の故に名字有り、屋の如く、車の如く實法は不可得なり。』

(七)問うて曰はく、『云何が我は不可得なる。』答へて曰はく、『上に、我聞けり、一時、の中に、已に説くが如し。今當に更に説くべし。佛、六識を説きたまふ。眼識及び眼識相應の法は、共に色を縁じて、屋、舍、城、廓、種種の諸名を縁ぜず、耳鼻舌身識も亦是の如し。意識及び意識相應の法は、眼を知り、色を知り、眼識を知り、乃至意を知り、法を知り、意識を知る。是識の縁ずる所の法は、皆空にして無我なり。生滅するの故なり、自在ならざるが故なり、無爲法の中に亦我を計せず、苦樂を受けざるが故なり。是中に若し頸

【身見】五蘊假和合の身に常一主宰の我ありと執し、又一切の事物を自の所有なりと計するの偏見をいふ。【習】煩惱の餘氣

以て我法有らば、應當に第七識有りて我を識るべし。今は爾らず、是を以ての故に無我なることを知る。問うて曰はく、何を以てか無我なることを識る、一切の人は、各各自身の中に我を生計し、他身の中に我を生ぜず。若し自身の中に我無く、而も妄に見て我と爲さば、他身の中の無我も、亦應に他身に於て、妄に見て我と爲すべし。復次に、若し內に我無くして、色と識と念念に生滅せば、云何が分別して、是色の青・黃・赤・白を知らん。復次に、若し我無くんば、今現在の人の識は、漸漸に生滅し、身命の斷ずる時は亦盡く。諸行の罪福は誰にか隨ひ、誰か受け、誰か苦樂を受け、誰か解脫する者ぞ。是の如き種種の因緣の故に、有我なることを知る。答へて曰はく、此は俱に難有り。若し他身に於て我を生計せば、復當に言ふべし、何を以てか自身の中に我を生計せざるやと。復次に、五衆の因緣より生ずるが故に、空にして我無し。無明の因緣より二十の身見を生ず、是我見は、自ら五陰に於て、相續して生ず。此五衆より緣生するを以ての故に、即ち此五衆を計して我と爲す、他身に在らず、其習を以ての故なり。復次に、若し神有らば彼は我有るべし。汝は未だ神の有無を了せずして、彼の我を問ふ。其れ猶人の兎角を問ふに、馬の角に似たりと答ふるが如し。馬の角、若し實に有らば、以て兎角を證すべし、馬の角すら猶未だ了せずして、以て兎角を合せんと欲す。復次に、自ら身に於て、我を生ずるが故に、便ち自ら神有りと謂ふ。汝、神は遍し、と言はば、應に他身を計して我と爲すべし。是を以ての故に、自身の中には、我の心を生じ計し、他身に於ては生せざるが故に、神有ると

ことを知る、と言ふべからず。復次に、有人は、他物の中に於て我心を生ず。外道の坐禪人の如きは、地一切入觀を用ふる時、地を見れば則ち是れ我、我は則ち是れ地なり。水火風空も亦是の如し。顚倒の故に他身の中に於て亦我を計す。復次に、有時は、他身に於て我を生ず。一人有り、使を受けて遠く行き、獨り空舍に宿するに、夜中に鬼有り、一の死人を擔ぎ來りて、其前に著く。復一鬼有り、逐ひ來りて前の鬼を瞋り罵る、「是死人は是れ我物なり、汝何を以てか擔ぎ來る」と。先の鬼の言はく、「是は我物なり、我自ら持ち來れり」と。後の鬼の言はく、「是死人は實に我擔ぎ來れり」と。二鬼各一手を提へて是を爭ふ。前の鬼の言はく、「此中に人有り、問ふべし」と。後の鬼は即ち問はく、「是死人は誰か擔ぎ來れる」と。是人、思惟すらく、「此二鬼は力大なり、若し實語するも、亦當に死すべく、若し妄語するも、亦當に死すべし、俱に死を免れず、何んぞ妄語を爲さん」と。告げて言はく、「前鬼擔ぎ來れり」と。後の鬼は大いに瞋り、人の手を捉へて、拔出して地に著き、前の鬼は死人の一臂を取り、之を拊でて即ち著く。是の如く、兩臂、兩脚、頭、脅、身を擧げて皆易ふ。是に於て、二鬼は共に易ふる所の人身を食し、口を拭ひて去る。其人思惟すらく、我父母の生ずる身は、眼のあたり二鬼食し盡せり。今、我此身は、盡く是れ他の肉なり。我は今定んで身有りと爲んや、身無しと爲んや。若し以て有りと爲せば、盡く是れ他の身なり。若し以て無しと爲せば、今現に身有りと。是の如く思惟し、其心迷悶すること、譬へば狂人の如し。明朝路を尋ねて去り、前の國土に到る。佛塔有り、衆僧に見え

【八】次に神我の實性も畢竟不可得なれば、事不可得と明す

て、餘事を論ぜず、但己の身有りと爲んや、無しと爲んや、と問ふ。諸の比丘問はく、「汝は是れ何人ぞや」と。答へて言はく、「我も亦自ら是れ人なるか、人に非るかを知らず」と。衆僧の爲に廣く上の事を説く。諸の比丘言はく、「此人は、自ら無我なることを知る、得度すべきこと易し」と。之に語りて言はく、「汝が身は、本より已來、恆に自ら無我なり、適今有るに非ざるなり。但四大和合するを以ての故に、計して我身と爲す、汝が舊身の如きは今と異なること無し」と。諸の比丘は之を度し、道の爲に諸の煩惱を斷じ、即ち阿羅漢を得たり。是を有と爲す時は、他身も亦計して我と爲す。或は有るを以ての故に我有りと謂ふべからず。復次に、是我の實性は決定して不可得なり。若くは常相、非常相、自在相、不自在相、作相、不作相、色相、非色相、是の如き等の種種は皆不可得なり。若し有相なれば則ち有法、無相なれば則ち無法なり。我は今無相なれば則ち我無きことを知る。若し我は是れ常ならば、殺罪有るべからず。何を以ての故に。身は殺すべくんば常に非ざるが故に、我は殺すべからずんば、常なるが故なり。

問うて曰はく、「我は常なるが故に殺すべからずと雖も、但身を殺せば則ち殺罪有り」と。答へて曰はく、「若し身を殺して殺罪有らば、毘尼の中に言はく、「自殺には殺罪無し、罪縁は他を惱し、他を益するより生ず」と。自ら身を供養し、自ら身を殺すが故に、罪有り福有るには非ず。是を以ての故に毘尼の中に言はく、「自ら身を殺すは、殺罪無く、愚癡、貪欲、瞋恚の咎有り」」と。若し神常ならば殺すべからず、生ずべからず。何を以ての故に、汝等

が法によれば神は常なり、一切五道の中に遍滿す、云何が死生有らん、死を、此處に失す、と名け、生を、彼處に出づ、と名く。是を以ての故に、神は常なり、と言ふことを得ず。若し神常ならば、亦應に苦樂を受けざるべし。何を以ての故に、苦來れば則ち憂ひ、樂至れば則ち喜ぶ。若し憂喜の爲に變ぜらるれば則ち常に非ず。若し常ならば應に虛空の如くして、雨も濕ほすこと能はず、熱も乾かすこと能はざるべし。亦今世後世無く、若し神常ならば亦して後世の生、今世の死有るべからず。若し神常ならば、則ち常に我見有りて涅槃を得べからず。若し神常ならば、則ち起ること無く、滅すること無く、忘失すること有るべからず。其れ神無く、識は無常なるを以ての故に、忘有り失有り。是故に神は常に非ず。是の如き等の種種の因緣により、神は常相に非ざることを知るべし。若し神は無常の相ならば、亦罪無く福無し。若し身無常ならば神も亦無常なり、二事俱に滅すれば則ち斷滅の邊に墮す。斷滅に墮すれば、則ち後世に到りて罪福を受くる者無し。若し斷滅して則ち涅槃を得ば、結を斷ずるを須ひず、亦後世の罪福の因緣を用ひざるなり。是の如き等の種種の因緣により、神は無常に非ざることを知るべし。若し神、自在の相、作の相ならば、則ち應に得んと欲する所に隨ひて皆得べし。今欲する所更に得ず、欲する所に非ずして更に得。若し神自在ならば、亦惡行を作して、畜生惡道の中に墮すること有るべからず。復次に、一切衆生は皆苦を樂はず、誰か當に樂を好んで更に苦を得べけんや。是を以ての故に神は自在ならず、亦作ならざることを知る。又人の罪を畏るるが故に、自ら強ひて善を行

ずるが如し。若し自在ならば何を以てか罪を畏れて、自ら強ひて福を作せん。又、諸の衆生は意の如くすることを得ず、常に煩惱、愛縛の爲に牽かる。是の如き等の種種の因縁により、神は自在ならず、自作ならざることを知る。若し神自在ならず自作ならずんば、是れ神の相無しと爲す。言ふ我とは即ち是れ六識にして、更に異事無し。復次に、若し不作ならば、云何が閻羅王は罪人にむかひ「誰か汝をして此罪を作さしむる者ぞ」と問へるに、罪人答へて「是れ我自ら作せるなり」と言はん。是を以ての故に自作にあらざるに非ざることを知る。若し神は色相ならば是事は然らず、何を以ての故に、一切の色は無常なるが故なり。

問うて曰はく、「人は云何が、色は是れ我の相、と言ふ」。答へて曰はく、「有人、言はく「神は心中に在りて、微細なること芥子の如く、清淨なるを名けて淨色身と爲す」と。更に有人、言はく「麥の如し」と。有が言はく「豆の如し」と。有が言はく「半寸」と、有が言はく「一寸にして、初めて身を受くる時、最も前に在りて受く、譬へば像の骨の如し、其身を成るに及んでは、像は已に莊なるが如し」と。有が言はく「大小は人身に隨ふ、死し壞する時、此も亦前に出づ」と。此の如き事は皆爾らざるなり。何を以ての故に、一切の色は、四大の所造にして、因縁より生ずるが故に、無常なればなり。若し神は是れ色ならば、色は無常なり、神も亦無常なり。若し無常ならば上に說く所の如し。」問うて曰はく、「身に二種有り、麁身と及び細身なり。麁身は無常なれども、細身は是れ神にして、

【四衆】受、想、行、識の四蘊をいふ。【三無爲】擇滅、非擇滅、虛空の三無爲なり

世間常に去りて五道の中に入る」答へて曰はく「此細身は不可得なり、若し細身有らば、應に處の得べき所有るべし。五藏四體の如き、一一の處中に求むれども皆不可得なり。問うて曰はく「此細身は微細にして、初め死する時は已に去り、若し活する時は則ち求むることを得べからず、汝云何が能く見ん。又此細身は、五情の能く見、能く知るところに非ず、唯、神通の聖人有りて、乃ち能く見ることを得」答へて曰はく「若し爾らば無と異なること無し。人の死する時の如きは、此生陰を捨てて中陰の中に入る。是時、今世の身滅し、中陰の身を受く。此に前後無く、滅する時は即ち生ず。譬へば臘印を泥に印するに、泥中に印を受くるや、印は即時に壞するが如し。成と壞とは一時にして亦前後無し。是時、中陰中有を受け、此中陰を捨てて生陰の有を受く。汝が言ふ細身は即ち此中陰なり。中陰の身は出無く入無し。譬へば燈を然すに、生滅相續して、常ならず、斷ならざるが如し。佛の言はく「一切の色法は、若くは過去、未來、現在、若くは内、若くは外、若くは麁、若くは細、皆悉く無常なり。汝が神の微細の色も、亦應に無常にして斷滅すべし」と。是の如き等の種種の因緣により、神は色相にも非ず、無色相にも非ざることを知るべし。無色とは、四衆及び無爲なり。四衆は無常なるが故に、自在ならざるが故に、因緣に屬するが故に、是れ神なるべからず。三無爲の中に神有ることを計せず、受くる所無きが故なり。是の如き等の種種の因緣により、神は無色相に非ざることを知る。是の如く天地の間、若くは内、若くは外、三世十方に我を求むるに不可得なり。但十二入和合して六識を生じ、三

【三事和合す】根、境、識の三事なり

事和合するを觸と名く。觸は受想思等の心數法を生ず。是法の中に、無明の力の故に身見を生じ、身見生ずるが故に神有りと謂ふ。是身見は苦諦の苦法智、及び苦比智を見れば則ち斷ず、斷ずる時は則ち神有ることを見ず。汝は先に、若し内に神無くんば、識は念念に生滅す、云何ぞ分別して色の靑黃赤白を知らん、と言へり。汝、若し神有るも獨り知ること能はず、要ず眼識に依るが故に能く知る。若し爾らば神は無用なり。眼識は色を知り、色の生滅は生に相似し滅に相似す。然る後に心中に有法の生ずるを名けて念と爲す。是念の相は有爲法にして、滅し過ぎ去ると雖も是念は能く知る。聖人の智慧力の如きは、能く未來世の事を知る。念念も亦是の如く、能く過去の法を知る。若し前の眼識滅し、後の眼識生ずれば、後の眼識は轉た利にして力有り。色は暫有にして住せずと雖も、念力利なるを以ての故に能く知る。是事を以ての故に、念念生滅して無常なりと雖も、能く分別して色を知る。又汝は、今現在の人の識は新新に生滅し、身命斷ずる時は亦盡く。諸行の罪福は誰にか隨ひ、誰か受け、誰か苦樂を受け、誰か解脫する者ぞ、と言ふ。今當に答ふべし。汝は今未だ實道を得ず。是れ人は諸の煩惱、心を覆ひ、生ずる因緣の業を作す。死する時、五陰の相續より、五陰を生ずること、譬へば一燈を以て更に一燈を然すが如し。又穀子の生ずるが如きは、三因緣有り、地と水と種子となり。後世の身の生ずるも亦復是の如し。身有り、有漏業有り、結使有り、三事の故に後身生ず。是中、身業の因緣は、斷ずべからず、使すべからず、但だ諸の結使のみ斷ずべし。結使斷ずる時は殘身殘業有りと

【名色】五蘊の總得なり。

雖も解脫するを得べし。穀子有り地有れども、水無きが故に生ぜざるが如し。是の如く、身有り業有りと雖も、愛結の水潤ますこと無ければ則ち生ぜず、是を名けて、神無しと雖も亦解脫を得と名く。無明の故に縛し、智慧の故に解く、則ち我は所用無きなり。復次に、是名色の和合を假に名けて人と爲す、是人は諸の結の爲に繫がるれども、無漏の智慧の爪を得て、此諸の結を解く。是時、人は解脫を得、と名く。繩を結び、繩を解くが如し。繩は即ち是れ結なり。結に異法無く、世界の中に繩を結び、繩を解くことを說く。名色も亦是の如し。名色の二法和合するを、假に名けて人と爲す。是結使は名色と異らず、但名けて、名色結び、名色解く、と爲す。罪福を受くるも亦是の如し。一法の人の爲に實となるものなしと雖も、名色の故に罪福の果を受け、而も人の名を得。譬へば車に載する物の如きは、一一之を推すに竟に車の實無し。然も車は物を載するの名を受く。人の罪福を受くるも亦是の如し、名色、罪福を受けて、而も人其名を受く、苦樂を受くるも亦是の如し。是の如き種種の因緣により、神は不可得なり。神は即ち是れ施者、受者も亦是の如し。汝は神を以て人と爲す、是を以ての故に施人も不可得なり、受人も不可得なること、亦是の如し。是の如きの種種の因緣により、是を、財物、施人、受人の不可得、と名く。問うて曰はく、「施は諸法に於て是れ如實の相にして、諸法に於て所破無く、所滅無く、所生無く、所作無くんば、何を以ての故に三事破析して、不可得なりと言ふ。」答へて曰はく、「凡夫人の如きは施者を見、受者を見、財物を見る、是を顚倒の妄見と爲す。世間に

【九】布施の檀波羅蜜を生ずるを明す

生じて果を受け、福盡くれば轉じて減る。是故に佛は菩薩をして實道を行じ、實の果報を得しめんと欲したまふ。實の果報とは則ち是れ佛道なり。佛は妄見を破らんが爲の故に、三事は不可得にして、實に所破無しと言ふ。何を以ての故に、諸法は本より已來、畢竟空なるが故なり。是の如き等の種種の無量の因緣は不可得なり。故に名けて、檀波羅蜜を具足し滿ずと名く。復次に、若し菩薩の檀波羅蜜を行じ、能く六波羅蜜を生ぜば、是時を名けて、檀波羅蜜を具足し滿ずと名く。

云何が布施は檀波羅蜜を生ずる。檀に下中上有り、下より中を生じ、中より上を生ず。若し飲食、麁物を以て、軟心にして布施せば、是を名けて下と爲す。施を習ひ轉た增して、能く衣服寶物を以て布施せば、是を下より中を生ずと爲す。施心轉た增して、愛惜する所無く、能く頭目血肉國財妻子を以て、盡く用ひて布施する、是を中より上を生ずと爲す。釋迦牟尼佛の如きは、初め發心の時、大國王と作り、名けて光明と曰ふ。佛道を求索して少多布施し、轉じて後身を受けて陶師と作り、能く澡浴の具及び石蜜の漿を以て、是なれる釋迦牟尼佛及び比丘僧に供養す。其後、轉じて大長者の女と作り、燈を以て憍陳若佛に供養す。是の如き等の種種を名けて、菩薩の下の布施と爲す。釋迦文尼佛の如きは、本身は長者の子と作りたまへ、衣を以て大音聲佛に布施す。佛滅度の後、九十の塔を起て、後更に身を轉じて大國王と爲り、七の寶蓋を以て師子佛に供養す。後復身を受けて大長者と作り、妙目佛に上好の房舍、及び七寶の妙華を供養す。是の如き等の種種を名けて菩薩

の中の布施と爲す。釋迦文尼佛の本身の如きは、仙人と作り、憍陳若佛の端正殊妙なるを見て、便ち高山の上より自ら佛前に投じ、其身安隱にして一面に在りて立つ。又衆生喜見菩薩の如きは、身を以て燈と爲し、日月光德佛を供養す。是の如き等の種種の身命を惜まずして諸佛を供養する、是を菩薩の上の布施と爲す。是を菩薩の三種の布施と名く。若し初めて佛心を發してより、衆生に布施する有るも亦復是の如し、初めに飲食を以て布施し、施心轉た增して能く身の肉を以て之に與へ、先づ種種の好漿を以て布施し、後、心轉た增して能く身の血を以て之に與へ、先づ紙墨經書を以て布施し、及以び衣服飲食四種の供養を以て法師を供養し、後、法身を得て、無量の衆生の爲に種種の法を說いて法施を爲す。是の如き等の種種は、檀波羅蜜の中より檀波羅蜜を生ず。

〔一〇〕云何が菩薩の布施は尸羅波羅蜜を生ずる。菩薩思惟すらく、「衆生は布施せざるが故に、後世貧窮たり、貧窮を以ての故に劫盜の心生ず。劫盜を以ての故に殺害有り、貧窮を以ての故に色に於て足らず。色足らざるが故に邪婬を行ず。又貧窮を以ての故に人に下賤せられ、下賤なれば怖畏して妄語を生ず。是の如き等の貧窮の因緣の故に十の不善道を行ず。若し布施を行ずれば、生れて財物有り、財物有るが故に非法を爲さず。何を以ての故に、五欲充足して、乏短する所無きが故なり。提婆達の如きは、本生、嘗て一の蛇と爲り、一の蝦蟇、一の龜と與に一の池中に在りて、共に親交を結べり。其後、池水渇盡して、飢ゑ窮まり、困乏すれども控告する所無し。時に蛇は龜を遣し、以て蝦蟇を呼ぶ、蝦蟇は

【一〇】次に布施の尸羅波羅蜜を生ずるに就いて。【尸羅波羅蜜】シーラパーラミター(Sīlapāramitā) 持戒度と翻ず。

偈を說き、以て龜に諭して言はく、

　若し貧窮に遭へば本心を失し、本義を惟はず食を先と爲す
　汝、我輩を持して以て蛇に語れ、蝦蟇は終に汝が邊に到らず

若し布施を修すれば、後の生に福有り、短乏する所無ければ、則ち能く戒を持ちて此衆惡無し。是を、布施は能く尸羅波羅蜜を生ず、と爲す。復次に、布施する時は、能く破戒の結使をして薄からしめ、益持戒の心をして堅固なるを得しむ。是を布施の因緣は戒を增益すと爲す。復次に、菩薩の布施は、常に受者に於て慈悲心を生じ、財に著せず、自物を惜まず、何に況んや劫盜せんや。受者に慈悲なり、何んが殺意有らん。是の如き等は能く破戒を遮す。是を施は戒を生ずと爲す。若し能く布施すれば、以て慳心を破り、然る後持戒忍辱等を行ずることを得べきこと易し。文殊師利の如きは、在昔過去久遠劫の時、曾て比丘と爲り、城に入りて乞食し、鉢に百味の歡喜丸を滿たすことを得たり。城中の一の小兒、追從して乞ひしも卽ち之を與へず、乃ち佛圖に至り手づから二丸を捉へて、之を要して言はく、「汝若し能く自ら一丸を食し、一丸を以て僧に施さば、當に以て汝に施すべし」と。卽ち相然可し、一の歡喜丸を以て衆僧に布施し、然る後に文殊師利の許に於て戒を受け、發心して、佛と作れり。是の如く、布施は能く戒を受け、發心して佛と作らしむ。是を、布施の尸羅波羅蜜を生ず、と爲す。復次に、布施の報は四事の供養を得て、好國の善師は、乏少する所無し、故に能く戒を持す。又布施の報は其心調柔なり、心調柔なるが

【一二】次に布施が能く羼提波羅蜜を生ずるを明す。
【羼提波羅蜜】クシャンティパーラミター(Kṣantipāramitā)忍辱度と譯す。

【一三】次に布施が能く毘梨耶波羅蜜を生ずるを明す。
【毘梨耶波羅蜜】ギールヤパーラミター(Vīryapāramitā)精進度と譯す

故に能く持戒を生じ、能く持戒を生ずるが故に、不善法の中より能く自ら心を制す。是の如き種種の因緣により、布施より尸羅波羅蜜を生ず。

(一二)云何が、布施は羼提波羅蜜を生ずる。菩薩の布施する時、受くる者、逆に罵り、若は大いに求索し、若は不時に索め、或は索むべからずして索む。是時、菩薩は自ら思惟して言はく「我今布施して、佛道を求めんと欲すれども、亦人有り、我をして布施せしむることと無し。我自らの爲の故に、云何が瞋を生ずべき」と。是の如く思惟し已りて忍辱を行ず。是を、布施の羼提波羅蜜を生ず、と爲す。復次に、菩薩は布施する時、若し受者瞋り惱めば便ち自ら思惟すらく、我は今、內外の財物を布施し、捨て難きを能く捨つ、何に況んや空聲にして、而も忍ぶこと能はざらん。我、忍ばずんば、布施すべき所は、則ち不淨と爲らん。譬へば白象の池に入りて澡浴し、出で已りて還りて復土を以て身に坌するが如く、布施して忍ばざるも亦復是の如しと。是の如く思惟し已りて、忍辱を行ず。是の如き等の種種の布施の因緣により、羼提波羅蜜を生ず。

(一三)云何が布施して毘梨耶波羅蜜を生ずる。菩薩の布施する時は、常に精進を行ず。何を以ての故に、菩薩の初めに發心する時は、功德未だ大ならず。爾時、二施を行じて一切衆生の願を充滿せんと欲し、物足らざるを以ての故に、懃めて財法を求めて以て、之を給足すればなり。釋迦文尼佛の本身の如きは、大醫王と作り、一切の病を療じて名利を求めず、衆生を憐愍するが爲の故なり。病者、甚だ多くして力周く救はず、一切を憂念するも而

【羅刹】ラークシヤサ(Raksasa)可畏と譯す、惡鬼の通名

【檀越】ダーナパティ(Dānapati)施主と譯す。

も心に從はず、懊惱して、死して即ち刹利天上に生ぜり。自ら思惟して言はく、我が前世に生ぜしに但、嗔恚のみを食するも、長く寂する所無しと。即ち自ら方便して、自ら滅身を取り、此天樂を捨てて、娑伽陀龍王の宮中に生じて、龍の太子と爲る。其身長大にして、父母愛重す。自ら死を取らんと欲して金翅鳥王に就く、鳥は即ち此龍の子を取り、舍摩利樹の上に於て之を呑む。父母は啼哭號咷して懊惱す。龍子は既に死して閻浮提の中に生じ、大國王の太子と爲り、名けて能施と曰ふ。生れて能く言ひ、諸の左右に問はく、「今、此國中、何等の物か有る、盡く皆持ち來りて以て布施に用ひよ」と。衆人は怪畏して之を捨てて走る。其母、憐愍して獨り自ら之を守る、其母に語りて言はく、「我は羅刹に非ず、衆人は何を以ての故に走る。我本の宿命は、常に布施を好む、我は一切の人の檀越と爲らん」と。母は其言を聞いて以て衆人に告ぐれば、衆人即ち還る。母は好く養育すれば、年長大なるに及んで、自身の所有、盡く以て施し盡し、父王の所に至りて物を索めて以て施す。父、其分を與ふれば、復以て施し盡す。閻浮提の人の貧窮にして、辛苦するを見て、給施せんことを思欲するに、財物足らず、便ち自ら啼泣し、諸人に問うて言はく、「何の方便を作してか、當に一切をして財に滿足せしむべき」と。諸の宿人の言はく、「我等曾て聞く、如意寶珠有り、若し此珠を得ば、則ち能く心の索むる所に隨うて、必ず得ずといふこと無し」と。菩薩は是語を聞き已りて、其父母に白す、「大海に入りて龍王の頭上の如意寶珠を求めんと欲す」と。父母答へて言はく、「我は唯汝一兒有るのみ、若し大海に入らば

衆難度り難し。一旦汝を失はば、我等も亦當に何を用てか濟くべき、爲に去ることを須ひざれ。我今、藏の中に、猶亦物有り、當に以て汝に給すべし」と。兒言はく、「藏中は限有り、我意は無量なり。我は財を以て、一切に充滿し、乏短なること無からしめんと欲す、願くば聽許せられよ。本心を遂ぐることを得て、閻浮提の人をして、一切充足ならしめん」と。父母は其志の大なることを知りて、敢て之を制せず、遂に放ちて去らしむ。是時、五百の賈客は、其福德の大なるを以て、人皆、隨從せんことを樂ひ、其行く日を知りて、海道の口に集る。菩薩は先づ娑伽陀龍王の頭上に、如意寶珠有りと聞いて、衆人に問うて言はく、「誰か水道を知りて、彼龍宮に至らん」と。一の盲人有り、陀舍と名く、曾て七反大海の中に入りて共に海道を知れり。菩薩は即ち共に行かんことを命ず」答へて曰はく、「我は年既に老い、兩目明を失し、曾て數數入ると雖も、今は去ること能はず」と。菩薩語りて言はく、「我今此に行くことは、自らの身の爲にあらず、普く一切の爲に、如意寶珠を求め、衆生に給足して、身をして乏しきこと無からしめ、次に道法の因縁を以て、之を教化せんと欲するなり。汝は是れ智人、何んが辭することを得ん。我願を成ずることを得るは、豈汝が力に非ずや」と。陀舍は其要言を聞き、欣然として懷を同うし、菩薩に語げて言はく、「我今汝と共に、倶に大海に入らん。我必ず全からずんば、汝當に我尸骸を安んじて、大海の中の金沙の洲の上に著くべし」と。行事都て集り、第七繩を斷ずれば、船は去ること馳するが如く、衆の寶渚に到る。衆賈、競うて七寶を取り、各各已に足り

ぞ」菩薩に語りて言はく、「何を以てか取らざる」と。菩薩、報へて言はく、「我求むる所は如意寶珠なり。此は盡くること有る物なれば、我は須ひざるなり。汝等は各各當に足ることを知り、量を知るべし。船をして、重からしむること無くんば、自ら免れざらなり」と。是時、衆賈は、菩薩に白して言さく、「大德、我爲に呪願し、安隱なることを得しめたまへ」と。是に於て辭し去る。陀舍は是時、菩薩に語りて言はく、「別に艇舟を留めて、當に是別道に隨うて去るべし。風を待つこと七日、海の南岸に博いて一の險處に至り、當に絶崖に棗林有るべし、枝は皆水を覆ひ、大風は船を吹いて、船は當に摧け覆るべし。汝は當に仰いで棗枝を攀ぢ、以て自ら濟ふべし。我身は無目なり、此に於て當に死すべし。此隘岸を過ぎて、當に金沙洲有るべく、我身を以て此沙中に置くべし。金沙は清淨なり、是れ我願なり」と。即ち其言の如く、風至りて去り、既に絶崖に至るに、陀舍の語の如し。菩薩は仰いで棗枝に攀ぢ、以て自ら免るることを得、陀舍の屍を置いて金地に安厝す。是に於て獨り去るに、其先の教の如し。深水の中に浮くこと七日、至りて咽に等しき水中を行くこと七日、腰に等しき水中を行くこと七日、膝に等しき水中を行くこと七日、泥中を行くこと七日、好蓮華の鮮潔柔軟なるを見て、自ら思惟して言はく、「此華は軟かにして脆し。當に虛空三昧に入るべし」と。自ら其身を輕くして、蓮華の上を行くこと七日、諸の毒蛇を見て念じて言はく、「毒を含むの虫は甚だ畏るべし」と。即ち慈心三昧に入りて、毒蛇の頭上を行くこと七日、蛇は皆頭を擧げて菩薩に授與し、上を蹈んで過ぎしむ。此難

を過ぎ已りて、七重の寶塹行るを見る。七重の塹有り、塹の中に皆毒蛇滿ち、三大龍有りて門を守る。龍は、菩薩の形容端政に、相好嚴儀にして、能く衆の難を度りて、此に來り至ることを得たるを見て、念じて言はく「此れ凡夫に非ず、必ず是れ菩薩大功德の人ならん」と。即ち聽して遥を前んで、宮に入ることを得しむ。龍王夫婦は兒を喪うて未だ久しからず、猶故に哀泣せり。菩薩の來るを見て、龍王の婦は神通有り、是れ其子なるを知り、兩乳汁を流出し、之に命じて坐せしめ、之に問うて言はく「汝は是れ我子なり、我を捨てて命終す、生れて何の處に在る」と。菩薩も亦自ら、宿命を識り、是父母を知り、母に答へて言はく「我は閻浮提の上に生れ、大國王の太子と爲れり。貧人の飢寒勤苦して自在を得ざるを憐愍するが故に、此に來至して如意寶珠を求めんと欲す」と。母の言はく「汝が父の頭上に此寶珠有り、以て首飾と爲す、得べきこと難し、必ず當に汝を將ゐて諸の寶藏に入るべく、汝が欲する所に隨うて、必ず汝に與へんと欲す。汝當に報じて言ふべし、其餘の雜寶は我須ひず、唯大王の頭上の寶珠を欲す。若し憐愍せば願くば以て我に與へたまへと。此の如くせば得べし」と。即ち往いて父に見ゆ。父大いに悲喜歡喜すること無量、其子をして遠く渉りて艱難し、乃ち此に來至するを愍み、妙寶を指示して、「汝が須ふる者を與ふ、隨意に之を取れ」と。菩薩言はく、「我は遠くより來り、大王に見えて、王の頭上の如意寶珠を求めんことを願ふ。若し憐愍せば、當に以て我に與ふべし、若し與へられずんば、餘の物を須ひず」と。龍王報へて言はく「我は唯此一珠のみ有り、

【二】次に布施の能く禪波羅蜜を生ず

常に首の飾と爲す。閻浮提の人は、薄福下賤にして見るべからず」と。菩薩白して言さく、「我は此を以ての故に遠く艱難を渉り、死を冒して遠く來れり。閻浮提の人は薄福貧賤なるが爲に、如意寶珠を以て其願ふ所を滿し、然る後に、佛道の因縁を以て之を敎化せんと欲す」と。龍王は珠を與へて之に要して言はく、「今、此珠を以て汝に與へん。汝既に世を去らば、當に以て我に還すべし」と。答へて言はく、「敬んで、王の言の如くせん」と。菩薩は珠を得て虚空に飛騰し、臂を屈申するが如き頃にして、閻浮提に到る。人王の父母は、兒の吉く還るを見て、歡悦踊躍し、抱きて問うて言はく、「汝何物をか得る」と。答へて言はく、「如意寶珠を得」と。問うて言はく、「今、何許にか在る」と。白して言さく、「此衣の角裏の中に在り」と。父母言はく、「何んが其れ泰だ小なる」と。白して言さく、「其神德有るは大なるに在らず」と。父母に白して言さく、「當に城中の内外に勅して掃き灑ぎ、香を燒き、繒の幡蓋を懸け、持齋受戒すべし」と。明日、滿日長木を以て表と爲し、珠を以て上に著く。菩薩は是時、自ら誓願を立つ。「若し我當に佛道を成じて一切を度脱すべくは、當に我意の願の如く、一切の寶物を出し、人の須ふる所に隨うて、盡く皆備ふることを有るべし」と。是時、陰雲普遍し、種種の寶物、衣服、飲食、臥具、湯藥を雨らし、人の須ふる所、一切具足し、其命の盡くるに至るまで、常爾に絶えざりき。是の如き等を名けて、菩薩の布施は精進波羅蜜を生ずと爲す。

云何が菩薩の布施は、禪波羅蜜を生ずる。菩薩布施する時は、能く慳貪を除く。慳貪

ずるを明す。
【禪波羅蜜】ドヤーナパーラミター(Dhyānapāramitā)定度と譯す。
【五蓋】貪欲、瞋恚、睡眠、掉擧、疑蓋とは心を蓋ふ煩惱の意。

を除き已り、此布施に因りて、行ずること一心なれば、漸く五蓋を除き、能く五蓋を除く、是を名けて禪と爲す。復次に、心は布施に依りて、初禪乃至滅定禪に入る。云何が依ると爲す。若し禪を行ずる人に施す時は、心に自ら念じて言はく、「我は此人の禪定を行ずるを以ての故に淨心にして供養す、我今何んが自ら禪を替ることを爲さん」と。即ち自ら心を斂めて、思惟し禪を行ず。若し貧人に施しては此宿命を念ず、諸の不善を作し、一心に求めず、福業を修せずして、今世貧窮なりと。是を以て自ら勉めて善を修し、一心に以て禪定に入る。說くが如くんば、喜見轉輪聖王には八萬四千の小王來朝し、皆七寶の妙物を持ち來りて獻ず。王言はく「我は須ひざるなり、汝等各自ら以て福を作すべし」と。諸王自ら念ずらく、「大王は背て取らずと雖も、我等も亦復自ら用ふべからず」と。即ち共に造工して七寶の殿を立て、七寶の行樹を殖ゑ、七寶の浴池を作り、大殿の中に於て八萬四千の七寶の樓を造り、樓中に皆七寶の床座有り、雜色の被枕を床の兩頭に置き、繒の幡蓋を懸け、香熏を地に塗り、衆事備はり已りて、大王に白して言さく、「願くば、法殿、寶殿、寶樹、浴池を受けたまへ」と。王は默然として之を受け、自ら念じて言はく、「我は今先づ新殿に處して、以て自ら娛樂すべからず、當に善人の諸の沙門婆羅門等を求めて、先づ入れて供養し、然る後に我之に處るべし」と。即ち善人を集めて先づ寶殿に入れ、種種に供養し、微妙に具足せり。諸人出で已れば、王は寶殿に入り、金樓に登り、銀床に坐し、布施を念じて五蓋を除き、六情を攝し、六塵を抑け、喜樂を受け、初禪に入る。次に

【二四】次に布施の生ずる般若波羅蜜を明す

銀樓に登り、金床に坐して、二禪に入る。次に毘琉璃樓に登り、頗梨の寶床に坐して三禪に入る。次に頗梨寶樓に登り、毘琉璃床に坐して四禪に入る。獨坐思惟、終に三月を竟り、玉女、寶后は八萬四千の諸の侍女と倶に、皆白珠、名寶、瓔珞を以て、其身を莊りて大王に白さく、「久しく親覲に違ふ、敢て來りて問訊したてまつる」と。王、諸妹に告ぐ、「汝等各當に端心なるべし、當に我が爲に知識となり、我怨と爲ること勿るべし」と。玉女寶后涙を垂れて言はく、「大王、何爲ぞ我を謂ひて妹と爲す、必ず異心有らん、願くば其意を聞かん。云何が當に知識と爲り、我怨と爲ること勿るべしと勅せらるる」と。王、之に告げて言はく、「汝若し我を以て世の因緣の爲に共に欲事を行じ、以て歡樂を作さば、是を我怨と爲す。若し能く非常を覺悟し、身の幻の如くなるを知り、福を修し善を行じ、欲情を絕去せば是を知識と爲す」と。諸の玉女言さく、「敬んで王の勅の如くせん」と。此語を說き已りて、各遣して還らしむ。諸女出で已れば、王は金殿に登り、銀床に坐して、慈三昧を行じ、銀樓に登り、金床に坐して悲三昧を行じ、毘琉璃樓に登り、頗梨床に坐して喜三昧を行じ、頗梨の寶樓に登り、毘琉璃床に坐して捨三昧を行ず。是を菩薩の布施は禪波羅蜜を生ずと爲す。

【二四】云何が菩薩の布施は、般若波羅蜜を生ずる。菩薩布施する時は、此布施は必ず果報有りと知りて、疑惑せず、能く邪見無明を破る。是を、布施は般若波羅蜜を生ずと爲す。復次に、菩薩布施する時は、能く分別して知る、戒を持たざる人の、若し鞭打、拷掠、閉繫し、

【鳩槃陀】クムバーンダ（Kumbhanda）人の精氣を啖ふ鬼。

法を拒げ財を得て、布施を作せば、象、馬、牛の中に生れ、畜生の形を受けて、重を負ひ、鞭策、羈靽、乘騎せらると雖も、而も常に好屋好食を得、人の爲に重んぜられ、以て人供給す。又知る、惡人の多く瞋恚を懷き、心曲りて端しからざるも、而も布施を行せば、當に龍の中に墮して、七寶の宮殿、妙食、好色を得べきことを。又知る、憍人の多慢、瞋心にして布施すれば、金翅鳥の中に墮して、常に自在を得、如意寶珠有り、以て瓔珞と爲し、種種の須ふる所、皆自ら恣なることを得て、意の如くならざる無く、變化、萬端、事として辦ぜざる無きことを。又知る、宰官の人の、拒げて人民を濫り、治法に順ぜず、財物を取りて以て布施に用ふれば、鬼神の中に墮して、鳩槃荼鬼と作り、能く種種に五塵を變化して自ら娛しむことを。又知る、多瞋佷戾にして、酒肉を嗜好するの人の、而も布施を行せば、地の夜叉鬼の中に墮ち、常に種種の歡樂、音樂、飲食を得ることを。又知る、人有り、剛愎强梁にして、而も能く車馬を布施し、代りて步せしめば、虛空の夜叉の中に墮ち、大力有りて至る所風の如くなることを。又知る、人有り、妬心にして諍を好めども、而も能く好き房舍、臥具、衣服、飲食を以て布施するが故に、宮觀飛行の夜叉の中に生じ、種種の娛樂便身の物有ることを。是の如く種種に布施する時、能く分別して知るべし。是を菩薩の布施は般若を生ずと爲す。復次に、飲食を布施すれば、力色命樂の贍を得。若し衣服を布施せば、生れて慚愧を知ることを得、威德端正にして、身心安樂なり。若し房舍を施せば、則ち種種の七寶宮觀を得、自然にして五欲を自ら娛むこと有り。若し井池、泉

衣、種種の好漿を施せば、生ずる所、則ち飢無く、渴無きことを得、五欲、備に有り。若し橋船及び諸の履屣を施せば、生れて種種の車馬を有し具足す。若し園林を施せば、則ち豪尊なることを得、一切の依止と爲り、身を受くること端政に、心樂んで憂無し。是の如き等の種種の、人中の因緣は布施の得る所なり。若し人布施して福德を修作し、有爲の作業、生活を好まざれば、則ち四天王の處に生ずることを得。若し人布施し、加ふるに父母及び諸の伯叔兄弟姉妹の供養を以てし、無瞋無恨にして諍訟を好まず、又喜んで諍訟を見ざるの人は、忉利天上、焰摩、兜率、化自在、他化自在に生ずることを得、是の如く種種に分別して布施する、是を菩薩の布施は般若を生ずと爲す。若し人布施して心に染著せず、世間を厭患して、涅槃の樂を求めば、是を阿羅漢、辟支佛の布施と爲す。若し人布施して佛道の爲にし、衆生の爲の故ならば、是を菩薩の布施と爲す。是の如き等の種種の布施の中に分別して知る、是を布施は般若波羅蜜を生ずと爲す。復次に、菩薩の布施する時は、三事の實相を思惟すること上に說くが如し。是の如く能く知る、是を布施は般若波羅蜜を生ずと爲す。復次に、一切の智慧、功德の因緣は皆布施に由る。千佛の始めて意を發したまふ時の如きは、種種の財物を諸佛に布施したまふ。或は華香を以て、或は衣服を以て、或は楊枝を以て布施し、以て意を發す。是の如き等の種種の布施、是を菩薩の布施は般若波羅蜜を生ずと爲す。

大智度論卷第十二竟

大智度論釋初品中尸羅波羅蜜義第二十　卷第十三

龍樹菩薩造
後秦龜茲國三藏鳩摩羅什　詔を奉じて譯す

【一】以下罪と不罪とは不可得の故に尸羅波羅蜜を具足すべしの文を釋す。論する中、初に尸羅の義並に持戒の功徳を釋す。
【尸羅】シーラ(Śīla)性善正義等と譯す。

【經】罪と不罪とは不可得の故に、應に尸羅波羅蜜を具足すべし。

【論】(一)尸羅(秦に性善と言ふ)とは、好んで善道を行じ、自ら放逸ならざる、是を尸羅と名く、或は戒を受けて、善を行じ、或は戒を受けずして、善を行ずるも、皆尸羅と名く。尸羅とは、略說すれば身口の律儀に八種有り。惱害せざること、劫盜せざること、邪婬せざること、妄語せざること、兩舌せざること、惡口せざること、綺語せざること、飲酒せざること、及び淨命なること、是を戒と名け、若し護らずして放捨するは、是を破戒と名く。此の戒を破る者は三惡道の中に墮ち、若し下の戒を持てば人中に生じ、中の戒を持てば六欲天の中に生じ、上の戒を持ち、又四禪四空定を行ずれば、色、無色界の清淨天の中に生ず。上の戒を持つに三種有り。下の清淨持戒を持てば、阿羅漢を得、中の清淨持戒を持てば、辟支佛を得、上の清淨持戒は、佛道を得。著せず、倚らず、破らず、缺かざれば、聖の讃愛する所なり。是の如きを名けて、上の清淨持戒と爲す。若し衆生を慈愍するが故に、衆生を度するが爲の故に、亦戒の實相を知るが故に、心に猗著せず、此の如く持て

ば、將來、人をして佛道に至らしむ。是の如きを名けて、無上の佛道の戒を得と爲す。若し人、大善利を求めば、當に堅く戒を持つこと、重寶を惜むが如く、身命を護るが如くすべし。何を以ての故に、譬へば、大地の一切の萬物、有形の類の如きは、皆地に依りて住す。戒も亦是の如く、戒を一切善法の住處と爲せばなり。復次に、譬へば足無くして行かんと欲し、翅無くして飛ばんと欲し、船無くして渡らんと欲するが如きは、是れ不可得なり。若し戒無くして好果を求めんと欲するも、亦復是の如し。若し人の此の戒を棄捨せば、山居して苦行し、果を食し、藥を服すと雖も、禽獸と異なること無し。或は人有り、但水を服するを戒と爲し、或は乳を服し、或は氣を服し、或は剃髮し、或は長髮し、或は頂上に少許の髮を留め、或は袈裟を著け、或は白衣を著け、或は草衣、或は木皮衣を著け、或は冬水に入り、或は夏火に炙り、若くは自ら高巖より墜ち、若くは恒河の中に於て洗ひ、若くは日に三たび浴し、再び火を供養し、種種の祠祀、種種の呪願、苦行を受けて苦行するも、此の戒無きを以て空うして得る所無し。若し人有り、高堂大殿に處し、好衣美食すと雖も、而も能く此の戒を行ずれば、好處に生ずることを得、及び道果を得ん。若くは貴きも、若くは賤きも、若くは小なるも、若くは大なるも、能く此の淨戒を行せば、皆大利を得ん。若し此の戒を破らば、貴と無く、賤と無く、大と無く、小と無く、皆意に隨って、善處に生ずることを得ず。復次に、破戒の人は、譬へば清涼の池に、而も毒蛇有り、中に澡浴すべからざるが如く、亦好華果樹の、而も逆刺多きが如し。若し人貴家に在りて生れ、身體

端政に、廣學多聞なりと雖も、持戒を棄てず、慈悲心無きも、亦復是の如し。偈に說くが如し。

貴くして智無きは則ち衰と爲し、智にして憍慢なるも亦衰と爲す
持戒の人にして而も戒を毀たば、今世後世一切衰へん
人は貧賤なりと雖も、而も能く戒を持てば富貴に勝る。而して破戒の者の華香木香は、

遠く聞ゆること能はざれども、持戒の香は周く十方に遍ず。持戒の人は、安樂を具足し、名聲遠く聞え、天人敬愛し、現世には常に種種の快樂を得、若し天上人中にして、富貴長壽を欲せば、之を取ること難からず。持戒して清淨なれば、願ふ所皆得らる。復次に、持戒の人は、破戒の人の刑獄に考掠せられ、種種に苦惱するを見て、自ら永く此事を離るることを知り、以て欣慶と爲す。若し持戒の人は、善人の譽を得て、名聞え、快樂なるを見て、自ら念じて言はく、「彼譽を得るが如く、我も亦分有り」と。持戒の人は、命終る時、刀風身を解き、筋脈斷絶すれども、自ら戒を持ちて清淨なることを知り、心に怖畏せざるなり。偈に說くが如し、

大惡病の中には、戒を良藥と爲し
大怖畏の中には、戒を守護と爲し
死の暗冥の中には、戒を明燈と爲し
惡道の中に於ては、戒を橋梁と爲し

死海の水の中に、戒を大船と爲す

復次に、持戒の人は、常に今世の人に敬養せらるるを得、心に樂しんで悔いず、衣食乏しきこと無く、死して天に生ずることを得て、後、佛道を得るなり。持戒の人は事として得ざる無く、破戒の人は一切皆失す。譬へば人有り、常に天を供養するが如きは、其人貧窮なるも、一心に供養して十二歳に滿ち、富貴を求索するに、天は此人を愍んで、自ら其身を現じ、之に問うて曰はく、「汝、何等を求むる」と。答へて言はく、「我、富貴を求めて心の願ふ所をして、一切皆得しめんと欲す」と。天、一器を與へ、名けて德瓶と曰ふ。而して之に語りて言はく、「須ひる所の物は、此瓶より出づ」と。其人は得已りて、意の欲する所に應じて得ざる所無く、意の如くなることを得已りて、具に好舍、象馬、車乘を作り、七寶具足し、賓客に供給するに、事事、乏しきこと無し。客之に問うて曰はく、「汝は先に貧窮なりき、今日、何に由りてか是の如きの富を得る」と。答へて言はく、「我天瓶を得、瓶は能く此種種の衆物を出すが故に、富むこと是の如し」と。客言はく、「瓶を出し、幷に出す所の物を見示せよ」と。即ち爲に瓶を出し、瓶中より種種の衆物を引き出す。其人憍泆し、瓶の上に立ちて舞ふに、瓶は即ち破壞し、一切の衆物も亦一時に滅す。持戒の人も亦復是の如し、種種の妙樂は願に隨りて得ざる無し。若し人戒を破り、憍泆にして、自ら恣なるも、亦彼人の瓶を破りて物を失するが如し。復次に、持戒の人の名稱の香は、今世後世周く天下に滿ち、及び人中に在り。復次に、持戒の人は、人の樂しむ所を施して

【二】次に種種の譬を擧げて破戒の罪を說く。

財物を惜まず、世利を修せず、乏しき所無く、天上に生ずることを得、十方の佛前にて三乘道に入り、而して解脫を得。唯種種の邪見は、持戒の後は得る所無し。復次に、若し人出家せずと雖も、但能く戒法を修行せば、亦天に生ずることを得。若し人戒を持ちて清淨に、禪智慧を行じ、老病死の苦を度脫せんことを求めんと欲せば、此願は必ず得らる。持戒の人は兵仗無しと雖も、衆惡加はらず、持戒の財は、能く奪ふ者無し。持戒の親は、親死すと雖も離れず。持戒の莊嚴は、七寶に勝れたり。是を以ての故に當に戒を護ることは、身命を護るが如く、寶物を愛するが如くすべし。破戒の人は苦を受くること萬端なり、前に貧人の瓶を破りて物を失ふが如し。復次に、持戒の人は、破戒の人の罪を觀て、應に自ら勉勵して一心に戒を持つべし。

〔二〕云何が名けて破戒の人の罪と爲す、破戒の人は人の敬せざる所にして、其家は塚の如く、人の到らざる所なり。破戒の人は、諸の功德を失す。譬へば枯樹の如く、人は愛樂せず。破戒の人は霜の蓮華の如く、人見ることを喜ばず。破戒の人の惡心畏るべきは、譬へば羅刹の如し。破戒の人には人の歸向せざること、譬へば渴人の枯井に向はざるが如し。破戒の人は心常に疑悔すること、譬へば罪を犯すの人の、常に罪の至らんことを畏るゝが如し。破戒の人は、田の雹を被りて依仰すべからざるが如し。破戒の人は、譬へば苦苽の形は甘種に似たりと雖も、食すべからざるが如し。破戒の人は、賊の聚落に依止すべからざるが如し。破戒の人は、譬へば大病人の如く、近づくことを欲せず。破戒の人は苦を免るゝこと

とを得ず、譬へば悪道の過ぐることを得べきこと難きが如し。破戒の人は、共に止るべからざること、譬へば悪賊の親近すべきこと難きが如し。破戒の人は、譬へば大坑の如く、近づ行者之を避く。破戒の人は共住すべからざること、譬へば毒蛇の如し。破戒の人は、近づき觸るべからざること、譬へば大火の如し。破戒の人は、譬へば破れたる船の、乗りて渡るべからざるが如し。破戒の人は、譬へば吐きたる食の、更に噉ふべからざるが如し。破戒の人は好業の中に在りて、譬へば悪馬の善馬の群に在るが如し。破戒の人は、善人と異ること、驢の牛の群に在るが如し。破戒の人は精進衆に在れば、譬へば、傴僂の健人の中に在るが如し。破戒の人は、比丘に似たりと雖も、譬へば死屍の、眠れる人の中に在るが如し。破戒の人は、譬へば偽珠の寶珠の中に在るが如し。破戒の人は、譬へば伊蘭の栴檀林の中に在るが如し。破戒の人は、形は善人に似たりと雖も、内に善法無く、復剃頭染衣して、次第に籌を捉き、名けて比丘と爲すと雖も、實には比丘に非ず。破戒の人の法衣を著くるは、則ち是れ熱銅鐵鍱、以て其身に纏ふが若く、鉢盂を持するは、則ち是れ洋銅の器に盛るが若く、噉食する所は、則ち是れ焼けたる鐵丸を呑み、熱せる洋銅を飲むが若く、人の供養供給を受くれば、則ち是れ地獄の獄鬼の人を守るが若く、精舍に入るは、則ち是れ大地獄に入るが若く、衆僧の床榻に坐すれば、是を熱鐵の床上に坐すと爲すが若し。復次に、破戒の人は、常に怖懼を懐くこと、重病の人の常に死の至らんを畏るるが如く、亦五逆の罪人の心に常に自ら、我は佛の賊たり、覆藏し、避隱すと念ふが如く、賊の人を

畏れて、歳月日過ぐれども、常に安隱ならざるが如し。破戒の人は、供養利樂を得と雖も、是樂は不淨なり。譬へば愚人の死屍を供養し、莊嚴するが如く、智者は之を聞き、惡んで見んことを欲せず。是の如く、種種無量の破戒の罪は、稱說すべからず。行者は應當に一心に戒を持つべし。

大智度論釋初品中戒相義第二十二之一

【三】次に戒の相を說く。中に十善十惡を明す。

【四】初に不殺生戒を說く。

(三)問うて曰はく、『已に是の如きの種種の功德果報を知る、云何が名けて戒相と爲す。』答へて曰はく、『惡を止めて更に作さず、若は心に生じ、若は口に言ひ、若は他より受けて、身口の惡を息めば、是を戒相と爲す。云何が名けて惡と爲す。

(四)若し實に是衆生をば、是れ衆生なりと知り、心を發して殺さんと欲し、其命を奪うて、身業有作の色を生ず、是を殺生の罪と名く。其餘の繫閉、鞭打等は、是れ殺を助くるの法なり。復次に、他を殺せば殺罪を得。自ら身を殺すに非ざるも、心に衆生なりと知りて殺すは是れ殺罪と名く、夜中に人を見て、謂ひて杌樹と爲して殺す者の如くならず、故に生を殺せば殺罪を得、故にあらざるに非ざればなり。快心にして生を殺せば殺罪を得。狂癡に非ずして命根を斷ずるは、是れ殺罪、作瘡に非ざる身業は是れ殺罪、但口に教勅し、口に教ふるのみに非ざるは是れ殺罪。但心に生ずるのみに非ざる、是の如き等を殺罪と名

く。是罪を作さざるを名けて戒と爲す。若し人戒を受けて心に生じ、口に、『我今日より復た殺生せず』と言ひ、若くは身を動かさず、口に言はず、而も獨り心に生じて、自ら、我今日より、復殺生せずと誓はば、是を不殺生戒と名く。有人言はく、「是不殺生戒は、或は善、或は無記なり」と。問うて曰はく、『阿毘曇の中に説くが如くんば、一切の戒律儀は、皆善なりと。今何を以てか無記なりと言ふ』。答へて曰はく、『迦旃延子の阿毘曇の中に言ふが如きは、一切善なり。餘の阿毘曇の中に言ふが如きは、不殺生戒は、或は善、或は無記なり。何を以ての故に。若し不殺生戒、常に善ならば、此戒を持てる人は、應に得道の人の如く、常に惡道に墮せざるべければなり。是を以ての故に、或時は應に無記なるべし。無記、無果報の故に、天上人中に生ぜざるなり』。問うて曰はく、『戒の無記なるを以ての故に地獄に墮せず、更に惡心有りて生ずるが故に地獄に墮す』。答へて曰はく、『不殺生は無量の善法を得、作、無作の福、常に日夜に生ずるが故なり。若し少罪を作さば、限有り量有り、何を以ての故に、有量に隨うて無量に隨はざればなり。是を以ての故に不殺生戒の中に、或は無記有るを知る』。復次に、有人は師に從うて戒を受けず、而も但心に自ら誓を生ず、我今日より復殺生せずと。是の如く、不殺は或時は無記なり』。問うて曰はく、『是不殺戒は何界の繫なりや』。答へて曰はく、『迦旃延子の阿毘曇の中に言ふが如くんば、一切の受戒律儀は皆欲界繫なり。餘の阿毘曇の中には言はく、或は欲界繫、或は不繫なりと。實を以て之を言へば應に三種有るべし、或は欲界繫、或は色界繫、或は無漏なり。殺生の

【作色、無作色】新譯にいふ表色、無表色のこと、受戒の時受者の身口を以て表す受戒の相を作と表す如きを外に表す業を緣と作し、此表の四大所造の色にて滿身の色體を無作色といふ。

法は欲界なりと雖も、不殺戒は應に殺に隨はば欲界に在るべし。但色界の不殺と、無漏の不殺とは、遠遮の故に是れ眞の不殺戒なり。復次に、有人は、戒を受けずして、生れてより已來、殺生を好まず、或は善、或は無記なる、是を無記と名く。是不殺生の法は、心に非ず、心數法に非ず、亦心相應に非ず、或は心と共に生じ、或は心と共に生ぜず。迦旃延子は阿毘曇の中に言はく、不殺生は是身口の業なり、或は作色、或は無作色、或時は隨心行、或は不隨心行（丹注に云ふ隨心行は定共戒不隨心意は五戒なり）にして、先世の業報に非ず。二種の修は應に修すべく、二種の證は應に證すべし。（丹注に云ふ身證と慧證となり）思惟斷は、一切欲界の最後に、見を斷ずる時斷ずるを得。凡夫聖人の得る所は是れ色法なり。或は可見、或は不可見法、或は有對法、或は無對法、有報法、有果法、有漏法、有爲法、有上法（丹注に云ふ非極の故に有上なり）にして、相應因に非ず。是の如き等の分別は、是を不殺戒と名く。問うて曰はく、「八直道の中の戒も亦不殺生なり。何を以てか獨り不殺生戒は有報、有漏と言ふ。」答へて曰はく、「此中には、不殺但受戒律儀の法を說いて、無漏戒律儀を說かず。復次に、餘の阿毘曇の中に言はく、不殺の法は、常に心を逐うて行ぜず、身口業に非ず、心業行に隨はず、或は報有り、或は報無し。心相應の法に非ず、或は有漏、或は無漏、是を異法と爲す、餘は皆同じ。復有は言はく、諸佛賢聖は諸法を戲論せず。（丹注に云ふ種種の異說を名けて戲と爲す）現前の衆生は各各命を惜む。是故に、佛言はく「他の命を奪ふこと莫れ、他の命を奪はば、世世に諸の苦痛を受けん」と。衆生の有無は後に當に說くべし。問うて曰はく、『人は能く力勝るを以て、人並に國の怨を

殺し、或は田獵の皮肉は、所濟の處大なり、不殺生をして何等の利を得しむる。答へて曰はく、「畏るる所無きことを得、安樂にして怖無きなり。我、彼を害する無きを以ての故に、彼も亦我を害すること無し。是を以ての故に怖無く、畏無し。殺を好める人は、復位、人王を極むと雖も、亦自ら安んせず。持戒の人の如きは、單り行き獨り遊ぶとも、畏れ難る所無し。

復次に、殺を好める人は、命有るの屬、皆見ることを喜ばず。若し殺を好まざれば、一切衆生、皆樂んで依附す。復次に、持戒の人は、命、終らんと欲する時、其心、安樂にして、疑無く悔無く、若くは天上に生じ、若くは人中に在りて、常に長壽を得。是を得道の因緣と爲す。乃至佛を得て、住して壽無量ならん。復次に、殺生の人は、今世後世、種種の身心の苦痛を受く。不殺の人には、此衆難無し。是を大利と爲す。復次に、行者思惟すらく、我は自ら命を惜み、身を愛す、彼も亦是の如し、我と何んが異ならんと。是を以ての故に、殺生すべからず。復次に、若し人殺生せば、善人の爲に訶せられ、怨家に嫉まれ、他の命を負ふが故に、常に怖畏有り。彼が爲に憎まれ、死する時は、心怖いて當に地獄、若くは畜生の中に墮すべし。若し出でて人と爲りては、常に當に短命なるべし。復次に、假令、後世に罪無く、善人の爲に訶せられ、怨家に嫉まれずとも、尚故らに他の命を奪ふべからず。何を以ての故に、善相の人の行ずべからざる所、何に況んや兩世罪有り、弊惡の果報有るをや。復次に殺を罪中の重と爲す。何を以ての故に、人は死の急なる有れば、

重寶を惜まず、但活命を以て先と爲す。譬へば賈客の海に入りて寶を採るが如し。大海を出づるに垂んとして、其船卒に壞れ珍寶失ひ盡して、而も自ら喜慶し、手を擧げて幾の大寶をか失すと言ふ。衆人怪んで言はく、「汝は財物を失し、裸形にして脫することを得、云何か喜んで幾の大寶をか失すと言ふ」と。答へて言はく、「一切の寶の中にて人命は第一なり、人は命の爲の故に財を求む、財の爲の故に命を求めず」と。是を以ての故に、佛、說きたまはく、「十不善道の中に、殺罪は最も初に存り、五戒の中にも亦最も初に在り。若し人種種に諸の福德を修し、而も不殺生戒無ければ則ち益する所無し。何を以ての故に、富貴の處に在りて生じ、勢力豪强なりと雖も、而も壽命無くんば、誰か此樂を受けん。是を以ての故に諸餘の罪の中、殺罪は最も重く、諸の功德の中にて、不殺は第一なることを知る、世間の中にて、命を惜むを第一と爲す。何を以てか之を知る、一切の世人の、甘んじて刑罰、刑殘、考掠を受くるも、壽命を護るを以てなり。復次に、若し人有り、受戒し、心に生ずらく、今日より、一切の衆生を殺さずと。是れ無量の衆生の中に於て、已に愛し重んずる所の物を以て施し與ふれば、得る所の功德も亦復無量なり。佛の說きたまふが如くんば五大施有り。何等か五なる。一には不殺生、是を最大施と爲す。不盜、不邪婬、不妄語、不飲酒も亦復是の如し。復次に、慈三昧を行ずれば、其福無量にして、水火も害せず、刀兵も傷らず、一切の惡毒も中る能はざる所なり。五大施を以ての故に得る所是の如し。復次に、三世十方の中に、佛を尊ぶを第一と爲す。佛、難提迦優婆塞に語りたまふ

が如くんば、殺生に十罪有り。何等をか十と爲す。一には心に常に毒を懐いて、世世に絶えず。二には衆生憎惡して、眼に見ることを喜ばず。三には常に惡念を懐いて惡事を思惟す。四には衆生之を畏るること蛇虎を見るが如し。五には睡る時、心怖れ覺めて亦安んぜず、六には常に惡夢有り。七には命終の時、狂ひ怖れて死を惡む。八には短命の業因縁を種う。九には身壞れ、命終して、泥梨の中に墮す。十には若し出でて人と爲りては、常に當に短命なるべし。復次に、行者、心に念ぜよ。一切の命有るもの乃至昆虫は、皆自ら身を惜しむ、云何が衣服、飲食を以て自ら身の爲の故に衆生を殺さん。復次に、行者は當に大人の法を學すべし。一切の大人の中には、佛を最大と爲す。何を以ての故に、一切の智慧成就して、十力具足し、能く衆生を度し、常に慈愍を行じ、不殺戒を持ちて、自ら佛を致得し、亦弟子に此慈愍を行ずることを教ふ。行者は大人の法を學せんと欲するが故に、亦當に殺さざるべし。

問うて曰はく、『我を侵さざる者には、殺す心を息むべし。若し侵害、強奪、逼迫を爲さば、是れ當に云何がすべき。』答へて曰はく、『應當に其輕重を量るべし。若し人、己を殺さば、先づ自ら、戒を全うするの利重きか、身を全うするを重しとなすか、戒を破るを失と爲んや、身を喪ふを失と爲んや、を思惟せよ。是の如く思惟して、已に持戒を重しと爲し、身を全うするを輕しと爲すことを知る。若し苟も免れて身を全うすとも、身に何の得る所かある。是身を名けて、老病死の藪と爲す。必ず當に壞敗すべし。若し持戒の爲に

身を失はば、其利は甚だ重し。又復思惟せよ、我、前後に身を失すること、世世無數なり、或は惡賊禽獸の身と爲り、但財利諸の不善事を爲す、今乃ち淨戒を持つことを爲すことを得るが故に、此身を惜まず、命を捨てて戒を持つことは、禁を毀りて身を全うするに勝れたること、百千萬倍にして喩と爲すべからずと。是の如く定心し、應當に身を捨てて、以て淨戒を護るべし。一の須陀洹の人の如きは、屠殺の家に生れ、年尙しうして人と成り、應當に其家業を修すべくして、而も殺生を肯んぜず、父母は刀と幷に一口の羊を與へて、屋中に閉著し、之に語りて言はく、「若し羊を殺さずんば、汝をして出でて日月を見、生活の飲食を得しめざらん」と。兒は、自ら思惟して言はく、我、若し此一羊を殺さば、便ち終に此業を爲せりとすべし、豈身を以ての故に此大罪を爲さんと。便ち刀を以て自殺す。父母は戸を開いて見るに、羊のみ一面に在りて立ち、兒は已に命絶え、自殺の時に當りて卽ち天上に生ぜり。若し是の如きは是れ壽命を惜まず、全く淨戒を護るが爲なり。是の如き等の義は、是を不殺生戒と名く。

【五】次に不盜戒に就いて。

(五)與へざるを取るとは、他の物と知り、盜心を生じて物を取り、去りて本處を離れ、物を我に屬す、是を盜と名く。若し作さざれば是を不盜と名く。其餘の方便、計挍、乃至手に捉り、未だ地を離れざる者は、是を助盜の法と名く。財物に二種有り、他に屬する有り、他に屬せざる有り。他に屬する物を取るは、是れ盜罪爲り。他に屬する物にも亦二種有り。一は聚落の中、二は空地なり。此二處の物を盜心を以て取れば、盜罪を得。若し物空地に

有らば、當に檢校すべし、是物の誰の國に近きかと、是物の應當に屬有るべきを知らば取るべからず。毘尼の中に種種の不盜を説くが如し、是を不盜の相と名く。問うて曰はく、不盜には何等の利有る。答へて曰はく、『命に二種有り、一には內、二には外。若し財物を奪はば、是を外の命を奪ふと爲す。何を以ての故に、命は飲食、衣被等に依りての故に活くればなり。若くは劫、若くは奪、是を外の命を奪ふと名く、偈に說くが如し。

一切の諸の衆生は、衣食を以て自活す
若は奪ひ若は劫取せば、是を命を劫奪すと名く

是事を以ての故に、智有るの人は劫奪すべからず。復次に、當に自ら思惟すべし、劫奪して物を得、以て自ら供養せば、身は充足すと雖も、命終亦當に死すべく、死して地獄に入り、家室親屬は共に樂を受くと雖も、獨り自ら罪を受け、亦救ふこと能はずと。已に此觀を得ば應當に盜せざるべし。復次に、是與へざるを取るに二種有り。一には偷、二には劫なり。此二は共に不與取と名く。與へざるを取る中に於て、盜を最も重しと爲す。何を以ての故に、一切の人は、財を以て自活すればなり、而るを或は穿踰して盜み取らば、是れ最も不淨なり。何を以ての故に、力の勝れたる人は、死を畏るること無くして、盜み取ればなり。故に劫奪の中にて盜を重罪と爲す。偈に說くが如し。

飢餓して身羸痩し、罪の大苦劇を受くとも
他物に觸るべからざる、譬へば大火聚の如し

若し他物を盗取せば、其主泣き悩懊す
假使天王等も、猶亦以て苦と爲す

殺生の人の罪は重しと雖も、然も殺さるる者に於ては是れ賊なり。偸盗の人は一切の有物人中に於ける賊なり、若し餘の戒を犯すも、異國の中に於ては、以て罪と爲さざる者有り。偸盗の人の若きは、一切の諸國に於て罪を治めざる無し。問うて曰はく、劫奪の人は、今世に人有り、其健なるを讃美す。此劫奪に於て、何を以てか作さざらん。答へて曰はく、『與へざるを而も盗むは、是れ不善の相なり。劫盗の中に差降有りと雖も、倶に不善と爲す。譬へば美食に毒を雜へ、惡食に毒を雜ふるに、美惡は殊なりと雖も、毒を雜ふることは異らざるが如し。亦明と闇とに火を踏まんに、晝と夜とは異りと雖も、足を燒くことは一なるが如し。今世の愚人は、罪福二世の果報を識らず、仁慈の心無くして、人の能く力を以て相侵し、他の財を強奪するを見て、讃じて以て強と爲す。諸佛賢聖は、一切を慈愍し、三世の殃禍の朽ちざるを了達して、稱歎したまはざる所なり、是を以ての故に劫盗の罪は、倶に不善と爲し、善人行者の爲さざる所なることを知る。佛、說きたまふが如くんば、與へざるを取るに十罪有り。何等をか十と爲す。一には物の主、常に瞋る。二には重く疑ふ（丹注に云ふ重罪人の疑なり）。三には非時に行じて籌量せず。四には惡人に朋黨して賢善を遠離す。五には善相を破る。六には罪を官に得。七には財物沒入す。八には貧窮の業因緣を得。九には死して地獄に入る。十には若し出でて人と爲りては勤苦して財を求め、五家

【六】次に邪婬に就いて。

の共にする所、若は王、若は賊、若は火、若は水、若は不愛の子の用、乃至、藏埋して亦失す。

（六）邪婬とは、若し女人の父母、兄弟、姉妹、夫主、兒子、世間の法、王法に守護せらるるを、若し犯す者有れば是を邪婬と名く。若し守護せずと雖も、法を以て守と爲す有り。何をか法守と云ふ。一切の出家の女人と、在家の一日戒を受くると、是を法守と名く。若くは力を以てし、若くは財を以てし、若くは誑誘し、若くは自ら妻の受戒する有り、或は娠める有り、乳兒あるは道に非ず。是の如く犯す者を名けて邪婬と爲す。乃至華鬘を以て婬女に與へて要を爲し、是の如くして犯す者を名けて邪婬と爲し、是の如きの種種を作さざるを名けて不邪婬と爲す。問うて曰はく、『人守、人瞋、法守、破法は、應に邪婬と名くべし。人自ら妻有るに、何を以て邪と爲す。』答へて曰はく、『既に一日戒を聽受して、法の中に墮つ、本是れ婦なりと雖も、今は自在ならず、受戒の時過ぐれば則ち法守に非ず、有娠の婦人は、其身重きを以て、本習ふ所を厭ひ、又娠を傷むと爲す。兒乳する時、其母を婬すれば、乳則ち竭く。又心婬欲に著するを以て復兒を護らず。非道の處は則ち女根に非ず、女は心に樂はざるに強ひて非理を以てするが故に邪婬と名く。是事を作さざるを名けて不邪婬と爲す。』

問うて曰はく、『若し夫主知らず、見ず、他を惱さざれば、何の罪有らん。』答へて曰はく、『其邪なるを以ての故に、既に名けて邪と爲し、是を不正と爲す、是故に罪有り。復次

【劍樹地獄】十六
小地獄の一。

に、此に種種の罪過有り。夫妻の情は、異身同體なり、他の愛する所を奪うて、其本心を破る、是を名けて賊と爲す。復重罪有り。惡名醜聲にして、人の爲に憎まれ、樂は少くして、畏ること多く、或は、刑戮を畏れ、又、夫主傍人に知られんことを畏れ、多く妄語を懷く。聖人の訶する所にして、罪中の罪なり。丹注に云ふ婬の罪は邪婬破戒の故に罪中の罪と名くと 復次に、婬妷の人は當に自ら思惟すべし、我婦も他の妻と同じく女人たり、骨肉情態は彼此異ること無し。而も我何んが横まに惑心を生じ、邪意に隨逐することを爲さん。邪婬の人は今世後世の樂を破失す。好名・善譽、身心安樂は今世の得なり 生天、得道、涅槃の利は後世の得なり 復次に、己の易る處を廻して、以て自ら心を制せよ。若し彼、我妻を侵さば、我、則ち忿恚せん。若し我、彼を侵さば、彼も亦何んが異らん。已を恕して自ら制するが故に、應に作さざるべし。復次に、佛の說きたまふが如くんば、邪婬の人は、後、劍樹地獄に墮して、衆苦備に受け、出でて人と爲ることを得ては、家道穆じからず、常に婬婦に值ひ、邪僻、殘賊、邪婬患を爲す。譬へば蝮蛇の如く、亦大火の如く、急に之を避けずんば、禍害將に及ばんとす。佛の說きたまふが如くんば、邪婬に十罪有り。一には常に婬せらるる所の夫主は之を危害せんと欲す。二には夫婦穆じからず、常に共に鬪諍す。三には諸の不善法日日に增長し、諸の善法に於て日日に損減す。四には身を守護せず、妻子孤寡なり。五には財産日に耗る。六には諸の惡事有りて常に人の爲に疑はる。七には親屬知識の愛喜せざる所なり。八には怨家の業因緣を種う。九には身壞れ、命終し、死して地獄に入る。十には若し出でて女人と爲りては、多人共に夫と

【七】次に妄語に就いて。

爲り、若し男子と爲りては、婦貞潔ならず。是の如き等の種種の因緣を作らざる、是を不邪婬と名く。

妄語とは、不淨心もて他を誑かさんと欲し、實を覆ひ隱して異語を出し、口業を生ず。是を妄語と名く。妄語の罪は言聲に從うて相解するより生ず。若し相解せざれば、實語ならずと雖も妄語の罪無し。是妄語は、知るを知らずと言ひ、知らざるを知ると言ひ、見るを見ずと言ひ、見ざるを見ると言ひ、聞くを聞かずと言ひ、聞かざるを聞くと言ふ、是を妄語と名く。若し作さざれば、是を不妄語と名く。問うて曰はく、妄語に何等の罪有る。答へて曰はく、妄語の人は先づ自ら身を誑かし、然る後、人を誑かす。實を以て虛と爲し、虛を以て實と爲し、虛實顚倒して善法を受けず。譬へば、覆へる瓶は水を入るるを得ざるが如し。妄語の人は心に慚愧無く、天道涅槃の門を閉塞す。此罪を觀知す、是故に作さざるなり。復次に、實語を觀知すれば、其利甚だ廣し、實語の利は自ら己より出でて、甚だ得易しと爲す。是を一切出家の人の力と爲す。是の如き功德は、居家出家の人、共に此利有り、善人の想なり。復次に、實語の人は、其心端直なり、其心端直なれば、苦を免るることを得易し。譬へば稠林の木を曳くに、直き者は出し易きが如し。問うて曰はく、若し妄語に是の如きの罪有らば、人は何を以ての故に妄語する。答へて曰はく、有人は、愚癡少智にして、事の苦厄に遭へば、妄語して脫せんことを求め、事の發するを知らず、今世に罪を得て、後世に大罪報有ることを知らざるなり。復、有人は、妄語の罪を

【倶伽離】コーカーリカ(Kokālika)牛守と譯す。

知ると雖も、慳貪、瞋恚、愚癡多きが故に、而も妄語を作すなり。復、有人は、貪恚ならずと雖も、而も妄りに人の罪を證し、心に實に爾りと謂ひ、死して地獄に墮つ。提婆達多の弟子、倶伽離の如きは、常に舍利弗、目揵連の過失を求む、是時、二人は、夏安居し竟りて諸國に遊行し、天の大雨に値うて陶作の家に到り陶器を盛るの舍に宿す。此舍の中に先より一女人有り、闇中に在りて宿せしが、二人は知らざりき。此女は、其夜、夢に不淨を失し、晨朝、水に趣きて澡洗す。是時、倶伽離は偶行きて之を見る。倶伽離は能く人の交會の情狀を相知りしも、而も夢みると夢みざるとを知らず。是時、倶伽離は、顧みて弟子に語らく、「此女人は昨夜、人と情を通ず」と。即ち女人に問はく、「汝、何の處に在りて臥す」と。答へて言はく、「我、陶師の屋中に在りて寄宿す」と。又問はく「誰と共にせしや」と。答へて言はく、「二比丘有りき」と。是時、二人は屋中より出づ。倶伽離は見已りて、又以て之を相驗し、意に謂へらく、「二人は必ず不淨を爲せり」と。先づ嫉妬を懷き、既に此事を見て、遍く諸の城邑聚落に之を告げ、次に祇桓に到りて此惡聲を唱ふ。此中間に於て、梵天王來りて、佛に見えたてまつらんことを欲す。佛、靜室に寂念として三昧に入りたまへり。諸の比丘衆も亦各房を閉ぢて三昧し、皆覺るべからず。即ち自ら思惟すらく、我、故に來りて佛に見ゆるに、佛は三昧に入りたまふ、且つ還り去らんと欲すと。即ち復、念じて言はく、「佛の定より起ちたまはんこと、亦將に久しからじ」と。是に於て小らく住り、倶伽離の房の前に到り、其戶を扣き、倶伽離に言はく、「倶伽離、倶

利弗、目揵連は、心淨くして柔軟なり、汝之を謗りて、長夜に苦を受くること莫れ」と。倶伽離問うて言はく、「汝は是れ何人ぞ」と。答へて言はく、「我は是れ梵天王なり」と。問うて言はく、「佛、汝が阿那含道を得たりと說きたまへり、汝、何を以ての故に來る」と。

梵王は心に念じて、偈を說いて言はく、

無量の法を量らんと欲するも、應に相を以て取るべからず
無量の法を量らんと欲するも、是野人は覆沒す

是偈を說き已りて、佛の所に到り、具に其事を說く。佛言はく、「善い哉善い哉、快く此偈を說けり」と。爾時、世尊、復此偈を說きたまはく、

無量の法を量らんと欲するも、應に相を以て取るべからず
無量の法を量らんと欲するも、是れ野人は覆沒す

梵天王は、佛說を聽き已りて、忽然として現ぜず、即ち天上に還る。爾時、倶伽離に、佛の所に到りて頭面に佛の足を禮し、卻いて一面に住す。佛、倶伽離に告げたまはく、「舍利弗と目揵連とは、心淨くして柔軟なり、汝之を謗りて、長夜に苦を受くること莫れ」と。倶伽離、佛に白して言さく、「我は佛語に於て敢て信ぜざるにあらず、但自ら目に見ること了了なり、定んで二人の實に不淨を行へることを知る」と。佛、是の如く、三たび訶したまふに、倶伽離は三たび受けず、即ち座より起ちて去り、其房中に還るに、身を擧げて瘡を生ず。始めは芥子の如く、漸く大にして豆の如く、棗の如く、㮈の如く、轉た大にして

【大蓮華地獄】マハーパドマ(Mahapadma)と梵にいふ

【阿浮陀】アルブダ(Arbuda)水泡と譯す。

【尼羅浮陀】ニラブダ(Nirabuda)水泡裂と譯す。

【阿羅邏】アタタ(Atata)

【呵婆婆】ハハヷ(Hahava)

【休休】フフヷ(Huhuva)右三は寒苦のために右の如き音出づるのみといふ。

【漚波羅】ウトパラ(Utpala)青蓮華と譯す。

【分陀梨迦】プンダリーカ(Pundarika)紅蓮華と譯す

【摩呵波頭摩】マハーパドマ(Mahapadma)大蓮華と譯す。

苽の如く、翕然として爛壞して、大火の燒くが如く、叫喚哮吼して、其夜卽ち死し大蓮華地獄に入れり。一梵天有り、夜來りて佛に白さく、「倶伽離は已に死せり」と。復一梵天有り、言はく、「大蓮華地獄に墮す」と。其夜過ぎ已りて佛は僧の集を命じ、之に告げて言はく、「汝等は、倶伽離の墮する所の地獄の壽命の長短を知らんと欲するや不や」と。諸の比丘言はく、「願樂くば、聞かんことを欲す」と。佛言はく「六十斛の胡麻有り、人有り、百歲にして一の胡麻を取る。是の如くして盡すに至らんに、阿浮陀地獄の中の壽は故に未だ盡きず。二十の阿浮陀地獄の中の壽を、一の尼羅浮陀地獄の中の壽と爲し、二十の尼羅浮陀地獄の中の壽の如きを、一の阿羅邏地獄の中の壽と爲し、二十の阿羅邏地獄の中の壽を、一の呵婆婆地獄の中の壽と爲し、二十の阿婆婆地獄の中の壽を、一の休休地獄の中の壽と爲し、二十の休休地獄の中の壽を、一の漚波羅地獄の中の壽と爲し、二十の漚波羅地獄の中の壽を、一の分陀梨迦地獄の中の壽と爲し、二十の分陀梨迦地獄の中の壽を、一の摩呵波頭摩地獄の中の壽と爲す。倶伽離は是摩呵波頭摩地獄の中に墮し、其大舌を出して、五百の釘を以て之に釘ち、五百の具犂もて之を耕す。爾時、世尊、此偈を說いて言はく、

夫れ士の生るるや、斧口の中に在り
身を斬る所以は、其惡言に由る
呵すべきを讚じ、讚ずべきを呵し
口に諸惡を集めて、終に樂を見ず

心口の業、惡を生ぜば、尼羅浮獄に墮して
具に百千世に滿ちて、諸毒の苦痛を受く
若は阿浮陀に生じて、具に三十六を滿し
別に更に五世有りて、皆諸の苦毒を受く
心、邪見に依りて、賢聖の語を破るは
竹の實を生じて、自ら其形を毀つが如し

是の如き等の心に疑謗を生じ、遂に決定するに至るも、亦是れ妄語なり。妄語の人は、乃ち佛語すら信受せざるに至る。罪を受くること是の如し、是を以ての故に妄語すべからず。復次に、佛子羅睺羅の如きは、其年幼稚にして未だ口を愼むことを知らず、人來りて之に「世尊、在すや不や」と問へば、詭りて「在さず」と言ふ。若し在さざる時、人、羅睺羅に、「世尊、在すや不や」と問へば、詭りて、「佛、在す」と言ふ。有人佛に語ぐ。佛、羅睺羅に語げたまはく、「澡盤に水を取りて、吾がために足を洗へ」と。足を洗ひ已るや、羅睺羅に語げたまはく、「此澡盤を覆せ」と。勅の如く、即ち覆す。佛言はく、「水を以て之に注げ」と。注ぎ已れば、問うて言はく、「水は中に入るや不や」と。答へて言さく、「入らず」と。佛、羅睺羅に告げたまはく、「無慚愧の人、妄語して心を覆へば、道法の入らざること、亦復是の如し」と。佛の說きたまふが如くんば、妄語に十罪有り。何等をか十と爲す。一には口氣臭し。二には善神之を遠かり、非人便を得。三には實語有りと雖も、

【八】次に不飲酒に就いて。

人信受せず。四には智人謀議して常に參預せず。五には常に誹謗せられ、醜惡の聲周く天下に聞ゆ。六には人の敬せざる所にして、教勅有りと雖も、人承用せず。七には常に憂愁多し。八には誹謗の業因縁を種う。九には身壞し、命終して、當に地獄に墮すべし。十には若し出でて人と爲りては、常に誹謗せらる。是の如きの種種を作さざる、是を不妄語と爲し、口の善律儀と名く。

(八)不飲酒とは酒に三種有り。一には穀酒、二には果酒、三には藥草酒なり。果酒とは蒲桃阿梨咤樹果、是の如き等の種種を名けて果酒と爲す。藥草酒とは、種種の藥草を、米麴甘蔗の汁の中に合和すれば、能く變じて酒と成ること、蹄畜乳酒に同じ。一切の乳熱すれば、中は酒と作るべし。略說すれば、若は乾、若は濕、若は淸、若は濁なり、是の如き等は、能く人をして、心動き、放逸ならしむ。是を名けて酒と爲す。一切應に飲まざる、是を不飲酒と名く。問うて曰はく、「酒は、能く冷を破り、身を益し、心をして歡喜せしむ。何を以ての故に飲まざる。」答へて曰はく、『身を益すること甚だ少くして、損ずる所甚だ多し。是故に飲むべからず。譬へば美飲の、其中に毒を雜ふるが如し。是れ何等の毒なるか。佛の難提迦優婆塞に語りたまふが如くんば、酒に三十五の失有り。何等か三十五なる。一には現在世に財物虛しく竭く。何を以ての故に。人酒を飲んで醉へば、心に節限無く、用を費すこと度無きが故なり。二には衆病の門なり。三には鬪諍の本なり。四には裸露にして恥無し。五には醜名惡聲にして、人の敬はざる所なり。六には智慧を覆ひ沒す。七に

は應に得らるべき物を得ず、已に得る所の物は散失す。八には伏匿の事を、盡く人に向うて說く。九には種種の事業廢して成辨せず。十には醉は愁の本と爲る。何を以ての故に、醉の中には失すること多く、醒め已りて慚愧憂愁すればなり。十一には身力轉た少なし。十二には身色壞る。十三には父を敬ふことを知らず。十四には母を敬ふことを知らず。十五には沙門を敬はず。十六には婆羅門を敬はず。十七には伯叔及び尊長を敬はず。何を以ての故に、醉悶恍惚として別つ所無きが故なり。十八には佛を尊敬せず。十九には法を敬はず。二十には僧を敬はず。二十一には惡人と朋黨す。二十二には賢善を疎遠す。二十三には破戒の人と作る。二十四には無慚無愧なり。二十五には六情を守らず。二十六には色を縱にして放逸なり。二十七には人の憎惡する所にして、之を見ることを喜ばず。二十八には貴重の親屬及び諸の知識の共に擯棄する所なり。二十九には不善の法を行ず。三十には善法を棄捨す。三十一には明人智士の信用せざる所なり。何を以ての故に、酒は放逸なるが故なり。三十二には涅槃を遠離す。三十三には狂癡の因緣を種う。三十四には身壞れ、命終して、惡道泥犁の中に墮つ。三十五には若し人と爲ることを得ては、所生の處常に當に狂騃なるべし。是の如き等の種種の過失有り、是故に飲まず。偈に說くが如し。

酒は覺知の相を失ふ、身色濁りて惡しく
智心動じて亂る、慚愧已に劫かされ
念を失して瞋心を增し、歡を失して宗族を毀る

【九】優婆塞が持つ五戒に就いて。
【三律儀】不惡口、不兩舌、不綺語をいふ。
【三事】惡口、兩舌、綺語。

是の如きを飲と名くと雖も、實に飲は死賊爲り
瞋るべからずして瞋り、笑ふべからずして笑ひ
哭すべからずして哭し、打つべからずして打ち
語るべからずして語り、狂人と異なる無く
諸の善功德を奪ふ、愧を知る者は飲まず

是の如きの四罪を作さざるは、是れ身の善律儀にして、妄語を作さざるは、是れ口の善律儀なり、名けて優婆塞の五戒律儀と爲す。

(九)問うて曰はく、『若し八種の律儀及び淨命は、是を名けて戒と爲さば、何を以ての故に、優婆塞は口律儀の中に於て、三律儀及び淨命無き。』答へて曰はく、『白衣の居家は、世間の樂を受け、兼て福德を修し、盡く戒法を行ずること能はず、是故に佛、五戒を持たしめたまふ。復次に、四種の口業の中に、妄語は最も重し。復次に、妄語は心に生じて故に作す、餘は或は故に作し、或は故に作さざるなり。復次に、但妄語を說けば、已に三事を攝す。復次に、諸の善法の中に、實を最大と爲す。若し實語を說けば、四種の正語は皆已に攝するを得。復次に、白衣は世に處して當に官理し、家業を務め使を作すべし、是故に惡口ならざるの法を持し難し。妄語は故に事重と作すが故に作に應ぜず。是五戒に五種の受有り。五種の優婆塞と名く。一には一分を行ふ優婆塞、二には少分を行ふ優婆塞、三には多分を行ふ優婆塞、四には滿行の優婆塞、五には婬を斷ずる優婆塞たり。一分

を行ふとは、五戒の中に於て、一戒を受け乃至四戒を受持すること能はず。少分を行ふとは、若くは二戒を受け、若くは三戒を受く。多分を行ふとは、四戒を受く。滿行とは、盡く五戒を持つ。婬を斷ずとは、五戒を受け已りて、師の前にて更に自ら誓言を作さく、我は自らの婦に於て、復婬を行ぜずと。是を五戒と名く。佛、偈もて說きたまへるが如し。

不殺亦不盗、亦邪婬すること有らざる
實語不飲酒、正命は淨心を以てす
若し能く此を行ぜば二世の憂畏を除き
戒福恆に身に隨ひ、常に天人と倶ならん
世間の六時の華は、榮曜の色相發す
此一歳の華を以て、天上には一日に具る
天樹自然に生じ、華蔓及び瓔珞有り
丹葩は燈の照すが如く、衆色相間錯す
天衣は無央數にして、其色若干種なり
鮮白にして天日に映じ、輕く密にして間壟無し
金色は繡文を照し、斐亹として雲氣の如し
是の如き上妙の服は、悉く天樹より出づ
明珠天耳の璫、寶渠は手足を曜し

心の好愛する所に隨うて、亦天樹より出づ
金の華瑠璃の莖、金剛を華鬚と爲し
柔軟の香は芬熏として、悉く寶池より出づ
琴瑟箏笛簫は、七寶を校飾と爲し
器妙なるが故に音清し、皆亦樹より出づ
波利質姤樹は、天上の樹中の王なり
彼歡喜園に在りて、一切比すること有る無し
持戒を耕田と爲し、天樹は中より出づ
天厨の甘露味は、飲食すれば飢渴を除き
天女には監礙無く、亦姙身の難無し
熈怡して縱ままに遊樂し、食すれども便利の患無く
戒を持して常に心を攝し、生を自然の地に得て
無事にして亦無難なり、常に樂志を肆ままにするを得
諸天は自在を得て、憂苦復生ぜず
欲する所念に應じて至り、身光は幽冥を照す
是の如きの種種の樂は、皆施と戒とに由る
若し此報を得んと欲せば、當に勤めて自ら勉勵すべし

【二〇】優婆塞の持戒として五戒の外に一日戒と六齋戒とを明し、其一戒の受くる作法を說く。

問うて曰はく、『今尸羅波羅蜜を說けば、當に以て成佛すべし、何を以ての故に乃ち天福を讃する。』答へて曰はく、『佛、言はく、二事は必ず報果を得ること虛しからず。布施は大富を得、持戒は好處に生じ、修定は解脫を得。若し單に尸羅を行ずれば、好處に生ずることを得、若し定を修し、智慧、慈悲、和合すれば三乘道を得と。今は但持戒を讃ず。現世の功德は、名聞安樂にして、後世の得報は、偈に讃ずる所の如し。譬へば小兒は蜜を苦藥に塗りて、然る後に能く服するが如し。今先づ戒の福を讃じ、然る後に人能く戒を持つ。能く戒を持ち已りて大誓願を立て、佛道に至ることを得。是を尸羅は尸羅波羅蜜を生ずと爲す。又一切の人は皆樂に著するを以て、世間の樂は天上を最と爲す。若し天上の種種の快樂を聞いては、便ち能く尸羅を受行し、後天上の無常を聞いて、厭患の心を生じ、能く解脫を求む。更に佛の無量の功德を聞いて、若し慈悲心生ずれば、尸羅波羅蜜に依りて、佛道に至ることを得。是を以ての故に、尸羅の報を說くと雖も、咎無し。』

二〇 問うて曰はく、『白衣の居家は、唯此五戒のみなりや、更に餘の法有りや。』答へて曰はく、『有り。一日戒と六齋日を持つ有らば功德無量なり。若し十二月一日より十五日に至るまで、此戒を受持すれば、其福甚だ多し。』問うて曰はく、『云何が一日戒を受くる。』答へて曰はく、『一日戒の法を受くるには、長跪し合掌して是の如く言ふべし、「我某甲、今一日一夜佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依す」と。是の如く三たびし、是の如く三たび歸依す。「我某甲、佛に歸依し竟り、法に歸依し竟り、僧に歸依し竟る」と。是の如く三たびし、是の

【布薩】ポーシャダ(Posadha)共住と譯す。諸の惡不善の法、及び諸の煩惱を斷じて究竟の清淨の梵行を修すること、毎月十五日の間之を行うて犯戒を懺悔するなり。

如く、三び歸依し竟る。「我某甲、若は身業不善、若は口業不善、若は意業不善にして、貪欲、瞋恚、愚癡の故に、若は今世に、若は過世に、是の如きの罪有り。今日、誠心に懺悔す、身清淨に、口清淨に、心清淨ならん。八戒を受行するは、是れ則ち布薩たり」(秦に共住と言ふ)諸佛の、壽を盡すまで殺生したまはざりしが如く、我某甲、一日一夜、生を殺さざるも、亦是の如し。諸佛の、壽を盡すまで盜したまはざりしが如く、我某甲、一日一夜、盜せざるも、亦是の如し。諸佛の、壽を盡すまで婬したまはざりしが如く、我某甲、一日一夜、婬せざるも亦是の如し。諸佛の、壽を盡すまで妄語したまはざりしが如く、我某甲、一日一夜、妄語せざるも亦是の如し。諸佛の、壽を盡すまで飲酒したまはざりしが如く、我某甲、一日一夜、飲酒せざるも亦是の如し。諸佛の、壽を盡すまで高大なる床の上に坐したまはざりしが如く、我某甲、一日一夜、高大なる床の上に坐せざるも亦是の如し。諸佛の壽を盡すまで、花の瓔珞を著けたまはず、香を身に塗りたまはず、香熏の衣を著けたまはざりしが如く、我某甲、一日一夜、花の瓔珞を著けず、香を身に塗らず、香熏の衣を著けざるも亦是の如し。諸佛の壽を盡すまで、自ら歌舞し樂を作したまはず、往いて觀聽したまはざりしが如く、我某甲、一日一夜、自ら歌舞し、樂を作さず、往いて觀聽せざるも亦是の如し、已に八戒を受けたり。諸佛の壽を盡すまで、中を過ぎて食したまはざりしが如く、我某甲、一日一夜、中を過ぎて食せざること上の如く亦是の如し、我某甲、八戒を受行し、隨うて諸佛の法を學するを名けて布薩と爲す。願くば是布薩を持ちて福報願うて生ぜん、

生れて三惡八難に墮せざらん。我も亦轉輪聖王、梵釋天王の世界の樂を求めず、願くば、諸の煩惱を盡し、薩婆若を逮得して、佛道を成就せん」と。問うて曰はく、「云何が五戒を受くる」。答へて曰はく、「五戒の法を受くるには、長跪し合掌して言はく、『我某甲、佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依す』と。是の如く三たびし、是の如く三たびす。『我某甲、佛に歸依し竟り、法に歸依し竟り、僧に歸依し竟んぬ』と。是の如く三たびし、是の如く三たびす。『我は是れ釋迦牟尼佛の優婆塞なり。我某甲、今日より壽を盡すまで歸依することを證知したまへ』と。戒師は、應に言ふべし、『汝、優婆塞聽け、是多陀阿伽度、阿羅呵、三藐三佛陀は、人を知り、人を見たまひ、優婆塞の爲に五戒を說きたまふこと是の如し。汝壽を盡すまで、何等の五をか持たん。壽を盡すまで殺生せず、是れ優婆塞の戒なり。是中に、壽を盡すまで、故らに殺生すべからず。是事を若し能くせば、當に諾すと言ふべし。壽を盡すまで盜せず、是優婆塞の戒なり。是中に、壽を盡すまで盜すべからず。是事を若し能くせば、當に諾すと言ふべし。壽を盡すまで邪婬せず、是れ優婆塞の戒なり。是中に、壽を盡すまで邪婬せず、是れ優婆塞の戒なり。是中に、壽を盡すまで邪婬すべからず、是事を若し能くせば、當に諾すと言ふべし。壽を盡すまで妄語せず、是れ優婆塞の戒なり。是中に、壽を盡すまで妄語すべからず。是事を若し能くせば、當に諾すと言ふべし。壽を盡くすまで飮酒せず、是れ優婆塞の戒なり。是中に、壽を盡すまで飮酒すべからず。是事を若し能くせば、當に諾すと言ふべし。是優婆塞の五戒は、壽を盡すまで受持し

て、當に三寶たる、佛寶、法寶、比丘僧寶に供養し、福業を勤修して、以て佛道を求むべし」問うて曰はく、『何を以ての故に、六齋日に八戒を受け、福德を修するや」答へて曰はく、『是日は、惡鬼、人を逐うて人命を奪はんと欲し、疾病凶衰、人をして不吉ならしむ。是故に、劫初の聖人は、人をして持齋し、善を修し福を作し、以て凶衰を避けしむ。是時、齋法は八戒を受けず、直に一日食せざるを以て齋と爲す。後に佛、出世して、之に教へ語りて言はく、「汝當に一日一夜、諸佛の如く八戒を持し、中を過ぎて食せざるべし」と。是功德は人を將ゐて涅槃に至らしむ。』『四天王經』の中に佛の說きたまふが如くんば、月の六齋日には、使者、太子及び四天王は、自ら下りて、衆生の布施し、持戒し、父母に孝順することを觀察し、少ければ便ち忉利に上りて、以て帝釋に啓す。帝釋諸天は、心に皆悅ばず、說いて言はく「阿脩羅種は多く、諸天種は少し」と。若し布施し、持戒し、父母に孝順なること多ければ、諸天帝釋は心に皆歡喜し、說いて言はく、「諸天の衆を增益し、阿脩羅を減損す」と。是時、釋提婆那民は諸天の歡喜するを見て、此偈を說いて言はく、

六日神足、月に淸淨戒を受持す
是人は壽終の後、功德必ず我如くならん

佛、諸の比丘に告げたまはく、「釋提桓因は是の如きの偈を說くべからず、所以は何、釋提桓因は三毒三衰未だ除かず、云何が妄りに一日の戒を持てば、功德報、必ず我如くなることを得んと言はん」と。若し此戒を受持すれば、必ず應に佛の如くなるべし、是

【六齋日】毎月八日、十四日、十五日、廿三日、廿九日、三十日、此日は四天王が天下を按行して伺察する日故、身を慎み心を清め持戒すべしといふ。

【摩醯首羅】マヘーシュヴァラ(Maheśvara)自在天のこと。

則ち實說なり。諸大尊天は歡喜の因緣の故に、轉た増多きことを得るなり。復次に、此六齋日には惡鬼人を害し、一切を惱亂す。若し所在の丘聚、郡縣、國邑に齋を持ち、戒行を受くるの善人有れば、此因緣を以て、惡鬼遠く去りて、住處安隱ならん。是を以ての故に六日齋を持ち、戒を受くれば、福を得ること増多し。問うて曰はく、『何を以ての故に諸の惡鬼神の輩は此六日を以て、人を惱し害する。』答へて曰はく、『天地本起經』に說く、劫の初めて成ずるの時、異れる梵天王の子有り、諸の鬼神の父たり。梵志の苦行を修して、天上の十二歳に滿つ、此六日に於て肉を割き、血を出し以て火中に著く。是を以ての故に、諸の惡鬼神は、此六日に於て輙ち勢力有り。問うて曰はく、『諸の鬼神の父は、何を以てか、此六日に於て身の肉血を割きて以て、火中に著くる。』答へて曰はく、『諸神の中、摩醯首羅神は、最大にして第一なり。諸神は皆日分有り、摩醯首羅は一月に四日の分有り、八日と二十三日と十四日と二十九日となり。餘の神は一月に一日の分有り。月の一日と十六日と、月の二日と十七日となり。其十五日と三十日とは一切の神に屬す。摩醯首羅は諸神の主たり。又、日多きことを得るが故に、其四日を數へて齋と爲す。二日は是れ一切諸神の日にして、亦數へて以て齋と爲す。是故に、諸の鬼神は、此六日に於て輙ち力勢有り。』

復次に、諸の鬼神の父は、此六日に於て肉を割き、血を出し、以て火中に著け、十二歳を過ぎ已りて、天王來り下りて、其子に語りて言はく、「汝、何の願をか求むる」と。答へて

〔二二〕在家の四種持戒と出家の四種律儀並にその持戒の得度の難易を明す

言はく、「我、子有らんことを求む」と。天王言はく、「仙人の供養の法は、燒香甘果の諸の淸淨の事を以てす。汝云何が血肉を以て火中に著け、罪惡の法の如くし、汝善法を破りて樂んで惡事を爲す。汝をして惡子を生み、肉を噉ひ血を飮ましめん」と。說くに當り、是時火中より八大鬼有りて出づ。身の黑きこと墨の如く、髮は黃に眼は赤くして、大なる光明有り、一切の鬼神は皆此八鬼より生ず。是を以ての故に此六日に於て、身の肉血を割きて、以て火の中に著けて勢力を得。佛法の中の如きは、日に好惡無し。世の惡日の因緣に隨ふが故に、齋を持ち、戒を受くることを敎ふるのみ。」問うて曰はく、「五戒と一日戒とは何をか勝れたりと爲ん。」答へて曰はく、「因緣有るが故に、二戒倶に等し。但五戒は身を終るまで持ち、八戒は一日持つのみ。又、五戒は常に持てども、時は多くして戒は少し、一日戒は時は少くして戒は多し。復次に、若し大心無ければ、復身を終るまで戒を持つと雖も、大心有る人の、一日戒を持つには如かず。譬へば軟夫を將と爲せば、復兵を將ゐること終身なりと雖も、智勇足らず、卒に功名無きが如し、若し英雄奮發すれば、禍亂立ちどころに定まり、一日の勳功天下を蓋ふが如し。是二種の戒を居家の優婆塞の法と名く。

〔二二〕居家の持戒に凡そ四種有り。下、中、上有り、上上有り。下人の持戒は今世の樂の爲の故なり。或は稱譽名聞を悕望する爲の故なり。或は家法を曲げて他意に隨はんが爲の故なり。或は苦役を避けて危難を離れんことを求むるが故なり。是の如きの種種は是れ下人の

持戒なり。中人の持戒は、人中の富貴、歡樂、適意の爲の故なり、或は後世の福樂を期し、己に剋ち自ら勉めて苦しむが爲に、日はかくとも得る所は甚だ多し、[illegible]の如く、[illegible]閒にして戒を持てば、譬へば商人の遠く出で深く入れば、利を得ること必ず多きが如く、持戒の福の人をして後世の福樂を受けしむるも亦復是の如し。上人の持戒は涅槃の爲の故なり。諸法は一切無常なりと知るが故なり。苦を離れ常に樂にして、無爲ならんことを求めんと欲するが故なり。復次に、持戒の人は其心悔いず、心に悔いざるが故に喜樂を得、喜樂を得るが故に一心を得。一心を得るが故に實智を得。實智を得るが故に厭心を得、厭心を得るが故に離欲を得。離欲を得るが故に解脫を得。解脫を得るが故に涅槃を得。是の如きの持戒を諸の善法の根本と爲す。復次に持戒は八正道の初門たり、入道の初門は必ず涅槃に至る。

大智度論釋初品中讚尸羅波羅蜜義第二十三

問うて曰はく、「八正道の如きは、正語正業は中に在り、正見正行は初に在り、今何を以てか戒を八正道の初門と爲すと言ふ。」答へて曰はく、「數を以て之を言へば、大なる者を始と爲す、正見は最大なり、是故に初に在り。復次に、行道の故に見を以て先と爲す。諸法の次第の故に、戒は前に在り。譬へば屋を作るに棟梁は大なりと雖も、地を以て先と

【式叉摩那】シクシャマーナー（Śikṣamāṇā）學法女、正學女と譯す。沙彌尼より比丘尼に至る二年間、戒を持ち四根本、六法行法を修學するものをいふ。

爲すが如し。上上人の持戒は、衆生を憐愍し、佛道の爲の故なり。諸法を知り實相を求むるを以ての故なり。惡道を畏れず、樂を求めざるが故なり。是の如きの種種は、是れ上上人の持戒なり。是四は總じて優婆塞の戒と名く。出家の戒にも亦四種有り。一には沙彌、沙彌尼戒、二には式叉摩那戒、三には比丘尼戒、四には比丘僧戒なり。『問うて曰はく、若し居家の戒は天上に生ずることを得、菩薩の道を得、亦涅槃に至ることを得ば、復何んが出家の戒を用ひん。答へて曰はく、俱に得度すと雖も、然も難易有り。居家は生業の種種の事務有り。若し心に道法を專らにせんと欲せば家業則ち廢れ、若し專ら家業を修めんと欲せば、道事則ち廢る。取らず捨てざれば乃ち法を行ずべし、是を名けて難と爲す。若し出家は俗を離れ、諸の忿亂を絶す、一向專心なれば、道を行ずること易しと爲す。復次に、居家は憒閙にして多事多務、結使の根、衆惡の府なり。是を甚だ難しと爲す。若し出家せば譬へば人有り、出でて空野に在るが如し、無人の處にして其心を一にし、思無く慮無く、內想既に除き、外事亦去る。偈に說くが如し。

林樹の間に閑坐し、寂然として衆惡を滅し
恬澹にして一心なるを得、斯樂は天の樂に非ず
人は富、貴、利、名、衣、好床褥を求む
斯樂は安隱にあらず、利を求めて厭足無ければなり
納衣にして乞食を行ずるものは、動止に心常に一なり

自ら智慧の眼を以て、諸法の實を觀知し
種種の法門の中に、皆以て等しく觀入し
解慧の心寂然たり、三界に能く及ぶもの無し

是を以ての故に出家の戒を修し、道を行ずることは易しと爲すことを知る。復次に、出家は、戒を修して無量の善律儀を得、一切を具足し滿ず。是故に白衣は、等しく應に出家し、具足戒を受くべし。復次に、佛法の中にて、出家の法は第一にして、修し難し。閻浮呿提梵志、舍利弗に問はく「佛法の中に於て、何者か最も難き」舍利弗、答へて曰はく、「出家を難しと爲す」又問はく「出家は何等の難きことか有る」答へて曰はく、「出家の樂法を難しと爲す」「既に樂法を得れば復何者か難しと爲す」「諸の善法を修すること難し」是を以ての故に應に出家すべし。復次に若し人出家する時は、魔王は驚き愁へて言はく、「此人は諸の結使薄からんことを欲す、必ず涅槃を得て、僧寶の數の中に墮せん」と。復次に、佛法の中にて、出家の人は戒を破りて罪に墮すと雖も、罪畢りて解脱することを得。「優鉢羅華比丘尼本生經」の中に説くが如くんば、佛、世に在す時、此比丘尼は六神通の阿羅漢を得、貴人の舍に入り常に出家の法を讃ず。諸の貴人、婦女に語りて言はく、「姉妹出家すべし」諸の貴婦女言はく、「我等は少壯にして容色盛美なり。戒を持つこと難しと爲す、或は當に戒を破るべし」比丘尼言はく、「但出家せよ、戒を破らば便ち破れ」問うて言はく、「破戒は當に地獄に墮すべし、云何が破るべき」答へて言はく、「地獄に墮せば便

ち墮せよ」諸の貴婦女、之を笑うて言はく、「地獄は罪を受く、云何が墮すべき」比丘尼言はく、「我、自ら本の宿命を憶念するに、時に戯女と作り、種種の衣服を著て舊語を說く。或時は、比丘尼の衣を著て、以て戯笑を爲す。是因縁を以ての故に、迦葉佛の時、比丘尼と作り、自ら貴姓端政なるを恃みて心に憍慢を生じ、禁戒を破す。戒を破するの罪の故に、地獄に墮して種種の罪を受く。罪を受け畢りて、釋迦牟尼佛に値ひたてまつり、出家して、六神通の阿羅漢道を得たり」是故に出家して戒を受くれば、復戒を破ると雖も、戒の因縁を以ての故に阿羅漢道を得ることを知る。若し但惡を作りて戒の因縁無ければ道を得ず。我乃ち昔時世世に地獄に墮し、地獄より出でて惡人と爲り、惡人死して還りて地獄に入り、都て所得無し。今此を以て證知するに、出家して戒を受くれば、復戒を破ると雖も、是因縁を以て道果を得べし」と。復次に佛、祇洹に在せしとき、一の醉へる婆羅門有り。佛の所に來到し、比丘と作らんことを求む。佛、阿難に勅して、與に剃頭して、法衣を著せしむ。醉酒既に醒め、己の身の忽に比丘と爲れることを驚き怪しみ、即便、走り去る。諸の比丘、佛に問はく、「何を以てか此醉へる婆羅門に比丘と作ることを聽したまひし」と。佛、言はく、「此婆羅門は無量劫の中に、初より出家の心無し。今醉へるに因るが故に、暫く微心を發す、是因縁を以ての故に當に、出家得道すべし。是の如き種種の因縁により、出家の利功德は無量なり。是故に白衣は五戒有りと雖も、出家に如かず。是出家の律儀に四種有り。沙彌と沙彌尼と式叉摩那と比丘尼と比丘となり。云何が沙彌と沙

【和上】ウパードヤーヤ(Upadhyāya)親教師と譯す。受戒の時の師。
【阿闍梨】アーチャールヤ(Ācārya)教師と譯す。
【六法】不摩觸、不盜四錢以下、不殺畜生、不小妄語、不飲酒、不非時食をいふ。
【五衣】比丘尼の三衣、即ち衆聚時衣、上著衣、中著衣の外に[illegible]と覆肩をいふ。

彌尼の受戒の法なる。白衣來りて出家せんことを求めんと欲せば、當に二師を求むべし、一には和上、二には阿闍梨なり。和上は父の如く、阿闍梨は母の如し。本生の父母を棄つるを以て、當に出家の父母を求むべし。袈裟を著し、鬚髮を剃除し、應に兩手を以て應に和上の兩足を捉ふべし。何を以てか足を捉ふる。大德の法は足を捉ふるを以て、第一の恭敬供養と爲す。阿闍梨は應に十戒を教ふること、受戒の法の如くなるべし。沙彌尼も亦是の如し。唯比丘尼を以て和上と爲す。式叉摩那は六法を受くること二歲なり。問うて曰はく、『沙彌は十戒にして便ち具足戒を受くるなり。比丘尼の法の中に、何を以てか式叉摩那有りて、然る後に具足戒を受くることを得る。』答へて曰はく、『佛、世に在す時、一の長者の婦有り。懷妊を覺らずして出家し、具足戒を受け、其後身大いに轉現す。諸の長者、比丘尼を譏り嫌へり。此に因りて二歲戒を學び六法を受くること有ちて、然る後に具足戒を受くることを聽す。』問うて曰はく、『若し譏嫌の爲に、式叉摩那あらば、豈に譏を致さざらん。』答へて曰はく、『式叉摩那は未だ具足戒を受けず、譬へば小兒の如く、亦給使の如し。罪穢有りと雖も、人譏嫌せず。是を式叉摩那の六法を受くと名く。』是式叉摩那に二種有り、一には十八歲の童女は六法を受け、二には夫家は十歲にして六法を受くることを得。若し具足戒を受けんと欲せば、二部の僧の中に應じて、五衣、鉢盂を用ひ、比丘尼を和上及び教師と爲し、比丘を戒師と爲す。餘は受戒の法の如し。略說すれば則ち五百戒、廣說すれば則ち八萬の戒有り。第三羯磨訖りて、即ち無量の律儀を得て比丘尼を成就す。比丘は則ち三

【鉢盂】僧侶の食器。

【羯磨】(Karma)カルマ作法と譯す、比丘の授戒または懺悔する時の作法。

衣、鉢盂、三師、十僧有り。受戒の法の如し。略說すれば二百五十、廣說すれば則ち八萬なり。第三羯磨訖りて、即ち無量の律儀の法を得、是を總じて名けて戒と爲し、是を尸羅と爲す。

大智度論卷第十三 終

【一】次に尸羅波羅蜜に就いて。

大智度論釋初品中尸羅波羅蜜義之餘 卷第十四

龍樹菩薩造
後秦龜茲國三藏鳩摩羅什詔を奉じて譯す

(一)問うて曰はく、「已に尸羅の相を知る、云何が尸羅波羅蜜と爲す。」答へて曰はく、「有人言はく、「菩薩は戒を持ち、寧ろ自ら身を失ふとも小戒をも毀らず、是を尸羅波羅蜜と爲す」と。上の『蘇陀蘇摩王經』の中に說くが如くんば、身命を惜まず以て禁戒を全うす。菩薩の本身、曾て大力の毒龍と作るが如し。若し衆生前に在り、身力弱き者は、眼に視て便ち死し、身力強き者は、氣往いて死す。是龍は一日戒を受け、出家して靜を求め、林樹の間に入りて思惟し、坐すること久うして、疲懈して睡る。龍の法は、睡る時形、蛇の如し、身に文章有り七寶の色を雜ふ。獵者之を見て驚喜し言ひて曰はく、「此希有にして得難きの皮を以て、國王に獻上し、以て服飾と爲さば、亦宜しからずや」と。便ち杖を以て其頭を按じ、刀を以て其皮を剝ぐ。龍は自ら念言すらく、「我力は如意なり、此國を傾覆すること其れ掌を反すが如し。此人は小物なり、豈能く我を困めんや。我今戒を持つを以ての故に、此身を計らず、常に佛語に從ふべし」と。是に於て自ら忍び、目を眠りて視ず、氣を閉ぢて息せず、此人を憐愍す。持戒の爲の故に一心にして、剝ぐことを受くれども、悔意

を生ぜず。既にして皮を失ひ、赤肉地に在り。時に日大いに熱し、土中を宛轉して大水に趣かんと欲す。諸の小虫の來りて其身を食するを見れども、持戒の爲の故に、復、敢て動かず。自ら思惟して言はく、「今我此身を以て諸の虫に施すは、佛道の爲の故なり。今肉を以て施し、以て其身に充てば、後成佛の時、當に法施を以て、以て其心を充すべし」と。是の如く誓ひ已りて、身乾れ命絶え、即ち第二の忉利天上に生ぜり。爾時の毒龍は釋迦文佛是なり。是時の獵師は提婆達等の六師是なり。諸の小虫の輩は釋迦文佛の初めて法輪を轉じたまへるとき、八萬の諸天の道を得し者是なり。菩薩は戒を護りて身命を惜まず、決定して悔いず、其事是の如し。是を尸羅波羅蜜と名く。復次に、菩薩は戒を持ち、佛道の爲の故に大要誓を作さく、必ず衆生を度し、今世後世の樂を求めず、名聞虛譽の法の爲にせざるが故に、亦自ら早く涅槃を求むるを爲さず、但衆生の長流に沒在し、恩愛に欺かれ、愚惑に誤らるるが爲に、我當に之を渡して彼岸に到らしむべしと。一心に持戒するが爲に善處に生じ、善處に生ずるが故に善人を見る。善人を見るが故に智慧を生じ、智慧を生ずるが故に六波羅蜜を行ずるを得、六波羅蜜を行ずるが故に佛道を得。是の如きの持戒を名けて、尸羅波羅蜜と爲す。復次に、菩薩は戒を持ちて、心樂しくして善く淸淨なり。惡道を畏るるが爲にせず、亦天に生ずるが爲にせず、但善を求めて善淨なり。戒を以て心に熏じ、心をして樂善ならしむ、是を尸羅波羅蜜と爲す。復次に、菩薩は大悲心を以て戒を持ち、佛道に至ることを得、是を尸羅波羅蜜と名く。復次に、菩薩は戒を持ちて、能く

【二】持戒は能く戒を生ず。

【三】持戒の能く布施を生ずるに就いて。

【四】持戒の能く忍辱を生ずるに就いて。

六波羅蜜を生ず、是を則ち名けて尸羅波羅蜜と爲す。

〔二〕云何が持戒は能く戒を生ずる。五戒に因りて沙彌戒を得、沙彌戒に因りて律儀戒を得、律儀戒に因りて禪定戒を得、禪定戒に因りて無漏戒を得。是を戒は戒を生ずと爲す。

〔三〕云何が持戒は、能く檀を生ずる。檀に三種有り、一には財施、二には法施、三には無畏施なり。戒を持ち、自ら檢めて、一切衆生の財物を侵さざる、是を財施と名く。衆生の見る者、其所行を慕ひ、又爲に法を說いて、其をして開悟せしむ。又自ら思惟すらく、我、當に堅く淨戒を持ちて、一切衆生の與に供養の福田と作り、諸の衆生をして、無量の福を得しむべしと。是の如きの種種を名けて法施と爲す。一切衆生は皆死を畏れ、戒を持ちて害せず、是れ則ち無畏施なり。復次に、菩薩は自ら念ずらく、我、當に戒を持ち、此戒の報を以て、諸の衆生の爲に、轉輪聖王と作り、或は閻浮提王と作り、若は天王と作り、諸の衆生をして、財に滿足し、乏短する所無からしむべしと。然る後、佛、樹下に坐して魔王を降伏し、諸の魔軍を破り、無上道を成じ、諸の衆生の爲に清淨の法を說き、無量の衆生をして老病死の海を度らしむ。是を持戒の因緣は檀波羅蜜を生ずと爲す。

〔四〕云何が持戒は忍辱を生ずる。持戒の人は、心に自ら念じて言はく、我、今戒を持つは心を持たんが爲の故なり。若し戒を持ちて忍ぶこと無くんば、當に地獄に墮すべし。戒を破らずと雖も、忍ぶこと無きを以ての故に、惡道を免れず、何んが縱ままに忿りて自ら心を

【五】持戒の能く精進を生ずるに就いて。

制せざるべけん。但心を以ての故に三悪趣に入る。是故に應當に好んで自ら勉め、強ひて懃めて忍辱を修すべしと。復次に、行者は戒徳を堅強ならしめんと欲せば、當に忍辱を修すべし。所以は何、忍は大力爲り、能く戒を牢固にし、動搖せざらしむればなり。復自ら思惟すらく、我今の出家の形は俗と別なり、豈心を縱ままにして世人の法の如くなるべけんや。宜しく自ら勉勵して、忍を以て心を調へ、身口に忍ぶを以て、心に亦忍を得べし。若し心に忍ばざれば、身口も亦爾り、是故に行者は、當に身口心をして、諸の忿根を忍び絶たしむべし。復次に、是戒は略して說けば則ち八萬有り、廣く說かば則ち無量なり。我當に云何が能く具に、是無量の戒法を持たん。唯當に忍辱ならば衆戒自ら得べし。譬へば人有り、罪を王に得んに、王は罪人を以て之を刀車に載せ、六邊の利刃は間を容れず、放逸し、馳走し、行くに路を擇ばざるが如し。若し能く身を持たば、刃の爲に傷けられず、是れ則ち殺せども死せざるなり。持戒の人も亦復是の如し、戒を利刀と爲し、忍を持身と爲す。若し忍心固からざれば、戒も亦人を傷く。又復譬へば老人の夜行くに、杖無ければ則ち蹶くが如し。忍を戒の杖と爲せば、人を扶けて道に至り、福樂の因緣も動搖すること能はず。是の如きの種種を名けて、持戒は羼提波羅蜜を生ずと爲す

云何が戒を持ちて精進を生ずる。持戒の人は放逸を除去し、自ら力めて懃修し、無上の法を習ひ、世間の樂を捨てて善道に入り、涅槃を志求して以て一切を度し、大心にして惓らず、佛を求むるを以て本と爲す。是を持戒は能く精進を生ずと爲す。復次に、持戒の

人は世の苦と老病死の患とを疲厭して、心に精進を生じ、必ず自ら脱せんことを求め、亦以て人を度す。譬へば野干の林樹の間に在りて、師子及び諸の虎豹に依随して、其殘肉を求め、以て自ら存らへ活るが如し。有時空乏して、夜半に城を踰え、深く人舍に入り、肉を求むれども得ず。屛處に睡り息ひ、覺めざるに夜竟り、惶怖すること計り無し。走れば則ち自ら免れざるを慮り、住まれば則ち死し痛まんことを怖畏す。便ち自ら心を定めて、詐り死して地に在り、衆人來り見る。有る一人は、「我は野干の耳を須ひん」と言ひて、即便截り取る。野干は、自ら念ずらく、「耳を截らるるは痛しと雖も、但身をして在らしめん」と。次に有る一人は、「我は野干の尾を須ひん」と言ひて、便ち復截り去る。野干復念ずらく「尾を截らるるは痛しと雖も、猶是れ小事なり」と。次に有る一人は、「我は野干の牙を須ひん」と言ふ。野干は心に念ずらく「取る者は轉た多し、儻し我頭を取らば則ち活路無けん」と。即ち地より起ちて、其智力を奮ひ、間關の徑を絶踊し、自ら濟ふことを得たり。行者の心に苦難を脱せんことを求むるも、亦復是の如し。若し老至る時は、猶故に自ら寛にして、慇懃に決斷し精進すること能はず、病も亦是の如し、差ゆる期有るを以て、未だ計を決すること能はず、死の至らんと欲する時、自ら冀無きことを知り、便ち能く自ら勉めて果敢にして、慇懃に大いに精進を修し、死地の中より畢に涅槃に至るなり。復次に持戒の法は、譬へば人の射るに、先づ平地を得、地平にして然る後に心安し、心安くして然る後に挽き滿て、挽き滿てて然る後に陷いるること深きが如し。戒を平地と爲し、定意を

【六】持戒の能く禪定を生ずるに就いて。

弓と爲し、挽き滿つるを精進と爲し、箭を智慧と爲す。賊は是れ無明なり。若し能く是の如く力を展べて精進すれば、必ず大道に至り、以て衆生を度せん。復次に、持戒の人は能く精進を以て自ら五情を制し、五欲を受けず。若し心已に去れば、能く攝して還らしむ。是を持戒能く諸根を護ると爲す。諸根を守れば則ち禪定を生じ、禪定を生ずれば則ち智慧を生じ、智慧を生ずれば佛道に至ることを得。是を持戒は毘梨耶波羅蜜を生ずと爲す

(六)云何が持戒は禪を生ずる。人に三業有り、諸善を作す。若し身口の業、善なれば、意業も自然に善に入る。譬へば曲草の麻中に生ずるに、扶けざれども自ら直きが如し。持戒の力は能く諸の結使を贏らす。云何が能く贏らす。若し戒を持たざれば、瞋恚の事、來れば殺心即ち生じ、若し欲事至れば婬心即ち成ず。若し戒を持つ者は、微瞋有りと雖も殺心を生ぜず。婬念有りと雖も婬事を成ぜず、是を持戒は能く諸の結使をして贏らしむと爲す。諸の結使贏るるが故に、禪定を得易し。譬へば老病力を失へば、死事得易きが如く、結使贏るるが故に禪定得易し。復次に、人心は未だ息まず、常に逸樂を求む。行者は戒を持ちて世の福を棄捨し、心放逸ならず、是故に禪定を得ること易し。復次に、持戒の人は人中に生ずることを得。次に六欲天の上に生じ、次に色界に至り、若し色相を破れば無色界に生ず。持戒清淨なれば諸の結使を斷じて阿羅漢道を得、大心を以て戒を持ち衆生を愍念す、是を菩薩と爲す。復次に、戒を檢麁と爲し、禪を攝細と爲す。復次に、戒は身口を攝し、禪は亂心を止む。人の屋に上るに、梯に非ざれば昇らざるが如く、戒の梯を

【七】持戒の能く智慧を生ずるに就いて。

得ざれば輙ち亦定ならず。復次に、戒を破るの人は、結使の風動くして、其の心を散亂す。其の心散亂すれば則ち禪は得べからず。持戒の人は煩惱の風微にして、心大いに散せず、禪定を得ること易し。是の如き等の種種の因緣、是を持戒は禪波羅蜜を生ずと爲す。

(七)云何が持戒は、能く智慧を生ずる。持戒の人は、諸法の實相は何に從りて有るやを觀じ、樂罪に從りて生ずることを知る。若し衆罪無ければ則ち亦樂無し。樂相は是の如く因緣に從りて有り、何が故に著を生ぜん。譬へば蓮華は汚泥より出で、色鮮好なりと雖も、出處不淨なるが如し。是を以て心を悟り、著を生ぜしめざる、是を持戒は般若波羅蜜を生ずと爲す。復次に、持戒の人は心に自ら思惟すらく、若し我持戒の貴きを以て取るべく、破戒の賤しきを捨つべく、若し此心有らば、般若に應ぜず。智慧を以て籌量するに心戒に著せず、取る無く捨つる無き、是を持戒は般若波羅蜜を生ずと爲す。復次に戒を持たざる人は、利智有りと雖も、世務を營むを以て、種種に生業の事を求めんと欲し、慧根漸く鈍し。譬へば利刀を以て泥土を割けば、遂に鈍器と成るが如し。若し出家して戒を持ち、世業を營まず、常に諸法の實相の無相なることを觀ぜば、先には鈍根なりと雖も、以て漸く轉た利ならん。是の如き等の種種の因緣を名けて、持戒は般若波羅蜜を生ずと爲し、是の如きを名けて、尸羅波羅蜜は六波羅蜜を生ずと爲す。復次に、菩薩は戒を持ちて、以て畏れざるが故に亦愚癡に非ず、疑に非ず、惑に非ず、亦自ら涅槃の爲にせず。但に持戒は但一切衆生の爲の故なり、佛道を得んが爲の故なり、一切の佛法を得んが爲の故なり、是の如き相

【八】次に罪と不罪とに不可得の故に罪と不罪といふに就いて論じ中に衆生畢竟不可得を明す。

を名けて、尸羅波羅蜜と爲す。

〔八〕復次に、若し菩薩は、罪と不罪とに於て不可得の故に、是時を名けて尸羅波羅蜜と爲す。問うて曰はく、『若し人惡を捨てて、善を行ずるは是を持戒と爲す。云何が罪と不罪とは不可得なりと言ふ。』答へて曰はく、『邪見麁心を謂ひて、不可得なりと言ふに非ず。若し人深く諸の法相に入りて空三昧を行ぜば、慧眼もて觀ずるが故に罪は不可得なり。罪無なるが故に不罪も亦不可得なり。復次に、衆生は不可得なるが故に、殺罪も亦不可得なり。罪は不可得なるが故に、戒も亦不可得なり。何を以ての故に、殺罪有るを以ての故に則ち戒有り。若し殺罪無ければ、則ち亦戒無ければなり。』問うて曰はく、『今、衆生は現に有り、云何が衆生は不可得なりと云ふ。』答へて曰はく、『肉眼の見る所は是を非見と爲す。若し慧眼を以て觀れば則ち衆生を得ず。上の檀の中に、施者無ければ受者無く、財物無しと說くが如く、此も亦是の如し。復次に、若し衆生有らば、是れ五衆なりとなすや、五衆を離るとなすや。若し是れ五衆ならば、五衆は五有り、衆生は一たり。是の如くんば五を一となすべからず、一を五と爲すべからず。譬へば市に物を易ふるに、直五疋なるを一疋を以て之を取ることは、則ち得べからざるが如し。何を以ての故に、一は五と作すことを得べからざるが故なり。是を以ての故に五衆は一衆生と作ること得べからざるを知る。復次に、五衆は生滅して常相無し。衆生の法は先世より後世に來至し、罪福を三界に受く。若し五衆は是れ衆生ならば、譬へば草木の自ら生じ、自ら滅するが如し、是の如きは

則ち罪縛無く亦解脱無し。是を以ての故に、五衆は是れ衆生に非ざることを知る。若し五衆を離れて衆生有らば、先に、神は常にして遍すと説けるが中に已に破するが如し。復次に、五衆を離るれば則ち我見の心生ぜず、若し五衆を離れて衆生有らば、是れ常に堕すと為す。若し常に堕せば、是れ則ち生無く死無し。何を以ての故に。生は先に無くして今有るに名け、死は已に生じて便ち滅するに名くればなり。若し衆生常ならば、應に五道の中に遍滿すべし。先に已に常は有なり、云何が今復來り生ぜん、若し生有らずんば則ち死有ること無し。問うて曰はく、「定んで衆生有り、何を以ての故に無しと言ふ。五衆の因縁によりて衆生法有ることは、譬へば五指の因縁によりて拳法生ずるが如し。」答へて曰はく、「此言は非なり。若し五衆の因縁によりて衆生法有らば、五衆を除きて則ち別に衆生の法有ることは、然も得べからざるなり。眼に自ら色を見、耳に自ら聲を聞き、鼻に香を嗅ぎ、舌に味を知り、身に觸を知り、意に法を知る、空にして無我の法なり。此六事を離れて更に衆生無し。諸の外道の輩は、倒見の故に言はく、眼に能く色を見る、是を衆生と為し、乃至、意に能く法を知る、是を衆生と為す。又能く憶念して能く苦樂を受く、是を衆生と為すと。但是見を作して衆生の實を知らず。譬へば一の長老大德の比丘の如きは、人、是を阿羅漢と謂ひて、多く供養を致す。其後將死す、諸の弟子は供養を失はんことを懼るるが故に、夜之を盜み出し、其臥處に於て被枕を安施し、師在すが如く、其狀臥するが如くならしむ。人、來りて疾を問ふ、「師は何許に在る」と。諸の弟子の言は

【六事の相】眼耳鼻舌身意の六根をいふ。

く「汝床上の被枕を見ずや」と。愚者は之を審察せずして「師は病に臥す」と謂ひて、大いに供養を送りて去り、是の如くすること一に非ず。復智人有り、來りて之を問ふに、諸の弟子亦是の如く答ふ。智人言はく「我は被枕床褥を問はず、我は自ら人を求む」と。被を發いて之を求むるに竟に人の得べき無し。六事の相を除いて更に我人無く、知者、見者も、亦復是の如し。復次に、若し衆生は五衆の因緣に於て有らば、五衆無常なれば、衆生も亦應に無常なるべし、何を以ての故に、因果は相似するが故なり。若し衆生無常なれば、則ち後世に至らず。復次に、若し汝の言ふが如くんば、衆生は本より已來常に有ならん。若し爾らば衆生は應に五衆を生ずべく、五衆は衆生を生ずべからず。今五衆の因緣は衆生の名字を生ず、無智の人は名を逐うて實を求む。是を以ての故に衆生は實に無なり、若し衆生無くんば亦殺罪無し、殺罪無きが故に亦持戒無し。復次に、是五衆は深く入りて之を觀じ、分別して空を知れば、夢の所見の如く、鏡中の像の如けん。若し殺は夢中の所見、及び鏡中の像ならば、殺罪有ること無く、五陰の空相を殺す。衆生も亦復是の如し。復次に、若し人、罪を樂はず無罪に貪著すれば、是人は破戒の罪人を見れば則ち輕慢し、持戒の善人を見れば則ち愛敬す。是の如き持戒は則ち是れ罪を起すの因緣なり。是を以ての故に罪不罪は不可得なりと言ふ、故に應に尸羅波羅蜜を具足すべし。

【九】以下心動ぜざるが故に應に羼提波羅蜜を具足すべしの文に就いて初に忍辱を明す。中に生忍と法忍の二種あり。

【三法印】諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜をいふ。

大智度論釋初品中羼提波羅蜜義第二十四

經 心、動ぜざるが故に、應に羼提波羅蜜を具足すべし。

論〔九〕問うて曰はく、「云何が羼提と名くる。」答へて曰はく、「羼提とは秦に忍辱と言ふ。忍辱に二種有り、生忍と法忍となり。菩薩は生忍を行じて無量の福德を得、法忍を行じて無量の智慧を得、福德と智慧の二事を具足するが故に、願ふ所の如くなることを得。譬へば人の目有り足有れば、意に隨うて能く到るが如し。菩薩は、若くは惡口罵詈に遇ひ、若くは刀杖を加へらるれども、思惟して罪福の業の因緣を知る。諸法は內外畢竟空にして、我無く、我所無し。三法印を以て諸法を印するが故に、力能く報うと雖も、惡心を生ぜず、惡口の業を起さざるなり。爾時、心數法生ずるを名けて忍と爲す。是忍法を得るが故に、忍智牢固なり。譬へば畫彩は膠を得れば、則ち堅著するが如し。有人言はく、「善心に二種有り、麁有り、細有り、麁を忍辱と名け、細を禪定と名く。未だ禪定を得ずして、心に集んで能く衆惡を遮る、是を忍辱と名け、心に禪定を得、樂んで衆惡を爲さざる、是を禪定と名く」。是忍は是れ心數法にして心と相應し、心行に隨ひ、業に非ず業報に非ず、業行に隨ふ」と。有人、言はく、「三界繫なり」と。有人、言はく、「但欲界繫なり、或は不繫なり」と、色界には外惡の忍ぶべき無きが故に、亦は有漏亦は無漏なり。凡夫聖人倶に得るが故

【一】初に生忍を明す。

【二】恭敬供養を忍と名くるに就いて。

に、己心他心の不善法を障ふるが故に、名けて善と爲す。善の故に或は思惟し、或は不斷なり。是の如き等の種種は阿毘曇に廣く分別せり。

「問うて曰はく、『云何が名けて生忍と爲す。』答へて曰はく、『二種の衆生有り、來りて菩薩に向ひ、一は恭敬供養し、二は瞋り罵り打ち害す。爾時、菩薩は、其心能く忍び、敬養の衆生を愛せず、加惡の衆生を瞋らず、是を生忍と名く。

(二)問うて曰はく、『云何が恭敬、供養は之を名けて忍と爲す。』答へて曰はく、『二種の結使有り。一は愛に屬する結使、二は恚に屬する結使なり。恭敬供養して恚を生ぜずと雖も、心をして愛著せしむるは、是を軟賊と名く。是故に此に於て應當に自ら忍んで著せず、愛せざるべし。云何が能く忍ぶ。其無常を觀ずるに、是れ結使の生處なり。佛の所說の如くんば、利養の瘡深きこと、譬へば皮を斷じて肉に至り、肉を斷じて骨に至り、骨を斷じて髓に至るが如し。人利養に著すれば則ち持戒の皮を破り、禪定の肉を斷じ、智慧の骨を破り、微妙の善心の髓を失ふ。佛、初めに迦毘羅婆國に遊びたまふときの如きは、『千二百五十の比丘と俱なりき。悉く是れ梵志の身にして、火を供養するが故に形容憔悴し、食を絕して苦行するが故に膚體瘦せて黑し。淨飯王は心に念じて言はく、「我子の侍從は、復心淸く淨潔なりと雖も並に容貌無し、我當に果重く子孫多き者を擇び取りて、家より一人を出して佛弟子と爲すべし」と。是の如く思惟し已りて、勅を國中に下し、諸釋の貴戚の子弟を揀擇し、應に之を身に出して、皆出家せしむ。是時、斛飯王の子、提婆達多は、

【奈園】 菴羅樹園のこと。

出家學道して六萬の法聚を誦し、精進修行して十二年に滿つ。其後供養の利の爲の故に、佛の所に來至し、神通を學せんことを求む。佛、憍曇に告げたまはく、「汝五陰の無常を觀じ、以て通を得、亦神通を得べし」と。而も爲に通を取るの法を說かず。出でて舍利弗、目揵連、乃至五百の阿羅漢に求むれども、皆爲に說かずして言はく、「汝當に五陰の無常を觀じて以て得道すべく、以て通を得べし」と。求むる所を得ざれば、涕泣して樂しまず。阿難の所に到りて神通を學せんことを求む。是時、阿難は未だ他心智を得ず、其兄を敬ふが故に、佛の言ふ所の如く、以て提婆達多に授く。通法を受學し、山に入りて久しからずして便ち五神通を得、五神通を得已りて、自ら念ずらく、「誰か當に我與に、檀越を作るべき者あるや」と。王子阿闍世の如きは大王の相有り、與に親厚を爲さんと欲し、天上に到りて天の食を取り、還りて鬱旦羅越に到りて自然の粳米を取り、閻浮林の中に至りて閻浮果を取り、王子阿闍世に與ふ。或時、自ら其身を變じて象寶馬寶と作り、以て其心を惑はし、或は嬰孩と作りて其膝の上に坐す。王子之を抱いて嗚唼して唾を與ふれば、時時自ら己が名を說いて太子をして之を知らしめ、種種の變態を以て其心を動かす。王子は意に惑ひ、奈園の中に於て大いに精舍を立て、四種の供養、並に種種の雜供、物として備らずと云ふこと無く、以て提婆達多に給し、日日に諸大臣を率ゐて、自ら爲に五百釜の羹飯を送れり。提婆達多は大いに供養を得たりしも、而も徒衆尠かなり、自ら念ずらく、「我は三十相有り、佛に減ずること未だ幾ばくならず、直弟子、未だ集らざるを以てす、若し大衆圍遶

【僧を破る】和合の集團を破するをいふ。

【富蘭那】プーラナ(Purana)六師外道の一、空見外道のこと。

せば、佛と何んが異ならん」と。是の如く思惟し已りて、心に僧を破るを生じ、五百の弟子を得んとす。舍利弗、目揵連の說法敎化するに、僧は還りて和合す。爾時、提婆達多は便ち惡心を生じ、山を推して佛を壓す、金剛力士、金剛杵を以て遙に之に擲ち、碎石迸り來りて、佛の足の指を傷く。華色比丘尼之を呵すれば、復拳を以て尼を打ち、尼は即時に眼出でて死せり。三逆罪を作り、惡邪の師富蘭那外道等と親厚を爲し、諸の善根を斷じて心に愧悔無し。復惡毒を以て、指爪の中に著け、佛を禮するに因り、以て佛を中傷せんと欲す。去らんと欲して未だ到らざるに、王舍城の中に於て、地自然に破裂し、火車來り迎へて生きながら地獄に入る。提婆達多の身に三十相有りて、而も其心を忍伏すること能はず、供養の利の爲の故に、而も大罪を爲し、生きながら地獄に入る。是を以ての故に、利養の瘡は深く皮を破りて髓に至ると言ふ。當應に供養の人を愛するの心を除卻すべし。是を菩薩の忍心して、供養恭敬の人に愛著せずと爲す。復次に供養に三種有り。一には先世の因緣福德の故に、二には今世の功德、戒、禪定、智慧を修するが故に、三には虛妄欺惑にして、內に實德無く、外、淸白の如くにして、以て時人を誑して供養を得。此三種の供養の中に於て、心に自ら思惟すらく、若し先世の因緣にして、福德を懃修し、今供養を得ば、是れ懃身の爲に、之を作して自ら得るのみ、何爲ぞ此に於て貢高を生ぜん。譬へば春に種ゑ、秋に穫るが如し、自ら力を以て得るのみ、何んが自ら憍るに足らん」と。是の如く思惟し已りて、其心を忍伏すれば、著せず憍らざるなり。若し今世の功德の故に

供養を得ば、當に自ら思惟すべし、「我は智慧を以て、若くは諸法の實相を知り、若くは能く結を斷ず。此功德を以ての故に、是人供養す、我に於て事無し」と。是の如く思惟し已りて、自ら其心を伏すれば、自ら憍り高らず、此れ實に愛敬の功德にして、我を愛せざるなり。譬へば罽賓の三藏比丘の如きは、阿蘭若の法を行じて一の王寺に至るに、寺に大會を設く。門を守るの人、其衣服の麁弊なるを見て、門を遮りて前ましめず、是の如きこと數數なり。衣服の弊たるを以ての故に、每に前むことを得ず。便ち方便を作して、假に好衣を借りて來る。門家は之を見て前むことを聽して禁せず。既に會に至りて坐し、種種の好き食を得て、先づ以て衣に與ふ。衆人問うて言はく、「何を以てか爾る」と。答へて言はく、「我、比數來る。每に入ることを得ず。今、衣を以ての故に此座に在ることを得て、種種の好食を得。實に是れ衣の故に之を得るなり、故に以て衣に與ふ」と。行者は修行の功德、持戒、智慧を以ての故に、而も供養を得。自ら念ぜよ、「此れ功德の爲にして我が爲に非ざるなり」と。是の如く思惟して、能く自ら心を伏す、是を名けて忍と爲す。若し虚妄欺僞にして供養を得ば、是れ自らを害すと爲す、近づくべからざるなり。當に自ら思惟すべし、「若し我、此虚妄を以て供養を得ば、惡賊劫盜の食を得ると異なること無し、是を欺妄の罪に墮すと爲す」と。是の如く二種の供養の人の中に於て、心愛著せず、亦自ら高らざる、是を生忍と名く。問うて曰はく、「人未だ道を得ずして、衣食を急と爲さば、云何が方便して能く忍を得、心著せず、給施の人を愛せざらん」と。答へて曰はく、「智慧力を以

て、無常相、苦相、無我相を觀じ、心に常に厭患す。譬へば罪人の剹を受くべきに臨んで、復美味前に在り、家室勸喩すと雖も、死を畏ふるを以ての故に、餚饍を飲食すと雖も、滋味を覺えざるが如し。行者も亦爾なり。常に無常相と苦相を觀じ、供養を得と雖も、心亦著せず、又、麞鹿の虎の爲に搏たれ、之を逐追すれども捨てず、好草美水を得て飲食すと雖も、心に染著無きが如し。行者も亦爾なり、常に無常の虎の爲に逐はれて、須臾も捨てずと思惟し、厭患して美味を得と雖も亦、染著せず、是故に行者は供養人の中に於て、心自ら忍ぶことを得。復次に、若し女人有り、來りて娛樂せんと欲して、菩薩を誑惑す。菩薩は是時、當に自ら心を伏し、忍んで起らしめざるべし。釋迦文尼佛の如きは、菩提樹下に在ししとき、魔王憂愁して、三玉女を遣す。一を樂見と名け、二を悅彼と名け、三を渇愛と名く。來りて其身を現じ、種種の姿態を作して、菩薩を壞らんと欲す。菩薩は是時、心傾動せず、目に暫くも視たまはざりき。三女念じて言はく「人心は同じからず、好愛は各異なる、或は少きを好むあり、或は中年を愛し、或は長を好み、短を好み、白を好み、黑を好む、是の如く樂好は、各愛する所有り」と。是時、三女は各各化して五百の美女と作り、一一の化女は、無量の變態を作して林中より出づ。譬へば黑雲電光の暫く現るるが如く、或は揚眉、頓睫、嫈嫇、細視、衆の伎樂、種種の姿媚を作して、來りて菩薩に近き、態身を以て菩薩に觸れ逼らんと欲す。爾時、密迹金剛力士、眼を瞋らして之を叱す、「此は此れ何人ぞ、汝、妖媚、敢て來り觸れ嬈すや」と。爾時、密迹は偈を說いて之を呵

す、

汝知らずや、天帝は好を失して黄髯に
大海の水は清美にして、今日盡く苦鹹なり
汝知らずや、日滅じて婆藪の諸天墮つ
火は本より天口と爲り、今一切を噉ふことを

汝此事を知らずして、敢て此聖人を輕んずと。是時、衆女は逡巡して小しく退き、菩薩に語りて言さく「今此衆女は、端嚴無比なり、自ら意を娛しましむべし、端坐して何をか爲さん」と。菩薩言はく、「汝等は不淨臭穢なり、惡を去り、愛に隨ふこと勿るべし」と。
菩薩は是時、即ち偈を說いて言はく、

此身は穢藪と爲す、不淨物にして腐積せり
是は實に行廁と爲す、何が以て意を樂ましむるに足らん

女は此偈を聞いて自ら念すらく「此人は、我等の清淨の天身を知らずして、而も此偈を說く」と。即ち自ら身を變じて、還りて本形に復し、光耀昱爍として林樹の間を照し、天の伎樂を作し、菩薩に語りて言さく「我身是の如し、何の呵すべきか有る」と。菩薩答へて言はく、「時至れば自ら知る」と。問うて曰はく、「此言は何の謂ぞ」と。偈を以て答へて言はく、

諸天の園林の中、七寶の蓮華の池に

天人相娛樂するも、失ふ時あり汝自ら
是時無常を見て、天上の樂は皆苦なりと知らん
汝當に欲樂を厭ひ、正眞の道を愛樂すべし

女は偈を聞き已りて心に念ずらく、「此人は大智無量なり、天の樂しく清淨なるすら、猶其惡を知る、當るべからざるなり」と。即時に滅し去る。菩薩は是の如く、婬欲の樂を觀じて、能く自ら心を制して、忍びて傾動したまはず。復次に、菩薩は欲の種種の不淨を觀ずるに、諸衰の中に於て、女衰は最も重し。刀、火、雷、電、霹靂、怨家、毒蛇の屬は、猶ほ暫く近づくべし。女人の慳妬、瞋諂、妖穢、鬪諍、貪嫉は親近すべからず。何を以ての故に、女子は小人にして、心淺く、智薄く、唯、欲のみを是れ視、富貴、智德、名聞を看ずして、專ら欲惡を行じ、人の善根を破る。桎梏枷鎖して囹圄に閉繫するは、解し難しと雖も、是れ猶僻し易し、女鎖の人を繫いで染め固むるは根深し、無智は之に沒して脫することを得べきこと難し。衆病の中に女病は最も重し。佛の偈に言ふが如し。

寧ろ赤鐵を以て、眼中に宛轉すとも
散心を以て、邪に、女色を視ざれ
笑を含み姿を作り、憍慢して羞恥し
面を廻らして眼を攝め、美言を以て妬瞋す
行歩妖穢にして、以て人を惑はす

婬の羅彌網には、人皆身を沒す
坐臥行立に、眄を廻し媚を巧にす
薄智の愚人は、之が爲に心醉ふ
劍を執りて敵に向へば、是れ猶勝つべし
女賊の人を害するは、是を禁ずべからず
蚖蛇の毒を含むは、猶手に捉ふべし
女情の人を惑はすは、是れ觸るべからず
有智の人の、應に視るべからざる所
若し之を觀んと欲せば、當に母姉の如くすべし
諦に視て之を觀ぜば、不淨塡積す
婬火を除かざれば、之が爲に燒滅せられん

復次に、女人の相は、若し敬待を得れば、則ち夫の心をして高からしむ。若し敬待の情を捨つれば、則ち夫の心をして怖れしむ。女人は是の如し、恆に煩惱憂怖を以て人に與ふ、云何が近づくべけん。親好を遠離するは女人の累なり、巧に、人の惡を察するは女人の智なり。大火の人を燒くは是れ猶近づくべく、淸風の形無きは、是れ亦捉ふべく、蚖蛇の毒を含むは猶亦觸るべく、女人の心は實を得べからず。何を以ての故に。女人の相は、富貴、端政、名聞、智德、族姓、技藝、辯言、親厚、愛重を觀ず、都て心に在らず、唯欲にのみ

【拘牟頭】クムダ(Kumuda)地喜花と譯す、白蓮華のこと。

是を視る。譬へば蛟龍の好醜を擇ばずして、唯人を殺さんと欲するが如し。又復女人は愛苦憔悴を瞻視せず。給養敬待すれば、憍奢調し回し。復次に、善人の中に在りては、則ち自ら畜ままに心高ぶり、無智の人の中には之を視ること怨の如く、富貴の人の中には、之を追うて敬愛し、貧賤の人の中には、之を視ること狗の如し、常に欲心に隨うて功徳に隨はざるなり。說くが如くんば、國王に女有り、名けて拘牟頭と曰ふ。捕魚師有り、述婆伽と名く。道に隨うて行き、遙に王女の高樓の上に在るを見る。窓の中に面を見、想像して染著し、心暫くも捨てず、彌、日月を歷るも飲食すること能はず。母其故を問へば、情を以て母に答ふらく「我、王女を見て、心に忘るる能はず」と。母、兒を諭して言はく「汝は是れ小人、王女の尊貴なるを得べからず」と。兒言はく「我、心に願樂して、暫くも忘ること能はず、若し意の如くならずんば、活くること能はざるなり」と。母は子の爲の故に、王の宮中に入り、常に肥へたる魚の美肉を送り、以て王女に遺りて價を取らず。王女怪んで之に問はく「何の願をか求めんと欲する」と。母、王女に白さく「願くば左右を却けたまへ、當に情を以て告ぐべし。我に唯一子有り、王女を敬慕し、情結んで病と成り、命云に遠からず、願くば愍念を垂れて、其生命を賜へ」と。王女、言はく「汝去れ、月の十五日に、某甲の天祠の中に於て、天像の後に住せん」と。母、還りて子に語らく、「汝が願已に得たり」と。之に告ぐるに上の如くす、沐浴、新衣にして天像の後に在りて住す。王女は時至りて其父王に白さく「我に不吉有り、須らく天祠に至りて以て吉福を求むべし」

【三】次に瞋惱、婬欲中に忍辱を得るに就いて問す。

と。王言はく「大いに善し」と。即ち車五百乘を嚴り、出でて天祠に至る。既にして到り、諸の從者に勅して、門を齊りて止め、獨り天祠に入る。天神思惟すらく「此は爾るべからず、王は施主たり、此小人に王女を毀辱せしむべからず」と。即ち此人を厭うて睡りて覺めざらしむ。王女は既に入りて其睡れるを見て、重く之を推せども悟らず、即ち瓔珞の直十萬兩金なるを以て之に遺して去る。去りて後、此人覺むることを得て、見るに瓔珞有り、又衆人に問うて、王女の來れることを知り、情願を遂げずして、憂恨懊惱し、婬火内より發し、自ら燒けて死す。是を以て證とするが故に、女人の心は貴賤を擇ばず、唯欲に是れ從ふことを知る。復次に昔國王の女有り、旃陀羅に逐はれて共に不淨を爲す。又仙人の女有り、師子に隨逐す。是の如き等の種種の女人の心は、選擇する所無し。是の種種の因縁を以て、女人の中に於て情欲を除去し、忍んで愛著せざれ。

云何が瞋惱の人の中にて、忍辱を得ん。當に自ら思惟すべし、一切衆生は罪の因縁有りて、更に相侵害す、我今惱を受くるも亦本行の因縁なり、今世の所作に非ずと雖も、是れ我先世の惡報なり。我、今之を償いて、應當に甘受すべし、何ぞ逆ふべけんや。譬へば負債の如し、債主之を索むれば、應當に歡喜して債を償ふべし、瞋るべからず」と。復次に、行者は常に慈心を行じ、惱亂身に逼る有りと雖も、必ず能く忍受す。譬へば羼提仙人の如きは、大林の中に在りて忍を修し慈を行ず。時に迦利王は諸の綵女を將ゐて林に入りて遊戲す、飲食既に訖りて、王は小しく睡息す。諸の綵女の輩は、華と林間に遊んで、此

仙人を見、敬うて禮拜を加へて一面に在りて立つ。仙人は爾時、諸の綵女の爲に慈忍を讃説す。其言葉美妙にして、聽く者厭くこと無く、久らくして去らず。迦利王は覺めて綵女を見ず、劍を拔いて蹤を追ひ、仙人の前に在りて立てるを見、憍妬隆盛にして、目を瞋らし劍を奮つて、仙人に問はく「汝は何物をか作す」と。仙人答へて言はく「我今此に在りて、忍を修し慈を行ず」と。王言はく、「我今汝を試みん、當に利劍を以て汝が耳鼻を截り、汝が手足を截たんに、若し瞋らずんば、汝が忍を修することを知るべし」と。仙人言はく「意に任す」と。王即ち劍を拔いて、其耳鼻を截り、其手足を截ちて之に問はく、「汝が心動ずるや不や」と。答へて言はく「我は慈忍を修す、心動せざるなり」と。王言はく、「汝が一身は此に在りて、勢力有ること無し。口に動ぜずと言ふと雖も、誰か當に信ずべき者有らん」と。是時、仙人、即ち誓を作して言はく「若し我實に慈忍を修せば、血は當に乳と爲るべし」と。即時に血は變じて乳と爲る。王大いに驚喜し、諸の綵女を將ゐて去る。是時林中の龍神、此仙人の爲に雷電霹靂し、王は毒害を被りて沒して宮に還らざりき。是を以ての故に、惱亂の中に於て能く忍辱を行ず、と言ふ。復次に、菩薩は悲心を修行す。一切衆生は常に衆苦有り、胎に處しては迫隘して諸の苦痛を受け、生るる時は迫迮して骨肉破るるが如し、冷風身に觸れて、劍戟よりも甚し。是故に佛言はく、「一切の苦の中にて生苦は最も重し」と。是の如く老病死の苦、種種の困厄有り、云何が行人は復其苦を加へん。是を瘡中、復刀を加へて破ると爲す。復次に菩薩は自ら念ずらく、「我應に

諸餘の人の常に生死の水の流に隨ふが如くなるべからず、我は當に逆流して以て求めて源を盡し、涅槃道に入るべし。一切の凡人は、侵さるれば則ち瞋り、益さるれば則ち喜び、怖畏處には則ち畏る。我は菩薩爲り、彼が如くなるべからず、未だ結を斷ぜずと雖も、當に自ら抑制して忍辱を修行すべく、惱害をも瞋らず、敬養をも喜ばず、衆苦艱難を怖畏すべからず、當に衆生の爲に大悲心を興すべし」と。復次に、菩薩は若し衆生の來りて惱亂を爲すことを見れば、當に自ら念じて言はく「是れ我が親厚たり、亦是れ我が師なり、益〻愛敬心を加へて之を待たん」と。何を以ての故に、彼若し衆惱を加へ惱さずんば、我則ち忍辱を成ぜざればなり。是の故に、是れ我が親厚なり、亦是れ我が師なり、と言ふ。復次に、菩薩は心に、佛の說きたまふ所の如くに知る。衆生は始無く、世界は際無し、五道に往來して、輪轉無量なり、我亦曾て衆生の爲に、父母兄弟爲り、衆生も亦皆曾て、我が父母兄弟爲り、當來も亦爾らん、是を以て之を推すに、惡心にして瞋害を懷くべからず」と。復次に、思惟すらく、衆生の中には佛種甚だ多し、若し我瞋意もて之に向はば、則ち佛を瞋ると爲し、若し我、佛を瞋らば、則ち已に了れりと爲さん。說くが如くんば、鴿鳥は當に佛と作るを得べし、今は是れ鳥なりと雖も、輕ずべからざるなり」と。復次に、諸の煩惱の中に瞋を最も重しと爲す、不善の報の中、瞋の報は最も大なり。餘の結には此の重罪無し。釋提婆那民の佛に問へる偈に言ふが如し、

何物か殺して安隱なる、何物か殺して悔いざる

何物か毒の根なる、一切の善を呑滅する
何物か殺して讃ずる、何物か殺して憂ふる無き

偈もて佛答へて言はく、

瞋心を殺せば安隱なり、瞋心を殺せば悔いず
瞋は毒の根たり、瞋は一切の善を滅す
瞋を殺せば諸佛讃じ、瞋を殺せば則ち憂無し

菩薩思惟すらく「我今悲を行じて、衆生をして樂を得しめんと欲す。瞋は、諸善を呑滅して、一切を毒害すと爲す、我、當に云何が此重罪を行ずべき。若し瞋恚有れば、自ら樂利を失す、云何が能く衆生をして樂を得しめん」と。復次に、諸佛菩薩は大悲を以て本と爲す。悲より瞋を出さば、悲を滅するの毒爲り、特に相宜しからず。若し悲の本を壞せば、何んが菩薩と名けん、菩薩は何に從りてか出でん。是を以ての故に應に忍辱を修すべし。若し衆生、諸の瞋惱を加へば、當に其功德を念ずべし。今此衆生は一罪有りと雖も、更に自ら別に諸の妙功德有り、其功德を以ての故に之を瞋るべからずと。

復次に、此人、若くは罵り、若くは打つとも、是れ我を治むと爲す。譬へば金師の金を錬りて、垢は火に隨つて去り、眞金獨り在るが如く、此も亦是の如し。若し我罪有らば、是れ先世よりの因緣なり、今當に之を償ふべし。瞋るべからず、當に忍辱を修すべし。復次に、菩薩は衆生を慈念すること、猶赤子の如くす。閻浮提の人は、諸の憂愁多く、歡日

有ること少し。若し來りて罵詈し、或は讒賊を加ふるも、心に歡樂を得。此樂は得難し、恣ままに汝は之を罵れ。何を以ての故に。我、本發心して、衆生をして歡喜を得しめんと欲するが故なり。復次に、世間の衆生は常に衆病の爲に惱され、又死賊の爲に常に隨うて之を伺ふ。譬へば怨家の恆に人の便を伺ふが如し。云何が善人にして而も慈愍せざらん。復苦を加へんと欲するも、苦、未だ彼に及ばざるに、先づ自ら苦を受く」と。是の如く思惟して、彼を瞋るべからず、當に忍辱を修すべし。復次に、當に瞋恚は其咎最も深く、三毒の中に此より重き者無きことを觀ずべし。九十八使の中、此を最も堅しと爲す。諸の心病の中に第一にして治し難し。瞋恚の人は善を知らず、非善を知らず、罪福を觀ぜず、利害を知らず、自ら憶念せず、當に惡道に墮して善心を忘失し、名稱を惜まず、他の惱を知らず、亦自ら身心の疲惱を計らざるべし。瞋れば慧眼を覆ひ、專ら他を惱ますことを行ず。一の五通の仙人の如きは、瞋恚を以ての故に淨行を修すと雖も、一國を殺害すること旃陀羅の如し。復次に、瞋恚の人は、譬へば虎狼の共止すべきこと難きが如く、又惡瘡の發し易く、壞し易きが如し。瞋恚の人は、譬へば人の毒蛇を見ることを喜はざるが如し。瞋を積むの人は、惡心漸く大にして、至るべからざるに至り、父を殺し、君を殺し、惡意もて佛に向ふ。拘睒彌國の比丘の如きは、小因緣を以て、瞋心轉た大にして、分れて二部と爲る。若し斷んと欲し、當に終に三月を竟るも猶了るべからざるべし。佛、來りて衆に在し、相輪の手を舉げて遮りて告げて言はく、

汝諸の比丘、闘諍を起すこと勿れ
惡心相續すれば、苦報甚だ重し
汝は涅槃を求めて、世の利を棄捨し
善法の中に在り、云何が瞋り諍はん
世人の忿諍は、是れ猶恕すべし
出家の人は、何んが諍闘すべけん
出家の心中に、毒を懐いて自ら害すること
冷雲の中より火出でて、身を燒くが如し

諸の比丘、佛に白して言さく、「佛は法王たり、願くば小く默然したまへ。是輩、我を侵す、答へざるべからず」と。佛、念じたまはく「是人は度すべからざるなり」と。衆僧の中に於て、虚を凌いで去り、林樹の間にて、寂然として三昧に入りたまへり。瞋の罪は是の如し、乃ち佛語をも受けざるに至る。是を以ての故に應當に瞋を除いて、忍辱を修行すべし。復次に、能く忍辱を修すれば慈悲得易し、慈悲を得れば則ち佛道に至る。問うて曰はく、「忍辱の法は皆好むも、而も一事の不可なる有り。小人は輕慢して、謂ひて怖畏すと爲す、是を以ての故に皆忍ぶべからず」。答へて曰はく、「若し小人の輕慢して、謂ひて怖畏と爲すを以て、忍ばざらんと欲せば、忍ばざるの罪は此よりも甚だし。何を以ての故に。忍ばざるの人は、賢聖善人の輕賤する所にして、忍辱の人は小人の爲に慢らるればなり。

二種の中、寧ろ無智の爲に慢らるるも、賢聖の爲に賤められざれ。何を以ての故に、無智の人は、輕んずべからざる所を輕じ、賢聖の人は賤しむべき所を賤しめばなり。是を以ての故に當に忍辱を修すべし。復次に、忍辱の人は、布施禪定を行ぜずと雖も、常に微妙の功德を得て、天上人中に生じ、後には佛道を得。何を以ての故に、心柔軟なるが故なり。復次に、菩薩、思惟すらく「若し人、今世に我を惱し、毀辱し、利を奪ひ、輕んじ、罵り、繫縛すとも、且く當に忍を含むべし。若し我忍ばずんば、當に地獄に墮し、鐵垣熱地に無量の苦を受くべく、燒灸燔煮具に說くべからず」と。是を以ての故に知んぬ、小人は無智にして輕んずと雖も而も貴く、忍ばずして威を用ふれば快なりと雖も而も賤し。是故に菩薩は應當に忍辱すべし。復次に、菩薩、思惟すらく「我は初發心より、誓つて衆生の爲に其心病を治す。今此衆生は、瞋恚結使の爲に病せらる。我當に之を治すべし、云何が復之を以て自ら病まん、應當に忍辱すべし。譬へば藥師の衆病を療治するが如し。若し鬼狂病の刀を拔き、罵詈して好醜を識らず、醫は鬼病なるを知れば、但之を治せんが爲に瞋恚せざるなり。菩薩若し衆生の爲に瞋惱罵詈せられんに、其は瞋恚する者の煩惱の爲に病せられ、狂心に使はるることを知る。方便もて之を治して、嫌責する所無きも、亦復是の如し。復次に、菩薩は一切を育養し、之を愛すること子の如し。若し衆生、菩薩を瞋惱するも、菩薩は之を愍んで、瞋らず責めず。譬へば慈父の子孫を撫育するが如し。子孫は幼稚にして未だ識る所有らず、或時は罵詈し打擲し、敬せず畏れざれども、其父は其愚小を

【衆生數】有情のこと、非衆生數とは非情のこと。

愍んで、之を愛すること愈々至り、過罪有りと雖も瞋らず恚らざるなり」菩薩の忍等も亦復是の如し。復次に、菩薩、思惟すらく、「若し衆生の瞋惱を我に加ふとも、我は當に忍辱すべし。若し我忍ばずんば、今世は心に悔い、後には地獄に入りて苦を受くること無量ならん。若し畜生に在りては、毒龍、惡蛇、師子、虎狼と作り、若し餓鬼と爲りては、火、口より出でん。譬へば人の火に燒かるるに、燒くる時は痛輕うして、後痛むこと轉た重きが如し」と。

復次に、菩薩、思惟すらく、「我、菩薩と爲りて、衆生の爲に益利せんと欲す。若し我忍辱すること能はずんば、菩薩と名けず、名けて惡人と爲す」と。復次に、菩薩、思惟すらく、「世に二種有り、一は衆生數、二は非衆生數なり。我は初發心より、誓って一切衆生の爲にす。若し非衆生數有り、山石、樹木、風寒、冷熱、水雨の侵害すとも、但之を禦ぐことを求めて、初より瞋恚せず。今此衆生は、是れ我爲る所にして、惡を我に加ふ、我は當に之を受くべし、云何が瞋らん」と。復次に、菩薩は、久遠より已來、因緣和合して假に名けて人と爲し、實の人法無きことを知る、誰か瞋るべき者有らん。是中に但骨肉皮肉のみ有り。譬へば壘塹の如く、又、木人機關の動作して、去有り來有るが如し。其れ此の如しと知らば、瞋ること有るべからず。若し我瞋らば、是れ則ち愚癡にして、自ら罪苦を受く。是故に應に忍辱を修すべし。復次に、菩薩、思惟すらく、「過去の無量恒河沙等の諸佛は、本菩薩の道を行ずる時、皆先づ生忍を行じ、然る後法忍を修行す。我今求めて佛道

を學ぶことは、當に諸佛の法の如くなるべし。瞋恚を起して、魔界の法の如くなるべからずと。是を以ての故に、應に忍辱すべし。是の如き等の、種種無量の因緣の故に能く忍ぶ、是を生忍と名く。

大智度論卷第十四

【一】次に法忍を明す。

【六情】眼、耳、鼻、舌、身、意のこと。

【六塵】色、聲、香、味、觸のこと。

大智度論釋初品中羼提波羅蜜法忍義第二十五　卷第十五

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什　詔を奉じて譯す

【一】云何が法忍と名くる。諸の恭敬、供養の衆生、及び諸の瞋惱、婬欲の人に忍ぶ、是を生忍と名け、其供養恭敬の法、及び瞋惱、婬欲の法を忍ぶ、是を法忍と爲す。復次に、法忍とは、内の六情に於て著せず、外の六塵に於て受けず、能く、此二に於て分別を作さず。何を以ての故に。内相は外の如く、外相は内の如くなればなり。二相は倶に得べからざるが故に、一相なるが故に、因縁合するが故に、其實は空なるが故に、一切の法相は常に清淨なるが故に、眞如法相の如きの相なるが故に、不二入なるが故に、二無しと雖も亦一ならざるなり。是の如く諸法を觀じて、心信轉ぜざる、是を法忍と名く。「毘摩羅詰經」の中に、法住菩薩の説の如くんば、「生滅を二と爲す、不生、不滅は是れ不二入法門なり」と。乃至文殊尸利の説には、聞く無く、見る無く、一切の心滅して、説無く、語無き、是れ不二入法門なり」と。毘摩羅詰は默然として言ふこと無し。諸の菩薩は讃じて言はく、「善い哉、善い哉、是れ眞の不二入法門なり」と。復次に、一切の法に二種有り、一には衆生、二には諸法なり。菩薩の衆生の中に於て忍ぶことは、先に説くが如し、今は法中に忍

ぶことを說く。法に二種有り、心法と非心法となり。非心法の中に內有り、外有り。外には寒熱風雨等有り、內には飢渴老病死等有り。是の如き等の種種を名けて非心法と爲す。心法の中に二種有り、一には瞋恚、憂愁、疑等にして、二には婬欲、憍慢等なり。是の二を名けて心法と爲す。菩薩は此の二法に於て、忍びて動ぜざる、是を法忍と名く。問うて曰はく、「衆生の中に於て、若し瞋惱して命を害すれば罪を得、憐愍すれば福を得れども、寒熱風雨には、增損有ること無し、云何が而も忍ばん。」答へて曰はく、「增損無しと雖も、自ら惱亂憂苦を生じ、菩薩の道を壞す、是を以ての故に應當に忍ぶべし。復次に、但衆生を殺惱するが故に罪を得るに非ず、惡心の爲に因緣と作るが故に罪有り。所以は何ん、衆生を殺すと雖も、無記心なれば是れ便ち罪無し。衆生を慈念すれば、與ふる所無しと雖も大いに福を得。寒熱風雨は增損する無しと雖も、然も能く惡意を生ずるを以ての故に罪を得。是を以ての故に應當に忍ぶべし。復次に、菩薩は自ら宿罪の因緣によりて此苦處に生ずることを知る。「此は我自ら作る、我、應に自ら受くべし」と是の如く思惟す。是の故に能く忍ぶ。復次に、菩薩は思惟すらく、「國土に二種有り。淨有り、不淨有り。菩薩は若し不淨の國の中に生ずれば、此の辛苦飢寒衆惱を受け自ら淨願を發す、我成佛する時、國中に此の衆苦無けん、此れ不淨なりと雖も、乃ち是れ我利なり」と。復次に、菩薩は思惟すらく、「世間の八法は、賢聖の免るる能はざる所なり、何に況んや我に於てをや」と。是を以ての故に、應當に忍ぶべし。復次に、菩薩は思惟すらく、「此の身は、來處無く、去處無く、老病死の爲に逐は

るることを知る。復天身は淸淨にして、老無く病無しと雖も、天の樂に耽著す。譬へば醉人の如きは、道福を修行し、出家して欲を離るることを得ず。是を以ての故に此人身に於て、自ら忍びて福を修し、衆生を利益せん」と。復次に、菩薩は思惟すらく、「我は此四大五衆の身を受けて、應に種種の苦分有るべし。身を受けて而も苦ならざる者有ること無し、富貴、貧賤、出家、在家、愚智、明暗の免るることを得る者無し。何を以ての故に。富貴の人は常に怖畏有りて財物を守護す。譬へば肥えたる羊の早く屠机に就くが如く、烏の肉を銜めば、衆鳥の之を逐ふが如し。貧賤の人は飢寒の苦有り。出家の人は今世に苦なりと雖も、後世に福を受けて道を得、在家の人は今世に樂むと雖も、後世に苦を受く。愚人は先づ今世の樂を求め、無常對至すれば、後則ち苦を受く。智人は無常の苦を思惟し、得道を受樂す。是の如き等を身に受くるの人は、苦有らざる無し。是故に菩薩は應當に忍を行ずべし。復次に、菩薩は思惟すらく、「一切世間は皆苦なり、我當に云何が中に於て、而も樂を求むることを欲せん」と。復次に、菩薩は思惟すらく、「我は無量劫の中に於て、常に衆苦を受けて利益する所無く、未だ曾て法の爲にせず、今日衆生の爲に、佛道を求む。此苦を受くと雖も、當に大利を得べし。是故に外內の諸の苦に、悉く當に忍びて受くべし」と。復次に、菩薩、大心に誓願すらく、「若は阿鼻泥梨の苦をも、我當に之を忍ぶべし、何に況んや小苦なるを、而も忍ぶこと能はざらんや。若し小苦にして忍ぶ能はずんば、何ぞ能く大を忍ばん」と。是の如く、種種の外法の中に、忍ぶを名けて法忍と曰ふ。

【一】未得道なるも煩惱中に忍ぶこれ法忍。

問うて曰はく、「云何が内、心法の中に能く忍ぶ」と。答へて曰はく、「菩薩は思惟すらく、「我未だ道を得ず、諸結未だ斷ぜずと雖も、若し當に忍ばずんば、凡人と異らず、菩薩と爲るに非ざるべし」と。復自ら思惟すらく、「若し我道を得ば、諸の結使を斷ぜば、則ち法として忍ぶべき無し」と。復次に、飢渇寒熱は是れ外の魔軍なり、結使煩惱は是れ内の魔賊なり。當に此の二軍を破りて、以て佛道を成ずべし。若し爾らずんば佛道は成ぜず。說くが如くんば、佛苦行すること六年、魔來りて言はく、「刹利の貴人、汝は千分生の中に正しく一分の活有るのみ。速に起ちて國に還り、布施し福を修して、今世後世、人中天上の樂道を得べし。汝唐しく勤苦することを得べからず。汝若し軟言を受けず、迷を守りて起たずんば、我當に大軍衆を將ゐ來りて、汝を撃破すべし」と。菩薩言はく、「我今當に汝が大力の内軍を破るべし、何に況んや外軍をや」と。魔言はく、「何等か是れ我が内軍なる」と。答へて曰はく、

欲は是れ汝が初軍にして、憂愁を第二と爲し
飢渇は第三軍、渇愛を第四と爲す
睡眠は第五軍にして、怖畏を第六と爲し
疑悔は第七軍、瞋恚を第八と爲す
利養虛稱を九と爲し、自ら高り、人を蔑むを十と爲す
是の如き等の軍衆は、出家の人を厭沒す

我は禪の智力を以て、汝が此諸軍を破り
佛道を成ずるを得已りて、能く一切の人を度脱せん

菩薩は此に於て、諸軍未だ破る能はずと雖も、忍辱の鎧を著て、智慧の劍を提り、禪定の楯を執りて、諸の煩惱の箭を遮る。是を內忍と名く。復次に、菩薩は諸の煩惱の中に於て、應當に忍を修すべく、應に結を斷ずべからず。何を以ての故に。若し結を斷ずれば、失ふ所甚だ多く、阿羅漢道の中に墮し、根敗せると異ること無ければなり。是故に遮して斷ぜず、以て忍辱を修し、結使に隨はざるなり。問うて曰はく、『云何が、結使未だ斷ぜずして、而も能く隨はざる。』答へて曰はく、「正思惟の故に、煩惱有りと雖も、而も能く隨はざるなり。復次に、思惟して、空と無常との相を觀ずるが故に、妙好の五欲有りと雖も諸結を生ぜず。譬へば、國王に一人の大臣有り、自ら罪を覆藏して、人の知らざる所なるが如し。王言はく、「脂無く肥えたる羊を取り來れ、汝若し得ずんば當に汝に罪を與ふべし」と。大臣は智有りて、一の大なる羊を繫ぎ、草穀を以て好く養ひ、日に三度、狼を以て之を恐怖す。羊は養を得て肥ゆと雖も、而も脂無し、羊を牽いて王に與ふ。王は人を遣はして之を殺すに、肥えて而も脂無し。王問はく、「云何が爾ることを得る」と。答ふるに上の事を以てす。菩薩も、亦是の無く、無常、苦、空の狼を見て、諸の結使の脂を消し、諸の功德の肉を肥えしむ。復次に、菩薩は功德福報無量なるが故に、其心柔軟にして、諸の結使薄く、忍辱を修し易し。譬へば師子王の林中に在りて吼ゆるとき、人有り、之

を見、頭を叩いて哀を求むるに、則ち放ち去らしむるも、虎豹の小物は爾ること能はざるが如し。何を以ての故に、師子王は貴獸にして、智有り分別するが故に、虎豹は賤蟲にして、分別を知らざるが故なり。又壞軍は、大將に値ふことを得れば則ち活き、小兵に値へば則ち死するが如し。復次に、菩薩の智慧力は、瞋恚に種種の諸惡あることを觀じ、忍等に種種の功德有ることを觀ず、是故に能く結使を忍ぶ。復次に、菩薩は心に智力有りて能く結使を斷じ、衆生の爲に久しく世間に住して、結使は是れ賊なりと知る、是故に忍んで隨はず。菩薩は此結使を繫いで、縱逸ならしめずして功德を行ず。譬へば賊有り、因緣を以ての故に殺さず、堅く一處に閉ぢて、自ら事業を修するが如し。復次に、菩薩は實に諸〻の法相を知るが故に、諸〻の結使を以て惡と爲さず、功德を以て妙と爲さざるなり。是故に結に於て瞋らず、功德を愛せず、是智力を以ての故に、能く忍辱を修す。偈に說くが如し。

菩薩は諸〻の不善を斷じ、乃至極微をも滅して餘す無く
大功德の福は量有る無く、所造の事業は辦せざる無し
菩薩は大智慧力の故に、諸〻の結使に於て惱む能はず
是故に能く諸〻の法相を知り、生死涅槃は一にして二無し

是の如きの種種の因緣により、未だ道を得ずと雖も、諸〻の煩惱法の中に於て能く忍ぶ、是を法忍と名く。

【三】一切法一相にして無二なるに著せざる是れ法忍。

【苦法智】三界の見惑を斷ずる時、欲界の苦諦を觀じてそれに對する見惑を斷じ已りたる解脱道の智をいふ。

【苦比智】苦類智ともいふ、色無色兩界の苦諦を觀じてそれに對する見惑を斷じ已りて正しく理を證するの智をいふ。

【集法智】欲界の集諦を觀じてそれに對する見惑を斷じ已りて正しく理を證するの智。

【集比智】集類智ともいふ、色無色の兩界の集諦を觀じてそれに對する見惑を斷じ已りて正しく理を證するをいふ。

【滅法智】欲界の滅諦を觀じそれに對する見惑を斷じ已りて正しく理を證するの智。

(三)復次に、菩薩は一切の法に於て、一相にして無二なるを知る。一切の法は、相を識るべし。故に言はく、「一の眼識は色を識り、乃至意識は、法を識る。是れ相を識るべきの法なり、故に一と言ふ」と。復次に、一切の法は相を知るべきが故に一と言ふ。苦法智、苦比智は苦諦を知り、集法智、集比智は集諦を知り、滅法智、滅比智は滅諦を知り、道法智、道比智は道諦、及び善世智を知り、亦苦集滅道は虚空にして、智の緣滅に非ざるを知る。是れ相を知るべきの法なり、故に一と言ふ。復次に、一切の法は、緣ずべきの相なるが故に一と言ふ。眼識及び眼識相應の法は色を緣じ、耳識、鼻識、舌識、身識も亦是の如し。意識及び意識相應の法も亦眼を緣じ、亦色を緣じ、亦眼識を緣じ、乃至意を緣じ、法を緣じ、意識を緣ず。一切の法は緣ずべきの相の故に一と言ふ。復次に、一切の法は、各皆一なり。一にして復一有るを名けて二と爲し、三の一を名けて三と爲す。是の如く乃至千萬にして皆是れ一なり、而も假に名けて千萬と爲す。復次に、一切の法中に相有るが故に一と言ひ、一相の故に名けて一と爲し、一切の物を名けて法と爲し、法相の故に名けて一と爲す。是の如き等の無量の一門にして、異相を破し、一に著せざる、是を法忍と名く。

(四)復次に、菩薩は一切を觀じて二と爲す。何等か二たる。二は内外の相に名く、内外相の故に、内は外相に非ず、外は内相に非ず、復次に、一切の法は有無の相なるが故に二と爲す。空と不空、常と非常、我と非我、色と非色、可見と不可見、有對と非有對、有漏と無漏、有爲と無爲、心法と非心法、心數法と非心數法、心相應法と非心相應法なり。是の如

【一比智】色無色兩界の諦法を觀じて之れに對する見惑を斷じ已りて正しく理を證するの智。

【二法智】欲界の苦諦を觀じて之に對する見惑を斷じ已りて正しく理を證するの智。

【三道比智】色無色兩界の道諦を觀じて之に對する智見を斷じ已りて正しく理を證するの智。以上を八智といふ。

【四】一切法を觀じて二法とし三法と觀ずるに著せざるこれ法忍。

【五】十四難不答法中不礙不滯にして法を能く忍ずる是れ法忍。

きの無量の三門にして一を破し、二に著せざる、是を名けて法忍と爲す。復次に、菩薩或は一切法を觀じて三と爲す。何等をか三と爲す。下中上と、善と不善と無記と、有と無と非有非無と、見諦斷と、思惟斷と無斷と、學と無學と非學非無學と、報と有報と非報非有報となり。是の如きの無量の三門にして、一を破し異に著せざる、是を名けて法忍と爲す。復次に、菩薩は未だ無漏道を得ず、結使未だ斷ぜずと雖も、能く無漏の聖法、及び三種の法印を信ず。一には一切有爲の生法は無常等の印、二には一切の法は無我の印、三には涅槃實法の印なり。得道の賢聖の人は、自ら得、自ら知る。菩薩は未だ道を得ずと雖も、能く信じ能く受く、是を法忍と名く。

復次に、十四難の不答の法中に於て、有常無常等の礙無く、中道を失せざるを觀察し、是法を能く忍ず、是を法忍と爲す。一比丘の如きは、此十四難に於て、思惟觀察すれども通達すること能はず、心に忍ずること能はず、衣鉢を持して佛の所に至り、佛に白して言さく、「佛、能く我爲に此十四の難を解いて、我意をして了せしめば、當に弟子と作るべし。若し解くこと能はずんば、我は當に更に餘道を求むべし」と。佛、癡人に告げたまはく、「汝は本我と共に要誓せり。若し十四の難に答へば、汝我弟子と爲らんや。」比丘言さく、「不なり」佛、言はく「汝は癡人なり、今何を以てか、若し答へずんば、我弟子と作らずと言ふ。我は老病死の人の爲に法を說いて濟度す。此十四難の法は、是れ鬭諍の法なり。法に於て、益無く、但是れ戲論なり。何んが問を爲すを用ひん、若し汝が爲に答ふとも、

【八】一心に信受して疑悔せざる是れ法忍。

汝が心に了せず、死に至るまで解せずんば、生老病死を脱することを得ること能はず。譬へば人有りて、身に毒の箭を被るが如し。親屬は、醫を呼びて爲に箭を出し、藥を塗らんと欲するに、便ち言はく、未だ箭を出すべからず、我先づ當に汝が姓字、親里、父母の年歲を知り、次に箭は何の山に在りて出るか、何の木、何の羽もて箭を作り、鏃は是れ何人か爲り、是れ何等の鐵なるかを知らんと欲す。復弓は何の山の木、何の蟲角なるかを知らんと欲す。復藥は是れ何の處に生じ、是れ何の種名なるかを知らんと欲す。是の如き等の事を、盡く了了に之を知りて、然る後に汝が箭を出し、藥を塗ることを聽さん」と。佛、比丘に問ひたまはく、「此人は此衆事を知ることを得て、然る後に箭を出すべきや不や」と。比丘言さく、「知ることを得べからず。若し盡く知ることを待たば、此は則ち已に死せん」佛、言はく「汝も亦是の如し、邪見の箭に、愛の毒を塗ることを爲し、已に汝が心に入れり、此箭を拔いて、我弟子と作らんことを欲して、而も箭を出すことを欲せず、方に世間の常、無常、邊、無邊等を求めんと欲す。之を求めて未だ得ざれば、則ち慧命を失して畜生と同じく、死して自ら黑暗に投ぜん」と。比丘は慚愧して深く佛語を識り、即ち阿羅漢道を得たり。復次に、菩薩は一切智人と作らんと欲せば、應に一切の法を推求して、其實相を知るべし。十四難の中に於て滯らず、礙へず。其れ是心の重病を知りて、能く出で能く忍ぶ、是を法忍と名く。

復次に佛法は甚深にして清淨微妙なり。種種無量の法門を演暢し、能く一心に信受し

【七】種種の智慧門に入り諸法實相を知らんとして中に忍ぶ是れ法忍。中に諸法實相を明す。

て、疑はず悔いざる、是を法忍と名く。佛の言ふ所の如くんば、諸法は空たりと雖も、亦斷ぜず、亦滅せず。諸法は因緣相續して生ず、亦常に非ず。諸法は神無しと雖も、亦罪福を失せず。一心に念ずるの頃に、身の諸法諸根諸慧轉滅して停まらず、後念に至らず、新新に生滅して、亦無量世の中の因緣業を失せず。諸の衆、界、入の中、皆空にして神無し。而も衆生は五道の中に輪轉して生死を受く。是の如き等の種種の甚深微妙の法は、未だ佛道を得ずと雖も、能く信じ能く受けて疑はず悔いざる、是を法忍と爲す。

（七）復次に、阿羅漢辟支佛は生死を畏れ惡んで、早く涅槃に入らんことを求む。菩薩は未だ佛と成るを得ざれども、而も一切智を求めんことを欲し、衆生を憐愍せんと欲し、了了に分別して、諸法の實相を知らんと欲し、是中に能く忍ぶ、是を法忍と名く。問うて曰はく、『云何が諸法の實相を觀ずる。』答へて曰はく、『諸法を觀知すれば、瑕隙有ること無し、破すべからず、壞すべからず、是を實相と爲す。』問うて曰はく、『一切の語は皆答ふべく、破すべく、壞すべし。云何が破壞すべからざる、是を實相と爲すと言ふ。』答へて曰はく、『諸法は破すべからざるを以ての故に、佛法の中に於て一切の言語の道を過ぎ、心行處滅し、常に不生不滅にして、涅槃の相の如し。何を以ての故に、若し諸法の相は實有なれば、應に無なるべからず。若し諸法は先に有にして、今無ならば、則ち是れ斷滅なり。復次に、諸法は是れ常なるべからず。何を以ての故に。若し常ならば、即ち罪無く、福無く、傷殺せらるる無し。亦施命無く、亦修行の利益無く、亦縛無く、解無く、世間は則ち是れ涅槃

なり。是の如き等の因縁の故に、諸法は常なるべからず。若し諸法は無常ならば、則ち是れ斷滅して、亦罪無く、福無く、亦增損無く、功德業の因縁、果報も亦失せん。是の如き等の因縁の故に諸法は無常なるべからず。問うて曰はく、「佛法の中には、常も亦實ならず、無常も亦實ならずと言ふも、是事は然らず。何を以ての故に。佛法の中には常も亦實、無常も亦實なり。常とは數縁盡き、非數縁盡くるなり。虛空は生ぜず、住せず、滅せざるが故に、是れ常相なり。無常とは、五衆の生住滅の故に無常相なり。汝は何を以てか、常、無常は、皆實ならずと言ふ。」答へて曰はく、「聖人に二種の語有り。一は方便語、二は直語なり。方便語とは人の爲に因縁と爲るが故なり。人の爲とは、衆生の爲に說く、是れ常、是れ無常なり。對治悉檀の中に說くが如きは、若し無常と說くは、衆生の三界の樂に著するを拔かんと欲すと。佛、思惟したまはく、「何を以てか衆生をして、欲を離るることを得しめん」と。是故に無常法を說くこと偈の如し。

若し無生法を觀ずれば、生法に於て離るるを得
若し無爲法を觀ずれば、有爲に於て離るるを得

云何が生生を因縁和合と名くる。無常にして、自在ならざれば、因縁に屬す。有とは老病死の相、欺誑の相、破壞の相なり。是を生生と名く。則ち是れ有爲法なり。對治悉檀に說くが如きは、常無常は實相に非ず、二は倶に過なるが故なり。若し諸法は有常に非ず、無常に非ずとは、是を愚癡の論と爲す。所以は何かん、若し有に非ざれば則ち無を破し、若し

無に非ざれば則ち有を破す、若し此の二事を破すれば、更に何の法の說くべき有らん。問うて曰はく、『佛法の常空の相の中は、有に非ず無に非ず、空は有を除く、を以て空なり、空をも無しと遮る、是を有に非ず、無に非ずと爲す、何を以て愚癡の論と言ふ。』答へて曰はく、『佛法は實相にして、受けず著せず、汝は非有非無を受け著するが故に、是を癡論と爲す。若し有に非ず、無に非ずと言はば、是れ則ち說くべく、破すべく、是れ心の生處、是れ鬪諍の處なり。佛法は則ち然らず、因緣の故に有に非ず無に非ずと說くと雖も、著を生ぜず、著を生ぜざれば則ち壞すべからず、破すべからず。諸法は若は有邊、若は無邊、若は有無邊、若は非有無邊、若は死後有去、若は死後無去、若は死後有去無去、若は死後非有去非無去なり。是身は、是れ神、身の異り、神の異るも亦是の如く、皆實ならず、六十二見の中に於て諸法を觀るに、亦皆實ならず。是の如きの一切を除却して、佛法の清淨不壞相を信じ、心に悔いず轉ぜざる、是を法忍と名く。復次に、有無の二邊を以て諸法の生ずる時と住する時とを觀ずれば、則ち有見の相と爲り、諸法の老ゆる時と、壞する時とを觀ずれば、則ち無見の相と爲る。三界の衆生は、多く此の二見の相に著す。是の二種の法は虛誑にして實ならず、若し實に有相なれば、則ち無なるべからず、何を以ての故に。今無にして先有ならば、則ち斷の中に墮すればなり。若し斷は、是れ則ち然らず。復次に、一切の諸法は、名字和合の故に、之を謂ひて有と爲す。是故に名字和合して、生ずる所の法は、不可得なり。』問うて曰はく、『名字の生ずる所の法は不可得なりと雖も、則ち名字の和合有り。』答

へて曰はく、「若し無法なれば、名字は誰が爲にか和合せん、是れ則ち名字無きなり。復次に、若し諸法は、實有ならば、應に心識を以ての故に、有なりと知るべからず。若し心識を以ての故に、有と知らば、是れ則ち有に非ず。地の堅相の如きは、身根を以て身に識知するが故に有なり。若し身根無くして、身に識知すれば、則ち堅相無し。」問うて曰はく、「身根身識の、若は知り、若は知らざるも、而も地は常に是れ堅相なりや。」答へて曰はく、「若は先より自ら堅相有るを知り、若は他より聞いて、則ち堅相有ることを知る、若し先に知らず聞かざれば、則ち堅相無し。復次に、地、若し常に是れ堅相ならば、其相を捨つべからず。凝酥、蠟蜜、樹膠の如きは、融くれば則ち其堅相を捨てて濕相の中に墮す。金銀銅鐵等も亦爾なり。水の如きは濕相と爲り、寒ければ則ち轉じて堅相と爲る。是の如き等の種種は、悉く皆相を捨つ。復次に、諸の論議の輩は、有を能く無ならしめ、無を能く有ならしむ。諸の賢聖の人、坐禪の人は、能く地を水と作し、水を地と作らしむ。是の如き等の諸法は皆轉ずべし、十一切入の中に說くが如し。復次に、是有見は貪欲、瞋恚、愚癡、結縛、鬪諍の爲の故に生ず。若し此欲恚等を生ずる處有らば、是れ佛法に非ず。何を以ての故に。佛法の相は善淨なるが故なり。是を以ての故に實に非ず。復次に、一切の有法に二種有り、色法と無色法となり、色法は分析して乃ち微塵に至れば、散滅して餘るところ無し。檀波羅蜜品の破施物の中に說くが如し。無色法は五情の知らざる所なるが故に、意情の生住滅の時觀ずるが故に、心に分有ることを知る。分有るが故に無常なり、無

常なるが故に空なり、空の中に有に非ず。彈指の頃に六十時有り、一一の時の中に、心に生滅有り。相續して生ずるが故に、是れ貪心、是れ瞋心、是れ癡心、是れ信心、清淨の智慧禪定心なりと知る。行者は心の生滅を觀じて流水、燈焰の如しとなす、此を空智門に入ると名く。何を以ての故に。若し一時に生じ餘時の中に滅せば、此心は應に常なるべければなり。何を以ての故に。此極少時の中には滅無きが故なり。若し一時の中に滅無ければ、應に終始に滅無かるべし。復次に、佛說きたまはく、「有爲法は皆三相有り」と。若し極少時の中に生じて滅無くんば、是れ有爲法に非ずと爲す。若し極少時の中に心生じ、住し、滅するあらば、何を以てか但先に生じて後に滅し、先に滅せずして後に生ぜざる。復次に、若し先に心有りて、後に生ずる有らば、則ち心生ずるを待たず。何を以ての故に、先に已に心有るが故なり。若し先に生有らば、則ち生に所生無し。又生滅の性と相違す。生ずれば則ち滅すること有るべからず、滅する時は生ずること有るべからず。是を以ての故に一時も不可得なり、異も亦不可得なり、是れ則ち無生なり。若し無生なれば、則ち住滅無く、若し生住滅無ければ、則ち心數法無く、心數法無ければ、則ち心不相應無し。諸行色無ければ、色法無きが故に、無爲法も亦無なり。何を以ての故に。有爲に因るが故に無爲有り、若し有爲無ければ、則ち亦無爲も無きが故なり。復次に、作法の無常を見るが故に、作法の常ならざることを知る。若し然れば今作法は是れ有法なりと見れば、不作法は應に是れ無法なるべし。是を以ての故に常法は得べからず。復次に、外道及び佛弟子

【時、方等】時とは外道中時論師が時をもつて諸法の本體なりと主張するの謂ひ、方とは方論師が方處を以て萬物の本源なりといふをいひ、微塵とは、之を以て萬有の根本なりといふをいひ、冥初とは數論學派にて二十五諦を立つる中第一諦を冥諦といひ、そを諸法の元となすをいふ。

は、常法に、同有り異有りと說く。同とは虛空と涅槃となり。外道の神、時、方、微塵、冥初有りと言へる、是の如き等を名けて異と爲す。又佛弟子は、數緣の滅は、是れ常に非ずと說き、又復言はく、「滅の因緣法は常なり、因緣生の法は無常なり」と。摩訶衍の中にては常法の法性は眞際の如しと。是の如き等の種種を名けて、常法虛空涅槃と爲す。先の讃菩薩品の中に說くが如し。神及び時、方、微塵も亦上に說くが如し。是を以ての故に諸法は、有なりと言ふべからず。若し諸法の無なるには二種有り、一には常無と、二には斷滅の故に無なることなり。若は先有にして今無、若は今有にして、後無ならば、是れ則ち斷滅なり。若し然れば、則ち因緣無し。因緣無ければ、應に一物の中より一切の物を出すべく、亦應に一切の物中に、都て出す所無かるべし。後世の中も亦是の如し。若し罪福の因緣を斷ずれば、則ち貧富貴賤の異、及び惡道畜生の中に墮すること有るべからず。若し常無なりと言はば、則ち苦集滅道無し。若し四諦無ければ、則ち法寶無く、則ち八賢聖道無し。若し法寶僧寶無ければ、則ち佛寶無し。若し是の如くんば則ち三寶を破る。復次に、若し一切の法は實に空ならば、則ち罪福無く、亦父母無く、亦世間の禮法無く、亦善無く惡無けん。然れば則ち善惡は同門、是非は一貫にして、一切の物は盡く無なること、夢の中に見る所の如くたらん。若し實に無なりと言はば、是の如きの失有り。此言、誰か當に信ずべき者ぞ。若し顚倒の故に有と見ると言はば、一人を見るべき時に當り、何を以てか二三を見ざるや。其は實に無なるを、而も顚倒して見るが故なり。若し此有無の見に墮せ

すんば、中道實相を得ん。云何が實を知る。過去恒河沙等の、諸佛菩薩の知りたまふ所、說きたまふ所、未來恒河沙等の諸佛菩薩の知りたまふ所、說きたまふ所、現在の恒河沙等の諸佛菩薩の知りたまふ所、說きたまふ所の如し。信心大なるが故に、疑はず、悔いず、信力大なるが故に、能く持ち、能く受く、是を法忍と名く。復次に、禪定力の故に、心柔軟清淨なれば、諸法の實相を聞いて、心に應じて與に會し、信著深く入りて、疑無く悔無し。所以は何ん、疑悔は是れ欲界繫の法にして麁惡なるが故に、柔軟の心の中に入らざればなり。是を法忍と名く。復次に、智慧力の故に、一切諸法の中に於て種種に觀ずるに、一法として得べき者有ること無く、是法を能く忍じ、能く受けて、疑はず悔いざる、是を法忍と名く。復次に、菩薩は思惟すらく、「凡夫の人は、無明の毒を以ての故に、一切諸法の中に於て轉相を作し、非常には常想を作し、苦には樂想を作し、無我に我想有り、空に實有りと謂ひて、非有を有と爲し、有を非有と爲す」と。是の如き等の種種の法の中に轉相を作して、眞實の智慧を得、無明の毒を破り、諸法の實相を知り、無常と苦と空と無我との智慧を得、棄捨して著せず、是法を能く忍ぶ、是を法忍と名く。復次に、一切諸法を觀ずるに、本より已來、常に空なり。今世も亦空なり。是法を能く信じ、能く受くる、是を法忍と爲す。問うて曰はく、「若し本より已來、常に空にして、今世も亦空なる、是を惡邪と爲す。云何が法忍と言ふ。」答へて曰はく、「若し諸法の畢竟空を觀じて、相を取り心に著する、是を惡邪見と爲す。若し空を觀じて著せず、邪見を生ぜざれば、是を法忍と爲す。

【八】以下身心精進にして懈怠せざるが故に應に毘梨耶波羅蜜を具足すべしの文を釋論する中初に精進を六度中の第四に置くに就いて明す。

偈に說くが如し。

諸法の性は常に空なり、心亦空に著せず
是の如く法を能く忍ぶ、是れ佛道の初相なり

是の如き等の種種の智慧門に入り、諸法の實相を觀じ、心退かず、悔いず、諸觀に隨はず、亦憂ふる所無く、能く自利利他を得。是を法忍と名く。是法忍に三種有り、行、清淨にして、忍辱の法を見ず、己身を見ず、罵辱の人を見ず、諸法に戲れず、是時を清淨の法忍と名く。是事を以ての故に、菩薩は般若波羅蜜の中に住して、能く羼提波羅蜜を具足すと說く。不動不退なるが故なり。云何が不動不退と名くる。瞋恚を生ぜず、惡言を出さず、身に惡を加へず、心に疑ふ所無し。菩薩は、般若波羅蜜の實相を知りて、諸法を見ず。心に著する所無きが故に、若は人來りて罵り、若は楚毒殺害を加ふるも、一切能く忍ぶ。是を以ての故に、般若波羅蜜の中に住して、能く羼提波羅蜜を具足すと說く。

大智度論初品中毘梨耶波羅蜜義第二十六

經 身心精進にして、懈怠せざるが故に、應に毘梨耶波羅蜜を具足すべし。

論 (八)毘梨耶と秦に精進と言ふ。問うて曰はく、精進の如きは、是れ一切善法の本にして、應に最も初に在るべし、今何を以ての故に第四なる。答へて曰はく、布施、持戒、忍辱は世

間に常に有り。客主の義の如きは、法として應に供給すべし、乃至畜生も亦布施を知る。或は人有り、種種の因縁の故に能く布施す。若は今世の爲、若は後世の爲、若は道の爲の故に布施するも、精進を須ひず。戒を持つ者は、惡を爲す人を、王法の罪を治むるを見て、便ち自ら畏罪し、敢て非を爲さざるが如し。或は、性の善にして諸惡を作さざる有り。有人は、今世に惡を作せば、後世に罪を受くと聞いて、而も怖畏するを以ての故に、能く戒を持つ。有人は、持戒の因縁の故に、生老病死を離るることを得と聞いて、此中に心生じ、口に言はく、「我、今日より復殺生せず」と。是の如き等は、即ち是れ戒なれども、豈精進波羅蜜を須ひて、而も能く行ぜんや。忍辱の中の如きは、若は罵り、若は打ち、若は殺し、或は畏るるが故に報ぜず、或は力少なく、或は罪を畏れ、或は善人の法を修し、或は道を求むるが爲の故に、默然として報ぜず、皆必ずしも、精進波羅蜜を須ひずして、乃ち能く忍ぶ。今諸法の實相を知ることを得て、般若波羅蜜を行ぜんと欲するが故に禪定を修行す。禪定は是れ智慧の門なり。是中に應に勤修精進して一心に禪を行ずべし。復次に、布施、持戒、忍辱は、是れ大福德、安隱快樂なり、好き名譽有り、欲する所の者を得。既に此福利の味を知ることを得て、今增進して更に妙勝、禪定の智慧を得んと欲す。譬へば井を穿つに、已に濕泥を見れば、轉增進を加へ、必ず望んで水を得るが如し。又火を鑽りて已に煙を見ることを得れば、倍、復力を勵まし、必ず望んで火を得るが如し。佛道を成ぜんと欲するに、凡そ二門有り。一には福德、二には智慧なり。施と

戒と忍とを行ずる、是を福德門と爲し、一切諸法の實相、摩訶般若波羅蜜を知る、是を智慧門と爲す。菩薩は福德門に入りて一切の罪を除き、願ふ所皆得たまふ。願を得ざるは罪垢の遮るを以ての故なり。智慧門に入れば、則ち生死を厭はず、涅槃を樂はず、二事は一なるが故なり。今摩訶般若波羅蜜を出生せんと欲す。般若波羅蜜は、要ず禪定門に因り、禪定門は必ず大精進力を須ふ。何を以ての故に散亂心にして、諸法の實相を見ることを得る能はざればなり。譬へば風中の然燈は物を照すこと能はず、燈密室に在れば、明にして必ず能く照すが如し。是禪定智慧は、福を以て願求すべからず、亦麁觀にして能く得るに非ず。要ず須らく身心精懃にして、急に著して懈らず、爾れば、乃ち成辦すべし。佛の說きたまふ所の如し。血肉脂髓は皆竭盡せしむとも、但皮骨筋有らば、精進を捨てざらしめよ。是の如くんば仍ち能く禪定の智慧を得ん」と。是二事を得れば、則ち衆事皆辦ず。是を以ての故に精進は第四なり、名けて禪定は實智慧の根と爲す。上の三の中に精進有りと雖も、少きが故に說かず。問うて曰はく、「有人、言はく、『但布施、持戒、忍辱を行ずるが故に大福德を得、福德力の故に願ふ所皆得、禪定智慧は自然にして至る、復何んが精進波羅蜜を用ひん』と。」答へて曰はく、「佛道は甚深にして得難し。布施、持戒、忍辱の力有りと雖も、要ず精進を須ひて、甚深の禪定、實智慧、及び無量の諸佛の法を得。若し精進を行ぜずんば、則ち禪定を生ぜず、禪定生ぜざれば、則ち梵天王の處にすら生ずることを得ず、何に況んや佛道を求めんことを欲せんや。復次に、人有り、民大居士等の如きは、

【九】次に精進を觀ずるにより得るところの利益に就いて。

無量の寶物を得んと欲すれば、則ち意に應じて皆得。頂生王の如きは、四天下に王たりしに、天は七寶及び、所須の物を雨らし、釋提婆那民は座を分ちて與に坐せり。是れ福有りと雖も、然も道を得ること能はず。羅頻珠比丘の如きは、阿羅漢道を得と雖も、乞食すること七日にして得ず、空鉢にして還り、後禪定の火を以て、自ら其身を燒いて般涅槃せり。是を以ての故に知りぬ、但福德力の故に道を得るに非ず、佛道を成ぜんと欲せば、要ず須らく懃めて大いに精進すべしと。

問うて曰はく、菩薩は精進を觀じて、何の利益有れば、而も懃修して懈らざるや。答へて曰はく、一切の今世後世の道德利益は皆精進に由て得らる。復次に、若し人自ら身を度せんと欲せば、尚當に懃めて急に精進すべし。何に況んや菩薩は誓願して一切を度せんと欲するをや。讚精進の偈の中に說くが如し。

人有り身を惜まず、智慧の心決定し
如法に精進を行ぜば、求むる所の事難きこと無し
農夫の懃めて修すれば、收むる所必ず豐實なるが如く
亦遠路を涉るに懃むれば、則ち必ず能く達するが如し
若し天上に生ずるを得ると、及び涅槃の樂を得ると
是の如きの因緣は、皆精進力に由る
天に非ず、無因に非ず、自ら作すが故に自ら得

【阿鼻泥犂】アギーチ、ナラカ(Avici Naraka)阿鼻地獄のこと。

誰か智慧有る人にして、而も自ら勉勵せざらんや
三界の火の熾然なること、譬へば大炎火の如し
有智決斷の人は、乃ち能く免離するを得
是を以ての故に佛告げたまはく、阿難、正しく精進して
是の如く懈怠せざれば、直に佛道に至る
勉強し懃修して、地を穿てば能く泉に通ず
精進も亦是の如し、求むるものとして得ざる無し
能く道を行くが如く、法のごとく精進して懈らずんば
無量の果必ず得て、此報は終に失せざらん

復次に、精進の法は、是れ一切諸善法の根本にして、能く一切諸の道法、乃至、阿耨多羅三藐三菩提を出生す。何に況んや小利に於てをや。毘尼の中に說くが如くんば、一切諸の善法、乃至、阿耨多羅三藐三菩提は、皆精進不放逸より生ず。復次に、精進は能く先世の福德を勤發す。雨の種を潤して能く必ず生ぜしむるが如く、此も亦是の如し。先世の福德の因緣有りと雖も、若し精進無ければ則ち生ずること能はず、乃至今世の利すら尚得ること能はず、何に況んや佛道をや。復次に、諸の大菩薩は、衆生を荷負して一切の苦、乃至、阿鼻泥犂の中の苦を受け、心亦懈らず、是を精進と爲す。復次に、一切の衆事は、若し精進無ければ、則ち成ずること能はず、譬へば下藥は巴豆を以て主と爲すが如

し。若し已に是を除いては、則ち正力無し。是の如く意止、神足、根、力、覺、道は、必ず精進を待つ。若し精進無ければ、則ち衆事辦せず。戒の如きは、唯八道に在りて餘處に在らず。信は根と力とに在りて、餘處には則ち無く、精進の如きは、處として在らざる無し。既に衆法を總べて、別に自ら門有り。譬へば無明使は、遍く一切諸使の中に在るも、而も別して不共無明有るが如し。問うて曰はく、「菩薩は一切の佛法を得んと欲し、一切の衆生を度せんと欲し、一切の煩惱を滅せんと欲するに、皆意の如くなることを得。云何が精進を增益して、而して能く佛を得る。譬へば、小火は、大林を燒くこと能はず、火勢增益すれば能く一切を燒くが如し。」答へて曰はく、「菩薩は初發心より誓願を作す、當に一切衆生をして快樂を得しむべしと。常に一切の爲に、自ら身を惜まず。若し身を惜まば、諸の善法に於て成辦すること能はず、是を以ての故に精進を增益す。復次に、菩薩は種種の因緣を以て懈怠の心を呵し、精進に樂著せしむ。懈怠の黑雲は、諸の明慧を覆うて功德を呑滅し、不善を增長す。懈怠の人は、初は小しく樂むと雖も、後には則ち大いに苦む。譬へば毒食は初め香美なりと雖も、久しければ則ち人を殺すが如し。懈怠の心は、諸の功德を燒く。譬へば大火の、諸の林野を燒くが如し。懈怠の人は、諸の功德を失ふ。譬へば賊を被りて復遺餘無きが如し。偈に說くが如し、

應に得べくして而も得ず、已に得て復失ふ
既に自ら其身を輕んずれば、衆人も亦敬せず

常に大闇の中に處して、諸の威德有ること無く
尊貴の智慧の法は、此事永く以て失す
諸の妙道の法を聞くも、以て身を益する能はず
是の如きの過失は、皆懈怠の心に由る
增益の法を聞くと雖も、上に及ぶことを得る能はず
是の如きの過罪は、皆懈怠の心に由る
業を生じて理を修めず、道法に入らず
是の如きの過失は、皆懈怠の心に由る
上智の棄て遠ざかる所、中人は時として復近づき
下愚は之が爲に沒すること、猪の樂んで溷に在るが如し
若し世中の人と爲りては、三事皆廢失し
欲樂及び財利、福德も亦復沒す
若し出家の人と爲りては、則ち二事を得ず
生天及び涅槃、名譽の二俱に失す
是の如き諸の廢失の、其所由を知らんと欲せば
一切の諸の賊中に、懈怠の賊に過ぎたるは無し
是の衆罪を以ての故に、懶心を作すべからず

【金剛三昧】金剛の能く一切に無礙なる如く、一切諸法に通達するをいふ

馬井二比丘の如きは、懈怠にして惡道に墮ち佛を見、法を聞くと雖も、猶亦自ら勉めず

是の如き等の種種の懈怠の罪を觀じて、精進し增長すべし。復次に、精進の益を觀ずるに、今世、後世、佛道の涅槃の利は、皆精進に由る。復次に、菩薩は、一切の諸法は、皆空にして、所有なきことを知り、而も涅槃を證せず、衆生を憐愍して、諸の善法を集む、是れ精進波羅蜜の力なり。復次に、菩薩は一人にして、獨り等侶無し、精進福德力を以ての故に、能く魔軍及び結使の賊を破り、佛道を成ずることを得。既に佛道を得れば一切諸法に於て、一相無相にして、其は實に皆空なり。而も衆生の爲に、諸法の種種の名字、種種の方便を說きて、衆生の老病死の苦を度脫し、將に滅度せんとする時は法身を以てし、彌勒菩薩、摩訶迦葉、阿難と等し。然る後に金剛三昧に入りて、自ら身骨を碎きて芥子の如くならしめ、以て衆生を度して精進力を捨てず。復次に、阿難が諸の比丘の爲に、七覺意を說いて、精進覺意に至れるが如し。佛、阿難に問ひたまはく、「汝、精進覺意を說くや」と。阿難言さく、「精進覺意を說くこと是の如し」と。三たび問ひたまふに、三たび答ふ。佛、卽ち坐より起ちて、阿難に告げたまはく、「人能く愛樂して精進を修行すれば、事として得ざる無く、佛道に至ることを得て、終に虛しからざるなり」と。是の如き種種の因緣によりて、精進の利を觀じて、增益することを得。是の如きの精進を、佛、有時は說いて欲と爲し、或時は精進と說き、有時は不放逸と說きたまへり。譬へば人の遠く行か

んと欲するが如し。初めて去らんと欲する時は、是を名けて欲と爲し、發行して住せざる、是を精進と爲し、能く自ら懃勵して、行事をして稽留せしめざる。是を不放逸と爲す。是を以ての故に知りぬ、精進を生ぜんと欲して、精進生ずるが故に不放逸なり。不放逸の故に、能く諸法を生じ、乃至佛道を成ずるを得と。復次に、菩薩は、生・老・病・死を脫せんと欲し、亦衆生を度脫せんと欲して、常に應に精進して、一心に不放逸なるべし。人の油鉢を擎げて、大衆の中を行くが如く、現前一心に、不放逸なるが故に、大いに名利を得。又、偏閣、嶮道、若は懸繩、若は山羊の此諸の惡道に乘るに、一心不放逸なるを以ての故に、身安穩なることを得るが如し。今世に大いに名利を得、道を求めて精進なるも、亦復是の如し。若し一心に不放逸なれば、願ふ所皆得らる。

復次に、譬へば水の流れて能く大石を決するが如し。不放逸の心も亦復是の如し、專ら方便を修して常に行じて廢せざれば、能く煩惱諸結使の山を破す。復次に、菩薩は三種の思惟有り、「若し我、作さずんば果報を得ず。若し我自ら作さずんば他より來らず。若し我作さば終に失はず」と。是の如く思惟して、當に必ず精進すべし。佛道の爲の故に懃作專精して、不放逸なり。一の小なる阿蘭若の如きは、獨り林中に在りて坐禪して懈怠を生ず、林中に神有り、是れ佛弟子なり、一死屍骨の中に入りて、歌儛し來りて、偈を說いて言はく、

林中の小比丘、何を以てか懈廢を生ずる

皆來るに若し畏れずんば、夜も復是の如くにして來らん

是比丘は驚き怖れ、坐を起ちて内に自ら思惟し、中夜に復睡る。是神は復十頭を現じ、口中より火を出し、牙爪は劍の如く、眼は赤くして炎の如く、顧みて語り、將從ひて此懈怠の比丘を提へ、此處にして懈怠すべからず、何を以ての故に爾ると。是比丘は大いに怖れ、即ち起ちて思惟し、專精に法を念じて、阿羅漢道を得たればなり。是を自强精進、不放逸の力、能く道果を得と名く。復次に、是精進は自ら身を惜まずして果報を惜み、身の四儀の坐臥行住に於て常に精進を懃め、寧ろ自ら身を失ふとも道業を廢せず。譬へば失火に罌水を以て之に投ずるに、唯火を滅するに存して、瓶を惜まざるが如し。仙人の師、弟子に敎へて偈を說いて言へるが如し。

決定して心懌豫すること、大果報を獲るが如くなれ

願事得る時の如く、乃ち此最妙を知れ

是の如く種種の因緣もて精進の利を觀じ、能く精進をして增益せしむ。復次に菩薩、諸の苦行を修す。若し人有りて、來りて頭目髓腦を求索すれば、盡く能く之に與へて、自ら念言すらく、「我に忍辱精進智慧方便の力有るも、之を受くれば尙苦なり。何に況んや愚騃三塗の衆生をや。我當に此衆生の爲の故に、懃修精進して早に佛道を成じ、之を度脫すべし」と。

大智度論卷第十五

【一】精進の相を明す。

大智度論釋初品中毘梨耶波羅蜜義第二十七 巻第十六

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什 詔を奉じて譯す

【一】問うて曰はく、「云何が精進の相と名くる。」答へて曰はく、「事に於て必ず能く起發して難きこと無く、志意堅强にして心に疲惓無く、所作究竟す、此五事を以て精進の相と名く。復次に、佛の所說の如くば、精進の相とは身心息まざるが故なり。譬へば釋迦牟尼佛の如きは、先世曾て賈客の主と作り、諸の賈人を將ゐて嶮難の處に入る。是中に羅刹鬼有り、手を以て之を遮りて言はく、「汝住して動くこと莫れ。汝が去るを聽さず」と。賈客の主は、即ち右拳を以て之を擊つに、拳即ち鬼に著いて、挽くも離すべからず。復、左拳を以て之を擊つに、亦離すべからず。右の足を以て之を蹴るに足復粘著す。復左の足を以て之を蹴るに亦復是の如し。頭を以て之を衝くに、頭は即ち復著く。鬼、問うて言はく、「汝今是の如くにして何等をか作さんと欲する。心休息すること未だしや」と。答へて言はく、「復五事繫けらると雖も、我心終に汝が爲に息はざるなり。當に精進力を以て、汝が與に相擊たるるとも、要ず懈退せざるべし」と。鬼は時に歡喜して心に念ずらく、「此人は膽力極めて大なり」と。即ち人に語りて言はく、「汝は精進の力大なり、必ず休息せずんば、汝を

を放ちて去らしめん」と。行者も是の如く、善法の中に於て、初夜、中夜、後夜に誦經坐禪して諸法の實相を求め、諸の結使の爲に覆はれず、身心懈らざる、是を精進の相と名く。是精進を心數法勤行不住の相と名く。心行に隨うて心と共に生じ、或は有覺有觀、或は無覺無觀なり。阿毘曇の法に廣く說くが如くんば、一切の善法の中に於て勤修して懈らざる、是を精進の相と名け、五根の中に於て精進根と名け、根の增長するを精進力と名け、心、能く開悟するを精進覺と名け、能く佛道涅槃の城に到る、是を正精進と名く。四念處の中に能く勤めて心に繫る、是れ精進分にして、四正勤は是れ精進門なり、四如意足の中の欲精進は即ち是れ精進にして、六波羅蜜の中にては、精進波羅蜜と名く。問うて曰はく、「汝は先に精進を讚じ、今は精進の相を說く、是は何の精進と名くる。」答へて曰はく、「是れ一切善法の中の精進の相なり。」問うて曰はく、「今摩訶般若波羅蜜を說く論議の中に、應に精進波羅蜜を說くべし。何を以ての故に、一切善法の中の精進を說く。」答へて曰はく、「初發心の菩薩は、一切善法の中に於て、漸漸次第して精進波羅蜜を得ればなり。」問うて曰はく、「一切善法の中に精進多し。今精進波羅蜜を說けば、已に一切善法の精進の中に入るや。」答へて曰はく、「佛道の爲に精進するを名けて波羅蜜と爲す。諸餘の善法の中に精進するは、但精進と名けて、波羅蜜と名けざるなり。」

【一一】菩薩の精進を波羅蜜と名くるを明す。

問うて曰はく、「一切善法の中の精進は何を以て精進波羅蜜と名けず、而も獨り菩薩の精進を名けて波羅蜜と爲す。」答へて曰はく、「波羅蜜は到彼岸と名く。世間の人、及び聲聞、辟支

佛は、具足して諸の波羅蜜を行ずる能はず、是故に名けて精進波羅蜜と爲さず。復次に、是人は大慈大悲無く、衆生を棄捨し、十力、四無所畏、十八不共法、一切智、及び無礙解脫、無量の身、無量の光明、無量の音聲、無量の持戒、禪定、智慧を求めず、是を以ての故に是人の精進を波羅蜜と名けざるなり。復次に、菩薩の精進は不休不息にして、一心に佛道を求む、是の如く行ずるを名けて精進波羅蜜と爲す。好施菩薩の如きは、如意珠を求めて大海の水を抒み、正に筋骨をして枯れ盡さしむるも終に懈廢せず、如意珠を得、以て衆生に給し、其身苦を濟へり。菩薩は是の如く、爲し難きを能く爲す、是を菩薩の精進波羅蜜と爲す。復次に、菩薩は精進力を以て首と爲して五波羅蜜を行ず、是時を名けて、菩薩の精進波羅蜜と爲す。譬へば衆藥和合して、能く重病を治するが如し。菩薩の精進も亦是の如く、但精進のみを行じて、五波羅蜜を行ずる能はずんば、是を菩薩の精進波羅蜜と名けず。復次に、菩薩の精進は、財利、富貴、力勢の爲にあらず、亦身の爲にあらず、生天、轉輪聖王、梵釋天王の爲にあらず、亦自ら以て涅槃を求むる爲にあらず、但佛道の爲に衆生を利益す。是の如きの相を名けて、菩薩の精進波羅蜜と爲す。復次に、菩薩の精進は、一切の善法を修行し、大悲を首と爲す。慈父愛子の唯一子のみ有らんに、而も重病を得ば、一心に藥を求めて、其疾を救療するが如し。菩薩の精進は、慈を以て首と爲すも亦復是の如く、一切を救療して心に暫くも捨つること無し。復次に、菩薩の精進は、實相の智慧を以て首と爲して、六波羅蜜を行ず。是を菩薩の精進波羅蜜と名く。問うて曰はく、

【三】菩薩の天眼もて五道の衆生を皆苦なりと觀ずる中、初に人天を見、次に畜生道に於ける鳥獸等の業果を明す。

「諸法の實相は無爲無作なり。精進は有爲有作の相なり。云何が實相を以て首と爲す。」答へて曰はく、「諸法の實相は無爲無作なりと知ると雖も、本願の大悲を以て衆生を度せんと欲するが故に、無作の中に於て、精進力を以て一切を度脫するなり。復次に、若し諸法の實相は、無爲無作なること涅槃の相の如く、一も無く二も無しとせば、汝云何が實相と精進の相と異りと言ふ。汝は卽ち諸法の相を解せざるなり。

(三)復次に、爾時、菩薩、三界五道の衆生を觀るに、各所樂を失す。無色界天は、樂んで定心に著し、命の盡くるを覺えず、欲界の中に墮在して禽獸の形を受く、色界の諸天も亦復是の如し、清淨の處より墮して、還りて婬欲を受けて不淨の中に在り。欲界六天の樂は、五欲に著して還りて地獄に墮し、諸の苦痛を受く。人道の中を見るに、十善の福を以て人身を貿得す。人身は多苦少樂にして、壽盡きて多く惡趣の中に墮す。諸の畜生を見るに、諸の苦惱を受け、鞭杖に驅馳し、重を負ひ遠きを涉り、項領を穿壞し、熱鐵に燒爍す。此人は宿行の因緣の衆生を繫縛するを以て、鞭杖に苦惱す。是の如き等の種種の因緣の故に、象、馬、牛、羊、麞鹿の畜獸の形を受く。婬欲の情重く、無明偏に多きは、鵝鴨、孔雀、鴛鴦、鳩鴿、鷄鶩、鸚鵡、百舌の屬を受く。此を受くる衆鳥の種類は百千なり。婬行の罪の故に、身に毛羽を生じ、諸の細滑を隔て、觜𪘲麁鞕にして觸味を別たず。瞋恚偏に多きは、毒蛇、蝮蠍、蚊蜂、百足の毒を含むの蟲を受く。愚癡多きが故に、蚓、蛾、蜣蜋、蟻螻、鵂鶹、角鴟の屬、諸騃虫鳥を受く。憍慢と瞋恚と多きが故に師子、

虎豹の諸の猛獸の身を受く。邪慢の縁の故に、生を驢、猪、駱駝の中に受く。慳貪、嫉妬、輕躁、短促の故に獼猴、猳玃、熊羆の形を受く。邪貪、憎嫉の業因縁の故に、猫狸、土虎の諸獸の身を受く。無愧、無慚、饕餮の因縁の故に、烏鵲、鵄鷲の諸鳥の形を受く。善人を輕慢するが故に、鶏狗、野干等の身を受く。大いに布施を作すも、瞋恚して曲心なれば、此因縁を以ての故に、諸龍の身を受く。大いに布施を修するも、心高ぶり、陵虐して衆生を苦惱すれば、金翅鳥の形を受く。是の如き等の種種の結使の業因縁の故に、諸の畜生、禽獸の苦を受く。菩薩、天眼を得て、衆生の五道に輪轉するを觀じて、其中に布施し、天中に死して人中に生じ、人中に死して天中に生じ、天中に死して地獄の中に生じ、地獄の中に死して天上に生じ、天上に死して餓鬼の中に生じ、餓鬼の中に死して、還天上に生じ、天上に死して畜生の中に生じ、畜生の中に死して天上に生じ、天上に死して還天上に生ず。地獄、餓鬼、畜生も亦是の如し。欲界の中に死して色界の中に生じ、色界の中に死して欲界の中に生じ、欲界の中に死じて無色界の中に生じ、無色界の中に死して欲界の中に生じ、欲界の中に死して欲界の中に生ず、色界、無色界も亦是の如し。活地獄の中に死して黑繩地獄の中に生じ、黑繩地獄の中に死して活地獄の中に生じ、活地獄の中に死して還活地獄の中に生ず。合會地獄、乃至阿鼻地獄も亦是の如し。炭坑地獄の中に死して沸屎地獄の中に生じ、沸屎地獄の中に死して炭坑地獄の中に生じ、炭坑地獄の中に死して還炭坑地獄の中に生ず。燒林地獄、乃至摩訶波頭摩地獄も亦是の如く、展轉して其中に生ず。

【阿那跋羅伽】アナバラカー(Anabharakā) 無雲天と譯す、四禪天の第一。

【四】餓鬼道に於ける業果を明す。

卵生の中に死して胎生の中に生じ、胎生の中に死して卵生の中に生じ、卵生の中に死して還卵生の中に生ず。胎生、濕生、化生も亦是の如し。閻浮提の中に死して、弗婆提の中に生じ、弗婆提の中に死して、閻浮提の中に生じ、閻浮提の中に死して、還閻浮提の中に生ず。劬陀尼、鬱怛羅越も亦是の如し。四天處に死して三十三天中に生じ。三十三天中に死して四天處に生じ、四天處に死して還四天處に生ず。三十三天、乃至、他化自在天も、亦是の如し。梵衆天の中に死して梵輔天の中に生じ、梵輔天の中に死して梵衆天の中に生じ、梵衆天の中に死して還梵衆天の中に生ず。梵輔天、少光天、無量光、光音、少淨、無量淨、遍淨、阿那跋羅伽に生ずるを得。大果、虛空處、識處、無所有處、非有想、非無想處も亦是の如し。非有想、非無想天の中に死して阿鼻地獄の中に生じ、是の如く展轉して、五道の中に生ず。菩薩は是を見已りて、大悲心を生ずらく、「我は衆生に於て、爲に益する所無し、世と與に樂むと雖も、樂極まれば則ち苦なり、當に佛道の涅槃の常樂を以て、一切を益すべし」と。云何が而も益せん。當に大精進を懃めて、乃ち實智慧を得べし。實智慧を得れば、諸法の實相を知り、餘の波羅蜜を以て助成して、以て衆生を益す、是を菩薩の精進波羅蜜と爲す。

(四)餓鬼の中を見るに、飢渴の故に兩眼陷り、毛髮長く、東西に馳走す。若し水に趣かんと欲すれば、水を護るの諸鬼、鐵杖を以て逆ひ打つ、設ひ守る鬼無きも水自然に竭く、或時は天より雨を雨らすに化して炭と爲る。或は餓鬼有り、常に火に燒かる。劫盡くる時、

【五】次に地獄道に於ける業果を明し、合せて八大地獄、十六小地獄を說く。

諸山より火の出づるが如し。或は餓鬼有り、羸痩狂走し、毛髮は蓬亂して、以て其身を覆ふ。或は餓鬼有り、常に屎尿、涕唾、嘔吐、蕩滌の餘汁を食し、或時は厠溷の邊に至りて、立ちて不淨の汁を伺ひ求む。或は餓鬼有り、常に産婦の穢血を求め、之を飲みて形は燒けたる樹の如く、咽は針の孔の如し。若し其に水を與ふれば、千歳なるも足らず。或は餓鬼有り、自ら其頭を破り、手を以て腦を取りて舐む。或は餓鬼有り、形は黒山の鐵鎖の頸を鎖すが如く、頭を叩き哀を求め、獄卒に歸命す。或は餓鬼有り、先世に惡口し、好みて麁語を以て彼衆生に加ふ、衆生は憎惡して之を見ること讎の如し。此罪を以ての故に、餓鬼の中に墮す。是の如き等の種種の罪の故に、餓鬼趣の中に墮して無量の苦痛を受く。

(五)八大地獄を見るに、苦毒萬端なり。活大地獄の中の諸の罪を受くるの人は、各各共に闘ひ、惡心にして瞋り諍ひ、手に利刀を捉りて互に相割剝し、槊を以て相刺し、鐵叉相叉へ、鐵棒相棒し、鐵杖相捶き、鐵鑽相貫き、而も利刀を以て互に相切膾し、又鐵の爪を以て相爴み裂き、各身血を以て相塗り、漫に痛毒逼切し、悶へて覺る所無し。宿業の因縁にして冷風來り吹き、獄卒之を喚んで唱すれば、諸の罪人は還りて活す。是を以ての故に活地獄と名く。即時に平復して復苦毒を受く、此中の衆生は、宿行の因縁を以て、好みて物の命を殺す。牛羊禽獸を田業、舍宅、奴婢、妻子、國土、錢財の爲の故に、相殺害す。是の如き等の殺業の報の故に、此劇罪を受く。黒繩大地獄の中の罪人を見るに、惡羅刹、獄卒、鬼匠の爲に、常に黒熱の鐵繩を以て罪人を拼度し、獄中の鐵斧を以て之を撤し、

之を斫らしめ、長き者を短からしめ、短き者を長からしめ、方なる者を圓ならしめ、圓なる者を方ならしめ、四肢を斬截し、其耳鼻を劓り、其手足を落し、大鐵鋸を以て解析擶截して、其肉分を破り、臠臠之を稱す。此人は宿業の因縁に、讒賊を忠良とし、妄語、惡口、兩舌、綺語を以て、枉げて無辜を殺し、或は官吏と作りて、酷だ暴く侵害す。是の如き等の種種の惡口讒賊の故に、此罪を受く。合會大地獄の中を見るに、羅刹獄卒は種種の形と作り、牛馬、猪羊、麞鹿、狐狗、虎狼、師子、六駮の大鳥、鵰鷲、鶉鳥、此種種の諸の鳥獸の頭と作り、來りて罪人を呑み噉ひ、齩嚙し、齚掣す。兩山は相合し、大熱鐵輪は諸の罪人を轢りて、身をして破碎せしめ、熱鐵の臼の中に、之を搗いて碎けしめ、蒲桃を笮するが如く、亦油を壓するが如し。譬へば蹠場の如く、肉を聚めて積を成し、頭を積むこと山の如く、血は流れて池と成り、鵰鷲虎狼は各來り諍うて掣く。此人は宿業の因縁に、多く牛馬、猪羊、麞鹿、狐兎、虎狼、師子、六駮の大鳥、梟鳥を殺し、是の如き等の、種種の鳥獸を多く殘賊するが故に、還りて此衆の鳥獸の頭、來りて罪人を害するを受く。又力勢を以て相陵き、羸弱を枉げ壓せば、兩山相合するの罪を受く。慳貪、瞋恚、愚癡、怖畏の故に、事の輕重を斷ずるに、正理を以てせず、或は正道を破り、正法を轉易して、熱鐵輪に轢かれ、熱鐵臼に搗かるるを受く。第四と第五とを叫喚、大叫喚と名く。此大地獄は、其中の罪人、羅刹、獄卒の頭は黃にして金の如く、眼中より火を出し、赤色の衣を著け、身肉は堅勁に、走疾すること風の如く、手足は長大に、口より惡聲を出し、三股の

叉を提り、箭の墮つること雨の如くして、罪人を掎し射る。罪人は狂ひ怖れ、叩頭して哀を求む。小く見て放捨し、小く見て憐愍す、即時に將ゐて熱鐵地獄に入る。縱の廣さ百由旬なり、驅打馳走して足は皆焦然し、脂は髓より流れ出でて、蘇油を窄するが如く、鐵棒もて頭を棒てば、頭は破れて腦の出づること醋瓶を破るが如く、斫剉割剝し、身體燋爛す。復將ゐて鐵閣に入れ、屋の間より黑煙來り熏じて互に相推壓し、更に相怨毒して、皆言はく、「何を以てか我を壓する」と。纔に出でんことを求めんと欲するに、其門は以て閉ぢ、大聲嗥呼の音は常に絶えず。此人の宿業の因縁は、皆財物もて欺誑し、非法もて事を斷じ、寄を受けて還さず、下劣を侵陵し、諸の窮貧を惱し、其をして號哭せしめ、他の城郭を破り、人の聚落を壞し、傷害劫剝し、室家は怨毒し、城を舉げて叫喚し、有時は、誑詐欺誑し、之を誘うて出でしめ、復之を害するに由る。是の如き等の種種の因縁の故に、此の如きの罪を受く。大叫喚地獄の中の人は、皆坐に穴居の類を熏殺し、閤閭を幽閉し、或は闇煙窟中に之を熏殺し、或は井中に投じ、他の財物を劫奪す、是の如き等の種種の因縁に坐りて、大叫喚地獄の罪を受く。第六第七は熱大熱地獄なり。中に二の大銅鑊有り。一を難陀と名け、二を跋難陀と名く（秦に喜大喜と言ふ）鹹沸水を中に滿て、羅刹鬼獄卒は罪人を以て中に投じ、厨士の肉を煮るが如くす。人は鑊中に在りて脚を上にし頭を下にす。譬へば豆を煮て熟爛するが如く、骨節は解け散じ、皮肉は相離る。其已に爛るるを知りて、叉を以て出だす。行業の因縁もて冷風吹いて活し、復炭坑の中に投じ、或は沸屎の中に著く。譬へば

魚の水より出でて、熱沙の中に著くが如し。又膿血を以て自ら煎じ熬られ、炭坑の中より出して之を炎床に投げ、强ひて驅りて坐せしめ、眼耳鼻口及び諸の毛孔より一切の火出づ。此人は宿世に、父母、師長、沙門、婆羅門を惱亂し、諸の好人の福田の中に於て、惱まして心を熱せしむ。此罪を以ての故に、熱地獄の罪を受く、或は宿世に生蝦を煮る有り。或は生ける猪羊を炙り、或は木を以て人を貫きて、生きながら之を炙り、或は山野及び諸の聚落、佛圖、精舍及び天神等を焚燒し、或は衆生を推して火坑の中に著く、是の如き等の種種の因緣もて、此地獄の中に生ず。阿鼻地獄を見るに、縱の廣さ四千里にして鐵墻を圍し廻す、七地獄に於て、其處最も深し、獄卒羅刹は大鐵椎を以て、諸の罪人を椎つこと、鍛師の鐵を打つが如く、頭より皮を剝ぎ、乃至其足に五百の釘を以て、其身を釘挓すること牛皮を挓くが如く、互に相挽して應に手もて破裂すべく、熱鐵の火車は以て其身を轢り、火坑に驅け入り、炭を抱いて熱沸の屎河を出さしめ、驅けて中に入らしむ。鐵觜の毒虫有り、鼻の中より入りて脚底に出で、足下より入りて口中に出づ、劍を道中に竪てて驅りて馳走せしめ、足下の破碎すること厨の膾肉の如く、利刀劍臺の身中に墮ち入ること譬へば霜樹の落葉、風に隨ひて亂墜するが如し。罪人の手足、耳鼻、支節、皆斫刺割截せられ、地には流血在りて池を成す。二の大惡狗有り、一を賒摩と名け、二を賒婆羅と名く。鐵口猛毅にして人の筋骨を破り、力は虎豹に踰え、猛きこと師子の如し、大刺林有り、罪人を驅逼して强ひて樹に上らしめ、罪人の上る時は刺は便ち下に向ひ、下る時は刺は便

ち上に向ふ。毒蛇、蝮蠍、惡虫は、競ひ來りて之を嚙み、大鳥長喙は頭を啄みて髓を啜ひ、鹹河の中に入りて、流に隨ひて上下す。出づれば即ち熱鐵の地を蹈み、鐵刺の上を行き、或は鐵杙に坐し、杙は下より入る。鉗を以て口を開き、灌ぐに洋銅を以てし、熱鐵の丸を呑みて口に入るれば、口焦げて咽に入り、咽爛れて腹に入り、腹然え、五臟皆焦げて、直に過ぎて地に墮ち、但惡色のみを見、恒に臭氣を聞き、常に麁澁に觸れ、諸の苦痛に遭ひ、迷悶委頓し、或は狂逸唐突し、或は蟯頭搖擲し、或は顚倒墮落す。此人の、本行は、多く大惡五逆の重罪を造り、諸の善根を斷じ、法を非法と言ひ、非法を法と言ひ、實を非實と言ひ、因を破り果を破り、善人を憎嫉す、是罪を以ての故に、此地獄に入り、罪を受くること最も劇し、是の如き等の種種の八大地獄に、復十六の小地獄有りて眷屬と爲る。八寒氷と、八炎火となり。其中の罪毒は見聞すべからず。八炎火地獄とは、一を炭坑と名け、二を沸屎と名け、三を燒林と名け、四を劍林と名け、五を刀道と名け、六を鐵刺林と名け、七を鹹河と名け、八を銅橛と名く。是を八と爲す。八寒氷地獄とは、一を頞浮陀 少多の孔有り と名け、二を尼羅浮陀 無孔なり と名け、三を阿羅羅 寒に戰くなり と名け、四を阿婆婆 亦寒に患ふ聲 と名け、五を睺睺 亦是れ寒に患ふ聲 と名け、六を漚波羅 此は地獄の外壁、青蓮花に似たり と名け、七を波頭摩 紅蓮花なり。罪人中に生ずれば苦を受くるなり と名け、八を摩訶波頭摩と名く、是を八と爲す。若し清淨の、出家の法を破り、白衣をして佛道を輕賤せしめ、或は衆生を排して、火坑の中に著け、或は衆生の命を、未だ盡きざる頃に火上に於て之を炙る、是の如き等の種種の因縁もて、炭坑地獄の中に墮し、

に火炎の炭は膝に至りて罪人の身を焼く。若し沙門婆羅門の福田の食に、不淨の手を以て觸れ、或は先に噉ひ、或は不淨物を以て中に著け、或は熱沸の屎を以て他の身に灌ぎ、淨命を破り、邪命を以て自活す。是の如き等の種種の因縁もて、沸屎地獄の中に墮す。沸屎の深く廣きこと大海の水の如く、中に虫有り、鐵を以て嘴と爲し、罪人の頭を破りて腦を噉ひ、骨を破りて髓を食す。若は草木を焚焼し、諸虫を傷害し、或は林を焼き、大に獵して害を爲すこと彌廣し。是の如き等の種種の因縁もて、焼林地獄の中に墮し、草木の火然えて、以て罪人を焼く。若し刀劒を執持して闘諍傷殺し、若は樹を斫り、人を斬して、以て宿怨を報じ、若は人の忠信を以て誠を告ぐるに、而も密相の中に陥る。是の如き等の種種の因縁もて、劒林地獄の中に墮す。此地獄の罪人は中に入れば、風劒葉を吹き、手足耳鼻を截斷して、皆墮落せしむ。是時林中に烏鷲惡狗ありて、來りて其肉を食す。若は利刀を以て人を刺し、若は欄、若は槍を以て人を傷け、若は道路を斷截し、橋梁を毀撤し、正法の道を破り、示すに非法の道を以てす。是の如き等の種種の因縁もて、利刀道地獄の中に墮す。利刀道地獄とは絶壁の狹道の中に於て利刀を竪て、罪人をして上を行いて過ぎしむ。若は邪婬を犯し、他の婦女を侵し、樂觸を貪り受く。是の如き等の種種の因縁もて、鐵刺林地獄の中に墮す。刺樹の高さ一由旬にして、上に大毒蛇有り、化して美女の身と作り、此罪人を喚ぶ、「上り來れ、汝と共に樂を作さん」と。獄卒は之を驅りて上らしむるに、刺は皆下に向うて罪人を貫刺し、身は刺害を被りて骨に入り髓に徹す。既に林

上に至れば、化女は還蛇身に復り、頭を破り腹に入りて、處處に穴を穿ち、皆悉く破爛し、忽にして復還活き、身體平復す。化女は復樹下に在りて之を喚び、獄卒は箭を以て仰ぎ射て、之を呼びて下らしむれば、刺復仰いで刺し、既に地に到るを得れば、化女の身は復毒蛇と作り、罪人の身を破る。是の如く久久にして、熱鐵刺林より出で、遂に河水の清涼快樂なるを見、走り往いて之に趣き、中に入れば變じて、熱沸の鹹水と成り、罪人は中に在りて、須臾の頃に皮肉離散し、骨のみ水中に立つ。獄卒羅刹は、叉を以て之を拘出し、持して岸上に著く。此人の宿業の因縁は、水性の魚鼈の屬を傷殺し、或時は人及び諸の衆生を排して、水中に沒せしめ、或は之を沸湯に投じ、或は之を氷水に投ず。是の如き等の種種の惡業の因縁の故に、此罪を受く。若し銅橛地獄に在れば、獄卒羅刹は諸の罪人に問はく「汝は何の處より來る」と。答へて言はく「我は苦に悶え、來る處を知らず、但飢渴のみを患ふ」と。若し渴すと言へば、是時、獄卒卽ち罪人を驅逐し、熱せる銅橛の上に坐せしめ、鐵の鉗を以て口を開き、灌ぐに洋銅を以てす。若し飢うと言へば之を銅橛の上に坐せしめ、呑ましむるに鐵丸を以てす。口に入るれば、口焦げて咽に入り、咽爛れて腹に入り、腹燃えて五藏爛壞し、直に過ぎて地に墮つ。此人の宿行の因縁は、他の財を劫盜して以て自ら口に供す。諸の出家の人の、或時は病と詐り、多く蘇油石蜜を求め、或は戒無く禪無く、智慧有ること無く、而も多く人の施を受け、或は惡口して人を傷く、是の如きの種種の宿業の因縁もて、銅橛地獄に墮す。若し人頞浮陀地獄の中に墮

つれば、其處は氷を積み、毒風來り吹いて、諸の罪人をして皮毛裂け落ち、筋肉斷絶し、骨破れ髓出で、即ち復完堅にして罪を受けしむること初の如し。此人の宿業の因縁は、寒月に人を剝ぎ、或は凍人の薪火を劫盜し、或は惡龍と作りて瞋毒忿恚し、大雹雨氷凍を放ちて人を害し、若は佛及び佛弟子、持戒の人を輕賤謗毀し、或は口の四過に衆の重罪を作る。是の如き種種の因縁もて、頞浮陀地獄の中に墮つ。尼羅浮陀も亦是の如し、頞浮陀には少多の孔有り時に出入を得、尼羅浮陀には絶えて孔竅無く出入處無し。呵婆婆、呵羅羅、嚘喉、此三地獄は、寒風に噤戰して口を開く能はず、其呼聲に因りて以て獄に名く。漚波羅獄の中には凍氷浹渫し、有は靑蓮華に似たり。波頭摩の狀は此間の赤蓮華の如し。摩訶波頭摩は、其中には拘邏離の住する處なり。有智の人は是を聞いて驚いて言はく、「咄、此無明恩愛の法を以ての故に、乃ち此苦を受け、出でて復入り、窮無く已むこと無し」と。菩薩は此を見て是の如く思惟すらく「此苦業の因縁は、皆是れ無明、諸の煩惱の作す所なり。我當に精進して六度を懃修し、諸の功德を集めて、衆生の五道の中の苦を斷除すべし」と。大哀を興發し、精進を增益す。父母の囹圄に幽閉せられ、拷掠搒笞し、憂毒萬端なるを見て、方便もて救心を求め、暫くも捨てざるが如く、菩薩は諸の衆生の五道の苦を受くるを見て、之を念ふこと父の如きも亦復是の如し。

復次に、菩薩は精進して世世に勤修し、諸の財寶を求めて衆生に給施し、心に懈廢無し、自ら財物有りて能く盡く施與して、心に亦悔いず。復次に、精進して戒を持つに、

【一八】以下精進波羅蜜の滿足を明し中に身精進と心精進を述ぶ。

若は大、若は小、一切能く受け、一切能く持ちて、毀らず犯さず、大さ毛髮の如く、設ひ違失有るも、卽時に發露して初より覆藏せず。復次に、忍辱を勤修するに、若し人、刀杖を以て打ち害し、罵詈し毀辱し、及び恭敬し供養するにも、一切を能く忍んで、受けず著せず、深法の中に於て其心沒せず、亦疑悔せざるなり。復次に、專精一心に諸の禪定を修して能く住し、能く守れば、五神通、及び四等心、勝處背捨、十一切處を得、諸の功德、四念處、及び諸の菩薩の見佛三昧を具す。復次に、菩薩は精進して、法を求めて懈らず、身心懃力して法師を供養し、種種に恭敬、供給、給使して、初より違失せず、亦廢退せず、身命を惜まず、法の爲の故を以て、誦讀問答し、初中後夜に、思惟し憶念し、籌量し分別して、其因緣を求め、實相、一切諸法の自相、異相、總相、別相、一相、有相、無相、如實相、諸佛菩薩の無量の智慧心、不退、不沒を知らんと欲す、是を菩薩の精進と名く。是の如き等の種種の因緣もて、種種の善法を能く生じ能く辦ず。是故に名けて、精進波羅蜜と爲す。波羅蜜の義は先に說くが如し。復次に、菩薩の精進を名けて、精進波羅蜜と爲し、餘人の精進を波羅蜜と名けず。

問うて曰はく、「云何が精進を滿足すと爲す。」答へて曰はく、「菩薩の生身、法性身は、能く功德を具ふ、是を精進波羅蜜を滿足すと名く。滿足の義は上に說くが如し、身心精進して廢息せざるが故なり。」問うて曰はく、「精進は是れ心數法なり、經に何を以てか身精進と名くる。」答へて曰はく、「精進は是れ心數法なりと雖も、身力より出づるが故に名けて身精

進と爲す。受の如きは是れ心數法なれども、而も五識有りて相應する受は、是を身受と名け、意識有りて相應する受は、是を心受と爲す。精進も亦是の如し、身力もて懃修し、若は手づから布施し、口に法言を誦し、若は法を講說す。是の如き等を名けて、身口の精進と爲す。復次に、布施持戒を行ずるは是を身精進と爲し、忍辱、禪定、智慧、是を心精進と名く。復次に、外に懃修を事とする、是を身精進と爲し、內に自ら專精する、是を心精進と爲す。麁精進を名けて身と爲し、細精進を名けて心と爲す。福德の爲に精進するを名けて身と爲し、智慧の爲に精進する、是を心と爲す。若し菩薩の初發心より乃至無生忍を得るまで、是中間に於て身精進と名け、生身未だ捨てざるが故に。無生忍を得、肉身を捨てて法性身を得、乃ち成佛するに至るまで、是を心精進と爲す。復次に、菩薩の初發心の時は、功德未だ足らざるが故に、福の因緣を種う、布施と持戒と善心となり。漸く福德を得て、以て衆生に施すに、衆生未だ足らず、更に廣く福を修し、大悲心を發すらく、「一切衆生は財に於て足らず、多く衆惡を作す、我少財を以て其意を滿足する能はず。其意滿たずんば敎誨を聽受する能はず、道敎を受けずんば生老病死を脫するを得る能はず、我當に大方便を作して財を給足し、其をして充滿せしむべし」と。便ち大海に入りて諸の異寶を求め、山に登り危を履んで以て妙藥を求め、深き石窟に入りて、諸の異物を石汁、珍寶を求めて以て衆生に給す。或は薩陀婆と作りて嶮道を冒し涉るに、劫賊、師子、虎狼、惡獸有るも、衆生に布施せんが爲の故に、財寶を懃求して以て難しと爲さず。藥草呪術もて、

能く銅をして變じて金と爲らしむ。是の如く種種に變化して諸の財物を致し、及び四方の主無き物を以て衆生に給す、是を身の精進と爲す。五神通を得て、能く自ら變作して諸の美味を作り、或は天上に至りて自然の食を取る、是の如き等を名けて心の精進と爲す。能く財寶を集めて以て布施に用ふ、是を身の精進と爲し、是布施の德を以て佛道に至るを得る、是を心の精進と爲す。生身の菩薩の六波羅蜜を行ずる、是を身の精進と爲し、法性身の菩薩の六波羅蜜を行ずる、是を心の精進と爲す（未だ法身を得ざれば心則ち身に隨ふ。已に法身を得れば則ち心身に隨はず、身、心を累さざるなり。）

復次に、一切法の中に皆能く成辦して身命を惜しまざる、是を身の精進と爲し、一切の禪定の智慧を求むる時、心懈倦せざる、是を心の精進と爲す。復次に、身の精進とは、諸の勤苦を受くるも、終に懈廢せず、說くが如きは、波羅奈國の梵摩達王は、林中に遊獵して二の鹿群を見る。群には各主有りて、一主に五百の群鹿有り、一主の身は七寶の色せるは、是れ釋迦牟尼菩薩にして、一主は是れ提婆達多なり。菩薩の鹿王は、人王の大衆、其部黨を殺すを見て、大悲心を起して逕に王の前に到れば、王人競ひ射て、矢の飛ぶこと雨の如し。王は此鹿の直に進趣し已りて、忌憚する所無きを見て、諸の從人に勅したまはく「汝が弓矢を攝めて、其來意を斷つを得る無れ」と。鹿王、既に至りて、跪いて人王に白さく、「君は嬉遊逸樂の小事を以ての故に、群鹿一時に皆死苦を受く。若し以て膳に供せば、輒ち當に自ら次を差して、日に一鹿を送りて以て王厨に供すべし」と。王は其言を善しとし、聽して其意の如くす。是に於て二の鹿群の主は、大に集めて次を差して各一

日に當つ。是時提婆達多の鹿群の中に、一鹿の子を懷み、次、當りて應に送らるべき者有り。來りて其主に白すらく、「我身は今日、應當に送られて死すべし、而も我は子を懷めり、子は次に非ず。乞ふ、料理を垂れて、死者は次を得、生者は濫らざらしめたまへ」と、鹿王、之を怒りて言はく、「誰か命を惜まざらん。次來らば但去れ、何んが辭するを得ん」と。鹿母思惟すらく、「我王は不仁なり、理を以て恕さず、我辭を察せずして、横まに瞋怒せらる、告ぐるに足らざるなり」と。卽ち菩薩の王の所に至りて、情を以て具に白す。王、其鹿に問はく、「汝が主は何と言ふ。」と。鹿母は言はく、「我主は不仁にして料理せられずして、而も瞋怒せらる。大王は仁にして一切に及ぶが故に來りて歸命す。我今日の如きは、天地曠しと雖も控告する所無し」と。菩薩思惟すらく、「此は甚だ愍むべし、若し我理ならずば、枉げて其子を殺さん。若し次に非ざるを更に差次す。未だ及ばざるを、如何が遣すべき、唯我のみ有りて當に之に代るべし」と。之を思ひ、旣に卽ち自ら身を送らんと定め、鹿母をして還らしむ「我今汝に代らん、汝憂ふる勿れ」と。鹿王、逕に王門に到る。衆人之を見て、其自ら來れるを怪しみ、事を以て王に白す。王も亦之を怪んで、命じて前ましめ、問うて言はく「諸鹿盡くるや、汝何を以てか來る」と。鹿王言はく、「大王の仁は群鹿に及んで、人の犯す者無し、但滋茂のみ有り、何んが盡くる時有らん。我異部の群中に一鹿の子を懷める有り。子の産に垂ぶを以て身を殂割せば、子も亦命を傾すべきを以て我に歸告す。我は以て之を愍む。分に非ざるを、更に差するは、是亦不可なり。若し歸して而も救はず

んば、木石に異る無し。是身は久しからず、必ず死を免れず、苦厄を慈しみ救はば、功德無量ならん。若し人にして慈無くば、虎狼と異なる無けん」と。王、是言を聞いて、即ち坐より起ち、偈を說きて言はく、

我は實に是れ畜獸なり、名けて人頭の鹿と曰ふ
汝は是れ鹿身なりと雖も、名けて鹿頭の人と爲す
理を以て之を言はば、形を以て人と爲すに非ず
若し能く慈愍あらば、獸なりと雖も實に是れ人なり
我今日より始めて、一切の肉を食せず
我は無畏を以て施し、且汝が意を安んずべし

諸の鹿は安んずるを得、王は仁信を得たり。復次に、愛法梵志の如きは、十二歲にして、遍く閻浮提に聖法を知らんを求むるに、而も得る能はず、時に世に佛無く、佛法も亦盡く。一の婆羅門有り、言はく「我に聖法の一偈有り、若し實に法を愛せば、當に以て汝に與ふべし」と。答へて言はく、「實に法を愛す」婆羅門言はく、「若し實に法を愛せば、當に汝が皮を以て紙と爲し、身骨を以て筆と爲し、血を以て之を書かば、當に以て汝に與ふべし」と。即ち其言の如く、骨を破り、皮を剝き、血を以て偈を寫すらく、

如法に應に修行すべし、非法は受くべからず
今世及び後世に、法を行ずる者は安隱なり

【七】菩薩の精進は勤めて厭くこと

復次に昔、野火、林を燒く、林中に一の雉有りて、身自ら力を盡めて飛んで水中に入り、其羽毛を漬け、來りて大火を滅す。火は大に水は少し、往來して疲乏するも、以て苦と爲さず。是時、天帝釋、來りて之に問うて言はく、「汝は何等をか作す」と。答へて言はく、「我此林を救ふことは、衆生を愍むが故なり。此林は蔭育の處にして廣く、清涼快樂なり。我が諸の種類及び諸の宗親并に諸の衆生は、皆此に依り仰ぐ、我は身力有り、云何が懈怠して之を救はざらん」と。天帝問うて言はく、「汝は乃ち精勤して、當に幾時にか至るべき」と。雉言はく、「死を以て期と爲す」と。天帝言はく、「汝が心は爾なりと雖も、誰か證知する者ぞ」と。即ち自ら誓を立つらく、「我が心の至誠、信にして虚しからずんば、火は即ち當に滅すべし」と。是時、淨居天は菩薩の弘誓を知りて即ち爲に火を滅す。古より今に及んで、唯此林のみ有りて常に獨り蔚茂して火の爲に燒かれず。是の如き等の種種の宿世の所行に、爲し難きを能く爲して、身命、國財、妻子、象馬、七珍、頭目、骨髓を惜まず、盡く施して倦まず。說くが如くんば、菩薩は諸の衆生の爲に、一日の中、千たび死し、千たび生ず。檀と尸と忍と禪との如く、般若波羅蜜の中の所行も是の如し。「菩薩本生經」の中の種種の因緣の相は、是を身の精進と名け、一切の善法に於て修行し信樂して、疑悔を生ぜず、而も懈怠せず、一切の賢聖より、下凡人に至るまで法を求めて厭ふこと無く、海の流を吞むが如き、是を菩薩の心の精進と爲す

(七)問うて曰はく、「心に厭足無しとは、是事然らず、所以は何ん、若し求むる所の事辦じ、願

なく乃ち佛に至ることを明す。

ふ所已に成ぜば、是れ則ち應に足るべし。若し理求むべからず、事辨ずべからずんば、亦應に捨廢すべし。云何が恆に厭足無き。人の井を穿ちて泉を求むるが如し。功を用ふること轉多くして、轉水相無ければ、則ち應に止息すべし。亦道を行くが如し。已に所在に到れば、應に復行くべからず、云何が恆に厭足無けん。」答へて曰はく、「菩薩の精進は、世間の譬喩を以て比と爲すべからず。井を穿つに力少ければ、則ち水を得る能はず、水無きには非ず。若し此處に水無くば、餘處に必ず有り、至る所有るが如きは、必ず求めて佛に至らん。佛に至るも厭ふ無く、人を誨へて倦まざるが故に、厭ふこと無しと言ふ。復次に、菩薩は精進の志願、弘曠にして、誓うて一切を度す。而も衆生は無盡なり。是故に精進も亦盡くべからず。汝は事辨ぜば止むべしと言ふも、是事然らず。佛に至るを得と雖も、衆生未だ盡きずんば休息すべからず。譬へば火相の若し滅せざれば、終に冷かならざるが如く、菩薩の精進も亦復是の如し。未だ滅度に入らざれば、終に休息せず、是を以ての故に十八不共法の中に、欲及び精進の二事は常に修するなり。復次に、菩薩は、法に住せずして、般若波羅蜜の中に住し、精進を廢せず。是れ菩薩の精進にして、佛の精進に非ず。復次に、菩薩は未だ菩薩の道を得ず。生死の身にして、好き事を以て衆生に施すに、衆生は反りて更に、不善の事を以て之に加ふ。或は衆生有り、菩薩は讃美するに、反りて更に毀り辱しめ、菩薩は恭敬するに、而も反りて輕慢し、菩薩は慈念するに、反りて其過を求めて、謀りて中傷せんと欲す。此衆生等は、力勢有ること無く、來りて菩薩を惱す。菩薩は

此衆生に於て弘誓の願を發すらく、「我佛道を得ば、要ず當に此惡中の惡たる諸の衆生の輩を度すべし」と。此惡中に於て其心斷らず、大悲心を生ず。譬へば慈母の、其子の病を憐み、憂念して捨てざるが如し。是の如きの相は、是を菩薩の精進と爲す。復次に、布施波羅蜜を行ずる時、十方の種種の乞兒來りて求索せんと欲し、索むべからざる者を、皆來りて之を索め、及び愛重する所、捨て難きの物を索め、菩薩に語りて言はく「我に兩眼を與へよ」。我に頭腦、骨髓、愛重の妻子及び諸の貴價の珍寶を與へよ」と。是の如き等の捨て難き物を、乞者の强ひて索めんに、其心動ぜず、慳瞋起り見れず、疑心を生ぜず、一心に佛道の爲の故に布施す。譬へば須彌山の四方より風吹くも、動かすこと能はざる所の如し。是の如き種種の相は、是を精進波羅蜜と名く。

（八）復次に、菩薩の精進は、遍く五波羅蜜を行ず、是を精進波羅蜜と爲す。問うて曰はく、一戒波羅蜜を行ずる時、若し人有りて、來りて三衣鉢盂を乞はんに、若し之に與へば則ち戒を毀る。何を以ての故に、佛の聽したまはざるが故に。若し與へざれば則ち檀波羅蜜を破る。精進は、云何が遍く五事を行ぜん。答へて曰はく、若し新行の菩薩は、則ち一世一時に遍く五波羅蜜を行ずる能はず、菩薩の檀波羅蜜を行ずる時の如きは、餓ゑたる虎の、飢急にして其子を食せんと欲するを見て、菩薩は是時、大悲心を興して、即ち身を以て施す。菩薩の父母は、子を失ふを以ての故に、憂愁懊惱して兩目の明を失せり。虎は菩薩を殺して、亦應に罪を得べきに、而も慚愧せず、父母は憂苦し、虎は殺罪を得れども、但檀

【八】菩薩の精進は遍く五波羅蜜を行ず、是れ精進波羅蜜。

【五事】精進度を除ける餘の五度なり。

を滿じて自ら福德を得んと欲す。又持戒の比丘の如きは、事の輕重に隨うて諸犯を擯するは法なり。擯せらるるの人は愁苦懊惱すれども、但戒を持たんと欲して、其苦を愍まず、或時は世俗の般若を行じて慈悲を息む。釋迦牟尼菩薩の如きは、宿世に大國王の太子と爲る。父王に梵志の師有り、五穀を食せず、衆人は敬信して以て奇特と爲す。太子思惟すらく、「人四體有れば、必ず五穀を資とす、而も此人は食せず、必ず是れ曲にして人の心を取る、眞法に非ざるなり」と。父母、子に告ぐらく、「此人は精進にして五穀を食せず、是れ世に稀有なり、汝何んが愚甚しくして、之を嫉せざる」と。太子答へて言はく、「願くば小く留意したまへ。此人は久しからずして、詭證自ら出でん」と。是時、太子、其住處を求めて林樹の間に至り、林中の牧牛の人に問はく、「此人は何の食噉する所か有る」と。牧牛者答へて言はく、「此人は夜中に少多の酥を服して、以て自ら命を全うす」と。太子知り已りて宮に還り、其證驗を出さんと欲し、即ち種種の諸の下藥、草熏、青蓮華を以てす。清旦に梵志は宮に入りて王の邊に坐す、太子は手づから此華を持ち來りて之を供養し、拜し已りて授與す。梵志歡喜して自ら念ずらく、「王及び大人、內外の大小、皆服して我に事ふ。唯太子のみに敬信せられず、今日好華を以て供養し、甚だ善くすること量無し」と。此好華を得て、敬ふ所に來り處し、擧げて以て鼻に向けて之を嗅ぐに、花中の藥氣腹に入り、須臾にして腹內に藥作り、下す由を求めんと欲す。太子言はく、「梵志食せずんば、何に緣りてか廁に向はん」と。急に之を捉ふれば、須臾にして便ち王の邊に吐くに、吐中は

純詐なり。證驗現れ已れば、王と夫人とは乃ち其の詐なるを知れり。太子言はく、「此人は頂の賊なり、名を求むるが故に、以て一國を誑かす」と。是の如く世俗の般若を行じて、但智を滿さんことを求め、憐愍の心を寢め、人の瞋を畏れず。或時、菩薩は出世間の般若を行じ、持戒、布施に於て、心染著せず。何を以ての故に。施者も受者も、施す所の財物も、罪と不罪に於ても、瞋と不瞋に於ても、進に於ても、怠に於ても、攝心も散心も不可得なるが故に。復次に、菩薩は精進波羅蜜を行ずるに、一切法の不生、不滅、非常、非無常、非苦、非樂、非空、非實、非我、非無我、非一、非異、非有、非無に於て、盡く一切諸法は因緣和合し、但名字のみ有りて、實相は得べからざるを知る。菩薩は是の如きの觀を作して、一切の有爲は皆是れ虛誑なりと知り、心息して無爲なり。其心を滅せんと欲し、唯寂滅を以て安隱なりと爲す。爾時、本願を念じ、衆生を憐愍するが故に。還りて菩薩の法を行じ、諸の功德を集む、菩薩自ら念ずらく、「我は諸法の虛誑なるを知ると雖も、衆生は是事を知らず、五道の中に於て諸の苦痛を受く。我今當に具足して六波羅蜜を行ずべし」と。菩薩は報として神通を得、亦佛道の三十二相、八十種好、一切智慧、大慈大悲、無礙解脫、十力、四無所畏、十八不共法、三乘等の無量の諸佛の法を得たまふ。是法を得る時、一切衆生は、皆信淨を得て、皆能く受行し、佛法を愛樂して、能く是事を辨ず。皆是れ精進波羅蜜の力なり。是を精進波羅蜜と爲す。佛の所說の如くんば、爾時、菩薩は精進して、身を見ず、心を見ず、身に作す所無く、心に念ずる所無く、身心は一等

にして而も無分別なり。求むる所の佛道を以て衆生を度するに、衆生を此岸と爲し、佛道を彼岸と爲すを見ず。一切の身心の所作を放捨すること、夢に爲す所は覺めて所作無きが如し。是を寂滅と名け、諸の精進の故に、名けて波羅蜜と爲す。所以は何ん。一切の精進は、皆是れ邪僞なりと知るが故に。一切の作法は、皆是れ虛妄にして實ならざるを以て、夢の如く、幻の如く、諸法は平等なり、是を眞實と爲す。平等法の中には應に求索する所有るべからず。是故に一切の精進は、皆是れ虛妄なりと知る。精進は虛妄なりと知ると雖も、而も常に成就して退かず、是を菩薩の眞實の精進と名く。佛の言ふが如くんば、我は無量劫の中に於て頭目髓腦を以て衆生に施し、其願をして滿てしむ。持戒、忍辱、禪定の時、山林の中に在りて身體乾枯し、或は持齋節食し、或は諸の色味を絕し、或は罵、辱、刀、杖の患を忍ぶ。是故に身體焦枯す。又常に坐禪し、曝露懃苦して、以て智慧を求め、讀、誦、思惟、問難、講說す。一切の諸法は、智を以て好惡、麁細、虛實、多少を分別し、無量の諸佛に供養し、慇懃に精進して、此功德を求め、五波羅蜜を具足せんと欲す。我是時未だ所得無し、檀、尸、羼、精進、禪、智慧波羅蜜を得ず。然燈佛に見えて、五華を以て佛に散じ、髮を泥中に布いて無生法忍を得、即時に六波羅蜜を滿せり。空中に於て立ちて、偈もて然燈佛を讃じ、十方の無量の諸佛を見る。是時、實の精進身を得、精進平等の故に、心平等を得、心平等の故に、一切諸法の平等を得。是の如きの種種の因緣の相を名けて、精進波羅蜜と爲す。

大智度論卷第十六

【一】以下不亂不味の故に等の文中初に禪を行ずるに寂靜處を以てする所以を明す。

大智度論釋初品中禪波羅蜜第二十八　卷第十七

龍樹菩薩造
後秦龜茲國三藏鳩摩羅什詔を奉じて譯す

【經】不亂、不味の故に、應に禪波羅蜜を具足すべし。

【論】問うて曰はく、「菩薩の法は一切衆生を度するを以て事と爲す。何を以ての故に林澤に閑坐し、山間に靜默し、獨り其身を善くして、衆生を棄捨する。」答へて曰はく、「菩薩の身は衆生を遠離すと雖も、心は常に捨てず、靜處に定を求め、實智慧を得て、以て一切を度す。譬へば藥を服すれば、身を將て權に家務を息め、氣力平健なれば、則ち業を修すること故の如きが如く、菩薩の宴寂も亦復是の如し。禪定力を以ての故に智慧の藥を服し、神通力を得。還衆生に在りて、或は父母妻子と作り、或は師徒宗長と作り、或は天、或は人、下りて畜生に至り、種種の語言もて方便し開導す。復次に、菩薩は布施、持戒、忍辱の是三事を行ず。名けて福德門と爲す。無量世の中に於て、天王、釋提桓因、轉輪聖王、閻浮提の王と爲り、常に衆生に七寶の衣服を施し、五情の欲する所を、今世、後世、皆具足せしむ。經の中に說くが如くんば轉輪聖王は、十善を以て民をして後世皆天上に生ぜしめ、世世に衆生を利益して快樂を得しむ。此樂は無常にして、還りて復苦を受く、菩薩

は此に因りて大悲心を發し、常樂の涅槃を以て衆生を利益せんと欲す。此常樂の涅槃は實智慧より生じ、實智慧は一心禪定より生ず。譬へば燈を然すに、燈は能く照すと雖も、大風の中に在りては用を作す能はず、若し之を密室に置けば、其用乃ち全きが如し。散心の中の智慧も亦是の如し、若し禪定の靜室無くんば、智慧有りと雖も其用全からず、禪定を得れば則ち實智慧生ず。是を以ての故に菩薩は衆生を離れて、遠く靜處に在りて禪定を求得すと雖も、禪定清淨なるを以ての故に、智慧も亦淨し、譬へば油炷淨きが故に、其明も亦淨きが如し。是を以ての故に淨智慧を得んと欲せば、此禪定を行ず。復次に、若し世間の近事を求むるすら、專心なる能はずんば、則ち事業成らず、何に況んや甚深の佛道にして而も禪定を用ひざらんや。禪定は諸の亂心を攝すと名く。亂心は輕飄なること鴻毛よりも甚だしく、馳散して停らず、駛なること疾風に過ぎ、制止すべからざること獼猴よりも劇しく、暫く現じ、轉滅すること掣電よりも甚だし、心相も是の如く、禁止すべからず。若し之を制せんと欲するに、禪に非ずんば定まらず。偈に說くが如し。

禪は智を守るの藏、功德の福田爲り
禪は清淨の水爲り、能く諸の欲塵を洗ふ
禪は金剛の鎧爲り、能く煩惱の箭を遮る
未だ無餘を得ずと雖も、涅槃の分已に得
金剛三昧を得て、結使の山を摧碎し

六神通を得、能く無量の人を度す
囂塵は天日を蔽ふも、大雨は能く之を淹ひ
覺觀の風は心を散ずれども、禪定は能く之を滅す

復次に、禪定は得難し、行者は、一心に專ら求めて廢せずんば、乃ち當に之を得べし。諸天及び神仙すら、猶尚得ること能はず。何に況んや凡夫にして懈怠心の者をや。佛の尼拘盧樹の下に在りて坐禪したまふとき、魔王の三女、偈を說いて問うて言へるが如し。

獨り林樹の間に坐して、六根常に寂默たり
有は重寶を失ひ、無援にして苦毒を愁ふるが若し
容顏世に比無く、而も常に目を閉ぢて坐す
我等は心に疑有り、何を求めてか此に在る

爾時、世尊、偈を以て答へて曰はく、

我は涅槃の味を得て、染愛に處るを樂はず
内外の賊已に除き、汝が父も亦滅退せり
我は甘露味を得て、安樂にして林間に坐す
恩愛の衆生は、之が爲に戀心を起す

是時、三女は心に慚愧を生じ、自ら說いて言はく、「此人は欲を離れて動かすべからず」と。即ち滅し去りて現ぜず。

【二】禪定を得る方便を明す中、初に五欲を呵するを說く。

問うて曰はく、何の方便を行じてか禪波羅蜜を得る。答へて曰はく、五事（五塵）を却け、五法（五蓋）を除き、五行を行ず。云何が五事を却けん。當に五欲を呵責すべし。哀い哉、衆生は常に五欲の爲に惱まされ、而も猶之を求めて已まず。此五欲は之を得るに、轉劇しきこと火に疥を炙るが如く、五欲の益無きこと狗の骨を齩むが如く、五欲の諍を增すこと、鳥の肉を競ふが如く五欲の人を燒くこと逆風に炬を執るが如く、五欲の人を害すること惡蛇を踐むが如く、五欲の實無きこと夢の所得の如く、五欲の久しからざること假借の須臾なるが如し。世人の愚惑なる、五欲に貪著して死に至るまで捨てず、之が爲に後世無量の苦を受く。譬へば愚人の好果に貪著し、樹に上りて之を食し、肯て時に下らず、人の其樹を伐り、樹傾いて乃ち墮ち、身首毀壞し、痛み惱んで死するが如し。又此五欲は得る時は、須臾の樂にして、失する時は大苦爲り。蜜を刀に塗りて舐る者の、甜を貪りて舌を傷くるを知らざるが如し。五欲の法は畜生と共なり、有智の者は之を識りて能く自ら遠離す。說くが如くんば、一の優婆塞有り、衆の估客と遠く出でて治生す。是時、寒雪に夜行し、伴を失うて一の石窟の中に在りて住す。時に山神、變して一女と爲り、來りて之を試みんと欲し、此偈を說いて言はく、

白雪山地を覆うて、鳥獸は皆隱藏す
我獨り恃む所無し、惟願くば愍傷せられよ

優婆塞、兩手を以て耳を掩ひ、而も偈もて答へて言はく、

無著弊惡の人は、此不淨の言を説く
水に漂ひ火に燒け去るとも、汝が聲を聞くを欲せず
婦有るも心に欲せず、何に況んや邪婬を造らんや
諸の欲樂は甚だ淺く、大苦患は甚だ深し
諸欲は得て厭く無く、之を失へば大苦と爲る
未だ得ざれば願うて得んと欲し、之を得れば爲に惱さる
諸の欲樂は甚だ少く、憂苦の毒は甚だ多し
之が爲に身命を失ふこと、蛾の燈火に赴くが如し

仙人は此偈を聞き已りて、卽ち此人を擧げて、送りて伴の中に至る。是れ智者の爲に、欲の不可を呵するなり。五欲に著する者は、名けて妙なる色、聲、香、味、觸と爲す。行者定を求めんと欲せば、皆應に之を棄つべし。云何が色を棄て、色の患を觀ぜん。若し人色に著すれば、諸の結使の火、盡く皆熾然として人身を燒害すること、火の金銀を燒くが如し。煮沸せる熱蜜は色味有りと雖も、身を燒き口を爛らす、急に應に之を捨つべし。若し人妙色美味に染著することも、亦復是の如し。復次に好惡は人に在り、色は定無し。何を以てか之を知る、遙に愛する所の人を見ては、卽ち喜愛の心を生じ、若し遙に怨家惡人を見ては卽ち怒害の心を生じ、若し中人を見れば則ち怒ること無く、喜ぶこと無きが如し。若し此喜怒を棄てんと欲せば、當に邪念及び色を除き、一時に俱に捨つべし。譬へば

洋金の身を燒くが如し。若し之を除かんと欲せば、但火のみを棄てんと欲するも、金を留むるを得ず、要ず當に金火俱に棄つべし。頻婆娑羅王の如きは、色を以ての故に、身敵國に入り、獨り婬女阿梵婆羅が房中に在り。優塡王は色染を以ての故に、五百の仙人の手足を截る。是の如き等の種種の因緣は、是を色欲を呵すと名く。云何が聲を呵する、聲相は停らず、暫く聞けば卽ち滅す。愚癡の人は、聲相の無常變失を解せざるが故に、音聲の中に於て、妄に好樂を生じ、已に過ぐるの聲に於て、念じて著を生ず。五百の仙人の山中に在りて住するが如きは、甄陀羅女の雪山の池の中に於て浴し、其歌聲を聞いて卽ち禪定を失ひ、心醉ひ、狂逸にして自ら持つ能はず。譬へば大風の諸の林樹を吹くが如く、此細妙の歌聲の柔軟淸淨なるを聞いて、邪念の想を生ず。是故に心の狂へるを覺らず、今世の諸の功德を失し、後世に當に惡道に墮すべし。有智の人は、聲の念念に生滅し、前後に俱ならず、相及ぶ者無きを觀ず。是の如く知るを作せば則ち染著を生せず。斯の若きの人者は、諸天の音樂すら尙亂す能はず、何に況んや人聲をや。是の如き等の種種の因緣は、是を聲欲を呵すと名く。云何が香を呵する。人謂へらく、「香に著するは少罪なり」と。香に著愛して結使の門を開き、復百歲戒を持つと雖も、能く一時に之を壞す。一の阿羅漢の如し、常に龍宮に入り、食し已りて鉢を以て、沙彌に授與して洗はしむるが如し。鉢の中に殘飯數粒有り、沙彌之を嗅ぐにいに香しく、之を食するに甚だ美なり。便ち方便を作して、師の繩牀の下に入り、兩手を以て繩牀の脚を捉へ、其師至る時、繩牀と俱に

龍宮に入る。龍の言はく、「此は未だ道を得ず、何を以てか將ゐ來る」と。師言はく、「覺せず」と。沙彌は得て飯食し、又龍女の身體端正、香妙無比なるを見、心大いに染著して即ち要願を作さく、「我當に福を作して、此龍の處居、其宮殿を奪ふべし」と。龍の言はく、「後此沙彌を將ゐ來る莫れ」と。沙彌は還り已りて一心に布施し持戒し、專ら所願を求むらく、「願くば早く龍と作らん」と。是時、寺を遶るに足下より水出で、自ら必ず龍と作るを得と知る。徑に師の本入る處の大池の邊に至り、袈裟を以て頭を覆ひ、入りて即ち死し、變じて大龍と爲る。福徳大なるが故に、即ち彼龍を殺す、池を擧げて盡く赤し。未だ爾らざるの前、諸師及び僧は之を訶す。沙彌の言はく、「我心は已に定り、心相已に出づ」と。時に師は諸の衆僧を將ゐ、池に就いて之を觀る。是の如きの因縁は、香に著するに由るが故なり。復次に、一の比丘有り、林中の蓮華池の邊に在りて經行し、蓮華の香を聞き、其心に悅樂し、過りて心に愛す。池神之に語りて言はく「汝何を以てか彼林下の禪淨の坐處を捨て、我香を偸む」と。香に著するを以ての故に、諸の結使の臥せる者、皆起れり。時に更に一人有り、來りて池中に入り、多く其花を取り、根莖を掘り挽き、狼藉して去るに、池神は默して言ふ所無し。比丘の言はく、「此人は汝が池を破り、汝が花を取るに、都て言ふこと無し。我は但池の岸の邊に行くに、便ち見て訶し罵りて云はく、我香を偸む」と。池神の言はく、「世間の惡人は、常に罪垢の糞中に在りて、不淨に頭を沒す、我は共に語らざるなり。汝は是れ禪を行ずるの好人にして、而も此香に著して、汝が好事を破る。

是故に汝を呵す。譬へば白疊の鮮淨なるに、而も黑物の點汚有れば、衆人皆見るが如し。彼惡人の者は、譬へば黑衣に墨を點ずるに、人の見ざる所なるが如し。誰か之を問ふ者ぞ」と。是の如き等の種種の因緣は、是を香欲を呵すと名く。云何が味を呵する。當に自ら覺悟すべし「我は但美味に貪著するを以ての故に、當に衆苦を受くべし。洋銅もて口に灌ぎ、燒けたる鐵丸を噉ふ。若し食法を觀ぜず、嗜心堅著すれば、不淨の虫の中に墮せん」と。一沙彌の、心常に酪を愛し、諸の檀越、僧に酪を餉る時、沙彌は殘分を得る每に、心中に愛著し、樂み喜んで離れず、命終の後、此殘酪の瓶中に生ぜしが如し。沙彌の師は、阿羅漢道を得て、僧の酪を分つ時、語りて言はく「徐徐とせよ、此酪を愛するの沙彌を傷くる莫れ」と。諸人言はく「此は是れ虫なり、何を以てか酪を愛するの沙彌と言ふ」と。答へて言はく、「此虫は、本是れ我沙彌なり。但坐して殘酪を貪愛するが故に、此瓶中に生す」と。師、酪の分を得るに、虫は中に在りて來れり。師言はく「酪を愛するの人、汝は何を以てか來る」と。卽ち酪を以て之に與ふ。復次に、一國に王あり、月分王と名く。太子有りて美味に愛著し、王の園を守る者、日に好果を送るが如し。園中に一の大樹有り、樹上に鳥有りて子を養ひ、常に飛んで香山の中に至り、好香の果を取りて以て其子を養ふ。衆子之を爭ひ一果地に墮つ。園を守るの人、晨朝に之を見るに、奇にして其れ非常なれば、卽ち送りて王に與ふ。王は此果の香色の殊異なるを珍とす。太子は之を見て便ち索む。王は其子を愛して、卽ち以て之を與ふ。太子は果を食して其氣味を得、染心深く著して、日

日に得んと欲す。王、即ち園人を召して、其所由を問ふに、守園の人言はく、「此果は種無し、地より之を得、由來する所を知らざるなり」と。太子は啼哭して食せず、王は園人を催責して、「汝之を得よ」と仰す。園人は果を得し處に至り、鳥の巢有るを見、鳥の銜み來るを知り、身を樹上に翳し、伺うて之を取らんと欲し、鳥の母來る時、即ち奪うて果を得て送り、日日に是の如くす。鳥の母は之を怒り、香山の中に於て毒の果を取る、其香味色は、全く前者に似たり。園人は奪ひ得て王に輸り、王は太子に與ふるに、之を食して未だ久しからずして身肉爛壞して死す。味に着すること是の如ければ失身の苦有り、是の如き等の種種の因緣は、是を味欲に著するを呵すと名く。云何が觸を呵する。此觸は是れ諸の結使を生ずるの火因、心を繫縛するの根本なり。何を以ての故に。餘の四情は即ち各各其分に當るも、此は則ち身識に遍滿して生處廣きが故に、多く染著を生ずればなり。此著は離れ難し。何を以てか之を知る。人の色に著するが如きは、身の不淨の三十六種を觀じて、則ち厭心を生ず。若し觸中に於て著を生ぜば、不淨なりと知ると雖も、其細軟なるを貪り、不淨を觀するも益する所無し、是故に離れ難し。復次に、其捨て難きを以ての故に、之が爲に常に重罪を作す。若し地獄に墮せば、地獄に二部有り、一を寒氷と名け、二を燒火と名く。此二獄の中は、皆身觸を以て罪を受け、苦毒萬端なり。此觸を名けて大暗黑の處、危難の嶮道と爲すなり。復次に、羅睺羅の母の本生經の中に說くが如くんば、釋迦文菩薩に二の夫人有り。一を劬毘耶と名け、二を耶輸陀羅と名く。耶輸陀羅は羅睺羅の母

なり。劬毘耶は是れ寶女の故に子を孕まず。耶輸陀羅は菩薩出家の夜を以て、自ら身に妊めりと覺ゆ。菩薩は出家して六年苦行す、耶輸陀羅も亦六年懷妊して産せず、諸釋之を詰るらく、「菩薩は出家せり、何に由りてか此れ有らん」と。耶輸陀羅言はく、「我に他罪無し、我懷む所の子は、實に是れ太子の體胤なり」と。諸釋の言はく、「何を以てか久しく産せざる」と。答へて言はく、「我知る所に非ず」と。諸釋は集りて議し、王の法の如くに治罪せんと欲するを聞き、劬毘耶、王に白さく、「願くば之を寬恕したまへ。我は常に耶輸陀羅と共に住す。我其證たり、其罪無きを知る。其子の生るるを待ちて、父に似たるや否やを知りて、之を治むるも晩きこと無けん」と。王は即ち寬置す。佛、六年の苦行既に滿ち、初めて成佛したまふ時、其夜羅睺羅を生む。王は其父に似たるを見て愛樂し、憂を忘れて群臣に語りて言はく、「我兒去ると雖も、今や其子を得たり。兒在ると異る無し」と。耶輸陀羅は罪難を免ると雖も、惡聲國に滿つ、耶輸陀羅は惡名を除かんと欲す。佛成道し已りて迦毘羅婆に還り、諸の釋子を度したまふ時、淨飯王及び耶輸陀羅は、常に佛を請じ宮に入りて食せしむ。是時、耶輸陀羅は、一鉢の百味の歡喜丸を持して羅睺羅に與へ、持して佛に上らしむ。是時、佛、神力を以て五百の阿羅漢を變じて、皆佛身の如くにして、別異有ること無らしむ。羅睺羅は七歲の身を以て、歡喜丸を持して、徑に佛前に至りて世尊に奉進す。是時、佛、神力を攝めたまふに、諸の比丘の身、復故の如く、皆空鉢にして坐す。唯、佛鉢の中にのみ歡喜丸を盛滿す。耶輸陀羅、即ち王に白して言さく、「此を以て我罪無きこ

ことを宣諭したまへ」と。耶輸陀羅、卽ち佛に問うて言さく「我は何の因緣有りてか懷姙すること六年なる」と。佛言はく、「汝が羅睺羅は、過去久遠世の時、曾て國王と作る。時に一の五通の仙人有り、來りて王國に入り、王に語りて言はく「王法は賊を治す、請ふ我罪を治したまへ」と。王言はく、「汝何の罪か有る」と。答へて言はく、「我は王國に入りて不與取を犯す、輒ち王の水を飮み、王の楊枝を用ふ」と。王の言はく、「我は相與ふるを以て、何の罪か之れ有らん、我、初めて王位に登りて、皆、水及び楊枝を以て一切に施せり」と。仙人の言はく、「王は已に施すと雖も、我が心の疑悔の罪を除かず、願くば今治せられよ、後罪せしむる無れ」と。王言はく、「若し必ず爾せんと欲せば、少く停りて我入り還らんを待て」と。王は宮中に入りて六日出でず。此仙人は王の園中に在ること六日にして飢渴す。仙人思惟すらく、「此王は、正しく此を以て我を治す」と。王は六日を過ぎて、出でて仙人に辭謝すらく、「我は便ち相忘れたり。咎めらるる莫れ」と。是因緣を以ての故に、五百世に三惡道の罪を受け、五百世に常に六年母の胎內に在り。是を以て證するが故に、耶輸陀羅は罪有ること無きなり」と。是時、世尊は食し已りて、出で去りたまふ。耶輸陀羅は心に悔恨を生ずらく、「此の如きの好人は、世の希有とする所、我、遭遇することを得て而も今永く失す」と。世尊坐したまふ時、諦に觀て眴かず、世尊、出でたまふ時、後に尋いで之を觀、遙く沒して乃ち止み、心大いに懊恨す。一たび思ひ至る每に、地に躄して氣絕ゆ。傍人水を以て之に灑いで、乃ち蘇息するを得、常に獨り思惟すらく、「天下に誰

か能善く呪術を爲して、能く其心を轉じ、本意に從らしめて、歡樂初の如くならん」と。即ち七寶の名珠を以て金盤の上に著け、以て持して人を募る。一の梵志有り、之に應じて言はく、「我能く之を呪して、其意を轉ぜしめん。當に百味の歡喜丸を作り、藥草を以て之に和し、呪語を以て之を禁せば、其心便ち轉じて、必ず來らんこと疑無かるべし」と。耶輸陀羅は其教法を受け、人を遣して佛を請ず、「願くば聖衆と倶に、威神を屈したまへ」と。佛、王宮に入りたまひ、耶輸陀羅即ち百味の歡喜丸を進めて佛鉢の中に著くれば、佛既に之を食したまふ。耶輸陀羅、冀想すらく、「願の如く歡娛すること初の如くならん」と。佛、食したまふに、異る無く、心目澄靜なり。耶輸陀羅言はく、「今動ぜさるは、藥力の未だ行かざるが故なるのみ。藥勢發する時、必ず我願の如くならん」と。佛飯食し訖り、呪願し已りて、座より起ちて去りたまふ。耶輸陀羅は「藥力は、晡時、日の入るに當に發して、必ず宮中に還りたまふべしと冀ふ」と。佛、食したまふこと常の如く、身心異る無し。諸の比丘は明日食する時、著衣持鉢して城に入りて乞食し、具に此事を聞き、增益恭敬す。佛力無量にして神心測り難く、不可思議なり。耶輸陀羅の藥、歡喜丸は、其力甚だ大なり。而も世尊之を食したまふに身心異る無し」と。諸の比丘は食し已りて城を出で、是事を以て具に世尊に白す。佛、諸の比丘に告げたまはく、「此耶輸陀羅は、但今世にのみ歡喜丸を以て我を惑すに非ず、乃往過去世の時も、亦歡喜丸を以て我を惑はせり」と。爾時、世尊、諸の比丘の爲に本生の因緣を説きたまふ。過去久遠世の時、波羅

【十八種の大經】梨俱吠陀、耶柔吠陀、娑摩吠陀、阿闥婆吠陀（以上四吠陀）、式叉論、毘伽羅論、柯剌波論、竪底沙論、闡陀論、尼鹿多論（以上六論）、肩亡婆論、那耶毘薩多論、伊底迦婆論、僧佉論、課伽論、陀㝹論、犍闥婆論、阿輸論（以上八論）なりと百論疏上の下に右の名目を擧ぐ。

國の山中に仙人有り。仲春の月を以て、澡盤の中に於て小便するに、鹿の會合するを見て、婬心即ち動き、精を盤中に流す。牝鹿之を飲んで即時に娠む有り。月滿ちて子を生むに、形類人の如く、唯頭に一角有り、其足は鹿に似たり。鹿は產する時に當りて、仙人の菴の邊に至りて產す。子を見るに是れ人なり、以て仙人に付して去る。仙人は出づる時、此鹿の子を見、自ら本緣を念じ、是れ己が兒なりと知りて、取りて已に養育す。其年大なるに及んで學問を懃教し、十八種の大經に通じ、又坐禪を學び、四無量心を行じ、即ち五神通を得。一時、山に上りて大雨に値ひ、泥滑にして、其足便ならず、地に躄きて其鍕持を破り、又其足を傷け、便ち大いに瞋恚し、鍕持を以て水を盛り、呪して雨らさらしむ。仙人の福德にして、諸龍鬼神は皆爲に雨らさず、雨らざるが故に、五穀五果盡く皆生ぜず、人民は窮乏して復生路無し。波羅柰の國王は憂愁懊惱し、諸の大官に命じ、集りて雨の事を議せしむ。明者議して言はく、「我曾て傳へ聞く、仙人の山中に一角仙人有り、足便ならざるを以ての故に、山に上るに、地に躄き足を傷いて瞋りて此雨を呪し、十二年墮ちざらしむ」と。王思惟して言はく、「若し十二年雨らずんば、我國は了り、復人民無けん」と。王即ち募を開き「其能く仙人をして五通を失はしむる有らば、我民の爲にする者に屬して、當に國の半を分ち與へて治せしむべし」と。是婆羅柰國に婬女有り、名けて扇陀と曰ふ。端正無雙なり。來りて王の募に應ず。諸人に問うて言はく、「此は是人か、非人か」と。衆人言はく、「是れ人なるのみ、仙人の生する所なり」と。婬女言はく、「若し

是れ人ならば、我能く之を壞せん」と。是語を作し已りて金盤を取り、好き寶物を盛りて國王に語りて言はく「我當に仙人の項に騎りて來るべし」と。婬女、即時に五百乘の車を求め、五百の美女を載せ、五百の鹿車に種種の歡喜丸を載せ、皆衆の藥を以て之に和し、衆彩を以て雜果に似せ、及び種種の大力に持たしむ。美酒の色味を水の如くし、樹皮の衣、草の衣を服て林樹の間を行き、像の仙人のごときを以て、仙人の菴の邊に於て草菴を作りて住す。一角仙人、遊行して之を見るに、諸女皆出でて迎逆し、好華、好香を以て仙人に供養するに仙人大いに喜ぶ。諸人皆美言を以て敬辭問訊し、仙人を將ゐて房中に入り、好牀の褥を坐とし、好淨の酒を與へて以て淨水と爲し、歡喜丸を與へて以て果蓏と爲す。食飲飽き已りて諸女に語りて言はく「我は生れてより已來、初より未だ此の如きの好果好水を得ず」と。諸女言はく「我は一心に善を行ずるを以ての故に、天我に與へ、願うて此好果好水を得」と。仙人、諸女に問はく「汝は何を以ての故に膚色肥盛なる」と。答へて言はく「我曹は此好果を食し、此美水を飲むが故に、肥盛なること此の如し」と。女、仙人に白して言はく「汝は何を以てか此間に在りて住せざる」と。答へて曰はく「亦住すべきのみ」と。女言はく「共に澡洗すべし」と。即ち亦是を可す。女の手は柔軟にして、之に觸れて心動ず。便ち復諸美女と更互に相洗ひ、欲心轉た生じ、遂に婬事を成して即ち神通を失ふ。天は大雨を爲すこと七日七夜、歡喜して飲食を得しむ。七日の後、酒果皆盡き、繼ぐに山水木果を以てするに、其味美ならず、更に前の者を索む。答へて言はく「已に盡き

たり、今當に共に行くべし。此を去ること遠からずして得べき處有り」と。仙人言はく、「意に隨はん」と。即便共に出で、婬女知れば城を去ること遠からずして、女は便ち道中に在りて臥して言はく「我極めり、復行く能はず」と。仙人言はく「汝行く能はずんば、我項上に騎れ、當に汝を項にして去るべし」と。女は先づ信を遣して王に白さく「王、我が智能を觀るべし」と。王は勅して駕を嚴り、出でて之を觀、問うて言はく「何に由りてか爾ることを得る」と。女は王に白して言さく「我方便力を以ての故に、今已に是の如し、復能する所無し」。城中に住せしめて、好く之を供養恭敬し、五の所欲を足し、拜して大臣と爲したまへ」と。城に住すること少日、身轉羸痩し、禪定心の樂みを念じ、此世欲を厭ふ。王、仙人に問はく「汝何んが樂まず、身は轉羸痩するや」と。仙人、王に答ふ「我は五欲を得と雖も、常に自ら林間の閑靜なる諸仙の遊ぶ處を憶念して心を去ること能はず」と。王自ら思惟すらく「若し我強ひて其志に違はば、志に違ふを苦と爲し、苦極りて則ち死せん。本より以て苦患を除かんことを求む、今已に之を得たり、當に復何に緣りてか、強ひて其志を奪ふべき」と。即ち之を發遣す。既に山中に還り、精進久しからずして、還五通を得たり。佛、諸の比丘に告げたまはく「一角仙人は我身是なり。婬女は耶輸陀羅是なり。爾時、歡喜丸を以て我を惑す。我は未だ結を斷ぜず、之が爲に惑さる。今復藥の歡喜丸を以て我を惑さんと欲して得べからず」と。是事を以ての故に、細軟の觸法は能く仙人をすら動かすを知る。何に況んや愚夫をや。是の如きの種種の因緣、是を細滑

【三】次に五蓋を除くことを明す。

の欲を呵すと名く。是の如くにして五欲を呵し、五蓋を除く。

(三)復次に、貪欲の人は道を去ること甚だ遠し。所以は何ん。欲は種種の惱亂の住處爲り、若し心貪欲に著せば、道に近づくに由無ければなり。欲蓋を除くこと、偈に說く所の如し

入道せる慚愧の人は、鉢を持して衆生を福す
云何が塵欲を縱にして、五情に沈沒せん
鎧を著て刀杖を持し、敵を見て退き走らば
是の如き怯弱の人は、世を擧げて輕笑せられん
比丘は乞士爲り、髮を除き袈裟を著く
五情の馬に制せらるれば、笑を取ること亦是の如し
又豪貴の人の、盛服して以て身を嚴り
而も行いて衣食を乞はば、笑を衆人に取るが如し
比丘の飾好を除き形を毀ち、以て心を攝しつつ
而も更に欲樂を求めば、笑を取ること亦是の如し
已に五欲の樂を捨て、之を棄てて顧みず
如何が還得ることを欲して、愚の自ら食して吐くが如くならん
是の如き貪欲の人は、本願を觀るを知らず
亦好醜を識らず、渴愛に狂醉す

喜悦は有重の法なり、一切皆已に棄てたる
實智の觀まざる所は、愚騃の愛し近づく所なり
諸欲は求むる時苦しみ、之を得て多く怖畏し
失ふ時は熱惱を懷き、一切樂しむ時無し
諸欲の患は是の如し、何を以てか當に之を捨つべき
諸の禪定の樂を得ば、則ち爲に欺かれず
樂を欲し著して厭く無くんば、何を以てか能く滅除せん
若し不淨觀を得ば、此心自然に無けん
欲に著して自覺せずんば、何を以てか其心を悟らん
當に老病死を觀じて、爾して乃ち四淵を出づべし
諸欲は放捨すること難し、何を以てか能く之を遠けん
若し能く善法を樂しまば、此欲は自然に息まん
諸欲は解くべきこと難し、何を以てか能く之を解かん
身を觀じて實相を得ば、則ち爲に縛せられず
是の如き諸の觀法は、能く諸欲の火を滅すること
譬へば大いに澍げる雨あれば、野火の在るもの無きが如し

是の如き等の種種の因緣は、欲蓋を滅除す。瞋恚蓋とは、諸の善法を失するの本、諸

の惡道に墮するの因、諸樂の怨家、善心の大賊、種種の惡口の府藏なり。佛の瞋れる弟子を教へたまひし偈に言へるが如し。

汝當に、受身と及び處胎と
穢惡の幽苦と、既に生ずるときの艱難とを知りて思惟すべし
既に此意を思得して、而も復瞋を滅せずんば
則ち當に此輩は、則ち是れ無心の人なるを知るべし
若し罪の報果無く、亦諸の呵責無くとも
猶尚當應に慈忍すべし、何に況んや苦果の劇しきをや
當に老病死は、一切免るる者無きを觀ずべし
當に慈悲心を起すべし、云何が惡を物に加へん
衆生は相怨み賊ひ、斫刺して苦毒を受く
云何が修善の人にして、而も復惱害を加へん
常に當に慈悲を行じ、心を定めて諸善を修すべし
惡意を懷いて、一切を侵害すべからず
若し道法を勤修するに、惱害すれば則ち行ぜず
善惡の勢は並ばざること、水火の相背くが如し
瞋恚來りて心を覆へば、好醜を分つを知らず

亦利害を識らず、惡道に墮つるを知らず
他の苦惱を計らず、身心の疲を覺らず
先づ自ら苦因を受け、後る後他人に及ぼす
若し瞋恚を滅せんと欲せば、當に慈心を思惟し
獨り自ら清閑に處して、事を息め因縁を滅すべし
當に老病死を畏れ、九種の瞋惱を除くべし
是の如く慈を思惟せば、則ち瞋の毒を滅するを得ん

是の如き等の種種の因縁は、瞋恚の蓋を除く、睡眠の蓋とは、能く今世の三事たる欲樂、利益、福德を破し、能く今世後世の究竟の樂を破し、死と異る無く、唯氣息のみ有り、一菩薩の偈を以て、睡眠の弟子を呵して言へるが如し。

汝起きよ、臭身を抱いて臥す勿れ、種種の不淨を假に名けて人となす
重病を得、箭の體に入るが如し、諸の苦痛の集まり、安んぞ眠るべけん
一切の世間は死の火に燒かる、汝當に出でんことを求むべし、安んぞ眠るべき
人の縛せられ、將去りて殺さるるが如し、災害至るに垂とす、安んぞ眠るべけん
結賊滅せざれば、害未だ除かず、毒蛇と共に同室に宿るが如し
亦陣に臨みて白刃の間にあるが如し、爾時安んぞ而も睡眠すべけん
眠は大闇爲り、見る所無し、日日に侵誑して人の明を奪ふ

眠は心を覆ひ、識る所無きを以て、是の如きの大失有り、安んぞ眠るべけん

是の如き等の種種の因緣は睡眠の蓋を呵す。掉悔の蓋とは、之を掉すを法と爲し、出家の心を破る。人の心を攝する如きすら、猶住する能はず、何に況んや掉散をや。掉散の人は、鉤無き醉象、決鼻の駱駝の如く禁制すべからず。偈に說くが如し、

汝は已に頭を剃り染衣を著し、瓦鉢を執持して乞食を行ず
云何が戲掉の法に樂著して、既に法利無く世樂を失せん

悔法とは、大罪を犯す人の、常に畏怖を懷くが如し。悔の箭心に入れば、堅くして拔くべからず。偈に說くが如し、

作すべからざるを作し、作すべきを作さざれば
悔惱の火に燒かれ、後世惡道に墮す
若し人罪を能く悔い、已に悔いて則ち放捨す
是の如くなれば心安樂なり、應に常に念著すべからず
若し二種の悔有り、不作と若は已作となり
是を以て心に悔著す、是れ則ち愚人の相なり
以て心に悔いざる故に、作さずして而も能く作し
諸の惡事の已に作せるは、不作ならしむる能はず

是の如き等の種種の因緣は、掉悔の蓋を呵す。疑蓋とは、疑覆ふの心を以ての故に、

諸法の中に於て定心を得ず、定心無きが故に、佛法の中に於て空にして所得無し、譬へば人の寶山に入るに、若し手無ければ、能く取る所無きが如し、疑の義を說くの偈に言ふが如し、

人の岐道に在りて、疑惑して趣く所無きが如く
諸法實相の中の、疑も亦復是の如し
疑の故に、諸法の實相を懃求せず
是疑は癡より生ず、惡中の弊惡なり
善不善の法の中、生死及び涅槃は
定んで實に眞有の法なり、中に於て疑を生ずる莫れ
汝、若し疑心を生ぜば、死王獄吏の縛すること
師子の鹿を搏つが如く、解脫を得る能はざらん
在世に疑有りと雖も、當に妙善の法に隨ふべし
譬へば岐道を觀ては、應に利好の者を逐ふべきが如し

是の如き等の種種の因緣の故に、應に疑蓋を捨つべし。是五蓋を棄つるは、譬へば負債を脫するを得、重病差ゆるを得、飢餓の地より豐國に至るを得るが如く、獄より出づるを得るが如く、惡賊の中に於て自ら免れ濟ふを得て、安隱にして患無きが如し。行者も亦是くの如し、五蓋を除卻すれば其心、安隱にして清淨快樂なり。譬へば五事を以て日月を覆曀

するが如し、煙、雲、塵、霧、羅睺、阿修羅の手もて障ふれば、則ち明に照す能はず。人心も亦是の如し、五蓋の爲に覆はれ、自ら利なる能はず、亦人を益する能はざるなり。若し能く五欲を呵し、五蓋を除き、五法、欲、精進、念、巧慧、一心を行じ、此五法を行せば、五支を成就するを得ん。初禪の欲を欲と名け、欲界の中に於て欲を出づ。初禪の精進を得るを、家を離れて戒を持つと名け、初夜にも後夜にも專精にして懈らず、食を節し、心を攝し、念を馳散せしめざるを、初禪の樂を念ずと名け、欲界は不淨、狂惑にして賤むべく、初禪は尊貴にして貴むべしと知るの巧慧を、欲界の樂を觀察し籌量すと名け、初禪に輕重得失を樂んで一心たるを、常に心を緣けて、緣中に分散せしめずと名く。復次に、專ら初禪を求めて欲樂を放捨することは、譬へば怨を患ひて、常に滅除せんと欲すれば、則ち怨の爲に害せられざるが如し。佛、欲に著するの婆羅門の爲に說きたまふが如くんば、我は本、欲を觀て、欲を怖畏憂苦の因緣と爲し、欲を少樂と爲す。其苦甚だ多し。欲を魔網の纏縛して出で難しと爲し、欲を燒熱して、諸藥を乾竭すと爲す。譬へば樹林の四邊より火起るが如し。欲を火坑に臨んで甚だ怖畏すべきが如く、毒蛇に逼るが如く、怨賊の刀を拔くが如く、惡羅刹の如く、惡毒の口に入るが如く、銷銅を呑むが如く、三流の狂象の如く、大深坑に臨むが如く、師子の道を斷ずるが如く、摩竭魚の口を開くが如しと爲す。諸欲も亦是の如く、甚だ怖畏すべし。若し諸欲に著せば、人をして憫苦せしむ。欲に著するの人は亦獄囚の如く、鹿の圍に在るが如く、鳥の網に入るが如く、魚の鉤を呑むが

【四】禪を波羅蜜といふに就いて

【未到地】八界の八地に各根本定と近分定とある中、初禪の近分定は他と異るが故に、別に立てて未至定といふ。未だ根本に

如く、豺の狗を搏つが如く、鷹の鶏群に在るが如く、蛇の野猪に値ふが如く、鼠の猫の中に在るが如く、群盲人の坑に臨むが如く、蠅の熱油に著くが如く、病人の陣に在るが如く、躄人の火に遭ふが如く、沸醎の河に入るが如く、蜜を塗れる刀を舐るが如く、門衛の臠肉の如く、薄の刀林を覆ふが如く、華の不淨を覆ふが如く、蜜を塗れる毒甕の如く、毒蛇の篋の如く、夢の虚誑の如く、假借の當に歸すべきが如く、小兒を幻誑するが如く、焔の實無きが如く、大水に沒するが如く、船の摩竭魚の口に入るが如く、雹の穀を害するが如く、霹靂の人に臨むが如し。諸欲も亦是の如く、虚誑、無實、無牢、無強にして、樂少く苦多し。欲は魔軍為り、諸の善功德を破り、常に衆生に助害を為すが故に、是の如き等の種種諸の喩を以て五欲を呵し、五蓋を除き、五法を行ずれば、初禪に至ることを得るなり。

問うて曰はく、「八背捨、八勝處、十一切入、四無量心、諸定三昧、是の如き等の種種の定を波羅蜜と名けず、何を以てか但禪波羅蜜と言ふ」と。答へて曰はく、「此諸定の功德は、都て是れ思惟修なり、（禪は秦に思惟修と言ふ）禪波羅蜜と言へば一切皆攝す。復た次に、禪は最大なること王の如く、禪を説けば則ち一切を攝し、餘定を説けば則ち攝せず。何を以ての故に。是の四禪の中は、智と定と等しくして樂なればなり。未到地、中間地は智多くして定少く、無色界は定多くして智少く、是の處は樂に非ず。譬へば車の一輪は強く、一輪は弱ければ、則ち安隱ならざるが如く、智と定と等しからざるも亦是の如し。復た次に、是の四禪には、四等心、五神通、背捨、勝處、一切處、無諍三昧、願智、頂禪、自在定、練禪、十四變化心、

至らざる定の意。

【中間地】大梵天所得の禪定、八地の各に根本定を近分定とある中、初禪の根本定と近分定とには尋と伺との心所相應し、第二禪以上七地の近分定と根本定には尋も伺も相應せず極めて寂靜なり。而るに此中間に唯尋の心所のみ相應して尋の心所の相應せざるあるを中間定といふ、

【四等心】慈、悲、喜、捨の四無量心に同じ。

【願智】願の如く生じ來る妙智、

【五】初禪を得るに、就いて修すべき事、依るべき道を明す。

【安那般那】アナーパーナ（Ānāpāna）の數息觀と譯す。

般舟般、諸の菩薩の三昧首楞嚴等有り、略說すれば則ち百二十なり。諸佛の三昧の不動等は、略說すれば則ち百八なり、及び佛の得道捨壽、是の如き等の種種の功德妙定は、皆禪の中に在り。是を以ての故に禪を波羅蜜と名け、餘定を波羅蜜と名けず。

(五)問うて曰はく、汝は先に五欲を呵し、五蓋を除き、五法を行じて、初禪を得と言へり。何事を修し、何道に依りてか能く初禪を得る。答へて曰はく、不淨觀、安那般那念等の諸定門に依る、禪經禪義の偈の中に說くが如し。

欲及び惡法、有覺並に有觀を離れ
生を離れて喜樂を得、是人は初禪に入る
已に婬火を離るるを得て、則ち淸涼定を得
人の大熱に悶へて、冷池に入れば則ち樂きが如し
貧の寶藏を得れば、大喜覺の心を動すが如く
分別して則ち觀を爲す、初禪に入るも亦然なり
二法は心を亂すを知り、善と雖も而も應に離るべし
大水の澄靜なれば、波蕩も亦見ゆる無きが如し
譬へば人の大いに極めて、安隱に睡臥する時
若し喚呼の聲有れば、其心大に惱亂するが如し
心を攝して禪に入る時は、覺觀を以て惱と爲す・

是故に覺觀を除けば、一識處に入るを得るなり
內心清淨なるが故に、定生じて喜樂を得
此二禪に入るを得れば、喜び踊んで心大いに悅ぶ
心を攝すること第一の定なり、寂然として念ずる所無く
患、苦、欲は之を棄つること、亦覺觀を捨つるが如し
受に由るが故に喜有り、喜を失へば則ち憂を生ず
喜樂の身心を離れ、念及び方便を捨つ
聖人は能く捨つるを得、餘人は捨つる難しと爲す
若し能く樂患を知り、見動かされば大安なり
憂喜先づ已に除き、苦樂今亦斷ず
念を捨て清淨心にして、第四禪の中に入る
第三禪の中の樂は無常にして、動ずるが故に苦なり
欲界の中に憂を斷じ、初二禪に喜を除く
是故に佛世尊は、第四禪の中に說きたまはく
先に已に憂苦を斷じ、今則ち苦樂を除くと

復次に、持戒清淨にして、閑處に靜居し、諸根を守り攝し、初夜にも後夜にも專精に思惟し、外樂を棄捨し、禪を以て自ら娛み、諸欲不善法を離れ、未到地に依りて初禪を得。

【一八】以下禪相を明す。初に四禪、中に有覺有觀（尋伺）を說く。

初禪は阿毘曇に說くが如し。

(一八)禪に四種有り、一に味相應、二に淨、三に無漏、四に初禪に攝する所の報得の五衆なり。是中行者は淨、無漏に入る。二禪三禪四禪も亦是の如し。佛の所說の如くんば、若し比丘有り、諸欲及び惡不善の法、有覺、有觀を離れ、生を離れ喜樂にして初禪に入るが如し。諸欲とは愛著する所の色等の五欲なり、思惟分別して欲を呵すること先に說くが如し。惡不善の法とは、貪欲等の五蓋なり、此内外の二事を離るるが故に、初禪を得。初禪の相は、有覺、有觀、喜樂、一心なり。有覺、有觀とは、初禪の中に未だ曾て得られざる、善法の功德を得るが故に、心大いに驚悟す、常に欲火の爲に燒れしが、初禪を得る時は淸涼池に入るが如く、又貧人の卒に寶藏を得るが如く、行者は思惟分別して、欲界は過罪なり、初禪は利益、功德、甚だ多しと知り、心大いに歡喜す。是を有覺、有觀と名く。問うて曰はく、有覺、有觀は、一法と爲んや、是れ二法と爲んや。答へて曰はく、二法なり。麁心の初念は是を名けて覺と爲し、細心の分別は是を名けて觀と爲す。譬へば鐘を撞くに、初聲の大なる時を名けて覺と爲し、後聲の細微なるを名けて觀と爲すが如し。問うて曰はく、阿毘曇に說くが如くんば、欲界乃至初禪の一心の中には覺觀相應す。今云何が麁心の初念を名けて覺と爲し、細心の分別を名けて觀と爲すと言ふ。答へて曰はく、二法は一心に在りと雖も、二相は俱ならず。覺の時は、觀は明了ならず、觀の時は覺は明了ならず。譬へば日出づれば、衆星現ぜざるが如く、一切の心、心數法の、時に隨うて名を受くるも亦

【五下分結】貪、瞋、身見、戒取見、疑の五種煩惱、是れ有情を欲界に繫縛して之を脫出せしむること能はざれば下分結といふ

復次、佛の說きたまふが如くんば、「若し一法を斷ぜば、我、汝に阿那含を得たることを證せん」と。一法とは謂ゆる慳貪なり。實には隨に五下分結を盡して阿那含を得と說くべし、云何が但一法を斷ずと言はん。是人の慳貪は偏く多きを以て、諸餘の結使は皆之に從うて生ず。是故に慳貪を斷ずれば、餘の結も亦斷ず。覺と觀との時に隨うて名を受くること亦復是の如し。行者は是覺觀は是れ善法なりと雖も、而も定心を嬈亂すと知りて、心の欲を離るるが故に、是覺觀を呵して是念を作さく、「覺觀は禪心を嬈動す。譬へば清水も波蕩すれば則ち見る所無きが如く、又疲極の人の息むを得て、睡らんと欲するに、傍人喚呼して種種に惱亂するが如く、心を攝する內定を覺觀の嬈動することも亦復是の如し」と。是の如き等の種種の因緣によりて、覺觀を呵す。覺觀滅すれば、內、清淨にして、心を一處に繫け、覺無く觀無く、定生じて、喜樂して二禪に入る。既に二禪を得れば、二禪の中に未だ曾て得られざる無比の喜樂を得。覺觀滅すとは、覺觀の過罪を知るが故に滅す。內、清淨とは、深く禪定に入り、二禪の覺觀を捨てて、所得の利は重く、失ふ所は甚だ少く、獲る所は大いに多しと信じ、心を一緣に繫くるが故に、內、清淨と名く。行者の喜の過を觀るも亦覺觀の如し。喜ぶ所に隨うて多喜多憂なり。所以は何。貧人の寶を得れば歡喜すること量無く、一旦之を失すれば、其憂も亦深きが如し、喜は即ち轉じて憂と成る。是故に當に此喜を捨離すべし。故に念智を捨つるを行じて身樂を受く。是樂を聖人は能く得能く捨つ。一心樂に在れば、第三禪に入る。捨つとは、喜心を捨てて復悔いざるなり。念

【七】次に四空處を明す。

智とは、既に三禪の中の樂を得て、樂に於て患を生ぜしめざるなり。身樂を受くとは、是れ三禪の樂にして、遍身皆受く。聖人は能く得、能く捨つとは、此樂は世間第一にして、能く心の著を生ずればなり。凡夫は能く捨つる者少し。是を以ての故に佛說きたまはく、「慈を行ずるの果報は、遍淨地の中の第一なり」と。行者の樂の失を觀ずるも亦歡喜の如く、心不動の處を知るを、最も第一と爲す。若し動ずる處有れば是れ則ち苦有り。行者は第三禪の樂動を以ての故に不動の處を求め、以て苦樂を斷ず。先づ憂喜を滅するが故に、不苦、不樂、捨念、清淨にして第四禪に入る。是四禪の中には、苦無く、樂無く、但不動の智慧のみ有り。是を以ての故に第四禪は捨念清淨なりと說き、第三禪は、樂動くが故に苦なりと說く。是故に第四禪の中には、苦樂を斷ずと說く。佛の說きたまふが如くんば、(ヒ)一切の色相を過ぎ、別相を念ぜず、有對の相を滅して、無邊虛空處に入るを得。行者是念を作し、若し色無ければ則ち飢渴寒熱の苦無し。是身色は麁重、弊惡、虛誑にして實に非ず。先世の因緣の和合せる報として此身を得、種種の苦惱の所住の處なり。云何が當に此身を免るるを得べき。當に此身を、身中は虛空の如しと觀じ、常に身の空なること、籠の如く、甑の如しと觀ずべし。常に念じて捨てざれば、則ち色を度するを得て、復身を見ず。內身の空なるが如く、外色も亦爾なり。是時能く無量無邊の空を觀ず。此觀を得已れば、苦無く樂無く、其心轉增す。鳥の瓶中に閉著せらるるに、瓶破れて出づるを得るが如し。是を空處の定と名く。是空は無量無邊なり。識を以て之を緣じ、緣多ければ則ち

散じ、能く定を破る。行者は虚空を觀じ、受想行識は病の如く、癰の如く、瘡の如く刺の如く、無常、苦、空、無我なり、欺誑の和合は則ち有なるも、是實に非ざるなりと縁ず。是の如く念じ已りて、虚空の縁を捨て但識のみを縁ず。云何が現前の識を縁じ、過去未來の無量無邊の識を縁ずる。是識は無量無邊なり、虚空の無量無邊なるが如し。是を識處と名く、是識は無量無邊たり。識を以て之を縁ずるに、識多ければ則ち散じて、能く定を破る。行者は是縁識を觀じて、受想行識は、病の如く癰の如く、瘡の如く刺の如く、無常、苦、空、無我たり、欺誑和合にして有たり、實有に非ずとす。是の如く觀じ已りて、則ち識相を破る。是識處を訶し、無所有處を讃じ、諸の識相を破り、心を繫けて無所有の中に在く、是を無所有處定と名く。無處有處には受想行識を縁じて、病の如く癰の如く、瘡の如く刺の如く、無常、苦、空、無我なり、欺誑和合にして有なり、實有に非ざるなりと、是の如く思惟す。無想處は癰の如く、有想處は、病の如く、瘡の如く刺の如く、第一の妙處は是れ非有想非無想處なり。問うて曰はく、『非有想非無想處に受想行識有り、云何が非有想、非無想と言ふ。』答へて曰はく、『是中の有想は微細にして覺し難きが故に、謂ひて非有想と爲す。有想の故に非無想なり。凡夫は心に、諸法實相を得るを謂ひて、是を涅槃と爲す。佛法の中には、有想を知ると雖も、其本名に因りて、名けて非有想非無想處と爲す。問うて曰はく、『云何が是れ無想なる。』答へて曰はく、『無想に三種有り。一に無想定、二に滅受定、三に無想天なり。凡夫人は心を滅して無想定に入らんと欲し、佛弟子

は心を滅して滅受定に入らんと欲す。是諸の禪定に二種有り、若は有漏、若は無漏なり。有漏は即ち是れ凡夫の行ずる所にして上に說くが如く、無漏は是れ十六聖行なり。有漏道の若きは、上地の邊に依りて、下地の欲を離れ、無漏道の若きは、自地の欲及び上地を離る。是を以ての故に凡夫は、有頂處に於て欲を離ることを得ず、更に上地の邊無きが故なり。佛弟子の若きは、欲界の欲、欲界の煩惱を離れんと欲し、思惟して九種の上中下なる上の上、上の中、上の下、中の上、中の中、中の下、下の上、下の中、下の下を斷ず。此九種を斷ずるが故に、佛弟子は、若し有漏道に依りて初禪を得んと欲せば、是時未到地に於て、九無礙道、八解脫道の中、現在有漏道を修し、未來に有漏無漏道を修す。第九解脫道の中に、未到地に到り、現在有漏道を修し、未來に未到地の有漏無漏道、及び初禪邊地の有漏を修す。若し無漏道を初禪に得んと欲するも亦是の如し。若し有漏道に依りて初禪の欲を離れ、第二禪邊地に於て、九無礙道、八解脫道の中に、現在二禪邊地の有漏を修し、未來に二禪邊地の有漏道を修し、亦無漏初禪及び眷屬を修し、第九の解脫道の中に第二禪邊地に於て、現在二禪邊地の有漏道を修し、未來に二禪邊地、初禪の無漏及び眷屬、二禪の淨無漏を修す。若し無漏道に初禪の欲を離れ、九無礙道、八解脫道の中に、現在自地の無漏道を修し、未來に初禪及び眷族の有漏無漏道を修し、第九解脫道の中に、現在自地の無漏道を修し、未來に初禪及び眷族の有漏、無漏道を修す、及び二禪の淨無漏、乃至無所有處の離欲を修する時も亦是の如し、非有想非無想處に欲を離るる時は、九無礙道、

【八】次に二十三種の禪定並に願智等を明す。

八解脫道の中に但一切無漏道を修し、第九解脫道の中に三界の善根無漏道を修し、無心定を除く。修に二種有り、一には得修、二には行修なり。得修とは、本得ざる所を今得るに名け、未來世の自の事を修し、亦餘事を修す。行修とは、曾て得たるを現前に於て修すと名く。未來も亦爾なり、餘を修せず。是の如き等の種種の、諸の禪定の中に修す

(八)復次に、禪定の相を略說するに、二十三種有り。八味と八淨と七無漏となり。復六因有り、相應因と共因と相似因と遍因と報因と名因となり。一一の無漏、七無漏の因は是れ相似因なり。自地の中にて、相應因、共有因、初味定、初味定因、乃至、後味定、後味定因を增す。淨も亦是の如し。四緣有り、因緣と次第緣と、緣緣と增上緣となり。因緣とは上に說くが如し。初禪の無漏定に、次第に六種の定を生ず、一に初禪の淨に二無漏あり、二禪三禪も亦是の如し。二禪の無漏定は、次第に八種の定を生ず、自地の淨無漏と初禪の淨無漏となり、三禪四禪も亦是の如し。三禪の無漏定は、次第に十種を生ず。自地の二と下地の四と上地の四となり。第四禪の空處も亦是の如し、識處の無漏定は、次第に九種を生ず、自地の二と下地の四と上地の三となり。無所有處の無漏定は次第に七種を生ず、自地の二と下地の四と上地の一となり。非有想非無想處の淨は、次第に六心を生ず、自地の二と下地の四となり。諸の淨地も亦是の如く、又皆自地の味を緣ず、初禪の味、次に第二禪の味淨、乃至非想非非想處味も亦是の如し。淨無漏禪は、一切處に味禪を緣じ、自地の中の味を緣じ、亦淨愛を緣ず。無漏緣無きが故に、無漏を緣ぜず。淨無漏、根本無色定は、下

地の有漏を緣ぜず。名因と增上緣とは、一切の四無量心、三背捨、八勝處に通じ、八一切處は皆欲界の五神通を緣じ、欲色界を緣ず、餘は各所緣に隨ふ。滅受想定は所緣無し。四禪の中に練法あり、無漏を以て有漏を練るが故に、四禪に心自在なるを得。能く無漏の第四禪を以て、有漏の第四禪を練り、然る後第三、第二、第一禪は皆自地の無漏を以て、自地の有漏を練る。問うて曰はく、「何を以てか練禪と名くる。」答へて曰はく、『諸の聖人は、無漏定を樂み、有漏を樂まず。欲を離るる時、有漏を樂まずして自得し、今其滓穢を除かんと欲するが故に、無漏を以て之を練る。譬へば金を煉るが如く、其穢を去る。無漏の有漏を練るも亦復是の如し。無漏禪より起りて、淨禪に入り是の如く數數す。是を名けて練ると爲す。復次に、諸禪の中に頂禪有り、何を以ての故に頂と名くる。二種有り、阿羅漢の壞法と不壞法となり。不壞法の阿羅漢は一切の深き禪定に於て自在を得、能く頂禪を起ちて是頂禪を得、能く壽を轉じて富と爲し、富を轉じて壽と爲す。復願智、四辯、無諍三昧有り。願智とは、願うて三世の事を知らんと欲し、所願に隨うて則ち知る、此願智は二處の攝なり、欲界と第四禪となり。四辯とは、法辯と辭辯とは、二處の攝にて欲界と初禪となり。餘の二辯は九地の攝にして、欲界と四禪と四無色定となり。無諍三昧とは、他の心をして諍を起さざらしむ、五地の攝にして欲界及び四禪なり。』

問うて曰はく、『諸禪を得て更に餘法有りや。』答へて曰はく、「味定は生ずるも亦得、退くも亦得、淨禪は生ずる時得、欲を離るる時は無漏を得、欲を離るる時得、退く時は九地の

【九】禪は波羅蜜の根本なれば是れ禪波羅蜜なり

無漏定を得、四禪、四無色定、未到地禪、中間は能く結使を斷じ、未到地の禪、中間は捨根と相應す。若し入禪を成就すれば、下地の變化心も亦成就す。初禪に成就するが如きは二種の變化心有り。一には初禪、二には欲界なり。二禪には三種、三禪には四種、四禪には五種有り。若し二禪、三禪、四禪の中に、聞、見、觸を欲する時は皆梵世の識を用ひ、識滅する時は則ち止む。四無量意、五神通、八背捨、八勝處、十一切入、九次第定、九相、十想、三三昧、三解脫門、三無漏根、三十七品、是の如き等の諸々の功德は、皆禪波羅蜜の中より生ず。是中に應に廣く說くべし。

(九)問うて曰く、『應に禪波羅蜜を說くべし、何を以てか但禪を說く。』答へて曰く、『禪は是れ波羅蜜の本なり。是禪を得已りて衆生を憐愍し、內、心中に種々の禪定の妙樂有れども、而も求むるを知らず、乃ち外法の不淨苦の中に在りて樂を求む。是の如く觀じ已りて、大悲心を生じ、弘誓願を立つらく、「我當に衆生をして皆禪定の內樂を求め、不淨の樂を離れしむべし」と。此禪樂に依りて、次いで佛道の樂を得しむ、是時の禪定を波羅蜜と名くるを得。復次に、此禪の中に、味を受けず、報を求めず、報生に隨はず、心を調へんが爲の故に、禪に入り、智慧方便を以て還りて欲界に生じ、一切の衆生を度脫す、是時の禪を名けて、波羅蜜と爲す。復次に、菩薩は深く禪定に入り、一切の天人は其心を知る能はず。所依、所緣、見聞、覺知の法の中に、心動ぜず。『毘摩羅詰經』の中に、舍利弗の爲に宴坐の法を說きたまふが如し、身に依らず、心に依らず、三界に依らず、三界の中に於て身心

【一】菩薩の禪と二乘或は外道の禪との相違を明す。

を得ざれ、是を安坐と爲す」と。復次に、若し人禪定の樂は人天の樂に勝れたりと聞いて、便ち欲樂を捨てて禪定を求めば、是れ自ら樂利を求むるが爲にして寄とするに足らざるなり。菩薩は則ち然らず。但衆生の爲に、慈悲心をして淨ならしめんと欲す、衆生を捨てざるは菩薩の禪なり。禪の中に皆大悲心を發す。禪に極妙の内樂有り。而も衆生は之を捨てて外樂を求む。譬へば大富の盲人は、多く伏藏有れども、知らず見ずして乞を行じ求むるが如し。智者は其自ら妙物有りて、知見する能はずして他に從うて乞ふことを愍む、衆生も亦是の如し、心中に自ら種種の禪定の樂有りて、而も發するを知らず、反りて外樂を求む。復次に、菩薩は諸法の實相を知るが故に、禪の中に入りて、心安隱にして味に著せず。諸餘の外道は禪定に入ると雖も、心安隱ならず、諸法の實を知らざるが故に、禪味に著す。

〔一〇七〕問うて曰はく、『阿羅漢と辟支佛とは、倶に味に著せず、何を以てか禪波羅蜜を得ざる。』答へて曰はく、『阿羅漢と辟支佛とは味に著せずと雖も、大悲心無きが故に、禪波羅蜜と名けず。又復、盡く諸禪を行ずる能はず。菩薩は盡く諸禪を行じ、麁細、大小、深淺、内縁、外縁、一切を盡く行ず。是を以ての故に、菩薩の心中は禪波羅蜜と名け、餘人は但禪とのみ名く。復次に、外道も聲聞も菩薩も皆禪定を得れども、而も外道禪の中には三種の患有り。或は味著、或は邪見、或は憍慢なり。聲聞禪の中には慈悲薄く、諸法の中に於て、利智を以て諸法の實相を貫達せず、獨り其身を善くし、諸の佛種を斷ず。菩薩禪の

中に於て此事無く、一切諸佛の法を集めんと欲するが故に、諸禪の中に於て、衆生乃至昆虫を惱せず、常に慈念を加ふ。釋迦文尼佛の如きは本螺髻仙人と爲り、尚闍利と名く。常に第四禪を行じ、出入の息斷え、一樹の下に在りて坐し、兀然として動ぜず、鳥は此の如くなるを見て、之を謂ひて木と爲し、即ち髻中に於て卵を生む。是菩薩は禪より覺めて、頭上に鳥の卵有るを知り、即ち自ら思惟すらく、「若し我起動せば、鳥母は必ず復來らざらん、鳥母來らずんば鳥の卵は必ず壞せん」と。即ち還禪に入り、鳥の子の飛び去るに至りて、爾して乃ち起てり。復次に、菩薩を除き、餘人は欲界の心より次第に禪に入るを得ず。菩薩は禪波羅蜜を行じ、欲界の心より次第に禪に入る。何を以ての故に。菩薩は世世に、諸の功德を修し、結使の心薄く、心柔軟なるが故なり。復次に餘人は、總相の智慧を得て能く欲を棄ること、無常觀、苦觀、不淨觀の如し、菩薩は一切法の中に於て、能く別相を分別して欲を離る。五百の仙人の如きは、飛行する時、甄陀羅女が歌聲を聞き、心に著し、狂醉して皆神足を失ひ、一時に地に墮つ。聲聞の如きは、緊陀羅王屯崙摩が琴を彈じて歌讚し、諸法實相を以て佛を讚ずるを聞く。是時、須彌山及び諸の樹木は皆動じ、大迦葉等の諸の大弟子は皆座上に於て自ら安んずる能はず。天須菩薩、大迦葉に問はく、「汝は最も耆年にして、頭陀を行ふこと第一なり。念ふに何が故に心を制して自ら安んずること能はざる」と。大迦葉答へて曰はく、「我は人天の諸欲に於て心傾動せず、是は菩薩の無量の功德の報聲なり。又復智慧を以て變化して、聲を作す、忍ぶ能はざる所なり」と。若

【超越三昧】諸佛菩薩が諸地を超過して自在に出入する三昧。即ち四禪の至滅盡定と淺深次第して入出することなく、散心より直に滅盡定に入り、また滅盡定より直に散心に入ることを得。

し八方より風起るも、須彌山をして動ぜしむる能はず。劫盡くるの時、毘藍の風至れば、須彌山を吹いて腐草の如くならしむ。是を以ての故に知る、菩薩は一切法の中に於て、別相を觀じて諸欲を離るるを得、諸餘の人等は但禪の名字のみを得て、波羅蜜を得ざるを。復次に、餘人は菩薩の入出の禪心を知るも、禪に住するの心の緣ずる所、到る所を知る能はず、諸法の深淺を知るのみ。阿羅漢、辟支佛すら尚知る能はず、何に況んや餘人をや。譬へば象王の水を度るに、入る時も出る時も足跡を見るべく、水中に在る時は、知るを得べからざるが如し。若し初禪を得んに、同じく初禪を得たる人は能く知れども、而も菩薩の初禪に入るを知る能はず。人有り、二禪を得て、觀知して初禪の心を了了に知るを得れども、菩薩の初禪に入る心を知る能はず、乃至非有想非無想處も亦是の如し。復次に、超越三昧の中には、初禪より起ちて第三禪に入り、第三禪の中より起ちて虛空處に入り、虛空處より起ちて無所有處に入る。二乘は唯能く一を超ゆるも、二を超ゆる能はず。菩薩は自在に超えて、初禪より起ちて、或は三禪に入ること常の法の如く、或時は第四禪に入り、或は空處、識處、無所有處に入り、或は非有想非無想處、或は滅受想定に入り、滅受想定より起ちて、或は無所有處、或は識處、空處、四禪乃至初禪に入り、或時は一を超え、或時は二を超え、乃至九を超ゆ。聲聞は二を超ゆる能はず、何を以ての故に、智慧、功德、禪定の力薄きが故に。譬へば二種の師子の如し。一は黃師子、二は白髮の師子なり。黃師子は亦能く超ゆと雖も、白髮の師子王に如かず。是の如き等の種種の因緣によりて禪波羅

觀を分別す。復次に、爾時、菩薩は常に禪定に入り、心を攝して動ぜず、覺觀を生ぜず、亦能く十方一切の衆生の爲の故に、無量の音聲を以て、法を說いて之を度脫す、是を禪波羅蜜と名く。問うて曰はく、「經の中に說くが如くんば、「先づ覺觀思惟有りて、然る後、能く說法す、禪定の中に入りて、語るに覺觀無ければ、說法し得べからず。汝今云何が常に禪定の中に在りて覺觀を生ぜずして、衆生の爲に說法すと言ふ。」答へて曰はく、「生死の人の法は、禪定に入り、先づ語るに覺觀を以て、然る後に說法す。法身の菩薩は、生死の身を離れ、一切の諸法を知り、常住なること禪定の相の如く、亂有るを見ず。法身の菩薩は、無量の身を變化して衆生の爲に說法す、而も菩薩の心は分別する所無し。阿修羅の琴の、常に自ら聲を出し、意に隨うて作し、人の彈ずる者無きが如し。此れ亦散心無く、亦攝心無し。是福德の報生ずるが故に、人の意に隨うて聲を出すなり。法身の菩薩も亦是の如し、分別する所無く、亦散心無く、亦說法の相無し。是れ無量の福德、禪定、智慧の因緣の故に、是法身の菩薩は、種種の法音を演するに隨うて出す。慳貪の心には多く布施の聲を說くを聞き、破戒、瞋恚、懈怠、亂心、愚癡の人には、各各持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の聲を說くを聞き、是法を聞き已りて、各各思惟し、漸く三乘を以て度脫するを得るなり。復次に、菩薩は一切の法を觀じて、若は亂れ、若は定まる、皆是れ不二の相なり。餘人は亂を除き、定を求む。何を以ての故に。亂法の中に瞋想を起し、定法の中に於て著想を生ずるが故に。鬱陀羅伽仙人の如きは、五通を得て日日に國王の宮中に飛び到りて食す。王の大

夫人は、其國法の如く足を提へて觸すれば、夫人の手に觸れて即ち神通を失ひ、王より車を求め、駕に乘りて出でて其本處に還り、林樹の間に入りて更に五通を求め、一心に專ら至り、當に得んとするに垂んとする時、鳥有り樹上に在りて、急に鳴いて以て其意を亂す。樹を捨てて水邊に至り定を求むるに、復魚の鬪うて水を動かすの聲を聞く。此人は禪を求めて得ず、即ち瞋恚を生ずらく「我當に盡く魚鳥を殺すべし」と。此人は久しうして後、思惟して定を得、非有想非無想處に生じ、彼に於て壽盡きて下生し、飛狸と作りて諸の魚鳥を殺し、無量の罪を作りて三惡道に墮せり。是を禪定の中に、心に著するの因緣と爲す。外道は此の如し。佛弟子の中にも一比丘あり、四禪を得て增上慢を生じて四道を得たりと謂ひ、初禪を得る時は、是を須陀洹と謂ひ、第二禪の時は、是を斯陀含と謂ひ、第三禪の時は、是を阿那含と謂ひ、第四禪の時は、阿羅漢を得と謂ひ、是を恃んで止りて復進むを求めず、命盡きんと欲する時、四禪の中陰の相來る有るを見て、便ち邪見を生じ、涅槃無きは、佛、我を欺くが爲なりと謂ひて、惡邪を生せしが故に、四禪の中陰を失ひ、便ち阿鼻泥犁の中陰の相を見、命終して即ち阿鼻地獄に生ず。諸の比丘、佛に問ひたてまつる「某甲比丘、阿蘭若に命終す、何の處にか生ずる」と。佛の言はく「是人は阿鼻泥犁の中に生ず」と。諸の比丘、皆大いに驚怪すらく「此人は坐禪持戒す、爾る所由あらんや」と。佛の言はく「此人は增上慢にして、四禪を得る時、四道を得と謂ふが故に、命終の時に臨み、四禪の中陰の相を見て、便ち邪見を生じて謂へらく、涅槃無し、我は是れ阿

羅漢なり。今復た生ず、佛、虚誑を爲すと。是の時、即ち阿鼻泥犂の中陰の相を見、命終して即ち阿鼻地獄の中に生ず」と。是の時、佛、偈を說いて言はく、

　多聞、持戒、禪は、未だ無漏法を得ず
　此功德有りと雖も、此事信ずべからず

是の比丘は、是の惡道の苦を受く。是の故に知る、亂相を取れば、能く貪等の煩惱を生じ、定相を取れば、能く著を生ず。菩薩は亂相を取らず、亦た定の相を取らず、亂と定の相一なるが故に、是を禪波羅蜜と名く。初禪の相の如きは、欲を離れ、蓋を除き、心を一處に攝す。是の菩薩は利根にして智慧もて觀ずるが故に、五蓋に於て捨つる所無く、禪定の相に於て取る所無し。諸法の相は空なるが故なり。云何が五蓋に於て捨つる所無き。貪欲蓋は、內に非ず、外に非ず、亦た兩の中間ならず、何を以ての故に。若し內法に有らば、外の生ずるを待つべからず、若し外法に有らば、我に於て亦た患無く、若し兩の中間に在らば、兩の間は則ち處する所無ければなり。亦た先世より來らず、何を以ての故に。一切の法は來ること無きが故に。童子の欲有ること無きが如きは、若し先世に有らず、小なるも亦た有るべし、是を以ての故に先世より來らず。亦た後世に至らず、諸方より來らず、亦た常に自ら有らず、一分の中ならず、遍身の中に非ず、亦た五塵より來らず、亦た五情より出でず、從うて生ずる所無く、從うて滅する所無きを知る。此貪欲は、若は先に生じ、若は後に生じ、若は一時に生ずとは、是事は然らず。何を以ての故に。若し先づ生ずること有りて、後に貪欲有

らば、是中に貪欲生ずべからず、未だ貪欲有らざればなり。若し後に生ずること有りて、先に貪欲有らば、則ち生に所生無し。若し一時に生ぜば、即ち生者無く、生處無し。生者、生處は無分別なるが故に。復次に、是貪欲と貪欲する者とは、一にあらず、異にあらず。何を以ての故に。貪欲を離れては貪欲する者は得べからず、貪欲する者を離れては貪欲は得べからざればなり。是は但和合の因縁より生ず。和合の因縁より生ずる法は、即ち是れ自性空なり。是の如く貪欲と貪欲する者とは、異にして得べからず。若し一ならば、貪欲と貪欲する者とは、則ち分別無し。是の如き等の種種の因縁もて、貪欲の生ずること得べからず。若し法の生ずる無くんば、是法も亦滅する無し。生せず滅せざるが故に、則ち定無く亂無きなり。是の如く貪欲蓋を觀ずれば、則ち禪と一と爲る。餘の蓋も亦是の如し。若し諸法の實相を得て、五蓋を觀れば、則ち所有無し。是時、則ち五蓋の實相は、即ち是れ禪の實相、禪の實相は即ち是れ五蓋なるを知る。菩薩は是の如く、能く五欲及び五蓋、禪定及び支は一相なるを知り、無所依にして禪定に入る、是を禪波羅蜜と爲す。復次に、若し菩薩の禪波羅蜜を行ずる時は、五波羅蜜は和合し助成す、是を禪波羅蜜と名く。復次に、菩薩は禪波羅蜜の力を以て神通を得、一念の頃に定を起たずして、能く十方の諸佛を供養し、華香珍寶の種種を供養す。復次に、菩薩は禪波羅蜜の力を以て、身を變ずること無數にして、遍く五道に入り、三乘の法を以て衆生を教化す。復次に、菩薩は禪波羅蜜の中に入り、諸の惡不善の法を除き、初禪乃至非有想非無想定に入り、其心調柔にし

【二】不亂不味なる禪波羅蜜

た、一一の禪の中に大慈悲を行じ、慈悲の因縁を以て無量劫中の罪を拔き、諸法實相の智を得るが故に、十方の諸佛菩薩の爲に念ぜらる。復次に、菩薩は禪波羅蜜の中に入り、天眼を以て十方の五道の中の衆生を觀、色界の中に生ずる者、禪定の味を受けて、還りて禽獸の中に墮して種種の苦を受くるを見、復欲界の諸天の七寶の池の中に華香を自ら娛み、後、鹹沸屎地獄の中に墮するを見、人中の多聞、世智、辯聰の道を得ざるが故に、還りて豬羊畜獸の中に墮して、開目するも所知無きを見る。其の福有りて智無きが故に、大衆を失して大苦を得、大利を失して大衰を得、尊貴を失して卑賤を得、持戒衆生に於て惡心を生じ、漸漸に增廣して大悲を成ずるを得、身命を惜まず、衆生の爲の故に、勤行精進して以て佛道を求む。

（二二）復次に、不亂不味の法の中に住するを禪波羅蜜と名く。佛、舍利弗に告げたまふが如し、「菩薩は、般若波羅蜜の中に住して禪波羅蜜を具足す。不亂不味なるが故なり」と。問うて曰はく、「云何が亂と名くる。」答へて曰はく、亂に二種有り、一は微、二は麤。微に三種有り、一には愛多く、二には慢多く、三には見多し。云何が愛多き。禪定の味を得て、其の心愛味に染著するなり。云何が慢多き。禪定を得る時、自ら難事已に得と謂ひて、以て自ら高うするなり。云何が見多き。我見等を以て禪定に入り、分別して相を取り、是は實、餘は妄語なりとなす。是の三を名けて微細の亂と爲す。是の因縁によりて、禪定に於て退して三毒を起す、是を麤亂と爲す。味とは初めて禪定を得て、一心に愛著す、是を味と爲す。問うて曰はく、「一切の煩

惱は皆能く染著す、何を以ての故に但愛のみを名けて味と爲す。答へて曰はく、愛と禪とは相似たり。何を以ての故に。禪は則ち心を攝すること堅住なり。愛も亦專ら著して捨て難く、又初めて禪を求むる時は、心專ら得んと欲して、之を愛するを性と爲し、欲樂して專ら求め、欲と禪定と相違せざるが故に。既に禪定を得るも、深く著して捨てざれば、則ち禪定を壞す。譬へば人に物を施すに、必ず現報を望めば、則ち福德無きが如し。禪に於て身を受け、禪に愛著するも亦復是の如し。是故に但愛を以て味と名け、餘の結を以て味と爲さず。』

大智度論卷第十七

昭和五年七月一日印刷
昭和五年七月十日發行

昭和新纂 國譯大藏經 論律部第三卷

不許複製

編纂者 昭和新纂 國譯大藏經編輯部
代表者 三井晶史

發行者 東京市下谷區上野櫻木町五十番地
株式會社 東方書院
代表者 坂戸彌一郎

印刷者 東京市神田區表神保町十番地
同 興舍
代表者 井波康三郎

發行所 東京市下谷區上野櫻木町五〇
株式會社 東方書院
電話下谷四一二五九
振替東京六八六一一

印刷所 西村由太郎 • 製本所 眞貝定次郎

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03023 4132